
主人公総受け物語～アニポケ編～

天の河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公総受け物語〜アニポケ編〜

【Nコード】

N2981P

【作者名】

天の河

【あらすじ】

アニメの主人公総受けの小説です。設定は、アニメ寄りですが、キャラ崩壊の可能性大です。そういうのが苦手な方はお引き取りください。時々、CPが偏ることがありますが「そんなの気にしないぜ!」という心の広い読者は大歓迎です。

『キャラ設定集』と一緒に読みいただくことを推奨します。

プロローグ

12月某日・・・

カントー地方Hシティ

?「いよいよ会えるのね。楽しみだわ。」

ホウエン地方Tシティ

?「いよいよだわ。はあ、すっごく楽しみかも。」

シンオウ地方Fタウン

?「よし、準備完了。ほんと、久しぶりだわ。はあ、緊張する。うん、きつと大丈夫、大丈夫。」

3人「いざ、マサラタウンへ!」「」

どうやら3人も同じ目的のようだ。そう、思いを寄せる人物のも
とへと・・・

これから、度重なる波乱が起こるとも知らずに・・・

始まりの日（前書き）

サトシがイツシュ地方での旅を終えたという設定です。

文才のない作者なので、おかしい点がありますがどうかよろしくお願ひします。

始まりの日

ここは始まりの町マサラタウン……

ここは、ポケモンマスターを目指す少年サトシが住む町でもある。

長い旅を終え、いつものほのぼのとした朝を迎える……

サ「うーん……。」

現在は9:30。今日は特別用事があるわけではないが、そろそろ起きなければまずいだろう。

ピ「ピカピカ〜。ピカピ……。」

こちらは、サトシの一番の相棒ピカチュウ。サトシより、かなり早く起きたわけだが、主人であるサトシがこんな状態なので、退屈だったようだ。

ピ「ピカ……。」

やれやれと思いながら、サトシを起こすため電撃の準備をする。そして……

ピ「ピイイカーーーー!!」

サ「ギャアアアアアーーー!!!」

ピカチュウの強力な10万ボルトを受け、悲鳴を上げながら飛び起

きるサトシ。この光景は、サトシとピカチュウが初めて会ったとき
のあの光景によく似ている。

サ「ハア．．．。ん？ もうこんな時間か。すっかり寝過ぎた。起
こしてくれてありがとな。ピカチュウ。」

と、ピカチュウに感謝しながら頭をなでる。

ピ「チュウ〜。」

ピカチュウもこの時が気に入っているのか、気持ち良さそうにする。

サ「さて、そろそろ下へ降りないとママがつるさいだろうし、行く
か。」

パジャマから私服へと着替えを済ませ、ピカチュウとともに下へ降
りていく。

旅を終えてから、こんなほのぼのとした生活を送っている。今日も
いつもどおりである。

ある訪問者たちが来るまでは．．．

始まりの日（後書き）

ある訪問者とは・・・

（プロローグでわかると思います。・・・）

キャラの設定等は、後日キャラ設定集に投稿します。

訪問者（前書き）

サトシ×○○○のCP要素が入ります。誰かは中身を見ればすぐわかります。ギャグ要素はほとんどありません。では、どうぞ。

訪問者

ここはサトシ宅・・・

朝食を済ませ、サトシはゆっくりくつろいでいた。そこへ・・・

ピンポン

サ「ん？ 誰だろ？」

チャイムが鳴ったので、扉を開けるため玄関へ向かう。

サ「今開けまーす。」

扉を開けると、そこにはサトシと旅をしてきたある少女が立っていた。

？「ひ、久しぶりサトシ。」

そこに立っていた人物とは・・・

サ「ヒ、ヒカリ？ 一体どうしたんだ？」

彼女はヒカリ。サトシがシンオウ地方を旅していたときに一緒にいた少女である。

サ「久しぶりだな、ヒカリ。ポツチャマはどうしたんだ？」

ヒ「さっき偶然会ったポケモン川柳のお孫さんがポツチャマに興味

を示したみたいで預けてきたの。」

サ「（ポケモン川柳のお孫さん？ シゲルのことか。）そっか。俺、今日用事もないし、一緒に研究所に行くか？」

ヒ「うん。私と別れた後にサトシがどうしてたのか知りたいし。行きましょ。（ヤッター、今日は付いてるわ）」

サトシに会えたことに加えて、二人きりで話ができることの嬉しさを隠しつつ、承諾する。

サ「それじゃあ、俺準備してくるから、そこで待っていてくれ。行くぞ、ピカチュウ。」

ピ「ピカッ！」

ピカチュウも久々にポツチャマに会えるのを楽しみなようである。

サトシは一通りの準備を整え、ハナコに研究所に行くこと告げると自宅を後にした。その時、ハナコがニヤニヤしていたのは気のせいだろうか。

研究所へ行く道中、サトシはイツシュ地方での旅（新しいポケモン、仲間、ライバルなど）を大まかにヒカリに説明した。

ヒ「サトシも大変だったんだね。でも、そのアイリスって子にポケモンと間違えてモンスターボール投げちゃうなんて。」

サ「ああ、本当はアイリスのキバゴに図鑑が反応したんだけど、たまたま投げたところにアイリスがいたんだ。あの時は本当に申し訳

ないと思ったよ。ところでヒカリのほうはどうなんだ。」

ヒ「相変わらずよ。トップコーディネーターになるために特訓中。ミミロルのモデルの仕事が大変だから、あまり休めないのがね．．．」

サ「ヒカリも大変だな。俺もポケモンマスターになるために頑張らなくちゃ。これからもお互い頑張ろうな。」

ヒ「うん。」

これからの決意を胸に秘め、おなじみのハイタッチをする。自然と2人とも笑顔になる。

サ「お、着いた着いた。つておい、ピカチュウ。」

ポツチャマとの再会が待ち遠しいのか、研究所に着いた途端に一目散に走り出すピカチュウ。

ヒ「ピカチュウ、よほどポツチャマと会えるのが嬉しいのね。」

サ「ハハハ．．．。」

相棒の忙しない行動に苦笑するしかないサトシであった。

その後、2人は研究所の中へ入る。今はオーキド博士は出掛けているため、研究所内には孫のシゲルとかつてサトシと旅をしたことのあるケンジがいる。

ピカチュウは久々に会ったポツチャマとじゃれ合っている。

ヒ「ポッチャマの面倒を見ていただきありがとうございます。ポケモン川柳のお孫さん。」

シ「どういたしまして。ところで、ヒカリさんだっけ。いい加減名前を覚えてくれないか・・・。」

サ（やっぱり、気にしてたんだ・・・。）

シゲルの言葉に、本日2度目の苦笑をするサトシ。

シ「ところで何しに来たんだい？ サートシ君。」

サ「その呼び方やめてくれないか。まあいいや。とくに用事はなかったんだけど、ピカチュウとポッチャマを会わせてやろうと思ってな。」

シ「君は相変わらずポケモン思いなんだね。本当に感心するよ。」

サ「そうか？　なんかシゲルに言われると変な気分だな。」

そうこうしているうちに、日が暮れる時間になった。オーキド博士も帰ってきて、サトシ達もそろそろ帰ることにした。

サ「ところでヒカリ。今晚どうするんだ？」

ヒ「えっ？」

こんな時間帯なので、一人外を出歩くわけにはいかない。女の子なら尚更だ。

サ「泊るところないんなら、今夜家に泊らないか？」

ヒ「サ、サトシの家に!？」

ヒカリは思いを寄せる人からの突然の提案に彼女の頬が少し赤みがかっていたのだが、当然サトシには何で赤くなるのか分からなかった。

この状況にシゲルは、

シ（そういうことか．．．。サトシも罪作りな男だな。）

ヒカリのサトシに対する感情を読み取りつつ、思わぬ幼馴染の意外な一面を垣間見たのであった。

サトシの家へ帰る道中、ヒカリは．．．

ヒ（ど、どうしよう．．．。思わずうんって言っちゃったけど、緊張するよあゝ。で、でもサトシの家の中に入るのはじめてだったなあ。いったいどんな家なんだろう．．．。）

不安と好奇心を胸に抱きながらサトシの家へと向かっていた。

ポ「ポチャマ？」

ポツチャマが主人であるヒカリの様子に気づき、首を傾げる。

ヒ「ポツチャマ？ 私は大丈夫よ心配しないで。」

ポツチャマが心配そうに見つめてくるので、安心させようとする。
しかし……

サ「本当に大丈夫か？　なんかどことなく顔も赤いし、熱でもあるんじゃない……。」

ヒ「本当に大丈夫、大丈夫。ポツチャマもサトシも本当に心配性なんだから。」

サ「そ、そうか？」

ヒ「あ、ほら。サトシの家に着いたわよ。私、サトシのママさんにご挨拶しなきゃ。」

必死に、話題を変えようとするヒカリ。読者のほとんどはご存じだと思うが、ヒカリの「大丈夫」はだいたいじゃないことが多い。

ヒ「ちーがーいーまーす！　ナレーションは黙ってて。」

へいへい……（意外に頑固だな……）

サ「一体、ヒカリは誰に話してるんだ？　ピカチュウ。」

ピ「チュウ……。」

ヒカリの突然の発言に、啞然とするサトシとピカチュウ。

その後、家の中へと入り、ヒカリを泊めることをハナコに言う。

快諾してくれたので、ヒカリは一晚をサトシ宅で過ごすことになった。

これから、どっちなさしとやら・・・

訪問者（後書き）

長いうえに、なんなんだこの無茶苦茶な展開は・・・。

こんな駄文でしたが、読んでいただきありがとうございました。

おじゃましま〜す（前書き）

更新遅くなつてすみません。しかも、内容とか文字の半角全角が無茶苦茶です。

今回もサトヒカです。

ヒカリが徐々に壊れます。微工口有りかも。

おじやましま〜す

ひよんなことから、サトシの家へと泊ることとなり、ヒカリの心境は安定しなかった。

ヒ「とうとうあがっちゃった……。もう、ドキドキが止まらないよお〜!!!(泣)」

サ「・・・カリ、ヒカリ。」

ヒ「ひゃ、ひゃい!?!」

サトシの呼びかけに、思わず変な声で返してしまった。

サ「やっぱり具合悪いんじゃないか。そんな声出したり、さっきよりもっと顔赤いし。」

ヒ「大丈夫!大丈夫! だから心配しないで!」

サ「でも、ヒカリの「大丈夫」は大丈夫じゃないんだよな。」

ヒ「本当に大丈夫だから。あつ、何か私に用があつたんじゃないの?」

必死に話題をそらそうとするヒカリ。

サ「あつ、そうだった。ママが晩御飯ができたからヒカリを呼んで来てだってさ。」

ヒ「そ、そうだったの。すぐ行くわ。」

そして、夕食時 . . .

ハ「ヒカリさん、どうかしら。急だったからあり合わせのものしか作れなくてごめんね。」

ヒ「いえいえ、とんでもありません。どれもとてもおいしいですよ。サトシのママさんって、とても料理上手だなんて尊敬しちゃいます。」

ハ「そこまで言われるとなんだか照れちゃうわ。」

楽しそうに談笑するヒカリとハナコ。その様子に自然とサトシも笑顔になる。

ハ「それにしてもヒカリさんはすごいわね。シンオウのグランドフェスティバルのファイナルまで進んだんですね。」

ヒ「私なんかノゾミに比べたらまだまだですよ。」

ノゾミとは、ヒカリの一番の親友でありライバルである。シンオウのグランドフェスティバルのファイナルでヒカリと対戦し、見事勝利した。そして今は誰もが知っているトップ・コーディネーターとなっている。

ハ「それにしてもすごいわ。これからもサトシのことをよろしくね。だったら、サトシのお嫁さんになってくれないかしら。」

いきなりの爆弾発言。

ヒ「えっ!？」

当然、今の発言に驚き、カアアと顔を真っ赤にさせるヒカリ。

サ「おいおい、ママ。俺とヒカリはそんな関係じゃないって。」

ハ「あら、私は結構お似合いだと思っわよ。サトシだって、時々頼りないところもあるし、ヒカリさんみたいなしっかりした人ならサトシを支えてあげられるんじゃないかしら。」

サ「頼りないって。。。そりゃないよ。。。」

サトシはハアアとため息をついた。

その後、夕食を食べ終えヒカリはリビングでゆっくりくつろいでいた。すると・・・

サ「ヒカリ」。お風呂沸いたみたいだから、入るか。」

ヒ「へっ?」

さっきのハナコの発言の余韻が残っているのか、何やら勘違いをしているようである。

ヒ「お風呂って、サトシと一緒に!? そ、そんなにいきなり大胆すぎるよ。」

ヒカリの脳内では、こんな妄想が広がっていた。

ヒ「ふう、今日も疲れたなあ……。でも、大丈夫。これもトップ
コーディネーターになるための試練なんだから。」

ヒカリが浴室で一日の疲れを取っていると、突然扉が開いた。する
と……

サ「ヒカリ……。一緒に入ろうか。」

ヒ「えっ！？ ち、ちょっとサトシ。まだ心の準備が……。」

サ「嫌なのか……。」

サトシは上目遣いでヒカリを見つめる。そんな姿に……

ヒ（か、可愛い／＼／）

思わずうつとりしてしまった。

ヒ「そ、そんなことないわ。あ、そうだ。背中洗ってあげる／＼／」

サ「そ、そうか。じゃあ、頼むぜ。」

サトシがそう言うと、ヒカリは浴槽から一旦あがり、サトシの背
中に顔を向ける体勢になった。

言い忘れていたが、2人ともタオル着用済みである。

ヒ「サトシの背中って、遅しくって広いな・・・。」

そう思いながら、サトシの背中を洗う。

そして・・・

サ「サンキューな。ヒカリ。」

ヒ「どういたしまして。ん？ サトシどうしたの？」

サトシの様子がおかしいことに気が付く。

サ「な、なあ。今まで真剣に見たことなかったけど、ヒカリって、肌綺麗だな。」

ヒ「へっ!?!?」

サトシの意外な発言に、思わず声を引きずるヒカリ。

サ「それに、触り心地もいいし。俺おかしくなっちゃいそうだ。」

ヒ「ち、ちょっとサトシ。まだ、心の準備が・・・。／／／」

抵抗しつつ、顔を赤らめるヒカリ。

サ「お、俺もう我慢できない!」

ヒ「もう、サトシったら／／／」

プシュー、バタン

サ「ヒ、ヒカリ!? しっかりしろ!!! ママ! ヒカリが倒れた。」

妄想に浸ってたヒカリは、鼻血を吹きだしながら気絶した。

その後、ヒカリは翌日の朝まで目覚めなかったそうなの。

終われ

おじやましま〜す（後書き）

天「ふう、やっと更新できた。」

ハルカ・カスミ「ちょっと、待ったあ〜!!!」

以降、

ハルカ ハル（ハナコと混同するため）

カスミ カ

天「ん？ 何か用か？」

ハル・カ「大ありかも（よ）ー!!!」

ハル「てか何これ？ ヒカリだけオイシイ思いして、ずるいかも！」

カ「私たちなんか、プロローグに出たつきりじゃない！」

天「そりゃ、作者の俺がサトヒカ派だからだ。」

カ「あんた。サトハル、サトカスファンからクレーム受けるわよ。」

天「それは十分承知だ。ただ、このサイトサトヒカが見当たらなかつたから書いてみた。」

ハル「それにしては、酷い内容ね。」

天「それは言うな。俺はそんなに文才があるわけではない。」

カ「自分の文才のせいにするのね．．．。それよりも、今後私たちの出番はあるんでしょうね。」

天「ああ、ちゃんと用意してるから安心しろ。ヒカリがあんな状態だから、出せるわけがないし。」

ハル「ヒカリをあんな状態にしたのは、アンタでしょ。まあいいわ、今回はこれくらいにしておいてあげる。」

天「こんな駄文ですが．．．。」

ハル・カ「よろしければ感想お願いします。」

ホウエンの大食いプリンセス（前書き）

ヒカリがサトシを訪問していた頃、ハルカはどうしていたかの話です。

展開の早さ、捏造等があるのでかなりおかしな内容です。

ホウエンの大食いプリンセス

ヒカリがサトシ宅を訪問していたその頃・・・

クチバ港・・・

ハル「やっと着いたわ。久々のカントー、懐かしいかも。」

ハルカがカントーへ来たのには、サトシへ会いに行くのはもちろんであるが、もうひとつ目的があった。それは・・・

ハル「まずは腹ごしらえね。お腹ペコペコかも。」

ハルカは持参してきたグルメガイドを手にしながら・・・

ハル「ここ、ここ。タمامシデパート。今この地下1階で『全国うまいもの市』やってるのよね。さあー、お腹いっぱい食べるわよー。」

トップ・コーディネーターへの夢を持っている一方、食い意地も天下一品の持ち主である。

ハル「今失礼なこと言われたような気がしたけれど、気にしない、気にしない。」

ハルカは、クチバ港からタمامシティへと向かう。途中、ヤマブキシテイへと立ち寄り、ビル群を散策した後、ようやく目的地タمامシデパートへと到着した。

ハル「『ハルカ探検隊』は今、タمامシデパートの正面玄関前にいます。現在、この地下1階では「全国うまいもの市」が開催されており、早速、向かいますよ。」

おなじみの『ハルカ探検隊』のノリで実況中継をするハルカ。現在、一人なので何か痛いキャラに思えてくるのは気のせいだろうか。

ハル「こうでもしないと盛り上がりませんか！」

ハイハイ、。

ハルカは地下1階へ到着する。そこには、いろんな地方から集まった特産品が並べられており、大勢の人がごった返している。

ハル「現在、こちらはものすごい大盛況です。全国から集まった特産品が並んで見えます。わたくしハルカもいくつか頂いてみましょう。」

その後ハルカは、昨晚立てた計画通りに、店を回り、腹ごしらえを済ませ、サトシ達のお土産も購入しタمامシデパートを後にした。

？「ねえ、なんでこの店にはエーゲーがないの？品揃え悪いな。」

？「そっぴやマスター。ここから数キロ先にゲームショップがありましたよ。禁コーナーって貼り紙もありましたから、そこにあるのでは。」

？「それ本当。それじゃ早速いこう。」

1階ロビー近くで、変なことを言って他の客から白い目で見られている馬鹿1人と1匹がいたが、今回はスルーの方向で。

ハル「おなかいっぱい食べてサトシへのお土産も買ったし、そろそろマサラタウンへ行こうと。」

ハルカはタムシシティを後にして、マサラタウンへと向かった。サトシの家にはヒカリがいることも知らずに・・・

そして、ハルカと同様にマサラタウンへと向かう少女がいた。

(後書きという名の舞台裏)

ホウエンの大食いプリンセス（後書き）

ハル「ちょっと、なによこれ！」

天「俺のハルカのイメージが大食いだからこーなった。」

ハル「サブタイもだけど、これじゃあ私、ただの食いしん坊じゃない！」

カ「内容も最悪だしね。」

天「うっ、それは言うなよ．．．。」

カ「それはそうと、なんか変なの出てたよね。犯罪すれすれの。」

天「言っておくがああ馬鹿1人と1匹は、後のストーリーで重要なキャラだ。」

ハル「どうせ、ひどい扱いなんですよ。」

天「まあな。」

ハル「それに最後の少女って、バレバレじゃない？」

天「落ちが思いつかなかった。」

カ「酷い理由ね．．．。」

天「てな訳で、こんな駄文でよろしければ、」

ハル・カ「感想よろしくお願いします。」

トキワの森での災難（前書き）

同じ時間軸のカスミパートです。今回、カスミの他に苦勞人のあの人が登場します。

注意

カスミのキャラが壊れます。

例のごとく、おかしな点だらけですがよろしくお願ひします。

トキワの森での災難

ヒカリがサトシ宅を訪問、ハルカがタمامシシティで食べ歩きをしていた頃、カスミはというと・・・

カ「・・・。無理無理無理!!! やっぱり無理!」

トキワの森の前で葛藤していた。読者のほとんどがご存じであるが、カスミは大の虫ポケモン嫌いである。しかしサトシのいるマサラタウンへ行くには、この虫ポケモンの宝庫・トキワの森を通らなければならぬ。カスミ本人もわかっていた。だが・・・

カ「なんなのよもう。一刻も早くサトシのもとへ行きたいのに（泣）。」

マサラタウンへ行くには、この道の他にグレン島経由で行く方法がある。しかしカスミは、サトシに早く会いたいがためにトキワの森を通る道を選んだのであった。はっきり言えば、カスミの自業自得である。

まったく、『急がば回れ』という言葉を知らないのだろうか。

カ「うるさいわね」（怒）。「

さて、本題に戻るがカスミはかれこれ数時間前からこの状態である。

傍から見れば、実に迷惑な光景である。

カ「私のバカバカ。なんでこの道選んだのよ。」

『後悔後先立たず』（だっけ？）とはまさにこのことである。

とそこへ、カスミに救世主が・・・

？「カスミ？ カスミじゃないか？」

カスミもよく知る人物が後ろから声を掛けてきた。

カ「タ、タケシ？」

タ「カスミ、どうしたんだ。さつきから、トキワの森の前を行ったり来たりして。」

カスミのあまりにも不自然な行動を疑問視するタケシ。しかし、勘の鋭いタケシは・・・

タ（はあ、これはサトシのところへ行くことしたのはいいが、トキワの森をどう抜けるかで立ち往生してるんだな。）

ちなみに、タケシもカスミの虫ポケ嫌いは知っている。

カ「うん、久々にサトシに会いに行こうかと思って。」

タ「そうか。俺も久々にサトシに会いたくなつたし、俺も一緒に行こうか。」

カ「本当？ 助かったわ。」

タケシの提案に、ペアアと笑顔を見せるカスミ。

そして2人は、トキワの森へと入っていく。ただ、現在の恰好がちよつと不自然である。

なぜなら、タケシは難なく歩いているが、カスミは目隠しをしながら何故かタケシのポールから出てきたグレッグルにロープで引っ張られている。なんか時代劇に出てくる罪人を連れていくあの光景によく似ている。

タ「悪いな。グレッグル……。」

グ「ケツ。」

タケシの言葉に返答し、またんーんーと鳴くグレッグル。

タ「カスミく、そのロープ絶対放すなよ、って言ってるそばから……。」

カスミはロープを手にはせず、挙動不審にしている。こんなことを街

カ「い、痛い。もう何なのよ……………」

目の前のスピアーの大群に絶句し、顔面蒼白になる。ちなみに、目隠しは木に激突した拍子に取れてしまった。

タ「何やってんだ。早く逃げるぞ!!!」

タケシはスピアーの大群を前にして固まっているカスミの腕をつかみ、ダッシュでトキワの森を抜け出した。

トキワシティポケモンセンター

カ「ムシポケコワイムシポケコワイムシポケコワイサトシタスケテ
サトシタスケテサトシタスケテ……………」

タ「……………」

目があさつての方向に向けながら言葉が片言になっているカスミを前に、為す術のないタケシであった。

その頃、サトシ宅

サ「…………なあ、ピカチュウ？ 誰かが俺の名前を呼んでいる気がするんだけど気のせいかな。」

ピ「チュウ？」

終わり終わり

(後書きといふ名の舞台裏)

トキワの森での災難（後書き）

カ「ムシポケキライムシポケコワイムシポケキライムシポケコワイ
.....」

ハル「カスミさ〜ん。しっかりしてください。」

天「返事がないただの屍のようだ。」

ハル「あんたね〜（怒）。」

タ「まあまあ、抑えるハルカ。作者に何を言っても無駄だ。」

天「よく分かっているじゃないか。最初に言っておきたいことがある。カスミ及びサトカスファンの皆さん申し訳ありませんでした。」

ハル「謝って済むんなら、警察はいらないかも。」

タ「それよりも、俺の登場何か急じゃないか？」

天「今じゃないといつ出せるか分からなくなるからだ。予定ではこんな登場の仕方を他キャラで考えている。」

タ「俺の他にもいるのか.....」

天「ということだ。次回の更新はちよつと先になるかもしれない。」

ハル「出来の悪さに加えて、最悪かも。」

天「それは言うな。最後にこんな駄文ですが・・・」

ハル・タ「感想よろしくお願いします。」

また訪問者（前書き）

今回は無理矢理ハルカとカスミを出演させました。

そして、あの2匹のサトシ争奪戦も・・・ん？ 誰かって、見れば分かりますよ（笑）。

また訪問者

マサラタウン

サ「ん〜。今日もいい朝だ。おはよう、ピカチュウ。」

ピ「チュウ〜。」

軽く背伸びをしてピカチュウに挨拶をする。ピカチュウもそれに返事を返す。

サ「下に降りるか。ピカチュウおいで。」

サトシはピカチュウとしたのリビングへ向かった。そこには・・・

ヒ「あつ、サトシおはよう。」

ポ「ポチャ。」

サ「おはよう。ヒカリ、ポツチャマ。」

先に起きていたヒカリとポツチャマがリビングでくつろいでいた。ちなみに、ヒカリはあの気絶からだいぶ立ち直ったようだ。

それからサトシ達は、朝食を終え、リビングで談笑をしていた。と、そこへ・・・

ピンポン

サ「ん？ 誰だろ。こんな朝早くから。ヒカリ。ちょっと俺行つてくる。」

ヒ「うん。（なんだろ、このもやもやは）」

違和感を感じつつも、返事をする。

サ「どなたですか？」

玄関の扉を開けると・・・

ハル「久しぶりかも。サトシ。」

サ「ハ、ハルカ！？ どうしたんだ。こんな朝早くから。」

ハル「うん、サトシに会いたくなって。思わず来ちゃった。迷惑だった?」

サ「迷惑だなんて。逆に嬉しいくらいだぜ。まあ上がれよ。先客も紹介するから。」

ハル「(先客つて、誰かしら?)それじゃあ、お邪魔します。」

サトシはハルカを家の中へと招き入れる。

ヒ「サトシ、誰だっせ...つて、ハルカ!？」

ヒカリも久々に会った仲間に驚く。

ハル「ヒカリ!? 久しぶりかも。」

ハルカもサトシの言っていた先客がヒカリだということに驚く。

サ「そっか...。2人はミクリカップ以来だもんな。」

サトシはそう言いながら、2人に飲み物を出そうとリビングを離れる。

ヒ「ほんとに久しぶりね。元気だった?」

ハル「元気いっぱいかも。ヒカリも元気そうね。」

ヒ「うん、ミミロルの仕事とコンテストの特訓で休めてないんだけどね。」

ハル「ミミロルのことは雑誌で見たわ。ほんとにすごいかも。」

思わぬ再会に喜び合い、断章をする。

ハル「ヒカリが来たのって、サトシに会いに？」

ヒ「うん。ハルカもでしょ？」

ハル「うん。でもヒカリにはサトシは譲れないかも。」

ヒ「こつちだって、負けないわ。」

親友でもありライバルでもある2人。同時に、同じ相手に好意を持っている。いわゆる恋敵同士でもある。

サ「何が負けないんだ？」

そこへ、グッドタイミング(?)で、サトシ登場。

ヒ・ハル「サ、サトシ!？」

突然の登場に、顔を赤くしながら驚くハルカとヒカリ。

ヒ「お、驚かさないでよ。ビックリした。」

ハル「心臓止まりそうになったかも。」

サ「(そんなに驚くことか?)ごめんごめん。飲み物持ってきたけど、オレンジジュースでよかったか？」

ヒ「う、うん。ありがとう。」

ハル「ごめんね、気遣わせちゃって。」

2人は顔を赤くさせつつ、サトシからオレンジジュースの入ったガラスを受け取る。

サ「いいって、いいって。それよりも俺これから博士のところに行くかと思うんだけど、2人も一緒に行くか？」

ヒ「うん。特に用事もないし、行くわ。」

ハル「博士達に会うの、久しぶりかも。」

サトシの突然の誘いに、快く承諾するヒカリとハルカ。そして、3人は一通りの準備を済ませ、研究所へと向かうためサトシ宅を後にした。

研究所へ向かう道中・・・

ヒ「ねえ、サトシ。ハルカにイッシュ地方での旅の話聞かせてあげて。」

ハル「私も聞きたいかも。」

サ「ああ、分かったぜ。」

サトシは、この間ヒカリに話したイツシユ地方での旅話をハルカにも話した。ハルカは、いろんな表情を見せながらサトシの話を聞いた。

ハル「へえ、サトシったらイツシユ地方でも仲間を増やしたんだね。」

サ「ああ、俺はイツシユでいろんなポケモンたちと出会いそして捕まえたんだ。特にミジユマルなんか面白いんだぜ。バトルのときなんか、自分にやらせろって感じでボールから勝手に出てくることもあるし。」

ハル「なんかそのミジユマル、サトシに似てるかも。」
サ「そ、そうか?」

ヒ「特にバトルしたかる所なんかがね。」

と、こんな風に談笑しながら、歩いていたところに・・・

「おーい、サトシー!!!」

どこかから、サトシを呼ぶ声が聞こえた。

サ「ん？ 誰だ？」

サトシは声のする方へ顔を向けると、そこにはよく知る人物2人がいた。

？「久しぶりだな、サトシ〜！！！」

？「元気にしてた？」

サ「タケシ！？ それに、カスミ！？」

かつて旅を共にした人物の登場に驚くサトシ。タケシとカスミは、サトシのもとへと近づく。

サ「ほんとに久しぶりだな。2人とも。」

タ「ああ、今俺はポケモンドクターになるために日々勉強中だけど、ちよつと息抜きがてらサトシに会いに行こうと思ってな。」

ハル「ほんと、2人の姿を見たときにはびっくりしたかも。」

カ「ごめんね、サトシにハルカ。サトシをびっくりさせようと思って来たんだけど、ハルカが来てたなんて私の方がびっくりしたわ。ところで、その子は？」

カスミは初対面であるヒカリの方を向く。ヒカリも初対面のカスミを見ながら不思議そうな顔をする。

サ「そつか。カスミはヒカリに会うのは初めてだったよな。」

サトシはカスミにはヒカリ、ヒカリにはカスミについて紹介する。

カ「ヒカリさんね。はじめまして。」

ヒ「こちらこそ。あ、あの〜、ルアーの人ですよね？」

カ「ルアー？」

サ「ああ、ヒカリにあのルアー見せたんだ。」

あのルアーとは、「カスミちゃんスペシャル」のことである。

カ「そう。まだ持ってたのねあのルアー。」

サ「そりゃ大切な仲間からもらったものだからな。」

満面の笑顔で答えるサトシ。その笑顔に少し顔を赤らめるカスミ。ハルカとヒカリもサトシの笑顔に顔を赤らめた。カスミとヒカリはお互いの様子を見て、『この子もサトシのことが好きなんだ』と確信する。

タ（こりゃ〜、面白いことになりそうだなあ……。でもサトシを好きな女子は他にもいるからな……。）

3人の女子の様子を見て、今後一波乱ありそうだなと思うタケシだった。

そして、研究所に着くと博士とシゲル、そしてケンジがサトシ達を出迎えた。水ポケマスターを目指すカスミは、サトシのミジユマルとヒカリのポツチャマに興味を示した。

カ「きゃ〜!!! このミジユマルとポツチャマかわいい〜!!!」

ポ「ポチャ〜。」

ミ「ミジユ。」

カスミは慣れた手つきでミジユマルとポツチャマを抱き上げた。不思議と2匹は恥ずかしそうにしながらも、カスミを気に入ったようだ。

サ「カスミも相変わらずだな・・・。」

かつての仲間の行動をほほえましく思うサトシ。他の者もその光景に笑みを浮かべる。

カ「そりゃ、アタシは水ポケモンのジムのジムリーダーだもの。これくらいは朝飯前よ。」

ハル「さすがはジムリーダーかも。」

ヒ「なんかこっちまで楽しくなるわ。」

その後、サトシ達はポカブやツタージャなどサトシがイツシュ地方で捕まえたポケモン達と遊んでいた。ただ・・・

ベ「ベイベイ．．．。」

ツ「タージャ．．．。」

ベイリーフとツタージャがどちらがサトシと遊ぶかで火花を散らしていた。この光景には、サトシ以外が苦笑していた。

カ「ポケモンにも好かれるなんて、さすがサトシね．．．。」

ハル「ある意味、モテモテかも．．．。」

ヒ「でも当の本人は相変わらずだし．．．。」

サトシは、ベイリーフとツタージャを止めるため近寄った。

サ「おいおい、どうしたんだ、ベイリーフとツタージャ。仲良くしなきゃだめじゃないか。」

ベ「べーい、ベイベイ。」

ツ「タジャタジャ。」

サ「そんなに俺と遊びたかったのか？ 分かったから、仲良くしてくれよ。」

2匹に向けて満面の笑顔をしながらこう言った。すると、2匹は顔を赤くした。

2匹の脳内・・・

べ『はあく、サトシの笑顔ってやっぱ素敵。この笑顔を独り占めしたいのに、邪魔な新入りが入ったものね。ただでさえサトシを誑かす女たちがいるのにこんなじゃサトシに振り向いてもらえないじゃない。』

ツ『この子もサトシのことが・・・。どれ程、サトシと一緒にだったか知らないけれど、最近のサトシをよく知っているのはアタシのほうなんだからね。』

べ・ツ『こいつには負けられない。』

お互いを睨み付けながら、決意を新たにする2匹。この光景には、他のポケモン達は苦笑を浮かべるしかなかった。もちろんサトシは、そんなことになっているとは思ってもいないようだった。

こんな一悶着の後、夕方までポケモン達と遊びつくした一行。もう遅いので全員サトシの家へ泊まることになった。その際、ヒロインたちは顔を赤らめていたが、当然サトシがその様子に気づくことはない。

タ（このまま何もなければいいのだが・・・。）

タケシは今後の安泰を願っていた。しかし、そう簡単にほのぼのと

終わらせる作者ではない。

サトシ宅・・・

ハル「へえ、ヒカリって2日前からサトシの家に泊ってたのね。羨ましいかも。」

カ「アタシ、サトシに彼女ができたのかと思っちゃった。」

ヒ「ア、アタシとサトシはそんなんじゃないってば／＼」

ハルカとカスミは皮肉混じりにヒカリをからかう。

ハル「でも、ヒカリ達には負けないわ。サトシはアタシのものにして見せる。」

カ「ア、アタシだって、サトシが好きな気持ちは変わらないわ。」

ヒ「アタシもよ。・・・でも、サトシを好きな子は他にもいるのよね・・・。」

ヒカリの言葉を聞き、2人はあくと頷く。ヒカリの言うとおり、サトシに好意を持っている人物はアプローチの度合いに違いはあるものの他にもいる。

タ（サトシは相変わらずモテるよな〜。）

遠くで3人の会話を聞いていたタケシは、サトシを羨ましく思う。タケシは綺麗なお姉様達には積極的なアプローチを仕掛けるが、他人の恋愛には『あせらず、ゆっくり見守る』を信条にしている。

3人が談笑していたところへ...

サ「おい、晩御飯ができたから食べないか？」

カ「サトシのママさんの料理久しぶり〜。」

ハル「ホントかも〜。」

タ「サトシのママさんの料理は一級品だからな。」

そして夕食時、ハナコの料理の上手さに絶賛の嵐だった。タケシに関しては一度教わりたいたったほどである。ハルカは何度もおかわりしたとか...

夕食を食べ終えたサトシ達は、入浴を済ませそれぞれ寢床へと向かう。カスミ・ハルカ・ヒカリの3人はハナコの部屋で、タケシはその隣の部屋に寝ることになった。

ハ「ねえ、あなた達はサトシのことどう思ってるの。」

カ・ハル・ヒ「えっ?」「」

突然のハナコの言葉に驚く3人。

ハ「だって、あなた達ってサトシと旅をした仲ででしょ。その時のサトシって、どうだったのになって。」

ハナコの言葉に反応したのは、カスミだった。

カ「それは・・・、とても仲間思いだし頼りになりますよ。」

ヒ「私も、コンテストで失敗続きだったときに励ましてくれたんです。あのときは本当にサトシには感謝してます。」

ハル「仲間思いなのはいいですけど、無茶して自分を犠牲にするのはちょっと・・・。」

ヒ「あつ、それアタシも思った。」

カ「頼りになるのはいいけれど、冷や冷やさせられることもあるわ・・・。」

ハ「そのことは私から誤るわ。あの子ったら、こんなに可愛い子たちを心配させて・・・。」

ハナコの「可愛い」の一言に・・・

カ「そ、そんな可愛いだなんて・・・／＼／」

ヒ「お世辞が過ぎますよ。ママさん／＼／」

ハル「・・・／＼／」

3人は顔を赤くした。ハルカに関しては、言葉にもならないようだ。

ハ「あら、お世辞じゃないわよ。この子達なら、サトシのお嫁さん候補にぴったりだと思うわ。」

ヒ「お、お、お嫁さんだなんて、急すぎます／＼／＼／＼」

ハル「もう、からかわないでください／＼／＼／＼」

ハ「ごめんなさいね。でも、サトシって頼りないところもあるから、これからもよろしくね。」

カ・ハル・ヒ「ハ、はい。」

それから、4人は眠りについた。

さて、明日はどんな一日になることやら・・・

また訪問者（後書き）

いかがでしたか、次回はハルカとカスミがサトシ宅を訪問した時の
イツシュ地方を舞台に展開します。もちろん、デントとアイリスも
出ます。

それにしても、サトシ母・ハナコが・・・

アイリス、テント登場！（前書き）

今回はイツシュ地方が舞台です。

サブタイ通りアイリスとテントが出ます！

アイリス、デント登場！

ハルカとカスミがマサラタウンに着いたその頃、

アイ「は〜、お腹すいた・・・。サトシに会いにカントーへって思い切ったのはいいけど・・・。はあ〜、デントの作った料理食べたいなあ。」

彼女はアイリス。サトシ、デントとともにイツシュ地方を旅した少女である。サトシに会いに行きたいらしいが、何処へ行けばいいのか分からずさまよっているようである。ちなみに今いるところは不幸中の幸いかどうかは不明だが、デントの住むサンヨウシティ近くの道である。

アイ「も、もうダメ・・・。」

と言って、アイリスは空腹のあまり倒れた・・・

アイ「ん、んん・・・。あっ、アタシ道端で倒れて、ってことどこ?。」

アイリスが今いるのは、とても家具等が綺麗に整頓された部屋だった。

アイ「とりあえず、ここまで連れてきてくれた人に御礼言わないと
。。。」

ト思い、アイリスは部屋を出た。すると・・・

?「気がついたかい? 久しぶり、アイリス。」

自分を呼ぶ声がしたので、体を向けると、

アイ「デ、デント!？」

そこにいたのは、イッシュ地方と一緒に旅した仲間デントだった。

アイ「どうしてここに!? ていうか、ここどこ!? アタシを助けてくれたのは誰!？」

デ「落ち着いて、落ち着いて(汗)。ここは、サンヨウジムだよ。君が倒れていたところにたまたまコーンが通りかかって、僕たち3人でここまで運んだんだ。」

アイ「そうだったの。ありがとう。」

デ「どういたしまして。」

アイリスも少し落ち着いたようだ。すると・・・

グウ

ある意味グッドタイミングでアイリスの腹の中の虫が鳴った。

デ「とりあえず、何か食べる？」

アイ「お願い、もうお腹ぺこぺこだよ。」

その場で座り込んでしまったアイリス。その様子に苦笑するデント。

所変わって台所・・・

デントはポッド、コーンとともにアイリスの為に夕食を作っていた。

コ「なあ、デント。あのアイリスって子、どうしてあんな所で倒れてたんだろ？ 食料も何も持ってなかったみたいだし。」

ポ「何処に行こうとしてたのかわからないけど、あれは無謀だよな。」

デ「アイリスは普段、自分で木の実を採ってきたりしてるんだ。だから、手持ちの食料は少量で済むんだよ。」

ポ「随分、野性的な性格だな。」

コ「それなら、尚更なんで空腹で倒れてたんだ？」

デ「普段はそうなんだけど、ある人物が絡むとそうじゃなくなるんだよ。」

デントの言ったことに、クエスチョンマークを頭に浮かべるポッドとコーン。と、そこへ・・・

アイ「うわあ、美味しそうなシチュー。」

突然アイリスが3人の間に割って入ってきた。

デ「ア、アイリス！？ もうできたから呼びに行こうかと思ったんだけど・・・。」

アイ「ホント！？ それじゃあ、いったきまゝす。」

アイリスは、よほど空腹だったのかデント達で作った鍋に入ったままのシチューを食べ始めた。

デ「注がなくていいの？」

アイ「うん。このまま食べる。」

その光景に他の2人も苦笑を浮かべるしかなかった。

アイリスは数分とたたないうちに、鍋の中のシチューを完食した。

アイ「はあ、美味しかった。デント達の料理ホント久しぶり。それとホントに今日はありがとう。」

デ・ポ・コ「どうも。」

アイリスは3人に改めて御礼を言った。

デ「ところで、アイリス。どこに行こうとしてたの?」

アイ「あ、うん。サトシのいるマサラタウンに行こうとしてたんだ。」

デ「サトシに会いに?」

アイ「うん。。。。」

アイリスは少し顔を赤らめながら答えた。その様子にポッドとコーンはデントの言っていた「ある人物」の正体があったようだ。

アイ「で、でも。。。。」

デ「でも?」

アイ「カントー地方ってどこだっけ？」

ズデーン「！！！！」

アイリスのマヌケな発言に、盛大にズッコケたポケモンソムリエ3名。

デ「ま、まさかアイリス。ずっと知らないで歩いてたの？」

ポ「随分と無謀だ……。」「

コ「ある意味ポケモンよりすごい……。」「

それぞれ苦笑しながら答える。

アイ「だからデント。お願いがあるんだけど、一緒に来てくれない？」

デ「へっ？」

デントはジムリーダーであり、レストランもポッドとコーンとともに経営している。それだけ多忙な毎日を過ごしている。

ポ「行ってこいよ。デント。ジムと店はまかせろ。」「

コ「デント、君もサトシ君に会いたがってたじゃないか。（ボソッ）この子一人だとまた迷うのがオチだろうし……。」「

デ「う、うん。それじゃあ、今日はもう遅いし明日にでも行くところか。」「

アイ「やったあー！！！！ それじゃあ、また明日。」「

デ「また明日……。」「（サトシを子供扱いしてたけど、君の方が子供っぽいよ……。）」

そして翌日、アイリスとデントはサンヨウシティを後にして、マサラタウンへと向かったのであった。

？「ふふふ、やっと会えるのね。待っててね、サトシ君。」

イッシュ地方某所で同じようにサトシに会いに行く人影が……………

この先どうなる事やら……………

アイリス、デント登場！（後書き）

なんか、キャラの出し方が無茶苦茶だ・・・

突然の電話＋急展開!?

ここはマサラタウン

サトシ宅には現在、カスミ・ハルカ・ヒカリの女子3名そしてタケシが泊まっている。現在、サトシ以外全員起きて女子3人はリビングに集まっている。

『ここで、次のニュースです。数日前からタمامシシティにおいて、連続痴漢及び下着窃盗事件が頻発しております。被害者の証言によれば、マントの男が女性トレーナーにポケモンバトルを挑んでは犯行に及ぶということです。同じような手口が数件確認されていることからタمامシ警察は同一犯の犯行としています。』

ヒ「嫌ね、もう。」

ハル「ポケモンをそんなことに使うなんて、最低かも。」

カ「女の敵よ。」

女子3人はお怒りのようだ。そこへ・・・

サ「ふわぁ〜、あつ皆起きてたのか。おはよう。」

サトシは爽やかな笑顔で女子3人に挨拶をする。

ヒ（か、かつこいい．．．／／／）

ハル（その笑顔、反則かも．．．／／／）

カ（こ、これ犯罪じゃないの．．．／／／）

女子3人はサトシを見て、カアアと顔を赤くした。

サ「ど、どうしたんだ？

風邪でも引いたのか？」

仲間思い＋鈍感サトシスキル発動。3人が顔を赤くしたのを風邪だと勘違い。3人も自分に惚れているとも知らずに．．．

ハル「な、な、なんでもないかも／／／」

ヒ「う、うん。大丈夫／／／」

カ「ホント心配症なんだから／／／」

3人はあたふたしつつも、サトシに言う。

サ「そ、そうか．．．。」

サトシは疑問を抱きつつも、納得する。

その後サトシ達は朝食を食べ終え各々くつろいでいたところ・・・

バ「バリバリ。」

ハ「あらどうしたの？　バリちゃん。」

ハナコがバリちゃんと呼ぶのはバリヤードのことだ。元々はサトシのポケモンだったが手先の器用さとハナコに気に入られたことでサトシ宅のお手伝いポケモンとして現在に至る。

ハ「バリバリバリ。」

バリヤードは外を見ると言っているかのように指差した。

サ「ん？　あれはシゲル？」

外に立っていたのは、サトシの幼馴染兼ライバルのシゲルだった。

サ「どうしたんだろ？　ちょっと俺行ってくる。」

サトシはシゲルのもとへと向かった。

シ「やあサトシ。おじいさんから聞いたんだけど、君宛てに電話が入ったみたいなんだけど。」

サ「俺に電話？ いったい誰からなんだ。」

シ「僕もはつきりしたことは分からないけれど、どうやら君のことをよく知っている人物からなんだ。」

サ「分かった。今すぐ研究所に行くからちょっと待っていてくれ。」

サトシはシゲルにそう言うと、自宅の中へと入った。

ハ「サトシ、シゲル君何て言ってたの？」

サ「なんか研究所に俺宛ての電話があつたみたいで、その電話の主が俺のことをよく知ってる人なんだって。」

ハル「それって、私たちとの旅で出会った人のことかしら？」

サ「あー、よく分かんないけどこれから確認のために研究所に行ってくるから、少しの間だけいいか？」

カ「あ、うん。アタシ達特に用事もないしいいわよ。」

ハ「家には私たちがいるから、行ってきなさい。」

サ「ありがとう、じゃあ頼むよ。」

サトシは準備を整え、シゲルとともに研究所へと向かった。

サ（電話って、誰からなんだろう？）

サトシとシゲルは研究所に着くとオーキド博士に挨拶をし、電話について尋ねた。

オー「おーそうか。今つなぐから待っていてくれんかの。」

サ「はい、分かりました。」

オーキドは電話ボックスでどこかへかけた。

オー「今サトシが来たところじゃよ。すぐ変わるから。」

オーキドはサトシにこっちに来るよう促した。サトシが電話越しに見た人物に面識があった。

？「ハイ、ヤングボーイ。久しぶりね。」

サ「アララギ博士、お久しぶりです。」

電話の相手はイツシユ地方で世話になったアララギだった。

アラ「急にごめんねサトシ君。実はあなたと連絡を取りたいって子がいてね。それで電話したのよ。今その子にかわるわ。」

サ（一体誰なんだろう・・・。）

アララギが変わった相手もまた、サトシと面識があった人物だった。

サ「デ、デント!?!」

出てきたのはデントだった。

デ「やあ、サトシ久しぶり。」

サ「どうしたんだ、一体？ 急に電話なんかして。」

デ「サトシに会いに今からそっちに行くんだけど、その前にサトシの声を聞きたくてね。」

サ「本当か！？ こっちは大歓迎だぜ。今ちょうど昔の旅仲間が来てるんだ。今度紹介するぜ。」

デ「サトシの昔の旅仲間か……。会ってみたいな。」

サ「ところで、アイリスも一緒なのか？」

デ「ううん、僕一人だよ。」

サ「そっか、アイリスにも紹介したかったんだけどな……。」

デ「ごめんね。明日の朝にはクチバ港に着く予定だからマサラタウンには明日の夕方には着いてるよ。」

サ「いやいいよ。俺の方から迎えに行くから、デントにもカントーじゅうを案内したいし。」

デ「そうかい。それじゃあ頼むよ。」

サ「ああ、出来たらその時に昔の旅仲間も紹介するから。」

デ「それは楽しみだね。そろそろ船の時間だから切るよ。」

サ「そうか、じゃあまた明日。」

デ「こちらこそまた明日。」

サトシは受話器を置き電話を切った。

シ「あの人って、サトシがイツシユ地方で一緒に旅をしてた人？」

サ「ああ、デントっていつてサンヨウジムのジムリーダーでポケモンソムリエでもあるんだ。デントの作った料理を美味いんだぜ。」

シ「僕も一度会ってみたいものだね。」

シゲルもデントに興味を示してみたんだ。

その頃、

デ「元気そうだったな、サトシ。本当によかったの？ サトシと話さなくても。」

アイ「うん。サトシをびっくりさせようと思って・・・。」

アイリスの頬は若干赤みを帯びていた。

アラ（青春ね．．．．。）

その様子にしみじみ思つアララギだった。

続く

突然の電話＋急展開！？（後書き）

次回、デント達がカントー地方へ上陸します。

またまた訪問者（前書き）

久々の更新

ついに、デントとアイリスがサトシ達のもとへ・・・

またまた訪問者

クチバ港 . . .

サトシはデントを迎えるため、カスミ・ハルカ・ヒカリ・タケシら
を連れてクチバ港まで来ていた。そして、デント（+アイリス）が
乗っている船が寄港した。

サ「おーい、デント〜!!!」

デ「サトシ〜!!!」

サトシは、すぐにデントを見つけ手を振る。デントも気付いたのか、
サトシに向けて手を振り返す。そしてデントは、船を降りサトシ達
のほうへ近づいた。

サ「長旅ご苦労さん。」

デ「ありがとう。それにしてもカントーはなかなかいいところだね。
この地に海風というスパイスが奏でる絶妙なハーモニー、最高だよ。」

サ「相変わらずだな、デント . . .。」

持ち前のポケモンソムリエとしての腕は相変わらずなデント。サト
シ以外の4人も最初は不思議がっていたが、どうやら溶け込めたい
みたいだ。

サ「それよりもデント、バトルしようぜ。」

デ「へっ？」

サトシの突然の要望に驚くデント。

サ「俺さあ、皆がそろったらバトルしたいなって思ってたんだ。俺も久々のバトルだし腕がなるぜ。」

デント達の承諾も得ずに、早速バトルモードのサトシ。それには皆苦笑するしかなかった。

アイ「まったく、会った瞬間にバトルを申し込むなんて、ホント子供ね。」

突然声があったので、声のするほうへ向くと、デントの後ろにアイリスがいた。

サ「ア、アイリス!？」

サトシはアイリスがいることに驚いていた。なぜなら、デントからはアイリスが一緒だということを知らされてなかった。

デ「ごめんね、サトシ。アイリスがどうしてもサトシをびっくりさせたいっていうから。」

サ「ホントだよ……。」

アイ「これくらいでびっくりするなんて、やっぱり子供よね。」

サ「なんだよ。自分がそうしたくせに……。」

サトシは頬を軽く膨らませる。

カ「あ、あの……。」

ヒ「ところで、サトシ。」

カ・ハル・ヒ「この子、誰？」

サトシはアイリスの登場で空気になりかけていた少女3人のほうを向きなおした。

サ「あつ、カスミ達は初めてだったよな。この子は、アイリス。俺と一緒にイツシュ地方を旅した仲間だ。でさつきも言ったけど、こちらはデント。同じくイツシュ地方を旅した仲間で、サンヨウジムのジムリーダーだ。」

デ・アイ「初めまして。」

カ・ハル・ヒ・タ「こちらこそ、初めまして。」

一通りのあいさつを終えた後、一行は近くのレストランで食事をとることにした。

ハル「あの、デントさんって、ポケモンソムリエもやってるんですよね。」

デ「そうだけど。」

ハルカはバッグから一つの雑誌を取り出し、パラパラめくり始めた。

ハル「やっぱり、そうかも。皆も見てみて。」

ハルカに言われ、全員雑誌に注目する。そこには、『イッシュ地方で大人気！ 三つ子のレストラン特集！』とデカデカと書かれていた。

サ「凄いなデント。雑誌に載るなんて……。」

ヒ「店内も清潔な雰囲気だし。」

タ「メニューも多彩だしな。」

タケシはデント達の料理に興味を持ちつつ、今度教わろうかなと思っただ。

デ「なんかそこまで言われると照れるな……。」

デントは全員の反応に苦笑しながら言った。

サ「ここまで来るのに大変だっただろ、2人とも。」

アイ「うん、もうヘトヘト……。」

野性的な体力をもつアイリスでさえぐったりするほどなんだからよっぽど大変だったのだろうと思うサトシだった。

デ「それにおかしな2人組が現れたから……。」

サ「おかしな2人組？」

カ「それって、ムサシとコジロウ？」

カスミはサトシと旅をしていた頃によく現れた2人組を思い浮かべた。だが……

デ「ううん、その2人とは違うんだ。」

デントとアイリスも、ムサシとコジロウとは面識がある。ところが乗船中に現れた2人組は違うようだ。

ハル「えっ？　じゃあ誰なの？」

デ「その2人は……。」

デントは、船での出来事を話し始めた。

続く

またまた訪問者（後書き）

デント達が会った2人組とは・・・

船上にて（前書き）

今回はデントの回想シーンがメインです。今作品初のバトルシーンもあります。

デントのイシズマイが進化していますので、そこはご容赦ください。

船上にて

現在、アイリスとデントはカントーへ向かうための船の上にいる。

アイ「うわあ、アタシ船の上ってこんなだったんだ。おもしろい。」

デ「アイリス。あまりはしゃぐと船酔いするよ……。」

船に乗ったのが初めてなのか子供のようにはしゃぐアイリス。その様子を苦笑しながら見るデント。

アイ「サトシもホント子供なところは抜けてないんだから。」

デ「今の君のほうが、よっぱど子供だと思っけど……。」

と言えるはずもなく、心の中でそう思うデント。

アイ「ねえ、デント。カントーにはいつ頃着くの？」

デ「明日の朝には着くと思うよ。」

アイ「そう。それにしてもこの船結構大きいね。」

デ「そりゃあ豪華客船「オーシャン・エルレイド号」だもんね。綺麗に裝飾された船内、そしてシェフたちが絶妙なハーモニーを奏でながら作る料理がこのメインなんだ。」

すると、アイリスは・・・

アイ「料理！？　ねえ、デント。今からでも食べられる？」

デ「バイキング方式だから、大丈夫だと思うけど・・・。」

アイ「じゃあ今から行こう。デント、案内して。」

アイリスは目を輝かせながらデントに言った。

デ「う、うん。（僕、お腹空いてないんだけどなあ。アイリス、やっぱり君のほうがサトシより十分子供だよ・・・。）」

無邪気なアイリスの言動に、苦笑を浮かべるしかないデント。

一通りの食事を終えた2人は、それぞれの客室に戻ろうとしていた。と、そこへ・・・

「カラカラ。どこに行ったんだよ。」

「マネネ。出ておいで。」

なにやら声があちこちでしたので、デントは気になって一人の少年に声をかけた。

デ「君たち、どうしたの？」

すると、

「僕のカラカラがいなくなっただんです。」

「俺のマネネも。」

「私のコリンクも。」

「私のニヤルマーも。」

「僕のカイロスも。」

デントの声を聞いて、少年少女たちが集まってきた。そして、デントにそれぞれここまでの経緯を説明した。

デ「すると君たちは、ちょっと目を離れた間に君たちのポケモンがいなくなっただってことだね。」

「はい。」

一人の少年が答えた。

アイ「そういえば、食事会場でも何人が探してたわね。」

アイリスの言うとおり、何人かが食事会場で辺りを見回しながら、

ポケモンの名前を呼んでいた。

デ「分かった。僕たちも一緒に探すよ。」

「あ、ありがとうございます。」

デ「どういたしまして。」

アイ「あなた達のポケモンは必ず見つけてみせるわ。」

こうして、デントとアイリスは船内をくまなく探し始めた。すると、ボイラー室から怪しい物音が聞こえるので2人はその中へ入った。

アイ「ねえ、デント。さっきここから変な音がしたよね？」

デ「うん、何かを入れる音と金属音みたいだった。もしかしたら、ポケモンの行方不明と何か関係があるのかもしれない。」

デントは独自の推理を展開しながら奥へと進んでいく。

ガシヤン

音を立ててしまった。

? 「誰だ!」

アイ「デント、誰がいるよ。」

デ「どうやら気付かれたみたいだね。」

デルビル1体とグラエナ1体が、アイリスとデントを威嚇していた。

? 「私たちの邪魔をするとはね。」

? 「身の程知らずだな。」

アイ「誰?」

胸にはRの文字、ロケット団の男女2人組だ。だが、アイリスとデントが知るムサシとコジロウではなかった。

? 「なんだかんだと聞かれても。」

? 「答えないのが普通だが、特別に答えてやろう。」

そう、このセリフでお馴染みの・・・

ヤマトと

コサンジだ。

コサ「コサブロウだ！」

ヤマ「あんた、誰にツッコんでんのよ．．．。」

ナレーターの説明に対するツッコみに、呆れるヤマト。

ヤマトとコサンジもといコサブロウの後ろには、檻に入れられた大量のポケモンたちがいた。

アイ「あんたたち、そのポケモンたちをどうしようって言うのよ。」

コサ「どうする？　これをボスのところへ献上するのさ。」

デ「全部、人のポケモンたちのようだけど。」

ヤマ「そうよ。人のポケモンだろうが私たちには関係ない。私たち

はただボスのために任務を遂行するだけ。」

デ「悪いけど、そのポケモンたちは返してもらおうよ。行け、ヤナップ、イワパレス。」

デントはヤナップとイワパレスを出した。イシヅマイが進化してイワパレスになっている。

ヤマ「邪魔者は消すのみ。いくよ、コサンジ。」

コサ「だから、コサブロウだ。」

ヤマトとコサブロウは、デルビルとグラエナに攻撃の指示を出し、ヤナップとイワパレスに襲いかかった。

「ヤナップはかわして。イワパレスはロックカット。」

デルビルとグラエナの攻撃をヤナップはかわし、イワパレスはロックカットで素早さをあげて対処した。

ヤマ「なかなかやるわね。でも簡単にはいかせないよ。デルビル、ほのおのキバ。」

デルビルのほのおのキバ。それがヤナップに当たり、効果抜群。

ヤナ「ヤナツ！」

デ「ヤナップ!?!」

草タイプのヤナップには炎タイプのデルビルを相手にするのは、分

が悪い。だが・・・

ヤナ「ヤナ・・・。」

デ「まだ戦えるね、ヤナップ。まだまだこれからだよ。」

ヤマ「あなたのポケモンじゃ勝負にならないわよ。そろそろ降参した方がいいんじゃない?」

デ「バトルは相性だけじゃないよ。ポケモンを取り返すまではあきらめない! ヤナップはデルビルにかみつく。イワパレスはグラエナにシザークロス。」

2体の攻撃はデルビル、グラエナにクリーンヒットした。そして・・・

デ「そろそろ、メインディッシュといこうか。ヤナップ、タネマシンガン。イワパレス、がんせきほう。」

攻撃がデルビルとグラエナ、そしてヤマトとコサブロウに向かってくる。

コサ「なあ、これっていつもの・・・。」

ヤマ「そうみたいね・・・。」

ヤマ・コサ「それじゃあ・・・。」

ドガーーン（タネマシンガンとがんせきほうが当たった音）

ヤマ・コサ「やな気持ち〜！！！！！！！！」

ヤマトとコサンジは星になった。

コサブロウだ！ by コサブロウ

デ「ふう〜、そういえばポケモン達は！？」

アイ「それなら、大丈夫だよ〜。」

デントはポケモンたちのもとへ向かおうとしたが、アイリスがポケモン達を解放していた。アイリスは戦闘のさなか、こっそり檻へと近付き、ヤマトとコサブロウが吹っ飛んだ際に落した鍵で檻を開けたのだ。なんとという、ずる賢さ。（笑）

アイ「うるさいわね〜。」

デ「アイリス、誰に言ってるの？」

アイリスの様子に、若干顔を引きつらせたデントだった。

その後、デントとアイリスはポケモン達をそれぞれ持ち主に返し、そしてクチバへ着いたのだった。

デ「ということがあったんだ。」

サ「大変だったんだな．．．。」

タ「まったく、ロケット団も相変わらずだな。」

ハル「ホントしつこいかも。」

ヒ「いい加減懲りて欲しいわ。」

カ「でも相手がよかったわね。ヤマトとコサンジで。」

だから、コサブロウだ！ by コサブロウ

デントの話聞いて、各々感想を漏らしていた。

サ「そろそろ出ないか。あっそうだ、デントとアイリス。今日、俺

の家に来ないか？」

デ「えっ、いいの？」

サ「ああ、大歓迎だぜ。ママもいって言うだろうし。」

デ「じゃあ、お言葉に甘えさせて。ほら、アイリスも。」

アイ「へっ、あ、うん。」

サ「よし、それじゃあ早速行くぞ。なあ、皆もいいだろ。」

カ「もちろん、いいわよ。」

ハル「2人からもイッシュのこと聞きたいかも。」

ヒ「断る理由はないわ。」

タ「俺もだ。デントの料理も一度見てみたいしな。」

タケシは改めてデントの料理にも興味を持ったようだ。

サ「じゃあ、決まりだな。」

サトシー行は、お会計を済ませ店を後にした。

だが、出た直後に事件（？）は起こった。

続く＋久々の後書きショー

船上にて（後書き）

天「久々の後書きシヨ。今回のゲストは、ヤマトとコサンジです。」

コサ「コサブロウだ！」

ヤマ「それよりも何この扱い!？」

天「贅沢言うな。ただでさえアニメじゃたまにしか出てこない空気キャラのくせに、俺のご厚意でわざわざ出してやったんだ。ありがたいと思え。」

コサ「大きなお世話だ。」

ヤマ「だいたいこういうのって、ムサシ達の役目でしようが。」

天「仕方ないだろ。あいつら、アニメじゃ急に真面目ぶったキャラになりやがって。正直、書きづらいんだよ。」

ヤマ「それは言ってるけど、だからって私達にしなくたっていいじゃない。」

コサ「これじゃ、お笑いキャラだろ。」

天「まあそう言うなって。いつになるか分からないが、あいつらも本来のキャラに戻す予定だから。それに必要なキーパーソンはこいつだ!」

コサ「お、お前は!？」

ヤマ「天の河、あんた悪魔ね・・・。」

天「最高の褒め言葉だ。」

はたして、ヤマトとコサブロウが見た人物とは・・・

お騒がせキャラ？（前書き）

イツシュからあのキャラが登場します。なんか、サトシがだんだん天然タラシになってる・・・

また、自由自在さんの「キャラ崩壊」からあのポケモンも登場します。

お騒がせキャラ？

サトシー一行が店を出た瞬間・・・

？「サトシくん！」

誰かがサトシの名を呼んだので、全員声のする方へ向くとそこには

サ「べ、ベル！？」

サトシがイツシュ地方を旅してた時に出会ったトレーナー・ベルが手を振って立っていた。彼女と面識のあるデントとアイリス、その他の面々もベルの突然の登場にきょとんとしていた。

ベ「やっぱりサトシ君だ。久しぶり。」

ベルがサトシ達の方へ近づいてきた。

サ「ひささ・・・って、ええええ！？」

走っていたベルは躓き、よろよろしながらサトシ達に向かってきた。

ベ「って、ちょっと。あわわわわ！？」

サ「どわ！？」

そして、ベルはサトシにぶつかった。サトシ以外全員はあちゃ〜と言わんばかりに顔を覆った。

ベ「いたたたた。あつ、デントとアイリスも久しぶり。他の人は知らないから、私から自己紹介するね。」

ベルはデントとアイリスに挨拶をした後、カスミ達に勝手に自己紹介を始めた。カスミ達はベルに啞然としていたものの、ベルにこちらこそと言った。

デ「久しぶり、ベル。自己紹介のところ悪いんだけど、そろそろどいてくれないとサトシがかわいそうだよ。」

タ「ああ、サトシ苦しそうだぞ。」

ベルとぶつかったサトシの様子は、ベルの下敷きになっているわけだが、サトシの顔はベルの胸によって押しつぶされている状態である。この光景に、女子全員は顔を赤くしていたとか・・・

ベ「サ、サトシ君！？ 大丈夫！？」

サ「大丈夫だから！ これ以上はやめて・・・。」

本人はそう言っているが、大丈夫なわけがない。鈍感サトシとて男である。顔がいろんな意味で真っ赤だ。そんなサトシを乱暴に揺さぶるベル。なんとという自分勝手さ・・・

ヒ「随分と変わった子ね・・・。」

アイ「許してあげて。根はいい子なの。」

ベルの人間性に呆然とながら、ヒカリは言った。そう言う前にサト

シを助けてあげてください。

サ「今綺麗な川を渡りかけた……。」

タ「その川は渡るな。」

ベルから解放されたサトシはそう呟いた。

デ「ところでベル。どうしてカントーに？」

ベ「ただの観光よ。サトシ君の住むカントー地方に行きたかっただけ。それとサトシ君に会いたかったの。」

サ「そつか、俺もベルに会えて嬉しいぜ。」

サトシが思わず言った一言に、ベルはもじもじしながら顔を赤らめた。

カ「……ねえ、アイリスさんだっけ？ まさかあの子もサトシのことを？」

アイ「うん、イッシュの時もアプローチが凄かったもん。それと、アタシのことは呼び捨てでいいわ。」

女子全員（ライバルがまた増えた……。）。

アイリスの一言に、女子全員こう思った。

ベ「そういえばサトシ君って、マサラタウンに住んでんだよね？」

サ「そうだけど。」

ベ「アタシオーキド研究所に行ってみたかったの。案内して。」

そう言つとベルはサトシの腕を掴み、全速力で走って行った。

アイ「ちょっと待ちなさい！ ホント子供なんだから。」

ヒ「私達を置いてかないでよ！」

ハル「あのベルつて子、足速過ぎかも。」

カ「ちょっと待ちなさいよ。」

ベルがサトシを連れ去つた直後に女子全員、ベルとサトシを追いかけていった。一方、残されたデントとタケシは……

タ「……なあ、イツシユ地方でもこんな感じだったのか。」

ふとタケシはデントに尋ねた。

デ「うん。ひよつとしたらサトシって天然タラシかな……？」

タ「本人の自覚がないから、そうなるだろう……。」

いろんな意味で仲良くなれそうな2人であった。

タマムシシティ某所

そこには、黒マントの男としゃべるポケモンがいた。

？「マスター。今日は収穫がありませんね。」

？「仕方ないよ、あれだけテレビで騒がれたら。警察も厳戒態勢のようだし。」

そうこのコンビ、ニュースで騒がれている痴漢魔である。

？「これからどうします？ マスター。」

？「ここには、女の子だけのポケモンジムがあるみたいだよ。挑戦者と偽って、ジムの女の子達にあんなことやこんなことを・・・グヒヒヒヒ。」

黒マント男はアレを主張させながら、君の悪い笑みを浮かべる。

？「私達の性欲が満たされるのが楽しみですね、マスター。」

？「そのために計画を練らないとね、スリーパー。」

しゃべるポケモンとは、スリーパーのことである。このスリーパーは数々の少女達を誘拐しては、自主規制がかかるようなことを行ってきた変態ポケモンである。

詳しくは、「キャラ崩壊！！ドラえもん達の日常」（作：自由

自在)を参照。

スリーパー「ククク、もうポケモンのメスは秋田じゃなくて飽きた。やはり人間の女の生身が・・・(これ以上は内容が卑猥すぎるので省略)。」

新たなる事件勃発!? とりあえず今回はこの辺で・・・

お騒がせキャラ？（後書き）

いかがでしたが、こんなオチですが・・・

自由自在さん、キャラの提供ありがとうございます。「キャラ崩壊」のままの設定かどうか自信ありませんがどうでしたか。

エリカ様登場（前書き）

前回、登場した変態コンビがやっちゃんいます（笑） 笑えねえよ！

お分かりだとは思いますが、エリカ様とは沢〇エリカのことではございませぬ。

最後に一言、多少ゲームネタ入ります。

エリカ様登場

タمامシジム近郊

? 「この辺だよ。女の子が集まるムフフな場所は。」

スリーパー 「はい、マスター。このジムは男子禁制、女だらけのパラダイスですよ。特にリーダーのエリカは世間で一二を争う美女ですよ。」

? 「それホント!? ウヒヒヒヒ、スリーパーおぬしも悪よのう。」

スリーパー 「いえいえ、マスター程では。」

時代劇でありがちな悪徳商人の会話をしながら、気味の悪い笑みを浮かべる変態共。

? 「おつ、着いた着いた。ん? 誰かいるぞ。」

マスターと呼ばれた男はジムの窓の前に立っている人影に気づいた。

? 「にひひ! このジムはええ! 女の子ばっかしじゃ!」

ジムの前には窓を覗いている老人がいた。

? 「ねえ、スリーパー。あれって覗きだよな?」

スリーパー 「そのようですね。こんな真昼間から、元気なジーさんですね。」

爺「ふふふ、君達も見てみるかね？」

黒マントの男達の会話が聞こえたのか、老人は話しかける。

？「ん、どれどれ。うわあ、これは！？」

スリーパー「これはまさにパラダイスだ。」

ジム内にはリーダーのエリカをはじめ、ミニスカート、ピクニック
ガール、エリートトレーナー、大人のお姉さんなどたくさん
女の子トレーナーがいた。読者のほとんどがお分かりだと思うが、
このジムは基本男子禁制である。

爺「そうじゃろう、そうじゃろう。じゃがな、夜中じゃったらもつ
といいのが拝めるぞ。」

？「夜中！？ まさに、絶好の時間帯じゃないですか！」

スリーパー「だが、大丈夫だろうか。この辺、結構嚴重な警備だし。」

爺「ふふふ、警察ごときがわしの情事を邪魔することなどできん。
この証拠にホレ。」

すると、そこにはジュンサーの（自主規制）な写真が何十枚もあつ
た。どうやら隠し取りをしていたらしい。なんつー、エロジジイ・

スリーパー「うほほほ、これは夜まで待てませんな、マスター。」

？「ああ、もう僕の（自主規制）が大変なことになってるよ・・・。」

それぞれ危ない妄想を繰り広げる変態共であった。

そしてその夜・・・

例の痴漢事件以降、警察によって厳重な警備体勢が敷かれている。その中をうまく掻い潜った変態一行・・・

爺「ここじゃ、ここじゃ。ほれ、そのこの部屋だけ明るいじやろう。ばれない程度に覗いてみよ。」

？「湯気が立っているってことは、風呂場だね。どれどれ。」

黒マント男はスリーパーに手助けしてもらいながら、明かりのついた窓を除く。

？（うわぁーーーーー！！！！！！！！これは、絶景だぁ！！！！！！！！）

現在、リーダーのエリカが入浴中だった。エリカは現在、湯船につきながらウトウトしている。

？「いやあー、タオルで体が隠れているのは残念だが、寝ながら入浴するとは・・・またかわいらしい姿。」

黒マント男はマント越しからでも分かるように（自主規制）が主張していた。

爺「ほほう、君たちはラッキーじゃ。ここタマムシじゃ知らない者はいない美女・リーダーのエリカの入浴姿を拝めるとはな。」

スリーパー「マスター。私めがもっといい眺めにして差し上げましょうか。」

？「それ本当！？ 早速やってよ。」

黒マント男がスリーパーから降りると、スリーパーはサイコキネシスを発動した。

爺「うほほほほ、これはいい。長年の人生の中でも最高の出来事じゃ。」

？「スリーパー、君は最高だよ。」

（自主規制）がはちきれそうに主張している。黒マント変態とエロジジイ。

スリーパー「いえいえ、私に任せればこんなの朝飯前ですよ。あつ、今は夜中ですが。」

スリーパーが見せたもの、それはエリカが身にまとっていたタオル

が消えてなくなり全身があらわになった姿だった。いわゆる全裸状態である。（細かい部分はご想像にお任せします。）

エリカ「・・・あっ、いけませんわ。私としたことが、気持ちよくてウトウトと。」

エリカが目覚めた途端、

「エリカさん。」

脱衣場の方から、ジムのトレーナーの一人の声がした。

エリカ「あら、アコ。おはようございます。」

アコ「エリカさん、またお風呂場で寝てたんですね・・・。アタシも一緒にしてもよろしいでしょうか。いろいろお話したいことがありますまして。」

アコはエリカに苦笑しつつ、風呂場に入る。どうやら、エリカが風呂場でウトウトするのは日常茶飯事のことのようである。

エリカ「いいですよ。私、そろそろ上がるうと思っていたのですが、付き合っただけで差し上げますわ。」

アコ「ありがとうございます。」

アコはパアアと笑顔になる。

一方、変態共は、

スリーパー「これはこれは。もう一人増えるとは・・・あのアコつて女もなかなかいいスタイルですなマスター。」

?「ここでばれずに粘ったら、もっと増えるかも。」

もうどうにも止まらなくなった変態コンビ。しかし、つかの間の快樂が長続きするはずもなく・・・

?「ハ、ハ、ハックション!!!!!!」

思わず黒マント男はかなり大きなクシャミをしてしまった。当然、風呂場のエリカたちにも聞こえ、

アコ「誰!?!」

窓から、アコが顔を出し、変態連中と目が合う。

アコ「キャー————!!!!!!———覗きい!!!!!!———」

爺「まずい、見つかってしもうた。ひとまず退散じゃ!!!!!!———」

?「ごめん、僕がクシャミをしてしまったばかりに。」

スリーパー「謝る前に逃げましょう!!!!!!———」

変態連中は逃げ出した。

その後、アコの声に駆け付けたジュンサー達が辺りを搜索した。

爺「トホホ・・・(泣)。」

変態連中は、分かれて逃げたものの、エロジジイはあえなく御用となった。黒マント男とスリーパーは依然逃走中である。このニユースは、翌日全国に載ることとなった。

エリカ様登場（後書き）

FR・LGからタムムシシティ前にいる老人のキャラを捏造して出しちゃいました（笑）。

アコは、実際にFR・LGに出てくるミニスカートのトレーナーです。（タムムシジムのトレーナー）

<年越し特別企画> サトシ達の年越し(前書き)

今回は本編の進行と離れて特別編をお送りします。無駄に長いうえに、終わり方が無理矢理です。

ヤストシさんの作品から3名ゲスト出演します。

<年越し特別企画> サトシ達の年越し

今日は大晦日。一年の最後の日であるこの日に蕎麦を食べるというのは定番だが、TV番組の編成が少し変わっている。毎年の定番だったド〇え〇んSPではなく〇上彰さんの番組になっている。まあ何年か前に始まったガ〇使の絶対に笑っては行けないシリーズは今年もあるわけだが・・・

さて、長ったらしい前置きはそこまですておいて、サトシ達の今年の大晦日の過ごし方を見てみよう。

ここはマサラタウン・・・

サトシは、タケシ、デント、カスミ、ハルカ、ヒカリ、ベル、マサト、ジユン達を呼んでオーキド研究所に何やら楽しんでいた。

タ、よし出来た。これで年越し蕎麦の下準備は大体出来たな。デン

ト、そつちはどうだい？」

デ「うん、こつちも出来そうだよ。皆がそろつのはめったにないことだから、特別なテイストを効かせたんだ。」

タ「そうか。悪いな手伝ってもらって。」

デ「いいよ。皆に美味しく食べてもらえれば、それでいいから。」

タケシはデントの一言に感心していた。ちなみに現在、タケシは年越し蕎麦、デントは正月のおせちを作っている最中だ。とそこへ・

サ「お、旨そうだな。」

においにつられてやってきたサトシが突然現れた。

タ「おいおいサトシ。これは夜に食べるものだぞ・・・(汗)。」

タケシはサトシの行動に呆れつつ、サトシらしいなと思った。

デ「まあまあ、それよりサトシ。みんなは？」

サ「全員研究所でポケモン達と仲良く遊んでるぜ。」

デ「そう。じゃあ僕達も行ってもいいかな？ 晩御飯の準備はできたし。」

サ「ああいいぜ。タケシもどうだ。」

タ「それじゃあ、俺も向かうとするか。」

サトシに促され、タケシとデントは持ち場を離れ皆のところへ向かった。だが、これが後に思わぬ事件を生むことになる。

サ「みんな〜！ タケシとデントを連れてきたぞ。」

サトシはポケモン達と楽しく遊んでいるみんなに言う。

カ「あつ、サトシ。連れてきてくれてありがとう。」

真っ先に返事を返したのはカスミだった。すると・・・

ベ「サトシ君〜！！！！」

ハル「サットシ〜！！！！」

ベルとハルカが急にサトシに抱きついてきた。なぜこの2人なのかはお察しください。

ヒ「ちょっと2人も。サトシから離れてよ。」

アイ「そうよ。サトシを見るなり興奮しちゃって、ホント子供なんだから。」

ヒカリとアイリスが怒ったようにベルとハルカに言う。

ベ「ええ、別にいいじゃない。」

ハル「サトシと離れるなんていやかも。だったら2人もやってみたら。」

ハルカの一言に、ヒカリとアイリスはカアアと顔を赤くさせる。

ヒ「そ、そんなの恥ずかしくて出来るわけないじゃない!!!」

アイ「そんな大胆なこと出来るわけないじゃない!!!」

2人ともあたふたしながら答える。顔は2人ともリンゴのように真っ赤になっている。その様子にカスミはやれやれと呆れて見守るしかなかった。

デ「あの、僕も離れた方がいいと思うけど……(汗)。」

タ「サトシ……意識が飛びかけているぞ……(汗)。」

デントとタケシは言う。サトシの様子は、ベルとハルカに強く抱きつかれているせいか、苦しそうにしている。心なしか顔も少し青ざめている。

ベ「あつ、ごごごめん。サトシ君、大丈夫?」

ハル「し、しっかりして。」

サ「……あんまりだいじょばないかも……。」

ベルとハルカから解放されたサトシは、しばらくぐったりしていた。

サトシも復活(?)し、しばらくポケモン達と各々遊んだ後、夕食の時間になったので準備をする。

カ「タケシ、こっちは出来たわ。あと手伝うことはないかしら。」

タ「ああ済まない。もう特に何もないからゆっくりしていてくれ。」

カ「そう、それじゃあお言葉に甘えさせてもらおうわ。」

カスミの他に手伝っていた者もそれぞれ終わり、いよいよ夕食の時間となった。

サ「おおっ!!! どれも旨そうだな。」

サトシはよだれを垂らしながら並べられた料理を見つめる。

アイ「もうやめてよ、ホント子供なんだから。でも、ホントに美味しそうね。」

ハル「早く食べたいかも。」

早くもフライングをしようとする食いしん坊3人組（笑）。

マサ「まったく、お姉ちゃんたら・・・。」

こちらはハルカの弟・マサト。今作品、初登場である。ハルカの料理を見る時のしゃぎっぷりに心底呆れている様子。

ジュン「まあ、いいじゃねえか。こうしてみんな集まることなんてめったにないことだし。」

こちらも初登場・ジュン。サトシがシンオウを旅していたときに出会ったライバル。

マサ「そうだけど・・・。」

ジュン「あんまり考え込んだって、楽しくねエぜ。ほら、お前も。」

マサ「そうですね。せっかくみんなが集まったのに台無しにしたら駄目ですよね。」

ジュンに促され、サトシ達の方へ向かうマサト。

一方、サトシ達は・・・

アイ「ねえ、デント。もう食べていい。アタシもっお腹ペコペコ。」

デ「えっ？ うん、いいよ。」

デントは苦笑しつつ、返事を返す。

サ「それじゃあ、俺も。」

ハル「2人ともずるいかも。」

アイリスに続いて、サトシとハルカも料理を口にしようとする。そして・・・

サ・ハル・アイ「っっ」
「っっ」
「っっ」

3人同時に料理を口の中に入れた。

サ「……………」

ハル「……………」

アイ「……………」

デ「か？」

デントは3人の様子がおかしいことに気づく。そして…

サ・ハル・アイ「「辛—————い!!!!!!!!!!!!!!」」

一時期流行った(?)スードワ〇ンのようなことを叫ぶ3人。

タ「辛い？」

デ「そんなに辛くしたつもりは…どれどね。うーん、このスパイスの効いた刺激的なテイスト、そして後から込み上げてくるこの感じ……………って辛!!!!!!!!!!!!!!」

サトシ、ハルカ、アイリスそして味見をしたデントまでもが一目散に蛇口へと直行した。

タ「お、おい。一体どうしたんだ!？」

突然のことにサトシ達を追いかけるタケシ。そして、様子がおかしいことに気付いたマサトとジュンもそれを追いかける。

マサ「ちょっと、みんなどうしたの？」

ジュ「一体なんだってんだよ。」

料理が並べられたテーブルの周りは無人状態になった。正確には、サトシ達のポケモン達のみがいる。当のポケモン達は口をポカンと開けて呆然としていた。

サ「酷い目にあつた．．．。」

アイ「もう、なんなのよ．．．。」

ハル「しばらくは辛いのが食べたくないかも．．．。」

デ「3人ともごめんね。でもそんなに辛く味付けしたつもりはなかったんだけど．．．。」

あまりの辛さで酷い目に遭った4人は、ようやくテーブルへと戻ってきた。

マサ「大丈夫？」

マサトが心配そうに尋ねる。

サ「あつ、うん。だいぶ落ち着いた。」

サトシが答えると、他の仲間達が集まってきた。

ヒ「ちょっと、どうしたの？ 大きな声が聞こえたけど。」

タ「うん、ちょっと
な。」

ヒカリが心配そうに聞いてきたので、タケシがこれまでの経緯を説明する。

ヒ「災難だったわね……。」

ベル「それよりも誰かしら？ 料理に細工した人って。」

デ「多分、僕達が持ち場を離れたときに誰かが厨房に侵入してやっ
たんだろう。」

デントは自分の推測を説明し始める。すると……

カ「大変よ。ポケモン達がいないわ。」

カスミの声に反応し、皆辺りを見回すといえるはずのポケモン達がいなくなっていた。

ヒ「ポッチャマ、ミニミロル。みんなどこにいるの？」

ハル「いたら返事して……。」

ジュン「まったくなんだってんだよ。犯人見つけたら罰金だ！」

それぞれ自分達のポケモンを探し始める。ジュンに至っては怒り交じりである。

？「「「お前達のポケモンはここだ。」」」

サトシ達は声がした方を向くと、そこには胸にRの文字が書かれた服を着た三人組と檻に入れられたポケモン達がいた。

サ「ピカチュウ!!! みんな!!!」

ベ「ちょっと、あなた達なんなのよ。」

ベルの一言に三人組が答えた。

？「『なんなのよ。』と聞かれたら。」

？「名乗ってあげるのが当たり前。」

？「宇宙の破壊を防ぐため。」

？「宇宙の平和を守るため。」

？「恋と成熟の悪を貫く。」

？「お茶目で恋の敵役。」

？「カミオタイ。」

? 「ナカオタイ。」

? 「シモオタイ。」

カミ「ロケット団あるところ。」

ナカ「世界は。」

シモ「宇宙は。」

3人「君を待っている。」

カツコよく決めたロケット団。

3人組を見つめる全員は・・・

「……………」

突然の登場に唾然としていた。

シモ「ちょっと、お前達リアクションが薄いじゃないか!!!」

痺れを切らしたシモオタイがサトシ達に問いかける。

サ「いやあ、だってロケット団って、ムサシとコジロウ、ヤマトとコサンジの他にいたんだなって。」

コサブロウだ!!! by コサブロウ

アイ「うん、しかも某私鉄の○山線の駅名みたいな名前です。」

デ「アイリス、読者のほとんどが分かんないと思うよ……。」

○山線トリオそっちのけで会話を進めるサトシ、アイリス、デント。

ナカ「カラー（怒）、俺達を無視するな……！」

ナカオタイが痺れを切らす。

ベ「ねえ、ロケット団って何？」

ベルはイツシユ地方出身で、ロケット団の存在については知らない。サトシは簡単にロケット団の説明をする。

ベ「そんなに悪いやつらだったの！？ だったらやつつけちゃいましようよ。ピカチュウ、でんじほうよ。」

なぜか自分のポケモンではなくサトシのピカチュウに指示をするベル。ちなみにサトシのピカチュウは「でんじほう」をおぼえていない。当然、ピカチュウは困惑している。

ベ「もう、なにやってるのよ。でんじほうよ、でんじほう。」

若干怒り交じりにピカチュウに指示を出す自己中ベル。

サ「おいベル。俺のピカチュウはでんじほうなんて覚えてないって。」

そんなベルに呆れながら答えるサトシ。

ジュ「あれなんだってんだよ……。」

ベルの行動に引いてしまったジュン。

デ「許してあげて、根はいい子だから。」

そうこうしているうちに、○山線トリオの怒りがピークに達する。

カミ「だから、俺達を無視するなって言っただろ。ええい、シモオタイやっっておしまい。」

シモ「お任せを。出てこい、マタドガス。」

シモオタイはマタドガスを繰り出した。

サ「くっそー、ポケモン達は檻の中だしどうすればいいんだ。」

サトシが困っているところへ、サトシ宅のお手伝いポケモンバリヤードが駆け付けた。

バ「バリバー。」

バリヤードは自分も手伝って出来た楽しいひと時を台無しにされて、怒り心頭の様子である。

サ「バリヤード？ やってくれるか、よし行け！ バリヤード。」

バ「バリ！」

サ「バリアード、マタドガスにサイコネシス。」

バリアードはマタドガスにサイコネシスをお見舞いする。どくタイプのマタドガスには効果抜群、そのままマタドガスは○山線トリオの方へ吹っ飛ばされた。

○山線トリオ「っ、っやな気分〜。」「」

○山線トリオは星になった。

その後、ポケモン達を解放しみんなで協力して料理の作り直しをした。そして・・・

5

4

3

2

1

全員「新年、あけましておめでと〜ございませす。今年もよろしくお
願ひします。」

終わり

＜年越し特別企画＞ サトシ達の年越し（後書き）

天「なんとか、年越しまでに間に合った。」

カミ・ナカ・シモ「「ちよつと待ったー！ー！！！」」

天「何だ。○山線トリオか。」

カミ「その言い方やめる。」

ナカ「それよりもなんなんだ。」

シモ「俺達の扱い酷過ぎやしないか。」

天「それに関しては申し訳ない。俺の文才がないせいだ。提供していただいたヤストシさんにここでお詫びしたい。」

ヤストシさん、本当にごめんなさい。そして、キャラの提供ありがとうございました。ありがとうございます。

シモ「それで俺たちは今後出番はあるのか？」

天「ヤストシさんの許可さえあれば、今後も出していきたい。あっ、それとオリキャラの構想もある。」

ナカ「そうか、まあ頑張れよ。」

天「意外にも読む人がいるからな、この作品。読者にこれからも答えていけるように頑張りたい。えー、最後になりましたが新年もよ

ろしくお願いします。」

災難少年その名はサトシ（前書き）

新年早々、序盤にピンク要素入ります。ベルって、こんなキャラだ
っけ・・・（殴）

災難少年その名はサトシ

ある朝のマサラタウン・・・

ベ「サトシ君、あれ？ まだ寝てる。」

ベルがサトシの部屋にこっそり入ってきた。だがまだサトシは寝ていた。

ベ「ふふふ、サトシ君ったら、寝顔可愛い。これはチャンスね。」

不敵な笑みを浮かべながら、サトシに近づくベル。そして、自分の唇をサトシの唇に近付け・・・

チュ

ベルは自分の唇をサトシの唇にくっつけた。いわゆるキスである。

それだけでは足りないのかベルは自分の舌をサトシの口内へと入れ込む。

サ「ん、ん、ぷはぁ。べ、ベルなにやってんだ!？」

サトシが大声を出しながら起きた。心なしか顔が赤い。いくら鈍感なサトシでも男である。

べ「あら、サトシ君。おはよう。」

ベルはニツコリと笑顔を見せ、サトシに挨拶をする。

アイ「ちょっとサトシ。一体d……って、何やってんのよ。ベル!?!」

アイリスはベルに問いかける。アイリスが見た光景、それはベルがベットに寝ているサトシを押し倒している格好である。

べ「サトシ君を起こしに来たの。」

ベルは笑顔で答える。

アイ「もつと普通に起こすこと出来なかったの!?!」

べ「これがアタシの普通の起こし方よ。」

想い人を襲われた形になって怒り狂っているアイリスといたって冷静なベル（正確にはサトシにキスをして恥ずかしい気持ちでいっぱいである）。

一方のサトシは、声を挟めずにいる。そこへ、

サ「うん、今行く。」

サトシはハナコから受話器を受け取ると相手の声の主を確認した。

？「サトシさん、お久しぶりですわ。」

サ「エ、エリカさん!？」

電話の相手は、タمامシジムのジムリーダー・エリカだった。

サ「エリカさん、急にどうしたんですか？ てか、どうして俺の家の番号を。」

エ「オーキド研究所にお電話したら、教えてくださったんです。実はサトシさんにお問い合わせがあってお電話したのです。」

エリカはオーキド研究所とは少しばかり縁がある。（この作品ではそういう設定でお願いします。）

サ「お願い？ 一体なんですか？」

エ「単刀直入に申し上げますわ。今からタمامシジムに来ていただけないでしょうか？」

サ「別に用事はないですしいいんですけど、どうしてですか？」

エ「訳はジムでお話ししますわ。それでは、来ていただけるんですね。」

サ「はい、ジムのポケモン達にも久々に会ってみたいし。」

エ「そうですね、ありがとうございます。では、また。」

サ「こちらこそ。」

サトシが電話を切ると、カスミが尋ねた。

カ「エリカさん何で来てくれっていったの？」

サ「さあ、でも行けば分かるよ。」

サトシはハルカ達にエリカとのジムバトル、その後の交友関係を簡単に話した。それと同時にカスミがジムリーダーであることも一緒に話した。ハルカ達は最初はポカンとしていたが、サトシの話に納得したようだ。

ベ「へえ、サトシ君ってジムリーダーとも知り合いなんて凄いわ。」

ベルがサトシを褒めると、サトシは照れたようにする。その光景に他の女子たちはムツとしていた。

タ（サトシ……。）

デ（ハハハ……。）

タケシとデントは皆に分からないようにアイコンタクトをとり苦笑した。

ハル「ねえ、サトシ。私達も行つていいかな？」

ハルカはサトシに尋ねる。

サ「ああ、もちろんいいぜ。な、皆もどうだ。」

ヒ「サトシが言つんならアタシも行くわ。」

ベ「カントーってどんな所かも知りたいし。」

アイ「アタシも行くわ。サトシは子供だから誰かがついてないと駄目だし。」

カ「それは言ってる。」

サ「そりゃないぜ・・・、デントとタケシはどうするんだ？」

タ「俺はパス。研究所でドクターに関する資料を整理したいからな。」

デ「僕も。研究所に用があるし。」

サ「そつか、それじゃあ後頼むよ。」

サトシはタケシとデントにそう言うと、準備をしてカスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、ベルとともにタمامシシティへと向かった。

サトシ達が出ていった後・・・

タ「なあ、デント。俺なんだか嫌な予感しかしないんだが・・・。」

デ「奇遇だね、僕もなんだ。確かタمامシジムって男子禁制で有名なジムだよな。でも、なんでササトシに？」

タケシとデントは疑問に思ったが、あまり深く考えないようにした。

続く

災難少年その名はサトシ（後書き）

今年もよろしくお願いします。

続・災難少年その名はサトシ（前書き）

前回の続編です。なんかだんだんメチャクチャになってる・・・
八八

続・災難少年その名はサトシ

サトシ一行は、タمامシジムへと到着した。

エ「お待ちしておりましたわ。どうぞ中へ。」

女子全員「おじゃまします。」

女子達はジム内へと入る。しかし、サトシは立ち止まったままだっ
た。

サ「あ、あのエリカさん。確かこのジムって男は挑戦者以外は入れ
ないんですよ。でも、なぜ俺に依頼したんですか。」

エ「それはサトシさんが頼りになるお人だからです。それとこのジ
ムに入ることに関しては心配ありませんわ。」

エリカは言う。

サ「えっ?」

サトシは戸惑う。

エ「心配なさらずとも、中へお入りください。」

サトシはエリカに促されるようにジム内へと入っていく。このこと
が後にサトシに災難をもたらすことになるなどサトシ自身思ってい
なかった。

ジム内に入るとまずサトシが口を開いた。

サ「エリカさん、急にどうしたんですか。俺達を呼んで。」

エ「先日、このジムに覗きが出ましてその事件の解決にサトシさん達に協力をと思ってきていただいたのですが。」

エリカは先の覗き被害に遭ったことをサトシ達に簡単に説明した。

サ「そういうことなら、引き受けますよ。ポケモンを悪事に使うなんて許せません。」

カ「アタシも協力するわ。」

ハル「私も。」

アイ「覗きなんて女の敵よ。」

ヒ「ホント許せないわ。」

ベ「サトシ君、私も協力するわ。」

サ「皆ありがとう。エリカさん、そういうことですから。」

エ「本当ですか、皆さんありがとうございます。早速ですがサトシさん、こちらに着替えてくださいませんか。」

エリカはとある衣類をサトシに見せる。それを見たサトシは、

「サ、アノエリカサン、オツシャツテイルイミガワカラナイノデスガ、
。」。

急に片言になった。

エ「このジムでは挑戦者以外の男子は入れない決まりですの。だからこちらの衣装に着替えてくださらないと不自然に見えますわ。」

エリカがサトシに見せた衣装、それはフリフリのロータ系の衣装とロングヘアのカツラだった。

サ「。。。。。」

エリカの言葉に今度は絶句してしまった。

エ「サトシさんがこの衣装を着てくだされば自然な光景に見えますし、それにとってもお似合いだと思いますわ。」

エリカはサトシが挑戦した時のことを思い出していた。サトシには、男子禁制のこのジムに挑戦するためわざわざ女装して侵入したという経歴がある（この時のサトシは「サトコ」と呼ばれている）。ジムに自然になじむためのエリカなりの方法だが、若干楽しんでいられるように見えるのは気のせいだろうか。

サ「イヤイヤイヤ、お、俺は男ですよ!!! それよりも俺が挑戦者として入ってくればそれで大丈夫なんじゃないですか!？」

確かにサトシの考えた方法のほうが手っ取り早い。そこへ、

カ「エリカさん、サトシにはその衣装似合わないから失敗しますよ。」

サトシに救いの手が・・・

カ「サトシなら、フリフリのワンピースの方が似合いますよ。」

サ「カスミく（泣）」

来なかった……。さらに、

ハル「こっちの方が似合うかも・・・。」

ヒ「サトシはメイド服の方が似合うわ。」

仮のファッションショーが開催されようとしていた。さらに、アイリスやベルも加わりエスカレーターしていく。

サ「・・・・・・・・・・。」

サトシは身の危険を感じ、逃走の準備をしていた。

エ「どこに行くのですか・・・。」

あっさり見つかってしまった。

サ「あの申し訳ありませんが、今回の件俺はパスさせていただきます。」

サトシは断りを入れると、

ハル「えー、どうしてよー。」

カ「まさかアンタ、か弱い女子だけに痴漢の駆除をさせようって言うんじゃないでしょうね。」

ヒ「もしかしてサトシ、衣装を着るのがイヤなの？ でも、メイド服は難なく着こなしてたことあったよね。」

サ「あの時は人助けで仕方なかったから……。」

サトシの言葉を聞いたエリカは、

エ「それでは私達のこととは助けてくれないのですね……。」

エリカは今にも泣きそうな顔をする。

アイ「サトシ女の人を泣かせるなんて、まだまだ子供ね。」

ベ「サトシ君がそんな酷い人だったなんて思わなかったわ。」

アイリスとベルが冷やかし程度にサトシを責める。サトシはついに折れて……

サ「……分かりました。引き上げます。」

サトシは結局女物の衣装を着るはめになった。最初の数分間はサトシは女子達に着せ替え人形にされていた。

サ「俺、もうお嬢に行けない(泣)。」

エ「その時は、私が貰って差し上げますわ。」

サ「その気持ちだけで十分です。」

エ「あら、結構本気だったのですのに……。」

エリカはジムが火事になったときにポケモン達を自らの危険を顧みず助けたサトシに興味を示していた。サトシとエリカの様子に……

アコ(サトシ君って、鈍感なのね……。エリカさんの想いはいつ届くのやら。)

ハアアとため息をつく女子一名。

一方、

カ(まさかエリカさんまで……。)

ヒ(サトシって、いろんな女の人に好かれているんだね……。)

ベ(……でもサトシ君は誰も譲れないわ。)

各々、心中複雑な思いを持っていた。この先どうなることやら……

続
く

続・災難少年その名はサトシ（後書き）

そろそろ「主人公総受け物語」の新作を考えてたりします。

結局はこういう展開（前書き）

サトシの災難はまだまだ続きます。序盤がちょっとアレな描写なので、注意してお読みください。

結局はこういう展開

女子連中に着せ替え人形にされ疲れ果てたサトシは風呂でくつろいでいた。

サ「ふう〜、酷い目に遭った……………」

現在サトシはカツラを取っている。ちなみにあの事件以降、ジム周辺は警察総動員で警備態勢が敷かれている。

サ「しっかし、エリカさん達も大変だなあ。こんな目に遭うなんて」

サトシは被害に遭ったエリカ達を気遣っていた。するとそこへ、

ベ「サトシ君、一緒に入る。」

タオルを巻いたベルが乱入してきた。

サ「べ、ベル!? な、何言ってるんだ!? お、俺男だぞ。」

サトシは慌てながらベルに言う。

ベ「あら別にいいじゃない。減るものでもないし、それにここ男湯だっけきまつてる訳でもないしね。」

ここはジムの大浴場である。元々、女子のみのこのジムに男子が入ることなど想定していなかったので、男女別々という概念は存在しない。

サ「でも、現に俺がいるわけだし。やっぱ出るよ。」

サトシは浴室からでようとするが、

「ちょっと、ベル。抜け駆けは許さないわよ。」

数人の声が聞こえてきた。

カ「サトシ、どこに行くつもり？」

サ「あ、いやあ・・・そろそろ出ようかと思って。」

ハル「まだサトシが入ってからそんなに時間経ってないかも。」

サ（うつ！！！）

ハルカに凶星を突かれるサトシ。

ヒ「それとも、アタシ達と入るの嫌？」

アイ「皆からも聞いたけど、アタシ達以前一緒に入ったことあるじゃない。」

アイリスの言うとおり、水着着用ではあるものの温泉に女子達と入ったことは何度かある。ただ、その時はタケシや他の男子もいたときであり決してサトシとヒロインが2人きりで入ったわけではない。

サ「あの時はだって、必ず誰かがいたし。」

しどろもどろになりながら話すサトシ。サトシとて、男である。

アイ「もしかして照れてるの？　これ位でてるなんてホント子供ね。」

ちよつとズレた事を言うアイリス。

ヒ「やっぱり、アタシ達と入るの嫌なんだ……。」

ヒカリは泣きそうな顔でサトシを見つめる。

サ「あわわわ、分かったからもう少しいてやるから。」

ヒ「ホント！？　やったあー！」

ヒカリはサトシの言葉を聞くと、パアアと笑顔になる。

サ（嘘泣きかよ……。）

サトシはやられたと思った。その様子に他の女子達は、

ハル（やるわね、ヒカリ。）

カ（まさに策士ね。）

アイ（アタシだって負けてられないもん。）

べ（ふふふ、サトシ君ってモテモテね。でもサトシ君は私のものよ。）

闘争心を燃やしていた。

その後、長い間女子達と風呂に入ることになったサトシは、恥ずかしさのあまりほとんどしゃべらなかつたそうなの。

サ「いろんな意味でのぼせそうだ．．．。」

そんなサトシをよそに、女子達の機嫌は最高に良い。そんなこんなで夕食の時間なわけだが、そんな時にも波乱が起こる。

ハル「うわあ、おいしそう。」

アイ「ホントね。デント達も来ればよかったのね．．．。」

カ「でもいいんですか。こんなに豪華なのいただいて。」

並べられた3つの大きな台には豪華な懐石料理が並べられている。

エ「かまいませんわ。私が勝手なお願いをしたのですから、これ位のお返しは当然ですわ。」

サ「ホントに旨そうだな。」

サトシ一行は、一斉に食べ始める。サトシが食べているところへ．．．

ヒ「はい、サトシあ〜ん。」

ヒカリが料理をサトシの口元へ差し出す。

サ「ヒカリ、自分で食べられるからいいよ。」

サトシが断ると、

ヒ「・・・グス、アタシの食べてくれないんだ・・・。」

ヒカリが泣きそうな顔+上目遣いでサトシを見つめる。

サ「・・・う、分かったよ。」

ヒカリの顔を見て、なくなくヒカリに食べさせてもらうことにするサトシ。ちなみにサトシは、ヒカリの悲しそうな顔にやられていたわけではない。

ヒ「ホント!? じゃあ早速、あ〜ん。」

サ「あ〜ん。」

料理がヒカリによってサトシの口へと入って・・・

ハル「パクッ。」

来なかった。サトシの口に入るすんでのところ、ハルカが料理を横取りしたのだ。

ヒ「ちょっと、ハルカ！ せっかくいいところだったのに。」

ハル「ヒカリだけいい思いはさせないかも。」

すると今度はハルカがサトシに・・・

ハル「じゃあサトシ。あ〜ん。」

サ「え、ええ!?!」

サトシは困惑する。すると、

アイ「ちょっと、抜け駆けは許さないわよ。」

カ「ハルカもなにどさくさにまぎれてんのよ。」

べ「サトシ君が困ってるじゃない。」

女子達によるサトシ争奪戦勃発。原因は誰がサトシに「あ〜ん」をするかということである。サトシ本人は、なぜ女子達が言い合って

いるのか分かっていないようである。その様子にアコは、

アコ（サトシ君って、無自覚タラシだったのね・・・）

呆然と見ている。

サ「・・・。」

サトシは為す術なしのご様子である。というよりも女子達が出す雰囲気に出せない状況になっている。

エ「サトシさん。」

サ「はい!？」

サトシはエリカに急に声をかけられたので、上ずった声で返事をしてしまった。サトシが振り返った瞬間、

エ「はい。」

サ「ん!？」

エリカがサトシの口の中に料理を入れた。サトシ好きの女子ではなくエリカがサトシに「あくん」を成功させたのである。

サトシ好き女子全員「えーーーーー!!!!!!」

びっくりした様子で、声を上げる。

エ「これは引きつけてくださった私からのお礼ですわ。」

ニッコリしてエリカはサトシに言う。サトシは突然のことにキョトンとしている。サトシ好きの面々は顔を赤くしながら絶句している。

そんなこんなで食事が終わり、寝室への帰り間際にエリカが女子達に・・・

エ「（ボソツ）争っている間に私に取りますよ。」

その言葉にサトシ以外顔を赤くしたとか・・・。ちなみにエリカがサトシに好意を持っているかどうかは誰も知らない。

その後サトシが来るまでの寝室でも、誰がサトシの隣に寝るかどうかで口論になったそうなの・・・

ジムから少し離れた場所

？「きいいい！！！！　なんだよ、あんなリア充男のどこがいいんだよ。」

スリーパーの協力でジム内を覗いていた変態黒マント男はサトシを僻んでいた。

続く+後書きシヨ

結局はこういう展開(後書き)

天「よし更新したぞ。」

ハル「ちよつと何これ!? ヒカリばかりいい思いしてる気がするんだけど。」

カ「なんかサトヒカ寄りなのは気のせいかしら。」

天「それは勘弁してくれ。作者の俺がサトヒカ派だからだ。」

ヒ「えっ、そうなの!?!」

天「ヒカリ、いつの間に……。」

アイ「サトカス、サトハル、サトアイのファンからクレーム来ても知らないわよ。」

天「それを覚悟でやってんだ。前に行ったこと何度も言わせるな。」

アイ「何よそれ(怒)。」

ハル「諦めなさい。壊滅的な文才のせいなんだから。」

天(ハルカの野郎……(怒)) 本音

ヒ「サトヒカ派だったのはさっき聞いたけど、サトヒカの描写薄くない?」

天「あー、それは薄々気にしてたところだ。書けたら書くつもりだ。」

ヒ「ホント!? やったあー!!!」

カ「サトカス、サトハル、サトアイファン敵に回したわね。」

天「悪いサトカスの描写はヤストシさんに頼んでくれ・・・(汗)。俺の能力じゃ無理だ。」

カ「そうさせてもらっわ。さて、最後になりましたが・・・」

ハル・ヒ・アイ「今年もこの作品をよろしく願います。」

サトウちゃん(前書き)

恐らくいつもより薄い内容だと思います・・・

サトコちゃん

昨晚いろんなことがあったがそんなこんなで朝を迎えた。

サ「．．．ん、んん。もう朝か。」

まず最初に目覚めたのは珍しくサトシだった。

サ「さてそろそろ、ん？」

サトシが起きようとして体を右に傾けた時、なにか柔らかい感触を感じた。

ヒ「ん〜、ポツチャマバブルこうせん．．．。」

隣で寝ていたヒカリがサトシの布団に入りこんでいたのだ。しかもよく見れば、サトシの腕をしっかりと掴んでいる。

サ「．．．．．。」

サトシは呆然とするしかなかった。とりあえずこのままだと埒が明かないので、そつと腕をヒカリから離し、今度こそ体を起こそうと左へ体を傾けた。だが．．．

カ「サトシ〜。頭の上にコータスが乗っているよ。」

サ「カスミ．．．、一体どんな夢見てんだ．．．。」

カスミも寝言を言いながらサトシの腕をしっかりと掴んでいた。カス

ミの寝言に若干引きつつも、ヒカリの時同様、ゆっくりと腕をカスミから離れた。

それにしても、コータスが頭の上に乗っているって一体どんな状況
．．．（汗）

サトシが起きてしばらくすると、全員起きた。ちなみになぜサトシ一行全員が同じ部屋で寝ていたのかというツッコミには一切お答えできないのであしからず。

サ「．．．、エリカさんやっぱり着なきや駄目ですか。」

朝食を食べ終え、サトシはエリカに尋ねる。朝食時にも昨夜の夕食時と同じ光景が繰り広げられたというのはまた別の話．．．。

エ「ええ、そうして下さらないと不自然ですから。」

エリカはニッコリとしてサトシに言う。

サ「．．．分かりました。」

サトシは諦めたようにハアアとため息をつき、カツラをつけフリフ

リのドレスを着た。

ヒ「サトシ、可愛い／＼／」

ハル「思わず見とれちゃうかも／＼／」

カ「なんか嫉妬しちゃうわね。」

アイ「写真とっておきたい／＼／」

ベ「サトシ君、生まれてくる性別間違えたんじゃない？」

それぞれ男子に言うには似つかわしくない言葉をサトシに浴びせる女子連中。特にベルのは効果抜群だった。

サ「・・・(泣)。」

サトシは心底傷ついた。そして、覗き魔が捕まるまで、どうか挑戦者が来ないように願うのであった。しかし、その願いは後に空しく消え去るのである。

ガラン（ジムの出入り口のドアが開く音）

？「すみません、ジム戦を申し込みに来ました。あなたがリーダーのエリカさんですね。」

挑戦者が来てしまった。リーダーのエリカとアコが対応に入る。

エ「ええ、そうですが。ジム戦の申し入れは受けましょう。けれども、対戦相手は私ではなく別の人にしてもらうことになりましたが、それでもよろしいでしょうか。」

？「構いません。僕もカントーのジムリーダーがどんな戦いをするのか確かめにイッシュユから来たんです。」

エ「まあ、遠いところからはるばると・・・、何故カントーに？」

？「僕のライバルトレーナーがカントー出身なもので。」

エ「まあそれで！ では他のジムも？」

？「もちろんです。トキワジムは諸事情で入れないみたいですが、その他のジムも回る予定です。」

エ「ぜひ頑張ってください、カントーのジムも強者ぞろいですよ。話がだいぶ反れましたが、ジム線は今すぐでも大丈夫かしら？」

？「大丈夫です。」

エ「それじゃあ、対戦相手の子をすぐ呼ぶからフィールドで待機し

ていてください。」

？「はい、分かりました。」

エリカとアコは挑戦者の対戦相手を呼びに行った。もうお分かりだとは思いますが、その対戦相手とはサトシのことである。

サ「はあ、こんなにバトルしたくないって思ったの初めてだ。」

サトシはいいやバトルフィールドへと向かう。

エ「お分かりだとは思いますが、このジムは草タイプポケモンのジムです。」

サ「その点に関してはご心配なく。ちゃんと準備してますから。」

サトシは一体、バトルでどの草ポケモンを出すのか。そうこうしているうちに、バトルフィールドに到着する。

サ「挑戦者って、誰だろう？ ん、アイツは！？」

バトルフィールドに入る前にふと見えた挑戦者にサトシは見覚えがあった。さて、その挑戦者とは！？

続く

サトコちゃん(後書き)

次回、挑戦者の正体が明らかになり、そして少しキャラが壊れます。

ヒント：「そんなの、基本だろ！」

サトコVS挑戦者(前書き)

予告どおり挑戦者の正体を明かします。久々のポケモン視点もあります。

サトコVS挑戦者

サトシが見た挑戦者の正体とは……

サ「げっ、シューティ！？」

挑戦者とはサトシのイッシュ地方でのライバル、シューティだっ
た。

サ「あのエリカさん、やっぱり止めときます。」

シューティを見た途端、後ずさりを始めるサトシ。

エ「ちょっとお待ちになって、あのお方をだいぶ待たせているんだ
から……。」

エリカは慌ててサトシを引きとめる。一方、バトルフィールドでは、
アコ「もう何やってんのよ。(ちょっと待っててね、あの子結構
恥ずかしがり屋だから。」

痺れを切らしたアコがサトシを引きずりだそうとサトシ達のところ
へ向かう。

シュー「……。」

シューティはキョトンとした顔で、走っていくアコを見た。

そして、

エ「お待たせしてすみません。こちらサトコと言います。」

サ「。。。。」

エリカとアコの説得に折れてサトシは出てきた。シューティは、

シュー（か、可愛い・・・／＼／＼）

少し顔を赤らめながら、サトシもといサトコの第一印象を率直に思った。どうやら、一目惚れをしたようだ。相手が男しかも自分のライバルであることも知らずに・・・

サ「あ、あの．．．。」

シュー「あ、ごめん．．．。（なんだあの子、凄く可愛い。あつ、いかんいかん、バトルの時は集中。トレーナーの基本じゃないか。）」

シューティ は平静を装うとする。ちなみに、サトコの容姿は本物の女子が羨むほどの可愛さを持っている。

アコ「使用ポケモンは3体。このバトルは特別ルールとして交代は両者に認められます。」

アコによりバトルルールの説明がなされる。そして、両者ともにボールを出す。

シュー「行け、ジャローダ！」

シューティ はジャローダを繰り出した。

一応、ジャローダに最終進化しているという設定にします。

サ「私のポケモンはこれです。出てきて。」

サトコは慣れない口調で

ポケモンを出す。口調の方は女子達の提案による。

ツタージャ「タージャ。」

サトコは、ツタージャを繰り出した。ツタージャはサトコを見るなり、

ツタージャ「タジャ!？」

キョトンとした。まあ、当然の反応だ。一方のシューティのジャローダは以前戦ったことがあるツタージャが出てきたので、サトコの正体がサトシであることに気付いた。

ここからツタージャとジャローダの視点

ジャローダ「おい、お前のトレーナーあのサトシって奴じゃないのか？ てかなんで、あんな格好なんだ。」

ツタージャ「知らないわよ。出てきたとき、えっ誰コイツって思ったわ。でも、あの電気ネズミがいるからああサトシなんだなって気付いたけど……。」

ジャローダ「そうか、お前も大変だな……。」

ジャローダはツタージャに同情するようにつぶやいた。電気ネズミもといピカチュウはエリカのそばにいる。

ツタージャとジャローダの視点終了

シユー「それじゃあ僕から行くよ。ジャローダ、リーフストーム。」

ジャローダはリーフストームを指示する。

サ「ツタージャ、かわして。そして、メロメロ。」

サトシはツタージャのお家芸(?)とも言えるメロメロを指示する。

ツタージャ「タージャ。」

ツタージャはジャローダのリーフストームをかわし、メロメロをジャローダに向ける。それがジャローダに当たり、ジャローダはメロメロ状態になる。

シユー「ジャローダ!?!」

シユーティは驚愕する。が、シユーティはここであることを思い出した。

シユー「君のツタージャもメロメロが使えたとはビックリだよ。」

その言葉にサトシは、

サ(しまった...。ツタージャは普通メロメロ覚えないんだっただけ)

サトシの言つとおり、ツタージャは普通にレベルアップしてもメロメロを覚えることはない。ちなみにゲームでは、技マシンを使えば覚えさせることができる。

シユー「僕の知り合いにもメロメロが使えるツター ज्याを持つている奴がいてね。いつも、苦戦させられていたんだ。」

シユー「ティーは、サトシのことを思い出しサトコに言う。どうやらサトシがサトコだということには気づいていないようだ。」

サ「ふう、ばれてないようだな。」

サトコは安堵した。そして、ツター ज्याに次の指示を出す。

サ「ツター ज्या、エナジーボール。」

ジャローダがメロメロ状態のため何もできず、ツター ज्याのエナジーボールがクリーンヒット。

サ「つづけて、リーフブレード。」

ツター ज्याはジャローダを滅多打ちにする。余談だがジャローダがジャノビーの時に、サトシのツター ज्याとバトルした際、今回と同じくメロメロ状態にされ、ツター ज्याのつるのムチで滅多打ちにされるという見方によってはSM行為に成りかねない光景を生み出した。

ジャローダ「ジャロー．．．。」

アコ「ジャローダ、戦闘不能。ツター ज्याの勝ち。」

ジャローダが倒され、シユー「ティーは次のポケモンを出そうとする。」

シユー「君のツター ज्या強いね。最終進化形態のジャローダを倒すとは。」

サ「ええ、バトルは進化したからって勝てるものではないですよ。」

サトコはニッコリとしてシューティに言った。

シュー（やっぱり、可愛い／＼）

バトルに集中できていないシューティ。さっきの『バトルに集中するのが、トレーナーの基本』はどこに行ったのやら・・・

シュー「次のポケモンはこれだ。いけ、ブルンゲル。」

シューティが選んだポケモンは、プルリルの進化系ブルンゲルだった。

サ（ブルンゲルか・・・。特性の「のろわれボディ」は厄介だな。）

サトコの言うとおり、ブルンゲルは「のろわれボディ」を持っている。相手から技を受けると一定確率でかなしばり状態にする特性である。プルリルのときにも、ツタージャがこの特性を食らって敗れたことがある。

サ「戻って、ツタージャ。次のポケモンはこれです。」

一方的だったとはいえ、疲れがあるツタージャを戻すサトコ。

シュー「ポケモンの交代はトレーナーの基本だからね。いい判断だよ。」

サ「出てきなさい、ベイリーフ。」

サトシはベイリーフを繰り出した。

ベイリーフ『えっ、誰この女!? あそこにあの電気ネズミがいるってことは、サトシ!? でもなんであんな格好に……。』

ベイリーフもツタージャと同じ反応を見せた。それにしても、ツタージャといいベイリーフといいピカチュウを電気ネズミ呼ばわりするとは……

シュー「ベイリーフか……。イッシュ地方にはいないポケモンだね。だけど、そう簡単には負けないよ。」

思ったより長くなってしまったので、バトル終了まで割愛します。

(オイツ!)

バトルは、序盤はサトコ優勢だったものの、シューティーが巻き返して3対2で勝利をおさめた。

サ「シューティーさん、強いですね。」

サトシは、シューティーの強さを改めて実感する。

シュー「やあ、君のバトルスタイルだってなかなかだよ。久々にこんなバトルをしたなって思ったよ。」

シューティーは対サトシの攻略法を参考にして今回を戦っていたりする。サトコのバトルスタイルは、サトシのバトルスタイルに酷似していたのでなんとか勝てたようである。というのも、サトシ本人なのだが……

サ「でも悔しいです。今度もう一度バトルしてくれませんか。」

ニッコリとしてシューティーの手を握るサトコ。シューティーはこれに完全にやられたようだ。

シュー「も、もちろんだよ!!! 再バトルはト、トレーナーの基本だからね。」

顔を赤くしてあわてながら言うシューティー。その様子にサトシは何故そこまであわてるのか分かっていないようだ。

一方、テレビでバトルを観ていた女子達は、

カ「サトシも相変わらずのバトルをするね。」

アイ「でも、挑戦者がシューティーだったことには驚いたわ。」

ハル「アイリス、あの子知ってるの？」

アイ「うん、最初の頃はサトシの事馬鹿にしてたけど、バトルを重ねるうちに実力を認めるようになって、ライバル同士になったんだよ。」

ヒ「へえ、なんかシンジみたいな性格ね。」

シンジとは、サトシがシンオウ地方を旅していたときに出会ったライバルトレーナーである。出会って最初の頃は、兄のレイジのこともありサトシを見下していたが、徐々に打ち解け合って今ではお互い実力を認めている。

ベ「サトシ君って、いろんな人を引きつけてるのね。」

ヒ「うん、でもこれはちょっと。。。」

ヒカリは引きながら言う。それもそうだ。知らないとはいえ、シュ
ーティ は今男に一目惚れをしている状況だ。つまりホ○である。

カ「無理もないわね、サトシあんなに可愛いんだもの。」

ハル「でもちよつと嫉妬しちゃうかも。」

ベ「まあバトルも終わったみたいだし、これからサトシ君で遊びま
しよ。」

ベルの発言に一同驚いた。一歩間違えればヤバい展開になる発言だ。

アイ「ベル、読者が誤解受けるからそういう発言はやめようよ．．．
」。

といつつも、楽しみにしているアイリス。

その後、サトシは昨日同様女子軍団によって着せ替え人形にさせら
れたとさ．．．

？「あのジムにいる子、結構可愛かったな．．．。」

見覚えのある緑髪の少年が呟いていた。

続いて後書きシヨ―

サトコVS挑戦者（後書き）

天「よし、今日はこれにて終了!」

ヒ「ねえ、アンタボーイズ・ラブが書きたいの?」

天「んなわけないだろ。今回はそれっぽくなってしまったけど、最終的にはちゃんちゃんな感じになるから...」

ヒ「つまりギャグで締めるってわけね。」

カ「それにしても、最後の最後の少年は誰? あれもサトコに一目惚れしてたみたいけど。」

天「それは次回正体を明かすから。ロゼリア使いの...あ。」

ハル「私分かったかも...」

天「どうやら、ハルカは分かったようだな。」

他の女子「????」

ベ「ところでどうするの、今後の展開は?」

ヒ「そうそう、以前アタシとカスミとハルカで他のサトシが好きな女の子って言うてたじゃない。その子たちって誰なのよ。」

天「まあそうそう焦るなって。アニメ本編や映画のキャラから大量投入する予定だから。」

アイ「もうなんだかメチャクチャね。」

天「まあな。サトシ総受けもしくは総モテで進めるつもりだったから。それに、近々「主人公総受け」の新作も出そうかと思ってるし。」

ヒ「大変ね、ってサトヒカの作品はどうなったのよ!!!」

天「それは、DPのサイドストーリー後になる。ゆっくり作りたいたいからな。」

ヒ「そう、じゃあ気長に待ってるわ。」

天「最後になりましたが。」

女子全員「「「「「こんな駄文でよろしければ感想お願いします。」

「「「「

もしかしてサトシュー!?!? (前書き)

シューティーがホ○に・・・

そしてホ○第2号が登場!?!?

もしかしてサトシユー!?

サトコは現在ジムの外でポケモン達とトレーニングをしている。ちなみにポケモン達とは、ツタージャやベイリーフの他、フシギダネ、ジユカイン、ドダイトスの草ポケモンのことである。ポケモン達はサトシの意外な格好に戸惑ってはいたものの、徐々に慣れてきている。

サトコがトレーニングをしているところへ、

シユー「やあ、元気かい。」

シユーティ が現れた。

サ「あら、シユーティ さん。」

シユーティ のことは基本呼び捨てだが、今は女子を演じるためわざとさん付けで呼んでいる。

サ「シユーティ さん、どうしてここに?」

シユー「ちよつと息抜きに散歩しててね。今トレーニング中かい?」

サ「ええ、昨日のでいつまでもくよくよしてられませんから。」

シユー「まあ、敗戦から学ぶこととトレーニングは基本中の基本だからね。」

サ「よろしかったら、シユーティさんもどうですか。丁度、バトルの相手を探していたところですよ。」

シユー「そ、そうかい。じゃあご希望にお応えして相手するよ。」

シユーティ はサトコの要望を快く承諾した。

シユー（こうして、バトルで親交を深めてやがては……、
って何考えてんだ僕は！！！！）

少し危ない方向に向かっていているシユーティ。

サ「それでは早速……。」

サトシとシユーティ が話しているところへ、

「君も毎回同じ相手だとつまらないだろ。僕が相手してあげるよ。」

どこからか声がした。サトコとシユーティ は声のする方へ顔を向けた。

サ「シユ、シユウ!？」

サトシ達に声をかけた少年、それはハルカのライバルでありポケモンコーディネーターのシユウだった。

シユウ「おや、君は僕のことを知っているのかい？」

サトシは思わずシユウを呼び捨てしてしまったので、しまったという顔をした。

サ「え、ええ、テレビであなたの活躍は見てますので。」

シユウ「そうか、なにかいきなり呼び捨てにするなんて君とは運命を感じるよ。」

ナルシスト発言をしながら、お馴染みのバラをサトコに差し出すシユウ。

サ「は、はあ．．．。」

サトコは顔を引きつらせた。正直、男から花を貰っても嬉しいわけではない。

シユウ「シユウ君だっけ。今時、女の子にバラを渡すとは、君はもう一度アプローチの仕方の基本を学びなおした方がいいじゃないか。」

シユウ「シユウはシユウを睨みつけながら言う。」

シユウ「おや言うてくれるね。いつまでもまどろっこしいことをしてる君には言われたくないね。」

シユウもシユウ「シユウ」を睨みつけながら言い返す。

サ「あ、あの．．．。」

サトコはただならぬ雰囲気になんとも耐え切れず、2人に声をかける。しかし、2人ともサトコの声は聞こえてないようだ。と、そこへハルカとアイリスが近づいてきた。

アイ「もうなんなん．．．って、シューティ？　で、もう一人は？」

ハル「シ、シュウ!？」

ハルカは自分のライバルの登場に驚いていた。シュウを知らないアイリスは？マークを頭に浮かべている。ハルカはアイリスにシュウの一通りの紹介をした後、サトシ達の行末をこっそり見ることにした。

シュウ「ところで君、どうしてその子のこと知ってるんだい？」

シュー「昨日ここでバトルしたんだ。それで今朝、散歩してたらまたま通りかかってね。ちなみに、僕の名前はシューティだ。」

シュウ「シューティ君か．．．。どうだい、ここはあの子を賭けてバトルするのはどうだい？」

シユウはサトコの心情を無視して、勝手にシユーターにバトルを申し込む。

シユー「面白いね、買った方がこの子と一日中一緒に過ごす。それでもいいかい？」

シユーターはシユウの話に乗ったのだ。そして、サトコに聞く。

サ「え、ええ。構いません（2人とも、俺の気持ちは無視かよ．．．）。」

サトコはなくなりました。というか、2人のただならぬオーラに耐え切れず仕方なくだが．．．

一部始終を静観していた女子2人は．．．

ハル・アイ「．．．．．ぶぶ！！！！」

なぜか笑いのツボを押してしまったようだ。

ハル「だ、駄目よ。アイリス笑っちゃ。」

アイ「だって．．．。」

どうやらシュウとシューティーの今は女子の恰好だが男子を取りあう姿に笑ってしまったようだ。

シュウ「盗み聞きとは趣味が悪いね、ハルカ君。」

シュー「それに、なぜ笑うんだ？」

ハルカとアイリスの笑い声が聞こえたらしい。

ハル・アイ「げっ!?!」

見つかった2人はビクツとした。

シュウ「まあいい、ところでジムは開いているかい？」

ハル「え、あーエリカさんに聞けば開けてもらえるけど。」

ハルカはそう言い、アイリスとともにエリカにバトルフィールドの使用許可を求めた。エリカは快諾した。理由は面白そうだからそうだ。

こうして、シューティーとシュウによるサトコ争奪戦の火蓋が切つて落とされたのだった。

サ、．．．もう、帰りたい(T|T)。「

っづく

もしかしてサトシユー!?! (後書き)

次回、一応一区切りつけます。例のごとく、話の展開が早いです。

シューティールVSシュウ(前書き)

なんかネタが思いつかなくなったので、「変態出現編」は終わらせます。

サトコの正体を知ったシュウとシューティールの反応やいかに・・・

シューティールVSシュー

ひよんなことからポケモンバトルをすることになったシューティールとシュー。

サ「……………」

もうなんかどうでもよくなった様子のサトコ。

シュー「どちらがあの子にふさわしいかここで決着をつけようではないか。」

シュー「望むところだね。君に僕の方があの子にふさわしいってことを証明してあげるよ。」

2人とも戦闘モード突入の様子。その様子に、

アイ「…なんか変なことになっちゃったわね。」

ハル「…でも面白そうかも。」

先程の一部始終を目撃していたアイリスとハルカはこう言った。ちなみに他の女子もアイリスとハルカからこのことを聞き、バトルフィールドに集まってきたのだった。

シュー（なんであの子達がいるのかは分からないけど、まあいい…今はバトルに集中だ。）

シュー（騒がしくなってきたけど、アイツには負けられない。）

女子達が集まってきたことに疑問を持ちつつ、ポケモンを準備する。

ドカーーン

突然、爆発音がした。

ヒ「なに、今の!？」

ヒカリが叫んでいると・・・

?「ふふふ、ハハハ!!!!!!!」

高笑いする声が聞こえた。

シュー「だ、誰だ!？」

シューティーが声のする方へ叫ぶ。

しっかりと後ろから抱きついた。

シュー「お前何をしている！！！」

シューティーは怒り心頭に言った。

シュー「その子から離れる。」

シューも怒り混じりに言う。

？「君たちなんかよりも、ハンサムな僕の方がこの子にふさわしいと思うけどね．．．。」

男は息をハアハアさせながらサトコの首筋を触る。当然、サトコは気持ち悪そうにしている。

カ「な、何してんのよアンタ！！！！」

ヒ「アタシ達のサトコじゃなかったサトコに手を出さないで！！！！」

アイ「さっさと離れなさいよ！！！！」

ヒカリによって正体がばれそうになったが、女子達も怒り心頭の「様子。」

？「へえ、君サトコっていつのかい。可愛い名前だねえ．．．。」

スリーパー「マスター。こんな連中、さっさと蹴散らして退散しましょう。」

スリーパーが男に言った。スリーパーがしゃべったことに全員驚いていたとか・・・

？「そうだね。」

一方のサトコは、もう我慢の限界だった。そして・・・

ブチッ

サ「あああああ!!! もっちゃってられるかー!!!」

怒り狂ったサトコは男を突き飛ばす。男はスリーパーもろとも地面に叩きつけられた。

サ「エリカさん、もう無理です!!!」

サトコはそう言い、カツラを取る。その光景に男子一同、

シュー・シュー・? 「えーーーーー!!!」

驚きながら叫んだ。シューとシューティーは取り合っていた少女が実は面識がある少年であったことにショックを受けているようである。

サ「.....(怒)。」

今まで我慢していた分、かなりお怒りのサトシ。いつ超サ○ヤ人になってもおかしくない状態になっている。

ヒ「.....サトシ、なんか怒ってない?」

ハル「うん、あんなサトシ見たことない.....。」

エ「少々やり過ぎたようですね．．．。」

女子一同、サトシの表情にドン引きしている。

サ「ピカチュウ、ボルテッカー。」

ピ「ピカ!?」

ピカチュウは今まで見たことのない主人の姿に心底驚いていたが、指示通り黒マント男に向かってボルテッカーをする。

?・スリーパー「えっ、ちょっとまつて．．．ギャアアアア!!
!!!!!!!」

黒マント男は変態スリーパー諸共、星になった。

女子全員「．．．．．。」

シュー・シュウ「．．．．．。」

その場にいた人間が今見た光景に絶句した。シューティーとシュウに至ってはあ○たのジョーみたく真っ白になっている。

その日、痴漢騒動は突如消え去り、タマムシに平和が戻った。翌日、マサラに戻ったサトシは一日中誰とも話さなかったそうなの……

終わり + 後書きシヨ

ハル「まあ分かってたけど開き直ったわね．．．。」

天「俺からも一つ、お前らシュウとシューティー、名前が所々カブってないか。」 本音

アイ「あつ、それアタシも思った。」

ベ「おまけにややこしいしね。」

シュウ「大きなお世話だ。」

シュー「僕達にどうしろというのだ。」

天「まあそう言うと思って、俺がお前達の新しい名前を考えてきた。」

天の河の案

シュウ ○田大作、○価学会、○明党

シューティー ○川隆法、○福の科学、○福実現党

シュウ・シューティー「却下!!!!!!!!!!!!!!」

天「ええー、いい思い付きだったんだけどなあ。まあ俺の嫌いなものだけ。」

ヒ「思い付きで嫌いって．．．。」

アイ「アンタの脳内疑うわ。」

カ「絶対問題あるでしょ、この案。」

シュウ「僕たちは改名する気なんて全くないぞ。」

シュー「そうだ、君の思いつきに付き合ってる暇はない。」

天「うるせえな、改名はしないがお前達文句言ったから、しばらくこの作品に出さないぞ。」

シュウ・シュー「酷い．．．（T|T）。」

ベ「著作権限の濫用ね．．．。」

天「ということでシュウとシューティーの懲罰も決まったところで、
こんなのでよろしければ

「．．．」

女子全員「感想よろしくお願いします。」

マサトの履歴<修正版>(前書き)

修正しました。

AK-48Kさん、ご指摘ありがとうございました。

マサトの憂鬱<修正版>

ここはハウエン地方・トウカシティ。ハルカの出身地でもある。

マサ「はあ、お姉ちゃん大丈夫かなあ。」

マサトは、先日家を飛び出すようにサトシのもとへ向かった姉・ハルカのことを気にかけていた。

マサ「一応着いたって連絡はあったけど、サトシにだいぶ迷惑かけてるんだろうな……。」

マサトは姉・ハルカの心配ばかりぼやいているが、マサト自身サトシに久々に会いたいという気持ちはある。と、そこへ……

？「マサト君、遊びに来たよ。」

外からマサトを呼ぶ声が聞こえた。だが、マサトは声を聞いた途端、

マサ「うう、来た……。」

顔が一瞬のうちに青ざめていた。一方、玄関の方では、

ミツコ「あら、こんにちは。マサトね、今呼んでくるから。」

？「お願いします。ママさん。」

ハルカとマサトの母・ミツコは、突然訪問してきた少女に言う。そして、マサトがいる2階へと上がっていく。

ミツコ「マサト、リュウカちゃん来てるわよ。」

どうやら来た少女はリュウカというそうだ。

マサ「いないって言うて。」

ミツコ「あらら、マサト昔からあの子苦手だもんね。あの子いい子なのに。」

ミツコは居留守を使おうとするマサトに言う。リュウカはマサトとは幼馴染であるが、マサトはこのリュウカを苦手としている。

ミツコ「あの子がマサトのお嫁さんなら大歓迎なのにね・・・。」

とミツコが爆弾発言をしながら降りていったが、マサトは聞かなかったことにした。

ミツコ「ごめんね、マサト今いないの。」

リュ「そうですか、突然お邪魔してすみませんでした。」

ミツコ「いいのよ、全然。これからもマサトと仲良くしてあげてね。」

「

リュウ「もちろんですとも、こちらこそよろしくお願いします。」

リュウカはハルカとマサトの家を後にした。

マサ「ふう．．．、これでもう大丈夫。ん、あんなところにムツクルが、君どうしたの？」

マサトは窓の近くにいたムツクルに気付き、窓を開けた瞬間．．．

リュウ「マサト君、見つけた。」

マサ「リュウ、リュウカちゃん!？」

下を見ると、さっき行ったはずのリュウカがいた。そう、このムツクルはリュウカによって仕組まれたポケモンだ。マサトの居留守は見破られていたようだ。

マサ「．．．．．。」

マサトはこんな単純な手に引っかけた自分を悔やんだ。そして、
なくなくリュウカを家に入れることにした。

リュウ「ねえ、さっきどうして居留守使ったの？」

リュウカは黒オーラを出しながら、マサトに尋ねる。

マサ「いや、それは・・・あ、そうだ。どうして来たの？」

マサトは話をそらすようにリュウカに尋ねた。もちろん、リュウカに会いたくなかったなどといえば命がいくつあっても足りない。

リュウ（話そらしたわね・・・）あ、うん。そういえばマサト君のお姉さんは今カントーにいるんだよね？」

マサ「え、うん。」

リュウ「私一度カントーに行ってみたかったの。それでね、マサト君が一度カントーに行ったことがあるって聞いたからその・・・／＼」

リュウカは急に体をもじもじさせ顔を赤らめながら、マサトに言う。実はリュウカはマサトに好意を抱いている。だが、マサトは苦手意識からかそれに気付いていない。

ミツコ「もしかしてうちのマサトと一緒に行きたいの？」

ミツコがリュウカに助け船を出す。

リュウ「え、あ、はい。」

リュウカは答えた。

マサ「え？」

マサトはキョトンとした。

ミツコ「行ってあげなさいよ。マサトもサトシ君達に会いたがってたじゃない。」

マサ「それはそうだけど・・・。」

リュ「もしかして私と行くの嫌？」

リュウカは泣きそうな顔でマサトを見つめる。その様子にマサトは慌てふためく。

センリ「一緒に行つてあげろよ。女の子一人で旅をさせるわけにはいかないだろ。」

ハルカとマサトの父・センリが言う。ちなみにセンリは、トウカシティジムのジムリーダーをしている。

マサ「・・・うん、分かったよ。」

マサトは諦めたように承諾した。

リュ「ホント！？ やったあー！！！！」

リュウカはたいそう喜んだ。

ミツコ「それじゃあ、さっそく旅の準備をして・・・と言いたいと

ころだけど、もう今日は暗くなるからリュウカちゃん、もう今日は帰りなさい。」

リュウ「はい、分かりました。それでは、また明日。」

リュウカは今度こそ、帰って行った。

マサ「はあ．．．。」

センリ「どうしたマサト、ため息なんかついて。」

マサ「いやあ、これから大変だろうなって。」

ミツコ「いいじゃない別に。それともリュウカちゃんのこと嫌いな
の?。」

マサ「そうじゃないけど、僕あの子苦手なんだよなあ。」

マサトはそう言いながら、再びため息をつく。その様子にミツコと
センリは苦笑した。

ミツコ「さあ、明日から旅に出るんだから準備しておきなさい。あ
っ、それとハルカ達にもマサトが来るって連絡しなきゃ。」

そして翌日、マサトとリュウカはカントーへと旅立っていった。サトシのいるマサラタウンへ到着すると、皆から歓迎されたのであった。

つづいて後書き

マサトの事録 < 修正版 > (後書き)

今後、リュウカがどう展開に影響するか・・・

< 特別編 > ヒカリの幼少期（前書き）

天の河のりハビリ作品です。ですので、いつも以上に内容が薄い
す。

ヒカリの幼少期を書きました。サトシは名前しか出てきません。

<特別編> ヒカリの幼少期

ここはシンオウ地方のとある幼稚園・・・

ケンゴ「ピカリ〜」

ヒ「も〜、ケンゴ。ピカリはNGって言ったでしょ。ケンゴなんか大嫌い。」

ケンゴ「アハハハハ。」

こんな日常が繰り返り広げられていた。

ある日、ヒカリ達が通う幼稚園にTV局が来た。

リポーター「ねえ、あなたはどんなポケモンが好き？」

ヒ「え、えつと・・・。」

ケンゴ「・・・。」

リポーターはヒカリに質問する。ケンゴは少し離れて傍観している。いつもからかっではいるものの、ヒカリに好意を抱いている。

ヒ「・・・ポ、ポツチャマが好きです。」

ヒカリは答えた。

リポーター「へえ、ポツチャマが好きなんだ。」

ヒ「あつ、でもサトシの方がもっと好きです。」

その場が一瞬凍りついた。

ケンゴ「・・・サトシって誰だあああああ！……！！……！！」

ケンゴは悲鳴をあげた。

ヒカリは自宅へ帰るとTVを見ていたアヤコが早速聞いてみた。

アヤコ「ねえ、ヒカリ。サトシ君って誰？」

ヒ「ん、分かんない。なんか頭に浮かんだの。」

アヤコ「……………」

わが娘の将来が少し不安になったアヤコママであった。

そして現在…………

ケンゴ「……………」

アヤコ「……………」

2人「まさかな(ね)。」

終わり＋元ネタの説明込みの後書きシヨ！

<特別編> ヒカリの幼少期（後書き）

カ「・・・何これ。」

ハル「短いうえに内容薄過ぎ・・・。」

天「それは気にするな。前書きにも書いたがりハビリ作品だから、そんなに内容には期待してない。」

アイ「随分と他人事みたいに言うわね。」

天「実はヒカリの『ポツチャマが好きです。』のクダリが書きたかっただけだったりする。」

ハル「そういえばあれってどこかで聞いた気がするけど。」

天「元ネタは某引越センターの『キリンさんが好きです。でも象さんの方がもつと好きです。』のセリフだ。」

カ「とうとうCMネタまで入れてきたわね。」

天「とうとうって・・・まあいいや。こんな駄文ですが・・・。」

カ・ハル・アイ「・・・感想よろしくお願いします。」

ある日の朝・・・（前書き）

駄文なのに以外にもアクセス数が多いこの作品。作者天の河も感謝の気持ちでいっぱいです。

今回はヒカリがまた・・・

ある日の朝・・・

ある朝のサトシ宅

サ「……………」

サトシは珍しく早起きだった。というのも、ある違和感を感じたからだ。

ヒ「…………ん、サトシ。」

ヒカリが自分のベッドに潜り込んで寝ていたのだ。なぜこーなったのかは…………

つい数時間前の深夜…………

ヒ「んー。」

ヒカリが寝ぼけ眼でトイレを済ませ、水を一杯飲んでいた。

ヒ「完全に目が覚めちゃったわね…………。」

ヒカリは途方に暮れていた。すると、ヒカリの脳内ではある悪知え
．．もとい発想が浮かぶ。

ヒ「そうだ、今全員寝てる訳だしその隙にサトシの部屋に潜り込も
うかしら。そしてサトシに抱きついて．．ふふふ。」

ヒカリは不敵な笑みを浮かべとんでもない妄想を膨らませながら、
サトシのいる2階へと足を運ばせる。

ヒ「あー、なんだかドキドキする．．。」

ヒカリはサトシの部屋のドアノブに手をかけ、そつとドアを開けて
中へと入る。

ヒ「サトシ、寝てるわね。ふふふ、サトシの寝顔可愛い。」

ヒカリはサトシを起こさないように顔をついたりする。そして．．

ヒ「サトシ．．。」

布団の中へと潜り込み、サトシの顔に触れるだけのキスをした後、
眠りについた。

そして、現在に至る。

サ「どうしよう・・・。」

鈍感+寝ていたサトシは、当然そんなことがあったとは知るわけがない。ただ、起きたら女の子と一緒に寝ていたことに関しては多少意識があるのか、顔が赤かった。

サ「ヒカリ、そろそろ起きてくれ。」

さすがにこのままではいろいろとまずいので、ヒカリを起すことにした。

ヒ「ん、ん。へっ、サトシー？（あっ、そうだ昨日サトシの部屋で寝てたんだっけ。）」

ヒカリは昨日自分がしたことを思い出す。恥ずかしくなったのか、少し顔を赤らめた。

サ「なあ、そろそろ下に降りよっぜ。」

ヒ「う、うん。」

サトシが部屋を出ようとして立ち上がろうとした時、

ヒ「サトシー！」

サ「ん、なにヒカリ？」

サトシはヒカリに呼ばれたので後ろを振り向くと・・・

チュッ

ヒカリはサトシの唇にキスをした。いわゆる「おはよつのキス」である。丁度その時、

ハル「サトシ、ヒカリ見なk・・・。」

バッドタイミングでハルカが部屋に入ってきた。すると、

アイ「ちょっと、どうしたn・・・。」

アイリスも部屋に入ってきた。

ヒ「きゃっ!!!!」

サ「うわあっ!!!!」

サトシとヒカリは突然入ってきた2人に驚き、お互いに離れた。

ハル「サトシ、ヒカリ。これはどういふことか説明してほしいかも
。。。」

ハルカは怒り交じりにサトシとヒカリに言う。

アイ「ホントどういふことなの。。。」

アイリスも続いて、サトシとヒカリを責めるように言う。

サ「お、俺にもさっぱり。。。」

サトシはいきなりヒカリにキスをされたので、何が何だか分からない。
い。

ハル・アイ「ちゃんと答えて!!」

ハルカとアイリスは息をぴったり合わせながらサトシに言った。

サ「ひいひい!!!!」

サトシは2人の鬼のような形相に恐怖を感じた。そこへヒカリが、

ヒ「ちょっと2人とも、サトシがかわいそうじゃない!!!」

ハル「ヒカりはだまって!!!」

アイ「そうよ、どつりで今朝部屋にいないと思っただらここにいたのね!!!」

ハルカとアイリスはヒカリの言葉を遮るように言った。

ヒ「もしかして2人とも、サトシにキスしたアタシに妬いてるの?」

ヒカりは自慢混じりに興奮状態の2人に言う。

ハル「べ、別にそんなんじゃないわよ!!!」

アイ「そんなことで調子に乗らないでほしいわ。ホント子供ね!!!」

ハルカとアイリスは顔を赤くしながら答える。

ヒ「アイリスだって子供じゃない。それに妬いてるって2人とも顔に出てるわよ。」

ハル「だから、そうじゃないって!!!」

アイ「ヒカリだって顔赤いじゃない!!!」

ヒ「そ、そんなことないもん!!!」

ハルカとアイリスの興奮状態は最高潮に達していた。ヒカリは勝ち誇ったような顔をしているが、実際はサトシにキスをしたことで恥ずかしい気持ちでいっぱいである。

サ「……………」

サトシは3人の雰囲気圧倒され黙り込んでいた。

その後、騒ぎを聞きつけたカスミ、ベルがサトシの部屋へ来て、ヒカリがサトシにキスしたことを聞くとさらにエスカレートしていった。

リュ「皆さんサトシさんのこと好きな気持ちは凄いですね。私も見習いたいです。」

とリュウカがぼやいていたのは別の話。

続いて後書きシヨ

ある日の朝・・・(後書き)

天「どうだ、ヒカリ。お望み通りのサトヒカ描写書いてやったぞ。」

ヒ「さすがはサトヒカ派の作者ね。」

カ「余計にサトカス、サトハル、サトアイのファン敵に回したわね。」

天「そんなのは分かってる。じゃなきゃ「主人公総受け物語」なんか書かないよ。」

ヒ「それはそうと、もう少し攻めてもよかったんじゃない？」

天「あー、いや、これ以上は18禁作品になるから抑えた。」

ハル「ねえ、「総受け」ってことはサトヒカ以外のCPも書くってことでしょうかね。」

天「心配しなさんなって。ちゃんと構想は練っているから。まあ、俺がサトヒカ派だからサトヒカ鼻屑になることにはなるが・・・」

アイ「それって本当でしょうかね・・・。」

天「本当に疑り深いんだから(汗)。まあしばらくはサトヒカが続くことにはなることは覚悟しておけ。」

ハル「えっ？ それってどういう・・・。」

天「さて最後になりましたが、感想の方よろしくお願いします。」

カ・ハル・ヒ・アイ「あつ、逃げた。」

突然の知らせ（前書き）

物語が急展開の予感・・・。
序盤はアレだけど・・・

突然の知らせ

サトシ達は朝食を済ませた後、オーキド研究所にいた。あの朝の騒動から、ヒカリとベル以外の女子はご機嫌ななめだった。ベルは以前、サトシに同様のことをしたことがあるので今回の件に関してはいたって冷静である。

サ「・・・なあ、デント。なんでみんなあんなに不機嫌なんだ？」

サトシは不思議そうにデントに聞く。女子達の不機嫌の根本の原因はサトシにあるわけだが、そんなことがサトシに分かるはずがなかった。

デ「・・・いまは知らなくていいと思うよ。」

タ「ああ、それに下手に手を出したらある意味火傷だけじゃ済まないぞ・・・。」

サ「えっ？ 炎タイプのポケモンも出してないのに？」

デントとタケシは相変わらず鈍感なサトシに苦笑した。

マサ（サトシも相変わらずだね。お姉ちゃんの想いが届くのはいつになることやら・・・。）

マサトもまた相変わらず鈍感なサトシに苦笑し、姉・ハルカのことをしじみ思っただった。

オー「おい、サトシ。ここにおったか。」

オーキドが突然サトシのもとへとやって来た。

サ「どうしたんですか、オーキド博士？」

サトシはきよんとする。

オー「実はな、サトシに知らせたいことがあったの。」

サ「知らせたいこと？」

オー「今年の夏に『ワールドチャンピオンリーグ』が開かれることは知っておるな。」

サ「はい。」

サトシは即答する。

オー「そして今まで集めたバッジは持っておるかの？」

サ「持ってます。あんな大事なものがありません。」

オー「『ワールドチャンピオンリーグ』は、3つ以上の地方でバッジをすべて集めたトレーナーは出場できる制度があつての、お前さんはそれに当てはまるのじゃよ。」

オーキドの話によると、今年夏開催の『ワールドチャンピオンリーグ』にサトシが出場できるという。ちなみにワールドチャンピオンリーグの大まかな出場条件は以下の通り、

- 1 . ポケモン協会公認のジムリーダーであること
- 2 . ポケモン協会公認の四天王であること
- 3 . 1つ以上のポケモンリーグで優勝していること
- 4 . 3つ以上の地方のジムバッジをそれぞれ8つずつ所有していること

サトシはカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イツシュの5つの地方のジムバッジをすべて所有しているため、出場条件の4に当てはまる。

オー「どうじゃ、出場してみる気はないか？」

サ「うん・・・、一晩考えさせて下さい。」

4年に1度開催される『ワールドチャンピオンリーグ』は、世界中のトレーナーが集まる。そして、世界大会なだけにかなりレベルも高い。いつものサトシなら快諾するところだが、イツシュ地方から帰ってきてしばらくバトルはしていないため、自分のトレーナーとしての腕が通用するかどうか迷っているようである。だから、一晩じっくり考えたいのだという。

オー「そうか、出場するかしないかはお前さん次第じゃからな。一

晩じつくりと考えるといい。」

サ「はい、ありがとうございます。」

その後、夕食の時間も近づいてきたのでサトシ一行は帰宅することにした。その道中、

ヒ「ねえ、サトシ。どうするの?」

サ「えっ?」

サトシはヒカリの突然の問いかけに驚いた。

カ「そうね、いつものサトシなら「俺、行きます。」って言うのに。」

タ「何か悩んでるのか?」

バトルのことならすぐさま興味を持つサトシが、ここまで渋い表情を浮かべているので、ヒカリ達は心配そうに聞いてみた。

サ「うん、しばらくバトルから離れてたから、俺の実力が通用するかどうか分からないんだ。それにあの大会は観戦だけでも見ごたえのある大会なんだ。」

サトシの言うとおり、『ワールドチャンピオンリーグ』は世界中の四天王、ジムリーダー、一般の垣根を越えた大会であるため、多種多様のバトルが繰り広げられる。対戦者同士の戦略、ひらめき、ポケモンの管理などすべてが試されるため、観戦でトレーナーとしての腕を磨く者も多い。

ヒ「観戦もいいけど、アタシとしては世界中のトレーナー達と対戦するサトシが見てみたいわ。」

ハル「私も。」

カ「バトルバカのアンタがバトルしない姿なんて想像できないしね。」

アイ「あつ、それ言ってる。」

サ「バトルバカは余計だ。」

サトシは頬を膨らませながら言う。その様子に皆に少しばかりの笑みがこぼれた。

サ「皆ありがとう。でもやっぱり一晩考えさせてくれないか？」

サトシは皆に言う。

ハル「ええ、構わないわ。」

ヒ「ゆっくり焦らず考えて。」

タ「出る出ないかはサトシ自身が決めることだしな。」

デ「いい答えが出ることを祈るよ。」

サ「うん、それじゃあ一晩考えてみるよ。今日は本当にありがとう。」

「

カ「もう水臭いわね。アタシ達はあなたの仲間ですよ。」

サ「ハハハ・・・。」

そんなやりとりを繰り返しているうちに、サトシの家に到着した。すると、ハナコとバリヤードが出迎えてくれた。夕食後、サトシ以外は各々でくつろいでいた。そして・・・

サ「よし決めた！」

どうやらサトシはどうするか決めたようだ。その後風呂に入り眠りについた。

サトシがどんな答えを出したかはまた次回・・・

突然の知らせ（後書き）

次回、サトシはどんな答えを出すのか？

サトシの答え（前書き）

サトシが昨晚出した答えが明らかに・・・

サトシの答え

サ「んぐ、あつデントとマサト。おはよう。」

マサ「あつ、おはよう。」

デ「おはよう。昨日は眠れた。」

サ「実はほとんど眠れてない。」

サトシは昨日の答えを出した後眠りについたが、ほとんど眠れなかったようだ。

マサ「それで、今後どうするか決めたの？」

マサトは昨日の一件が気になり、サトシに尋ねる。

サ「ああ、俺『ワールドチャンピオンリーグ』に向けてまた旅に出ようと思う。とはいっても、今まで旅した地方を回るだけだな。」

マサ「やっぱり出るんだね。ねえ、サトシちょっとお願いがあるんだけど。」

サ「なんだ、マサト。」

サトシは首をかしげながら言った。

マサ「僕もついて行っていいかな。また旅に出てみたくなって……。」

どうやらマサトはまた一緒にサトシと旅をしたかったみたいだ。

サ「ああいいぜ。センリさん達から許しが出たらの話だけだな。」

マサ「ホント!? やったあー。」

マサトはパアアと笑みを見せた。すると、

デ「あのサトシ、僕も一緒にいいかな。」

サ「えっ、デントも!?!」

デ「サトシが今まで旅してきた地方のポケモンがどんなものか見てみたいし、ポケモンソムリエの知名度も上げたいしね。」

サ「もちろんいいぜ。旅は人数が多い方が楽しいしな。」

デ「ホント!? ありがとう。」

デントもマサト同様、笑みを見せた。

ヒ「あっ、サトシ起きてたんだ。おはよう。」

サ「ヒカリか。おはよう。」

ヒ「ねえ、みんなどうしたの?」

ヒカリはサトシ達の様子を伺いながら、尋ねる。

サ「あっ、ヒカリにも言っておかないとな。俺『ワールドチャンピオンリーグ』に出ることにしたよ。それで今迄に旅してきた地方をもう一度回ってみよう思うんだ。」

ヒ「それ本当！？ だったらサトシアタシからお願いがあるんだけど……。」

サ「まさか、ヒカリも一緒に行きたいのか？」

ヒ「えっ、どうして分かったの!？」

ヒカリは自分の言いたかったことをサトシが気付いたのに驚いた。

サ「さつき、マサトとデントもおんなじときいてきたからな。」

サトシはヒカリに言った。

ヒ「うん、サトシが気付いた通りよ。実はね、『ワールドチャンピオンリーグ』と同時期にポケモンコンテストの世界大会『ワールドチャンピオンフェスティバル』が開かれるの。」

昨晚、ヒカリはワールドチャンピオンリーグと同時期に開かれる『ワールドチャンピオンフェスティバル』について、ハルカ達と話していた。自分達が出場するかどうかサトシの時と同様、実は迷っていたのだ。

ちなみに『ワールドチャンピオンフェスティバル』の出場条件は以下の通り、

1・協会認定のトップコーディネーターであること

2・1つ以上のグラウンドフェスティバルでベスト8以上の成績を残していること

この大会は、『ワールドチャンピオンリーグ』に比べると出場条件が比較的緩やかである。しかしこれも世界中のポケモンコーディネーターが集まるかなり高レベルな大会である。トップコーディネーターに認定されたものでさえ、優勝が難しい。ちなみにヒカリはシンオウのグラウンドフェスティバルで準優勝しているため出場条件の2を満たしている。

ヒコ「アタシもこの大会に出場することに決めたわ。世界でアタシとポケモン達の演技がどこまで通用するか試してみたいの。」

ヒカリはやる気満々の顔でサトシに言った。

サ「もちろんだ、ヒカリ。これからよろしくなヒカリ。」

ヒ「ホント!? やったあー!!!」

ヒカリはマサトとデントの時以上に喜んだ。再三言うが、ヒカリはサトシに好意を持っている。想い人とまた一緒に旅ができることが嬉しいのである。

サ「そういうことだからヒカリも一緒にいいか? デント、マサト。」

デ「もちろんだよ。」

マサ「僕もだよ。え、えっと……。」

ヒ「2人ともこれからよろしくね。あ、アタシのことはヒカリでいいわ。」

マサ「よろしく、ヒカリ。僕の話はマサトでいいよ。」

デ「僕の方こそ。僕の話もデントでいいよ。」

サ「じゃあ決まりだな。それより、他のみんなはどうしたんだ？」

サトシはふと思ったことを聞いてみた。

ヒ「まだ寝てるわよ。サトシのママさんは起きてたみたいだけど。」

デ「こつちも。」

どうやら、カスミ、ハルカ、ベル、リュウカ、タケシはまだ寝ているようだ。

マサ「起こしてこようか？」

サ「あつ、いいよ。無理矢理起こしたら可哀相だし。ママから伝えてもらうように頼むよ。」

サトシは未だ寝ている仲間を気遣って寝かせてあげることにした。ところがこの選択が後に一波乱を巻き起こすことになる。

ハナ「サトシ、旅の準備できてるわよ。」

ハナコがサトシ達のいるリビングに入ってきた。

サ「ママ!? まだ何も言ってないのに。どうして分かったの。」

サトシは驚いた。

ハナ「あなたの性格を考えればすぐに分かるわよ。何年あなたの母親をやつてると思つてるの。」

サ「ハハハ・・・、ママには敵わないな。」

サトシは苦笑した。

ヒ・マサ・デ「（す、すい・・・。。）（）（）

他の3人も、さすが母親パワーといわんばかりに驚愕した。

サ「じゃあ今寝ている皆に伝えておいてくれないか?」

ハナ「ええ、分かったわ。気をつけていくのよ。ヒカリちゃん、マサト君、デント君、サトシをよろしくね。」

ヒ・マサ・デ「こちらこそ!」

サ「それじゃ、行ってくるよ。」

サトシはヒカリ、マサト、デントとともに家を後にした。そして、一旦オーキド研究所に行き、オーキド達に『ワールドチャンピオンリーグ』に出場することを伝えた。そして、ヒカリ、マサト、デントはそれぞれ家にまたサトシと旅することを伝え、ヒカリとマサトは許可が出たので、研究所を後にした。

こうして、サトシ、ヒカリ、マサト、デントの4人の旅が始まった
のであった。

つづいて後書きシヨ―

サトシの答え（後書き）

ヒ「しばらくサトヒカが続くってのはこのことだったのね。」

天「ああ、最初から争奪戦の展開にしようかどうかで迷ったが、他の4人が寝てる間に旅だったという設定にした。」

ヒ「でも今回はサトヒカ描写が薄かったわね。」

天「まあ、俺が書きたいのはサトヒカ寄り総受け作品であってイチヤラブ作品を書きたいわけじゃないからな。」

ヒ「ふーん、で今後は？」

天「少々ネタバレになるが、かつてサトシのポケモンだったあのポケモンを出そうかと思っている。」

ヒ「あのポケモン？」

天「ヒカリが知らないのも無理ないか。まあ次回を見れば分かる。その次回もサトヒカ描写は薄いが。」

ヒ「そう、それじゃ楽しみにしてるわ。」

天「んじゃ、最後になりましたが、」

ヒ「感想よろしくお願いします。」

トキワの森にて・・・(前書き)

なつかしのあのポケモンが登場します。

久々のバトルシーンも・・・。前よりはうまく書けたかな。

トキワの森にて・・・

サトシ、ヒカリ、マサト、デントの4人はトキワの森へ続く道を歩いていた。

ヒ「サトシって、旅に出る時はピカチュウだけにしてるのはなんで？」

ヒカリはふと疑問に思ったことをサトシに聞いてみた。

サ「ああ、俺旅に出る時はいつもピカチュウだけって決めてるんだ。だってコイツは俺の最初のポケモンであって、友達でもあるんだもん。」

サトシはそう言うと、ピカチュウに向けて笑顔を見せた。自然とピカチュウも笑顔を返す。

ヒ「サトシはいいわね、決断力があって。アタシなんかハウエンに行くときに、結局1匹に絞れずに皆連れていったんだもん。今回だってポツチャマとミミロルの2匹だし。」

ちなみにミミロルはサトシのピカチュウに好意を持っている。ヒカリはポツチャマ1匹を連れていく予定だったが、ミミロルとピカチュウを離れ離れにするのは可哀相なのでミミロルも連れていくことにしたのだ。

サ「ハウエン？ ミミロルのモデルの仕事は？」

ヒ「あっ、ミミロルの仕事が忙しくなったのは今はひと段落ついた

けどつい最近の話。それまではトップコーディネーターになるためにコンテストの本場でコンテストマスター・ミクリ様の出身地でもあるハウエンを旅してたの。」

マサ「それじゃあ、トウカシティにも寄ったの？」

ヒ「もちろんよ、マサト。そこでハルカとマサトのご両親にも会ったわ。」

マサトの質問に、ヒカリは笑顔で答えた。

デ（このほのぼのとしたテイストの会話……。今後の旅が楽しくなってきたそうだし。。。）

デントはしみじみ思い、この3人と今後楽しくやっていけるといいう確信を得たのであった。

そしてサトシー一行は、トキワの森に入った。すると、

マサ「ねえ、サトシは最初のポケモンはどうやって捕まえたの？」

ヒ「あつ、それアタシも聞きたい。」

デ「僕も興味があるね。」

3人とも同じ疑問を持っていたようだ。

サ「ああ、いいぜ。」

サトシは快く頷いた。

サ「ここトキワの森でキヤタピーを捕まえたのが、最初なんだ。」

ヒ「へえ、ここで捕まえたんだ。」

サトシが最初に捕まえたポケモンはキヤタピーである。その時、壊した自転車を弁償してもらったためにカスミも一緒にいたが、そのキヤタピーがなぜかカスミになったのである。読者のほとんどが知っての通り、カスミは大の虫ポケ嫌いである。カスミがキヤタピーに「ポケモンはポケモンらしく、モンスターボールに入ってなさい！」と吐き捨ててキヤタピーがショックを受けたのは有名な話である。その後、ロケット団との戦闘がありキヤタピーはそれに勝利してトランセルに進化した。その後、バタフリーに進化して色違いのメスのバタフリーと行動を共にするためにサトシと別れた。ちなみにサトシは、そのトキワの森でピジョンも捕まえている。サトシはその経緯を、ヒカリ達に話した。

ヒ「そんなことがあったんだ。」

マサ「カスミの虫ポケ嫌いも昔からみたいだね。」

デ「まあ、誰にでも苦手なものはあるけど・・・。」

サ「あの時は好き嫌いをなくす努力はしてほしいって言ったんだ。でも、カスミは全然聞く耳を持たなかったんだぜ。」

サトシは愚痴をこぼすように言った。その様子にヒカリ達はただ苦笑した。

デ「ん？ あの2匹のバタフリーは何だろう。」

デントは上空を飛んでいる2匹のバタフリーに気付いた。

ヒ「なんか、こっちに向かってきていない？」

マサ「それに、片方は色違いだよ。」

2匹のバタフリーは片方は普通の色だが、もう片方はピンク色の色違いバタフリーだった。

サ「あ、あれは．．．。」

そう、2匹のバタフリーのうち普通の色**の**バタフリーはかつて、サトシのポケモンだったバタフリーである。

バタ「フリーー！！！！」

バタフリーはサトシの顔に近づき、羽をばたつかせた。

サ「ハハハ、くすぐつたいよバタフリー。元気にしてたか？」

サトシは久々の再会に心が緩んだ。その光景はそばにいたヒカリ達の心を和ませるものだった。

サ「それはそうとどうしたんだ？ バタフリー。」

サトシが聞くとバタフリーはサトシの腰につけてあるモンスターボールをつついた。

デ「もしかして、一緒に旅をしたいんじゃないかな。」

デントが答えた。

サ「えっ？ そうなのかバタフリー。」

バタフリーはこくりと頷いた。

サ「そっか、それじゃあこれからよろしくな。」

サトシはそう言うと、新しいモンスターボールを取り出した。バタフリーはそのモンスターボールをつついて中へと入っていった。すぐボールは点滅したがそれはすぐに止み、サトシはバタフリーを再び自分のポケモンにしたのだ。

サ「よし、バタフリーゲットだぜ！」

ピ「ピ、ピカチュウ!!!」

サトシはお馴染みのセリフと言うと、すぐにバタフリーをボールから出した。

サ「バタフリー、こっちはヒカリ、続いてマサト、そしてデントだ。」

サトシはバタフリーに今一緒に旅をしている仲間を紹介した。

ヒ「よろしくね、バタフリー。」

マサ「僕もよろしく。」

デ「これから、よろしく。」

バタ「フリーー！ー！！！」

バタフリーは羽をばたつかせて3人に向けて挨拶した。一通りの自己紹介が終わったところで、

デ「それよりも、この色違いのバタフリーはどうするの？」

サトシがバタフリーをゲットしたことで、それまでバタフリーが行動を共にしていた色違いのバタフリーが必然的に1匹残ることになる。すると、色違いのバタフリーはヒカリの方を向き近づいた。

ヒ「えっ、アタシ！？」

ヒカリは突然の出来事に驚いた。

マサ「もしかして、ヒカリにゲットしてもらいたくないんじゃないの。」

マサトは自分の推測をヒカリに言った。すると、バタフリーはヒカリから離れてバトルモードに入る。

デ「どうやらマサトの行ったことは本当みたいだね。あのバタフリー、ゲットしてみてもどうだい？」

デントはヒカリにそう提案した。

ヒ「ええ、分かったわ。バタフリー、あなたをゲットしてみせるわ。」

サ「頑張れよ、ヒカリ。」

ピ「ピカピ。」

ポ「ポチャポチャ。」

サトシ、ピカチュウ、ポッチャマに促されたヒカリ。

ヒ「みんなありがとう。アタシ絶対ゲットしてみせるわ。」

ヒカリはそう言うと、ミミロルの入ったボールを取り出す。

ヒ「お願いミミロル、チャームアップ!!!」

ミ「ミンミン!!!」

ミミロルは元気よく出てきた。

ヒ「いくわよ、ミミロル。ピョピョパンチ。」

ミミロルは、バタフリーに近づきピョピョパンチを繰り返した。しかし、バタフリーはそれをかわした。

デ「あのバタフリー、かなりの素早さだ。相当のレベルだよ。」

デントはバタフリーについて、冷静に分析する。

バタ「フリー!!!」

バタフリーの攻撃。バタフリーは羽をばたつかせるときれいな色の

風がミニロルに向かってきた。

マサ「ぎんいろのかぜだ。」

マサトの言つとおり、バタフリーの出した技はぎんいろのかぜだった。

ミニ「ミニンミニー!？」

ぎんいろのかぜがミニロルを直撃した。そのまま、地面に叩きつけられた。

ヒ「ミニロル!？」

ヒカりはミニロルに声をかけた。すぐさま、ミニロルは立ち上がった。

ヒ「まだ、ミニロルは戦えるわね。それにしても、あのバタフリーなかなかの強さね。」

ヒカりはバタフリーの予想以上の強さに感心していた。

ヒ「でも、負けない!!! ミニロル、れいとうビーム。」

ミニロルは十八番おはじともいえるれいとうビームを繰り出した。しかし、これもまたかわされる。

マサ「あのバタフリー、さっきより素早くなってるよ。」

マサトはバタフリーがより素早くなったことに気付いた。

サ「おいかげだ。それでさっきより素早さが上がってるんだ。」

バタフリーはおいかげを使って、すばやさを上げていたのだ。ゲーム版では、3ターンの間技を使ったポケモンと味方のポケモンの素早さを2倍にするという効果がある。

デ「それだけじゃない。さっきのぎんいろのかげの追加効果で全ての能力が上がっている。それに加えて、ヒカリのミミロルはかなりのダメージを受けている。これは苦戦を強いられそうだよ。」

デントの言うとおり、その後もヒカリのミミロルの攻撃はことごとくかわされた。

ヒ「一体、どうすれば・・・ん？　そういうことだったのね。一か八か賭けてみるしかないわね。」

ヒカリは何かに気づき、ふと思いついた策に打って出ることにした。

ヒ「ミミロル。バタフリーの周りにれいとうビーム。」

すると、ヒカリはミミロルにバタフリーではなくその周りにれいとうビームを出すよう指示した。それには、他の3人も驚いた。

サ「なにやってんだ？　ヒカリ。」

マサ「あれじゃあ、バタフリーに当たらないよ。」

デ「・・・そうか、そういうことか。」

どつやら、デントだけは気付いたようだ。

ヒ、「ミミロル、続いてバタフリーにピヨピヨパンチ。」

ミミロルはピヨピヨパンチでバタフリーを攻撃するが、これもまたかわされた。ところがバタフリーの進行方向には先程れいとうビームで作った氷塊があった。それを見たバタフリーは急停止した。

ヒ、「やったわ成功よ。ミミロル、そのままバタフリーの背中につかまって。」

ヒカりはどうやらバタフリーが交わす際に動く規則性に気付いたようだ。その規則性を利用して、れいとうビームで周りに氷塊を作りバタフリーの行動範囲を狭めたのだ。そしてミミロルは、急停止したバタフリーの背中に飛び乗った。

バタ、「ファイ!?!」

ヒ、「ミミロル、そのままバタフリーにれいとうビーム。」

ミミロルのれいとうビームがバタフリーに直撃した。飛行タイプを持つバタフリーにとっては効果抜群だ。そして、バタフリーはその場に倒れた。

ヒ、「いっけー、モンスターボール。」

ヒカりはすぐさまモンスターボールを投げた。バタフリーはそのまま入り、しばらくボールが点滅したが数秒後に止まった。

ヒ、「やったあー、バタフリーゲットで大丈夫。」

ポ「ポツチャマ。」

ミ「ミンミロ〜。」

こうしてヒカりは色違いのバタフリーをゲットしたのだ。

サ「やったな、ヒカリ。」

ヒ「ありがとう、サトシ。」

サトシとヒカりはハイタッチをした。

マサ「すごく白熱したバトルだったよ。」

デ「不利な状況からの突然のひらめきというスパイスで醸し出したテイストのバトル。こんなバトルを見たのは久々だよ。」

ヒ「みんな、ありがとう。それじゃあ早速だけど、バタフリー出てきて。」

ヒカりはバタフリーをボールから出した。

色バタ「フィーー!!!」

以降、サトシのバタフリーと区別するため色バタと表記。

バタフリーは元気よく飛び出した。そして、サトシのバタフリーに近づいた。

バタ「フリ〜。」

色バタ「フイ〜。」

その様子にヒカリ、マサト、デントは、

ヒ「もしかしてあのバタフリー、サトシのバタフリーと恋人同士じゃない？」

マサ「みたいだね、とても仲良さそうだし。」

デ「2匹が醸し出す独特のハーモニー。ん〜、こっちもいい気分になるよ。」

3人とも、あの2匹は恋人同士だということに気付いたようだ。

サ「よかったな、バタフリー。仲間といられて。」

ズルッ

サトシの言葉に3人とも盛大にずっこけた。

サ「あれっ、みんなどうしたんだ？」

サトシは首を傾げた。

マサ（相変わらずだね、サトシは。）

デ（それがサトシらしいというか・・・。）

ヒ（こんなんじゃない、いつアタシの気持ちに気付いてくれるのやら・・・。）

3人は苦笑するしかなかった。

その後、ミミロルがピカチュウに気付き、ポツチャマを押しつけてピカチュウに抱きついて同じような展開が繰り広げられたのは別の話。こうして、サトシ一行は、トキワの森を抜けてニビシティへと到着したのだ。

続いて後書きショー

トキワの森にて・・・(後書き)

天「どうだヒカリ。今回の出来栄は。」

ヒ「まあまああってところかな。」

天「今回はポケモンゲットとバトルシーンが書きたかったから書いてみた。それに、あと2匹のバタフリーはサトヒカを押しするためのネタになると思って出してみた。」

ヒ「ところでなんでサトヒカ派なの？」

天「まず、サトシとのハイタッチが一番好きなシーンだから。これはサトヒカの王道だしな。次にミミロルのピカチュウに対する健気なアプローチ。そして、OPで唯一デュエットした2人だから。他にもあるが、きりがいいからこの辺で。」

ヒ「作者がサトヒカ派の理由は分かったわ。ところで、他の4人は？」

天「カスミ達は、あと2、3話くらいは出てこないかな。」

ヒ「サトカス、サトハル、サトアイ、サトベルのファンからクレーム来ても知らないわよ。」

天「お前がそれを言うか。それがわかっているから「主人公総受け物語」を書いてんだ。てか何度も言わせるな。さて、最後になったけど今回はヒカリに最後を締めてもらいます。」

ヒ、「次回もポケモンゲットで大丈夫。」

ニビシティ到着！（前書き）

タケシの故郷、ニビシティに到着！

ニビシティ到着！

サトシー一行は、トキワの森を抜け、タケシの故郷・ニビシティに到着していた。

サ「みんなここがニビシティだ。て言っても、マサトは来たことあるか……。」

ヒ「へえ、ここがタケシの故郷ね。」

マサ「ここに来るの、ホント久しぶりだなあ。」

デ「博物館で有名な都市とは聞いていたけど、結構静かだね。」

サトシの問いかけに、他の3人は各々ニビシティに感想を漏らしていた。ちなみに、デントの言うとおり、ニビシティには博物館がある。大昔に生きていたポケモンの標本、宇宙からの月の石などを展示している。これらを展示している傍ら、あらゆる科学の研究施設としても機能している。

ヒ「それはそうと、タケシの家族ってどんな人たちなの？」

ヒカリはサトシにタケシの家族について聞いてみた。

サ「タケシはたくさんの兄弟とご両親と一緒に暮らしてるんだ。それはいいんだけどタケシのママのミスホさんとパパのムノーさんがな……。」

サトシはそこまで言うと言つと急に口ごもってしまった。

ヒ・デ「？」

タケシの家族に会ったことのないヒカリとデントは頭にクエスチョンマークを浮かべる。

マサ「タケシのママさんとパパさんは一言で言えば、自由奔放な人なんだよ。」

タケシの家族と面識のあるマサトが口ごもってしまったサトシに助け船を出すかのように話す。

サ「まあ、あってみれば分かるよ。」

そんな会話をしていると、

？「サトシ兄ちゃん!!!」

誰かがサトシを呼ぶ声が聞こえた。

サ「ジ、ジロウ!？」

サトシは声のする方へ体を向けると、そこにはミズホとムノーの二男・ジローがサトシ達の方へ向かってきていた。

ジロウ「久しぶり、サトシ兄ちゃん。」

サ「久しぶり。聞いたぜ、ニビジムのジムリーダーになったんだってな。」

ジロウ「うん。」

久々の再会に心を弾ませるサトシとジロウ。ジロウは以前ジムに来たジム検定監察官のジョーイとポケモンバトルをして敗れたものの、ジムリーダーとして認められ現在に至る。

マサ「本当に久しぶりですね、僕のこと覚えています？」

ジロウ「マサト君だっけ、ちゃんと覚えているよ。」

マサ「それにしても、ジムリーダーになったなんて凄いです。」

ジロウ「いやあ、まだなってから少ししか経ってないよ。まだまだ未熟だよ。でも、いつかはタケシ兄ちゃんみたいなジムリーダーになってみせる。」

サ「ジロウ、お前なら出来るよ。」

マサ「僕もそう思いますよ。」

ジロウ「2人とも、ありがとう。」

ジロウはサトシとマサトの励ましにパアアと笑みを見せた。

ヒ・デ「あ、あの……。」

すっかり会話の話に入れずにいたヒカリとデントが、口を開いた。

ヒ・デ「どちら様？」

ヒカリとデントは思っていたことを口に出した。

サ「あっ、ごめんごめん2人とも。こちらはジロウ、会話の内容で分かると思うがタケシの弟だよ。今はタケシの後を継いでニビジムのジムリーダーをしているんだ。」

ヒ「初めまして。アタシはヒカリ、よろしくね。」

デ「僕はデント。イツシュ地方でポケモンソムリエをしています。」

ジロウ「ポケモンソムリエ?」

デ「ポケモンソムリエはトレーナーとポケモンの相性を診断し、より友好を深めるためのアドバイスをを行う職業だよ。」

ジロウ「へえ、世の中にはいろんな職業があるんですね。」

デ「ポケモンソムリエはイツシュ地方以外じゃ知られていないからね。知らないのも無理もないよ。」

サ「それだけじゃないんだぜ、ジロウ。デントはイツシュのサンヨウジムでジムリーダーもやってんだぜ。」

ジロウ「ジムリーダー!? じゃあ、俺の先輩じゃないですか!」

デ「ハハハ、そんな言い方されると照れるなあ。」

ヒカリとデントはどうやらジロウと仲良くなれたようだ。そんなほのぼのとした会話が交わされていた。するとジロウが、

ジロウ「ねえ、サトシ兄ちゃん。折り入ってお願いがあるんだけど。」

サ「なんだ、ジロウ？」

ジロウ「俺とポケモンバトルしてくれないか。ジムリーダーになったら、1回サトシ兄ちゃんとバトルしてみたいと思ってたんだ。」

サ「ホントか、もちろんいいぜ。」

ジロウ「じゃあ、早速ジム戦と言いたいところだけでもうお昼だしな。その後でいい？」

サ「ああ、いいぜ。ところでジロウ、その昼はどうするんだ？」

サトシはふと思ったことを聞いてみた。ちなみに、ミスホトムノーは全くと言っていいほど家事ができない。そのせいか、家事全般はタケシが担当している。正直なところ、タケシが物心つくまではどうしていたのやら……。

ジロウ「タケシ兄ちゃんが家を出てからずっと外食だよ。一応、俺も料理は出来るんだけどジムの挑戦者が殺到していてそれどころじゃないんだよ。ホント、ずっとこんなことをしてたタケシ兄ちゃんは凄いのよ。」

サ「ハハハ……。」

サトシはジロウの言ったことに苦笑した。

デ「そのことなら、ご心配なく。僕が作ってあげるよ。」

ジロウ「えっ、デントさんが!？」

サ「ジロウ、デントの作る料理は旨いんだぜ。ジム経営の傍ら、高級レストランも営業するぐらいだもんな。」

ジロウ「あっ、それなら雑誌で見たことあります。」

ジロウは雑誌でデント達が経営しているレストランの特集を読んだことがあった。

ヒ「そういえば、アタシもデントの料理食べたことないわ。」

マサ「そういえば僕も。」

ジロウ「それじゃあ、お願いします。」

デ「お安い御用だよ。」

ジロウ「ありがとうございます。それで食べ終わってジムの準備ができたなら、呼ぶからね。サトシ兄ちゃん。」

サ「ああ、いつでも待ってるぜ。」

こうして、昼食兼サトシとジロウのバトルのために、一行はタケシの家へと向かったのだ。

続く

ニビシティ到着！（後書き）

次回、サトシとジロウがエキシビションのポケモンバトルをします。

サトシvsジロウ！（前書き）

サトシとジロウのエキシビジョンマッチの回です。

デントとマサトがちょっと不憫な目に遭います。

あと、どろでもいい話ですが、この話からナレーションの文に、段落の始めは一字開ける『字下げ』を施します。

サトシVSジロウ！

サトシ一行は、タケシ宅で昼食をとっていた。

ジロウ「お、美味しい！ タケシ兄ちゃんの料理も美味しいけど、デントさんの料理もなかなかだよ。」

サ「だろ、ジロウ。なんたって、大人気のレストランもやってるポケモンソムリエだもんな。」

再三言うが、デントはジムリーダー、ポケモンソムリエの他、高級レストランをポッド、コーンを含めた3人で営業している。店自体は、雑誌に掲載されるほどの大盛況で特に女性のファンが多い。

ヒ「ホント、美味しい。」

マサ「こんな料理、初めてだよ。」

デ「お褒めにあずかり、光栄です。」

デントの料理は、全員に大好評でももの数分でなくなった。昼食後、ミズホとムノーも帰ってきて、談笑していたが、サトシだけはバトルの準備をしていた。

ジロウ「サトシ兄ちゃん、準備ができたからジムに来て。」

サ「ああ、今行くよ。」

サトシはジロウとのバトルの為、ジムへと向かった。

ニビジム・・・

ジロウ「使用ポケモンは一体。先攻はサトシ兄ちゃんでもいいかな？」

サ「ああ、構わないぜ。」

サトシが了承すると、両者とも自分達のポケモンを出した。

ジロウ「行け、ドサイドン。」

ドサ「ドサイドン！！！！」

サ「ピカチュウ、君に決めた。」

ピ「ピカッ！」

ジロウのポケモンはドサイドン、サトシのポケモンはピカチュウがバトルフィールドに出た。

マサ「ジロウさんのドサイドンはいわ・じめんタイプ、サトシのピ

カチユウはでんきタイプ。相性としては、サトシの方が不利だよ。」
デ「でも、サトシのピカチユウはアイアンテールを持っている。この技をどう活かすか、そしてサトシ自身の相性にこだわらない戦略がカギになってくるよ。」

マサトとデントがバトルの講評をしていたところへ、

ミズホ「みんな応援グッズ持って来たわよ。ほら、あなた達も。」

マサ・デ・ヒ「「えっ!?!」」

タケシの弟達、マサト、デント、ヒカリはミズホに強制的に応援用の服装を着用させられた。

応援の服装は、DPのサイドストーリーで出たのと同様の服装。

マサ「うゝ、恥ずかしいよ。」

デ「このラフなテイストに、微妙なハーモニー……。うゝん、恥ずかしいな。」

マサトとデントは恥ずかしそうに感想を漏らしていた。しかし、その中で1名と2体、テンションの高いのがいた。

ヒ「サトシゝ、ファイト!」

ポ「ポチャゝ!」

ミ「ミミンミロゝ!」

マサ・デ「……………」

マサトとデントは少しだけヒカリの性格がうらやましく思えてきた。ちなみに、DPを見ていた人ならお分かりだと思うが、サトシがジム戦の時は必ずと言っていいほど、ヒカリがポケモン達とチアリーダー姿で応援していた。

サ「ピカチュウ、でんこうせっか！」

ピ「ピカッ！」

サトシはピカチュウにでんこうせっかを指示した。それがドサイドンに当たる。効果はいまひとつではあるが、長年サトシと共に強くなってきたピカチュウのでんこうせっかは相性など跳ね除ける程だった。

ドサ「ドサッ！……！」

ジロウ「ドサイドン！？」

ドサイドンは避けきれずに、でんこうせっかをまともに食らう。

ジロウ「次はこっちからだよ。ドサイドン、メガホーン。」

ドサイドンは、虫タイプでトップクラスの威力を誇るメガホーンで対抗した。

サ「かわせ、ピカチュウ。」

ピ「ピカピ。」

ピカチュウは持ち前の素早さで、これをかわした。

ジロウ「さすがだね、サトシ兄ちゃんとピカチュウ。でもこれはどうかな。ドサイドン、あなをほる。」

ドサイドンは穴を掘って、地中深くへと姿を消した。

サ「どこから来るんだ？ 気をつけろ、ピカチュウ。」

ピ「ピイ……………」

観客席では…………

デ「ドサイドンのあなをほる。これだけじゃないような気がする。」

マサ「地中深くに潜られたら、いくらサトシのピカチュウでも不利だよ。」

ヒ「サトシ……………」

それぞれ固唾をのんで戦況を見守っていた。

ジロウ「今だ、ドサイドン。」

ドサ「ドサイドン!!!」

ジロウの言葉でドサイドンが姿を現す。

サ「ピカチュウ、ジャンプしてかわせ。」

ピ「ピカッ!」

ピカチュウは空高くジャンプして攻撃をかわした。

ジロウ「これ待っていたんだ。ドサイドン、そのままがんせきほう。」

ドサ「ドサーイ!!!」

ドサイドンは穴から出てきて空中に浮いた瞬間にがんせきほうを放つ。空中にいるピカチュウによけられるはずもなく、そのまま直撃した。

ピ「ピカッ!?!」

サ「ピカチュウ!?!」

ピ「チャアアア!!!」

がんせきほうをまともに食らったピカチュウは、地面に叩きつけられた。

ピ「・・・ピ、ピカピ！」

ピカチュウは倒れた身体を起こして自分はまだやれるとサトシにアピールした。

サ「ピカチュウ、まだやれるな。ここから、巻き返すぞ。」

ピ「ピカチュウ！」

ジロウ「やっぱり凄いや、サトシ兄ちゃん。でもこっちも負けないよ。」

それから、両者譲らずの接戦が続く。ピカチュウ、ドサイドンともにかんりのダメージを受けつつも持ちこたえている。この1回の攻防が恐らく勝負の決め手となるだろう。

ジロウ「これで決めるよ。ドサイドン、あなをほる。」

ドサ「ドロー！！！！」

ドサイドンは勝負を決めるため、再びあなを掘って地中へと姿を消した。

サ「あなをほるとがんせきほつの連携技は厄介だ。ん？ そつだ、
一か八かこの方法でいこう。」

ジロウ「今だ、ドサイドン！」

ドサイドンが地上へと姿を現そうとする。

サ「ピカチュウ、ジャンプしてかわせ。」

マサ「えっ!? それじゃあ、さっきみたいにがんせきほつでやら
れちゃうよ。」

デ「確かに。ジャンプの時に一瞬の間を突かれてしまうからね。」

ジロウ「ドサイドン、そのままがんせきほつ。」

ジロウはマサトとデントの予想通り、がんせきほつをドサイドン
に指示した。このままでは先程と同様、ピカチュウに強力ながんせ
きほつが直撃してしまう。ところがサトシは、

サ「今だ、ピカチュウ。でんこうせつかでドサイドンの背中にしが
みつけ。」

ピ「ピカッ!!--!!」

ピカチュウはでんこうせつかでドサイドンに近づき、そして背
中にしがみついた。

ジロウ「なんだって!?!」

ドサ「ド、ドサッ!?!」

ジロウはサトシの突然の奇策に驚愕していた。そして、

サ「ピカチュウ、そのまま最大パワーでアイアンテール。」

ピ「ピ、ピーカアアア!?!?!」

ドサ「ドサイー!?!?!」

ピカチュウのドサイドンはピカチュウのアイアンテールをまともに受けて、その場に倒れる。そして、

ドサ「ド、ドサ……。」

ジロウ「ドサイドン!?!?!」

ジロウは倒れたドサイドンに近づく。

ジロウ「ドサイドン、よくやった。ゆっくり休んでくれ。」

そう言つと、ドサイドンをボールへと戻した。

ジロウ「いやあ、すごいなサトシ兄ちゃん。」

サ「ジロウとジロウのドサイドンだってなかなか強いじゃないか。さすがはジムリーダーだぜ。」

バトルはサトシの勝利に終わった。すると、上でバトルを見てい

たマサト、デント、ヒカリ、そして一緒に応援していたポツチャマ、
ミミロルが近づいてきた。

ヒ「サットシ〜！〜！！」

ミ「ミンミロ〜。」

ポ「ポチャッ!?!」

ヒカリはサトシにいきなり抱きついた。ミミロルもポツチャマを
押しつけてバトル直後のピカチュウに抱きついた。

サ「おわっ、ってヒカリ!?!」

サトシはヒカリの行動に驚いていたが、ヒカリはすぐさまサトシ
から離れた。

ヒ「凄いバトルだったわ、サトシ。」

サ「ああ、ありがとうヒカリ。」

サトシはヒカリの笑顔で言った言葉に笑顔で返した。

マサ「そう言えば、サトシ。どうしてあんな戦法を思いついたの?」

マサトはふと疑問に思ったことをサトシに聞いてみた。マサトの
言う戦法とは、最後に使ったでんこうせっかでドサイドンに近づき、
アイアンテールで至近距離で攻撃する戦法である。

サ「ああ、あれはヒカリがトキワの森で使った戦法を参考にしたん

だ。ほら、バタフリーが急停止した時に隙が出来た。同じように、ドサイドンが穴から出てきたときにも一瞬の隙が出来ることに気がついたんだ。その隙を突いたんだ。ピカチュウがかわした時に出来る隙は、なんとか素早さでカバーしたよ。」

マサ「しばらくバトルから離れているのに、そんな戦法を思いつくなんて凄いなあ。」

デ「ん、一見不利な状況から隠し味のスパイスを利かせて勝ちとった勝利。最高のハーモニーだよ。」

ジロウ「俺もそこまでは気がつかなかったなあ。やられたよ。」

サ「いやあ、まだまだだよ。」

サトシは照れるように答えた。そして、

サ「ヒカリ、ありがとな。俺、ヒカリがいなかったら負けてたよ。」

サトシはヒカリにお礼を言った。

ヒ「えっ、あ、どういたしまして。」

ヒカリは突然のお礼に驚いたが、すぐに返した。その頬は、ほんのり赤かったとか・・・

ミズホ「ふふふ、ヒカリちゃんサトシ君のことが好きなのね。ねえ、ムノーちゃん。私達も負けてられないわ。」

ムノー「ああ、もちろんだよミズホちゃん。」

ミズホ「ムノーちゃん。」

ムノー「ミズホちゃん。」

ミズホとムノーのバカップルぶりが炸裂。その様子に周りにいたタケシの弟達は唾然するしかなかった。

ジロウ「そういえば、サトシ兄ちゃん。『ワールドチャンピオンリーグ』には出場するの?」

サ「ああ出場するぜ。俺の隣にいるヒカリはコーディネーターとして『ワールドチャンピオンフェスティバル』に出場するんだ。だからこうして、今までに旅をした地方を旅してるんだ。」

ジロウ「そうなんだ、2人とも頑張ってるね。」

サ・ヒュ「もちろんさ(よ)。」

こうして、タケシの家族達の激励を受けながら、サトシ一行は二

ビシティを後にした。

つづく

サトシVSジロウ！（後書き）

次回、サトシに置いて行かれた者達視点で進行します。

サトシをたずねて・・・(前書き)

なんか、某名作アニメのタイトルみたいなサブタイですが、気にせずお読みいただけるとありがたいです。

サトシをたずねて・・・

サトシ達が旅立って、しばらくして、

ハル「ん〜、ちょっと寝過ぎたわね。」

まず、最初に起きてきたのはハルカだった。まだ目覚めて間もないせいか、目がトロンとしている。

ハ「あら、ハルカちゃん。おはよう。」

ハル「あつ、サトシのママさん。おはようございます。」

ハナコがハルカに気付き朝の挨拶をする。ハルカは一瞬驚いてはいたが、すぐにハナコに挨拶を返した。

カ「あつ、ハルカ。おはよう。」

ハル「おはよう、カスミ。」

カスミの姿が見えたので、ハルカは挨拶を返した。その後、アイリス、ベル、リュウカ、そしてオーキド研究所で寝泊まりしていたタケシがサトシ宅に来た。そしてタケシは、バリアードと張り合いながら朝食の準備をしていた。ちなみにハナコは、タケシの粋な計らいでリビングでハルカ達と談笑している。

言い忘れていましたが、どうしてサトシ宅にこんな大勢で泊まれるのかというツッコミは無しの方角でお願いします。

その後、朝食を終えて全員リビングでくつろいでいたところ、ハルカがふとあることに気付いた。

ハル「ところで朝起きたらヒカリの姿が見えなかったんだけど、何処にいるのかしら？」

カ「そういえば……。」

ベ「サトシ君もいないみたいだし。」

アイ「デントもいないよ。」

リュウ「マサト君も。」

その場にいた女子達は、サトシ、ヒカリ、デント、マサトの4人がいないことに気付いたようだ。もちろん、タケシも気付いていた。

ハ「あら、その4人ならあなた達が起きてくる前に旅に出ていったわよ。」

ハル「へえ、そうなんだ。」

カ「サトシが旅に出たってことは、『ワールドチャンピオンリーグ』に出場するのね。」

ベ「サトシ君らしいね。」

アイ「他の3人も一緒に出たんだね。」

ん？ 他の3人？

カ「ねえ、ハルカ。他の3人ってことは、ヒカリも一緒だよね。」

ハル「そ、そうだよ。」

カ・ハル・アイ・ベ「……ってことは。」「」「」

4人の脳内には、ある流れ図が完成していた。

< 4人の脳内 >

- 1・サトシはヒカリ、デント、マサトと共に旅に出た。
- 2・そのうちヒカリはサトシに好意を持っている。
- 3・ヒカリがサトシに間違いなく何らかのアプローチを仕掛けて

くる。

4・鈍感なサトシだが、ヒカリの想いに気付かないという保障はない。

5・自分達がいなかったため、サトシとヒカリが2人きりになる機会が増え、2人の仲は親密になる。

6・その後サトシとヒカリは『Yes, fall in love...』(笑)　こんな芸人コンビいたような...

カ・ハル・アイ・ベッッッ笑えるか(怒)「「「」

サーセン。　by・天の河

カ「サトシのママさん、サトシはいつ旅だったんですか!？」

カスミが切羽詰まったかのように、ハナコに聞く。

ハ「あれから少し経ってるわね。サトシったら、あなた達を無理に起こすのは可哀相だからって言うて出ていったわ。」

アイ「もう、変な時に気が利くんだから。」

ハル「別に、おこしてくれてもよかったのに。」

タ「ハハハ...。」

女子達はサトシのいらぬお節介に不満を漏らしていた。その様子にタケシはただ苦笑するしかなかった。

ベ「ごうしちゃいられないわ！ 私は今すぐサトシ君達を追いかけるわ。」

カ「アタシも。」

アイ「ちょっと、抜け駆けは許さないわよ。」

ハル「ヒカリ、サトシに変なことしたら承知しないからね。」

サトシ好きの女子達は、自分達の荷物を猛スピードで取りに行くとハナコにお世話になったお礼を言ってサトシ宅を急いで出ていった。

タ「お、おい。ちょっとお前ら！！！」

タケシは女子達を落ち着かせようと呼び止めたが、一步遅かったようだ。

ハ「あらら。。。。」

タ「すみませんサトシのママさん。俺も出ます。今までお世話になりました。」

ハ「あら、別にいいのよ。また、遊びにいらしてね。」

タケシはカスミ達を追いかけようとサトシ宅を出ようとした。するとそこへ、

リュウ「あの、私も一緒にいいですか？」

リュウカがタケシと一緒に旅について行っていいか聞いてきた。

タ「ああ、別に構わないけど。どうしてだい？」

リュウ「マサト君を追いかけるためです。フッフ、マサト君。私から逃げられると思ったら大間違いだよ。」

タ「……………。(マサトも大変だな……………)」

タケシはリュウカの本音を聞き、マサトを哀れに思ったとか。

こうして、リュウカと共にタケシはカスミ達の後を追うためにサトシ宅を後にした。

一方、その頃、

サ・ヒ・マサ「ハークション!!!!」

デ「どうしたの？ 3人とも。」

サ「風邪でも引いたかな？」

ヒ「誰かがアタシ達の噂してるかもよ。」

マサ（でも、なんだろう。この物凄い悪寒は。）

マサラタウンであんなやり取りが繰り返されていたとは、微塵も思っていないサトシ一行であった。

続いて後書きシヨ

サトシをたずねて・・・(後書き)

カ「ハル・アイ・ベ」「ちよつと、待ったー(怒)!!!!!!」
「」

天「ゲツ!? 来た。」

カ「ちよつと、アタシ達の扱い酷くない!？」

ハル「私達だけ、置いてけぼりなんて酷いかも。」

ベ「ちよつと、この作品『総受け』じゃなかったの!？」

アイ「前にも言ったけど、サトカス、サトハル、サトアイ、サトベルのファンからクレーム来ても知らないわよ。」

天「その件に関してはもうスルーする。それと、お前ら一遍にしゃべるな。」

アイ「何よそれ(怒)。」

天「ちゃんと、お前達のCPは用意しているから気にするな。それと話が変わるが、今回はちよつとシリアス要素が入るから。」

ベ「それって、どういう事?」

天「おつとこれ以上はネタバレになるから、今回はここまで。」

カ「ちよつと、自分から言いだしたんなら最後まで言いなさいよ!」

天「そ、それでは最後はハルカが締めてくれ。」

カ「話をそらすなー！」

ハル「・・・それでは最後になりましたが、次回もポケモンゲットかも。」

またまたあの災難・・・(前書き)

サブタイ通りの展開はおそらく序盤のみになります。書いておいて、言っなよ！

年越し企画で登場した、あの3人組が再登場します。

またまたあの災難・・・

マサラタウンを後にしたタケシ達は、トキワの森の前にいた。トキワの森。そう、ある1名にとっては恐怖の迷宮そのものである。

タ「・・・なあ、カスミそろそろ行かないか。」

カ「・・・・・・・・・・。」

ハル「いつまでもそうしてたら、サトシ達に追いつけないわよ。」

カ「・・・・・・・・・・。」

カスミは、タケシとハルカの問いかけにうんともすんとも言わない。分かりやすく言えば、魂が抜けたような状態である。再三言うが、カスミはホームラン級の虫ポケ嫌いである。

アイ・ベ「もうっ、さっさとしないと置いて行くわよ。」

痺れを切らしたアイリスとベルが、イライラしながら言った。

タ「待つてくれ2人とも。このままじゃ、可哀相だろ。」

タケシの言うとおり、少女一人を道のど真ん中に置き去りにするのは倫理上の問題がある。恐らく誰かが連れていかない限り、カスミは一生この状態のままか引き返すしかないだろう。結局、カスミは目隠しをしながら、ハルカの助けを借りて森を抜けることにしたので。

カ「ねえ、ハルカ。ま、前大丈夫。」

ハル「大丈夫よ、カスミ……。」

ハルカはカスミの異常な恐がり方に、呆れていた。

リュウ「ねえ、タケシさん。カスミさんって、そんなに虫ポケモンが駄目なのですか？」

リュウカはタケシにカスミの虫ポケ嫌いについて聞いてみた。

タ「ああ、あれはかなりの重症だ。でも、バタフリーやアゲハントのような綺麗な虫ポケモンは平気なみただけだな。現にサトシだってバタフリー持っていたし。」

リュウ「そ、そうなんですか……。」

リュウカはタケシの返答に世の中にはいろんなトレーナーがいるんだなと思いつつ、苦笑した。

アイ「虫ポケモン、どれもあんなに可愛いのに。」

タケシ達が歩いている周りには、キャタピーやビードル、キノコなどがたくさんいた。アイリスは普段から自然と触れ合う生活をしているため、虫ポケモンは平気なようである。

カ「止めてよ、アイリス。あんな気持ち悪いのが動きまわったらた

まったもんじやないわ。第一、なんで虫ポケ使いのジムリーダーとか四天王が世の中にいるのよ！ とりあえず、虫ポケは無視！」

カスミが真剣に言うので、タケシ達は苦笑するしかなかった。あとカスミ、今の発言はヒワダジムのジムリーダー・ツクシとヒウンジムのジムリーダー・アーティ、シンオウの四天王・リョウに謝った方がいいと思う。

ハル「カスミ……。」

隣でカスミの熱弁を聞いていたハルカは引きつった笑みを浮かべた。

ウイイイイン!!!!!!!!!!!!!!

アイ「何!? 今の音。」

何かの機械が動く音がしたので、一同その場に立ち止まった。

ハル「見て！ あれ。」

ベ「ポケモン達がああ機械に吸い込まれていくわ。」

タ「一体、誰が．．。」

タケシ達が見た光景、ポケモン達が何者かによって巨大な機械に吸い込まれていくものだった。その光景に、一同は驚愕する。カスミも付けていた目隠しを取り、状況を把握した。

？「『ナー、ハハハハハ。』」

すると突然、Rの文字が目立つ服を着た3人組が現れた。

タ・カ・ハル「『お前達アタタは．．。」

タケシ、カスミ、ハルカの3人は面識がある3人組に半ば退屈になりながらも答えた。

？「『お前達は』と聞かれたら．．。」

？「名乗ってあげるのが当たり前．．。」

アイ「ねえ、あの子人組何なの？」

この3人組とは初対面のアイリスがタケシに聞いてきた。ちなみに、後で正体を明かす3人組と初対面なのは、アイリスとベル、そしてリュウカである。

タ「まあ、アイリス。とりあえず、聞いてやってくれ。」

タケシはため息をつきながら、アイリスに答えた。

？「宇宙の破壊を防ぐため・・・」

？「宇宙の平和を守るため・・・」

ベ「私、もう飽きた。」

ハル「お願いだから、最後まで聞いてあげて。」

？「恋と成熟の悪を貫く・・・」

アイ「はあく、長いなあ。」

リュウ「回りくどいですしね。」

？「お茶目で恋の敵役・・・」

？「カミオタイ！」

？「ナカオタイ！」

？「シモオタイ！」

カミ「ロケット団あるところ・・・」

ナカ「世界は・・・」

シモ「宇宙は・・・」

カミ・ナカ・シモ「君を待っている！」

パチパチパチ

タケシ達は、突然現れたロケット団3人組（通称：○山線トリオ）に、ご苦労様と言いたげに拍手をした。

カミ「なんだ！ その薄いリアクションは！」

ナカ「そうだが、年越し企画以来の出演だということになんなんだこの扱いは。」

タ「あー、いや。なんかこの展開に慣れ過ぎて逆になんとも思わなくなっていてね。」

アイ「それに、アタシとベルとリュウカはあんた達のこと知らないし。」

シモ「なんだよその理由（泣）。」

カミ「泣くな、シモオタイ。」

ナカ「そうだ、泣いてる暇があったらさっさとここからズラかるぞ。」

「

泣いているシモオタイを慰めるカミオタイとナカオタイ。その光景にタケシ達は引いていた。ちなみに、年越し企画の話と本編の間軸は全く違うのでご注意を。

カ「はっ、そんなことよりポケモン達を返しなさいよ！」

ナカ「ふん、返せと言われて返す悪党が何処にいる。こいつらはありがたく頂戴するぜ。」

○山線トリオは、その場を立ち去ろうとする。

ベ「そうはいかないわよ。出てきて、チャオブー！」

チャオ「チャオブー！」

ベルはポケモン達を取り返すため、開口一番にチャオブーをボールから出した。

タ「俺も行くぞ。」

カ「アタシも。」

ベルに続いて、タケシはグレッグル、カスミはサニーゴを出した。ハルカとアイリスとリュウカは○山線トリオに気付かれないように、ポケモン達を解放しに行った。

ナカ「ちっ、少々痛い目を見ないと分からないようだな。デンチュラ達よ、エレキネット。」

ナカオタイは数匹のデンチュラを投入し、エレキネットを指示した。

チャオ「チャオ!?!」

サニ「サンゴ!?!」

グレッグルは持ち前の能力でなんとかかわしたが、チャオブーとサニーゴは避けきれずにエレキネットの餌食となってしまった。

タ「グレッグル、エレキネットをどくづきで引きちぎれ。」

グレッグルはタケシの指示通りにどくづきでエレキネットを引きちぎった。

カ「ありがとう、タケシ。」

ベ「感謝するわ。」

タ「ああ、カスミ、ベル。ここから反撃するぞ!」

カ・ベ「了解!」

そして、タケシ達の反撃が始まった。

タ「グレッグル、かわらわり。」

ベ「チャオブー、ヒートスタンプ。」

カ「サニーゴ、げんしのちから。」

グレッグル、チャオブー、サニーゴの3匹はデンチュラ達に攻撃を仕掛ける。

ナカ「デンチュラ達よ、こつそくいどうでかわせ。」

○山線トリオのデンチュラ達はグレッグル達の攻撃をこつそきいどうでかわす。さらには、

ナカ「シグナルビームで蹴散らすんだ！」

デンチュラ達のシグナルビームをグレッグル達はなんなくかわしたが、シグナルビームの着弾点がまづかった。

キノココ「キノー!!!」

ポツポ「ポー!!!」

スピアー「スピッ!!!」

森の木々が倒れていきそこからポケモン達が逃げ出していく。

カ（はっ、あの場所は!?!）

カスミはあることに気付き、そして○山線トリオに対する怒りが爆発する。

カ「アンタ達だけは絶対に許さないわ! 大事な仲間の思い出をよくも踏みにじったわね。」

タ「それに、森をこんなメチャクチャにして！」

ベ「覚悟しなさい！」

3人の怒りの形相に、○山線トリオは恐怖を感じた。

カミ「なあ、これって．．．。」

ナカ「いつものあれだな．．．。」

シモ「それじゃあ、準備しておくか．．．。」

○山線トリオは諦め気味に言った。

タ「グレッグル、どくばり！」

カ「サニーゴ、じこさいせい。続けてとげキャノン！」

ベ「チャオブー、ニトロチャージ！」

3匹の最大パワーでの攻撃がデンチュラさらには○山線トリオに炸裂した。そして、

カミ・ナカ・シモ「．．．やな気分」。．．」

○山線トリオは攻撃はデンチュラと共に星になった。バトルを終えたカスミは血相を変えて先程のシグナルビームの着眼点へと向かった。気付かれずにポケモン達を解放することに成功したハルカ、アイリス、リユウカも合流した。

カ「……………」

タ「どうした、カスミ？ それにさっき言っていた仲間ってサトシの事か？」

ハル「えっ、サトシ？ ここがサトシと何か関係あるの？」

タケシとハルカは首を傾げながらカスミに聞いてみた。

カ「うん。ここはね、サトシが初めてポケモンをゲットしたところなの。なかなかポケモンをゲットできなかったサトシがやつと苦労してここでキャタピーをゲットしたのよ。その頃、アタシはサトシについていたからその苦労もよく知ってるから、ここを荒らしたロケット団が余計に許せなかったの。」

カスミは悲しげにサトシが初めてポケモンをゲットした時のことをタケシ達に話した。

ハル「へえ、サトシも最初はトレーナー初心者だったんだね。」

ベ「今の姿からは想像もできないわ。」

リュウ「サトシさんもここから努力を重ねてきたんですね。」

アイ「まあ、今でも子どもな性格は変わらないけどね。」

アイリスの言葉にカスミは「確かに」と言いながら少しばかりの笑みを見せた。

タ「なあ、カスミ。いつまでも、悲しんでたって仕方ないぞ。」

ハル「そうよ。サトシだって、カスミのそんな顔見たら心配するわよ。」

タケシとハルカの励ましにアイリス、ベル、リュウカの3人もうんうんと頷く。

カ「そうよね。こんな顔、サトシが見たら心配どころか笑われちゃうのがオチね。」

カスミは立ち上がって皆に満面の笑みを見せた。

ハル「そうこなくっちゃ。その笑顔がカスミらしいかも。」

タ「よし、かなり時間食ったけどここを抜けるぞ。」

こうして、タケシ達は突然のアクシデントはあったものの、なんとかトキワの森を抜けることができた。ちなみに、タケシ達が森を抜けるためにかかった時間はサトシ達が森を抜けるためにかかった時間の5、6倍はかかったそうだ。

つづいて、後書きシヨ―

またまたあの災難・・・（後書き）

カミ・ナカ・シモ「ちよつとなんだ！ あの扱いは！」

天「なんだよ、文句あるのか。」

カミ「大いにある。」

シモ「これじゃあ、ムサシとコジロウ、ヤマトとコサンジと一緒にやないか。」

天「俺はあくまでヤストシさんのキャラ設定を参考にお前たちを再現したつもりだが、それが何か。というかシモオタイ、お前から前にも同じこと言わなかったか？ ちなみに、コサンジじゃなくてコサブロウな。」

ナカ「あまり再現できてないんじゃないか。お前の米粒ほどの文章構成能力のせいで。」

天「おいお前ら、あまり好き勝手言ってるともう二度と出してやんねーぞ（怒）。」

カミ・ナカ・シモ「調子に乗りすぎました。すみません（汗）。

「」

天「それでよし。さて最後になりましたが、こんな駄文でよろしかったら感想よろしくお願いします。」

ヤストシさん、天の河の文章構成能力の無さのせいで、山線ト

リオを忠実に再現できなくてごめんなさい・・・。しかし、これからも頑張っていきます。

タケシ奮闘！（前書き）

こんなサブタイですが、そのような描写は少ないと思います。
オイッ！

今作初めて、タケシのアレが発動します。同時にカスミの意外な
事実が判明します。

タケシ奮闘！

トキワの森を抜けたタケシ達はニビシティに到着していた。

タ「みんな、カスミとハルカは知っていると思うがここがニビシティだ。」

ハル「なんか、久々かも。」

タ「ホントね、懐かしいわ。」

リュウ「静かな雰囲気がいい街ですね。」

それぞれ、ニビシティの印象について漏らしていた。アイリスやベルにも、好印象だったようだ。

ハル「ねえ、タケシ。久しぶりにタケシの兄弟に会いたいかも。」

カ「アタシも会いたいわ。」

タ「ああ、別に構わないぞ。」

タケシの返答に、ハルカとカスミはパアアと互いに顔を明るくさせる。

アイ「タケシって、兄弟いたの？」

タ「ああ、上からジロウにサブロウ、ヨモコ、ゴロウ、ムツコ、ナナコ、ヤオキ、クロウ、トウコ。俺を含めて、10人兄弟だ。」

べ「そ、そんなにいるの!？」

ベルはタケシの兄弟の多さに絶句した。余談だが、首藤剛志の小説版では21人兄弟と言う設定になっている。

タ「まあ、会えば分かるさ。俺の家まで案内するよ。」

そんな会話が繰り返されている中、一行はタケシ宅へ向かうことにした。

?「あら、タケシ君とハルカちゃんじゃない。」

誰かがタケシとハルカの名前を呼んだので、声のする方へ向くと以前あったことのある人物がいた。

タ・ハル「サ、サオリさん!」

そこに立っていた人物、それはトップコーディネーターの一人でありハルカのがれの人物でもあるサオリだった。ハルカはサオリに気付くと、駆け寄って声をかける。

ハル「サオリさん、お久しぶりです。ニビシティに帰ってたんですね。」

サ「ええ、私いろんな所に行ったけど、やっぱり自分の生まれ故郷が一番だわ。」

サオリはハルカに笑顔で答える。

タ「自分もです！ まさか、同じ故郷の地でお会いできるとは何かの縁、どうですかこれから一緒に・・・うつ！？ しびれびれ・・・」

グレ「ケツ。」

タケシはいつものようにサオりにナンパを仕掛けるも、これもいつものようにグレッグルからのどくづきを食らう。のびているタケシをグレッグルはんーんーと鳴きながら、引きづっていく。ちなみに、タケシは以前からサオリによく声を掛けては撃沈していたという。

サ「ふふふ、タケシ君も面白いポケモンをゲットしてるのね。」

ハル「アハハハハ・・・。」

サオリは突然のタケシのナンパにきよとんとするも、主人にどくづきを食らわしたグレッグルに興味を示したようだ。隣にいたハルカは引きつった笑みをするしかなかった。

アイ「ねえ、タケシってナンパ癖があるの？」

遠目で一部始終を見ていたアイリスは、カスミに聞いてみた。

カ「ええ、アタシとサトシで旅をした頃からよ。どうもあれは、治しようがないわね。でも、ストッパーがグレッグルだとは驚いたわ。」

タケシのナンパ癖について知ったアイリス、ベル、リュウカは苦笑し、改めて人って一緒にいないと分からないものだと思った。ちなみに、タケシのストッパー役は最初はカスミ、次にマサト、そして現在のグレッグルに至る。

その後ハルカがのびているタケシに代わってサオリにアイリス、ベル、リュウカを紹介し、しばらくしてサオリと別れて、改めてタケシの家へ向かうことにした。そしてタケシの家へ到着すると、

サブロウ「あつ、タケシ兄ちゃんだ。」

ムツコ「おかえり、タケシ兄ちゃん。」

帰って来たタケシを笑顔で迎えるタケシの弟と妹達。その様子に、ハルカ、アイリス、ベル、リュウカも自然と心が和んできた。

タ「みんな元気そうだな。ところで、ジロウ。ジムの調子はどうだ？」

ジロウ「ばつちりだよ。もちろん、ポケモン達も絶好調だよ。ところで、そちらの方々は……。」

ジロウはハルカ、カスミ、アイリス、ベル、リュウカに目をやっ

た。ジロウはハルカ、カスミとは面識があるが、アイリス、ベル、リュウカとは初対面である。

タ「ああ、ハルカとカスミは知っていると思うが、アイリスにベル、リュウカだ。」

ジロウ「お久しぶりです、ハルカさん、カスミさん。そして初めまして、アイリスさん、ベルさん、リュウカちゃん。」

ハル・カ・アイ・ベ・リュウ「「「「こちらこそ。」」」」

キバゴ「キバツ！」

一通りのあいさつを終えた後、タケシは女子5人を自宅に招き入れた。ちなみに、今回初めてキバゴが登場したが、オノノクスに進化させようかどうかで悩んでいたわけであり、決して忘れていたわけではないので悪しからず。

タ「随分、台所が綺麗に片付いているけど、どうしたんだ？」

タケシは台所が綺麗に整頓されていることに気がついた。家事全般が壊滅的な自分の両親がここまでできるとは思えないので尚のこと不思議に思った。

ジロウ「昼にサトシ兄ちゃん達が来たんだよ。その中にデントって人がいたんだけど、その人がしてくれたんだ。その上、デントさんの料理、とても美味しかったんだよ。」

タ「へえ、そうなのか。」

タケシはデントの行いに感心し、今度会ったときに御礼を言っておこうと思ったのだ。夕食時になると、ミズホとムノーが帰ってきた。

ミズホ「ただいまってタケシ帰ってたの？」

タ「お帰りお袋と親父。それよりもお袋、その大量の紙袋はなんだ？」

タケシはミズホとムノーが両手に持っている大量の紙袋に気付き、ミズホに尋ねた。

ミズホ「ムノーちゃんと久々にデートしてたら、ちよつと買い込んで買って．．．。」

タ「あのなあ、今うちの家計がどれだけ苦しいか分かってんのか？」

タケシは少々怒り交じりにミズホを問い詰める。だが、自由奔放な性格のミズホは、

ミズホ「あら、タケシ。いつの間に家計簿なんか付けるようになったのかしら。ほらほら、そんなに怒らないの。ちゃんと、夕食のおかずも買ってあるから。」

タ「誰のせいで家計簿付けるようになったと思ってんだよ．．．。」

ミズホ「もう、そんな所で突立ってないで行きましょう。ホント、タケシの頭は岩タイプなんだから。」

タケシは呆れていたが、それを無視するかのようミズホはリビ

ングへと向かう。それにつられてムノーもリビングへ向かった。

タ「はあ……。」

タケシはため息をつきかつ少々重い足取りでリビングへと向かう。

ミズホ「あら久しぶりね、カスミちゃんにハルカちゃん。それに、アイリスちゃんにベルちゃん、リュウカちゃんね。タケシから聞いたわ。」

カ「お久しぶりです。タケシのママさん。」

ハル「私も、お久しぶりです。」

アイ・ベ・リュウ「っ」はじめまして。「」

ミズホ「ふふふ、今夜はゆっくりしていいね。あつ、そういえばカスミちゃん。今度、ポケモン水中シヨウがあるんですけどね。」

カ「ええ、どうして知ってるんですか？」

ミズホ「このポスターを見たからよ。」

ミズホは一枚のポスターをカスミ達に差し出す。そこには、『ハナダ水中シヨウ！ カントーの人魚姫、ジムリーダーカスミ舞う！』とデカデカと書かれていた。そのポスターに、

カ「もっつ、姉さん達ッたら／＼／」

こんな派手なポスターを作るのは自分の姉達を置いて他にはいな

いと思ったカスミは、恥ずかしさのあまり顔をカアアと赤くさせた。ミズホ「あら、別に恥ずかしがることじゃないわよ。それに、カスミちゃん。カントーのポケモンコンテストでいい成績だったじゃない。」

ハル「あっ、そうだった。カスミ、カントーのグランドフェスティバルで初出場でベスト4に残ったんだってね。すごいかも。」

ハルカはふとカスミがコーディネーターとしてコンテストに出場していたことを思い出し、カスミをほめる。

カ「ハルカを見ていて興味が湧いたから、出てみたの。実際に体験して分かったんだけど、どのコーディネーターも強者ぞろいだっただわ。」

カスミはサトシがイツシュ地方で旅をしていたときに、カントーのコンテストに出場していた。水中ショーで鍛え上げたカスミとカスミのポケモン達の演技は、コンビネーションも抜群で、グランドフェスティバルでも初出場とは思えないくらいの高評価を審査員から受けるほど魅力あるものだった。惜しくも、グランドフェスティバル準決勝で敗れはしたものの、その高い演技力から「カントーの人魚姫^{マーメイド}」という別名が付いた。かつて、「ハナダ美人三姉妹の出がらし娘」とまで言われていた彼女だが、今や本業の水中ショーでも花形スターに躍り出るほどに成長している。

アイ「カスミ、すごいじゃない！」

ベ「ホントね、でも私はバトルのほうがいいかも。」

リュウ「今度の水中ショー、みんなで見に行きましょう。」

ハルカに続き、アイリス、ベル、リュウカがカスミを褒め称える。

カ「みんなありがとう。水中ショー頑張るわ。」

ハルカはみんなの激励に、今度ハナダジムで開かれるポケモン水中ショーに向けて、改めて意気込んだのだった。

ミズホ「ねえ、この際だからこのジムも水タイプ専門のジムにしない？」

ミズホは突然ジムの運営方針について話し出す。

ジロウ「えっ？」

タ「お袋、あのなあ〜（怒）」

ミズホの突然の提案に戸惑いを隠せないジムリーダー・ジロウ。その後ろで怒り混じりに語尾を強めるタケシ。

ムノー「わしはミズホちゃんがいいんならそれでいいんだけどなあ。」

ミズホ「さすが、ムノーちゃん。話がわかるわ。」

ミズホは以前、2回ニビジムのリフォームを試みたことがある、1回目は岩タイプ専門のニビジムをタケシの許可なく水タイプ仕様に改築、2回目はリフォーム業者（その正体は、ムサシとコジロウらであり、業者になり済まして、ポケモン達を奪うのが目的だっ

た。)を雇って改築するということだった。もちろん、その2回ともタケシに大目玉を食らうことになったが、反省するそぶりはまったくもってない。挙句には、ジロウのジムリーダー認定の時の騒動でも、ジムを辞めて雑貨屋を開こうと提案してまたタケシの大目玉を食らうことになったのだ。そして今回も周りを無視して2人の世界に入るミスホトムノ。その光景にタケシの怒りが爆発した。

タ「あんたらなあゝ(怒)、カントーに2つも水タイプのジムはいらん!!!!!!!!!!!!!!」

ジロウ「タ、タケシ兄ちゃん落ち着いて(汗)」

怒り心頭のタケシを必死で抑えるジロウ。その他の弟や妹たちもタケシを抑える。その光景に、カスミ、ハルカ、アイリス、ベル、リュウカはただ苦笑していた。カスミに至っては、同じ自由奔放で自分勝手な家族を持つ身としてタケシに同情していたか・・・

タケシの怒りが収まったところで、夕食を摂った。夕食後、ミス

ホの水ポケモン達を見てカスミが興奮したり、ミスホとムノーが勝手にリフォームの話し合いをしているところにタケシの怒号がまた飛び交うなどいろいろあったが、入浴、歯磨きを済ませた後は各々眠りについた。翌朝、一家にお礼を言った後、再びサトシに追いつこうとニビシティを後にした。果たして、彼らはいっサトシ達に追いつけるのだろうか・・・

続いて後書きシヨ

タケシ奮闘！（後書き）

タ「いろんな意味で疲れた．．．。」

天「お疲れ様．．．。」

タ「まったく．．．、お袋も親父も何考えてんだか。」

天「さすがにあの2人は俺でもどうしようも出来ない。関わったら面倒なことになりそうだから。おっと、これは言い過ぎだったか．．．。」

タ「いや、お袋と親父が持ってくるものと言ったら、ほとんどロクなものじゃないからな。無理ないよ。」

天「家事全般と同時に、ポケモンドクターの勉強もしてたんだろ。大学生の俺も見習いたいくらいだ。ついでに、自分達の子供の面倒や家事全般を長男に押し付けるタケシの両親の人格を疑いたくなかった。」

タ「ああ、ジロウ達は気を使ってくれるから、そんなに苦じゃないさ。お袋と親父はあれでも俺達のことを思ってるんだ、ここは俺に免じて許してくれ。」

天「まっ、タケシがそこまで言うのなら仕方ないか。おっと、もう時間だ。最後になりましたが．．．。」

タ「よろしければ感想よろしくお願いします。」

キツサキシティにて・・・(前書き)

サブタイが恐ろしいくらい思いつかなかった・・・

この話は、サトシ達が旅に出る前日でのノゾミとスズナの会話です。
ノゾミのキャラが著しく崩れるので、注意が必要です。

キツサキシティにて・・・

ここはシンオウ地方のキツサキシティ。シンオウのグラウンドフェスティバルで優勝し晴れてトップコーデイネーターの仲間入りを果たしたノゾミの出身地でもある。只今、トレーナーズスクールからの先輩でキツサキシムのジムリーダーでもあるスズナの家で談笑している。

スズナ「そうだ！ ノゾッチ、カントーに行かない？」

突然、スズナはノゾミにカントー地方に行こうと提案した。そのスズナにノゾミは、

ノゾミ「スズナ先輩、なんですか急に。その『そうだ、京都に行く』のノリは。」

そんなスズナにため息をつきながら、ノゾミは答える。

スズナ「ほら、今度の夏に『ワールドチャンピオンリーグ』があるでしょ。アタシ、出場しようと思うんだ。ジムにいるよりも旅に出たほうが、いろんなトレーナーと触れ合える機会があるしね。それにただでさえ、キツサキシムの挑戦者少ないし。」

スズナはどうやら、サトシと同じように『ワールドチャンピオンリーグ』に出場する気のような。スズナの言うとおり、キツサキジムは寒い気候のせいか、挑戦者に敬遠されがちである。それでなくとも挑戦者の出入りにはらつきがあるジムに居残るよりは、旅に出て出会ったトレーナーとバトルする方がはるかに効率が良い。ちなみに、スズナは協会公認のジムリーダーであるため既に出場条件を

満たしている。尚、ジムリーダーがこの大会に出場する場合、代わりのジムリーダーがいなければジムの休業届を協会の方へ提出しなければならぬ。

スズナ「それにノゾッチ。あなたも『ワールドチャンピオンフェスティバル』に出場するんでしょ。だからよ。」

ノゾミ「そりゃあ、トップコーディネーターになったアタシの能力が世界でどこまで通用するのか試してみたいですし、この大会にはコーディネーターの成り立てのころから出場したいと思ってました。確かにトレーナーもコーディネーターも腕を磨くには旅が一番いいとは思いますが、なんでカントーに？」

スズナ「ノゾッチの言うとおり、カントーじゃなくても他の地方でもいいわ。でも、カントーにはあの子がいるじゃない。」

ノゾミ「あの子って？」

ノゾミはスズナが最後に言った『あの子』が気になった。

スズナ「あら、とぼける気？ ノゾッチ、最近あの子にお熱みたいじゃない。」

スズナの言ったことに、ノゾミは、

ノゾミ「えっ、別にサ、サトシのことなんか……。」

ノゾミは思わずサトシの名前を出してしまった。その反応を見たスズナはニヤリとして、

スズナ「あら、アタシ別に『あの子』と言っただけで『サトシ君』
とは言っていないわよ。」

どうやら、ノゾミはスズナの策略（？）にはまり、墓穴を掘った
ようだ。その証拠に顔を急に真っ赤にさせている。

スズナ「だって、ノゾッチのここ数日の話、サトシ君のことしか聞
いてなかったし。」

スズナは小悪魔のごとく、さらにノゾミを責め立てる。

ノゾミ「べ、別にそんなことはないですよ！ ほら、コンテストの
話もしてたでしょうノノノ」

ノゾミは弁解するが、顔を真っ赤にしながら言っていたので説得
力がなかった。それは、いつもクールな容姿とはかけ離れた恋する
乙女の姿だった。

スズナ「確かにコンテストの話もあったけど、その時はいつの間
にサトシ君の話題になってたよね？」

ノゾミ「.....」

スズナの責めにノゾミは半分涙目になりながら、とうとう黙り込
んでしまった。

スズナ「（ちよつと、からかい過ぎたわね。）ごめんね、ノゾッチ。
でもこのままでいいの？ ヒカリちゃんもサトシ君のこと好きなん
でしょ。ヒカリちゃんにサトシ君とられちゃっても知らないわよ。」

ノゾミ「そ、それは嫌です！ アタシ、ヒカリにはコンテストでも恋愛でも負けないって決めているんです！」

ノゾミはヒカリにとって初めてのライバルである。それはノゾミ自身も認めており、お互いに実力を高められる良い友好関係を持っている。同時に同じ人物に好意を抱く者として、恋敵同士でもある。

スズナ「だったら、行動あるのみ！ 早速、カントーへレッツゴー！」

ノゾミ「仕方ないですね・・・（汗）。まあ、アタシもこのままです終われないし、一緒に行きましょう。」

こうして、スズナとノゾミはカントーへ向かうためにそれぞれ旅支度を始めた。そして、翌朝、カントー地方へ向けて出発したのだった。

続いて後書きショー

キツサキシティにて・・・(後書き)

天「やっと、ノゾミを出せた。」

ノゾミ「出してくれるのは嬉しいんだけど、アタシの扱いちょっと酷くない?」

天「まあまあ、ちょっとくらい良いじゃないの。」

ノゾミ「ちょっとどころじゃないような気がするんだけど・・・。」

スズナ「気にし過ぎない方がいいわよ、ノゾッチ。恐らく、作者のアタシとノゾッチとの関係のイメージなんだから。」

天「ご名答。ノゾミとスズナで連想したら、先輩であるスズナに振り回されるノゾミというのしか浮かんでこない。」

ノゾミ「まあ、確かにスズナ先輩には敵わないという気持ちがあるけどもあるんだけど・・・。」

スズナ「それ程ノゾッチっていじりがあるってことよ。」

ノゾミ「・・・。」

天「さて、変な空気になって来たので、今回はこれにてお開き。」

スズナ・ノゾミ「よろしかったら、感想よろしくお願いします。」

「

おつきみ山々前編（前書き）

視点をサトシ達に戻します。おつきみ山のニビシティ側のふもとか
らこの話が始まります。ヒカリがちょっぴり大胆に・・・

とりあえず、ご覧ください。

おつきみ山々前編

夜も深くなつた頃、サトシ、ヒカリ、デント、マサトの4人はおつきみ山のニビシテイ側のふもとのポケモンセンターで一夜を過ごすことになった。ポケモンセンターに入ると、ポケモン達の体力を回復させるためにジョーイが居るカウンターへと近づく。デントは、イツシュ地方とは雰囲気が違うジョーイに戸惑っていたが、すぐに慣れたようだ。

ジョーイ「遅くまでご苦労様です。」

サ「あの、ポケモン達の回復をお願いします。」

ジョーイ「分かりました。それでは、お預かりします。」

ポケモン達の体力回復のため、ジョーイにポケモン達を預けるサトシ。続いて、ヒカリ、デントもジョーイにポケモン達を預けた。しばらくして、

ジョーイ「お待たせしました。お預かりしたポケモン達はみんな元気ですよ。」

サ「ありがとうございます、ジョーイさん。」

サトシはジョーイに礼を言う。するとデントが、

デ「あの、ジョーイさん。僕達4人が泊まれる部屋はありますか？」

デントは自分達4人が泊まれる部屋はないかとジョーイに聞いて

みた。

ジョーイ「少々、お待ちください。」

ジョーイは確認のためカウンターから離れる。そしてまたしばらくして、

ジョーイ「ごめんなさい、今2人部屋が1つと1人部屋が1つしかあいてないの。」

サ「それじゃあ、誰か一人野宿することになるなあ。俺行くよ。」

マサ「ええ！？ それじゃあ、サトシに申し訳ないよ。」

デ「それだったら、全員で野宿するよ。」

仲間思いのサトシは3人を気遣って自分が野宿すると提案したが、いつも無理をさせてる思いでいるマサとデントは反論する。3人が悩んでいるところへ、ヒカリが何か閃いたように、

ヒ「あ、あのさあ。アタシとサトシが一人部屋で一緒に寝るってのはどうかな・・・。」

ヒカリは控えめにサトシ達に言う。

サ・マサ・デ「「ええええ！？」」

ヒカリの大胆発言にサトシ達は驚愕した。

サ「おい、ヒカリ大丈夫か。仮にも年頃の男と女と一緒に寝るって

のはまずいだろ。」

超が何個もつくほど鈍感なサトシでさえ、そのことには多少認識している。

ヒ「や、やっぱり駄目かな・・・。」

ヒカリは涙目＋上目遣いでサトシを見つめる。さらには、

ジョーイ「（ふふふ、そういうことね。）一人部屋のベッドは比較的大きいから、2人分は確保できるわ。サトシ君、一緒に寝てあげたら。」

ヒカリのサトシに対する好意を汲み取ったジョーイが、ヒカリを援護するようにサトシに言う。

サ「はあ、分かったよ。」

ジョーイの説得もあり、サトシは折れて、ヒカリと一緒にの部屋で寝ることを承諾した。そのやりとりにマサトとデントは苦笑していた。

ヒ「ホント！？ やったあ！ サトシ、ありがとう。（これでサトシを独り占めできる！）」

ヒカリは嬉しくなり、サトシに飛びつきりの笑顔を見せた。ヒカリは他の女子達がない間にサトシと良い関係を気付きたいと思っていた。玉碎覚悟でこの提案をしたが、その提案が受け入れられたので嬉しくてたまらないようだ。そして早速サトシを引張って部屋へと向かった。結局、1人部屋をサトシとヒカリ、2人部屋をマサ

トとデントが使うことになった。2人部屋ではこんな会話がなされていた。

デ「ねえ、マサト。このことはみんなには内緒にしておいた方がいいと思うよ。」

マサ「うん。僕もそう思う。特にお姉ちゃんに知られたら．．．。」

デ「知られたら？」

マサ「ぼ、僕が殺される．．．。」

デ「．．．．．。」

マサトの発言に、デントは言葉を失った。会話の内容通り、もしサトシとヒカリが同じ部屋で寝ているという事がサトシ好きの女子達の耳に入ったらただ事では済まされない。ハルカに関しては、阻止できなかったマサトをしばくのはほぼ間違いないだろう。ハルカファンの皆さん、ごめんなさい（汗）

一方、サトシとヒカリが寝る1人部屋では、

ヒ「スウウウウ．．．．．。」

ヒカリは静かな寝息を立ててながら自分の腕をサトシの腕と絡ませながら、幸せそうに寝ている。

サ「はあ、寝にくい．．．。」

サトシは恥ずかしさで寝られずにいる。以前、起きたらヒカリが寝ていたという事はあったが、今回は初めからヒカリと寝るのであ

る。超が何個もつくほどの鈍感なサトシでさえ、年頃の女の子と寝ることに多少意識している。

サ（それにしても、ヒカリの寝顔、結構可愛いなあ……。って、何考えてんだ俺は！？）

色恋沙汰に全く興味のないサトシがヒカリの寝顔に見惚れている。サトシにも、そのような気持ちが芽生えてきたのだろうか……

サ「少しなら、ばれないかな。」

サトシはそう言うと、ヒカリの顔に近づきそして頬に触れるだけのキスをした。そして、赤くなった顔を隠しながら眠りについた。

翌朝、サトシとヒカリはほぼ同時に起きた。

ヒ「ん〜、あっ、サトシおはよう／＼／」

サ「あ、うん。おはよう、ヒカリノノ」

ヒカリとサトシはお互いの顔を見て朝の挨拶をするが、恥ずかしさのあまり目をそらしてしまった。

サ「ろ、ロビーに行こうか・・・。」

ヒ「うん。アタシ着替えるから、デント達のところに行つてて・・・。」

サ「分かった。」

サトシは部屋を出ていった。そして、みんなロビーに集まり、

サ「そろそろ、出発するぞ。」

ヒ「もう、準備バッチシよ。」

マサ「こっちも。」

デ「いつでもいいよ。」

サトシ一行は、ポケモンセンターを後にして、おつきみ山へと入っていった。

後半へ続く・・・

おつきみ山々前編（後書き）

サブタイが恐ろしいくらいに思いつかない・・・

おつきみ山々後編 (前書き)

前回の続きです。新たにアニメポケから新たなキャラを出します。

おつきみ山々後編

サトシ一行は、おつきみ山の中を次の街ハナダシティに向けて歩いてきた。サトシのピカチュウとヒカリのポツチャマは、仲良く並んで歩いている。

マサ「そういえばさあ、デント。『ポケモンソムリエ』って何をするの？」

マサトはデントの職業、『ポケモンソムリエ』について、デント自身に聞いてみた。

デ「ポケモンソムリエは、ポケモンとトレーナーの相性の診断、友好を深めるためのアドバイスを行う職業だよ。ポケモンソムリエ協会から認定されるとS・A・B・Cの4つのランクに分けられるんだ。ちなみに、僕はAランクのポケモンソムリエだよ。女性の場合は、『ポケモンソムリエール』って呼ばれてるよ。」

マサ「へえ、ポケモンに関する職業もいろいろあるんだね。でも、『ポケモンソムリエ』は知らなかったなあ……。」

ヒ「アタシも知らなかったわ。」

デ「イッシュ以外じゃ、知られていない職業だからね。無理もないよ。」

サ「そういえば、『ポケモンソムリエール』でえらい目に遭ったんだっけ……。」

サトシが苦笑しながら、ある体験を思い出す。

ヒ「なにがあつたの？」

ヒカリが聞いたので、サトシはイツシユで体験したあの出来事をヒカリ、マサトに話した。あの出来事とは、イツシユで出会ったＣランクのポケモンソムリエル・カベルネに手持ちポケモンとの相性診断を頼んだが、全ポケモンとの相性は最悪と言われ、手持ちの総入れ替えを強要させられた。丁度その時、デントが来たので、カベルネが勝つたらサトシの手持ちを総入れ替えするという条件でデントがバトルを引き受けたのだ。そのバトルは、デントが勝つたためサトシは手持ちの総入れ替えをせずに済んだのである。ちなみにカベルネはかつてサンヨウジムに挑戦した時に敗北してデントからポケモンとの相性を指摘されたことを根に持っている。その時のデントの言い方が酷いと彼女は言っているが、デント曰く、そんな酷い言い方はしていないとのこと。

ヒ「そ、そんなことがあつたんだ……。」

マサ「サトシも大変だね……。」

ヒカリとマサトは苦笑を浮かべた。

サ「ホントだぜ……。デント、あの時は酷いじゃないか。」

デ「ごめんごめん、でもサトシの他のポケモン達を見てみたって気持ちもあつたから、負けてもいいかなって思ったんだけどね。」

サ「そりゃないよ……。」

サトシはうなだれるようにデントに言った。その光景に、ヒカ
りとマサトはさらに苦笑を浮かべた。

ピ「ピカピー。」

ポ「ポチャー。」

サ「どうしたんだろう、ピカチュウ達。」

ヒ「そうね、どうしたの？ ポツチャマ。」

サトシとヒカリは、ピカチュウとポツチャマに呼ばれたので行っ
てみると、そこにはピカチュウとポツチャマの他に1匹のマリルが
いた。

マリル「リイル、リイル。」

マリルは困ったような顔をしながら、サトシ達に問いかける。

マサ「変だな。おつきみ山にマリルはいないはずんだけど・・・」

デ「迷子なんじゃないかな、このマリル。」

サ「そうか、それじゃあお前の持ち主のトレーナーを探さないとな。」

ヒ「そうね、大丈夫よマリル。あなたのトレーナーはアタシ達が見
つけて見せるから。」

マリル「リイル!」

サトシとヒカリの励ましに、笑みを見せるマリル。

サ「……………」

ヒ「ん? どうしたの、サトシ。」

サトシが急に黙り込んだので、ヒカリが首を傾げながらサトシに聞いてみた。

サ「なあ、ヒカリ。もしかしてこのマリル、コトネのマリルだった
りして。」

サトシはシンオウでの旅でよく迷子になるマリルをふと思い出したのだ。そのマリルは、コトネというという女子トレーナーのポケモンである。コトネとは、とある街で開催されていた『ジョウトフエスタ』で出会い、途中までサトシや友人のカズナリ達とともに一緒に旅してきた少女だ。ちなみに、このコトネもサトシに好意を持っている。

ヒ「まさかあ〜。」

ヒカリはサトシの言ったことを軽く受け流していた。

マリル「リル、リイル!」

マリルは『コトネ』という単語に反応し、鳴き出した。

サ「えっ!? お前、コトネのマリルなのか!?!」

ヒ「嘘っ!?!」

マリル「リル!」

サトシとヒカリは驚愕した。マリルはにっこりとしている。

マサ「ねえ、2人とも。コトネって誰?」

デ「それ僕も気になっていたんだ。」

マサトとデントは当然の疑問をサトシとヒカリにぶつけてきた。サトシは淡々と答える。

サ「ああ、コトネは以前俺がヒカリとタケシとでシンオウを旅した時に出会ったジョウト出身のトレーナーなんだ。このマリルは恐らくそのコトネのだろう。」

サトシ達がこんな会話を交わしているところへ、

?「マリル〜! 何処にいるの?」

マリルを呼ぶ声が聞こえてきた。一応、?と表記しているがコトネである。

コトネ「あっ、マリル。こんなところにいたのね。駄目じゃない、もう。」

コトネはサトシの方を見向きもせずマリルへ近寄る。

コトネ「マリルを見つけて下さって、ありがとうございます。」

コトネはマリルを見つけたサトシ達に向けて、頭を下げながら礼を言う。

サ「久しぶりだな、コトネ。」

コトネ「ん？ その声は、サトシ？ それに、ヒカリンも。久しぶりってことね。」

頭をあげたコトネは久々に再会したサトシとヒカリンに驚いたが、すぐさま挨拶を返した。

ヒ「久しぶりね、コトネ。あつ、マリルを見つけたのはアタシ達じゃなくて、ピカチュウとポツチャマよ。だから、お礼はピカチュウとポツチャマに言ってあげて。」

コトネ「それ、ホント！？ ピカチュウ、ポツチャマ。ありがとうございますってことね。」

ピ「ピカッ！」

ポ「ポチャ〜！」

コトネは笑顔でピカチュウとポツチャマに礼を言う。ピカチュウとポツチャマもコトネに笑顔で返す。

コトネ「それで、サトシにヒカリン。あの2人は？」

コトネはマサトとデントの方に顔を向けた。

サ「こっちはデント。俺がイッシュ地方で出会った仲間だよ。」

デ「初めまして。デントです。」

ヒ「で、こっちはマサトよ。」

マサ「初めまして、僕マサトです。」

コトネ「こちらこそ、デントにマサト。初めましてってことね。」

コトネはマサトとデントに笑顔であいさつする。デントとマサトは初めは戸惑っていたが、コトネがフレンドリーな性格だったので馴染めたようだ。

サ「ところで、コトネ。カズナリはどうしたんだ。」

サトシはコトネと行動を共にしてきたカズナリがどうしているのか聞いてみた。

コトネ「ああ、カズナリとはジョウトの旅が終わった後は、別行動よ。私はシンオウとカントー、カズナリはお父さんの仕事の都合で、ホウエンに行ったわ。」

コトネの話によると、サトシと別れた後、コトネはジョウト地方のジムバッジを全て集めるためにカズナリと旅をしてきたが、ジムバッジを全て集めてコトネが挑戦したジョウトリーグが終わった後は、カズナリは父親の急な仕事でホウエンに行くことになったという。一方のコトネは、シンオウやカントーでトレーナーとしてさらに腕を磨くため、シンオウを旅し、そして現在はカントーを旅して

いるのである。ちなみに、コトネのジヨウトリーグの結果はサトシの時と同じベスト8だという。

ヒ「それで、コトネはどうしてカントーにいるの？」

今度はヒカリがコトネに質問した。

コトネ「ジヨウトリーグの後、『ワールドチャンピオンリーグ』のことを知ったの。その出場に向けて、シンオウ、カントーのジムバツジを集めているってことよ。今、シンオウは8つ、カントーは4つゲットしたわ。」

ヒ「もうカントーで4つも集めてたんだ。」

コトネ「うん、でも『ワールドチャンピオンリーグ』出場にはまだ足りないわ。これからも頑張らなきゃ駄目ってことね。それで、ヒカリンは？」

ヒ「アタシは、『ワールドチャンピオンフェスティバル』のほうに出るわ。もう、出場条件は満たしているから、サトシ達と旅に出て世界に通用するトップコーディネーターになるためにもっと腕を磨いているの。」

コトネ「凄いじゃない、ヒカリン。」

ヒ「えへへ、ありがとう。」

コトネとヒカリはお互い笑顔で言葉を交わす。その光景に男子一同、微笑ましい気持ちになった。

サ「へえ、コトネも出るのか。俺も出るんだぜ。」

コトネ「サトシもなの！？　じゃあ、私達お互いライバルってことね。」

サトシもコトネとお互い笑顔で言葉を交わす。こうして、コトネもサトシ達と行動を共にすることになったのだが、

コトネ「（ボソッ）ヒカリン。私、まだサトシのこと諦めてないからね。」

コトネがヒカリンに対して、耳打ちで宣戦布告。それに対するヒカリンの反応は、

ヒ「（ボソッ）ア、アタシだって……。コトネには負けないわ。」

同じく耳打ちで宣戦布告。そこへ、

サ「2人とも、何やってんだ？」

サトシはヒカリンとコトネがなにやらコソコソしているので、気になって声をかけた。

ヒ「な、なんでもないわよ／＼」

コトネ「そ、そうよ。サトシは気にしなくていいってことね／＼」

サ「そうか……。」「

サトシは首を傾げながらも歩み始めた。突然、サトシに声をかけ

られたのとサトシに気付かれないように言葉を交わしたつもりだったヒカリとコトネだったが、そのサトシ本人に気付かれたので慌てていた。その証拠に顔がほんのりと赤い。その様子にマサトとデントは、

マサ「ねえ、デント。これから、サトシを巡る争奪戦が激しくならないと思わない？」

デ「うん、当のサトシ本人は彼女達の気持ちに気付いてないみたいだし……。」

マサ・デ「」はあ〜。」「」

マサトとデントは、これからの展開を考えつつ、ため息をついた。

続く

おつきみ山々後編（後書き）

ヒカリ、ピーンチ！ サトシを必死で追いかけている連中を含めたサトシ争奪戦の行方は・・・

ハナダシテイ到着！（前書き）

『ハナダ美人3姉妹』の長女・サクラが登場！

ハナダシティ到着！

サトシ達はおつきみ山を抜け、ハナダシティへの道を歩いていた。現在、サトシは左にヒカリ、右にコトネという並びで2人の少女に挟まれた形になっている。ちなみに、マサトとデントはサトシ達から少し離れて歩いている。

サ「なあ、コトネ。次はどのジムに挑戦するんだ？」

コトネ「うーん、これから行くハナダのジムに挑戦しようと思うんだけど。この間、行ったときにはジムリーダーはいないから出来ないとのことだったわ。それで、おつきみ山で時間つぶしてたってこと。」

コトネはハナダジムに挑戦するようだ。ちなみに現在、ハナダジムのジムリーダーはカスミである。

サ「あー、コトネ。多分、今行ってもジム戦は出来ないと思うぞ。」

コトネ「えっ、なんで？」

サ「ま、まあ、行けば分かるさ。」

コトネ「????？」

サトシの言葉にコトネはさらにクエスチョンマークを浮かべた。サトシの左隣にいるヒカリは納得したような顔をしていた。これまでもお話を読んだ読者ならお分かりだと思うが、ジムリーダーであるカスミはサトシ達を追って、ハルカらとともに現在奔走中である。

当然、ジムにいるはずがない。ジムには、『ハナダ美人3姉妹』と呼ばれるカスミの姉達がいるが、自由奔放な性格のこの3人がまともにもジム戦をやるとは思えない。ちなみに、カスミ達が自分達を追っている事実をサトシ達は知らない。

マサ・デ「.....」

後ろでサトシ達の会話を聞いていたマサトとデントは、心の中で苦笑を浮かべた。ちなみにこの2人も、ジムリーダーが不在なのでハナダでのジム戦ができないという事はすでに知っている。

サ「みんな、あれがハナダシティだ。」

サトシが指差す先にはハナダシティの街並みが目の前にあった。

ヒ「あれがカスミの故郷のハナダシティね。」

コトネ「それじゃあまず、この街のポケモンセンターに行くってことね。」

サトシ達はハナダのポケモンセンターへと向かった。サトシ達が来たハナダシティは、ニビシティ同様、ポケモンジムのある街でジムの専門は水タイプである。その影響でポケモンバトルの他、ポケモン水中ショーの開催や水族館経営などを行っている。再三言うが、ハナダジムのジムリーダーはカスミである。サトシはポケモン達の回復を済ませた後、早速ジムへと向かった。

コトネ「あー、やっぱり閉まってるわ。」

案の定、ジムは閉まっていたので、コトネはがっくりと肩を落と

す。と、そこへ、

？「あら、サトシ君じゃない。」

サ「サ、サクラさん！？」

サトシが声のする方へ顔を向けると、そこにはカスミの姉で『ハナダ美人3姉妹』の長女・サクラがいた。

サ「お久しぶりです。サクラさん。」

サトシは久しぶりに会ったサクラと言葉を交わす。

サクラ「久しぶりね、サトシ君。ところで、そちらにいらっしやるのは、サトシ君のお仲間さんかしら？」

サ「はい。ヒカリ、コトネ、デント、マサトです。」

ヒ・コトネ・デ・マサ「「「初めまして。「「「」

サトシが代わりに自分達を紹介した後、ヒカリ、コトネ、デント、マサトの4人はサクラに挨拶をした。

サクラ「ふふふ、サトシ君ったら、いつの間にかこんな可愛い女の子2人を仲間にしたのね。『両手に華』とはこのことかしら。」

このサクラの何げない一言（特に『可愛い』）に、ヒカリとコトネは一気に顔を赤くさせる。くどいようだが鈍感なサトシには、何故2人が顔を赤くしているのか分かっていないようである。その光景にデントとマサトは苦笑した。

サクラ「それはさておき、コトネちゃんだっけ。ジム戦に来たんだよね。ボタンから聞いてるわ。」

コトネ「あ、はい。」

サクラ「来たところ悪いんだけど、まだジム戦は無理なの。御免なさいね。全く、カスミだったらどこで油売ってるのかしら。」

サ「……………」

サクラはジム戦が出来ないことをコトネに告げると、末の妹・カスミに対して愚痴った。サトシはこのことに関してあまり口をささないようにした。それにしても、ジム戦をカスミに押し付けておきながら、それに対して愚痴るとはあまりにも自分勝手なサクラだ。ついでに言うが、サクラの話の中で出てきたボタンとは、『ハナダ美人3姉妹』の三女でサクラと同じくジム戦をカスミに押し付けた1人である。それに加えて、かなりの毒舌である。ちなみに『ハナダ美人3姉妹』の次女は後に登場予定のアヤメである。

サクラ「まあ、そんな所で突っ立っていても仕方ないから、上がって行って。」

サ「あ、はい。みんなもそれでいいか？」

デ「じゃあ、お言葉に甘えさせて。」

ヒ「アタシも。」

コトネ「私も。ジムの中も見てみたいし。」

マサ「僕も入るよ。」

サクラ「それじゃあ、決まりね。ついておいで。」

サクラはサトシ達をジムの裏側の扉まで案内すると、そこから鍵を開けて中へとサトシ達を招いた。そして、サトシ達はジムの中へと入っていった。

続く+後書きにこの話のウラ小ネタ

ハナダシティ到着！（後書き）

前日にカスミが姉達に電話して、サトシ達を引き留めてくれと頼んだというのは別の話・・・

どうする、ジム戦！？（前書き）

果たして、コトネはジム戦をすることができるのだろうか・・・

どうする、ジム戦!?

前回、ハナダジムの内部へと入ったサトシ達。ジム内の水族館のポケモン達を見ながら、サトシ達とカスミの姉・サクラは進んでいく。そして、バトルフィールド兼水中ショーの会場に到着した。ここでは、3日後に開催される水中ショーに向けての準備が着々と行われていた。

サクラ「今、水中ショーに向けての準備をしているところなの。メインの飾りつけは、開催日前日にまとめてやるから、ジム戦は一応できるわ。だけど、肝心のジムリーダーさんがないからね……。そろそろ、帰ってくるとは思っただけど。」

コトネ「そうですか……。。」

サクラ「ねえ、こんなにも待たせちゃったんだから、この際ジム戦無しでバッジあげるわ。」

サクラはそう言うと、ハナダジムのジムバッジ『ブルーバッジ』をコトネに差し出す。

コトネ「えっ!?!? そ、それはちょっと……。。」

コトネはサクラの提案に戸惑いを見せる。それもそうだろう。ジム戦無しでジムバッジを手に入れるのは、例外を除いてかなり異例だ。

サ「サクラさん、そんなことしたらまたカスミに怒られますよ。」

サトシが困惑するコトネに助け船を出すようにサクラに言う。

デ「僕も、それはまずいと思いますよ。」

カスミと同じジムリーダーであるデントもサトシに続いてサクラに言う。

サクラ「まあ、いいじゃない。ほら、受け取って。お・ね・が・い。」

サクラは押し付けるようにコトネにブルーバッジをさし出す。コトネはさらに困惑する。

サクラ「カスミにはねなきやいいのよ。『ワールドチャンピオンリーグ』に出たいんでしょ？」

サクラはさらにコトネに言う。笑顔で言うてはいるが、やっていることは悪徳セールスマンとほぼ変わらない。そんなサクラに、サトシ、ヒカリ、マサト、デントはドン引きしていた。

カ「ふ〜ん、アタシにはねないようにねえ．．．。」

サクラ「そうそう、カスミに．．．って、カスミ!？」

サクラは突然のカスミの登場にビクツとした。笑顔でサクラに言うカスミだが、目は完全に笑っていない。心なしか、周りにはギャラドスを数匹呼び寄せられるほどのドス黒いオーラを身に纏っている。それを感じたサトシ達は、いつの間にか遠くに避難している。そこには、カスミと同行していたハルカ、アイリス、タケシ、ベル、リュウカがいる。

ハル「あんなカスミ。初めて見たかも・・・。」

タ「俺も初めてだ・・・。」

ハルカとタケシが今のカスミについての感想を漏らす。そして一同、

（正直、恐くて止められない!!!）

同じことを思ったのだ。

カ「アタシがない間に、いろいろとやってたみたいだね。」

サクラ「アハハハハ、なんのことかしら？」

サクラは冷や汗を垂らしながら答える。

カ「とぼける気？ この派手なポスターといい、今の行動といい、きちんと説明してもらおうかしら。」

カスミは水中ショーの派手なポスターをサクラに見せながら、サクラに詰め寄る。

サクラ「・・・あ、そうだ。私やることがあったんだ。」

そう言つとサクラはその場から一目散に逃げ出した。

カ「あつ、ちょっと。サクラ姉さん、待ちなさい!!!」

カスミはものすごい剣幕でサクラを追いかけた。その様子にサトシ達は呆然としていた。その後、アヤメとボタンの仲裁でなんとかカスミを落ち着かせるまでかなりの時間を費やした。そして、ようやく落ち着きを取り戻したカスミはコトネに近づき、

カ「ジム戦に来たんだよね？ 相手してあげるわ。えーと……。」

コトネ「コトネです。本当ですか!?!」

カ「ええ、もちろんよ。あ、アタシのことは敬語じゃなくてもいいわ。年もアタシとそんなに変わらないみたいだし。」

コトネ「じゃあ、それじゃあお願いってことね。私のこともコトネでいいわ。」

カ「分かったわ。コトネ。」

サ「カスミとコトネのバトルか……。2人とも頑張れよ。」

ヒ「頑張って、2人とも。」

コトネ「みんなありがとうってことね。カントーで5つ目のバッジゲットしてみせるわ。」

カ「アタシも全力を尽くして受けて立つわ。」

こうして、コトネとカスミのジムバッジを賭けたポケモンバトルをすることになった。次回、コトネは『ブルーバッジ』をゲットできるのだろうか……。

続いて後書きショー

どうする、ジム戦！？（後書き）

天「はあく、久々の更新疲れた・・・。」

ヒ「随分、かかったわね。」

天「最近、めちゃくちゃリアル生活で忙しかったもんだったから・・・。」

コトネ「でも、暇じゃなかった分有意義だったんじゃない？」

天「まあ、そりゃそうだけど・・・。」

ヒ「それはそうと、あなたサトヒカ派でしょ。どうして、コトネを出したの？」

天「前にも言っただろ、サトシ好きのキャラを出すと。それに散々、ヒカリにはオイシイ所を書いてあげたんだから勘弁してくれよ。」

コトネ「あら、ヒカリン。オイシイ所ってどういふことかしら？」

ヒ「あつ、いやそれはちょっと・・・。」

天「あー、突然変な空気になってきたので今回はこれにてお開き！
それじゃ、最後にコトネ締めよろしく。」

コトネ「次回もポケモンゲットってことね！」

カスミVSコトネー！前編（前書き）

コトネ、ようやくハナダジムでのジム戦です。

言い忘れていましたが、鳴き声が作者の中ではっきりしないポケモンは、鳴き声の描写をカットしますのでそのところはご容赦ください。

カスミVSコトネ！〜前編〜

コトネはジムバッジゲットの為、カスミとのポケモンバトルに挑む。バトルの審判は前回の話でカスミにボロボコにされた（笑）サクラに代わって、アヤメが務めることになった。それにしても、実の妹にボロボコにされる姉って一体・・・（汗）

アヤメ「使用ポケモンは2体、どちらかのポケモンが全て戦闘不能になった時点でバトル終了になります。ポケモンの交代はチャレンジャーにのみ、認められます。2人とも、それでいいかしら？」

カ「ええ、構わないわ。」

コトネ「大丈夫ってことね。」

アヤメ「それでは、バトル開始。」

カ「アタシの最初のポケモンはこの子よ。行っけー、マイステディ
ー！！！！」

コトネ「私はこの子よ。」

カスミとコトネはボールを投げて最初の1体を出す。カスミはサニーゴ、コトネはエーフィを最初のポケモンに出した。一方、観客席では、

タ「カスミはサニーゴ、コトネはエーフィできたか。」

サ「カスミのサニーゴ見るの、久しぶりだな。」

デ「サニーゴは岩・水タイプ、エーフィはエスパータイプ。タイプの相性は無関係だけど、変わったテイストのバトルが期待できそうだよ。」

アイ「どっちも強そうね。」

ヒ「うう、2人とも大切な仲間だからどっちを応援すればいいのか迷っちゃう……。」

ハル「私もかも。」

サ「まっ、でも2人には悔いのないバトルをして欲しいよな。」

ベ「サトシ君の言う通りね。」

それぞれ思ったことを口に出す。ついでに言うがサトシのピカチュウは、袴姿で両手に扇子を持つというスタイルで2人を応援している。その姿にミニミロルが勝手にボールから出てきて、見惚れていたというのは別の話。

コトネ「まずはこっちからいくわよ。エーフィ、でんこうせっか。」

コトネは先手必勝でエーフィにでんこうせっかを指示する。

カ「かわして、サニーゴ。」

サニーゴ「サングー……」

サニーゴはエーフィの攻撃を難なくかわす。

カ「サニーゴ、エーフィにとげキャノン。」

サニーゴはとげキャノンでエーフィを攻撃する。

コトネ「かわして！」

エーフィはサニーゴのとげキャノンを華麗にかわす。

カ「なかなかの動きね、コトネのエーフィ。」

カスミはサニーゴの攻撃をかわしたエーフィに感心していた。

コトネ「ありがとうってことね。サニーゴもなかなかの強さよ。」

カ「ほめてくれてありがとう。でも、バトルはこれからよ。」

コトネ「私も、望むところってことね。」

2人とも、再びバトルモードに入る。そして、まずはカスミが、

カ「サニーゴ。水中に潜って。」

サニーゴ「サニー！」

サニーゴはプールの中へと潜っていった。

コトネ「どこから来るのかしら……。気をつけて、エーフィ。」

エーフィは警戒心を強め、サニーゴが何処から攻撃するのを見極めようとした。

バツシャーン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

突然、大きな音とともにエーフィが乗っている足場の周りを囲むように巨大な波が出現した。そこから、数体のサニーゴ、正確にはかげぶんしんで数体に分かれたサニーゴが出てきた。突然の出来事にエーフィは怯んでしまう。

カ「サニーゴ、そのままバブルこうせん！」

サニーゴ「サアアンゴオオオ!!!!!!!!!!」

サニーゴは勢いよくバブルこうせんを放つ。怯んでいたエーフィはよけることができずに直撃する。サニーゴは着地とともにかげぶんしんが解かれ、元の1体に戻った。

コトネ「エーフィ!？」

エーフィは倒れたがすぐに立ち上がった。

コトネ「大丈夫そうね。さあ、ここから反撃するわよ、エーフィ。」

エーフィは鳴き声とともに戦闘態勢に戻った。だが、カスミのサニーゴはすでに水中に姿を消した後だった。

コトネ（あのかげぶんしんとバブルこうせんの連携技は厄介ね……ん? かげぶんしんって確か、着地した時に解かれてたよね……。ここは、賭けてみるってことね。）

コトネはかげぶんしんが着地した時に解かれることに着目して何か閃いたようだ。そしてまた、大きな音とともに周りを囲むような巨大な波が表れ、エーフィに襲いかかる。

カ「サニーゴ、そのままバブルこうせん!」

サニーゴは先程と同様にバブルこうせんを放つ。このままならエーフィに直撃するが、コトネは、

コトネ「エーフィ、天井に向かってこうそくいどう!」

コトネはエーフィにこうそくいどうを指示。その指示通りにエーフィは天井に向かってこうそくいどうをして、かげぶんしんで分裂したサニーゴよりも高い位置に移動した。

カ「えっ!？」

カスミはコトネの思わぬ奇策に驚愕した。一方のサニーゴはバブルこうせんが空振りに終わってしまった格好だ。

コトネ「エーフィ、サニーゴにサイケこうせん！」

コトネはサニーゴの着地の瞬間を見逃さず、エーフィにサイケこうせんを指示。エーフィのサイケこうせんは、着地して1体となったサニーゴに直撃する。

サニーゴ「サニッ!？」

さらに、サニーゴにさらなる攻撃が直撃する。

サニーゴ「サンゴ!？」

カ「ま、まさか今の、みらいよち!？」

コトネ「そうよ。大波が出る前に念のためにみらいよちをしておいたの。サニーゴの着地の瞬間を狙ったサイケこうせんの後に、さらにサニーゴにダメージを与えられたから結果オーライってことね。」

サイケこうせんに加え、みらいよちの追加攻撃を食らったサニーゴはその場に倒れる。そして、

アヤメ「サニーゴ、戦闘不能。エーフィの勝ち。」

アヤメのコールが終わると、カスミはサニーゴをモンスターボールに戻す。

カ「ありがとう、サニーゴ。ゆっくり休んでて。」

そしてカスミは、コトネのほうへ向きなおす。

カ「コトネのイーフィ、やるわね。やられたわ。」

コトネ「ありがとうってことね。でも、バトルは終わってはいないわ。」

カ「ええ、アタシの最後のポケモンはこれよ。」

カスミが最後に選んだポケモンとは・・・

続く

カスミVSコトネ！〜前編〜（後書き）

カスミの2体目は!？

カスミVSコトネー〜後編〜(前書き)

カスミが2体目を出そうとしたところでちょっととした事件が・・・

ポケモンである。カスミ自身も何度かコダックに水になれるように特訓したのだが、これといった成果はなかった。恐らく、ポケモンシリーズ史上最高のギャグポケモンと言っても過言ではない。どうやら今回は、ボールから勝手に出てきた拳げ句、足を滑らせてそのままプールの中へと着水したようだ。

カ「コダック、また勝手に出てきて！ アンタのせいで、バトルの雰囲気が出ないじゃないの！」

カスミは怒り混じりに言いつつ、コダックをプールから救出する。

一方、この一部始終を見ていた観客席の方は、

マサ「タケシ。あれがカスミの言ってたコダック？」

タ「ああ、そういえばあのコダックを見るの久しぶりだな。」

サ「てか、まだ泳げないんだ・・・。」

ハル「カスミの言った通りのポケモンかも・・・。」

リュウカ「私、泳げない水ポケモン見たの初めて・・・。」

ベ「私も・・・。」

ピ「ピカ．．．。」

ポ「ポチャ．．．。」

キバゴ「キバ．．．。」

サトシ達はもちろん、ピカチュウ、ポッチャマ、キバゴも啞然とした表情を浮かべていた。

アイ「水ポケモンで泳げなかったら何が残るのよ．．．。」

サ「アイリス、そう言うな。カスミのコダツク、ああ見えてもエスパルタイプの強力な技覚えてるんだぜ。俺とカスミとタケシで旅をしてた頃は、結構助けられたもんな。」

アイリスの湧き出た当然の疑問に、サトシが答える。横にいたタケシも、そういえばそんなこともあったなと頷く。サトシの言うとおり、コダツクはねんりきやサイコネシスといったエスパルタイプの技を覚えている。一応、水タイプの技でみずてっぽうは覚えているが、滅多に使うことはない。

戻って、バトルフィールド．．．

カ「ごめんね、コトネ。気を取り直して、続けるわよ。」

コトネ「えっ、あ、うん。」

カスミとコトネは、再びバトルモードへと入った。ちなみに、コトネも泳げないコダックには心底驚いたとか。

カ「最後のポケモンはこの子よ。行けー、マイ・ステディー！」

カスミが掛け声とともに出したポケモン、それはギャラドスだった。かつて、カスミは過去のトラウマから水ポケモンで唯一ギャラドスを苦手としていたが、水中ショーでの触れ合いの中で克服していった。今では、スターミーと肩を並べるくらいのカスミの主力ポケモンとなっている。

カ「ギャラドス、かえんほうしゃ。」

エーフィにギャラドスのかえんほうしゃが襲いかかる。サニーゴ戦でのダメージが残っていたせいか、かえんほうしゃをまともに食らったエーフィは倒れてしまった。

アヤメ「エーフィ、戦闘不能。ギャラドスの勝ち。」

アヤメのコールの後、コトネはエーフィをボールに戻す。

コトネ「ありがとう、エーフィ。ゆっくり休んで。」

ギャラドスのかえんほうしゃを目の当たりにした観客席……

アイ「あのギャラドス。かえんほうしゃが使えるの!？」

ハル「そうみたいね。あのギャラドス、強いかも……。」

デ「水タイプのギャラドスが炎タイプの技・かえんほうしやを使っている……。ミスマツチな組み合わせに見えるけど、それを全く感じさせない威力だよ。あのギャラドス、よく鍛え上げられている。」

ギャラドスのかえんほうしやの凄さに、観客席一同驚愕したようだ。

コトネ「（あのギャラドス、まさに切り札ポケモンってことね。でも、こつちだつて負けないわ。）私の最後のポケモンはこの子よ。」

コトネが2匹目を選んだポケモンはカポエラーだった。

コトネ「カポエラー、でんこうせっか。」

カポ「カポッ！」

カポエラーはでんこうせっかでギャラドスに近づく。

カ「ギャラドス、あばれる。」

ギャラドスはあばれるでカポエラーに攻撃を仕掛ける。カポエラーは持ち前の素早さでかわしていくが、あばれているギャラドスの尻尾がカポエラーに直撃した。

カポ「カポッ!？」

コトネ「カポエラー!？」

カポエラーはプールの中へとたたき落とされたが、すぐに別の足

場へと上がって来た。

カ「ギャラドス、続けてハイドロポンプ。」

カスミはなおも続けてギャラドスに攻撃の指示を与える。

コトネ「カポエラー、こうそくいどうで避けて。」

カポ「カポカポッ！」

カポエラーはこうそくいどうでさらに素早さを上げ、華麗にギャラドスのハイドロポンプを避けた。

コトネ「続けて、ストーンエッジ。」

コトネはカポエラーに岩タイプの技・ストーンエッジを指示する。飛行タイプを持つギャラドスにとっては効果抜群の技だ。ギャラドスは避けることができず、大ダメージを受けた。

カ「ギャラドス、水中に潜って。」

ギャラドスは水中の中へと姿を消した。一方の観客席では、

マサ「うわあ、これじゃあどこから攻撃してくるのかわからないよ。」

タ「さっきのサニーゴの攻撃といい、カスミの奴、上手くジムの利点を利用しているな。」

デ「バトルフィールドがプールというのを上手に活用したポケモン

とのコンビネーション。水ポケモン専門のジムリーダーの彼女らしい戦法だよ。」

サ「ここからコトネはどう来るのだろうか・・・。」

それぞれカスミのバトル戦法に感心していた。そうするうちに、ギャラドスは水中から姿を現した。

カ「ギャラドス、カポエラーにはかいこうせん。」

カポエラーの背後にはかいこうせんが襲いかかる。だがコトネは、

コトネ「カポエラー、バツ宇宙でギャラドスの後ろにまわって。」

カポ「カポー！」

カポエラーはギャラドスの攻撃をバツ宇宙で避けるとともに、ギャラドスの背後へと移動した。

カ「ええ！？」

これにはカスミも驚いた。水中に潜って相手をかく乱させてから攻撃する戦法が、それを逆に利用されていたのだから無理もないだろう。

コトネ「カポエラー、ストーンエッジ。」

カポ「カポー！」

カポエラーのストーンエッジがギャラドスを襲う。そして、

コトネ「カポエラー、止めのインファイト。」

カポ「カアアポオオ!!!!」

カポエラーのインファイトが炸裂した。飛行タイプのギャラドスには格闘タイプのこの技は効果はいまひとつだが、ストーンエッジで相当のダメージを受けているギャラドスには十分な技だ。

カ「ギャラドス!?!」

ギャラドスはその場に倒れた。

アヤメ「ギャラドス戦闘不能。カポエラーの勝ち。よって、勝者・チャレンジャーのコトネ。」

コトネ「やったあー!!!! よくやったわ、カポエラー。」

カポ「カポカポ。」

カスミとのジムバトルに勝利したコトネは、カポエラーを称える。

カ「ありがとうギャラドス。ゆっくり休んでて。」

カスミはギャラドスをボールに戻すと、コトネの方へ近づいていく。

カ「見事だったわ、コトネ。これが、勝利の証・ブルーバッジよ。」

カスミはコトネにブルーバッジを手渡す。

コトネ「よし、ブルーバッジゲットってことね！」

カポ「カポカポツ！」

カスミがコトネにバッジを手渡した後、サトシ達が観客席から降りてきた。

サ「凄いバトルだったな、カスミにコトネ。」

マサ「僕、ハラハラしたよ。」

デ「ん〜、2人のバトルへの闘志という名のスパイス、そしてポケモンどうしの技が絡み合うハーモニー、最高のバトルテイストだよ。」

サトシ、マサト、デントの3人が、バトルを終えた直後の2人にバトルの感想を各々言う。

コトネ「みんなありがとうってことね。」

全員で仲良く会話を弾ませていたところへ、アヤメがサトシ達のもとへ近づく。

アヤメ「2人ともご苦労様。ところで、2日後にここで水中ショーを開催するんだけど、あなた達もどうかしら？」

サ「水中ショー？」

サトシが頭にクエスチョンマークを浮かべていたところへ、

ベ「サトシ君、私ポスター持ってるから見せてあげる。」

ベルがサトシに水中ショーのポスターを見せようと、カバンの中に手を入れる。

ベ「確かこの辺に、ってあれ？」

ベルはポスターを探すが、なかなか見つからない。

ベ「・・・あつた！」

ベルはポスターを見つけた。だが、ポスターはタケシの母・ミズホから貰ってまだそんなに経っていないというのにかなり埃まみれだった。

ヒ「うわっ、汚な!？」

アイ「ベルのカバンの中身って、いっつも埃まみれなのよね。」

ハル「一体、ベルのカバンの中どうなってるの・・・。」

ベルのカバンの中の汚さに、一同苦笑した。するとベルのボールからチラーミイが出てきて、

チラ「チラチラチラッ。」

ポスターの埃をくまなく取って、ピツカピカにした。そのチラーミイの行動に、ベル以外の者は主人との思わぬギャップに驚愕したとか・・・

サ「へえ、カスミがメインの水中ショーなんだ。凄いじゃないか。」

カ「え、ええ、ありがとう。」

想い人からの笑顔での褒め言葉に顔を赤らめながら、返事をするカスミ。その様子にサトシ好きの女子達は複雑な心境になった。

アヤメ「で、どうするの？」

サ「もちろん見ますよ。な、みんなもだろ？」

ハル「カスミの晴れ舞台だもの。見なきゃ損かも。」

ヒ「アタシもコンテストの参考になると思うし。」

タ「断る理由なんてないしな。」

コトネ「そうね。カスミンの水中ショー、私も楽しみってことね。」

カ「ありがとう、みんな。ところで、コトネ。カスミンってアタシのことかしら？」

コトネ「うん、あとみんなのものもあるわ。ハルカはハルルン、アイリスはアイリン、ベルはベルルン、リュウカちゃんはリュウリン。どうかしら？」

コトネは笑顔で答える。

ハル「ハルルンって……(汗)」

アイ「アイリン……。」

ベ「ちょっと無理矢理な感じもするけど……。」

リュウ「……。」

コトネにあだ名をつけられた女子達は、引きつった笑みを見せた。リュウカに至っては、自分に初めてあだ名をつけられたので、恥ずかしさのあまり言葉を失ったようだ。その光景に、男子達は苦笑するしかなかった。

こうして、2日後に開催されるカスミメインの水中ショーを観覧することになったサトシ達。そして今日と明日の2日間、カスミの家に泊まることになったのだった。

続いて後書きショー

カスミVSコトネ〜後編〜（後書き）

ヒ「とりあえず、ここまで更新が遅れた理由を説明してくれるかしら？」

天「いやあ、ネタ収集のために中古で購入した『ポケモン ハートゴールド』にハマっちゃって……。執筆速度が異様に遅くなっ

た。」

ハル「それだけじゃないでしょ。ネットゲのやり過ぎで執筆のことなんかすっかり忘れていたこともあったじゃない。」

天「あわわわ、それは言うなよ。」

アイ「ネットゲにはまって忘れてたなんて、酷いじゃないの。」

天「分かった、謝るから。えー、この度は執筆を怠ってしまって……。、どうもすまませんでしたあー！」

ヒ「ひ〇きの〇友か！」

コトネ「謝る気全然感じないってことね。」

天「さて、最後になったけどコトネとカスミ締めよろしく。」

カ・コトネ「それでは次回も、ポケモンゲットしてね（ってことね）。」

水中ショー前日（前書き）

序盤にサトカス要素入ります。

注意

この話を含め2話程度は、発電所や停電などこの度の震災で被災された方が読まれるにはふさわしくない間接的な内容が含まれています。それでも大丈夫な方のみお読みください。

水中ショー前日

ハナダジムでの水中ショー前日の朝、サトシは珍しく早起きだった。相棒のピカチュウはすやすや眠っている。とそこへ、

カ「サトシ、ちょっといいかしら？」

サトシが寝ている部屋へカスミが入って来た。ちなみに、サトシの寝ていた部屋はマサト、タケシ、デントも寝ている。

サ「どうしたんだ、カスミ？」

カ「いいから、ついてきて。」

サトシはカスミの行動に疑問を持ちながらも、カスミについていく。カスミがサトシを連れてきた場所、それはハナダの市街地から少し離れた岬だった。

カ「どう？ この景色。晴れているときはこんなにも朝日が綺麗に見えるのよ。」

サ「うわあ、綺麗だな。」

サトシはハナダの岬から見える朝焼けに酔いしれていた。どうやら、カスミはサトシにこれを見せたくてここへサトシを連れて来たのであった。だが、カスミの目的はそれだけではないようである。

カ「実はね、サトシ。アタシ明日の水中ショー、上手くやれるかどうか不安で仕方ないの。」

サ「えっ？」

カスミは翌日開催の水中ショーについての不安をサトシに打ち明けた。

カ「今まではそんなことなかったのよ。だけど今回は水中ショーのメインとしてだけでなく、1人のコーディネーターとしての重みが物凄く感じるの。もちろん、コンテストに出たのが悪いってことじゃないのよ。コンテストも楽しくてアタシとポケモン達のコンビネーションを高めるのにも必要だし……。」

カスミの言うように、今までハナダジムの水中ショーのメイン役者としてポケモン達を生かすことに精を尽くしてきた。しかし、今回の水中ショーでは1人のコーディネーターとしてのプレッシャーが加わった。それが彼女にとって重くのしかかる形になっている。

サ「そっか、よく俺に相談してくれたな。」

カ「うん、なんかごめんね。アタシ肝心な時に限ってサトシに頼ってばかりで。」

カスミは悲しげな顔でサトシに言う。サトシはニツコリして、

サ「仲間のピンチを救うのが仲間として当然だろ。それにどうしても自分で解決できない時は、人に頼るのもいいと思うぜ。俺だけじゃなく、タケシやデント、ハルカにヒカリ、アイリス、ベル、マサト、リュウカちゃん。みんなカスミの仲間じゃないか。」

カスミに対して励ますように言う。

カ「そうよね、ありがとう。なんだかすっきりしたわ。」

カスミはパアアと笑みを見せた。

サ「そろそろみんなも起きる頃だし、そろそろ戻るか？」

カ「ええ、そうしましょう。」

サトシとカスミはそろそろジムへ戻ることにした。その道中、カスミの心中は、

カ（サトシ、アンタはやっぱり凄いよ。初めて出会った頃はただのお子ちゃまだったのに、しばらく見ないうちに随分大人になって……。ますますアンタのことが好きになったじゃない。ハル力達にはサトシは譲れないわ。）

サトシは他の女子達には絶対に渡さない、そんな決意表明をしつつ、サトシとカスミはジムへと戻った。その後、カスミはサトシ達に明日のショーのリハーサルを見せるため、準備しに行った。

ハル「カスミと水ポケモンとのコンビネーション、楽しみかも。」

ヒ「コンテストで好成績を残すほどだもの。かなり凄いと思うわ。」

タ「カスミは水ポケモンマスターになるためにいろいろ努力をしていたものな。」

コトネ「あっ、カスミン来たわよ。」

ハルカ達は、リハーサルとはいえ、カスミとポケモン達の演技が楽しみでたまらないようだ。ポケモンコンテストについてよく知らないデント、アイリス、ベルですらその気にさせるほどである。そうこうしているうちに、カスミがサトシ達の前に現れた。

カ「みんな、今日はあまり大がかりなところは企業秘密で見せられないけれど、このリハーサルで大体の流れを把握できたら幸いだわ。」

サ「そうか、頑張れよ。」

ハル「プレッシャーなんかには負けたら、駄目かも。」

ヒ「アタシもコンテストの前はプレッシャーに押しつぶされたことが何度もあったけど、何とか乗り越えて見せたわ。根拠ないけれど、アタシにも出来るんだからカスミにも出来るわ。」

コトネ「みんなで応援してるってことね。」

カ「みんなありがとう。それじゃあ、楽しんで見てね。」

カスミはそう言ってプールの中へと入っていき、ショーの前日リハーサルが始まった。カスミはプールから顔を出すと、直後にタツツの群れがカスミを囲うように出現した。どうやら、最初の演技はタツツのジャグリングのようである。カスミは1匹のタツツの頭の上にボールを上げると、そのタツツはボールを操るようにみずでつぼうを出した。カスミはそれを何回か繰り返し、タツツはみずでつぼうを止めてボールを口で啜えた。

カ「さあ、みんな。いくわよ。」

カスミの合図とともに全てのタツツーがみずでっぼうを噴射した。その光景は傍から見れば綺麗な放物線を描いており、みずでっぼうがぶつかる中心点には水の塊ができて、そこには全てのボールが集結している。ボールを落とさずに中心点に集結させるとは並みのコントロールでは出来ないことである。

ハル「うわあ、綺麗かも。」

ヒ「ボールを落とさずにあそこに集めるのは、かなり努力したんだね。コンテストに出る程の実力はあるわ。」

ハルカとヒカリは同じポケモンコーディネーターとして、カスミとタツツーの演技に感動していた。

サ「カスミ、やるじゃないか。」

タ「タツツーとの息もピッタリだな。さすがは水ポケモンマスターを目指すだけのことはあるな。」

デ「タツツー達と醸し出すハーモニー、出だしから良いテイストの演技だよ。」

リュウ「カスミさん、水ポケモンの良さをうまく引き出してますね。」

アイ「ホント、見てるこつちまで楽しくなるわ。」

サトシ達もカスミ達の演技に感心していた。

カ「ありがとう、みんな。」

カスミは合図してタツツの群れを引っ込めると、次の演技に入ろうとした。だがその時、

ガターン！！！

ベ「て、停電！？」

突然ショーの会場の全ての照明が落ちたのだ。演技の最中だったカスミはもちろん、サトシ達やサクラ、アヤメ、ボタンも急な停電に驚いた。

ボタン「私、ちょっと見てくるわ。」

ボタンが急いで電気盤の方へ向かい、ブレーカーが落ちていないかを確認した。

ボタン「どうも、ブレーカーが落ちたんじゃないみたい。」

ボタンが言うには、停電の原因はブレーカーが落ちたことではないようだ。それもそうである。今使っている電気といえば、会場の照明くらいである。ヒューズが飛んで停電になることはまずあり得ない。

サクラ「とりあえず、リハーサルは中止するわ。カスミ上がってきた。」

カ「わかったわ、サクラ姉さん。」

カスミはサクラの指示に従って、やろうとしていた次の演技を中断し、プールから上がってくる。その後、停電はこのジムだけでなくハナダシティじゅうで起きているという事が分かった。

リュウ「急にどうしたのでしょうか……。明日の水中ショー、楽しみにしてたのに……。」「明日の水中ショー、楽

リュウカが心配そうに言う。

カ「大丈夫よ、リュウカちゃん。明日の水中ショーは必ずやるから心配しないで。」「

哀しそうな顔をするリュウカを、ニッコリとした顔で励ますカスミ。

ハル「せっかくのカスミの晴れ舞台だもの。絶対に成功させたいかも。」

ヒ「カスミ、ここまで必死に準備してきたんだもの。無駄には出来ないわ。」

カ「ハルカ、ヒカリ、ありがとう。アタシもこのままじゃ終われないわ。」

サクラ「ねえ、発電所に行ってみたらどうかしら？　そこに行けば何か分かるかもしれないわよ。」

サクラが会話の中に割って入るように提案した。

デ「そうですね。ここだけじゃなく、街中の電気が一斉に停まるというのはおかしいですからね。カントーの発電の大部分を担っているハナダ発電所に行くのが妥当でしょう。」

サクラの提案にデントが納得したように言う

サ「それじゃあ、早速行ってみようぜ。このままじゃ、埒が明かないもんな。」

ヒ「アタシ達も行くわ。何か手伝えることがあるかもしれないし。」

タ「及ばずながら、俺達も行くぞ。」

こうして、サトシ達はハナダ三姉妹にジムの留守を頼み、街中で発生した停電の原因を探るためにハナダ発電所へと向かった。

続
く

水中ショー前日（後書き）

諸事情により、この話の後に載せる予定だった後書きショーは割愛させていただきます。

ちょっとひと騒動・・・(前書き)

久々にあの2人組の登場です・・・

原発の1件で大変な時なのに、発電所の話など載せた愚かな作者をどうかお許しください。

ちょっとひと騒動・・・

サトシ達はハナダシティ中で発生した停電の原因を探るため、ハナダ発電所へと向かっていた。発電所に到着すると、入口付近で従業員達が集まって何やら話しあっていた。

サ「あの一、どうしたんですか？」

サトシは従業員達に声を掛けてみた。

従A「それが・・・、発電所の部品を何者かに盗まれてしまって困ってるんです。」

従B「その部品はとても貴重で、替わりのものを取り寄せるとなるとかなり時間がかかってしまうんです。」

従C「おかげで、所長はかんかんで・・・。」

従業員達の話の総合すると、発電所内で部品の盗難事件が発生したようである。その部品はかなり貴重な品で、取り寄せるのにかなりの日数を要するのだという。おまけに、自分の運営する発電所が何者かに損害を与えられたことで発電所の所長が激怒しているとのこと。

デ「うーん、どうやら停電の原因は発電所で起きた盗難事件がきっかけみたいだね。」

タ「ああ、盗まれた部品はもっとも重要なものみたいだな。」

従C「そんなんです。だから、怒った所長がもう手がつけられない状態です。．．。」

従業員達は心底困っているようだ。

サ「俺達も協力しましょうか？ 俺達も停電で困ってますし。」

カ「ええ、それに大人数で探した方が見つけやすいと思いますよ。」

サトシの後に続けてカスミが言う。すると従業員の1人が、

従A「本当ですか？ 助かります。」

従業員達は嬉しそうにサトシ達に答えた。そして、サトシ達は3つに分かれて機械の部品を探すことになった。チームの内訳は次のとおりである。

- 1．サトシ、マサト、ヒカリ、ベル
- 2．デント、カスミ、アイリス、リュウカ
- 3．タケシ、コトネ、ハルカ

サトシ達のチーム．．．

ベル「ねえ、サトシ君。ここの発電所って、カントーじゅうの電気を賄ってるんだね。」

サ「ああ、ベルの言う通りあのハナダ発電所はカントーの電気の源になってるんだ。各地に小さな発電所はあるけれど、あのハナダ発電所がほとんどを担っているんだ。」

ヒ「それほど、あの発電所がカントーの人たちにとって大切な建物なのね。」

マサ「それなら、一刻も早く部品を見つけないとね。」

サ「そうだな。みんな頑張ろうぜ。」

ヒ・ベル・マサ「うん。」「」「」

サトシ達のチームは、本格的に部品の搜索にかかった。

デント達のチーム……

アイ「ねえ、デント。アタシ、木の上から探してみようか？」

デ「本当？ それじゃあ、頼むよ。」

アイ「まかせて！ キバゴ、危ないからアタシにしっかり捕まらせて。」

キバゴ「キバキバ。」

アイリスは木に登ってあちこちを移動しながら部品の手がかりを

探し始めた。

リュウ「・・・あの、デントさん。アイリスさんって、かなりの運動神経ですね。」

カ「うん、アタシもびっくりした。」

リュウカとカスミはアイリスの並み外れた運動神経に驚愕したようだ。

デ「うん。でもイッシュを旅をした頃はサトシ共々結構助けられたんだ。僕のヤナップが熱を出した時も薬草を取りに行ってくれたし。」

デントはイッシュでの旅を思い出しながら、リュウカとカスミにアイリスの運動神経について語った。リュウカとカスミも最初は驚いていたが、デントの話聞いてるうちに徐々にアイリスの運動神経に感心したようだ。こうして、デント達のチームも本格的に部品の搜索に取り掛かった。

タケシ達のチーム・・・

コトネ「ねえ、ハルルンはサトシのこと好き？」

ハル「コ、コトネ！？ い、いきなり何言ってるの!？」

コトネの急な質問にあたふたするハルカ。

コトネ「ほら、サトシと一緒に旅をしたからと思つて。ヒカリンもサトシのこと好きだし、ひよっとしたらハルルンもかなくなって思つて。で、実際どうなの？」

実はコトネ、恋愛に関してはアニメポケキャラで一番と言つていいほど恋愛には敏感である。以前、ヒカリと2人きりになった時に、「サトシ、タケシ、カズナリのうち誰を選ぶ？」と聞いたほどである。

ハル「はい、好きです・・・。」

ハルカは顔を真っ赤に染めながら答える。

コトネ「そうよね。サトシって、カズナリと違って頼りになるし、やさしいもの。ハルルンも好きになって当然よね。ああ、ライバル増えちゃったってことね。」

ハル「え？ まさかコトネもサトシの事を!？」

コトネ「うん・・・。」

コトネの言葉にたじろぐハルカに、顔をほんのり赤く染めながら答えるコトネ。

ハル「でも、サトシは誰にも譲らないかも。絶対、私のものにしてみせるんだから!」

コトネ「それは私も言いたかったことよ。ハルルンには負けられないってことね。」

ヒカリに続き、ハルカにも宣戦布告をしたコトネ。

ハル「でもね、コトネ。サトシを好きな子は私やヒカリ、カスミ、アイリスの他にいるのよ。」

コトネ「えっ、そうなの!？」

ハルカの言葉にきよとんとするコトネ。どうやらコトネは、恋のライバルがカスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリスの4人だけだと思っていたようだ。ちなみにサトシを好きな子には、カントーのポケッ子フロンティアブレーション、ジヨウトの炎ポケモン好き少女などがある。

タ「あの、2人とも今何をしてるか分かってるのか？」

タケシが申し訳なさそうに2人の間に割って入る。

ハル「あわわわわ、タケシ。ゴメンね、発電所の部品を探してたんだよね。ちゃんと覚えているかも。」

コトネ「私からもゴメンってことね。急いで探さなくっちゃ。」

ハルカとコトネはあわてるように周囲を探り始めた。

タ「はあ……。」

タケシはやれやれと言いながら、ため息をついた。このチームも、恋バナに浸りながらも本格的に部品探しに取り掛かったようだ。

それから数分後、サトシ達のチームが遠く離れたところの不審な物陰に気付いた。

マサ「ねえ、サトシ。あれ見るからに怪しいよ。」

サ「そうだな。みんな気付かれないように近づくぞ。」

ヒ「分かったわ。」

ベ「そくとね……。」

サトシ達は抜き足さし足忍び足で物陰に近づいた。そこには2人の人物がいた。

サ「あ、あいつらは!?!」

サトシ達（ベル以外）は2人の人物に見覚えがあった。

?「これをまとめてさっさとづらかるわよ。」

?「おうよ。」

サトシ達は2人の人物に詰め寄るように近づき、叫んだ。

サ「お前達、何やってるんだ!」

?「あ、アンタ達は!?!」

？「なぜ、お前達がここにいる！？」

2人はサトシ達の登場にびっくりした。

ベ「ねえ、サトシ君。あの2人誰？」

ベルは2人とは面識がないため、サトシに聞いてみた。

サ「あいつらはロケット団といって、人のポケモンを盗んだりする悪いやつらなんだ。」

サトシの言葉を聞いたベルは納得し、2人を敵視するように睨む。

？「見つかったら、仕方ないわね。」

？「本当は名乗らないのが普通だが、特別に答えてやる。」

ヤマト「ヤマト。」

コサ「コサブロウ。」

(書くの正直面倒なので、以下略)

ヤマト・コサ「略すなー！！！！」

ヒ「発電所の部品を盗んだのはあんた達だったのね。ヤマトにコサンジー！」

コサ「コサブロウだー！ 名乗ってんのに、間違えんな！」

わざわざ名乗っているのにもかかわらず、ヒカリに名前を間違えられて激昂するコサンジ。

コサ「ナレーションまで、間違えてんじゃねえ！」

はいはい・・・

ヤマト「コサンジ、ツッコミ入れる暇あったらさっさと逃げるわよ。」

コサ「だからコサブロウだ！　今はお前達の相手などしてる暇はない。」

すぐさまその場を立ち去ろうとするヤマトとコサブロウ。

サ「そうはさせるか。ピカチュウ、10まんボルト！」

ピカ「ピイイカアア！！！」

ピカチュウはヤマトとコサン・・・もといコサブロウに向けて10まんボルトを発する。しかし、ヤマト達はプロテクターのようなもので10まんボルトを消し去った。

コサ「ダハハハ、電気技はすでに対策済みだぜ。」

ヤマト「まさか、ムサシ達のがここで役に立つとはねえ・・・。」

ヤマトとコサブロウはムサシとゴジロウがいつものようにやっている対ピカチュウ用の電撃対策をまねたようである。

サ「クツ。」

サトシは苦虫を噛み潰した。すると、ベルが、

ベ「サトシ君、ここは任せて。ユニラン、お願い。」

ベルはサトシにそう言うと、ユニランを出した。出た途端、ユニランはヤマト達に向かっていった。

ヤマト「そんなちっこいのでどうしよじっていつのよ。」

ヤマトはユニランを馬鹿にするように言う。

コサ「お前達のお遊びにつき合って……て、発電所の部品がない！？」

ヤマト「ちょっと、何やってんのよー！」

いつの間にか、ヤマトとコサブロウの手元から発電所の部品がなくなっていたのだ。

サ「あ、あれ？　なんで部品がこんなところに。」

ヒ「ちょっと、どっかいってー？」

サトシとヒカリは驚愕した。それもそうである。さっきまで、ヤマトとコサブロウの側にあった発電所の部品がいつの間にかやら、サトシ達の元へと返ってきている。

マサ「そうか、トリックだね。」

ベ「ピンポーン、当たりよ、マサト君。」

ベルのユニランはエスパータイプの技『トリック』を使ったのだ。これを使えば、相手のポケモンの持ち物と自分のポケモンの持ち物を入れ替えることができる。ちなみにユニランは遺伝技でこの技を覚えることができるうえ、作者の記憶が正しかったらイツシユ地方のポケモンでは唯一この技を覚えることができるポケモンである。

今作品用に、この『トリック』をアレンジしました。

ヒ「今度はアタシよ。ポッチャマ、うずしお。」

ポ「ポオオオチアアア!!!」

ポッチャマの最大パワーのうずしおがヤマトとコサブロウに直撃した。

ヤマト「結局、こうなっちゃったじゃないの……。」

コサ「それじゃあ、いつもの……。」

ヤマト・コサ「「やな気持ちいい!?!?!?!?!」」

ヤマトとコサブロウは星になった。

サ「やったあー、部品を取り返したぞ。ベル、ヒカリ、2人とも大活躍じゃないか!」

ベ「当然のことをしたまでよ。」

ヒ「そこまで言われるとなんだか照れちゃうなあ．．．。」

ベルとヒカリはほんのりと顔を赤く染めた。ただ単に照れているのもあるのだが、好意を寄せている人物から褒められたことへの嬉しさもあるのである。

マサ「ねえ、部品も取り返したことだし、そろそろ戻ろうよ。」

サ「そうだな、それに他のみんなも心配だし。」

部品を取り返したサトシ達は、発電所へ戻っていった。途中でタケシ達のチーム、デント達のチームとも合流し、発電所に戻ってくると、従業員と所長からとても感謝された（特に、ベルとヒカリ）。こうして、ハナダシティでの大停電は無事に解決し、水中シヨールも予定通り開催されることになった。

続く

ちょっとひと騒動・・・(後書き)

次回はいよいよ待ちに待った八ナダ水中ショー開演です。

水中ショー当日・・・(前書き)

いよいよ待ちに待った水中ショー当日・・・

注意

この話にはこの度の震災で被災された方が読むにはふさわしくない表現が含まれております。それでも、大丈夫な方はどうぞ。

水中シヨ―当日・・・

発電所での事件も無事解決し、いよいよ待ちに待った水中シヨ―
当日・・・

カ「いよいよね・・・。あー、段々緊張してきた。」

ハル「大丈夫よ。カスミなら絶対成功するかも。」

何度も水中シヨ―をこなしているカスミではあるが、今日の水中シヨ―はいつもより大規模な上、『カントーの人魚姫』^{マーメイド}という肩書プレツシャーが重みとなって、かなり不安げになっている。そんなカスミを見て、親友として必死に励ますハルカ。

カ「ありがとう、ハルカ。」

サ「ハルカだけじゃない、俺達もいるぜ。」

タ「一緒に旅した仲間の晴れ舞台だからな。みんなも成功してほしいというのは同じだぞ。」

コトネ「カスミン、こんな時に励ますことしか出来なくてごめんってことね。」

カ「みんなありがとう。コトネ、その励ましだけで十分よ。おかげでだいぶ楽になったわ。」

カスミはサトシ達に向けて満面の笑みを浮かべる。かなりのカスミの不安がここまで解消されるとは、さすがは友情というべきか。

そうこうしていると、遠くから声が聞こえてきた。

？「ヒカリ、久しぶり！」

ヒ「ノ、ノゾミ！？」

ヒカリに声を掛けてきた人物、つい2、3日前にキツサキシティを後にしたヒカリの好敵手ライバルノゾミだった。ノゾミはヒカリに気付くと、すぐさまヒカリに近づいた。その後ろには、ノゾミとともにキツサキシティを後にしたジムリーダー・スズナがいる。

ノゾミ「ヒカリ、元気そうじゃないか。」

ヒ「うん、ノゾミもね。スズナさんも、お久しぶりです。」

スズナ「ヒカリちゃん、久しぶり。サトシ君のジム戦以来ね。」

ヒカリからの挨拶を快く返事を返すスズナ。すると今度はサトシがスズナに近づいてきた。

サ「スズナさん、お久しぶりです。今日はどうしたんですか？」

スズナ「久しぶりね、サトシ君。今日はノゾツチの付添いってところかな。後、『ワールドチャンピオンリーグ』に向けての特訓や新しいポケモンのゲットも兼ねてカントーに来たの。」

サ「スズナさんも例の大会に出るんですね。」

スズナ「ええ、そうよ。サトシ君にはジム戦での借りもあるしね。」

サ「そうですね。でももし俺とスズナさんが対戦するんでしたら、負けませんよ。」

スズナ「それはアタシも同じよ。これから大会に向けてお互い頑張りましょう。」

サ「はい。」

スズナとサトシは互いに握手をした。その光景に間近で見っていたヒカリとノゾミも自然とニッコリし笑顔になった。

アイ「・・・ねえ、あの2人は誰？」

マサ「僕もノゾミさんはお姉ちゃんから聞いてるから知ってるけど、もう1人は誰？」

アイリスとマサトはノゾミとスズナについてタケシに聞いてみた。アイリスだけでなく、カスミ、デント、リュウカ、ベルもノゾミとスズナとは初対面である。マサトとハルカはノゾミについては知っているが、スズナとは初対面である。

タ「あの2人はノゾミとスズナさんだよ。ノゾミはヒカリやハルカと同じポケモンコーディネーターで俺達がシンオウを旅してた時に出会ったんだ。それでスズナさんは、シンオウのキツサキジムのジムリーダーだよ。」

タケシが2人について簡単に説明するとアイリス達は納得したように頷いた。すると今度は、ノゾミ達がタケシ達の方に近づいてきた。ノゾミはカスミに声を掛ける。

ノゾミ「あなたがカントーの人魚姫・カスミさんだね。噂は聞いてるよ。今日の水中ショー、是非コンテストの参考にさせてもらおうよ。」

ノゾミは最近コーディネーターとしての頭角を現してきたカスミについて、調べてきたようだ。トップコーディネーターとなった今でも努力を怠らない姿勢に同じコーディネーターで好敵手^{ライバル}であるハルカとヒカリは感心し、私達も見習わなくちゃと思ったのだ。

カ「ありがとう、ノゾミさん。さっきまで不安だったけど、ここにいる仲間とノゾミさん達のおかげで勇気が出てきたわ。あ、あとアタシのことはカスミでいいわ。」

ノゾミ「どういたしまして。アタシのこともノゾミでいいよ。」

互いに初対面の2人ではあるが早くも仲良くなったようだ。そして、ショーの開演時間が近づき、一行はショーが開催されるジムの中へと入っていった。そして開演間近……

ハル「いよいよね。あー、なんだかこっちまで緊張してきたかも。」

ヒ「大丈夫かなあ、カスミ。」

ハルカとヒカリは開園時間が近づくにつれて、不安になってきたようだ。

ノゾミ「ちょっと、アンタ達が不安になってどうすんの。」

そんなハルカとヒカリに、ツッコミを入れるノゾミ。

サ「ハルカ、ヒカリ。カスミなら、大丈夫だって。俺達も、しっかり楽しもうぜ。」

ハル「そうよね、サトシの言う通りかも。」

ヒ「アタシ達がこんなだったら、カスミに悪いよね。」

ノゾミ「そうそう、アンタ達がそんな顔で見たらカスミに失礼だよ。もっと、楽しまなくちゃね。ほら、もうすぐ始まるよ。」

そして、待ちに待った開演時間。最初はリハーサルで見たタツツー達によるジャグリング。これはリハーサル通り、いやそれ以上の出来で大成をおさめた。幸先のいいスタートで水中ショーは幕を開けたのだ。その後、シエルダー達の氷のアートショー、トドグラーによるリングショー、カスミとポケモン達総出による水中ミニドラマなどが行われ、どれも素晴らしい演出で1コマ終わる度に拍手喝さいが沸き起こった。そして、最後の演目となり……

マサ「いよいよ、クライマックスだね。」

タ「カスミの奴、この最後の演目に結構賭けてるみたいだな。」

デ「舞台も少し派手なテイストになってきたしね。」

アイ「最後の演目だけ秘密だったけど、何をするんだらう?」

アイリスの言う通り、最終演目だけはショー当日となっても明かされなかったのだ。そここうしているうちに、さまざまに彩られた中央の台座に巨大な貝殻が出現した。カスミはその貝殻に入り、座ったのだ。そして、ゆっくりと歌い始めた。

(カスミの静かな歌声が響き渡る・・・)

カスミの歌声が一旦止むと同時に貝殻が閉じて、カスミは貝殻の中に閉じ込められた状態になった。すると、台座の周りを囲うように波が現れた。すると、かげぶんしんで数体に分裂したサニーゴが波に乗ってアーチ状にみずでっぼうを噴射した。

コトネ「ひょっとして、あれって私とのジム戦で使ったのじゃない？」

コトネは今見ている演出がジム戦の時にカスミが見せた戦法と似ていたのに気づいた。

デ「うん、どうやら元々はショーの演出用だったみたいだね。」

コトネの疑問に対して、デントが答えた。

一方の舞台の方は、アーチ状に噴射されたみずでっぼうが頂点でぶつかり合い、ドーム状に広がったのをプールの中から出てきたパウウ達がいとうビームで凍らして、カスミが中にいる貝殻を守るように見事な氷の大きな結晶が完成した。

アイ「これから、どうなるんだろう？」

デ「この沈黙から、カスミはどんなハーモニーを奏でてくるのだろうか・・・。」

会場が静寂に包まれる中、サトシ達を含めた観客は固唾をのんで見守った。すると突然、4体のギャラドスが現れて、氷の結晶に向けてかえんほうしゃを噴射した。当然、氷は溶けていき、同時に白い霧に包まれた。観客一同は、その光景に驚愕した。

ハル「カ、カスミはどうなっちゃったの？」

ヒ「あれじゃあ、状況が全く分かんないよ。」

ハルカとヒカリの心配をよそに、白い霧はどんどん晴れていく。すると、歌の続きのメロディが会場に流れ、白い霧が完全に晴れると貝殻が開いて人魚姿のカスミが先程と同様に座っていた。カスミの周りにはかえんほうしゃでできた綺麗な水しぶきが舞っている。そして、カスミはまた歌い始める。

(そして、再びカスミの静かな歌声が会場に響き渡る・・・)

ハナダの水中ショーは観客の拍手喝采とともに幕を閉じた。しばらくしてサトシ達は、ショーを終えたばかりのカスミがいる控室へと向かった。控室には、カスミの他、サクラ、アヤメ、ボタンがいた。カスミの顔は、非常に達成感の満ち溢れた表情をしていた。

サ「お疲れ様、カスミ。」

カ「ありがとう、サトシ。みんなのおかげでショーは大成功だったわ。」

サトシの労いの言葉に、笑顔で返すカスミ。

ハル「カスミと水ポケモン達のコンビネーション、最高かも。」

ノゾミ「さすがは『カントーの^{マーメイド}人魚姫と評されることの実力はあるよ。サトシ達だけでなく、アタシやスズナ先輩も見入っちゃったくらいなもの。」

ハルカとノゾミもサトシに続いてカスミを労う。ノゾミの後ろではスズナがうんうんと頷いている。

カ「みんな、本当にありがとう。」

カスミは再び笑顔で返す。

タ「でも、最後の演出はハラハラしたなあ。」

マサ「うん、ギャラドスのかえんほうしゃのところなんか特にね。」

話題はクライマックスの場面についてに変わった。マサトは特にギャラドスのかえんほうしゃの場面が印象深かったようだ。それもそうだろう。あの時に、貝殻を開けるタイミングやギャラドスのかえんほうしゃを止めるタイミング、それらを一歩間違えれば大事故に繋がりがねない。まさにハイリスクハイリターンの演出である。

カ「うん、あの場面だけは練習で何度も失敗したところだから、正直自信がなかったの。でも、アタシはポケモン達を信じた。成功したのはアタシの実力だけじゃない。ポケモン達のおかげでもあるわ。」

ヒ「カスミのポケモン達に対する信頼が、良いパフォーマンスに繋

がったのね。」

ヒカリはカスミのポケモン達への信頼感に感心しつつ、改めてポケモンを信じることの大切さを身にしみて感じたのだ。

サクラ「お疲れ様、カスミ。いつも以上にいいショーだったわ。」

アヤメ「カスミなら、成功すると思ってたわよ。」

カ「なんだか、身内の姉さん達に言われると照れるわね……。」

カスミは慣れない雰囲気苦笑しながら答えた。

ボタン「ところでカスミ。今後はどうするの？」

カ「またサトシ達と旅に出て、『ワールドチャンピオンフェスティバル』に向けて特訓するつもりよ。各地で行われるプレ大会にも参加するわ。」

サクラ「そう。それじゃあサトシ君、カスミのことよろしくね。」

サ「はい、俺達もまたカスミと一緒に旅ができるなんて嬉しいです。」

アヤメ「カスミのことだから迷惑かけるかもしれないけど……。」

カ「ちょっと！ アタシをこんなお子ちゃまと一緒にしないでよ。」

サ「な、なんだよ。カスミだって、お子ちゃまじゃないか。」

カ「アンタよりかはマシな方よ。」

すると、カスミの『お子ちゃま』発言に反応したアイリスが、

アイ「それは言ってる。サトシったら、子供だものね……。」

サ「そりゃないぜ……(T|T)。」

カスミとアイリスのせめにつくり肩を落とすサトシ。3姉妹とサトシ、カスミ、アイリスを除く面々はただ苦笑した。

ハル「それじゃあ、カスミは私達のライバルになるのね。」

カ「ええ、でも負けるつもりはないわよ。」

ノゾミ「それはアタシだって同じだよ。」

ヒ「アタシも。」

ハルカ、ノゾミ、ヒカリはカスミという新たなライバルの出現に早くも意気込む。

アイ「これは旅も楽しくなりそうね。ねっ、キバゴ。」

キバゴ「キバア！」

サトシ達はその後、ノゾミ、スズナと再会を誓って別れた。そして、3姉妹に見送られながらハナダシティを後にした。

続いて後書きシヨ―

水中ショー当日・・・(後書き)

天「あゝ。」

ヒ「どうしたの、一体？」

天「鹿島のトップチーム、無期限活動休止・・・。」

ハル「熱狂的鹿島ファンだもんね。」

サッカー知ってる人なら分かると思いますが、
鹿島アントラーズ：日本のプロサッカーチームの一つ。

天「ここまで震災の影響が深刻だとは、最悪だ・・・。」

コトネ「もう、鬱になりかけてるってことね・・・。」

天「こーなったら、少しでも被災された方々に勇気を与えるために
もこの作品の更新頑張るぞ！！！！！！」

ノゾミ「立ち直り早っ!？」

天「そりゃそうだ。被災しなかった俺がこんな雰囲気になってどー
する。」

アイ「さっきまで、そうだったくせに・・・。」

天「さて、最後になりましたが、これからもめげずに更新しますの
で・・・。」

5人「感想よろしくお願いします。」

次の目的地（前書き）

この回から、カントー編クライマックスまでふっ飛ばします。

お詫び

この話が、本当の『次の目的地』です。

次の目的地

ハナダシティを後にしたサトシ一行は、道中次の目的地をどこにするか話し合っていた。

サ「なあ、みんな次はどこに行こうか。」

サトシが皆に問いかける。

タ「サトシ。実は俺、今度タمامシ大学で実施されるポケモンドクター認定試験を受けなくちゃいけないんだ。すまないけど、一旦抜けさせてくれないか。」

タケシは今度のポケモンドクター認定試験のため、一旦サトシ達から抜けなければならぬとサトシに言った。タケシ本人によれば、この旅についてきたのも、試験会場であるタمامシ大学に行く為でもあったという。

サ「そっか、ポケモンドクターはタケシの夢だもんな。頑張れよ。」

タ「ああ。」

サトシの激励にタケシは微かな笑みを見せる。

コトネ「それじゃあ、次はタمامシシティに行こうよ。私もジムに挑戦しなきゃいけないし。」

サ「じゃあ、決まりだな。」

サトシ達は次の目的地をタمامシシティに決めた。そして、タمامシシティの街中で、

タ「それじゃあ、みんなとはここで一旦お別れだな。」

カ「タケシ、絶対に受かりなさいよ。」

ハル「私達も応援してるからね。」

タ「みんなありがとう。それじゃあな。」

タケシはそう言うと、タمامシ大学へと向かっていった。

サ「タケシも、着実にポケモンドクターへの道を進んでいるな。こりゃ、俺達も負けてられないな。ピカチュウ。」

ピ「ピカチュウ！」

ハル「私達も、トップコーディネーターになるために立ち止まったりできないかも。」

ヒ「アタシだって、目標に向かって前進するのみよ。」

デ「僕も、ポケモンソムリエの地位をより強固にするためにも頑張らないとね。」

コトネ「タケシだけじゃない、みんなだってそれは同じってことね。」

ポケモンドクターへの道突き進むタケシの姿に、皆それぞれの

目標に向けてさらなる熱意を見せた。会話に入ってなかった、アイリス、ベル、マサト、リュウカもそうである。

サ「それじゃあ、俺達はタمامシジムへと行くか。」

ヒ「そうね、コトネのジム戦の応援もあるし。コトネ、頑張ってるね。」

カ「アタシに勝ったんだから、次も勝てるわよ。」

コトネ「ヒカリン、カスミン。ありがとう。」

ヒカリとカスミンの激励につこりと笑顔で言葉を返すコトネ。

ハル「でも、その前に．．．。」

サトシ達の会話にハルカとアイリスが割って入り、

ハル・アイ「お腹空いた（かも）〜。」

ハルカとアイリスの悲痛な叫びに、一同盛大にズッコケた。

サ「ははは、そういえばもうそんな時間だな．．．。」

デ「それじゃあ、ポケモンセンターでお昼にしようか．．．。もしあれだったら、僕が作るけど．．．。」

アイ「ホント!? やったあー、デントの料理久しぶりね。」

ハル「ポケモンソムリエの生の料理が食べられるなんて、幸せかも。」

アイリスとハルカはデントの美味しい料理が食べられると聞くと、嬉しそうにはしゃぎ出した。その光景に、サトシ達は引きつった笑みを浮かべた。一同、ポケモンセンターに着くと、早速デントはハルカとアイリスの催促で料理に取り掛かった。デントの料理は当然一同絶賛で、ハルカとアイリスとサトシのおかずの取り合いが凄まじい雰囲気で繰り広げられるなどいろいろあったが、昼食後、コトネのジム戦兼応援のためにタمامシジムへと向かった。

続いて後書きショー

次の目的地（後書き）

ハル「ちよつと、作者！」

天「なんだ？ ハルカ。」

ハル「なんだじゃないかも。また私の食いしん坊ネタを使って。」

天「お前の食い意地はアニポケじゃ有名な話だから仕方ないだろ。それにミクリカップの前の時なんか、レストランで食べられないっただけで人格変わってんじゃないかねえか。」

ハル「仕方ないじゃない、私の性格なんだから。」

アイ「それにしても、なんでアタシまで食いしん坊みたいな描写なのよ。」

天「アイリスはポケモンセンターでサトシとコロツケの取り合いしてたし。もしかしたらそうなのかなって思っただけ。」

アイ「なによそれ、ホント子供なんだから。」

天「はい、どーせ精神年齢が小学校低学年ですよーだ。」

コトネ「ひどい開き直りってことね。」

天「さて、雑談はここまでにして最後はベルよろしく。」

ベ「（なんで、私？）次回も、元気にポケモンゲットよ。」

コトネVSエリカ！（前書き）

それで、第44部のこの話はコトネのジム戦になります。

コトネVSエリカ！

サトシ達はタمامシジム前に着くと、早速ジムの扉を開けた。

アコ「いらっしやい、あらサトシ君達じゃない。一体どうしたの？」

扉を開けると、タمامシジムのジムトレーナーでもあるアコがサトシ達を出迎えた。

サ「今日はコトネのジム戦の応援で来たんです。」

アコ「そうなの、そのコトネって子は？」

コトネ「私です。はじめまして。」

アコ「こちらこそ、はじめまして。今、エリカさん呼んでくるからもう少し待ってくれないかしら？」

コトネ「はい、分かりました。」

アコはジムリーダーのエリカを呼ぶためにサトシ達から離れた。サトシ達は少しばかり待つことにした。数分後、アコが和服姿のエリカを連れてきた。コトネは和服姿のエリカにかなり見惚れていたが、すぐにハツと我に返ってエリカにジム戦を申し込んだ。

エリカの服装：ハートゴールド、ソウルシルバーの時の衣装。

エリカ「私とジム戦を……。いいですね。受けて差し上げますね。」

コトネ「ありがとうございます。」

コトネとエリカのレインボーバッジを賭けたジムバトルが行われることになった。審判はアコが務める。

アコ「これより、チャレンジャー・コトネとジムリーダー・エリカのポケモンバトルを行います。使用ポケモンは3体、どちらか一方のポケモンが全て戦闘不能になったときにバトル終了とします。尚、ポケモンの交代はチャレンジャーにのみ認められます。」

エリカ「それでは、コトネさん。私の最初のポケモンはこの子です。頼みますわ、ワタッコ。」

エリカの最初の一体はワタッコ。それに対するコトネは、

コトネ「出てきて、キリンリキ。」

最初の一体をキリンリキに選んだのだ。ジムリーダー・エリカのワタッコは草・飛行タイプ、対するコトネのキリンリキはノーマル・エスパークタイプであり、タイプの相性としてはまずまずの組み合わせである。

マサ「2体とも、タイプの相性ではまずまずだね。」

でも、バトルは相性だけじゃ決まらない。特性、持ち技の使い方、トレーナーのひらめきのスパイスを効かせた戦術などもバトルの行方を左右すると言っても過言ではないよ。」

マサトとデントはいつも通りにバトルについて講評する。

コトネ「キリンリキ、こうそくいどう。」

コトネはまず、キリンリキのすばやさを上げる戦法に出た。ポケモンの中でも高いすばやさ誇るワタッコよりも攻撃を仕掛けたいのであれば、当然の策だろう。

コトネ「そのまま、ふみつけ。」

キリンリキのふみつけ攻撃。

エリカ「ワタッコ、かわすのです。」

対するワタッコは、キリンリキのふみつけを難なくかわした。

エリカ「ワタッコ、キリンリキにタネマシンガン。」

ワタッコのタネマシンガンがキリンリキに直撃した。タネマシンガンはそれ程威力の高い技でない、わざとポケモンの相性はまずまず、バトルが始まったばかりという事もあり、一撃必殺とまでは至らなかった。

コトネ「キリンリキ、気を取り直してしねんのずつき。」

キリンリキはしねんのずつきでワタッコに近づく。ワタッコは先程のふみつけ同様、難なくかわす。ところが、それだけでは終わらなかった。

コトネ「キリンリキ、バトンタッチ。」

コトネはキリンリキにバトンタッチを指示した。これには、

エリカ「まあ．．．。」

冷静な顔つきではいるが、エリカも驚いたようだ。バトンタッチで出てきたコトネの2体目は、

ハッサム「ハッサム！」

むし・はがねタイプのハッサムだった。

コトネ「ハッサム、シザークロス。」

ハッサムのシザークロスがワタッコに炸裂。先程のキリンリキのこうそくいどうであげた素早さがバトンタッチによってハッサムに継承されたため、より素早く攻撃できた。

コトネ「つづいて、つじぎり。」

急所に当たりやすい技・つじぎりでワタッコに連続攻撃。ワタッコは目を回しながら倒れていた。

アコ「ワタッコ、戦闘不能。ハッサムの勝ち。」

コトネはエリカの1体目・ワタッコをまず倒した。

デ「最初にキリンリキのこうそくいどうで素早さを上げて、その後にバトンタッチでハッサムに受け継がせる。2つのスパイスを絡め合わせたいいテイストの戦術だよ。」

デントはコトネの戦術に感心していた。ちなみにバトンタッチは、代わりに出てくるポケモンはランダムだが、交代前のポケモンで上げた能力はそのまま交代後のポケモンに受け継がれるという変わった技である。先程の場合、交代前のキリンリキがこうそくいどうで上げた素早さを交代後のハッサムに受け継がれたのである。元々高い素早さのハッサムにさらに素早さが加わったので、ワタッコよりも早く攻撃で来たのである。

エリカ「コトネさん、お強いですわ。でも、私だって負けてられません。行くのです、モンジャラ。」

エリカの2体目はモンジャラ。草タイプのみのもんじゃらにとっては、虫タイプをもつハッサムと戦うのは分が悪い。だが、ここでも言うが、ポケモンバトルは相性の良し悪しだけで決まるものではない。

コトネ「ハッサム、シザークロス。」

ハッサム「ハッサム！」

ハッサムのシザークロスがモンジャラに襲いかかる。

エリカ「モンジャラ、かわしてやどりぎのたね。」

モンジャラはシザークロスをかわしてハッサムにやどりぎのたねを植え付ける。至近距離の為、命中し、ハッサムは体力を吸い取られることになった。

エリカ「つづいて、しびれごな。」

エリカはハッサムのすばやさを封じるためしびれごなをモンジャラに指示した。しびれごなを吸い込んだハッサムはまひ状態になり、技を出しにくくなったうえに先ほどあげた素早さが格段に低下したのだ。

コトネ「ハッサム、シザークロス。」

ハッサムはシザークロスを試みるが身体がしびれて技が出せなかった。

エリカ「そのままパワーウィップです。」

草タイプでも屈指の威力を誇るパワーウィップがやどりぎのたねの効果で体力を消耗しているハッサムに炸裂。しかし、虫・はがねタイプのハッサムには効果いまひとつの技なので、決定打には至らなかった。

エリカ「モンジャラ、止めのつるのムチ。」

モンジャラの止めの一撃がハッサムに襲いかかる。だが、

コトネ「ハッサム、モンジャラのつるを掴んで。」

ハッサムは体力を消耗しつつも、ハッサムのつるを掴んだ。

コトネ「そのまま、シザークロス。」

反撃のシザークロスがモンジャラに襲いかかる。つるを掴まれているためモンジャラはかわすことができずに直撃する。効果抜群の技にモンジャラは目を回して倒れた。だが、体力を消耗されていた

ハッサムも同時に目を回して倒れた。

アコ「両者、戦闘不能。」

これで、エリカは残り1体、コトネは残り2体となった。数的にはコトネが優勢だが、2体のうちのキリンリキは先程のダメージが残っている。勝負は終わるまで分からない状況となった。

エリカ「（残り1体ですが、厄介なハッサムは倒すことが出来ませんでしたわ。）私の最後のポケモンはこの子です。」

キレイ「ハナハナ。」

エリカはどうやら虫・はがねタイプのハッサムをまず倒すことが目的だったようだ。エリカの最後の3体目は、キレイハナだった。

コトネ「出てきて、カポエラー。」

カポ「カポカポ！」

コトネの3体目はハナダジム戦でも活躍したカポエラーだった。どうやら、このカポエラーはコトネの主力ポケモンのようである。

エリカ「コトネさん、私のポケモンは残り1体ですが、悔いのないバトルをしましょう。」

コトネ「はい、エリカさん。」

両者は言葉を一言交わすと、すぐにバトルモードに入った。

エリカ「では、行きます。キレイハナ、あまいかおり。」

キレイ「ハナハナ。」

キレイハナのあまいかおりによりカポエラーの回避率が下がった。

カポ「カポ〜。」

コトネ「すっかりして、カポエラー。」

カポ「・・・カポツ!？」

あまいかおりに酔いしれていたカポエラーはコトネの言葉で正気に戻った。

エリカ「キレイハナ、しびれごなですわ。」

キレイ「ハアアナアア!」

キレイハナのしびれごながカポエラーを襲う。カポエラーはまひ状態になり、素早さダウン+技を出しにくくなった。だが、カポエラーのまひ状態はすぐに治癒した。

リュウカ「もしかして、クラブの実ですか？」

デ「うん、クラブの実はポケモンに持たせておくと、まひ状態になった時に回復する木の实。コトネもしびれごな対策はしておいたようだね。」

クラブの実はまひ状態のポケモンに使うとそれを回復する。また、

ポケモンに持たせておくとまひ状態になったと同時にそれを回復する木の実でもある。

エリカ「クラブの実とは、考えましたね。でもそれも1回限り。キレイハナ、またカポエラーにしびれごなですわ。」

キレイ「ハアアナアア！」

キレイハナは再びしびれごなをカポエラーに向けて出す。

コトネ「カポエラー、かわしてトリプルキック。」

カポ「カポカポオ！」

カポエラーのトリプルキックがキレイハナに襲いかかる。しびれごなに集中していたキレイハナはかわせず、トリプルキックの餌食となる。そして、カポエラーの波状攻撃が何度も繰り返されて、キレイハナのダメージが蓄積されていく。一応言っておくが、トリプルキックは初めこそは威力は低いものの、連続で攻撃が当たると徐々に威力が増えていく技である。

カポ「カポオオオ！」

キレイ「ハナアアア！」

カポエラーの止めの一撃が当たり、キレイハナは吹っ飛んで倒れた。倒れたキレイハナは目を回していた。

アコ「キレイハナ、戦闘不能。よって勝者、チャレンジャー・コトネ。」

コトネ「やったあああ！」

カポ「カポカポ。」

コトネはカポエラーを抱きしめ、喜びあつた。そこへ、エリカが近づいてくる。

エリカ「見事でしたわ、コトネさん。これが、勝利の証・レインボーバッジです。」

コトネ「ありがとうございます。よし、レインボーバッジゲットってことね。」

カポ「カポカポ。」

ジムバトルはコトネの勝利に終わり、サトシー一行はタمامシジムを後にする時だった。

エリカ「あつ、そういえばサトシさん。この間のお礼をしておりますでしたわ。」

サ「あつ、いや。そんな、お礼なんていいですよ。当然のことをしたまですから。」

帰るサトシ達を呼びとめ、エリカはこの間の痴漢騒動解決のお礼をしたいと言い出したのだ。

エリカ「いえ、このままでは私の気持ちがおさまりませんわ。なにかいいものがあればいいのですが……。あつ、そうですね。」

エリカは何か気付くと、自分の顔をそっとサトシの頬に近づけ、触れるだけのキスをした。

サ「エ、エリカさん!？」

エリカの突然の行動に、サトシはきょとんとして驚いた。リュウカは顔を真っ赤にさせ、デントとマサトは自分達の持っていたものを危うく落としかけ、サトシ好きの女子達は顔を真っ赤にしながら、自分達が好意を寄せるサトシにキスをしたエリカを睨みつけた。

エリカ「これが私からのお礼ですわ。この間は本当にありがとうございました。」

サトシ達はその後、なにか釈然としないまま、ジムを後にした。サトシ達が去った後のジムでは・・・、

エリカ「ふふふ、サトシさん。思った通り、面白い人ですわね。」

アコ「エ、エリカさん・・・(なんて、大胆なことを・・・)。」

サトシへの興味をますます強めたエリカと、そんなエリカの姿にただ苦笑を浮かべるしかないアコの姿があった。

続いて、お詫びを含めた後書きショー

コトネVSエリカ！（後書き）

天「えー、まずお詫び。読者のみなさん、この度の投稿ミスについてまことにもうしわけございませんでした。」

カ「まったく、話のキリがたまたま良かったからいいけど、投稿予定の次の話を間違っって投稿するなんて致命傷よ。」

天「ホントに反省してるから、今回はこれで勘弁してくれ（汗）。」

ヒ「それはそうと、やけにサトシ×ジムリーダーのシチュが多くない？」

天「さすがに、サトシ×ヒロイン、サトシ×ライバルのシチュばかりじゃ面白みに欠けるもんな。」

カ「余計なことしてないで、アタシ達とサトシとの絡み合いをさっさと書きなさいよ。」

天「サトカスなら、書いてやったじゃないか。」

ハル「それにしては、描写が薄かったかも。」

天「仕方ないだろ。俺はサトカスよりもサトヒカなんだから。」

ヒ「それにこここのところ、争奪戦の描写かなり薄くなってるし。」

天「それは大丈夫だ。次回からまた新キャラの他に争奪戦要素を濃くしていくつもりだから。」

ヒ「また増えるの!?!」

天「まあ、そういうことだ。それじゃ、後締めよろしく。」

カ・ハル・ヒ「「「こんな駄文でよろしければ、感想よろしくお願
いします。」」」

新たな争奪戦参戦者（前書き）

またまた、サトシ争奪戦に加わるものが現れます。

新たな争奪戦参戦者

コトネが6個目のバッジをタمامシジムでゲットした翌日、サトシ一行はシキミタウン郊外の森の中を散策中だった。ただ、サトシに好意を寄せる女子達是不機嫌だった。それもそうだろう。前日に自分が好きな人物が目の前でキスをされるところを見たのだから。

サ「なあ、デント。ヒカリ達、なんであんなに機嫌悪いんだ？」

言わずと知れた鈍感人間・サトシには、なぜ彼女達が不機嫌なのか当然のごとく分からない。

デ「・・・い、いまは知らない方がキミの為だよ。」

デントは苦笑を浮かべながら、サトシに答える。

タ「俺もそう思う。あまり気にするな。」

ちなみにタケシ達もジム戦後、すぐに合流した。認定試験にはかなり手ごたえがあったという。合流後、デントとマサトから事情を聞き、啞然としつつ、エリカという美人にキスされたサトシを羨ましがってグレッグルのどくづきを食らったというのは別の話。

サ「そうなのか？」

旅は楽しいほうがいいのになあとぼやくサトシ。その様子に、デントとタケシはまた苦笑を浮かべた。

？「あれ、サトシ？」

そんな会話がなされている中、聞き覚えのある声がサトシを呼んだ。

サ「リ、リラ！？」

サトシに声を掛けた人物、それはカントーのフロンティアブレイン『タワータイクーン』・リラだった。サトシとは、バトルタワーで2度対戦し、最初のバトルでは勝利したものの、2度目のバトルでは、敗戦からポケモンと心をつなげて戦う事を学んだサトシに敗れている。バトル以外にも仲良く接するうちにサトシに恋心を抱くようになった少女である。

サ「こんなところでリラと会うなんて、びっくりしたぜ。」

リラ「僕もだよ。ホントに久しぶりだね。」

サトシがうつすら笑顔で言うと、リラも笑顔でサトシに返す。

ハル「リラさん、久しぶりかも。」

リラ「ハルカさんも、マサト君も久しぶり。」

マサ「こちらこそ、リラさん。」

ハルカとマサトも以前会ったことのあるリラとの再会を喜んだ。すると、

ヒ「ねえ、タケシ。あの人、誰？」

ヒカリは初対面のリラについてタケシに聞いてみた。ヒカリだけでなく、カスミ、アイリス、ベル、デント、リュウカもキョトンとした顔でリラを見つめる。

タ「あの子はリラ。この近くにあるバトルタワーという施設のフロントニアブレーションだよ。」

アイ「フロントニアブレーション？」

フロントニアブレーションはイツシュ地方にはないので、アイリスはそれがどんなものか知らなかった。アイリスと同じイツシュ出身のデント、ベルもそうである。

タ「フロントニアブレーションとはカントーとシンオウの各地に存在するバトル施設『バトルフロントニア』の責任者で、ジムのように挑戦者を出迎えてはバトルをするんだ。フロントニアブレーションに勝つことが出来たら、『フロントニアシンボル』、ジムでいえばバツジのようなものがもらえるんだ。ちなみにリラは、『バトルタワー』のタワータイクーンと呼ばれているよ。」

ベ「へえ、カントーやシンオウには面白いものがあるんだね。私も挑戦してみようかな？」

タ「ぜひ挑戦してみるといいぞ。だが、四天王並みのレベルの兵ぞろいだから、そう簡単には倒せないぞ。現にサトシだって、リラとジンダイさんには1回負けてるもんな。」

タケシの言っていたジンダイとは、『バトルピラミッド』のピラミッドキングのジンダイのことである。ポケモンに関する考古学の

調査の為に各地を転々としているが、現在は崩壊寸前にまで陥ったシンオウ地方のキッサキ神殿の再建のためにキッサキシティにいる。リラ「ところで、サトシは今度の『ワールドチャンピオンリーグ』に出場するの?」

サ「もちろん出るさ。そんなことを聞いてどうしたんだ?」

リラ「僕も出場するんだよ。数日前に出場条件の改定があって、僕のようなフロンティアブレインも出場できるようになったんだ。」

追加された出場条件については、後書きにて・・・

サ「へえ、そうなのか。じゃあ、またリラとバトル出来るんだな。」

リラ「そうだよ。」

サ「もし大会で当たったら、その時はよろしくな。」

サトシは満面の笑みでリラに言った。リラは顔に少し赤みを含めながら、笑顔を返す。その様子にハルカ以外のサトシ好きの女子達は、

ヒ「もしかしてリラって子、女の子!?!」

カ「そうみたいね、まさかあの子もサトシのこと・・・。」

コトネ・アイ・ベ（「また、ライバルが増えた・・・。」）

リラが女子だったという事、またそのリラも自分達と同じサトシに好意を寄せていることに一同驚愕した。一方のリラは、

リラ（どうやら、あの子たちもハルカさんと同じ僕の恋敵ライバルになりそうだね。）

リラは自分に向けられる視線から、カスミ、ヒカリ、コトネ、アイリス、ベルがサトシに好意を寄せていることに気付いたようだ。すると、リラはカスミ達に近づいて、

リラ「初めまして、僕はリラです。」

カ「あつ、初めまして。カスミです。」

ヒ「こちらこそ、ヒカリです。」

コトネ「コトネです。」

デント「僕はデント。イツシュ地方でポケモンソムリエをしています。」

アイ「リラさん、初めまして。」

ベ「初めまして。」

6人は互いに自己紹介をした。カスミ、ヒカリ、コトネ、アイリス、ベルの5人のリラに対する第一印象は良好だったので、とりあえずは仲良くなれそうだ。その光景に、サトシも思わず頬を緩めた。

サ「なあ、リラ。今度、マサラタウンに遊びに来いよ。」

リラ「えっ!？」

サトシからの突然の誘いに戸惑いを隠せないリラ。

サ「タケシ、ハルカ、マサトはリラのこと知ってるけど、カスミやヒカリ達は初対面だもんな。それに、バトルフロンティアの挑戦者の相手でロクに息抜き出来てないかなって思ってる。なっ、みんなもいいだろ？」

ヒ「ええ、アタシリラさんのこともっと知りたいわ。」

ベ「バトルフロンティアについても興味あるしね。」

カ「別にいいわよ。サトシがそう言うんなら。」

リラ「じゃあ、お言葉に甘えさせて今度そうさせてもらおうかな。」

サトシの粹な計らいを半ば恥ずかしそうに受け入れるリラ。

サ「そうか、今度マサラタウンに来た時はよろしくな。」

リラを含む少女達に向けられたサトシの無自覚+満面のスマイル。サトシに好意を寄せる者たちとしては効果抜群である。少女達の心はたちまちドキッとなった。

アイ（ふ、普段は子供なのに、結構気の利いた事してくれるじゃない／＼）

ハル（やめて、サトシ。その笑顔は反則かも／＼）

ヒ（うゝ、ま、眩しい／＼）

カ（全く、あんなお子チャマにもあんなかつこいいところがあるなんて／＼）

ベ（サトシ君のあの笑顔、独り占めしたいなあ／＼）

コトネ（サトシはますます誰にも渡せなくなったってことね。）

リラ（サトシはやっぱり優しいなあ。でも僕の気持にはまだ気付いてないみたいだね。）

少女達はサトシに対する独占欲を何とか抑えながらサトシに笑顔を返す。その際、サトシはキョトンとしていた。タケシ、デント、マサト、リュウカの4人はただ苦笑を浮かべるしかなかった。その後、サトシ達はリラと別れて、次へ歩みを進めるのだった・・・

続いて後書きショー

新たな争奪戦参戦者（後書き）

天「さて、これからどう進行させるべきか・・・。」

リラ「なんか、僕の登場。級だったような気がするけど・・・。」

天「まあ、そこは勘弁してくれ。正直、リラをどう出すか、結構悩んだんだ。」

リラ「僕は本家でも2回しか出てないしね。」

天「そういうことだ。本家でサトシに対する好意の描写が描かれている数少ないキャラだ。サトシ総受けを書くにあたっては、やっぱり出しとかないといろいろとまずいだろ。」

リラ「数少ないってことは、他にもいるってことだね。」

天「いるにはいるけど、あれ？ 他の女子と違って、ノゾミみたいにえらく冷静だな。」

リラ「僕はあまり目立つのは苦手だからね。」

天「そうか、まあ頑張れ。さて、最後になったけどリラ締めよろしく。」

リラ「次回もポケモンゲットで Go, my friend!。」

カントー編クライマックス！（前書き）

一応、祝賀パーティーですが、はっきり言ってほとんどその描写はありません。

この話で、カントー編を終わらせます。

カントー編 クライマックス！

あくる日のマサラタウン・・・

先日、タケシ宅にポケモンドクター認定試験の合格通知が届いたこと、コトネがカントーのジムバッジを8個全て集めたことを祝して、みんなを集めてオーキド研究所でパーティをすることになった。コトネやタケシ、サトシの仲間の他に、ハルカの母・ミツコ、ヒカリの母・アヤコ、そしてノゾミやスズナもご厚意で呼ばれることになった。

デ「サトシ、ちょっとこっち手伝ってくれる？」

サ「ああ、いいぜ。」

デントはパーティの料理の準備をしているところだった。タケシも手伝うと言っていたが、デントが「君達を祝うパーティなんだから、ゆっくりしてて。」といったので、デントの言葉に甘えさせてもらって今はサトシの家で休んでいる。

サ「うわぁー、結構旨そうじゃん。」

デ「今日はサトシの仲間のお祝いだからね。特別なテイストにしてみただ。」

サ「なにからなにまで、タケシやコトネのためにありがとな。デント。」

デ「サトシの仲間は、僕達の仲間だからね。当然のことだよ。」

デントはニッコリとしてサトシに答えた。

サ「なあ、これが終わったらポケモン達の様子を見に行っていていいか？」

デ「うん、いいよ。」

厨房ではこうした仲間同士のほのぼのとした会話。一方研究所の外では、

ミツコ「皆さん、本日はこのようなパーティにお招きいただきありがとうございます。」

アヤコ「私からも、ありがとうございます。」

ハ「いやですわ、2人とも。お礼を言いたいのには私の方ですわ。サトシが旅先であなた方に、だいぶお世話になったみたいで。」

ミツコ「いえいえ、うちのハルカもサトシ君には随分とお世話になりましたわ。」

アヤコ「ヒカリもです。コンテストで悩んでいたときに何度も助けられたと聞きましたし。」

ハナコ、ミツコ、アヤコによる奥様トークが展開されていた。と、そこへ、

ヒ「ママ、何話してたの？」

ハル「まさか、サトシのママさんに変なこと言ってないでしょうね。」

ハルカとヒカリが近づいて、お互いの母親に話しかけた。

ミツコ「変なこととは人聞きが悪いわね。私達はただ、ハナコさんにお礼を言っただけよ。」

アヤコ「決して、あなた達が考えていたこととは全く違うから安心して。」

ハル・ヒ「そう。。。」「」

ハルカとヒカリは納得したように言うと、テーブルの上にあったジュースに手を掛けた。

ハル「はい、ヒカリ。」

ヒ「あつ、ありがとう。ハルカ。」

2人はジュースをゆっくりと飲み始めた。

ハ「それにしても、ハルカちゃんとヒカリちゃん。今までうちのサトシの旅に付き合ってくれてありがとうね。」

ハル「いえ、お礼が言いたいの私達の方です。サトシとは、時々喧嘩はするけど、いろんなことで助けられたこともありましたから。」

ヒ「そうですよ。あの旅があったからこそ、アタシ達は成長できた

んです。」

ハルカとヒカリは笑顔でハナコに答える。

ハ「そこまで言われると照れちゃうわ。」

ハナコは恥ずかしそうに返す。

ハ「いつそ、ハルカちゃんかヒカリちゃんのどちらかが私の義娘になつてくれないかなって。」

ハナコの言葉に、ハルカとヒカリの動作がピタリと止まる。

ミツコ「あら、それなら私からもお願いしますわ。バトルでもうちの主人を上回るほどの実力で優しいサトシ君なら、ハルカのお婿さんにぴったりですわ。」

アヤコ「私のヒカリも立候補させてもらおうかしら。サトシ君みたいにしっかりしたひとなら、ヒカリのお婿さんとして大歓迎です。」

ミツコとアヤコの言葉が止めとなったのか、ハルカとヒカリは飲んでいたジュースを盛大に噴き出した。

ハル「マ、ママ!? い、いきなり何言ってるの／＼／＼／」

ヒ「ア、アタシとサ、サトシが結婚!?!」

ハルカとヒカリは顔を熟れたリンゴのようにカアアと真っ赤にさせながら、慌てふためく。もうお分かりだとは思いますが、ハナコの言っていた義娘とは、サトシと結婚することを意味している。

ハル・ヒ（私（アタシ）とサトシが結婚・・・。）

ハルカ（ヒカリ）の妄想

サ「ただいま、ハルカ（ヒカリ）。」

ハル（ヒ）「おかえり、サトシ。今日は、どうだった。」

サ「ああ、今日もバトルの挑戦者が多くてな。さすがにバトル好きな俺でも、参ったぜ。」

ハル（ヒ）「仕方ないわよ。ポケモンマスターになって、サトシがゆうめいになっちゃったんだもん。」

サ「それを言うなら、ハルカ（ヒカリ）もだろ。トップコーディネーターとして今や、メディアに載らない日はないくらいに有名になってるじゃないか。」

ハル（ヒ）「えへへへ、なんかサトシに言われると照れちゃうな。」

サ「はあく、でももう少し俺はハルカ（ヒカリ）との時間がほしいんだけどな。」

ハル（ヒ）「それは私もよ。」

サ「それじゃあ、今から俺はハルカ（ヒカリ）との時間をめい一杯

過じそつと。」

ハル（ヒ）「もう、サトシったら・・・／＼／」

サ「ハルカにヒカリ。どうしたんだ？」

ハル・ヒ「サ、サトシ!？」

サトシの突然の登場にドキツとして思わず持っていたジュースをこぼしてしまったハルカとヒカリ。

サ「2人とも、大丈夫か？ 顔が真っ赤だぞ。」

ハル「な、なんでもないかも／＼」

ヒ「そ、そうよ。サトシってホントに心配性なんだから／＼」

仲間思いのサトシはハルカとヒカリに心配そうに声を掛けた。ハ

ルカとヒカリは慌てて大丈夫と言う。とても、自分達とサトシの結婚生活を妄想していたとは言えない。

サ「とても大丈夫そうには見えないぞ・・・。」

サトシが心配そうに2人に顔を近づけようとしたとき、

シュー、ボタン!!!!!!!!!!

ハルカとヒカリの2人は、頭から湯気を出しそうな勢いで倒れた。

ミツコ「あらら・・・(汗)ハ、ハルカ!？」

アヤコ「あちゃ〜(汗)(ヒカリ)しっかりして!？」

急に娘のだいじょばない姿に、必死で介抱する母親2人。

ハ「（全く、サトシだったら．．．（汗）サトシ．．．。ハルカちゃんとかかりちゃんを中まで運ぶから手伝って頂戴。」

息子の鈍感さに多少呆れながらも、サトシとともにハルカとヒカリを研究所の中まで運ぶハナコ。一応言っておくが、ハルカとヒカリの気絶の直接的な要因はサトシにあるが、そこまで至った原因を作ったのは奥様トークが悪ノリしてしまったハナコ、ミツコ、アヤコの3人である。

アイ「妄想で気絶するなんて、2人とも子供ね。」

アイリスのお馴染みの発言。というよりも、久々に書いた気がする．．．（汗）

カ「でも、ハルカとヒカリに対するサトシのママさんの印象良さそうね。ここままでは、アタシのサトシが取られちゃうわ。」

コトネ「ふふふ、サトシだったらモテモテね。でも、ハルルンやヒカリン達にはサトシは渡さないってことね。」

ベ「サトシ君を私のものにするには、並大抵のことじゃないわね．．．。」

リラ「それにしても、サトシのママさん、綺麗な人だなあ。ここは少しでもポイントを稼いでおかなくちゃ。そして僕はサトシと．．．」

先程の一部始終を見ていた少女達は、ハナコがハルカやヒカリに好印象を持っていることに危機感を覚えた。一応カスミに言ってお

くが、サトシは別にー（現時点で）あなたのものではないので悪しからず。

タ「ハハハ、こりやまたサトシを巡る攻防が激しくなるな。」

マサ「うん、でも下手に手出ししたら火傷じゃ済まされないくらいのけがしそうだよ……。」

一緒にジュースを飲んでいたタケシとマサトはその光景に苦笑を浮かべた。

スズナ「サトシ君って、結構モテるのね。どうするの、ノゾッチ。」

ノゾミ「アタシはアタシのやり方でやりますよ。あの輪の中に入って、上手く対処できる自信ないですし。」

スズナ「そう……。」

ノゾミの言葉にスズナは啞然とした。そして、数時間後、

オーキド「それじゃあ、タケシ君のポケモンドクター認定とコトネ君のカントージム制覇を祝して、乾杯！」

オーキド以外全員「乾杯！」

オーキドの掛け声とともにタケシとコトネを祝う面々。これから恋もバトルもコンテストも波乱含みの展開になりそうだが、とりあえず今回はこの辺で……

続いて後書きシヨ

カントー編クライマックス！（後書き）

ハル「／／／／（赤）」

ヒ「／／／／（赤）」

カ「どうすんの？ この2人。」

天「悪ノリし過ぎた．．．（汗）。」

アイ「まさかこのまま、次の旅へ行かせるってことはないでしょうね。」

天「それは心配するな。多少、ぎこちなさは残っても、ちゃんとした状態で行かせるから。」

コトネ「今のハルルンとヒカリンを見ると、説得力無いってことね。」

天「うっ、それは言うなコトネ．．．（汗）。」

リラ「ところで僕の存在が薄くなってる気がするんだけど．．．。」

天「ああ、それは済まない。済まないついでに申し訳ないが、しばらくリラの出番はないぞ。」

リラ「そっか．．．。それはいろんな意味で残念だな．．．。」

天「（目が笑ってない．．．（激汗）。）こ、今回はこの辺でお開

き。」

作者以外全員「よろしければ、感想の方をよろしくお願いします。」

新たなる旅立ち（前書き）

今さら気付いたこと

ピカチユウ、ポツチャマ、キバゴの3匹がいつの間にか空気化してた・・・（汗）。この3匹の出番も増やさねば・・・

今回は滅茶苦茶短いです。

新たなる旅立ち

パーティーの日から数日後の朝、

サ「うーん、あれ？ みんな早いな。」

ヒ「あつ、おはよう。サトシ。」

ハル「おはようかも。」

カ「うん、ちょっと早く目が覚めちゃった。」

カスミは無意識で目が覚めたように言うが、実際は違う。以前のよように、旅立つ一（まだ、旅に出るとは決まっていなかった）サトシに置いて行かれないように、ここ数日間サトシよりも早く起きていたのである。カスミだけでなく、ハルカ、アイリス、ベルもそうである。ちなみにコトネもサトシより早く起きたが、前回の旅立ちの時にはいなかったたのでその時の事情を知らない。

アイ「ところで、サトシ。次は何処に行くの？」

アイリスが次の旅の行き先を聞いてみた。

サ「次はジョウト地方を回ってみようと思うんだ。ヒカリやアイリス達は、ジョウトについて知らないと思うし、それにジョウトにも強いトレーナーがいっぱいいるもんな。」

ヒ「ジョウト地方か……。そういえば、コトネはジョウトの出身だったよね。」

コトネ「そうよ、だからジヨウトを旅するんだったら、私にまかせてってことね。」

デ「それは頼もしいね。僕からもお願いするよ。」

タ「ジヨウトは一度行ったことはあるが、コトネの話だところ数年で様変わりしてるみたいだしな。」

コトネ「うん。新しく出来た施設もあれば、歴史を感じる名所もたくさんあるし、ジヨウトも見どころ満載ってことね。」

ベ「あゝ、私何だかジヨウトに行きたくなっちゃったな。」

マサ「僕もだよ。以前お姉ちゃんが行ってたジヨウトがどんな所かわくわくしてきたよ。」

リュウ「そういえば、私も行ったことないなあ。」

会話の中で、その場にいる全員にジヨウトに対する興味が湧いてきたようだ。

サ「じゃあ、次の旅はジヨウト地方で決まりだな。」

コトネ「ふふふ、ジヨウトはカントー、ホウエン、シンオウとは違った面白さがあるから、楽しみにしておいてってことね。」

こうして、サトシ達は次の旅の地をジヨウト地方に決めたのだった。

続いて後書きシヨ

新たなる旅立ち（後書き）

ヒ「次はジョウト地方に行くのね。」

ハル「ジョウトか．．．。久しぶりかも。」

カ「ところで、ピカチュウ、ポッチャマ、キバゴの3匹の空気化は痛いところね。」

天「うっ、それは言わないでくれ．．．。正直、出演のバランス考えるの難しいんだぞ。」

コトネ「まあ、私達は作者の意向で出てる訳だからあまり気にしない方がいいってことね。」

天「おお、コトネ分かってんじゃん。」

ベ「それはいいとして、今後はどんな展開になるの？」

天「ネタバレに繋がるので詳しくは言えないが、争奪戦要素にちよつとした工夫を施してみようと思う。」

ヒ「へえ、ところで最近サトヒカ要素が薄くなってるんだけど．．．。」

天「心配するな。ほのぼのからすれすれなものまで構想を練ってるから安心しろ。」

ハル「サトヒカだけじゃなくて他のCPもあるんでしょっね。」

天「もちろんだ。ただ俺はサトヒカ派だから出来に関しては保障できないぞ。」

コトネ「じゃあ、気長に待ってるってことね。」

天「えーと、最後になりましたがよろしければ感想の方をお願いします。」

ジヨウト地方進出！（前書き）

久しぶりにジヨウトの地を踏んだサトシ達ご一行・・・

そこで待ち構えていたものとは！？

ジョウト地方進出！

マサラタウンを旅立って、サトシ達はジョウトにおけるはじまりの町・ワカバタウンへと足を進めていた。

サ「そういえば、ウツギ博士にもカズナリにも会ったの久しぶりだな。みんな元気にしてるかな？」

コトネ「博士もカズナリも元気いっぱいってことね。博士は相変わらず過剰なほどの研究ぶりだけど……。」

ここで言うておくが、ウツギ博士はジョウト地方のポケモン研究家で、オーキドの弟子でもある。ジョウト地区ポケモン保護協会の顧問でもあり、日々ポケモン調査や保護などに熱心に取り組んでいる。ただ、その熱心が過剰に表れるのが短所で、それが災いして以前変装したムサシとコジロウに新人トレーナー用のポケモン3匹を盗まれるという大失態を犯したこともある。2人目のカズナリはワカバタウン出身のポケモンブリーダー志望の少年でコトネの友人である。少々内気な性格で、コトネがやきもきするほどお世辞にも頼れる存在とは言い難い少年。しかし、サトシ達とシンオウを旅を経験したことで、大きく成長していった。

タ「本当に2人に会うのは久しぶりだな。」

サトシ同様、2人との再会を早くも懐かしむタケシ。

カ「カズナリって子は知らないけど、ウツギ博士に会ったの楽しみね。」

ヒ「アタシもカズナリに会うの楽しみだなあ。」

サトシ達とジョウトを旅してた時にウツギ博士に会ったことがあるカスミ、サトシ達とともにカズナリと旅をしたことがあるヒカリも2人との再会を楽しみにしていた。そんな会話を交わしているといつの間にやら、目の前がワカバタウンと言うところにまで来ていた。

カズナリ「コトネ〜！　って、そこにいるのはサトシ！？」

コトネの姿に気付いたカズナリが遠くから声を掛けてきた。当のカズナリはコトネと一緒にいたサトシ達に驚いていた。

サ「久しぶりだな、カズナリ。」

カズナリ「こちらこそ、久しぶり。一体どうしたの？」

サ「今度の大会に向けて、特訓の旅に出たんだ。それでジョウトに来たってわけだ。」

カズナリ「そうなんだ。ところでそちらの方々は？」

カズナリは初対面のカスミ、ハルカ、アイリス、マサト、リュウカ、ベルの方に顔を向けた。カスミ達も初対面のカズナリを見て不思議そうに眺める。

サ「えーと、ヒカリとタケシは知ってるな。こっちはカスミ、ハルカ、アイリス、マサト、デント、リュウカ、ベル。」

サトシは順番にカスミ達をカズナリに紹介した。

カズナリ「あつ、皆さん。初めまして。」

カスミ「はじめまして、アタシはカスミ。」

ハル「私はハルカ。」

アイリス「アタシはアイリス。」

マサ「僕はマサト。」

デ「デントです。イツシュ地方でポケモンソムリエをしています。」

リュウカ「カズナリさん、初めまして。リュウカです。」

ベ「私はベル。」

カズナリ「カズナリです、これからよろしくお願いします。ところでデントさんでしたっけ。あなたの職業のポケモンソムリエって？」

カズナリは自分が初めて聞くポケモンソムリエについてデントに聞いてみた。デントはカズナリに丁寧に分かりやすくポケモンソムリエについて説明した。

カズナリ「へえ、イツシュ地方には珍しいポケモンに関わる仕事があるんですね。」

デ「イツシュ以外では、知られてないからね。無理もないよ。」

デントの説明が分かりやすかったおかげで、カズナリは理解でき

たよつだ。

コトネ「ところで、カズナリ。ウツギ博士は何処？」

カズナリ「あゝ、博士は今いつものように研究所に入り浸りだよ。」

コトネ「そう．．．。」

カズナリの返答にコトネはかすかに苦笑を浮かべた。サトシ、タケシ、カズミの3人も「博士も相変わらずだ。」と言うような顔をして苦笑を浮かべた。

ハル「そこまで、研究熱心な人なんだ。ますます会ってみたいかも。」

ヒ「そうね、他の博士とは違った面白味がある人そうだし。」

他の者たちのウツギ博士に対する興味は募る一方．．．。

コトネ「そういつことなら、善は急げってことね。」

ベ「そうそう、早速行くわよ。サトシ君。」

サ「ちょっと、コトネ、ベル!？」

ピ「ピカッ!？」

コトネとベルはそう言うと、サトシの腕を掴み一目散にワカバタウンへと駆けていった。サトシの肩に頭に乗っていたピカチュウは危うく落ちそうになるも、何とかしがみついている。

ヒ「あつ、ちょっとコトネ！（サトシの腕を掴まないで！）」

ポ「ポチャー！」

カ「ま、待ちなさい！（コトネ羨ましい・・・。）」

ハル「あの2人、早すぎかも！（私だって、まともに手を繋いだことないのに・・・。）」

アイ「ホント子供ね〜！（サトシはあたしのなんだから！）」

キバゴ「キバキ！」

それぞれ本音を隠しながらも、サトシ達を追いかけるヒロイン組。

カズナリ「・・・まさか、あの5人もサトシのことを。」

デ「うん、まだ何も言ってないのによく分かったね。」

カズナリ「苦労人の勘ってやつですよ。コトネだって、僕と2人旅をしていた頃、サトシのことが頭から離れなかつたくらいですし。」

カズナリはコトネとの2人旅での苦労話をデント達に話し始めた。カズナリの話聞いたタケシ、デント、マサト、リュウカは苦笑を浮かべた。

リュウカ「皆さんのサトシさんに対する想い、凄まじいですね・・・。」

さすがのリユウカもサトシ好きの面々の凄まじさに引いてしまっ
たようだ。

こうして、波乱含みのジユウト編が幕を開けたのである・・・

続いて後書きシヨ―

ジヨウト地方進出！（後書き）

天「やべえ、昨日はバイトで疲れた。」 詳しくは活動報告にて・

カ「アンタ、昼間中ずっと寝てたもんね。」

ヒ「通ってる将棋教室もなかったし。」

天「ホントだよ……。暇なのと眠いので大変だぜ……。」

コトネ「ところでとうとうジヨウトに着いたわけだけど、それって私の出番が増えるってこと？」

天「その予定にはしている。」

ベ「ますますこの小説の展開が分からなくなってきたわ。」

天「ところでベル、この前のBW見たんだがありゃなんだ？」

ベ「あれって？」

天「チャーミーにくすぐるを指示するの手つきだ。あれは完全に今から痴漢しに行くエロオヤジの手つきだったぞ。」

ベ「ちょっとなんでそんなところに注目するのよ。もっとほかにもあったでしょ？」

天「エモンガの回想でベルが闇化したところとか？」

べ「それもマニアック過ぎ！ もういいわよ！」

天「さて、ベルの癩癩もひと段落したところで締めは俺で。次回もポケモンゲットでドドンガドーン！」

アイ「アタシのセリフ取らないでよー！」

次は何処に行く？（前書き）

今回もCP要素やギャグは控えめです・・・

次は何処に行く？

サトシがコトネとベルに半ば強引に連れ去られてはいたものの、無事にウツギ研究所に到着した。

ウツギ「やあ、サトシ君。久しぶりだね。オーキド博士は元気にしてたかい？」

サ「お久しぶりです、ウツギ博士。俺もオーキド博士もみんな元気ですよ。」

ウツギ「そっか、それは良かった。ところで今回は何故ジョウトに？」

サ「俺、今度の『ワールドチャンピオンリーグ』に出るんです。それで大会までに今までに旅してきた地方に出てトレーナーとしての自分を高めたいと思ったんです。つい最近までカントー、そして今回はジョウトを旅しようと思ったんです。」

ウツギ「ジョウトにも強いトレーナーは沢山いるからね。いい心がけだよ。ところで、そちらの方々は？」

ウツギは初対面のハルカ、ヒカリ、アイリス、マサト、デント、ベル、リュウカの方に顔を向けた。

サ「こちらはハルカ、ヒカリ、アイリス、マサト、デント、ベル、リュウカ。みんな俺の仲間です。」

ハル・ヒ・アイ・マサ・デ・ベ・リュウカ

「「「「「初めまして。「「「「「」

ウツギ「こちらこそ、初めまして。」

ウツギとハルカ達7人は互いに挨拶を交わす。

ウツギ「サトシ君達はジョウト地方を回るんだよね？ だったら、一回アルフの遺跡を見てみるといいよ。あそこには道具がいっぱいあるからね。きっとバトルやポケモンの成長に役に立つよ。」

サ「はい、行ってみます。」

ウツギ「ところで、カスミちゃん、ハルカちゃん、ヒカリちゃんはポケモンコーディネーターでもあるんだよね。今の時期は各地で『ワールドチャンピオンフェスティバル』のデモ大会が開かれるみたいだからぜひ出てみるといいよ。」

ハル「本当ですか！？ もちろん出ます。ねっ、カスミ、ヒカリ。」

カ「ええ、もちろん出るわ。」

ヒ「アタシも出るわよ。出るからにはカスミにもハルカにも負けないんだから。」

ハル「私だって、負けないかも。」

カ「アタシだって同じ気持ちよ。」

カスミ、ハルカ、ヒカリの3人は早くもデモ大会に向けてライバル意識を燃やしている。

タ「これは誰を応援すればいいか迷うな。」

サ「でも頑張れよ。こっちもすっかり応援するからな。」

カ「サトシもよ。」

ハル「お互いそれぞれの大会に向けて、頑張りましょう。」

ヒ「これからよろしくね、サトシ。」

サ「ああ、3人ともよろしくな。」

サトシ、カスミ、ハルカ、ヒカリの4人は互いに笑顔でそれぞれの目標に向かって決意表明する。

アイ「ちょっと、アタシ達を忘れてない？」

デ「僕達もサトシの旅仲間だという事を忘れちゃ困るよ。」

コトネ「私もみんなにジヨウトの素晴らしさをもっと知ってもらいたいってことね。」

アイリスとデントはサトシにそう言った。アイリスとデント、そしてコトネの言葉に、ベル、マサト、リュウカもうんうんと頷く。

サ「ごめんごめん、もちろんさ。みんなでジヨウトの旅も張り切っ
ていこうぜ。」

サトシ以外全員「おー！！！！！！！！」

こうして、それぞれの目標に向かっての旅がまた、ジヨウトを舞
台に始まったのだった。

続いて後書きシヨ―

次は何処に行く？（後書き）

ヒ「ようやく、始まるのね。」

ハル「私もコンテスト以来のジョウトだから、わくわくしてきちゃったかも。」

カ「アタシもよ、ハルカ。」

アイ「ところで作者。ここ数話、やけにCP要素薄い気がするんだけど……。」

天「毎回ベタベタなの書いてもネタ切れを起こすだけだからな。」

ヒ「一応聞くけど、ちゃんと用意しているんでしょうね。」

天「まあな。それを文章化するには時間がある。それにもうすぐ前期の講義が始まるのと、最近のびハザ動画にハマってしまっただけ更新出来ない。」

アイ「もうすぐ4月だもんね。」

ハル「最後ののびハザ動画はいらないかも。」

天「俺の住む山口県S南市はまだ寒いけどな。後、ここ2話はCP要素薄眼で行くから、あまり期待しないでくれ。ただ、オリキャラ+とっておきの話を用意しておくから待っていてくれ。」

カ・ハル・ヒ・アイ「……とっておき?」「……」

天「まつ、そう言う事だから。読者のみなさんもこんな駄文続きで
すが、次回もよろしくお願いします。」

アルフの遺跡に向けて・・・(前書き)

更新遅れてすみません(汗)。ほのぼのありギャグありの話、それではございませぬ。

アルフの遺跡に向けて・・・

ワカバタウンを後にしたサトシ達は、一路アルフの遺跡を目指し歩みを進めていた。ちなみに、前々回から登場したカズナリも一緒に同行している。その道中のこと・・・

カ「ところでサトシ。今回も旅に連れてきたのはピカチュウ1体だけ？」

サ「いや、今回はピカチュウの他に後2体連れてきてる。」

ハル「えっ、そうなの!？」

サトシのことだから旅の初めはピカチュウだけだと思っていたハル力は、驚いた。

アイ「ねえねえ、サトシ。アタシ、他の2体も見てみたいなあ。」

デ「僕も是非見たいね。イッシュ以外のポケモンがどんなテイストなのか確かめてみたいし。」

ベ「私も。サトシ君のポケモン見たい。」

イッシュ組の3人がサトシが連れてきた残り2体のポケモンに早速興味を示した。もちろん他の連中も興味を示している。

サ「それなら、出てこい!」

サトシは残りの2体が入った2つのモンスターボールを上に向か

って投げた。そしてボールの中から2体のポケモンが登場した。

バタ「フレイイイ!!!!」

ミジユ「ミジユミジユ。」

サトシがピカチュウの他に連れてきたポケモン、それはカントー編でゲットしたバタフリーとイツシュ地方でゲットしたミジユマルだった。すると、バタフリーは懐かしそうにタケシとカスミの方へ近寄ってきた。

カ「もしかして、このバタフリーってあの時の？」

サ「ああ、そうだよ。トキワの森で偶然ゲットしたんだ。」

タ「そうだったのか。バタフリー、元気にしてたか？」

バタ「フレイイ!!!!」

タケシの声にバタフリーは嬉しそうに再会を喜んだ。ちなみにバタフリーは虫タイプだが、カスミは虫は虫でも（カスミの主観で）綺麗だったり可愛かったりする虫ポケモンは大丈夫なようである。

カ「でも、サトシ。この子って色違いの仲間と一緒にだったんじゃないの？」

サ「ああ、色違いのバタフリーならヒカリがゲットしたぜ。」

タ「えっ、そうなのか？ ヒカリ。」

ヒ「ええ、そうよ。見せてあげる。出てきて、バタフリー。」

ヒカリが1個のモンスターボールを上投げると、中からピンク色のバタフリーが元気よく出てきた。

色バタ「フイイイ!!!」

ハル「うわぁ、色違いのポケモン見るの、私初めてかも。」

アイ「イツシュ以外にいるポケモンだけでも珍しいのに、そのうえ色違いなんてラッキーね。」

ハルカとアイリスは早速ヒカリの色違いのバタフリーに興味を示し始めた。もちろん、コトネ、カズナリ、ベル、リユウカも興味津々である。

カ「色違いのポケモンはめったにお目にかかれないものね。でもアタシは……。」

カスミはそう言うと、ミジュマルに近づきその場で抱きかかえた。

カ「ホント、このミジュマル可愛いわ。ねえ、サトシ。アタシのコダックあげるから、このミジュマルと交換しない?」

サ「それはダメ!」

カスミは自分のコダックとサトシのミジュマルの交換を要求したが、それはあっさりサトシに断られた。

カ「ケチ。」

カスミは不貞腐れて頬を膨らませた。その光景にさっきまでヒカリのバタフリーに見惚れていた面々は苦笑を浮かべた。

カ「じゃあ、このポツチャマ．．。」

ヒ「それもダメ！」

ポ「ポチャポチャ！」

今度はヒカリのポツチャマとの交換を要求したが、それもヒカリにあっさり断られた。隣にいたポツチャマも大好きなヒカリと離れたくないのか頑なに拒否していた。それによってカスミはさらに不貞腐れたとか。ミジユマルに引き続き、ポツチャマも欲しがるとは、水ポケモンマスターを目指す執念というか単なる我儘というのか．．。

ハル「旅をすれば新しいポケモン見つかるわよ。」

ハルカがカスミを慰めるように言った。

カ「そうよね、こんなところで立ち止まってはいられないわ。待っててね、水ポケモン達！」

カスミはすぐに立ち上がって、一目散に駆けていった。

リュウ「立ち直り早いですね．．。」

アイ「分かりやすいというか、なんとというか、ホント子供ねえ。」

サ「まあ、それがカスミらしいんだけど・・・。」

サトシは苦笑を浮かべながら、カスミを追いかけていった。そして一行は、ウツギ博士の言っていたアルフの遺跡へと到着したのだ。

続く・・・

アルフの遺跡に向けて・・・(後書き)

次回、アニメ『けいおん!』のキャラをモデルにしたオリキャラを
2人出します。

天の河は『けいおん!』見たことも読んだこともないのですが・・・
オイッ!

アルフの遺跡、到着！（前書き）

サブタイが恐ろしいほどに思いつかない（汗）

前回の予告通り、アニメ『けいおん！』のキャラをモデルにしたオリキャラが登場します。ただ、Wikipediaを参考にしたかったオリキャラなので、かなり捏造しています。はっきり言って、原作通りじゃないです（汗）。

アルフの遺跡、到着！

サトシ達はキキョウシティ近郊にあるアルフの遺跡に到着した。

サ「しかしここに来るのも久しぶりだな。」

カ「そうね。前に来た頃とあまり変わってないわね。」

タ「それほど、遺跡の保存状態が良いんだろう。」

サトシ、カスミ、タケシの3人は以前来た時と変わってない外観に驚いていた。

コトネ「それだけじゃないってことね。最近ではポケモンの化石も見つかっていて歴史的に重要な史跡として全国に認められてるの。」

アイ「ポケモンの化石？ それって、凄くない！」

ヒ「シンオウにも歴史的な名所はいっぱいあるけど、ジョウトにもこんな素敵な場所があるなんてびっくりしたわ。」

デ「歴史的情緒あふれたハーモニー……。ジョウトも他の地方に負けないくらいに素晴らしいところだね。」

コトネ「でしょ。以前はエンジュシティやコガネシティのような比較的大きな町にしか観光客が来なかつただけど、私たちがジョウトの良さをアピールしてからは他の街にも観光客が増えたわ。これも努力の成果ってことね。」

ヒ「さすがね、コトネ。」

ベ「自分の生まれ育った地をそこまでアピールできるなんてなかなかできないわよ。」

コトネ「えへへ、ヒカリン達に言われると照れちゃうってことね。」

コトネは照れるように笑みを見せた。

サ「これから楽しくなりそうだな。なっ、ピカチュウ。」

ピカ「ピカピ！」

サトシ達がほのぼのと会話を進めていると、2人の少女の姿が見えた。

?「ねえ〜。疲れたよ〜。」

?「もう仕方ないなあ、お姉ちゃんは。ちょっと、この辺で休もうか。」

サトシ達は2人の少女のもとへと近づいて行った。

ヒ「あの、あなた達も遺跡を見に来たの？」

ヒカリが声をかけて少女2人に声を掛けてみた。

?「そうだよ。ここには珍しいポケモンが生息してるからゲットしようかなって思ってここに来たの。」

2人のうちの茶色のショートボブヘアの少女が、ヒカリの質問に答えた。

ユイ「あ、わたしユイ。よろしくね。」

ユイと名乗った少女は、ほんわかしたフレンドリーな雰囲気少女である。

ヒ「アタシはヒカリ。で、そちらの方は？」

ユイ「わたしはユイです。よろしく申し上げます。」

ユイとは対照的にユイは自分の名前を名乗ると、深々とお辞儀をした。その姿に、

(出来た子だ!!!)

サトシ達全員、そう思った。

ベ「ユイさんとユイさんだっけ。ジヨウトにはどうして？」

ユイ「私たちは今度の世界大会に向けて特訓の旅の最中なんです。ユイお姉ちゃんはコンテスト、わたしはバトルの特訓の旅です。」

サ「へえ、じゃあ俺達と一緒にだな。」

ユイ「えっ!?! じゃあ、サトシさん達も今度の大会に...。」

カ「そうよ。さっき言ってたけど、ユイお姉ちゃんてことはあなた達は姉妹？」

ユイ「そうだよ。わたし達は双子の姉妹なの。」

アイ「薄々分かってたけど、2人ともよく似てるわね。」

ユイとウイは双子の姉妹であるが故に、外見はどっちがどっちなのか分からなくなるほど酷似している。ウイの髪型がポニーテールなのが唯一の違いである。

デ「ところで君達はポケモンをゲットしに来たって言ったけど、その肝心のポケモンはゲット出来たのかい？」

ウイ「はい。近くの草むらでわたし達の故郷にはいないネイティとダブルをゲットしました。」

ユイとウイはお互いのモンスターボールを取り出し上へ投げた。すると、1体のネイティと1体のダブルがボールから出てきた。

ユイ「ネイティはわたしので、ダブルはウイのポケモンだよ。」

アイ「ネイティ初めて見たけど、可愛い。」

デ「ネイティもダブルもイッシュ地方にはいないからね。僕も初めてだよ。」

ベ「わたしもゲットしたいなあ。」

ユイのネイティ、ウイのダブルに早速興味を示したイッシュ組の面々。すると、

ユイ「ねえ、誰か私達とタッグバトルしてみない？」

サ「バトル!? やるやる。」

バトルと聞いて目を輝かせながらユイに答える。そんなサトシの様子に、

アイ「うわあ、バトルって聞いたらすぐこれなんだから。ホント、子供ね。」

タ「まあ、あれがサトシらしくていいんじゃないか。」

ウイ「お姉ちゃんもまた・・・(汗)。」

アイリスがお馴染みのセリフを口に出し、サトシとユイ以外の面々は苦笑を浮かべた。

ポーン!!!!!!!!!!

すると、サトシとヒカリのモンスターボールからバタフリーが飛び出してきた。

ヒ「どうしたの、バタフリー？」

バタ「フリフリイ！」

色バタ「ファイイ！」

サトシとヒカリのバタフリーは羽をばたつかせながら飛びまわる。

ベ「もしかして、その2体のバタフリーはバトルしたいんじゃない？」

サ「えっ、そうなのか。バタフリー？」

バタ「フリイ！」

サトシの言葉にコクリと頷くバタフリー。ヒカリのバタフリーも同時に頷く。

サ「そうか。じゃあ一緒にやってくれるか、ヒカリ。」

ヒ「OK！もちろんよ。」

ユイ「じゃあ決まりだね。ウイもほら。」

ウイ「まあ、最近お姉ちゃん以外とバトルしてなかったし、いいですよ。」

こうして、サトシ&ヒカリVSユイ&ウイによるタッグバトルをすることになったのだ……

続いて後書きシヨ

アルフの遺跡、到着！（後書き）

天「サブタイ、オリキャラ。難しい・・・。」

カ「結構無理矢理感があつたわね。」

天「・・・なんでもいいから、文才が欲しいorz。」

ヒ「ところで、今回出たユイとウイって、『けいおん！』の平沢姉妹の下の名前なんだけど。」

天「まあ、その平沢姉妹がモデルだからな。この2人は双子じゃないけど、ポケモン仕様にするために双子トレーナーとして登場させてみた。」

ヒ「そうなんだ。」

天「それはそうと、次回の次の話で争奪戦要素にひと工夫加えた話になるから。ちなみに、この話でもオリキャラ出るぞ。」

カ「今回みたいにも、他のアニメのキャラクターがモデル？」

天「いや、次のは正真正銘自作のオリキャラだ。」

ヒ「へえ〜、じゃあ楽しみにしてるわ。」

天「それでは最後になりましたが、最後の締めは俺担当で。次回もポケモンゲットかも。」

カ・ヒュ「それ、ハルカのセリフ・・・。」

サトシ・ヒカリVSユイ・ウイ！（前書き）

今回はサトシ・ヒカリとユイ・ウイによるタッグバトルです。

結末は・・・、あまり期待しないでください・・・（汗）

サトシ・ヒカリVSユイ・ウイ!

前回の終わりにサトシとヒカリのバタフリー、ユイのネイティとウイのダブルでタッグバトルをすることになった。

ピ「ピカー!!!」

ポ「ポチャー!!!」

キバゴ「キバキー!!!」

サトシのピカチュウとヒカリのポッチャマ、さらにアイリスのキバゴが必死にサトシとヒカりに声援を送る。

サ「先攻はユイ達からでいいぜ。ヒカリもそれでいいか？」

ヒ「ええ、構わないわよ。」

ユイ「それじゃあお言葉に甘えさせて、いくよウイ。」

ウイ「まかせて、お姉ちゃん。」

ユイとウイはバトルモードに入った。同時に2人のネイティとダブルもバトルモードに入った。

ユイ「ネイティ、ドリルくちばし。」

ウイ「ダブル、てだすけ。」

ダブルのてだすけによって、ドリルくちばしの威力が1.5倍になる。さらに虫タイプのバタフリーにとっては効果抜群なのでさらに威力が増す。

サ・ヒ「バタフリー、かわせ（かわして）！」

サトシとヒカリのバタフリーにネイティの強力なドリルくちばしが襲いかかるが、2体とも瞬時にそれをかわした。

タ「あのダブル、スケッチでてだすけをコピーしたみたいだな。」

デ「あのダブルがどんな技を覚えているかが勝敗の決め手になりそうだね。あのネイティとダブル、ゲットしたばかりとは思えないくらい抜群のテイストを奏でているよ。」

タケシとテントが着目した共通点はダブルのスケッチだった。スケッチは相手が最後に使った技をコピーしてバトルが終わった後もその技を自分のものに出来るという変わった技である。

サ「いくらゲットしたばかりとはいえ、あのダブルは厄介だ。気をつける、ヒカリ。」

ヒ「ええ、分かってるわ。でも、ネイティも何の技を出してくるか分からないわ。」

サトシとヒカリもダブルを第一に警戒する。ただダブルに気を取られているとネイティの飛行タイプの効果抜群の技を食らってしまう。

ヒ「サトシ、ここは一気に決めるわよ。バタフリー、ぎんいろのか

ぜ。」

サ「OK。バタフリー、こっちもぎんいろのかぜでいくぞ。」

2体のバタフリーによるダブルのぎんいろのかぜがネイティとダブルに襲いかかる。サトシはタイプの厄介なネイティをまず倒そうとして、

サ「そのまま、ネイティにむしのさざめき。」

バタ「フイイ！」

むしのさざめきをバタフリーに指示する。

ユイ「今よ、ネイティ。バタフリーにドリルくちばし。」

ユイはバタフリーが近づいたのを見計らって、ドリルくちばしでバタフリーに攻撃する。しかも、先程のぎんいろのかぜでダメージを受けたはずなのにほぼ無傷の状態である。

タ「ねがいごとを使ったのか。」

ねがいごととは使ったターンの次のターンに体力の半分を回復するエスパークタイプの技である。どうやら、バタフリー達のぎんいろのかぜを受けている間にねがいごとをつかったようだ。

バタ「フイイ!？」

バタフリーはネイティのドリルくちばしをまともに食らう。本来なら効果抜群の技だが、なぜかあまり効いていないようである。

デ「サトシのバタフリー、バコウの実を持ってたみたいだね。」

マサ「相性対策はばっちりだったんだね。」

バコウの実とはポケモンに持たせておくと効果抜群の飛行タイプの技の威力を一度だけ弱める木の実である。サトシはバトル前に遺跡を回っている最中にみつけたバコウの実をバタフリーに持たせたようだ。

サ「バタフリー、ネイティにむしのさざめき。」

バタ「フイイイ！」

無防備のネイティにバタフリーのむしのさざめきが直撃する。一方、ヒカリは、

ヒ「これを待ってたのよ。バタフリー、ダブルにサイケこうせん。」

色バタ「フイイイ！」

サトシとヒカリはネイティとダブルの連携を崩して1体ずつ攻撃する作戦をとっていた。その作戦が見事にハマリ、サトシのバタフリーはネイティに、ヒカリのバタフリーはダブルに、それぞれ攻撃することができた。攻撃をまともに食らったネイティとダブルは目を回して倒れていた。

ユイ「ネイティ!?!」

ウイ「ドール！？」

ユイとウイは倒れている2体のもとへ駆け寄る。

ヒ「あちゃ〜、ちょっと本気出し過ぎちゃったかな・・・。」

ウイ「いえ、やっぱりこの子たちはバトルするには早すぎたみたいですね。」

サ「でも、これから経験を積んでいけばいいさ。」

ユイ「そうだね、これから頑張ろうね。ネイティ。」

ウイ「ドールもがんばりましょう。」

ダブルバトルは経験で勝るサトシとヒカリの勝利に終わった。そして、

サ「それじゃあ、一旦ここでお別れだな。」

ユイ「うん、でもまた会おうね。サト君。」

サ「サト君！？」

ユイ「サトシのサトで、サト君。いいでしょ。」

ユイはサトシにきっぱり言った。サトシは変わった名前の呼ばれ方をされたのでキョトンとした。ユイとサトシ以外はみんな引きつった笑みだった。

ユイ「それじゃあ、みんなまたね。」

ウイ「また逢う日まで。」

サ「ああ、またな。」

ヒ「今度またバトルしましょう。」

サトシ達は双子姉妹トレーナーのユイとウイの2人と別れた。そして、サトシ達もアルフの遺跡を後にして、次へと歩みを進めるのだった……

続く……

サトシ・ヒカリVSユイ・ウイ！（後書き）

次回から、争奪戦要素を濃くしていきます。

セレビィパニック!? (前書き)

こんなサブタイですが、セレビィはほんの少ししか出ません(汗)

また、オリキャラが出ますが、このオリキャラがちょっとした一波乱を巻き起こします。この話から、再び争奪戦要素が濃くなります。

無駄に長いうえ、滅茶苦茶な展開ですがどうかよろしく願いします。

セレビィパニック！？

現在、サトシ達はウバメの森に歩いている。ウバメの森はジョウト地方でも有数の虫ポケモンの宝庫である。そう、虫ポケモンといえば、カスミのアレが表面化するのである。

カ「・・・ハルカ、絶対に手離したらだめだからね。」

ハル「分かったから、抱き着くのはやめて。」

例のごとく歩みが遅くなるカスミの巻き添えを食うことになったサトシ一行（特に、ハルカ）。今のカスミはまるでダチ○ウ倶楽部の○島○兵の「押すなよ！」を彷彿とさせる。ちなみに、ハルカはカスミに抱き着かれています格好になっているが、作者はガールズラブを書きたいわけではないので悪しからず。

サ「相変わらずだな、カスミ。」

タ「いい加減、治してほしいものだよ。」

カスミがどれ程虫ポケ嫌いなのかをよく知る2人は顔を引きつらせた。

アイ「虫ポケモン、こんなにかわいいのに。」

カ「やめてよ、アイリス。ていうかそれ、前にも聞いた！」

アイリスの言葉に声を荒らげるカスミ。

カ「あんな気持ち悪いのがポケモンだなんて、信じられないわ。」

カスミの問題発言に、森の中だったのでボールから出ていたサトシとヒカリのバタフリーは、

バタ「フイイイ……。」

色バタ「フイイイ……。」

大変なシヨックを受けた。

ピ「ピカピカ……。」

ポ「ポチャポ……。」

サ「お、おい。バタフリー、そんなに落ち込むなって。」

ヒ「そうよ。カスミ、今は言い過ぎよ。」

バタフリー達を慰める一方で、カスミを責めたてるヒカリ。

カ「あ、ごめん……。バタフリー、そんなつもりじゃなかったのよ。」

必死でバタフリー達に謝るカスミ。

カ「別に全ての虫ポケモンが嫌いなわけじゃないのよ。」

カスミの必死の謝罪が通じたのか、2体のバタフリーはカスミに近寄って、気にしてないことをアピールする。ところがそんなカス

カスミがぶつかった方向には、一人の少女が目を回しながら倒れていた。年齢はマサトやリュウカと同じくらいである。

マサ「さつき、カスミとぶつかったときに気絶しちゃったんだね。」

ベ「あらら．．．。」

マサトとベルの一言に、申し訳なさそうな顔になるカスミ。その後、気絶した少女をとりあえず介抱するために別の場所を運び、少女が目を覚ますのを待った

?「ん、ん。ここは？」

デ「気が付いたかい。」

しばらくして、少女が目を覚ました。その少女にデントが声を掛ける。

?「えーと、私は．．．。」

カ「ごめんね、アタシとぶつかってあなた気絶してたのよ。」

?「そうだったのですか。別にいいですよ、わたしだって前をよく見てなかったのが悪いですし。」

カ「そう、でもホントにごめんね。」

カスミは気絶のきっかけをつくってしまったことを謝るが、少女はそれ程気にしてないようだった。その後、カスミはデントとタケ

シの昼食づくりの手伝いをするため、木の実を取りに行った。

リュウカ「どうしてこんなところに。年はわたしとマサト君とそんなに変わらないのに。」

？「あ、それは……。」

リュウカの質問に突然口ごもる少女。

リュウカ「あつ、別に言いたくなかったら言わなくていいからね。」

リュウカは少女の様子を見て、慌てて言う。そんなところへ、

サ「おーい、タケシ、デント。水汲んできたぞ。」

タ「ああ、サトシすまない。」

デ「その辺に置いて。」

サトシは少女、リュウカ、マサトの近くに水の入ったバケツを置く。そして、少女に気づき、

サ「あつ、やっと気が付いたんだな。俺はサトシ。で、君は？」

？「!？」

サ「ん？」

サトシは少女の名前を聞こうとしたが、少女はサトシを見るなり固まってじっとサトシを見つめた。サトシは少女の様子に首を傾げ

る。その女性陣の形相を間近で見ているサトシは、

サ「……………(泣)。」

涙目になりながらタケシ、デント、マサト、リュウカに助け船を
求めるが、

タ・デ・マサ・カズナリ・リュウカ()()ごめん、サトシ(さん)
。怖くて無理！()()

サトシ好きの面々の纏うオーラに恐怖を感じ、下手に近づけない
でいる5人。それもそうだろう。そのオーラはどんな凶悪なポケモ
ン達も一瞬で逃げ出すほどの威力である。もし近づけば、どうなる
のか想像を絶するものである。ピカチュウ、ポッチャマ、キバゴは
あまりの怖さから、タケシ達の元へ避難している。

タ「と、とりあえず、落ち着け！」

デ「そ、そくだよ。ここは冷静に！」

マサ「お、お姉ちゃんも落ち着いて！」

リュウカ「そ、そうですよ。皆さん。」

かと言って、このままではサトシが可愛そうなので、勇気を振り
絞って4人は仲裁に入った。しばらくして、サトシ好きの面々は落
ち着きを取り戻した。サトシは必然的にタケシ達の後ろに隠れて、
おびえた表情になっている。

？「あ、あの、すみません。わたしがしたこと皆さんにご迷惑を

おかけして。」

「別に俺たちはそこまで気にしてないから、謝らなくてもいいよ。」

「デ」ところで、どうしてサトシのことをパパって言ったんだい？」

デントは少女に発言の理由を求めた。

？「あの、信じてもらえないかもしれませんが……。」

少女が話しにくそうに言うと、

？「わたし、未来から来たんです。」

全員「はい!?!」

全員、驚きの表情を見せた。

？「あの、セレビィの時渡りって言えば分かります?」

コトネ「そういえば、ウバメの森にはセレビィの時渡り伝説があるって聞いたことがあるわ。」

タ「そ、それじゃあ、君は未来のサトシの子供ってことかい?」

？「はい。あっ、わたしの名前はアカリと言います。」

デ「それでアカリちゃん。どうして、君は僕たちの時代へ来たんだい?」

デントが時渡りの経緯をアカリに聞いてみる。イッシュ地方出身のデントだが、セレビィの時渡り伝説については知っていたようだ。アカリ「わたし、パパとママと一緒にウバメの森に散歩してたんです。そうしたら、偶然セレビィに出くわして、わたしだけ時渡りをしてしまったんです。」

どうやら、アカリはしたくて時渡りをしたわけではないようだ。アカリが言い終わると、『ママ』という単語が異様に気になったサトシ好きの面々が、

サトシ好き女性陣「あなたのママは誰!？」

アカリに詰め寄るように聞いてみた。

アカリ「あ、あのそれは禁則事項です……(汗)。」

アカリは冷や汗を垂らしながら答えた。

アイ「え〜、なんでよ〜。」

ハル「一体、誰から言われたの?」

アカリ「あの、作者さんから……。」

アカリの言葉に、

サトシ好き女性陣(あのクソ作者)(怒)(

作者に対する不満が高まったのだった。その光景にタケシ達は苦笑を浮かべた。

アカリ「でも、これだけは言えます。わたしのママはパパが今までの旅で出会った女の子です。」

アカリの一言に、サトシ好きの面々は、

カ「い、今まで旅で出会った人ですって!？」

ハル「お、多すぎかも・・・。」

ヒ「アカリちゃんママがアタシであって欲しいわ。」

アイ「あ、アタシだってサトシの旅で出会った子の一人なんだから!」

コトネ「アカリちゃんママ候補は多いけど、わたしにも脈があるってことよね・・・。」

ベ「これから、もっとサトシ君にアプローチすれば・・・。」

それぞれサトシに対する思いを募らせるのだった。

マサ「ねえ、タケシ。これからサトシ争奪戦がより激しくなると思わない?」

タ「ああ、出来ればあまり俺達もとばっちりが来ないようにしてほしいのだが、無理そうだな。」

マサトはタケシに耳打ちすると、タケシははあくため息をつきながら、答える。

セレビィ「セレビィ！」

すると突然、どこからかセレビィが現れた。

アイ「あれが、セレビィ！？ 初めて見るわ。」

ベ「結構可愛いわね。」

初めて生のセレビィを見る面々は興味を示した。すると突然、サトシ達の目の前が光りだした。

アカリ「どうやら、もう元の時代に帰る時間みたいですね。」

アカリはそういうと、セレビィとともに光の中へと入っていく。

ヒ「ねえ、もう会えないの？」

アカリ「大丈夫ですよ。何年先のことがわかりませんが……。最後に、これからもパパのことよろしくお願いします。」

アカリとセレビィを包んでいた光はしばらくすると消えた。そこには、アカリとセレビィの姿はもうなかった。

マサ「不思議な事って、あるもんだね……。」「

マサトが淡々と話すと、全員頷いた。

ヒ（サトシとの子供．．。）

ポ「ポチャ？」

ヒカリは心の中でサトシと結婚して子供ができることを思い浮かべて、顔をほんのり赤くしていた。ポツチャマはヒカリの様子に首を傾げていた。

カ（将来、アタシはサトシと結ばれてるのかしら．．。）

ハル（アカリちゃんママが私だったら．．。）

アイ（こうしちゃいられないわ。もっとサトシと仲良くならなくちゃ！）

コトネ（これから、サトシにもっとアプローチしなきゃってことね。）

ベ（私、サトシ君と少ししか触れ合う機会がないけど、私にもチャンスあるよね．．。）

他のサトシ好きの面々もサトシとの将来を思い浮かべながら、それぞれ決意を改める。心なしか、全員顔がほんのり赤く染まっている。

サ「．．．なあ、あれ大丈夫なのか。全員顔赤いぞ。」

タ「ああ、顔は赤くなってるが、あれは病気じゃないぞ。」

サ「じゃあ、どうしてみんな顔赤くなってるんだ。」

デ「・・・今は、気にしないほうがいいよ。」

サ「そうか、でも気になる・・・。」

カズナリ「すぐに元に戻りますから、昼食の準備でもしておきましよう。」

サ「お、もうそんな時間か。じゃあ、タケシ、デント、手伝っぜ。」

タ「ああ、すまない。」

デ「じゃあ、よろしく頼むよ。」

超が何個もつくほどの鈍感で仲間思いなサトシに苦笑を浮かべながら、昼食の準備に取り掛かるタケシとデント。マサト、リュウカ、カズナリもそんなサトシに乾いた笑みをするしかなかった。昼食後、サトシ達はウバメの森を抜けて、ジヨウト地方最大の都市・コガネシティへと向かうのだった。

続いて後書きシヨ―

セレビイパニック!? (後書き)

ヒ「ちょっと、作者。」

天「なんだ。ヒカリ。」

ヒ「今回の話の展開、変な方向に向かっているわね。」

ハル「それに、サトシの子供だなんてびっくりしたわよ。」

天「今回の話は、前からやってみようかなと思ってたんだ。セレビイの時渡りに絡めた話をどうしてもやりたくてな。だったら、争奪戦要素に組み入れるかとふと思ったんだ。」

カ「随分と無謀な挑戦ね。」

天「まあ、そう言うなって。」

コトネ「それよりも、アカリって子のママの正体、結局分からずじまいだったけど、いったい誰なの?」

天「その件に関しては、ノーコメントということだ。」

カ「なによそれ。」

天「だって、簡単に決めちゃったら面白くないし、こういう展開もいいかなって。それに決めたら決めたで、今後のネタが思いつかなくなる危険性もあるし。とりあえず、アカリのママの正体は、読者の想像に任せるということで。」

べ「完全な責任転嫁ね。」

ヒ「作者はサトヒカ派だから、アカリのママはアタシだと思う。アカリって名前だって、なんとなくヒカリに似てるし。」

天「それはどうかな。確かに俺はサトヒカ派だが、この作品は総受けだってことを忘れてもらっちゃ困るよ。」

ハル「そうよ、ヒカリ。勝手な憶測で決めないで欲しいかも。」

ヒ「それでもアタシはあきらめないわ。いつかサトシに告白して、めでたくゴールインして見せるんだから。」

ハル「私だって、負けないかも。」

カ「あら、アタシだって。」

アイ「ちょっと、抜け駆けは許さないわよ。」

コトネ「サトシは誰にも渡さないってことね。」

べ「わたしだって、サトシ君は渡さないんだから。」

天「．．．えー、何か変な風向きになってきたので、今回はこの辺でお開きにしたいと思います。」

お知らせ

ここ最近、当作品においてリクエストをして下さる方が多々いらっしゃいます。天の河としても、今後の展開の参考になるので、大変ありがたいです。ただ、これだけは言わせてください。すべてのリクエストに必ずしも答えられるという保障はできません。というのも、この作品は天の河の元々気まぐれで作っているだけだったので、リクエストが来ることは全く想定しておりませんでした。これからも気まぐれ更新で貫き通すつもりです。ですが、基本的にリクエストは受け付けておりませんが、リクエストがあれば今後もよろしく願います。ただ再三言いますが、すべてのリクエストにえられる技量と保障はありませんので、このことを念頭に置いてください。

今後とも、『主人公総受け物語〜アニポケ編〜』をよろしく願います。

『ワールドチャンピオンリーグ』の追加ルール（前書き）

これは以前、後書きに書くといっておきながら書き忘れた追加ルールです。

『ワールドチャンピオンリーグ』の追加ルール

以下が、以前に載せるといって書くのを忘れていた『ワールドチャンピオンリーグ』で追加されたルールです。

出場条件の追加その1・

全国のバトルフロンティアのフロンティアブレーンに認定されている。

出場条件の追加その2・

シンオウ、カントーのいずれかの地方のバトルフロンティアのフロンティアシンボルを全て集めたトレーナー。

シンオウ、カントー両方のフロンティアシンボルの全てを持っていても、出場条件を満たしているとする。

『ワールドチャンピオンリーグ』の追加ルール（後書き）

皆さん、この度は大変失礼しました・・・

意外性ナンバー1!?(前書き)

以前投稿するはずだった話です。

同じ投稿ミスをする駄目な作者ですが、これからもよろしくお願ひします。

意外性ナンバー1!?

ウバメの森を抜けたサトシ達は、ジヨウト地方最大の都市・コガネシティへと向かっていた。その道中、

サ「なあ、タケシ。子供を持つ親の心境ってどうなのかな？」

タ「い、いきなりなんだ!？」

サトシが急に突飛押しもないことを聞いてきたので、タケシは大変驚く。他の面々（特にサトシ好き女性陣）も、あの超が何個もつく程の鈍感なサトシから意外な言葉を聞いたので驚いた。

サ「ほら、ウバメの森で出会った、アカリって子。俺の将来の子供なんだろう。なんか、実感湧かなくてさ。子育てって、結構大変って聞くし。」

タ「サトシ、それは今気にすることじゃないと思うぞ・・・。」

デ「そうだよ。僕たちはまだ親になったことなんてないから、実感がわかなくて当然だよ。それに、未来はいつでも変わるものなんだから、サトシは今までどおりに過ごしていけばいいと思うよ。」

啞然とするタケシに助け船を出すデント。

サ「そっか、そうだよな。」

タケシとデントの言葉に納得した表情を浮かべるサトシ。ところが、

サ「でも、俺の将来のお嫁さんって、一体誰なんだろう?」

サトシ以外全員「え、えええええ!?!」

サトシの意外な言葉に、一同驚きの声を挙げた。その衝動で、サトシの肩に乗っていたピカチュウはずり落ちてしまった。

サ「どうしたんだ。そんなに驚いて。」

デ「い、いやだって、サトシからそんなことが聞けるなんて思ってもみなかったよ。」

アイ「頭の中がそれ一色のバトルバカのサトシが!?!」

サ「みんなして、何なんだよ。後、アイリス。バトルバカで悪かったな。」

超が何個もつく程の鈍感で頭の中がバトル一色なサトシから、将来の生活についてのことが語られたので、無理もない。

リュウカ「ど、どうしてそんなことを聞くのですか?」

リュウカが恐る恐るサトシに質問をぶつけてみた。

サ「あのアカリって子が言うには、あの子のママは俺が旅をしてきた中で出会った人物なんだろ? それに、あの子の父親が俺なら、そのママってというのは必然的に俺のお嫁さんになるわけだろ。」

タ「そ、それはそうだが...。」

サ「俺が今まで出会った女の子って、結構いるぞ。カスミ達だって、その一人だし。」

なっ、とサトシが満面の笑顔でカスミ達に声を掛けると、当のカスミ達は一瞬ドキツとして、顔を少し赤らめた。くどいようだが、当然、サトシがなぜ彼女たちが顔を赤くさせるのか分からない。

マサ（あれ？ サトシって、こんな人だったかな・・・。）

マサトはとうとう、サトシの人物像が分からなくなってきた。

デ「サトシ。さっきも言ったけど、そういうのは今気にすることじゃないと思うよ。今は『ワールドチャンピオンリーグ』に集中するのが最優先じゃないかな。」

サ「デントの言うとおりだな。なんかごめんな、変なこと聞いて。」

サトシはタケシ達に謝ると、タケシ達は気にするなとサトシに言った。一方、サトシ好きの面々は、

カ（あ、あんなお子ちゃまがそんなことを言うなんて／＼）

ハル（さっきの笑顔、眩しすぎかも／＼）

ヒ（もう、心臓に悪いよ／＼）

アイ（た、たまに変なこと聞くのよね。ホント子供なんだから／＼）

コトネ（サトシって、ホント面白ってことね・・・。）

べ（サトシ君も将来のこと気になるのかな・・・。）

心境穏やかではなかった。一見、コトネとベルは冷静を装っているが、それぞれの心境は目まぐるしく変化している。すると、コトネは開口一番といわんばかりに、

コトネ「ねえ、サトシ。この近くに、わたしのおじいちゃんとおばあちゃんがやってるポケモンの育て屋があるんだけど、ちょっと寄ってみない。」

サトシを自分の祖父と祖母の育て屋に行かないかと誘ってみた。

サ「育て屋！？ 行く行く！」

サトシはポケモンの育て屋という言葉に興味津々の目をして、2つ返事でコトネに快諾した。

コトネ「じゃあ、今から育て屋までレッツ・ゴーってことね。」

サ「えっ、ちょっとコトネ!？」

ピ「ピカピ!？」

コトネはそう言うときサトシの腕を掴み、猛スピードで自身の祖母夫婦が経営している育て屋へと向かっていった。ピカチュウもその跡を追うように走って行った。

ピ「あっ、ちょっとコトネ!」

カ「待ちなさい！」

ハル「ちよつと待つかも！」

アイ「抜け駆けは許さないわよ。」

ベ「わたしのサトシ君を振り回さないで！」

若干一人おかしなことを言ったのがいたが、残りの5人はサトシを連れて走り去ったコトネを追いかけに行った。

マサ「ねえ、これからサトシをめぐる戦いが激しくなると思わない？」

タ「ああ、俺達がとぼちりを食らうのも間違いないみたいだな。」

デ「なんか、だんだんサトシが可愛そうに思えてきた。」

リュウカ「ここまで、すさまじいとは思いませんでしたね。」

ウバメの森での出来事、サトシの意外な質問により、さらに激しくなってきたサトシ争奪戦を前に、ただ茫然とするしかないタケシ

達であった。

続いて後書きシヨ―

意外性ナンバー1!? (後書き)

天「……………」

タ「また、やってしまったな作者。」

マサ「同じ投稿ミスするなんて、致命傷だよ。」

天「以前、同じようなことをカスミにも言われた。」

デ「まあまあ。それよりも、物語が変な方向に向かってるんだけど。」

マサ「僕はサトシの子供に驚いた。」

タ「しかし考えたな。セレビイの時渡りと織り交ぜるとは。」

天「まあな。出来には自信ないが、これは前からやってみたかった話だったんだ。」

デ「でも、僕たちの気苦労は増える一方なんだね……………」

天「よく分かってるじゃん。まあ、頑張れ。」

タ・デ・マサ「他人事だ……………」

コトネの家族

サトシとコトネはコトネの祖父母夫婦が経営しているポケモン育て屋の前に来ていた。

コトネ「サトシ、ここがわたしのおじいちゃんとおばあちゃんの育て屋よ。」

サ「へえ、ここが。」

コトネが紹介した後、サトシは育て屋の建物をまじまじと見つめた。

コトネ「じゃあ、早速中へ入りましょう。」

サ「えっ、いいのか。コトネは家族だからわかるけど、他人の俺が勝手に邪魔して。」

コトネ「それは気にしなくていいってことね。サトシはわたしの大切な仲間でもあり友達なんだから。」

サ「そっか、俺もコトネのことは大切だと思ってるぜ。」

コトネ「サトシ……。」

サトシに満面の笑顔を向けられたコトネは、思わず体をもじもじさせ、顔を少し赤く染めた。サトシはそんなコトネに首を傾げた。

コトネ「気を取り直して、中へ入りましょう。」

コトネは扉を数回ノックして、返事を待った。

「祖母「はいはい、どなた様……。おや、コトネ元気にしてたかい？」

扉が開くと、中から一人の老婆が出てきた。

「コトネ「こっちは大丈夫ってことね。おばあちゃん。ところで、おじいちゃんは。」

「祖母「爺さんなら、今コガネシティに言ってるところだよ。ところで、そちらの子は誰かい？」

コトネの祖母はコトネの隣にいるサトシに顔を向けた。

「コトネ「あつ、彼はシンオウのジョウトフェスタで出会ったサトシ。」

「サ「初めまして、サトシです。それとこっちは相棒のピカチュウです。」

「ピ「ピカッチュウ！」

コトネに紹介されて、丁寧にコトネの祖母に向かって自己紹介をするサトシ。それにつられるように声を出すピカチュウ。

「祖母「おや、コトネの友達かい。それなら、そこに立ってないですぐにお上がり。」

サ「えっ、じゃあ、お言葉に甘えさせてお邪魔します。」

コトネの祖母に促されるままに、サトシは家の中へと入っていく。

コ祖母「それにしても、孫がカズナリ君以外のボーイフレンドを連れてくるとはね〜。」

コトネの祖母がからかい交じりに言った一言に、コトネはドキッとして、

コトネ「お、おばあちゃん!? わたしとサトシは確かに友達だけど、そういう仲じゃないってば／＼／＼」

顔を赤くさせながら、あたふたと答える。サトシはコトネの様子に、首を傾げていた。

コトネ「それじゃあ、わたしちょっとポケモン達のいる庭で準備してくるから、サトシはそこで待ってて。あっ、おばあちゃん、くれぐれもサトシに変なこと吹き込まないですよ。」

コ祖母「はいはい。」

コトネは自身の祖母にくぎを刺すように言うと、家の外へと出ていった。

コ祖母「サトシ君じゃったね。これからも孫のコトネと仲良くしてあげてはくれんかの。」

サ「はい、もちろんです。コトネも大切な仲間ですし。」

サトシはそう言つと、コトネの祖母はニッコリとほほ笑んだ。しばらくしてコトネが戻ってきて、サトシはコトネやコトネの祖母とともにポケモン達がいる庭のほうへと出ていった。庭にはたくさんポケモン達が仲良く遊んでいた。

サ「これ、全部育て屋に預けられたポケモン？」

コトネ「そうよ。個々の事情でポケモンの育成ができないトレーナーのための施設が育て屋よ。ジョウトにはここにしかないことから、毎日ジョウト中の沢山のトレーナーがここを利用するわ。もちろん、ポケモンも様々だからいわばポケモンの保育所みたいところってことね。たまに仲良くなつたポケモンどうしから、タマゴが見つかることもあるわ。」

サ「そのタマゴでトレーナーどうしが揉めたりしないのか？」

サトシはふと疑問に思ったことを聞いてみた。仮にタマゴが見つかった場合、タマゴの所有権をめぐってその親のポケモンの持ち主どうしが揉める可能性がある。

コトネ「その時は話し合いで解決したり、どうしても解決できないときはポケモンバトルで解決することだってあるわ。ほとんどの場合、バトルで解決するんだけどね。」

サトシの質問にコトネはニッコリとして答えた。

サ「バトルはポケモントレーナーとしての鉄則みたいなものだからな。」

サトシはコトネの説明に納得したようだ。こんなサトシとコトネ

によるほのぼのとした会話が繰り広げられていたところ突然、強風が吹き始めてポケモン達が宙に浮いた状態となった。

サ「な、なんだ!？」

?「ナー、ハハハハ!」

サ「お前たちは、ロケット団!」

サトシとコトネの目の前に、巨大ロボットとともにロケット団のヤマトとコサn...コサブロウ、そして山線トリオが現れた。ロボットの腹部辺りを見ると、先程まで元気よく遊んでいたポケモン達が捕まっていた。

コトネ「あなた達、ポケモン達をどうする気!？」

シモ「ふふふ、これらをボスに献上するのさ。余ったポケモンは、裏で売りさばいて大儲けするんだよ!」

シモオタイの一言に、サトシとコトネはロケット団達を睨みつける。

コ祖母「そのポケモン達は、トレーナーから預かってるポケモン達じゃ。だから、返しておくれ。」

コサ「ふん! 返せと言われて素直に返す悪党が何処にいるんだよ!」

コサブロウはコトネの祖母の必死の願いを一言で一蹴した。

サ「ピカチュウ．．．。」

サトシはピカチュウで応戦しようとするが、

カミ「おっと、こいつらがどうなってもいいのか？」

ロケット団には捕獲した他のトレーナー達から預かったポケモン達がいる。下手に攻撃すれば、そのポケモン達に危害が及ぶ危険性がある。

サ「クツ．．．。」

ピ「ピカ．．．。」

サトシは唇を噛みしめながら、ピカチュウへの攻撃指示を中断させる。

コトネ「あなた達、卑怯よ！」

ロケット団に対する怒りを露わにするコトネ。

コサ「ハハハ、卑怯だろうが何だろうが目的は実現させる。それがロケット団だ！」

カミ「ドラピオン達よ、あの生意気な連中にどくばり。」

後ろに待機していた数匹のドラピオンのどくばりがサトシ達に襲い掛かる。丁度、その時、

タ「ルンパッパ、タネマシンガン。」

ルン「ルンパッ！」

ハル「アゲハント、ぎんいろのかげ。」

アゲ「フオオオオン！」

ヒ「ポツチャマ、うずしお。」

ポ「ポオオチアアア！」

サトシ達の跡を追っていたタケシ達が助けに来た。タケシのルンパッパ、ハルカのアゲハント、ヒカリのポツチャマによってドラピオン達のどくばりは一瞬で消え去った。

シモ「ちっ、邪魔がまた入ったか。」

シモオタイは舌打ちをしながら言う。

サ「タケシ、ハルカ、ヒカリ。それにみんなも。」

タ「話は後だ。今はロケット団から、ポケモン達を取り返すことが先だ。」

ハル「全く、しつこいかも。」

ヒ「ホント。」

カ「ヤマトにコサンジ。それに○山線トリオも毎回毎回なんなのよ。」

カスミ達はロケット団の執拗な登場に半ば呆れながら言った。

コサ「コサブロウだ。いい加減覚える！」

カミ・ナカ・シモ「○○山線トリオって言うな！」「」

いつものようにツッコミを入れるコサンジと○山線トリオ。

ヤマト「そんなことはほつといて、どうやって取り返すって言っんだい。仮にロボットを壊してアタシ達を倒しても、ポケモン達は無傷じゃすまされないわよ。」

デ「うう、確かに。」

アイ「全く、どこまで卑怯なのよ。」

ベ「ポケモン達を盾にするなんて許せないわ。」

ヤマトの言葉に怒りをあらわにしつつも、手出しできないでいる。他人のポケモンであるがゆえにそれを預かっている側としては、ポケモンを傷つけたとなると今後の信用にもかかわる。

サ「くそっ、こっとなったら・・・。」

サトシは急に落ちていた石を持ってロボットの方へと走り出し、そのままロボットに飛びついた。そして、持っていた石でポケモン達が入っている腹部辺りをたたき始めた。

ヤマト「随分と無駄な抵抗をしてくれるわね。」

シモ「いや、そうでもないぞ。捕獲装備に資金を費やしすぎたせい
か、腹部はかなり脆く作られている。ああ何度も叩かれたらいつか
壊れるぞ。」

カミ「目障りだ。ドラピオン達よ、あの小僧にどくばり。」

ドラピオン達のどくばりがサトシに命中する。

サ「くっ!」

サトシは痛みをこらえながら、ロボットにしがみつく。

ヒ「サトシ!?!」

タ「無茶だ!」

カ「早く、ポケモン達とサトシを助けなくっちゃ。」

アイ「でも、どうすればいいの……。」

ピンチに陥るサトシを見て、早くポケモン達とサトシを助けよう
とするが、闇雲にロボットを攻撃すれば、確実にサトシとポケモン
達に危害が及ぶ。助けたい思いとは裏腹に、何もできないもどかし
さが募る。

カミ「ドラピオン、ロボットに当てないように小僧にポイズンテ
ル。」

サ「うわああああ!?!?!」

ドラピオンのポイズンテールがサトシに命中。さすがにサトシも耐え切れず、地面に叩きつけられるようにしてロボットから離れてしまった。

アイ「サトシ!？」

すると突然、カスミのボールからコダックが出てきた。しかも、コダックはすでになしばりを繰り出しており、ドラピオン達とロボットは動かなくなった。

カ「コダック……。あなたも戦ってくれるのね。分かったわコダック、いって!」

コダックはサイキネシスでロボットに向けてドラピオン達をふっ飛ばした。ロボットの腹部は壊れ、中からとらえられていたポケモン達が逃げ出していく。奇跡的に全匹とも無傷だった。

ハル「あなた達、よくもサトシとポケモン達に酷いことしてくれたわね!」

ヒ「絶対に許さない!」

ハルカとヒカリが怒り心頭にロケット団に言う。他人のポケモンを盗もうとしたのに加え、自分たちが想いを寄せている人物を傷つけられたのだから無理もない。ハルカやヒカリだけではない。他の面々もそうである。

アイ「アタシ達も行くわよ、エモンガ。」

エモ「エーンモ！」

コトネ「ポケモン達を盗んだ分とサトシを傷つけた分はきっちりお返しさせてもらうってことね。」

カポ「カポツ！」

ベ「あなた達だけは絶対に許さないわ。行くわよ、チャオブー。」

チャオブー「チャオチャオ！」

アイリス達もそれぞれのポケモンを出す。

コトネ「カポエラー、インファイト。」

ベ「チャオブー、ニトロチャージ。」

カポ「カアアアポオオオ！」

カポエラーのインファイトとチャオブーのニトロチャージにより、ロボットのハッチが開いて、ヤマトとコサブロウ、○山線トリオがむき出しの状態になった。所々から火花も散っている。

ヒ「ポツチャマ、最大パワーでうずしお。」

アイ「エモンガ、最大パワーでめざめるパワー。」

ポ「ポオオオチャアアア！」

エモ「エエエエエンモオオオオ！」

とどめのポッチャマのうずしおとエモンガのめざめるパワー。さらには、

サ「俺たちも行くぞ、ピカチュウ。最大パワーでエレキボール。」

ピ「ピイイカアアア！」

サトシのエレキボールもロケット団に襲い掛かる。最大パワーの3つの技は見事命中し、ロボットは爆発、いつものようにヤマトとコサブロウ、○山線トリオはふっ飛ばされた。

ヤマト・コサ「やな気持ち。」

カミ・ナカ・シモ「やな気分。」

そしてリ○チに近い攻撃を受けた彼らは星になった。

ヒ「サトシ、大丈夫!？」

ヒカリ達は、すぐさまサトシの所へ駆け寄っていく。ちなみにポケモン達はタケシ達によって既に保護されている。

カ「ホント、アンタって無茶するんだから。」

ハル「心配したかも。」

アイ「何も考えずに行動するなんて。ホント子供なんだから。」

コトネ「サトシが傷つけられてるのに、何もできなくてごめんね。」

べ」でも、これからは無茶しないでよ。」

全員、心配そうにサトシを見つめる。

サ「みんな心配かけてごめんな。それとコトネ、あまり気にするな
つて。ポケモン達が無事だったんだから。俺は全然d...。」

サトシは大丈夫と言いかけたところで、急に顔を真っ青にしてそ
の場に倒れそうになった。

ヒ「サトシ、しっかりして!」

ピ「ピカピク。」

サトシが倒れそうになったところを間一髪で周りにいる女子全員
で支える。ピカチュウも心配そうに見つめる。

サ「ハハハ、あんまりだいじょばないかも。」

サトシは弱弱しく答える。そして、

べ「サトシ君!? しっかりして!」

タ「いかん! 早くサトシを運ぶんだ。」

「祖母「早く中へ運んでおいで!」

ドラピオンの毒がまわってきたのか、サトシは意識を失ってしま
った。そして応急処置のために全員で急いで家の中へと運んだのだ

った。これから、サトシは一体どうなるのか・・・

続く・・・

コトネの家族（後書き）

サトシの運命やいかに!？

サトシの命運!?(前書き)

前回ドラピオンの毒により意識を失ったサトシはいったいどうなるのか・・・

サトシの命運!?

サトシが意識を失ってから数分後、意識を失ったままのサトシは医者の診察・治療を受けた。それによると応急処置が早かったおかげで命には別条はない、今日と明日の2日間安静にしていれば元気になるとのこと。その言葉に、全員安堵の表情を浮かべる。医者が帰ってからはしばらくすると、

ハル「サトシ、大丈夫よね。」

ヒ「うん……。医者の先生も命に別状はないって言ってたし。」

カ「でも、まだ意識が戻ってないから心配ね……。」

アイ「もう、カスミもハルカもヒカリも、そんな顔をサトシに見られたら、余計な心配かけさせちゃうでしょう。」

コトネ「アイリンのいうとおりってことね。」

ベ「そうよ。今はサトシ君の意識が戻ることを祈りましょう。」

カ「そうよね……。」

カスミ、ハルカ、ヒカリは悲しげな顔を拭い去り、ニッコリと笑顔を見せる。だが、そんな女子人たちよりもっと落ち込んでいる者がいた。

ピ「ピカ……。」

サトシの一番の相棒・ピカチュウだ。自分は助けに行けず、そのまま大事な主人であり友達でもあるサトシが傷つけられるところを見ていることだけしか出来なかったのだ。ピカチュウには自己嫌悪と不甲斐無さが募っていた。2つの目からは涙が溢れている。

カ「ピカチュウ……。」

ハル「余程、サトシを助けられなかったことが悔しかったのね。」

ヒ「それ程サトシのことが好きだものね。」

アイ「ピカチュウ、可愛そう……。」

カスミ達はピカチュウの姿を見て、同情のまなざしで見つめる。

カ「ピカチュウ、あなたもそんな顔でいたら、サトシが意識を取り戻した時に余計に心配かけちゃうわよ。」

ハル「カスミの言うとおりよ。サトシもあなたのことが大好きなんだから。」

ヒ「ここはみんなで、笑顔でサトシの意識が回復するのを待ちましよう。」

ピ「ピカチュピ、ピピカ、ピカカ……、ピカア!!」

カスミ達の言葉に、目からあふれていた涙を拭って、とびつきりの笑顔を見せた。

アイ「さあ、ピカチュウ。もどりましよう、みんな待ってるわ。」

ピ「ピカア！」

カスミ達はピカチュウを慰めることに成功し、みんなのもとへと戻っていった。それから、全員寝静まった夜の事、

ピ「ん〜。目が覚めちゃったわね。」

まだ起きる時間帯ではなかったが、目が覚めたのと少しのどが渴いたので水を一杯飲みに行こうとした。

ピ「あ、そうだ。サトシは大丈夫かな？」

未だ意識が戻らないサトシのことが心配なので、少し様子を見に行くことにした。

ピ「あれ？ ピカチュウ、寝ずにずっとサトシのことを看病してたのね。」

サトシが寝ている部屋に行くと、ピカチュウがサトシの顔の近くで心配そうに立っていた。

ピ「ピカ!?!」

ピ「しー、ごめんね。邪魔しちゃって。」

ピカチュウはヒカリの登場に一瞬驚いたが、あまり音を立てると他の面々を起こしてしまうのですぐに静かになった。すると、

サ「う、うづう。。。」

サトシがうなされるように声を出した。額からはかなりの汗が吹き出ている。

ピ「ピカア!？」

ヒ「サトシ、苦しそう．．．。」

ピカチュウとヒカリは苦しむサトシを見て、胸が締め付けられる思いになった。

ヒ「汗、拭いてあげなきゃ。」

ヒカリはそう言うと、近くにあったタオルでサトシの汗を優しく拭き取った。

ヒ「サトシ、大丈夫。心配しないで。」

ヒカリの『大丈夫』は大丈夫ではないときに出る言葉だが、こういう窮地に立たされたときなどは、かなり役に立つ。

サ「うう．．．。スウウウウ。」

ヒカリはサトシの右手を両手で握ると、サトシのうなるような声は止み、かわりにきれいな寝息を出した。

ヒ「ようやく、落ち着いたね。もう大丈夫よ、ピカチュウ。」

ピ「ピカカ．．．、ピカチュウ。」

ピカチュウはヒカリにお礼を言うかのように、首を前に傾けた。

ヒ「いいわよ、仲間として当然のことよ。アタシそろそろ戻るね。
おやすみ、ピカチュウ。」

ピ「ピカ。」

そしてヒカリは自分が寝ている部屋へと戻り、再び眠りについた。

サ「ん、んん。こ、ここは!?!」

翌朝、サトシはようやく目覚めた。ところがたった今自分が起きた場所、時間が分からず、少々混乱気味だった。辺りを見ると、ピカチュウがすやすやと眠っていた。

サ「そういえば、俺。あの後、気を失って……。」

サトシは昨日のことを思い出していた。するとサトシが寝ていた部屋のドアが開いて、

ハル「サ、サトシ!?! やっと、起きたのね。」

様子を見てやってきた仲間達が、入ってきた。サトシの姿を見て、全員安堵の表情を浮かべる。

サ「なあ、ここはどこなんだ?」

コトネ「わたしのおばあちゃんの家よ。」

デ「サトシ、半日以上も意識を失ってたんだよ。」

アイ「ホント、心配したんだから。」

カ「あんな無茶して。ホント 안타って人は。」

サ「みんな、心配かけてごめんな……。。」

サトシは素直に謝ると、カスミ達はホントよと言わんばかりの表情を浮かべる。

ベ「私たちよりも、もっと謝らなければならない子がいるんじゃないの?」

ヒ「ピカチュウ、アタシ達が寝ている間にもずっと寝ずに看病してたのよ。」

サ「そうだったのか……。心配かけてごめんな、ピカチュウ。」

サトシはそう言うと、今は疲れて寝ているピカチュウの頭を起さないようにそっとなでる。ピカチュウはとても気持ちよさそうに眠っている。

カ「さあ、この話はこれくらいにして。サトシ、今日1日安静にしてください。」

サ「ええ、俺もうだいじょ……。。」

サトシが大丈夫と言いかけたとき、

ヒ「いいから、安静にしてるの! 分かった?」

ヒカリがキリツとサトシを睨み付けながら言った。他の女子たちも同様にサトシを睨み付ける。

サ「はい．．．。」

女子たちの雰囲気になんとも耐えられず、おもわずはいと返事をするサトシ。タケシ、デント、マサトの3人はそれぞれ苦笑を浮かべた。しばらくして、サトシは昨日から何も食べていないことに気づき、

サ「そういえば、お腹すいたなあ．．．。」

サトシが呟いていると、ドアが開いて、

ハル「サトシ、お腹すいてると思ったからご飯持ってきたかも。」

サ「おお、ナイス。ハルカ。」

ハルカが気を利かせて、サトシに料理が盛られた皿がのってあるおぼんを持ってきた。サトシは早速料理に手を付けようとして、

サ「いただきm．．．。」

ハル「待って、サトシ。」

ハルカがサトシの手を止めた。

サ「一体なんだ。ハルカ？」

サトシは首を傾げてハルカに聞いた。

ハル「わたしが食べさせてあげる。」

ハルカがおかずの入った皿と箸を持って、サトシに食べさせると言ってきた。もちろん、サトシは、

サ「いいよ、自分で食べられるから。」

恥ずかしさから、ハルカの要求を断ろうとした。対するハルカは、ハル「．．．グス。わたしがサトシの為に持ってきたのに、食べてくれないんだ．．．。」

アチャモのような目をしてサトシを見つめる。

サ「あつ、いや。別にそういうわけじゃないんだ。もちろん、ハルカの気持ちは嬉しいぜ。」

サトシは今にも泣きそうなハルカを察して、慌てて答える。

ハル「じゃあ、食べて。」

ハルカは途端にニッコリしながら、サトシに言う。どっちら、おっきのはウソ泣きだったようだ。

サ「．．．はあ、分かったよ。」

サトシは折れて、ハルカに食べさせてもらうことにした。

ハル「じゃあ、はい。アーン。」

サ「アーン。」

ハルカはこの『アーン』がしたくて、サトシに料理を持ってきたようだ。間違っても『アーン』の意味はあっちの意味のほうではないのでご了承ください。分からなければ、それで結構です（汗）

カ・ヒ・アイ「ちよつと、ハルカ！」「」

突然、カスミ、ヒカリ、アイリスの3人がドアを蹴り破るように開けて、入ってきた。

ハル「もう、せつかくいいところだったのに。邪魔しないでよ！」

ハルカは突然の3人の登場に、怒り交じりに言う。

カ「何勝手に、サトシに食べさせようとしてるのよ！」

ヒ「ずるいわ、ハルカ！」

アイ「そうよ、抜け駆けなんてさせないんだから！」

ヒロイン4人による言い争いが始まってしまった。サトシはあまりの雰囲気言い争いをしている4人を止められず、ハルカに食べさせてもらう予定（？）だった料理を一人で黙々と食べていた。その後、あまりのうるささに起きてしまった不機嫌度MAXのピカチュウにサトシもろとも電撃を食らってしまったのは別の話。

サ「なんで、俺まで……。」

巻き込まれたサトシはそう呟いた。今日1日安静のはずがとんだ1日の始まり方だ。ただ騒動はそれだけでは終わらなかった。

ヒ「サトシ、今日1日アタシが看病してあげる。」

ハル「ヒカリ、無理しないで。私がサトシを看病するから。」

カ「ハルカも無理しないで。アタシがやるから。」

アイ「カスミもよ。アタシがしてあげるから。」

コトネ「みんなこの家のことよく知らないでしょ。ここはわたしにまかせてってことね。」

ベ「サトシ君を看病するだけなら、そこまで難しいことじゃないわ。わたしがやる。」

サ「……………」

また、ある時は、

アイ「サトシ、顔拭いてあげる。」

ハル「ちょっとアイリス、抜け駆けは許さないかも。」

アイ「ハルカだって、抜け駆けしようとしてるじゃない。」

ハル「そんなことどうだっていいわ。サトシの顔は私が拭くかも。」

サ「……………」

またまた、ある時は、

ベ「サトシ君、寂しいんだったらわたしが一緒に寝てあげる。」

コトネ「ベルルンは無理しないで。わたしがサトシと寝てあげるから。」

サ「……………」

「このような状況はしばらく続き、

カ「アタシがやる!」

ハル「私かも!」

ヒ「アタシ!」

アイ「アタシが!」

コトネ「わたし!」

ベ「みんな無理しないで!」

あまりにも騒々しいので、サトシの状態は回復するどころか逆に悪化しそうである。そんな状況に一人、

タ「お前らなあ……………(怒)、いい加減にしろお!……………!」

タケシの怒りが爆発し、サトシの周りで騒々しくしている女性陣

達を叱責する。女性陣はタケシの怒号にビクツとした。

タ「お前ら、ここに座れ！」

タケシの鬼のような形相に素直に従う女性陣。その後、タケシによる長いお説教が始まった。デント、マサト、カズナリ、リュウカはあまりの恐怖に何もしないでいたが、しばらくして仲裁に入り、タケシの説教を終わらせることに成功した。

カスミ達（タケシ、怖い．．．。）

カスミ達はあまりタケシを怒らせないほうがいいと心に誓った。

サ「えーと、トイレは何処だ？」

サトシはトイレが何処にあるのか、辺りを見回していた。

サ「此処かな？」

サトシは一つの戸を開けてみた。

サ「……………」

コトネ「……………」

そこには風呂上がりでバスローブ姿のコトネがいた。突然の出来事に2人の間には沈黙が続いたが、しばらくしてコトネは恥ずかしさのあまり顔をカアアと真っ赤にさせ、

コトネ「き、きゃあああああ！！！！！！」

サ「うつ！？」

叫びながら思わずサトシを突き飛ばしてしまった。サトシはそのまま、後ろに倒れこみ、後頭部を強打して気絶した。

カ「な、なに！！？」

ヒ「コトネ、一体どうしたのよ。」

女子たちがコトネの叫び声を聞いて駆け付けた。

コトネ「ど、どうしよう。ヒカリン、わたしサトシ突き飛ばしちゃった……………」

ヒ「って、サトシ大丈夫!？」

ヒカリンは気絶したサトシを必死に起こそうとした。するとサトシは意識を取り戻して、

サ「だ、大丈夫、大丈夫．．。」

サトシは大丈夫と言うが、ヒカリの言葉を借りてなおかつ傍から見れば全くだいたいじよばない状態だ。

マサ「お、お姉ちゃん。何があつたの？」

デ「なんか叫び声でしたけど。」

マサトとデントがその場に近づいてきた。すると、今のコトネの姿を一瞬見たハルカとアイリスは、

ハル「マ、マサト！？ 今来ちゃ駄目！」

アイ「デントも駄目！」

マサ・デ「ええ！？」

マサトとデントは一体何のことかわからずきょとんとしていた。

リュウカ「一体、なにが．．。」

リュウカが様子を見に行くと、今の光景を見て、あちゃ〜と言わんばかりの表情を浮かべた。そして、マサトとデントの方に行つて、

リュウカ「冗談抜きで行かないほうがいいです。女の子の名誉のためにも．．。」

リュウカの言葉にマサトとデントは納得したような表情を浮かべ

た。その後、コトネが何度もサトシに謝るなどもあり、波乱の一日だったが、翌日、サトシ達は再びコガネシティに向けて旅立っていた。

続いて後書きショー

サトシの命運！？（後書き）

コトネ「……………（赤）。」

天「あゝ、ちよつと刺激が強すぎたか。」

ヒ「作者、あなたね〜（怒）。」

カ「ヒカリ、やめなさい。この作者に何言っても無駄よ。」

天「あのな……………」

ハル「ところで、これからどうなるの。結構焦らされた気分なんだけど。」

天「一応、次回は本編の進行と離れて、番外編やるつもりだから。2人ほど出してほしいキャラのリクエストが殺到したから、予定外が出すことにした。正確には2人と1体だがな。」

アイ「どんなキャラなの？ 後、1体つてことはポケモンなのね。」

天「この2人と1体は映画で出てきた少女とメスポケモンだ。ちなみに、全員サトシに好意を持っている設定にしている。」

ハル「ちよつと、また私たちのライバルが増えるの？ もうこれ以上は嫌かも。」

天「まあそういうなって。この2人と1体はカスミ、お前があつたことのある人物とポケモンだぞ。」

カ「アタシと会ったことがあるって、あっ。」

天「どうやら、気づいたようだな。では、これにて。」

カ・ハル・ヒ・アイ「「「無理やり終わらせた!?!」「」「」

<特別編> 映画ヒロインの憂鬱(前書き)

・ ・ ・ もう訳わかんなくなった(汗)

リクエストが殺到した2人と1体を出します。

サブタイは某アニメからのパクリです。

<特別編> 映画ヒロインの憂鬱

ここはオレンジ諸島の海の果てアーシア島……

以前、サトシ、カスミ、ケンジの3人が立ち寄ったことのある島である。また、海の守り神・ルギアが海底深くに住む島でもある。この島では、ある少女がため息をつきながら物思いに耽っていた。

？「はあ〜。」

彼女の名はフルーラ。アーシア島の祭りを司る巫女一族の娘で、巫女の役を姉・ヨードルから引き継いだ少女である。サトシ達とはこのアーシア島で出会い、かつて世界を揺るがすほどの危機がこの島に訪れた時にサトシ達とともにこの危機を救った。

フルーラ「今頃、どうしてるのかな〜。」

この雰囲気でなんとなく分かると思うが、実はこのフルーラ、サトシに好意を抱いている少女の1人である。サトシのポケモンに対する愛情と優しさ、仲間を気遣う気持ちに心を次第に打たれたのである。

ヨードル「サトシ君のこと、忘れられないの？」

フルーラ「ね、姉さん!？」

突然の姉の登場に思わずびっくりしてしまったフルーラ。

フルーラ「うん。サトシに初めて会ったときにあいさつ代わりにほ

つぺにキスしちゃったんだけど、話していくうちにホントに好きになっちゃったんだ。でも、カスミもサトシのこと好きみたいだし、それにカスミと比べてわたしはサトシと触れ合う機会なんてあれ以来全くないし、そんなのでわたしが入る余地がまだ残ってるのかなって……。」

フルーラは淡々と心なしか悲しそうに答える。フルーラの言うとおり、サトシとともに行動していたカスミに比べて巫女としての職務を全うして島暮らしをしているフルーラはサトシにアプローチを仕掛ける機会はないに等しい。ちなみにフルーラは、サトシがカスミの後、ハルカ、ヒカリ、アイリスの3人の少女と旅をしていたことを知らない。

ヨーデル「はあく、そんなに悩むんだったら、直接会いに行ったらどう?」

フルーラ「えっ、だって今どこにいるのか分かんないし……。」

ヨーデル「それなら心配しないで。サトシ君は今、ジョウト地方を旅してるみたいだし。それと、巫女の仕事は私に任せて。いつもがんばってるご褒美よ。」

ヨーデルがどうやってサトシの動向を突き止めたのかは謎である。

フルーラ「でも、サトシ。わたしの事、覚えてるのかな。」

ヨーデル「サトシ君なら、きっと覚えてるわよ。あの子とても優しいし、フルーラのお嬢さんになって、子供作ってきつと幸せな家庭が築けると思うわよ。」

フルーラ「お、お嬢さんだなんて、それに子供だなんてまだわたしには早すぎるよ／＼／」

ヨーデルのある意味爆弾発言に顔を真っ赤にさせるフルーラ。

ヨーデル「あら、フルーラはサトシ君と結婚して幸せになりたくないの?」

フルーラ「そ、それは・・・なりたいけど・・・。」

フルーラは体をもじもじさせながら、小さめの声で答える。

ヨーデル「だったら、実行あるのみよ。準備はしておいたから、今すぐ行きなさい。」

フルーラ「(姉さん、いつの間に・・・汗) そうよね。やっぱり、気持ちにはつきり伝えないと駄目だね。わたし、行ってくるわ。」

ヨーデル「その意気よ。」

こうして、フルーラはアーシア島を離れ、想い人・サトシが現在旅をしているジョウト地方へ旅立っていった。

その頃、別の場所ではフルーラと同じようにサトシと面識のある少女が海を眺めていた。

？「ん〜、今日は絶好の絵描き日和ね。」

ここはアルトマーレ。水の都で有名な美しい町である。ちなみに今喋っている少女の名は、カノン。話の内容通り、絵を描くことがとても好きな少女である。

カノン「ここ最近、お天気が悪くて描けなかったけど、久々の絵描きに腕が鳴るわ。ん？ ふふふ、隠れてもわかるわよ。」

カノンは後ろに何かいることに気が付き、あるポケモンの名前を口に出す。

カノン「ラティアス、出てらっしゃい。」

カノンが呼ぶと、姿を現したラティアスがカノンに近寄り、頬ずりを始めた。

カノン「くすぐったいってば、ラティアス。」

じゃれあうカノンとラティアスであったが、突然ラティアスは何かを思い出したかのようにカノンから離れた。

カノン「ん？ ラティアス、どうしたの？」

急に離れたラティアスを不思議そうに見つめるカノン。すると、

？「ほほほ、ラティアスはその子のことが気になるようじゃのう。」

カノン「お、おじいさん！？」

カノンがおじいさんと言う人物・ボンゴレがカノンとラティアスの目の前に現れた。

カノン「それはそうと、あの子って誰？」

ボンゴレ「ほれ、カノン。お前さんが以前、気になってた男の子がおったじやろう。カノン、その子のことがずっと忘れられなかったんじゃないだろうか。」

ボンゴレの一言に、カノンは急にあたふたして、

カノン「べ、別にサトシ君のことなんて・・・／＼／＼」

カノンは顔を少し赤くしながら答える。

ボンゴレ「あれ？ わしはあの子と言っただけで、サトシ君とは一言も言っではおらんがのう。」

ボンゴレが意地悪そうに言うと、カノンはしまったと思った。だがそれは、後の祭りである。

カノン「おじいさん／＼／」

カノンは赤くなった顔をさらに赤くさせながら、ボンゴレに言い寄る。一方のラティアスは、本来の姿からサトシの姿に変えて、サトシに会いたいことをアピールする。この描写からわかるように、カノンとラティアスはサトシに好意を持っている。ちなみに、この1人と1体はフルーラ同様、サトシに行方を寄せている人物がカスミ以外にいないことを知らない。

ボンゴレ「ほほほ、どうやら人間よりもポケモンのほうが正直のようじゃのう。どうじゃ、カノン。サトシ君に会いに行ってはどうかの。」

ボンゴレはカノンにサトシに会いに行ってはと提案する。

カノン「えっ!? だって、今どこにいるのか分からないし。」

カノンは困ったように返事を返す。

ボンゴレ「実はな、ジョウトに住むわしの友人からサトシ君を見かけたと聞いている。それが一昨日のことじゃった。」

カノン「えっ、それじゃあサトシ君はジョウトにいるのね。」

ボンゴレ「可能性は高いぞ。正確な位置までは分からんのかな。カノン、わしがアサギ行きの船のチケットを買っておいておくから、ラティアスと一緒に行ってみてはどうかの?」

カノン「うん、わたしもラティアスもサトシ君に会いたいし。もちろん、行くわ。」

ボンゴレの粋な計らいに、胸を弾ませながらサトシとの再会を楽しみにするカノン。ラティアスも喜びを体で表現しているのか、嬉しそうに飛び回っている。カノンはともかく、ラティアスがサトシに好意を持っていることを同じくサトシ好きなメスポケモンのツタージャやエデホースが知ったらどうなることやら・・・（ベイリーフは映画が公開された時点でサトシの手持ちだったので、一応知っているという設定にします。）

ボンゴレ「それじゃあ、すぐに行けるように準備しておいき。」

カノン「分かったわ。ありがとう、おじいさん。」

カノンは嬉しそうに出発の準備をしに、自宅へ戻っていった。そのカノンの後姿を見てボンゴレは、

ボンゴレ「青春じゃのう・・・。」

しみじみ思っただった。そして、

カノン「やっと、会えるのね。あっ、ラティアス。船の中ではくれぐれも本当の姿を見せないでね。」

そのままの姿だと船の乗客を驚かせてしまうので、ラティアスにカノンは言う。するとラティアスは、本来の姿から当時サトシと一緒に旅をしていたカスミの姿に変身した。

カノン（うーん、なんかすっきりしないけど、まっ、いつか。）

カノンは恋敵に変身したラティアスに違和感を覚えたが、そこは

気持ちを切り替えて船に乗り込んだ。数分後、船はアルトマーレの港を出港し、ジヨウト地方の港町・アサギシティへと向かうのだった。

その頃、

ハル「ねえ、カスミ、ヒカリ、アイリス、ベル。」

カ「うん。」

ヒ「ハルカの言いたいことは分かるわ。なにか嫌な予感がするんですよ。」

アイ「それもなんかムツとくるような予感が。」

ベ「あまりいい予感はないわね。」

みんなに聞こえないように会話するサトシ好きの面々であった・

この後、映画ヒロインによる後書きシヨ―

<特別編> 映画ヒロインの憂鬱（後書き）

フルーラ・カノン「ちょっと!」「」

天「今度はお前らか。」

フルーラ「お前らかじゃないわよ。わたし達の初登場、なんか無理矢理じゃない。」

天「仕方ないだろ。リクエストが殺到したんだから。」

カノン「それにしても、酷い出来ね。」

天「そのセリフ、あと何回言われるんだろ（汗）。2人も当分の間出す予定なかったから、全然考えてなかった。だから、出来には自信がない。」

フルーラ「それはそうと、わたし達はいつ再登場するの?」

天「当分の間は出さないことにしている。数話先の構成はすでに決めてしまったからな。」

カノン「再登場するからには、サトシ君との絡みもあるんでしょうね。」

天「心配するな。ちゃんと考えてあるから。ただ、その時はラティアス最優先になるがな。」

カノン「まあ、いいわ。それでは最後に、こんな駄作品ですが・・・

」。

フルーラ「感想よろしくお願いします。」

コガネシティ到着・・・(前書き)

ようやく、最新話投稿できました。

今回はサトハル要素入ります。

コガネシティ到着・・・

サトシ達はコトネの祖母の育て屋での事件はあったが、ようやくコガネシティへ到着した。

ハル「うん」

サ「・・・なあ、ハルカ。どうしてそんなに嬉しそうなんだ？」

ハル「ん？ 別になんでもないかも。」

ただ今、なぜかサトシはハルカと2人きりである。

サ「そっか？ それとなんで抱き付いてるんだ？」

ハル「もしかして、嫌だった？」

ハルカは涙目＋上目遣いでサトシを見つめる。だが、ヒカリのおかげ（？）なのかは知らないが、その点の免疫はついている。

サ「いや、別に嫌じゃないけど。」

サトシが仲間が悲しまないようにと思いやつての言葉。別に悲しげに訴えるハルカが可愛く思えて言った一言ではない。

ハル「じゃあ、このままでもいいでしょ。」

サ「うん。（いやでも・・・）。」

サトシが気にしているのは今自分の腕に感じるハルカの双丘である。鈍感なサトシとて、男である。こんなことを言うとは女性に失礼だが、ハルカはカスミ、ヒカリ、アイリスに比べて、大きなを持っている。

ハル「もう、この話はなし。早速、行きましょう。」

サ「お、おい。ちょっと待てよ！」

ハルカは一旦サトシから離れ、サトシの片方の手を掴んでコガネ百貨店へと駆け始めた。サトシはハルカの行動についていくので精いっぱいだった。さて、どうしてこうなった経緯いきつを振り返ってみよう。それはサトシ達がコガネシティへ到着したすぐ後のことだった。

カ「ちょっと、サトシはアタシと街めぐりをするの！」

ハル「カスミは黙ってて！ サトシと街めぐりをするのは私よ！」

ヒ「いや、アタシよ。」

アイ「3人とも、抜け駆けは許さないわ。サトシとアタシが街めぐりをするんだから！」

コトネ「ちょっと、わたしを忘れてもらっては困るってことね。」

ベ「そうよ。わたしだって、サトシ君の一緒にお出かけしたいんだから。」

女子5人は言い争いをしていた。内容は誰がサトシとコガネシティを散策するのかだ。彼女たちは直接的な表現は避けているが、別

の言い方をすれば誰がサトシとデートするのかというところである。

サ（いい加減決めてくれよな。）

カズナリ「あれ、止めなくていいんですか・・・。」

タ「あれを止められると思うか。」

カズナリ「ですよな・・・（汗）。」

タケシの発言は無責任なように聞こえるが、言い争いに下手に手出しすれば自殺行為そのものである。サトシは早くも疲れ果てたような顔をしている。サトシ、言い争いをしている女子たちを除く面々は巻き添えを食らうのが嫌なのか離れて様子をうかがっている。ピカチュウ、ポッチャマ、キバゴの3体は彼女たちが言い争いをしている間にタケシたちのところへ避難している。

カ「よし、それなら・・・。」

ヒ「じゃんけんで決めましょう。」

ハル・アイ・コトネ・ベル「」「」「賛成」。

ズデーン！！！！！！

彼女たちのあまりにも低能な決め方に盛大にズッコケるタケシ達。

マサ「じゃんけんって・・・（汗）。」

デ「随分と原始的な方法だね・・・（汗）。」

マサトとデントは呆然とつぶやいた。

「じゃあ、いくわよ。」

サトシ好きの女子達「じゃんけん……。」

ハル「サトシ、少し休憩しましょう。」

数回にわたる勝負の末、見事ハルカが勝利を勝ち取ったのだった。ハルカは前日に計画していたコガネ百貨店にてサトシとの買い物デートをすることにしたのだった（ピカチュウも一緒だが、それは仕方ないことだとスルーした）。コガネ百貨店でサトシはバトル用のグッズ、ハルカはコンテスト用のグッズを何点か購入し、少し疲れたので屋上の広場にて、休憩することにした。

サ「ふう〜、買い物って結構疲れるもんなんだな。」

今、サトシは自動販売機で購入したサイコソーダをベンチに座って飲んでいる。すると屋上に着いた直後にトイレで用を足していたハルカが来て、

ハル「あー、サトシだけずるいかも。」

サトシが手に持っているサイコソーダを見て、頬を膨らませながら不満げに言うハルカ。

サ「ごめんごめん。もう一本．．。」

サトシがハルカのためにサイコソーダをもう一本購入しに行こうとしたところ、

ハル「もう待てないかも。」

サ「あつ、ちよつとハルカ!?!」

ハルカはサトシから奪うようにサイコソーダを取ると、それを飲み干した。

ハル「ふう〜、さすがはサイコソーダ。おいしいかも。」

サ「ハハハ．．。」

サトシはよほど喉が渴いていたんだなと思いつつ、苦笑した。しかしハルカの心の中は、

ハル（ふふふ、これでサトシとの間接キスはゲットかも）

どうやらハルカは、サトシとの間接キスを狙って屋上へサトシとともに来たようだ。まさに、策士といったところか。何度も言うが超が何個も付くほどの鈍感なサトシがこのハルカの思惑に気づくことはない。サトシとハルカは、2人でベンチに座り、他愛もない会話を始めた。

ハル「ねえ、サトシ。あの時のコンテストメダル持ってる？」

サ「ああ、もちろんだぜ。」

ハルカの言うあの時のコンテストメダルとは、以前ハルカがサトシとともに出場したカントー地方のトネリコタウンの非公式のポケモンコンテストで、ダブルで優勝した際の商品である。コンテストメダルは1個しかなかったため、半分に分けてそれぞれ2人が持つことになったのである。ハルカは今でも「サトシ達との旅で得たものがたくさんある」として大切なお守りにしている。

サ「ハルカ達との思い出の集大成みたいなものだからな。手放すわけないだろ。」

ハル「それもそうかも。」

サトシとハルカはお互いニツコリしながら、2つに分かれたトネリコメダルを合わせる。傍から見ればその光景はカップルそのものである。かなり微笑ましい光景だが、サトシとハルカから少し離れたところからこのことをあまり面白がっていない様子の面々がいた。

カ「サトシ、いつの間にハルカとあんなものを……。」
「あんなもの」はちょっと失礼なのは……

ヒ「う、羨ましいわ．．．。」

カスミとヒカリの言葉からも分かるように、じゃんけんに負けた面々はサトシがハルカとの旅の思い出の品を持っていることを羨ましがっているようである。ちなみにカスミは、サトシとの旅が終わるときにサトシ本人にカスミちゃんルアーを渡している。どうしてじゃんけんに負けた面々がいるのかは、サトシとハルカを尾行していたからである。買い物に集中していたサトシとハルカはそのことに気づくことはなかった。

ハル「〜」

カ・ヒ・アイ・コトネ・ベ「〜」．．．．．（怒）「〜」

しばらくしてハルカとサトシはカスミ達と合流したが、ハルカとリュウカ以外の女子は当然ながらかなり不機嫌であった。そんな時、

？「あれ、ヒカリ？ それにハルカにカスミも。」

カ・ハル・ヒ「〜」ノゾミ！？「〜」

ノゾミがカスミ達の元へやってきた。

ハル「ノゾミ、久しぶりかも。」

ヒ「ノゾミもジョウトに来てたんだね。どうしてここに？」

ノゾミ「今度、このコガネシティでトップ・コーデイネーター達によるポケモンコンテストがあるでしょ。アタシはそれに出場するからでいいかな。」

ハル「あっ、わたし知ってる。以前、サオリさんから聞いたことがあるわ。」

ハルカはノゾミが出場するというポケモンコンテストについてサオリから聞いていたので知っていたようだ。

ノゾミ「サオリさんも出るみたいだよ。さっき、ポケモンセンターで直接会って本人から聞いたから。」

ハル「えっ、サオリさんも来てるの!?!」

ノゾミ「うん。しばらくポケモンセンターにいるって言ってたからまだいるんじゃないかな。」

ヒ「サオリさんって、あの有名トップコーディネーターのサオリさんよね。アタシ、一度会って見たかったんだ。」

カ「確か、タケシと同じニビシティの出身だったわね。」

ノゾミ「うんそうだよ。ヒカリがそういうんなら、早速行こうか。その4人も。」

ノゾミはアイリス、コトネ、ベル、リュウカに言う。すると4人も、

アイ・コトネ・ベ・リュウカ「「「「ええ、是非。「「「「

2つ返事で快諾した。するとノゾミはサトシを含む男性陣がいないことに気が付き、

ノゾミ「ところで、サトシ達は何処？」

ハル「サトシはタケシ達に呼ばれたから、先にポケモンセンターに行ってるって言ってたわ。もう、ついたんじゃないかしら。」

ノゾミ「そう。それじゃあ、ポケモンセンター行きは決定だね。」

ノゾミはニツコリしながら答える。

ノゾミ「最後にもう一つ。さっきはなんで、ハルカとリュウカちゃん以外あんな不機嫌だったんだい？」

ノゾミはずっと気になっていたカスミ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベルが不機嫌だった理由を問いただすように聞いてきた。

カ「あつ、いやそれは……。」

ヒ「えーとね……。」

アイ「なんて言うか……。」

コトネ「それはね……。」

ベ「そ、それは……。」

ノゾミの質問に突然言葉を濁してしまった5人。5人の様子に何か気が付いたノゾミは、

ノゾミ「サトシのことだね。」

ヒ「えっ、ちよつとノゾミ!？」

ヒカリは顔を赤くさせながら慌てふためく。他の4人、ハルカもあたふたし始める。そばにいたリュウカは、アハハと乾いた笑みを浮かべる。

ノゾミ「で、どうなの。」

ノゾミの更なる追い討ちに、

カ・ハル・ヒ・アイ・コトネ・ベル「……………はい。」

そしてハルカとサトシが2人きりで買い物をしてた事、その過程でハルカがサトシと間接キスをした事などをノゾミに洗いざらい話した。

ノゾミ「はあ、それってタダの嫉妬じゃん。あまりにも低能な争いだよ。」

ノゾミは呆れながら話を聞いた感想を述べる。

ヒ「ノゾミはどつなの？ ノゾミだって、サトシのこと好きでしょ。」

ノゾミ「うん、好きだよ。異性として。だけどまずアンタ達みたいな嫉妬まがいなことはしないな。アタシは正攻法で正々堂々とやるつもりだよ。」

ノゾミの堂々とした喋り方に、一同さすがといわんばかりに感心してしまった。そして、

ノゾミ「サトシを巡って争うのは勝手だけど、あまりサトシ本人に迷惑かけないようにね。それにアンタ達がモタモタしてるうちにアタシがサトシに告白しちゃおうかしら。」

ノゾミはそう言うつと颯爽とポケモンセンターに向けて走り出した。

ヒ「ダメエエエ！ それだけは絶対にダメ！」

ハル「わたしもそれは嫌かも！」

カ「ノゾミ、待ちなさい！」

アイ「抜け駆けは許さないわよ！」

コトネ「それだけはやめてってことね！」

ベ「サトシ君は渡さないんだから！」

ノゾミの登場により、サトシ争奪戦が更なる激しさを増していくのだった……

続いて、後書きショー

コガネシティ到着・・・（後書き）

天「どうだ、ハルカ。他のCPも書くって言ったのは本当だっただ
る。」

ハル「さすがね。これからもサトハル要素をお願いね。」

天「おいおい、俺はサトヒカ派だからあまり過度な期待はよしてく
れよ。」

ハル「はいはい。」

天「それじゃあ、今回は短いけどハルカ締めよろしく。」

ハル「次回もポケモンゲットかも。」

前哨戦（前書き）

ポケモンセンターにて、ヒカリ達がサトシ達と合流します。

『ライコウ 雷の伝説』からDPにもほんの少し出ていたあのキャラを出します。

前哨戦

ノゾミと再会したカスミ達はサトシ達がいるであろう、コガネシティのポケモンセンターへと向かっていた。このコガネシティのポケモンセンターは全国トップクラスの規模である。最先端のポケモン医療設備はもちろん、ジョーイとポケモンドクターが24時間交替で常駐している。

ヒ「あつ、サトシ。」

ヒカリはロビーでマサトと談笑をしているサトシに気づき、声を掛ける。

サ「ヒカリ、それにみんなも。そこにいるのはノゾミか?」

サトシは女子達のそばにいるノゾミに気づき、声を掛ける。

ノゾミ「久しぶりだね、サトシ。元気にしてたかい?」

サ「こっちは大丈夫だ。スズナさんは?」

ノゾミ「スズナ先輩なら、アタシの代わりにポケモン達の面倒を見てもらってる。ここのポケモンセンターに用があったからね。」

サ「そういえば、なんでノゾミはこの街に来てるんだ?」

サトシがノゾミがコガネシティに来た理由を聞くと、代わりにヒカリが答えた。

ヒ「ノゾミはね、この街で開催されるトップコーディネーター達によるポケモンコンテストに出場するんだ。」

ノゾミ「今度の世界大会に向けてのウォーミングアップにもなるしね。」

サ「ノゾミも頑張ってるんだな。負けるなよ。」

ヒ「ノゾミなら、大丈夫。」

ハル「ヒカリの言うとおりかも。」

ノゾミ「もちろん、そのつもりだよ。みんなありがとう。」

サトシ達が楽しく会話しているところへ、ある人物が近寄ってきた。

？「ふふふ、みんな楽しそうね。」

ハル「サオリさん。」

サトシ達に近づいて声を掛けた人物、それはノゾミと同じトップコーディネーターのサオリだった。

ハル「サオリさんも今回のコンテストに出るんですね？」

サオリ「ええ、そうよ。シンオウのニューカマーのノゾミさんは、かなり手ごわい相手になるのは間違いないわね。」

ノゾミ「それはアタシも同じですよ。数々のグランドフェスティバ

ルでタイトルを総ナメにしたトップコーディネーターのサオリさんが出るんですから。」

サオリ「それは褒め言葉として受け取っておくわ。でも今回のコンテストには、もっと手ごわい相手が出るのは知ってるかしら？」

サオリの言葉を聞くと、ノゾミは急に真剣な顔つきになった。

ノゾミ「ええ。ここジョウト出身の地元トップコーディネーターであり、ここ数回のグランドフェスティバルでサオリさんと同じくタイトルを総ナメにしてきた、通称・アイドルコーディネーター。アイドルという肩書にとらわれない演出と実力を持つ彼女はマリナでしたっけ。」

コトネ「マリナ？」

ノゾミの『マリナ』という名前にコトネが反応した。

マサ「コトネ、知ってるの？」

コトネ「知ってるも何も、わたしとカズナリの家近所に住んでる幼馴染よ。」

コトネが言うに、コトネとカズナリ、マリナは小さいころからの知り合いでよく遊んでいたという。もちろん、マリナの仲間であるケンタ、ジュンイチも知り合いである。

ヒ「コトネって、あのアイドル・トップコーディネーターのマリナと知り合いだったの!？」

ヒカリがコトネの言ったことに驚いた表情を浮かべた。それもそうだろう。マリナは現在、ポケッチやポフィンなどのポケモングッズの宣伝広告に載るほどの有名人になっている。そんな有名人と旅仲間が知り合いであるのだ。

コトネ「うん。でもしばらく顔見てないから、今度会ったら久しぶりってことね。」

コトネはヒカリにウィンクしながら答える。

ハル「いいなあ、コトネ。雑誌の有名人と幼馴染だなんて、羨ましいかも。」

ハルカは羨ましそうにコトネを見つめる。

コトネ「でも、ハルルンもヒカリンもすごいじゃない。ハルルンは『ホウエンの舞姫』という異名持ってるし、ヒカリンはミミロルのモデルで有名になってるじゃない。」

ハル「わたしなんて、ノゾミに比べたらまだまだよ。」

ヒ「アタシだって、すごいのはミミロルだし。コーディネーターとしてはまだまだよ。」

ハルカとヒカリは照れ臭そうに言う。そんな2人を見たノゾミは、ノゾミ「2人とも、それは自信を持って言ってもいいんじゃないかい。アタシだって今ではトップコーディネーターになれたけどハルカにはミクリカップでの借りがあるし、ヒカリだってミミロルをあそこまで魅力を引き出せるなんてなかなか出来ることじゃないよ。」

ヒ「ノゾミ、ありがとう。アタシ達はあることができないけれど、その分ノゾミとサオリさんの事応援してるわ。」

ハル「ノゾミもサオリさんも、今回のコンテストでぜひいい結果を出してほしいかも。」

ヒカリとハルカの発言に、

ノゾミ「これはすごいプレッシャー掛けられたね。」

サオリ「本当ね。でも悪い気はしないわ。」

ノゾミとサオリは少し笑みを見せながら言った。するとそこへ、

？「あれ、コトネじゃない？」

ある人物が談笑をする彼女たちに声を掛けてきた。

ヒ「嘘！？ マ、マリナ！？」

なんと、声を掛けてきた人物は先ほどまで話の話題に挙げられていたマリナ本人だった。

マリナ「やっぱり、コトネだ。久しぶり。」

コトネ「ホント久しぶりってことね。マリリン。」

マリナ「相変わらずわたしの呼び方変わってないんだ……。ところでそちらは？」

マリナはきょとんとしているヒカリ達に気づき、彼女たちは誰なのかコトネに聞いてみた。

コトネ「こつちから順番にヒカリン、ハルルン、カスミン、アイリン、ノゾミン、ベルルン。で、こつちの男の子2人はサトシとマサトってことね。」

カ「はじめまして、アタシはカスミ。」

アイ「アタシ、アイリス。」

ノゾミ「アタシは対戦相手だから知ってると思うけど、アタシはノゾミ。」

ベ「わたし、ベル。よろしくね。」

マリナ「こちらこそ、よろしく。」

サ「俺は、サトシ。」

マサ「僕、マサトです。」

カスミ達はマリナに普通に初対面の挨拶を交わす。マリナもそれに応える。だが、2名ほど緊張が最高潮に達していた人物がいた。

ヒ「あ、あのマリナですよ。ア、アタシファンなんです!!!」

ハル「こ、こんなところでのマリナにあ、会えるなんて、ゆ、夢かしら!...!...」

ヒカリとハルカは緊張のあまり拳動不審になりながら、マリナに挨拶をする。名前は呼び捨てだが時折敬語が混じっており、話す言葉も若干おかしい。その後、2人で夢じゃないか確認するために互いに顔をつねったりしていた。

サ「ヒカリ、ハルカ．．．。大丈夫か？」

サトシが心配そうに2人に声を掛ける。お互いに顔をつねったせいか、少しヒカリとハルカの頬は少し赤くなっている。

ヒ「うん、あんまりだいじょばない．．．。」

ハル「突然すぎて、気絶しちゃうかも．．．。」

サオリ「あらら．．．(汗)。」

ヒカリとハルカはしばらくするとだいぶ落ち着いていたが、まだ緊張の余韻が残っている。

マリナ「2人ともごめんね、びつくりさせちゃって。ヒカリとハルカだっけ。あなた達のことと同じコーディネーターとして知ってるわ。年齢もわたしとそんなに変わらないから、呼び捨てでいいし、タメ口でもいいわよ。」

ヒ・ハル「うん、うん。じゃあ、マリナ。」

ヒカリとハルカの緊張が未だ解けていない様子に、マリナを含めその場の全員が苦笑を浮かべる他なかった。

タ「おーい、サトシ、マサト。帰ったぞ。おつ、カスミ達も戻ってたか。ん？ うおおおお、あなたはサオリさん！！！！！！」

買い出しに行っていたタケシ、デント、カズナリが帰ってきた。帰ってきた途端、タケシはサトシ達のそばにいるサオリに気づき、持っていた荷物を放り出して、両目をハートにさせながら一目散にサオリに駆け寄り、手を取った。当のサオリはタケシの突然の行動に目をきよとんとさせる。ちなみに、タケシが放り出した荷物は間一髪でデントとカズナリが受け止めた。

タ「サオリさん、あなたにここでお会いできるとは何かの縁。ぜひこれからお茶でも……。」

カ・マサ「はいはい、今はそんなことしてる場合じゃないからね。」

タ「イテテテテ……。」

カスミとマサトによってタケシは耳を引つ張られながら、サオリから離れていく。その光景に他の面々は苦笑を浮かべた。ところが、ヒカリとハルカだけは、

ヒ・ハル（タケシ、ありがとう（かも）。）

マリナの登場で緊張度MAXだったヒカリとハルカは、タケシの勇気ある（？）行動に完全に緊張がほぐれたようだ。そして、心の中でタケシに感謝した。

マリナ「ねえ、コトネ。あの入って、いつもああなの？」

コトネ「うん、タケシって綺麗な女性の人を見るとすぐに声を掛けるっていう癖があるみたい。」

マリナ「そう。。。。」

コトネの返答にマリナは少し顔を引きつらせた。

マリナ「それはそうと、明日のコンテスト。ノゾミもサオリさんもお互いベストを尽くしましょう。」

サオリ「ええ、そうね。」

ノゾミ「もちろん、そのつもりだよ。アタシのトップコーディネーターとしての本格的なデビュー戦にはうってつけの舞台だしね。」

マリナ、サオリ、ノゾミはそれぞれ明日に向けて意気込む。

サ「マリナも、サオリさんも、ノゾミも気合入ってるな。」

ノゾミ「コンテストとバトルとはスタイルは全く違うけど、何か参考になればこっちとしてもありがたいよ。」

サトシの意外性のあるバトル戦法を察して、サトシに言う。

サ「コンテストバトルの戦術は、通常のバトルにも生かせるしな。ぜひ、参考にさせてもらおうぜ。」

ヒ「サトシだけじゃなくアタシ達も今後のコンテストの参考にさせてもらおうわ。」

ハル「こんな機会滅多にないかも。」

カ「コーディネーターになって日の浅いアタシも、勉強させてもらうわ。」

サトシに続いて、ヒカリ、ハルカ、カスミの順に一言言う。

マリナ「ますます気合入ってきたわ。これは期待に応えられるようにベストを尽くさなくっちゃ。」

マリナはそう言うと、明日の準備のためにポケモンセンターから出て行った。

ノゾミ「じゃあ、アタシ達もそろそろ行かなきゃ。みんな、明日は楽しみにしててよ。」

サオリ「わたしからも、皆さんのご期待に応えられるような華麗な演技を見せてあげるわ。」

マリナに続いてノゾミ、サオリもサトシ達に改めて明日のコンテストへの決意を訴える。この後、サトシ達はノゾミ、サオリとも別れ、自分達も宿泊先の施設へ戻ることにし、翌日のコンテストを楽しみに待つのがだった。

続いて後書きショー

前哨戦（後書き）

天「さて、今回の後書きショーは初登場・マリナを迎えてお送りいたします。」

マリナ「随分と変わった出だしね。」

天「まあまあ。まず、初登場の感想は？」

マリナ「わたしがコトネの幼馴染でジヨウトじゃ知らない人はいない全国的に有名なトップコーディネーターだなんて、随分とこじつけた設定ね。」

天「DPでもポケッチの宣伝広告に出たし、本家でもアイドルトレーナーを目指して旅してるという設定だったから、これでいいかなって。」

マリナ「ふ〜ん、まあ悪くはないわね。」

ハル「でも、あのマリナが出てくるなんてびっくりしたかも。」

ヒ「アタシも。だって、コーディネーターの間ではマリナを目指して活動してる人だっているくらいだし。」

マリナ「なんか、そこまで言われると照れちゃうなあ。」

天「（でも、マリナにはそのキャラ設定を大きく崩すほどのアレが・
・）それと、このコンテストが終わった後、サトシのバトル相手としてもう一人出すことにしたから。マリナを出したら、やっぱり

アイツも出さないとな。」

ハル・ヒ「アイツって？」

マリナ「わたし、すぐに分かった。」

天「さて、今回も突然ですが、この辺でお開きにしたいと思います。
締めはマリナよろしく。」

マリナ「次回もポケモンゲットしてね。」

トップコーディネーター達による祭典（前書き）

コンテスト開催前の様子です。

ダイパから準レギュラーを1人出します。

トップコーディネーター達による祭典

サトシ達がトップコーディネーターであるノゾミ、サオリとの再会を果たし、さらに地元ジョウトでは知らない者はいない程のトップコーディネーター・マリナとも初めて対面してから一夜が明けた。トップコーディネーター達による熱く華麗な祭典がここコガネシティで開催される。先に名前が挙げられたノゾミ、サオリ、マリナはもちろん、並々ならぬ強豪たちが名を連ねている。出場選手だけでなく、会場に多く詰めかけた観客にもその熱気と気迫が伝わるほどである。サトシ達はその熱気と気迫があふれる会場の目の前に来ていた。

カ「いよいよ、始まるのね。」

ヒ「ええ、なんだかこっちまで緊張してきたわ。」

ハル「カスミの水中ショーの時もだけど、今回もすごい熱気かも。」

カスミ、ヒカリ、ハルカは早くも緊張感を露わにしている。

タ「おいおい、今回出ないお前たちが緊張してどうするんだ。」

カ・ヒ・ハル「……だつて……」

タケシは啞然としながらカスミ達3人に言う。するとそこへ、

？「ヒカリ……！」

ヒカリを呼ぶ声がしたので、サトシ達は声のする方へ振り返って

みた。するとそこにはシンオウで出会った人物が立っていた。

ヒ「ケ、ケンゴー!？」

その人物とはヒカリの幼馴染でありポケモン・コーディネーターであるケンゴだった。ヒカリはサトシ達とともにケンゴに近づいた。

ケンゴ「久しぶりだな、ヒカリ。お前もコンテストを見に来たのか？」

ヒ「ええ、ポケモン・コーディネーターとしてこのビックイベントは見逃せないわ。ケンゴもでしょ。」

ヒカリはケンゴになつと言わんばかりに、ウィンクしながら答える。ケンゴはそのしぐさが可愛く思えたのか、少し視線をそらす。ヒカリはケンゴの様子に一瞬首を傾げたが、あまり気にしないことにした。一方のケンゴは、何かを決心したかのように、

ケンゴ「俺、今日のコンテストヒカリと一緒に観たいなと思って思ったんだけど、やっぱいいや。」

ヒ「えっ、なんでアタシ?」

ケンゴの突然の提案にきよんとしたヒカリ。

ケンゴ「ほら、俺ヒカリが以前旅してたポケモンコンテストの聖地・ホウエン地方のこと、聞いてみたいと思ったんだ。それでなにか機会がないかなって思って今回誘ってみたんだけど、ヒカリと一緒に観る人がいるなら、俺一人で見るよ。」

ケンゴがそう言つと、サトシは何かを閃いたように、

サ「なあ、ケンゴ。俺たちと一緒に観ないか？」

ケンゴ「えっ？」

サ「ほら、俺たちしばらく会ってなかったし、ヒカリがホウエンを旅していた時のこと聞きたいんだろ。それにみんなで見ただ方が、たのしいぜ。きつと。」

ケンゴ「ま、まあ、サトシが言つんなら。」

サ「じゃあ、決まりだな。みんなもいいだろ？」

ヒ「ええ、別にかまわないわ。」

ヒカリの返答に他の面々もうなずく。

サ「じゃあ、俺ちよつと飲み物買ってくるから。みんなは先に行つててくれないか？」

ケンゴ「あつ、それなら俺も。」

ケンゴは飲み物を買に行ったサトシを追いかけて行った。するとヒカリは、

ヒ「ところで、どうしてケンゴはアタシと見たいつて思ったんだろ？」

カ・ハル・アイ・コトネ・ベ「「「「「えっ!?!」「「「「「

ヒカリは思っていた疑問を口に出した。その言葉にヒカリ以外のサトシ好きの面々はきよとんとした。

ヒ「やっぱり、しばらく会ってなかったからかな。ケンゴに言わずにホウエンに行ってしまったし。まっ、いつか。」

ヒカリはあまり深く考えないことにした。そして、一足先に会場の方へと入っていく。

ハル「ねえ、カスミ。ヒカリってもしかして、鈍感なのかしら。」

カ「うん、サトシ程じゃないけどあれはかなりのだわ。」

アイ「それに、あのケンゴって子。絶対、ヒカリのこと好きだろうと思う。」

コトネ「明らかにそれっぽいこと言ってたのに、それに気づかないヒカリン。ある意味凄いつてことね。」

ベ「なんか、ケンゴ君が可哀そうに思えてきた。」

彼女たちの会話からも分かるように、ヒカリはサトシ程ではないがかなりの鈍感な性格である。以前、ケンゴがシンオウでの旅が終わったら一緒に旅をしないかと提案した時もその意図が全く分からなかったくらいである。ちなみに、ケンゴは幼稚園児の頃からヒカリに好意を持っているが、ヒカリが好意を持っているサトシ（ケンゴからすれば恋敵になる）との関係も大切にしたいと思ってるため、心の中で随分と葛藤している。それにしても、自分の恋敵には気づいたのに、自分に好意を持っている人物には全く気付かないとは・

・(汗)

一応、ここでのヒカリはこのように設定をしています。

マサ「ねえ、タケシ。ヒカリって、あんな性格だったんだね。」

タ「まあな。サトシもそうだったけど、ヒカリもあんなに鈍い性格だったと初めて知ったときは正直驚いたなあ。」

リュウカ「ハハハ、そうなんですか・・・。」

タケシの答えにマサト、リュウカ、デント、カズナリは乾いた笑みを見せた。その後、ヒカリに続くようにカズミ達も会場内へと入っていき、飲み物を買っていたサトシ、ケンゴとも中で合流した。そして、待ちに待ったトップコーディネーター達による祭典が開幕するのであった・・・

続いて後書きショー

トップコーディネーター達による祭典（後書き）

天「ふう〜、なかなか執筆が進まない・・・。」

カ「結構、長いわね。このジョウト編。」

天「おそらく、この作品で一番長くなるだろうな。」

ハル「ふうん。ところでケンゴがヒカリのことが好きだったということには驚いたわ。」

天「俺はサトヒカ派だが、サトヒカ ケンゴの描写も結構気に入ってるんだ。ケンゴのヒカリに対する健気さが何とも言えなくて。」

ハル「でも、当のヒカリはケンゴへの気持ちに気づいてないみたいね。」

天「ヒカリはサトシとまではいかないが、鈍感だしな。本家でもケンゴがヒカリの事好きだと気付いたのはタケシだけみたいだったな。」

カ「まあ、タケシは何度もナンパしてはフラれてるしね。」

天「カスミ、さりげなく酷いこと言うな（汗）。さて、最後になりましたが感想の方をよろしくお願いします。」

開幕！（前書き）

初めて、コンテストの描写を入れます。ですので、おかしいと思われる点が多々あります。例えば、司会のリアンの口調がおかしいとか・・・

開幕！

会場はトップコーディネーター達が参加するコンテストの開催を今か今かと待ち望む観客で満員になった。そして・・・

リリアン「It's show time！ 全国から集結したトップコーディネーター達による祭典、ここコガネシティにていよいよ開幕です！」

司会のリリアンの音頭により、サオリ、ノゾミ、そして地元ジョウトのトップコーディネーター・マリナが参加するトップコーディネーター達のポケモンコンテストが開幕した。ステージ上には続々と参加するトップコーディネーター達が入場してきた。サオリ、ノゾミ、マリナもステージ上に現れた。

ハル「見てみて！ みんな有名なトップコーディネーターばかりよ。」

カ「ノゾミ達大丈夫かなあ。」

ヒ「ノゾミ達なら、大丈夫。予選ステージをきつと突破するんだから。」

サ「でも、ヒカリの大丈夫は大丈夫じゃないときなんだよなあ。」

ヒ「それどついう意味よ、サトシィ〜！」

サ「いひゃい、いひゃいっへヒハヒ。」 訳：痛い、痛いってヒカリ。

サトシはヒカリに両頬をつねられながら、答える。その光景に一同苦笑を浮かべた。

ここで今回のコンテストについての説明。

1・予選ステージは参加者全員によるパフォーマンスで行われる。演技、技術、ユニークさ、ポケモンとのコンビネーションなどを総合的に判断して評価点をつける。評価点の上位8名が決勝ステージに駒を進めることができる。

2・決勝ステージはコンテストバトル形式で行われる。相手にダメージを与えるのはもちろん、技をいかに華麗に見せることで相手の持ち点を減らすことができる。逆に相手にダメージを与えられたり、技をかわされたりすると自分の持ち点を減らされる。相手をバトルオフ（持ち点を0にする）又はバトル時間を過ぎた時点で相手よりも多く持ち点を持っていたコーディネーターが勝者となる。

3・予選ステージでのみ、ポケモンを2体使用することが許される。

予選ステージが始まり、全国から集まったトップコーディネーター達が次々とパフォーマンスを見せる。さすがはトップコーディネーターというだけあって、すべての観客が魅了されるほどどれも高レベルのパフォーマンスだった。サトシ達もあまりの華麗なパフォーマンスに驚愕していた。

リリアン「続きましては、シンオウはキッサキシティからやって来た新参者、^{ニョウカマ}ノゾミさんです。」

リリアンの紹介の後に、ステージ上にノゾミが現れた。ノゾミはステージの真ん中に立つと笑顔で両手を上げて、観客席に一礼した。

そして、2つのモンスターボールに手をかけて、

ノゾミ「スワンナ、チャーレム、レディーゴー！」

スワンナ「スワンナ！」

チャーレム「チャーレム！」

ノゾミは予選ステージをスワンナとチャーレムの2体で挑むようだ。

サトシ「ノゾミ、いつの間にイツシユ地方のポケモンをゲットしたんだ？ 確かスワンナはイツシユ以外にはいないはずなのに。」

スズナ「ああ、それはね。以前わたしとノゾッチでキツサキシテイに観光に来ていた人を道案内したのよ。その人はイツシユ出身で道案内のお礼にポケモンのタマゴをくれたのよ。そして孵ったのがコアルヒーでそれを進化させたのが今ノゾッチのスワンナなのよ。」

サトシの疑問にサトシと同じくノゾミの応援に来ていたスズナが答えた。サトシは納得した顔をした。

ヒ「いいなあ、ノゾミ。コンテストが終わったらスワンナ見せてもらおうかしら？」

ハル「わたしもみたいかも。」

ヒカリとハルカはノゾミを羨ましそうに見つめる。一方、ノゾミは、

ノゾミ「チャーレムはめいそう、スワンナは上空へ。」

チャーレムはステージの真ん中にしゃがみ込んでめいそうを始め、スワンナはその上を高く飛び上がった。

ノゾミ「スワンナ、あちこちに散らばるように地面にバブルこうせん！」

スワンナはバブルこうせんを辺り一面にまき散らした。

アイ「えっ！？ あのままじゃチャーレムに当たっちゃうよ。」

ヒ「一体、ノゾミは何を考えているのかしら。」

アイリスの言うとおり、スワンナの放ったバブルこうせんはチャーレムにも当たってしまった。だが、ノゾミは冷静に、

ノゾミ「チャーレム、サイコキネシスで泡をコントロール！」

チャーレム「チャー！」

チャーレムはバブルこうせんの泡をサイコキネシスで自由に操ることができ、状態にした。先ほどのめいそうでさらに集中力が高まっているため、難なく成功した。そして無数の泡たちは規則正しく山型に並べられた。丁度チャーレムを囲うような格好である。そしてチャーレムの操る無数の泡は照明による相乗効果できれいな輝きを放ちまわり始めた。山の頂上にはスワンナが優雅に羽を広げている。

リリアン「なんとということでしょう。無数の泡がチャーレムとスワ

ンナを中心にして綺麗に輝きながら回っております。これはまるで泡のメリーゴーランドもしくは泡のシャンデリアです。」

コンテスタ「スワンナの作り出した泡をチャールムが自由自在に操るといふ見事なコンビネーション。そして会場の設備を生かした素晴らしい演技です。」

スキゾー「いやあ、好きですね。」

ジョーイ「スワンナとチャールムの技が生かされ、全てにおいて申し分のないものです。」

審査員たちの高評価を得たノゾミのパフォーマンス。だが、これだけではなかった。

ノゾミ「それじゃあ、最後のいくよ。スワンナ。」

パチっ！

ノゾミが指を鳴らすと、

スワンナ「スワ〜。」

スワンナは優雅に羽をばたつかせて泡を観客席の方へ飛ばした。無数の泡はそのまま観客の上を飛ぶものもあれば、観客が手元に届くものまであった。もちろんサトシ達のほうにも、泡が届いていた。

ハル「うわあ、この泡綺麗かも。」

ハルカは一つの泡を手に取り、チャーレムのサイコキネシスの効果で神秘的な輝きを放つ泡に見惚れていた。

デ「2体が華麗に奏でるテイストに、サイコキネシスによって加わった神秘的なスパイス。ん、絶妙なハーモニーだ。」

デントがテイステイングタイムに酔いしれるほど、ノゾミの最後のサプライズは最高のものであった。

サ「さすがだな、ノゾミ。」

ケンゴ「これが、トップ・コーディネーターの実力……。」

ヒ「シンオウのグランドフェスティバルの時より格段に実力が上がってる……。」

サトシ、ケンゴ、ヒカリは思ったことを率直に口に出した。特にケンゴ、ヒカリはノゾミに翻弄される思いだった。こうして、ノゾミの予選ステージは大成功で幕を閉じた。

リリアン「続きましては、カントーはニビシティ出身で数々のグランドフェスティバルでトップコーディネーターの座を不動のものにした美しさの中に華麗なパフォーマンスを持つ才色兼備のトップコーディネーター・サオリさんです。」

ノゾミの後、数人の演技が行われた後、サオリの出番になった。歓声とともにサオリは、観客席に向かって手を振りながらステージ

上に登場した。そして中央に立ち、深々と一礼した。

サオリ「出番よ。ピジヨット、ケーシィ。」

サオリはピジヨット、ケーシィの2体を予選ステージのポケモンに選んだ。

サオリ「ケーシィ、フラッシュ。」

ケーシィはフラッシュを放った。それもただのフラッシュではなく、球体のフラッシュだった。さらにケーシィはサイコネシスでフラッシュをコントロールしているようだ。

サオリ「ピジヨット、そのまま光の中へ。」

ピジヨット「ピジヨット!」

ピジヨットはケーシィの作った球体の光の中へと飛び込んだ。

サオリ「フェザーダンス。」

ピジヨットがフェザーダンスを始める。ケーシィによってコントロールされている状態の球体の光は、ピジヨットの動きとともに動く。さらにはフェザーダンスによって生じる羽根が光りを帯びてステージや観客席の方へ舞うように落ちていく。ちなみにピジヨットは特性・するどいめにより、フラッシュの影響を受けない。

コンテスタ「メインで動くピジヨット、その下に裏方として働くケーシィのコンビネーション。見事なものです。」

スキゾウ「好きですね〜。」

ジョーイ「ピジヨットの特性も生かされた素晴らしい演技です。」

ノゾミ同様にサオリのパフォーマンスも審査員に非常に高評価を得たようだ。

サオリ「ケーシィ。」

パチッ！

サオリが指を鳴らすとケーシィはコントロールしていた光を徐々に狭めてやがて消えていった。すると光り輝くピジヨットがフェザーダンスを踊り続けている。光り輝く羽根に加えて小さな光の粒も下へと舞い降りていく。そして、

ピジヨット「ピジヨット！」

鳴き声とともにピジヨットが羽根を大きく広げると、ピジヨットから無数の光があちこちに流れ星のように飛散した。

リュウカ「うわあ〜、綺麗。」

ハル「さすがはサオリさん。以前にも増してすごいかも。」

リュウカ、ハルカの発言からも分かるように、サトシ達もピジヨ

ツトとケーシイのコンビネーション抜群の演技に酔いしれた様子だった。

ノゾミ「これが数々のグラントフェスティバルを総ナメにしてきた実力か……。」

予選ステージを終えて控室のテレビで見ていたノゾミも、驚愕していた。サオリの予選ステージも大成功で幕を閉じた。

リリアン「予選ステージ最後のトップコーディネーターは、地元ジヨウトが生んだアイドルコーディネーター。ポケモンとの意気合わせは抜群。マリナさんです！」

リリアンの紹介の後、予選の大トリなのに加え、地元ジヨウトの有名人がその役目を務めるので、観客からの歓声は一際大きいものになった。

コトネ「マリリン、すごい人気ね。」

カズナリ「僕たちの知り合いがここまですごい人になるなんて思いもしなかったよ。」

タ「そのプレッシャーの中で、一体どんな演技をするのだろうか……。」

サ「どうするにしろ楽しみだな。なっ、ピカチュウ。」

ピ「ピカッ！」

サトシ達は早速マリナの演技に興味津々だった。

マリナ「出ておいで、ムーちゃん。」

ムウマ「ムウウウー！」

マリナが予選ステージのポケモンに選んだのはムウマの『ムーちゃん』だった。マリナは右手を差出し、ムウマはそこに静かに乗った。

マリナ「ムーちゃん、サイコウエーブ。」

ムウマ「ムウウウ。」

ムウマがサイコウエーブを放つと、マリナはその場で舞うように動き始めた。同時にマリナの手の上にいるムウマも踊り始める。それによりムウマの放つサイコウエーブが綺麗に見える。マリナとムウマのダンスはまるで新体操のリボンの演技のように見える。

ハル「これがアイドルコーディネーター・マリナの実力……。」

ヒ「す、すごい……。。」

かねてからマリナのファンだったハルカとヒカリは、マリナとムウマのダンスに圧倒されっぱなしだった。

ノゾミ「ポケモンと一体になることで最高のコンビネーションを作り出す。それに加え、コーディネーター自身は前に出ることなく、ポケモンを生かしている。うわさに聞いてたけど、これほどとは思ってもみませんでした。」

サオリ「ええ、そうね。わたしもコーディネーター自らがポケモンとのコンビネーションを作るとは思いつかなかったわ。」

控室のノゾミとサオリは、冷静にマリナとムウマのダンスの第一印象を述べる。マリナは彼女たちにとって手強い存在になりそうだ。

マリナ「さあ、フィニッシュといくわよ。ムーちゃん。」

ムウマ「ムウ。」

ムウマはマリナの手から離れ、上空へと移動した。マリナはその場にしゃがみ込んだ。

マリナ「シャドーボール。」

ムウマ「ムウウウウマアアア！」

ムウマはシャドーボールを繰り出すと、自らボールの中へと入っていった。するとマリナは立ち上がり両手を広げた。両手にはムウマが入っているシャドーボールが置かれている状態である。

ムウマ「ムウウウマアアア！」

ムウマはシャドーボールを割るように現れた。ムウマからは無数の神秘的な光があちこちに飛散している。

コンテスタ「ポケモンとコーディネーターが一体となったりボンのダンスから、最後のシャドーボールを生かした演技まで、申し分ない演技です。」

スキゾウ「いやあ、好きですね。」

ジョーイ「ポケモンと意気を合わせた演技がとても素晴らしいです。まさに全てのトレーナー、コーディネーターの鏡になりうる演技でした。」

マリナのパフォーマンスも審査員から高評価を得た。マリナの演技が終わると同時に予選ステージも幕を閉じた。サトシ達は控室にいるノゾミ、サオリ、マリナの元へと向かった。

ヒ「ノゾミも、サオリさんも、マリナもいい演技だったわ。」

カ「アタシもすっかり見惚れちゃったわ。」

ノゾミ「2人とも、ありがとう。今回は少し控えめに抑えたんだけど、自分でも納得できる演技ができたから悔いはないよ。」

サオリ「大トリのマリナちゃんのは正直驚いたわ。ポケモンと一緒に演技するなんて普通なら考えもしないわよ。」

マリナ「ありがとうございます。でも、まだ予選の結果が出てないから何とも言えません。」

ノゾミ「もしアタシを含めた3人全員が予選通過したとなれば、サオリさんにもマリナにも負けないよ。」

サオリ「それは宣戦布告ととって良いかしら？」

マリナ「わたしだって、地元の名に恥じぬよう結果を残すわ。」

ノゾミ、サオリ、マリナの3人は早くも決勝ステージに向けて闘志を燃やしていた。

ハル「あゝ、一体誰を応援したらいいのかわからないかも。」

サ「まあ、何はともあれノゾミもマリナも頑張れよ。もちろん、サオリさんも頑張ってください。」

ノゾミ「ありがとう、サトシ。」

マリナ「決勝ステージでも、サトシ達の期待に応えられるよう頑張るわ。」

サオリ「ふふふ、楽しみにしててね。」

サトシ達の激励を受けてノゾミ、サオリ、マリナは予選の結果を今か今かと待つのだった。結果は3人とも決勝ステージ進出が決まった。予選の結果を受けて3人は、決勝ステージへと臨むのだった。

続く

開幕！（後書き）

次回は決勝ステージへと移ります。

ノゾミVSサオリ！（前書き）

いよいよ決勝ステージの開幕です。

ノゾミは実績で格上のサオリにどう立ち向かうのだろうか・・・

ノゾミVSサオリ!

決勝ステージはコンテストバトルで、予選ステージの上位8名によるトーナメント形式で進められる。最初に1回戦を計4試合行い、それぞれの試合の勝者が次のセミファイナルへと進出する。さらに、セミファイナルの勝者2名はファイナルへと進出し、そのファイナルの勝者が今回のコンテストの優勝者となる。しばらくして、トーナメントの組み合わせが発表され、ノゾミとサオリが1回戦第2試合で対決することになった。ちなみにマリナは第3試合に登場する。

ノゾミ「まさか、サオリさんと1回戦で戦うことになるとは思いませんでした。」

サオリ「それはわたしもよ。ノゾミさん。」

ノゾミ「お互い悔いのないコンテストバトルをしましょう。」

サオリ「こちらこそ。じゃあ、バトル本番にて。」

ノゾミとサオリは控室にて談笑の後、先にサオリが控室を後にした。そして、1回戦第2試合、

リリアン「続きましては第2試合、ノゾミさんとサオリさんのバトルとなります。それではCan we, Go!!!」

ノゾミ「ムウマージ! Ready Go!!」

サオリ「出ておいで、バタフリー!!」

ムウマーヅ「ムウマアアヅ！」

バタ「フレイイイ！」

ノゾミはムウマーヅ、サオリはバタフリーを1回戦のポケモンに選んだ。2体は元気よくボールから飛び出した。それに加え、ムウマーヅは紫色の神秘的な光を放ち、一方のバタフリーは羽根をばたつかせながら鱗粉を飛ばしている。

リリアン「これは出だしからかなりのアピールです。ここから華麗でアグレッシブなバトルが繰り広げられるのか目が離せません！」

ノゾミ「ムウマーヅ、かげぶんしん。」

ムウマーヅ「ムウウウ！」

ムウマーヅはかげぶんしんによって数体に分かれる。さらに登場時の紫色の光の相乗効果で、残像がより鮮明かつ綺麗に見える。これにより、サオリの持ち点が減っていく。

ノゾミ「そのまま、サイコウェーブ。」

ムウマーヅ「ムウマアアヅ。」

幾つものサイコウェーブがバタフリーに襲い掛かる。だが、サオリは冷静に、

サオリ「バタフリー、かわして。」

サイコウエーブをかわすため、バタフリーは素早く上空へと飛んだ。

サオリ「回転しながら、しびれごな。」

バタ「フィィィー!」

バタフリーは回転しながら、スプリンクラーの要領でしびれごなを撒いていく。

ムウマージ「ムウウ。」

ムウマージにしびれごながかかり、ムウマージはまひ状態となる。これにより、ノゾミの持ち点が減らされていく。

サオリ「バタフリー、ふきとばし。」

バタ「フィィィー!」

ムウマージ「ムウ!?!」

バタフリーのふきとばしにより、ムウマージはバトルフィールドの端へと吹き飛ばされる。

ノゾミ「ムウマージ!?!」

ムウマージはまだ戦えるようだ。審査員からもバトルオフの判定が出されていない。

ノゾミ「(ここのう時のために、あの技を覚えさせたんだけど使う

のにはまだ早すぎる．．．。（ムウマーヅ、負けずにいくよ。」

ムウマーヅ「ムウ！」

ノゾミはムウマーヅに激を飛ばすと、ムウマーヅは気をしっかり持って体勢を立て直した。ノゾミが使うのをためらっているとおきの技とは一体何なのだろうか．．．

サオリ「一気に決めるわよ。バタフリー、ぎんいろのかぜ。」

バタ「フイイ！」

バタフリーのぎんいろのかぜがムウマーヅに襲い掛かる。

ノゾミ「かわして、ムウマーヅ。」

ムウマーヅ「ムウウ、ムウマアアジ．．．。」

ムウマーヅはかわすことを試みるも、まひ状態で動きが鈍くなっているためかわしきれなかった。さらにノゾミの持ち点が減らされていく。

ノゾミ（まひ状態で動きが鈍くなってる。しかもバタフリーに全く隙がない。だけど、どこかで隙が出るはず．．．。）

ノゾミはムウマーヅに覚えさせたある技を使う機会を狙っているようだ。すると、チャンスはすぐに来た。

サオリ「止めのソーラービーム。」

バタ「フイイイ……」

バタフリーはソーラービームのタメの体勢に入る。吸収される光はバタフリーをより綺麗に引き立たせた。これにより、さらにノゾミの持ち点が減らされていく。だが、

ノゾミ（よし、来た！）

ノゾミは今だと言うように、ムウマジに向けてうなずいた。ムウマジもそれを察知し、じっとソーラービームが発射されるのを待った。

リリアン「おっと、防戦一方のムウマジ。万事休すか!？」

ハル「ノゾミ、大ピンチかも。」

ヒ「サオリさん、カントーのコンテストマスターに最も近い人物と言われる実力はあるわ。」

ハルカ、ヒカリの言葉からも分かるように、誰もがサオリの勝利を確信していた。

サオリ「バタフリー、ムウマジにソーラービーム。」

バタ「フイイイ!」

バタフリーの止めの一撃・ソーラービームがムウマジに襲い掛かる。

ノゾミ「かわすんだ、ムウマジ。」

ムウマーヅ「ムウウ！」

ムウマーヅはソーラービームをかわそうとする。まひ状態で動きが鈍くなっているためかわしきれず直撃してしまうところだ。だが、ムウマーヅは嘘のように難なくかわした。よく見ると、まひ状態が回復している。

サオリ「嘘っ!？」

これには普段冷静な性格のサオリも驚いたようだ。

バタ「ファイイ……。」

何故か、ソーラービームを放ち終えたバタフリーは体がしびれて動けない状態になっている。

タ「マジックコートか。」

タケシはムウマーヅがマジックコートで自らにかかっていたまひ状態をバタフリーに移したことに気が付いた。

デ「ソーラービームはためるのに隙ができる。防戦一方だったノゾミにとっては願ってもないチャンスだったようだね。」

ノゾミはまひ状態をマジックコートで相手に移す機会を狙っていたようだ。

ノゾミ「ムウマーヅ、でんげきは。」

ムウマージ「ムウウマアアジ！」

ムウマージのでんげきはがバタフリーに襲い掛かる。マヒ状態を移されたバタフリーは身動きがとれず、直撃してしまう。

バタ「フィィィィ！」

バタフリーはバトルフィールド上に倒れてしまった。その瞬間、審査員全員からバツの判定が出され、サオリのバタフリーはあえなくバトルアウトとなってしまった。

リリアン「F i n i s h ! 不利な状況からひっくり返して、見事勝利を納めたのはノゾミさんです！」

リリアンがバトル終了の合図をすると、一気に歓声が沸きあがった。

ノゾミ「あの、カントーのコンテストマスターが一番近いサオリさんに勝った。」

ノゾミは少しばかりの笑みを浮かべながら自分の勝利を喜んだ。そこへ、サオリが近づいて、

サオリ「久しぶりにバトルオフで負けたわ。止めにソーラービームを使ったのが失敗だったわね。作戦負けね。」

ノゾミ「サオリさんも強いですよ。もし、あそこで別の技を使われてたら、間違いなくアタシの負けでした。」

サオリ「ふふふ、そう言ってもらえるとありがたいわ。決勝まで険

しい道のりだけど頑張ってね。」

ノゾミ「はい。がんばります。」

ノゾミとサオリはお互いに握手をした。こうして、1回戦第2試合は接戦の末、ノゾミが格上の相手であるサオリから見事勝利を勝ち取ったのだった。

ハル「あのサオリさんに勝つなんて、ノゾミ凄いかも。」

ヒ「アタシ達も負けてられないわ。」

カ「ええ、ノゾミ達に置いて行かれないようにしないと。」

先程の試合でさらに闘志を燃やすカスミ、ハルカ、ヒカリ。彼女たちだけでなく、一緒に観戦していたケンゴもまた同じように闘志を燃やす。一方、控室では、

マリナ「1回戦から、高レベルのコンテストバトルね。そろそろ、わたしも準備しなくちゃ。」

テレビで今までの戦況を観ていたマリナは、あらゆるプレッシャーと闘いながら自分自身の出番を待つ。そして、次の第3試合に出るため、控室を後にした……

続く

ノゾミVSサオリ！（後書き）

見事勝ち上がったノゾミ。果たして・・・

ノゾミVSマリナ！（前書き）

一気にすっ飛ばして、ファイナルまで進めます。サブタイで組み合わせがネタバレしてますが・・・

ノゾミVSマリナ!

作品の進行上、ファイナルまでの流れは省略させていただきます。

トップコーディネーター達による熱いコンテストバトルもいよいよ大詰め。ファイナルを残すのみとなった。このファイナルに勝ち上がったのは、1回戦でカントーコンテストマスターに最も近いサオリに接戦の末勝利したノゾミと、地元ジョウトの期待を背負って華麗な演技を見せたアイドルコーディネーター・マリナだ。

リリアン「It's show time! ここまでトップコーディネーター達の熱い魂がぶつかりあった今回のコンテストもいよいよ大詰め。それじゃあ、早速。Can we, go!」

ノゾミ「エルレイド、Ready Go!」

マリナ「いくわよ、デリちゃん!」

エルレイド「エエエルレイド!」

デリバード「デリデリ!」

ノゾミはエルレイド、マリナはデリバードの『デリちゃん』をファイナルバトルのポケモンに選んだ。

ノゾミ「先手必勝でいくよ! エルレイド、サイコカッター。」

エルレイド「エエル!」

先手を取ったノゾミのエルレイドはサイコカッターでマリナのデリバードに攻撃する。

マリナ「かわして！」

デリバード「デリ！」

デリバードはそれを難なくかわす。

マリナ「デリちゃん、ずつき。」

デリバード「デリイ！」

マリナのデリバードはエルレイドに接近して、ずつきで攻撃する。

ノゾミ「かわすんだ！」

エルレイド「エル！」

エルレイドはずつきを瞬時にかわす。

ノゾミ（エルレイドの素早さなら先制攻撃できると思ったけど、あのデリバードもなかなかの素早さだね。）

ノゾミはエルレイドに劣らないほどのデリバードの素早さに驚いた様子だ。

マリナ「（エルレイドの素早さは厄介ね。よし、こうなったら・・・）
（デリちゃん、そらをとぶ。）」

デリバード「デリイ！」

デリバードは勢いよく空中へ飛んだ。

マリナ「そのままエルレイドにアイスボール。」

デリバードのアイスボールがエルレイドに襲い掛かる。

ノゾミ「かわすんだ！」

エルレイド「エエル！」

エルレイドはアイスボールをかわした。

デリバード「デリイイイ！」

デリバードは地上に向けて突進していた。ところが、デリバードが向かっていったのはエルレイドではなく、

マリナ「アイスボールに、高速スピン！」

デリバード「デーリデリデリデリイ！」

デリバードは高速回転しながらエルレイドに当たらず残っていたアイスボールに突進していった。やがて、デリバードの嘴がアイスボールに刺さり、そこからいくつかの氷の破片がねずみ花火のように飛び散る。

エルレイド「エエル……………」

エルレイドに無数の氷の破片が当たる。これにより、ノゾミの持ち点が徐々に減っていく。

ノゾミ（あのアイスボールはただ単に当てるんじゃないくて、それをかわした時にできる隙をつくためだったんだ。うまくやられたね。）

ノゾミはアイスボールをうまく活用したマリナの奇策に関心しつつ、次の攻撃の機会を狙っていた。

マリナ「一気に決めるわよ、デリちゃん。ふぶき。」

デリバード「デリデリー！」

デリバードのふぶきがエルレイドに襲い掛かる。

ノゾミ「つるぎのまいでかわすんだ。」

エルレイド「エエルレエイド。」

エルレイドはつるぎのまいでふぶきを華麗にかわす。

ノゾミ「続けて、サイコカッター。」

エルレイドのサイコカッターは至近距離でデリバードに直撃する。

デリバード「デリィー！」

マリナ「デリちゃん!?!」

エルレイドのつるぎのまいを活かした攻撃技で、マリナの持ち点が大きく減らされる。残りの持ち点はノゾミもマリナもほとんどない。さらに、エルレイドもデリバードもかなり疲労がたまっている。マリナ「次で決めるしかないわね。デリちゃん、ふぶき。」

デリバード「デエエエリイイ！」

ノゾミ「こっちも次で決めるよ。エルレイド、最大パワーでシグナルビーム。」

エルレイド「エエエルレイド！」

マリナ、ノゾミ両者とも最後のパワープレイに出たようだ。ふぶきとシグナルビームが丁度中間でぶつかり合う。

ドカーン！！！！

大きな音とともにフィールドは深い煙に包まれた。

サ「一体、どうなったんだ！？」

観客も固唾を飲んで状況を見守る。しばらくして煙が晴れた時には、デリバードとエルレイドが目を合わせて対峙している状態にな

っていた。丁度その時、バトル終了の音が鳴った。

リリアン「タイムアップ！ ファイナルにふさわしい白熱したコンテストバトルを制したのは・・・、マリナさんです。」

勝者はマリナだった。だが、2人のボードで残りの持ち点の差を見ると、白熱した接戦が伺えるほど僅差であった。

マリナ「やったあ、勝った。」

マリナは先ほどのコンテストバトルの険しい顔から笑顔に変えて、勝利の喜びを表現した。すると、マリナと接戦を繰り広げた相手・ノゾミがマリナに近づいてきた。

ノゾミ「こんな、接戦はひさしぶりだよ。アタシも途中で熱くなっちゃったし。それに、素早さからしてそのデリバード良く育てられているね。」

ノゾミは敗れはしたが、マリナとの接戦を繰り広げたのが余程良かったのか笑顔である。

マリナ「わたしもよ。あなたのエルレイドもよく育てられているわ。」

ノゾミ「まず、優勝おめでとう。」

マリナ「ありがとう。またあなたと戦えることを願っているわ。」

ノゾミとマリナは互いに笑顔で握手する。その光景に観客からは歓声とともに拍手が沸き起こった。

リリアン「優勝したマリナさんには、記念メダルが贈呈されます。」

コンテスタ「これが、今回の記念メダルです。優勝、おめでとう。」

マリナ「ありがとうございます。」

マリナは今回の優勝記念メダルをコンテスタから受け取る。

マリナ「コンテスト記念メダル、ゲットよ！」

マリナは決めポーズをして、優勝の喜びを表現した。観客席からはしばらく拍手喝さいが止まなかった。そして、ノゾミとマリナはサトシ達、そして観客席でファイナルを観戦していたサオリと合流した。

ヒ「2人ともすごかったわ。」

ハル「観てるだけでハラハラしたかも。」

アイ「アタシ、コンテスト初めて見たけどバトルとはまた違った雰囲気面白かったわ。」

デ「僕もアイリスと同じくコンテストは初めて見たけど、たくましさ、かっこよさ、美しさ、可愛さ、賢さ全てが見事にマッチングした素晴らしいテイストだったよ。」

サオリ「みんな今回のコンテストを楽しんでもらえたみたいね。」

ノゾミ「そう感じてもらえると、アタシ達コーディネーターの側か

らもううれしい限りだよ。」

全員、笑顔で談笑する。

サ「それとマリナ。優勝おめでとう。」

カ「ファイナルに相応しい、凄いコンテストバトルだったわ。」

マリナ「みんな、ありがとう。」

サトシ達は優勝したマリナを全員で祝福した。こうして、コガネシティを舞台にしたトップコーディネーター達によるポケモンコンテストは無事閉幕したのであった……

続いて後書きショー

ノゾミVSマリナ！（後書き）

ヒ「今回のコンテスト、凄いの一言だったわ。」

ハル「ホントかも。ノゾミもサオリさんも以前会った時より、コイデイナーターとして磨きがかかってたわ。」

天「ヒカリもハルカもうかうかしてられないんじゃないのか？」

ヒ「それは分かってるわよ。」

ハル「それよりも、いつ私たちがコンテストに出るの？」

天「まあ、待て。ちょっと普通のコンテストに工夫を加えたいと思つて構想を練ってるから。」

ハル「工夫？」

天「これ以上はネタバレにつながるから自重しておく。それと次回には、サトシの新たなライバルが登場するぞ。」

ヒ「サトシのライバルか。一体どんな人なんだろう。」

ハル「すごく気になるかも。」

天「まあ、それは次回のお楽しみってことで。それじゃあ、ヒカリとハルカ。締めよろしく。」

ヒ・ハル「次回もポケモンゲットで大丈夫（かも）。」

サトシの新たなライバル（前書き）

『ライコウ 雷いかずちの伝説』からキャラを一人追加します。

サトシの新たなライバル

トップコーディネーター達の夢の祭典から一夜明けて、サトシ達は旅仲間に加え、マリナとポケモンセンターのロビーで談笑していた。ちなみに、サオリ、ノゾミ、スズナ、ケンゴとは宿泊先で別れている。

マリナ「ねえ、サトシって今度の『ワールドチャンピオンリーグ』に出るんだよね？」

マリナはふとサトシに聞いてみた。

サ「ああ、そうだけど。それがどうした？」

サトシはマリナの質問にきょとんとして答える。

マリナ「実はね、『ポケモンバトルクラブ』がイッシュ地方からここコガネシティに試験的に導入されるんだって。」

サ「それ、本当か!？」

マリナ「うん。わたしもつい最近知ったことなんだけどね。」

マリナの話によると、イッシュ地方の『ポケモンバトルクラブ』がはるばるコガネシティにやって来て、試験的に導入されたとのこと。『ポケモンバトルクラブ』とはイッシュ地方の各所に存在するトレーナー同士が自由にポケモンバトルすることができる施設である。施設内の掲示板で対戦待ちのトレーナーとそのポケモンのプロフィール等が閲覧でき、そのトレーナーにポケモンバトルを申し込

むこともできる。この施設には『ドン・ジョージ』という運営者がおり、彼らにはジョーイやジュンサーのように沢山の親せきがいて全員同じ顔である。

マリナ「朝食食べたら、行ってみない？」

サ「行く行く。絶対行く！」

サトシは目を輝かせながら、快くマリナの誘いを承諾する。

アイ「うわあ、あんなにはしゃいじゃってホント子供ね。」

カ「アンタって、ホントバトル好きなんだから……。」

ヒ「まあ、それがサトシなんだけどね。」

サトシの分かりやすい反応を見て、カスミ達は呆れながら言った。

ベ「うーん、でもコガネシティに出来たポケモンバトルクラブはわたしも行ってみたいわ。ねえ、マリナちゃん。わたしもついてきていいかしら？」

マリナ「もちろんよ。みんなは？」

カ「イツシユ生まれの施設がどんなものか結構興味あるから、行ってみようかしら？」

ヒ「アタシも一度見てみたいわ。」

ハル「わたしもかも。」

タ「俺も興味あるな。」

マサト「僕も行ってみたい！」

リュウカ「私も。」

コトネ「私もトレーナーのはしぐれとして、行ってみたいってことね。」

カズナリ「僕も行くよ。」

全員、ポケモンバトルクラブに興味がわいてきたのか、行ってみたくなったようだ。

マリナ「それじゃあ、決まりね。朝食食べたら、すぐ行きましょう。」

こうして、朝食を食べ終えた後、一行はポケモンセンターを後にして、コガネシティに新しく出来たポケモンバトルクラブに向かった。到着すると、マリナとコトネは手持ちのポケモンを入れ替えるために（コトネは研究所で調整中だったマリルの様子を見るのも兼ねて）いったんサトシ達から離れた。

サ「早速、ポケモンバトルだぜ。」

アイ「うわあ、バトルの事となるとすぐこれなんだから。ホント子供なんだから。」

サ「だって、俺しばらく他のトレーナーとバトルしてなかったんだ

ぜ。ほら、ピカチュウだってやる気まんじやないか。」

ピ「ピッカチュウ！」

カ「ピカチュウまで……。」

ハル「ポケモンは飼い主に似るってのはこのことかも。」

タ「まあ、それがサトシとピカチュウの関係じゃないか。」

デ「サトシとピカチュウの関係はいつでも素晴らしいテイストを醸し出してるからね。」

サトシのポケモンバトルクラブに入った瞬間の反応やパートナーのピカチュウの反応に呆れつつも、その光景を微笑ましく見守るカズミ達。

カズナリ「あそこにいる男の人は、誰ですか？」

カズナリは初めて見るドン・ジョージについて、聞いてみた。

デ「あれはドン・ジョージさんだよ。このポケモンバトルクラブを運営している人だよ。」

イツシュ出身のデントが丁寧に答える。

サ「すみませーん。」

サトシはドン・ジョージに声を掛ける。

ドン「おや？ 君は確かイッシュでも何回か会ったことがあるな。」
サ「はい。聞いた話によるとジョウトでもポケモンバトルクラブが出来たみたいですね。」

ドン「うむ。君の言うとおり、ポケモン協会からの要望を受けてポケモンバトルクラブ未開の地でも広める活動を始めたんだ。コガネシティはその第一歩というところだ。」

サ「今、利用できますか？」

ドン「少し前にバトルフィールドの方は使用できる状態になったんだ。すでに何人かのトレーナーも集まってるから、良かったら対戦してみると良い。」

サ「本当ですか！？ それじゃあ、早速使ってみます。」

ドン・ジョージの答えに、パアアと笑顔を見せるサトシ。するとそこへもう一人、

ジョーイ「ドン・ジョージさん。トレーニング場の準備もできましたよ。」

はるばるイッシュ地方から手伝いで来ていたジョーイが声を掛けてきた。

ドン・ジョージ「うむ。これで全ての機能が使えるようになった。本当に助かった。」

ジョーイ「いえいえ。」

ドン・ジョージとジョーイが仕事の会話をしていると、

タ「うおおおおお!!! あなたがイツシュ地方のジョーイさんですか!!!」

ジョーイ「は、はい。そうですけど……。」

タケシが猛スピードで初めて見るイツシュ地方のジョーイの手を取り、いつものごとくナンパを開始した。

タ「自分はタケシといえます。あなたのような美しい方と出会ったのもまた何かの縁。これから自分とイツシュ地方のポケモンについて語りませんか？」

ジョーイ「は、はあ……。」

ジョーイは完全に困り果てた顔をしている。

ヒ「相変わらず、早っ!?!」

ハル「あの性格治してほしいかも。」

アイ「うわあ、ある意味凄いわ……。」

ベ「さっきの素早い動きを別の形で役立てたらいいのに……。」

カ「全く、タケシったら……。」

マサ「しょうがないなあ……。」

リュウカ・デ・カズナリ「アハハハハ……。」

久々のタケシのナンパ行動にカズミ達は呆れながら言った。リュウカ、デント、カズナリの3人は苦笑を浮かべている。そしてカズミとマサトは、タケシを引きづり出そうと準備をするが、

タ「ぐはっ!? しびれびれ。」

グレッグル「ケッ!」

タケシのモンスターボールからグレッグルが飛び出して、タケシにどくづきを喰らわすとんーんとうなりながらいつものようにタケシを引きずる。近くで見えていたサトシは苦笑を浮かべ、遠目で見えていたカズミ達は呆然としていた。その後、サトシは対戦相手を探すために掲示板を眺めていた。

サ「よし! 俺、コイツと戦いたい!」

掲示板を眺め始めて数秒も経たないうちに、もう対戦相手を決めたようだ。

ヒ「決めるの、早っ!?!」

デ「もうちょっと、ゆっくり考えたほうがいいんじゃない?」

サ「だって、俺今すぐ戦いたいんだ。悩んだって仕方ないだろ。」

サトシがどうだと言わんばかりに言うので、ヒカリ達は苦笑を浮かべた。

ドン・ジョージ「それではこの子でいいんだね。この子もこの施設内にいてすぐに対戦したがつているから、今すぐにも対戦できるよ。」

サ「それ、最高じゃん。それじゃあ、ピカチュウ。早速準備だ。」

ピ「ピッカー！」

サトシとピカチュウは間髪入れずにバトルフィールドへと向かっていった。

ハル「もう、サトシったら。」

アイ「ホント、子供なんだから。」

タ「まあ、あれがサトシらしいが。」

デ「というより、バトルのポケモンはピカチュウで決めてるんだ。」

それぞれ苦笑を浮かべながら、バトルフィールドに向かうサトシの背中を見る。そして、後を追うようにバトルフィールドへ向かった。バトルフィールドに到着すると、一人の少年がいた。

サ「君だね。俺、マサラタウンのサトシ。」

？「俺も丁度、バトル相手を探してたところなんだ。くうー、腕が鳴るぜ。」

その少年は、サトシ同様にバトル相手を探してたようだった。す

るとカズナリはその少年に見覚えがあったらしく、

カズナリ「あれ？ ケンタさん？」

ケンタ「おっ、誰かと思ったらカズナリじゃん。」

カズナリはその少年をケンタと呼んだ。

サ「カズナリ、知ってるのか？」

カズナリ「僕とコトネ、マリナさんと同じワカバタウンの出身でジヨウトリーグでベスト8、その後ホウエンリーグでベスト8、シンオウリーグでもベスト4と好成績を残してる人です。」

マサ「そんなにすごい人だったんだ。」

ケンタ「いやあ、そんなことないよ。」

ヒ「でも、サトシだって負けてないわ。セキエイリーグでベスト16、ジヨウトリーグ、ホウエンリーグでベスト8、シンオウリーグ、イツシュリーグでベスト4の成績を収めてるのよ。」

ケンタ「本当か？ 俺、そんな強い相手と戦えるなんて夢のようだ。」

サ「それは俺も同じだよ。久々のバトルがいきなりこんな強い相手と戦えるなんて思ってもみなかつたぜ。」

ケンタ「お互い、正々堂々いいバトルにしような。」

サ「ああ、こちらこそ。」

ケンタとサトシはバトル前の握手をする。するとそこへ、

マリナ「サトシィ、良いバトル相手見つかった……って、ケンタ!?」

マリナは幼馴染のケンタがいたことに心底驚いていた。

ケンタ「マ、マリナ!?!」

一方のケンタもマリナの登場に驚いていた。

マリナ「本当に久しぶりね。元気にしてた?」

ケンタ「うん。マリナ、今回のコンテストすごかったよ。それに強豪ぞろいのコンテストで優勝したんだなんて凄いじゃないか。」

マリナ「えへへ、そうでもないわ。」

マリナは照れながら言う。

マリナ「ところで、サトシの対戦相手ってケンタ?」

サ「ああ。えっと。」

ケンタ「あっ、俺のことは呼び捨てでいいよ。」

サ「そっか、それなら俺のことも呼び捨てでいいぜ。」

ケンタ「じゃあ、改めてよろしくなサトシ。」

サ「こちらこそ、ケンタ。」

2人とも同じバトル好きの性格のせいか、すっかり意気投合したようだ。

マリナ「サトシ、言っておくけどケンタは強いわよ。そう簡単には勝てないわ。」

サ「分かってるさ。でも俺、強い相手と戦えることにワクワクしてるんだ。」

ケンタ「それは俺もだ。早速、バトルしようぜ。」

サ「そうだな。早速やるうぜ。」

こうして、ケンタとサトシによるポケモンバトルが開始されるのであった。

続いて後書きシヨ―

サトシの新たなライバル（後書き）

コトネ「まさか、サトシのライバルにケンタを使うとはね。」

天「サトシとケンタって性格的に会いそうだったから使ってみただ。」

コトネ「ところで、ケンタとマリリンの関係はどんなの？」

天「実は俺はサトヒカ派であると同時にケンマリ派でもあるんだ。」

コトネ「それじゃあ、ケンタとマリリンは恋仲ってこと？」

天「そこまではいかないが、この2人の絡みも増やしていこうと思う。さて、さいごになったけどコトネ締めよろしく。」

コトネ「次回もポケモンゲットってことね。」

サトシVSケンタ！（前書き）

執筆精度が絶賛低下中の中、上手く書けたかな・・・

今回は少しサトヒカ、ケンマリ要素（というよりも、ヒカ サト、マリ ケン要素）入れます。

サトシVSケンタ！

コガネシティに新しく出来た『ポケモンバトルクラブ』で初対面
早々、バトルすることになったサトシとケンタ。

ドン・ジョージ「只今より、マサラタウンのサトシとワカバタウン
のケンタによるポケモンバトルを始める。使用ポケモンは両者とも
に1体。どちらかのポケモンが戦闘不能になったとき、終了とする。

「

ポケモンバトルはケンタの要望で1体のガチンコ勝負になった。
サトシもそれを快く受け入れて成立した。

ケンタ「俺のバトルスタイルは直球一本槍。俺の一番の相棒でいく
ぜ。出てこい、バクフーン！」

バクフーン「バアアアク！」

サ「ケンタがその気なら、俺も一番の相棒で真っ向勝負だ。ピカチ
ユウ、君に決めた！」

ピ「ピカッ！」

ケンタはバクフーン、サトシはピカチユウをバトルフィールド上
に出した。

タ「サトシはピカチユウ、ケンタはバクフーンか。」

ベ「あのバクフーン、見るからに強そうだね。」

カ「ピカチュウがあのかくフーンにどう立ち向かうか楽しみだわ。」
デ「体の大きさでは圧倒的な差があるけど、サトシのピカチュウにはそれをはねのけるほどの力があるからね。どっちが勝つか、分からないよ。」

それぞれ、かくフーンについての第一印象、ピカチュウがそれになんか立ち向かうかなどを語っていた。すると、サトシのバトルになると当然のごとく、

ヒ「サットシ、ファイト！」

ポ「ポチャ。」

ミ「ミンミン。」

ヒカリがすでにチアガール姿になってサトシを応援していた。

ハル「ヒカリ……。」

カ「なんで、チアリーダー!?」

タ「ヒカリはサトシのバトルの時は必ずといっていいほど、チアリーダー姿で応援してたんだ。」

ヒカリを不思議そうに見つめるハルカとカスミにタケシが答える。すると、ヒカリを遠目で見ていたマリナが、

マリナ「それじゃあ、わたしもチアリーダーでケンタを応援しよう」

と。」

チアリーダー姿でケンタを応援すると言い出した。

マサ「あわわ、ちょっとマリナさん。ここで着替えしないで!!!」

マサトが慌てて制止しようとするが、

マリナ「大丈夫。ちゃんと着てあるから。」

素早くマリナはチアリーダー姿に変身していた。

アイ(ていうか、最初からチアリーダーになるつもりだったんだ……)

マリナの行動にヒカリ以外の近くにいた者全員、苦笑を浮かべた。

マリナ「ハイパーキュートでスペシャルラブリー！　ワカバタウンの人気者、アイドルコーディネーター・マリナ！　レディー・ゴー！」

チアリーダー姿のマリナは早速、ヒカリの元へ駆け寄り見事に意気ピッタリのチアリーダーイングを見せた。

ハル「うわあ、初めてなのにあんなに意気ピッタリだなんてすごいかも。」

リュウカ「なんか人もたくさん集まってきたね。」

ベ「よし、それならわたしも……。」

タ「やめんかあ！」

ベルがチアリーダー姿になろうとしたところを、悲痛な叫びをあげながらタケシが制止した。ちなみに集まってきた人たちは、なぜかマリナがチアリーダーになっているということを聞きつけてやってきた連中である。

ケンタ（マリナ。自分が有名人だっという自覚を持とうよ．．．汗）。

ケンタは心の中でそう思った。そしてサトシと2人で、

サ・ケンタ（どうせなら、バトルを見て欲しいよ．．．）

同じことを思った。

ドン・ジョージ「なんだか、騒がしくなってきたがこれよりバトル開始！」

ドン・ジョージの合図により、サトシのピカチュウとケンタのバクフーンによるバトルが開始された。

ケンタ「まずは先手必勝だ！ バクフーン、でんこうせっか。」

バクフーン「バク！」

バクフーンはでんこうせっかで先手を取った。

サ「かわせ！」

ピ「ピカア！」

ピカチュウは難なくかわす。

サ「ピカチュウ、アイアンテール。」

ピ「ピイイカアアア！」

ピカチュウはアイアンテールで反撃する。

ケンタ「かわせ、バクフーン！」

バクフーン「バク！」

バクフーンもピカチュウのアイアンテールを難なくかわす。

ピ「ピカア。」

バクフーン「バアアク。」

再び2体は対峙した状態になる。

サ「やるな、ケンタ。」

ケンタ「サトシもな。でも負けな^いぜ。」

サ「望むところだ。」

再び戦闘モードに入った2人。

サ「ピカチュウ、エレキボール。」

ピ「ピイイイカアア！」

ピカチュウはエレキボールでバクフーンに攻撃した。

ケンタ「かわすんだ、バクフーン。」

バクフーン「バク！」

バクフーンはエレキボールを難なくかわした。だが、サトシは、

サ「そのまま数発続けて、エレキボール。」

ピ「ピカ！ ピカ！ ピカ！」

ピカチュウは数発続けてエレキボールを放つ。バクフーンは軽快なステップでかわしていくが、放ったうちの1発がバクフーンに直撃してしまった。

バクフーン「バクフウン！」

ケンタ「バクフーン！？」

バクフーンは地面に叩きつけられた。

バクフーン「バク．．．、バアク！」

バクフーンはすぐさま立ち上がった。

ケンタ「よし、まだ戦えるな。ここから反撃だ。」

バクフーン「バク！」

バクフーンは攻撃のため、ピカチュウに素早く近づいた。

サ「今だ、ピカチュウ。バクフーンに10万ボルト。」

ピ「ピイイカチュウウウ！」

ピカチュウは10万ボルトでバクフーンに攻撃する。

ケンタ「バクフーン、まるくなるからころがるで10万ボルトを弾くんだ。」

バクフーン「バク。バアアクフウウン！」

ケンタはよける指示ではなく、そのまま突っ込んで攻撃をする指示を選択した。ころがるの回転によって、ピカチュウの10万ボルトは弾かれ、バクフーンはそのままピカチュウに直撃する。

ピ「ピカア！」

サ「ピカチュウ！」

まるくなるの効果で威力が倍になった影響で、大ダメージを受けた。

ピ「ピカ！」

それでも、ピカチュウはサトシ譲りの根性で立ち上がった。一方の観客席では、

リュウカ「す、すごいバトルですね。」

デ「うん。こんなスパイシーでエキサイティングなテイストのバトルは久々に見たよ。」

マサ「ほぼ互角のバトルだよ。」

タ「これは長期戦になりそうだな。バクフーンもピカチュウもここまで体力が持つか……。」

カ「それにしても、バトルを見ると、なんだかコンテストバトルを連想させるわね。」

ハル「サトシはコンテストに出たこともあったから分かるけど、ケンタのバクフーン。さっきの軽快なステップといい、コンテストの動きそのものだね。」

カスミとハルカはこのバトルがコンテストバトルに酷似していると思った。すると話を聞いていたマリナが、

マリナ「ふふふ、ケンタにはちよくちよくわたしのコンテストバトルの特訓を手伝ってもらってたの。だからよ。」

マリナの答えにカスミとハルカは納得した様子だった。

ベ「それにしてもケンタ君のバクフーン。10万ボルトをこころがる

で弾くとは驚いたわ。」

タ「普通なら、避けるところだからな。」

マリナ「ケンタのバトルスタイルは直球一本槍の真つ向勝負が基本なのよ。今では避ける戦略も混ぜてるんだけど、トレーナーに成り立てだったころは避けることよりも逆に自分の攻撃に繋げてたことが多かったわ。」

コトネ「攻撃は最大の防御ってことね。」

ヒ「ところでマリナはどうしてそこまでケンタのことよく知ってるの？」

マリナ「えっ!?!」

ヒカリの突然の質問にきょとんとするマリナ。するとコトネが、

コトネ「それはね、ヒカリン。ケンタはマリリンの彼だからよ。」

マリナ「ちょっと、コトネ!?!」

ヒカリの質問に対するコトネの答えに、カアアと顔を赤くさせるマリナ。

カ「嘘っ!?!」

ハル「マリナとケンタって、恋仲だったの!?!」

カスミとハルカは驚いて思わず声を上ずらせた。

マリナ「ちょっと違うってば！ わたしとケンタは幼馴染ってだけで／＼／」

マリナは否定するが、その慌てぶりからして説得力がない。

コトネ「でもマリリン昔から言ってたじゃない。ケンタのことがす
．．．」

マリナ「あわわわ、コトネちょっとストップ！」

マリナは顔を真っ赤にさせながら、コトネの口を塞ぐ。

カズナリ「あああ、コトネのスイッチが入っちゃった。」

タ「確かコトネは恋の話になると熱が入るんだっただよな。」

カズナリとタケシは今のコトネについて、ため息をつきながら言う。

アイ「でも、幼馴染から始まる恋愛ってのもいいわね。」

デ「アイリス。物食べながら恋愛について語って欲しくないんだけど．．．。」

どこから持ってきたのかモモンの実をかじりながら恋愛について語るアイリスに苦笑しながらデントがツッコんだ。

一方、バトルの方はその後一進一退の攻防が続き、バクフーンもピカチュウも残り体力が僅かとなっていた。

サ「次で決めるぞ。ピカチュウ、ボルテッカー！」

ピ「ピカ！ ピカピカピカピカ……………」

ケンタ「そつちがその気ならこつちも真つ向勝負でいくぜ。バクフーン、かえんぐるま。」

バクフーン「バク！ バアアアクウウウ！」

最後の一撃といわんばかりにお互い正面攻撃で迎え撃つ。丁度、バトルフィールドの中央で両者がぶつかり合い、爆発とともに煙が立ち込めた。

マサ「一体、どうなったの!？」

観客席も固唾を飲んで見守る。しばらくして煙が晴れると両者ともにかろうじて立っていた。だが、

ピ「チャア……………」

バクフーン「バク……………」

サ「ピカチュウ!？」

ケンタ「バクフーン!？」

ドン・ジョージ「両者戦闘不能。よってこの勝負引き分け。」

ピカチュウもバクフーンも倒れたため、サトシとケンタのバトルは引き分けになった。サトシはピカチュウに、ケンタはバクフーンにそれぞれ近寄る。

サ「惜しかったな、ピカチュウ。」

ピ「ピカ……。」

バトルを終えたピカチュウはサトシにバトル直後とは思えないくらいニッコリしながら声を出す。

ケンタ「お疲れ、バクフーン。ゆっくり休んでくれ。」

バクフーン「バクフーン。」

そうバクフーンを労うとケンタはバクフーンをボールに戻した。

サ「いい、バトルだったぜ。ケンタ。」

ケンタ「こっちも、こんなに熱くなったバトルは久しぶりだよ。サトシ。」

サトシとケンタはお互いを称えながら、握手をする。すると、

ヒ「サトシ〜！」

マリナ「ケンタ〜！」

ヒカリとマリナがバトル直後の2人に近づいてきた。他の面々も

続々と2人のもとへやってきた。

ハル「凄いバトルだったかも。」

マサ「特に最後の一撃の時なんか、ハラハラしたよ。」

デ「こんなエキサイティングでアグレッシブなテイストのバトルは
久々だよ。」

それぞれ感想を漏らす。途中からやってきた野次馬からも拍手が
沸き起こっている。こうして、サトシとケンタによるバトルを終え
て、翌日、サトシ一行は次の目的地へと旅立つのであった……

その頃、人通りの少ない路地で、

? A「ここがコガネラジオ塔か。」

? B「ここからジヨウトいや全国に情報を発信しているんだな。」

? C「ああ、そしていずれ我らロケット団の世界征服のための拠点
となるであろう。」

? B「その時が来るのが待ち遠しい。」

? A「まあ、あせるな。今は時期尚早。時が来るまで待とう。」

? A・B・C「」「」「我らロケット団の未来のために。」「」

秘密裏でロケット団が工作活動をしていた。このことが今後の展開に影響を与え、コガネ市民はもちろん、サトシ達を知る由もなかった・・・

続いて後書きショー

サトシVSケンタ！（後書き）

マリナ「ちょっと作者。なんであんなの入れたのよ。わたし物凄く恥ずかしい思いしたじゃない。」

天「それは俺がサトヒカ派の作者でありながら、ケンマリ派の作者でもあるからな。」

コトネ「そういうことよ。マリリン。」

天「それにマリナだって、ケンタのことが気になるんだろ。それなら、恋仲になるような描写を書くしかないだろうが。」

マリナ「ちょっとわたしとケンタは幼馴染というだけで……。」

天「（分かりやすい反応……。）安心しろ、マリナ。ケンタとは両思いだから（多分）。」

マリナ「えっ、それってどういう……。」

天「さて、最後になりましたが感想の方をよろしくお願いします。」

マリナ・コトネ「逃げた……。」「」

サトシのピカチュウ〜前編〜（前書き）

旅の人数多過ぎだろというツッコミは無しで（笑）

序盤はマリナ、その後はサトシのピカチュウメインです。サトシとピカチュウの出会いの記憶がうる覚えなので、おかしな点があるかもしれません。

サトシのピカチュウ前編

コガネシティを後にしたサトシ達は、次の目的地をどこにしようか話し合っていた。

ヒ「ねえ、次は何処に行こうか。」

タ「うーん、順番に行けばエンジュシティだが。」

コトネ「エンジュシティは毎年、あらゆる地方からの観光客が来るジヨウトで一番の観光都市よ。やけたとう、スズのとうなどの歴史感あふれる寺院はもちろん、舞妓とポケモンバトルができる歌舞練場もあるし、見どころ満載ってことね。それに最近では、舞妓の衣装を試着する観光客も増えてるの。」

ヒ「舞妓の衣装か・・・。」

ハル「一度来てみたいかも。」

サ「じゃあ、早速エンジュシティに行こうぜ。」

カ「ええ、行きましょう。」

サトシ達の次の目的地はエンジュシティに決まった。

マリナ「コトネはジヨウトのために頑張ってるわね。」

コトネ「少しでも全国の人にジヨウトの良さを知ってもらいたいからね。大変だけど、苦にはならないってことね。」

コトネはニッコリしながら答える。

マリナ「ところで、アイリスの夢は何？　ずっと、前から気になってただけど。」

アイリス「アタシはね。ドラゴンポケモンマスターを目指してるんだ。だからこうしてキバゴとも一緒に旅をしてるの。それにここジョウトにはりゅうのあなつてところがあることを前もって調べてたんだ。ねっ、キバゴ。」

キバゴ「キバキバ！」

アイリスはよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、マリナの質問に答える。

マリナ「へえ、それじゃあワタルさんのこともよく知らないよね。」

サ「ワタルさんって、あの？」

サトシがマリナに聞いてみると、

マリナ「そう、四天王のチャンピオン！」

マリナは急にテンションを上げて話し始めた。そして、

マリナ「あのマント姿の凛々しさに加え、あの甘いマスク。四天王のチャンピオンでありながらポケモンGメンをも兼ねるワタル様よ。」

マリナは恋する乙女のような姿になりながら、ワタルファンブツクなるものをサトシ達に見せびらかす。

タ「なあ、ケンタ。マリナの様子変わってないか？」

ケンタ「実はマリナ。ワタルさんのようなマントの似合う男に滅法弱いんだ。」

コトネ「あの状態のマリリンは誰にも止められないってことね。」

カズナリ「ワカバタウンでも散々ワタルさんについて聞かされましたね。」

タケシ達がマリナに聞こえないように苦笑いを浮かべながら言った。この会話の内容の通り、マリナはマントの似合う二枚目に滅法弱い。実際、『ライコウ 雷の伝説』^{いかずち}でも、ワタルと同じマントの似合う二枚目のミナキに興味を示し、そばにいたケンタをあきれさせたほどである。

ハル・ヒ「うう、マリナのイメージが……。」

ハルカとヒカリはマリナの変わり様に、涙を浮かべながら悲痛な声を出した。しばらくしてマリナが元のテンションに戻って、サトシ達は再び歩みを進めた。しばらくして、

マリナ「……。」

エンジュシティに向けて足を進めるサトシ達だったが、ふとマリナがサトシのピカチュウのほうをじっとみつめている。

ピ「ピカ．．．．．。」

ピカチュウは少し困り果てた顔になる。

サ「どうしたんだ、マリナ。じつと俺のピカチュウを見つめて。」

サトシはマリナの視線が気になったのか、聞いてみた。

マリナ「ねえ、サトシ。わたしのポケモンあげるから、そのピカチュウわたしに取れない？」

マリナは突然、自分のポケモンとサトシのピカチュウを交換しようと言いだした。当然、一番の相棒であるピカチュウを出すわけがないので、

サ「絶対、駄目！」

マリナ「え、そこをなんとか。」

サ「駄目ったら、駄目！」

マリナは数回粘ったが、サトシもかたくなにそれを拒否する。マリナは結局諦めた。

ケンタ「マリナ。一体、何を言い出すのかと思えば．．．。」

マリナの行動のため息をつきながら、困り果てるケンタであった。

ケンタ「ところで、マリナ。どうして、急にサトシのピカチュウが

欲しいって言い出したの？」

マリナ「だって、サトシのピカチュウ可愛いし、それにケンタのバクフーンと互角の勝負をするくらい強いじゃない。絶対にコンテストでも通用すると思って、それで交換しようと思ったの。」

カ「マリナ、気持ちは分かるけどそれは無駄よ。」

ヒ「サトシとピカチュウは仲が良いでは言い切れないほどの関係だものね。」

カスミとヒカリがサトシと旅をしていた経験から、サトシとピカチュウの関係についての印象をマリナに言う。

ケンタ「そういえば、サトシのピカチュウ。モンスターボールに入ってるじゃないよな。ポケモンはモンスターボールに入っているのが普通なのに。」

ケンタはふと疑問に思ったことをサトシにぶつけてみた。

サ「実は俺のピカチュウ。モンスターボールが嫌いなんだ。理由を言うとなると、まず俺とピカチュウが出会った経緯まで言わないといけないな。」

アイ「サトシとピカチュウが出会った経緯か。聞きたいわ。」

デ「そういえば、イツシユを旅してた時は全く話してもらってなかったね。僕も聞いてみたいな。」

アイリスとデントはサトシとピカチュウの出会いについて興味が

わいてきたようだ。そして一同、その場に座ってサトシとピカチュウの出会いについて聞くことになった。

サ「カスミやタケシ達は知ってると思うけど、ピカチュウはマサラタウンで俺が最初に貰ったポケモンなんだ。」

ケンタ「えっ、そうだったのか!？」

マリナ「だって、マサラタウンでトレーナーが最初にもらうポケモンって確か、フシギダネ、ヒトカゲ、ゼニガメのいずれかのはずじやあ。」

ケンタとマリナはピカチュウがサトシの初めてのポケモンだということに驚いた。マリナのいうとおり、マサラタウンのオーキド研究所で最初にもらうポケモンはフシギダネ、ヒトカゲ、ゼニガメの3体のうち1体である。

サ「実は俺、トレーナーとして旅立つ日に寝坊したんだ。急いでオーキド研究所に行ったんだけど、すでにその3体は別のトレーナーが持っていった後だったんだ。」

マサ「トレーナー初日に寝坊って……。」

アイ「トレーナーとして大事な日に寝坊するなんて、ホント子供ね。」

サ「だって、仕方ないだろ。前の日は、どんなポケモン達と出会うのかとかどんな強いトレーナーとバトル出来るのか考えてたら、わくわくして眠れなかったんだよ。みんなだって、そうだろ?」

ケンタ「それはそうだけど．．．。」

ヒ「でも、アタシはサトシみたいに寝坊したりはしなかったわ。」

サ「うつ．．．。」

ヒカリの鋭い指摘に言葉を詰まらせるサトシ。

デ「それでどうしたの。それじゃあ、サトシだけポケモンが貰えず
また1年待たなければならなくなるけど。」

10歳になれば、自分のポケモンをもらって旅に出ることができ
るが、最初のポケモンがもらえなかった場合、また1年待たなければ
ならない。デントはそれにも関わらず、他のトレーナーと同じよ
うに旅に出てるサトシを不思議に思った。

サ「オーキド博士がたまたま野生のピカチュウをゲットしてたんだ。
俺とピカチュウ、今ではこんなに仲良しだけど最初の頃は全く俺の
言うこと聞かなかつたんだぜ。」

ハル「嘘っ!?! 信じられないかも。」

カ「ハルカ、嘘みたいな話だけど本当よ。その頃はサトシじゃなく
てアタシによく懐いてたもの。」

アイ「そうなんだ。って、なんでカスミがそんなこと知ってるの?」

サ「ああ、アイリス。そのことなんだけど、俺が旅に出て最初に出
会ったトレーナーがカスミだったんだ。」

ピカチュウは最初はサトシの言うことをまるつきり聞いていなかった。サトシが一緒に行こうとしてもついていかなかったり、サトシに対して電撃を放ったりしていた。そのままだと埒が明かないので、サトシが紐とゴム手袋を使って無理矢理ピカチュウを連れて旅に出たのだった。野生ポケモンとのバトルの方も言うことを聞かなかったので、バトルにならなかった。その際、サトシが投げた石が野生のオニスズメに当たり、オニスズメが群れで襲ってきたのを逃げていて、川に落ちた。その時、丁度釣りをしていたカスミに助けられたが、傷だらけのピカチュウを見たカスミはサトシに思わずビシタしてしまった。

リュウカ「そんなことがあったのですね。」

マサ「でも、カスミがサトシにビシタしたのは驚いたなあ。」

カ「あの時は事情も知らずに思わずやってしまったわ。サトシ、ごめんね。あの時、痛かったでしょう。」

サ「いや。俺もトレーナーとして未熟だったし、今となつてはいい思い出だよ。」

サトシは全然気にしてないとカスミに言う。カスミはそのことを聞いて、パアアと笑顔になる。

サ「その後、オニスズメ達が追ってきて・・・あっ。」

ピ「ピカア・・・。」

サトシは何かを思い出したのか、突然口ごもってしまった。ピカチュウも何かを思い出したかのように、なぜかサトシの後ろに隠れ

て申し訳なさそうな顔をする。

サ「あの時、カスミに借りた自転車、ピカチュウの電撃で壊しちゃったんだ。」

カ「あつ、そんなこともあったわね。」

カスミはサトシに自転車を弁償させるために旅に同行してたことをすっかり忘れていたようだ。

ハル・ヒ「えっ、カスミも!?!」

ハルカとヒカリが声を合わせて驚く。実はハルカとヒカリもトレーナーとして旅立った日にピカチュウの電撃によって自転車を壊されている。

カ「もしかして、ハルカとヒカリも!?!」

ハル「わたしもピカチュウの電撃で。」

ヒ「アタシも。」

カスミはピカチュウの電撃によって自転車を壊された仲間がいたことに驚いていた。

ピ「ピカチュピ、ピピカ、ピカカ・・・ピカア。」

サ「カスミ、ハルカ、ヒカリ。俺からもホントにごめん。いつか必ず弁償するから。」

ピカチュウが申し訳なさそうに自らの電撃で自転車を壊された3人に謝る。サトシもピカチュウのパートナーとして3人に謝る。

カ「べ、別にいいわよ。もう気にしてないから。」

ハル「実際、サトシと旅してるうちに自転車の事なんてどうでもよくなったし。」

ヒ「ア、アタシだってあの後ママに新しいの買ってもらったし。」

3人は慌ててもう気にしてないとサトシとピカチュウに訴える。サトシとピカチュウはホツとした。

コトネ「サトシもトレーナーなりたての頃はいろんなことがあったんだね。」

タ「そういえば、俺とのジム戦の時はイシツブテとイワーク相手にピジョンとピカチュウで挑んでたな。」

アイ「嘘っ!？ だって、イシツブテもイワークのどちらもピジョンとピカチュウじゃあ不利でしょ?」

アイリスは大変驚いた。

サ「おかげで最初に戦ったときは負けたよ。でも、次に戦ったときに勝ったんだ。」

サトシのニビジムのグレーバッジを駆けたバトルは、タケシが切り札で出したイワークに全く歯が立たず、最初のバトルは敗れてしまった。当然サトシはタケシと再戦したが、その時もイワークのし

めつけるに苦戦し、ピカチュウが万事休すの状態となった。ところが、ピカチュウの放った電撃がたまたまジムのスプリンクラーの誤作動を引き起こすというトラブルにより、じめんタイプには効かないピカチュウの10万ボルトがスプリンクラーの水を浴びたイワークに当たり、見事にサトシが勝利を納めた。

タ「本当にあの時は驚いたな。まさか、あんな形で決着がつくとは思ってもみなかったよ。」

デ「運も実力のうちって言うからね。」

タ「あの後、俺は世界一のポケモンブリーダーになるためにサトシ、カスミと一緒に旅をすることにしたんだ。」

サ「そうだったな。それにしても、一緒に旅してたカスミが次のハナダジムのジムリーダーだったことには驚いたぜ。カスミとのジム戦は、ピカチュウ抜きで戦ったんだ。」

ヒ「えっ、どうして。カスミのポケモンはすべて水タイプでしょ。電気タイプのピカチュウなら有利に戦えるじゃない。」

サ「あの頃ピカチュウが俺よりカスミに懐いてたから、ピカチュウ自身がバトルしなかったんだ。」

サトシの答えを聞くと、ヒカリは納得したようにあーと声を出した。

カ「でも、結局残り最後の一匹で決着つかなかったのよね。」

デ「えっ、どうしてだい？ それじゃあ、ジムバッジがもらえない

よ。」

サ「まあ、その時はカスミのお姉さんの判断で貰えたんだけどな。」

カ「それにしても、あの3人組は本当にしつこいわね。アタシとサトシのジム戦がお流れになったのもあの3人組のせいよ。」

タ「毎回、狙われるピカチュウが可哀そうだ。」

マリナ「あの3人組って？」

ケンタ「一体誰の事なんだ？」

マリナとケンタ、リュウカは首を傾げた。そのほかの面々は誰のことを指しているのかわかっているようで、サトシとピカチュウに同情の眼差しを送っていた。すると突然、

ピ「ピカ!?!」

どこからか、2つのアームが現れ、ピカチュウを掴んでどこかへ連れ去るように動いた。

サ「一体なんなんだ？」

サトシ達が見た人物とは……

続く

サトシのピカチュウ〜前編〜(後書き)

最後の人物が誰なのかすぐにわかると思う・・・

サトシのピカチュウ〜後編〜(前書き)

継ぎ足しを繰り返してたら、物凄におかしなことに(汗)

文章力が壊滅的かつうる覚えのアニメ知識満載ですが、あたたかい目でお読みいただければ幸いです。

サトシのピカチュウ〜後編〜

サ「一体なんなんだ!？」

ピカチュウが連れ去られた方向に目を向けると、そこには敵キャラで唯一のシリーズ皆勤賞（多分）のあの3人組（正確には2人と1匹）がいた。

？「一体なんなんだと聞かれたら」

？「答えてあげよう明日のため」

？「進行の都合上、以下省略ニヤー。」

そして、いつもの口上でサトシ達と対峙する。

サ「そういえば、ピカチュウのことを語ったらこいつ等のことは切っても切り離せないんだよな。」

カ「ホント、もういい加減にしてほしいわ。」

ヒ「会いたくなくても、あってしまうのよね。」

サトシ、カスミ、ヒカリはため息をつきながらつぶやいた。サトシ達の目の前に現れた3人組。そう、ロケット団のムサシ、コジロウ、ニヤースのことである。

ムサシ「ちょっと、何よ。そのリアクション。」

コジロウ「久々に懐かしい顔のジャリボーイ、ジャリガールもいる
と思ってわざわざこっちから出向いてやったというのに。」

ニヤース「あんまりだニヤー。」

ムサシ、コジロウ、ニヤースはサトシ達のリアクションに不満を漏らす。

アイ「いやいや、別に頼んだ覚えないから。」

アイリスが手を振りながら、ツッコミを入れる。

マリナ「ねえ、ケンタ。」

ケンタ「うん、マリナ。」

リュウカ「あのわたしも思ったんですけど。」

マリナ・ケンタ・リュウカ「「ニヤースが喋った!?!」」

マリナ、ケンタ、リュウカの3人は初めて見る人間の言葉を使うニヤースに驚いていた。

ニヤース「ニヤーは努力して喋るようになった特別なポケモンニヤ。」

聞いてもないのにニヤースは自分自身について説明する。

サ「そんなことより、ピカチュウを返せ!」

サトシは声を荒らげて、3人組に訴える。

コジロウ「ふん、やなことだ。」

ムサシ「返せって言われたら、余計に返したくなくなるんだよね。」

ハル「じゃあ、返さないで！」

ニヤース「返さないって言われたら、素直に返さないのニヤ。」

マサ「このへそ曲がり！」

コジロウ「お前たちはそこでピカチュウが連れ去られるのをじっとみているんだな。」

コジロウは何かの機械を地面に投げつけた。その機械からは、無数の輪が飛び出して、サトシ達を縛ったのだ。それにより、サトシ達は身動きがとれなくなった。

ヒ「なんなの、これ!？」

カズナリ「う、動けない……。」

サ「くそう、ロケット団め……。」

ポ「ポチャア……。」

キバゴ「キバ……。」

マリル「リイル……。」

すると、ベルのカバンから一つモンスターボールが転がって、中からユニランが出てきた。

ベ「あっ、そうだ。ユニラン、アームに向けてトリック。」

ユニランのトリックによって、アームに掴まれているピカチュウとその場にあつた大きな岩とが入れ替わった。アームは岩の重さに耐えきれず、ちぎれ落ちてしまった。

ムサシ「なんですって!?!」

ピ「ピカア……。」

サ「ありがとう、ベル。ピカチュウ、あいつらに10万ボルト。」

ピ「ピイイイカチュウウウウ!」

岩と入れ替わったピカチュウは3人組に向けて、10万ボルトを放った。3人組の乗っていたロボットは大きな音とともに爆発した。

ニヤース「作戦失敗にゃ!」

コジロウ「これは置き土産だ。デスマス、ナイトヘッド。」

デスマス「デエエス!」

3人組は背中につけていた小型ジェットで空高く逃げていった。

その際、コジロウのデスマスでナイトヘッドを放ち、サトシ達を攻撃する。

ケンタ「全く、なんてやつらだ。」

マリナ「こんな置き土産いらないわよ。」

アイ「ホント、逃げ足だけは早いんだから。」

デ「まあ、でもピカチュウは取り返したことだし、いいじゃないかい。」

ケンタ、マリナ、アイリスが3人組に対する怒りを露わにする中、それを冷静に宥めるデント。だが、一部3人組の去り方に違和感を思っていた。

カ「ねえ、タケシ。」

タ「ああ、カスミの言いたいことは分かってる。ハルカ、マサト、ヒカリもだろ。」

ハル「ええ。」

マサ「僕も思った。」

ヒ「あの3人組、あんな去り方だったけ？」

マリナ「えっ、それってどういうこと？」

マリナはきよとんとした顔になる。

ハル「だって、あの3人……。」

マサ「何らかの攻撃を受けた後は・・・。」

ヒ「『やな感じ』って言いながら、いつも飛んでいったもの。」

アイ「えっ、そうなの!? サトシ、そんなこと全く話さなかったから。」

サ「あ、いや。いつも狙われてるから、そんなこと気にしたことなかった。」

サトシの言葉に、一同唾然とした。そして、サトシを同情の眼差しで見つめる。

ケンタ「サトシ、お前も大変だな。」

サ「ああ、でも俺よりも大変なのはピカチュウの方だよ。」

カ「あいつらが来る度に狙われてるものね。」

ヒ「こう振り返ってみると、ピカチュウが可哀そうだわ。」

ピ「ピカア・・・。」

ポ「ポチャポチャ。」

キバゴ「キバキバア。」

マリル「リイルリイル。」

サトシ達の会話を聞いて、ため息をつくピカチュウ。それを見て、ポツチャマ、キバゴ、マリルが慰めるように声を掛ける。するとマリナは、ふとあることに気が付いた。

マリナ「ねえ、ヒカリ、アイリス。ヒカリのポツチャマとアイリスのキバゴも、サトシのピカチュウみたいにモンスターボールが嫌いななの？」

マリナはピカチュウと同じように、ボールに入らずに外に出ずっぱりのヒカリのポツチャマとアイリスのキバゴが気になった。

ヒカリ「ううん。ポツチャマは最初はモンスターボールに入ってたんだけど、サトシのピカチュウを見てそれならアタシも外に出して連れ歩いてみようかなって思ってこうしてるの。だから、別にモンスターボールが嫌いなわけじゃないわ。」

アイリス「キバゴはアタシがおば様からもらった時から、モンスターボールに入らずに外に出たの。それでずっと外に出してるって訳。」

マリナの質問にすらすらと答えるヒカリとアイリス。

マリナ「そうだったの。でも、こうしてみるとポツチャマもキバゴも外に連れ歩いていることがなじんでるみたいね。」

ポ「ポツチャマ。」

キバゴ「キバア。」

マリル「リイル。」

マリナがにつこりとポツチャマとキバゴを見つめると、ポツチャマはえっへんと言わんばかりに胸を張り、キバゴは両手を高く上げて振り、マリルは尻尾を振ってマリナにアピールした。

マリナ「ねえ、ケンタ。わたしたちもサトシ、ヒカリ、アイリス、コトネみたいにポケモンを外に出して連れ歩いてみない？」

ケンタ「えっ？」

マリナは外に出ている4体を見て、自分達もポケモンを外に出して連れ歩いてみてはとケンタに提案した。

タ「いいんじゃないか。ボールから出せば、そのポケモンと触れ合えるし、なにしろ旅が楽しくなるものな。」

タケシはマリナの提案を推した。

ケンタ「それ、いいかもな。早速やってみようぜ。」

ケンタはマリナの提案を快く承諾した。

ケンタ「出てこい、バクフーン。」

マリナ「出てきて、ムウちゃん。」

バクフーン「バアアアク。」

ムウ「ムウウウ。」

ケンタはバクフーン、マリナはムウマを外に連れ歩くポケモンに選んだ。

ケンタ「これからよろしくな。バクフーン。」

バクフーン「バク。」

マリナ「ムウちゃんもよろしくね。」

ムウマ「ムウ。」

ケンタとマリナもサトシ、ヒカリ、アイリス、コトネ同様にポケモンを連れ歩きながら旅をすることにしたのだった。そして一行は、次の目的地・エンジュシティへと再び歩みを始めた。

続いて後書きショー

サトシのピカチュウ〜後編〜(後書き)

ムサシ・コジロウ・ニヤース「「ちょっと、作者。」」

天「なんだ？」

ムサシ「まったく、なんだじゃないわよ。」

コジロウ「俺たちの初登場、遅すぎやしないか？」

ニヤース「それにセリフも少なかったしニヤ。」

天「まあ、そういうなって。初登場させたのは良かったものの、ネタがなかったんだから。」

ムサシ「ネタがなかったって、それ一番最悪じゃない。」

コジロウ「出しておいて、そりやないだろ。」

ニヤース「それに滅茶苦茶な展開だし、読者からの苦情来ても、知らないニヤ。」

天「それでも俺は更新して見せるぞ。耐えてやらあああ！」

ムサシ「もう、これ以上掘り下げるのは止めよ。」

天「最後になりましたが。」

ムサシ・コジロウ・ニヤース「「君の感想を待っている！」」

あの災難再来！？（前書き）

ここまで、自分の壊滅的文章力を悔やんだことはなかった・・・（汗）

今回の話は、ほぼオールギャグ、キャラ崩壊しまくり、作者の悪ふざけで入れ込んだ女装ネタが入ります。苦手な方は、お引き取り下さい。

あの災難再来!?

エンジュシティに到着したサトシ達は、二手に分かれて行動することになった。サトシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベル、ケンタ、マリナは歌舞練場へ、タケシ、デント、マサト、リュウカ、カズナリはフレンドリーショップに行くことにした。

カ「そういえば、久しぶりね。サクラに会おう。」

サ「そういえば、そうだな。」

カスミとサトシはエンジュ5姉妹の末っ子でカスミとはその後も連絡を取り合う仲であるサクラと再会するのを楽しみにしていた。

ハル「ねえ、カスミ。サクラって誰？」

ハルカから当然の疑問が返ってきた。その他のサクラを知らない面々も首を傾げている。

カ「サクラは、サトシとタケシ、アタシとで旅をしてた時にここエンジュシティで出会ったの。サクラもアタシと同じ末っ子ということとですぐに仲良くなったの。とても優しい子だから、みんなともすぐに仲良くなれると思うわ。」

ヒ「へえ、アタシもサクラって人に会ってみたいなあ。」

ヒカリは、まだあったこともないサクラに会ってみたくなくなった。その他の面々もサクラに会いたがっていた。

カ「それはいいけど、サクラ。旅から帰って来てるかしら？」

サ「えっ、サクラ旅に出たのか？」

カ「ええ。以前、ジムバトルをするためにアタシの所にきたの。その時いろいろあったんだけど、無事にジムバトルをすることになってアタシに勝ったわ。」

サクラは以前、ジムバッジを手に入れるためにハナダジムを訪れたことがある。ただ、その時はブルーバッジ自体なかったため、ジムバトルが出来なかった。そこで、ケンジも含めた3人でジムバッジ職人・キンゾーの元でバッジ作りの厳しい修行をさせられたが、無事乗り越えて、ジムバトルでもカスミに勝利し、ブルーバッジを手に入れたのだった。

サ「それじゃあ、サクラも今度の大会に出るのか？」

カ「うーん、それはどうか分からないけど、少なくともジョウトのジムバッジ3つは持っていたわ。」

サ「そっか。」

サクラとの再会を懐かしんでいるうちに、

ケンタ「おっ、着いたぞ。」

マリナ「ここね。相変わらず、風情あるところね。」

一行は歌舞練場に到着した。

コトネ「それじゃあ、早速中へ入ってみるってことね。」

間髪かんぱつ入れずにサトシ一行は、歌舞練場の中へと入っていった。

サ「御免下さい！」

カ「お邪魔しまーす！」

サクラ「あら、サトシにカスミ。久しぶりね！」

サトシ達を出迎えたのは、エンジユ5姉妹の末っ子・サクラ本人であった。

カ「久しぶりね、サクラ。」

サ「元気にしてたか？」

サクラ「ええ、こっちは大丈夫よ。しばらく旅に出てただけどつい数日前にこっちに戻ってきたの。」

カスミ、サトシ、サクラはお互いの再会を喜んでいた。なんともほほえましい光景である。

サクラ「ところでそちらの方々は？」

サクラはカスミとサトシの後ろにいる、ハルカ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベル、ケンタ、マリナに気づき、誰なのか聞いてみた。

サ「こっちから順に、ハルカ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベル、ケンタ、マリナだ。」

ハル「初めまして。ハルカです。」

ヒ「アタシはヒカリです。」

アイ「アタシ、アイリスです。」

コトネ「コトネです。」

ベル「わたし、ベルです。」

ケンタ「俺、ケンタです。」

マリナ「わたしはマリナです。」

サクラ「みんな初めまして。別に敬語で話さなくてもいいわ。年齢もわたしと変わらないみたいだし。」

ヒ「そう、それじゃあサクラ。よろしくね。」

ヒカリが代表して、サクラに挨拶をした。

サクラ「こちらこそ、よろしくね。」

サクラは笑顔で初対面の面々に言葉を返した。

サクラ「みんな長旅で疲れたでしょ。上がって。」

カ「ありがとう、サクラ。それじゃあ、お邪魔します。」

サトシ達はサクラのご厚意で、歌舞練場内へと上がることにした。サクラに誘導され、サトシ達は大広間へと入っていった。すると、そこには知っている人物が2名いた。

？「あら、サトシさん。」

？「えっ、サトシ君？」

サ「エ、エリカさん。それにスズナさんも。どうしてここに。」

そこにはカントー地方タママジムのジムリーダー・エリカとシンオウ地方キツサキジムのジムリーダーでこの間のポケモンコンテストで準優勝を納めたノゾミの旅に同行しているスズナがいた。今作品でエリカ出演率が大きいような気がしないでもないが、そこはスルーの方向で（笑）

エリカ「サトシさん、お久しぶりですね。みなさん、この度はどうしてここに？」

エリカは幾日振りのサトシ達と対面したことに少し驚いていた。

カ「あっ、それはアタシ達が親友のサクラに会いたいと思ったからです。」

サトシの代わりにカスミがエリカの質問に答えた。

エリカ「まあ、そうでしたの。それではあなた方はサクラさんとはお知り合いなのですね。」

サ「はい、俺とカスミ以外は初めてですが。」

サトシはエリカに笑顔で答えた。

ヒ「ところで、スズナさんはどうしてここに？」

スズナ「あたしは、ノゾッチと観光よ。ここで舞妓の衣装の体験が出来るって聞いたからここに来たの。」

ヒ「スズナさん、その格好似合ってますよ。」

スズナ「ふふふ、ありがとう。」

ヒカりに着物姿を褒められたスズナは満面の笑顔で答える。

ハル「そうなんですか。それで、ノゾミは何処に？」

スズナ「ああ、ノゾッチはね……。」

スズナがノゾミの行方を言おうとすると、

ノゾミ「スズナ先輩。やっぱり、恥ずかしいですよー！」

遠くからノゾミが悲痛な声を発するのが聞こえた。

スズナ「ノゾッチ何やってんのよ。サトシ君やヒカリちゃん達も来てるのよ。ほら、さっさと出て来たら？」

ノゾミ「えっ、サトシ達も来てるんですか。だったら尚更、無理です。」

ノゾミはサトシ達の前に今の自分の姿を見せることを頑かたくに拒む。

スズナ「はあく、仕方ないわね。ノゾッチ、もたもたしないの。」

ノゾミの態度に痺れを切らしたスズナは、ノゾミを強引にサトシ達の前へと引つ張る。するとそこには、いつものボーイッシュな雰囲気とは違った着物姿のノゾミが現れた。

ヒ「うわあ、ノゾミ可愛い！」

ハル「すごく似合ってるかも！」

ヒカリとハルカはいつもとは違う雰囲気ノゾミを見て、興奮しながら感想を漏らす。

ノゾミ「そ、そうかな。アタシ、変じゃない？」

ノゾミは顔を少し赤くしながら、答える。

マリナ「あら、そんなことないわよ。コンテストのファイナルで戦った時とは違ったフレッシュ感があってとてもいいわよ。」

マリナもこの間のコンテストファイナルの対戦相手の違った一面をととても気に入ったようだ。

エリカ「わたくしの見込んだとおりでしたわ。ノゾミさん、とてもお似合いですよ。」

どうやら、ノゾミに着物姿を提案したのはエリカのようである。

ノゾミ「そ、そうですか・・・。」

エリカに褒められたノゾミは、さらに顔を赤くさせる。またまたさらにノゾミに追い討ちをかけるように、

サ「ノゾミ、とても似合ってるぞ。なっ、ピカチュウ。」

ピ「ピッカー！」

自らが好意を寄せるサトシとその相棒のピカチュウに褒められたせいか、ノゾミの頭の中はショート寸前だった。それはいつもの冷静さは影も形もない状態である。

ベ「ねえ、わたしたちも着物姿になってみない？」

ノゾミの着物姿を見て、ベルが自分達も来てみたいと提案した。

アイ「それ、いいわね。アタシ、着物着るの初めて。」

初めて着物を見たアイリスも来てみたいと興味を示した。

カ「それじゃあ、みんなで着物姿になりましょう。」

ハル・ヒ・アイ・コトネ・ベ・マリナ「「「「「賛成〜！」「「「「
「」

エリカ「わたくしも手伝いますわ。」

スズナ「アタシも手伝うわ。ほら、ノゾッチも。」

ノゾミ「はあ、それじゃあアタシも。」

カスミ達は着物姿になるために、エリカ、スズナ、ノゾミはその手伝いのために隣の部屋へと入っていった。と思ったら、ヒカリとマリナが顔を出して、

ヒ「サトシ。」

マリナ「ケンタ。」

ヒ・マリナ「「覗かないですよ。」」

サ・ケンタ「「しないって……。」」

ヒカリとマリナに釘を刺されたことに、サトシとケンタは苦笑を浮かべながら言った。

マリナ「お待たせ了。」

しばらくしてマリナが先に出てきた。他の面々もぞくぞくと大広間へと戻ってくる。

ヒ「ねえ、サトシ。アタシ達、どうかしら。」

マリナ「ケンタも見た感想はどう？」

ヒカリとマリナはサトシとケンタに着物姿になった自分達がどう見えるのか感想を求めた。

サ「どうって……。」

ケンタ「別にどうもしないけど。」

サトシとケンタはそっけない返事を返す。

ヒ「ちょっと、もう少し気の利いた返事はなかったの。」

マリナ「いかにも興味なさげな顔しないでよ。例えば、さすがアイドル・コーディネーター着るもの全て何でも似合ってるねとか。」

ヒ「清楚な感じが素敵だよとか。」

カ「いつもとは違った可愛さがあるよとか言っただけだったわ。」

女性陣達は頬をプリンのようにぷうと膨らませて、サトシとケンタに詰め寄る。

ケンタ「そんなこと言われてもな。サトシ。」

サ「それに、自分で可愛いつて言うか、普通。」

カ「べ、別にいいでしょ。」

サトシとケンタの反応にかなりの不満を漏らす女性陣であった。すると、エリカが突然、

エリカ「そうですね。お2人も、着替えてみてはどうですか。」

エリカはサトシとケンタに着物に着替えてみてはと提案してみた。

サ「そうですね。カスミ達だけがその姿じゃあ、不公平だし。」

ケンタ「俺も着替えてみるかな。」

エリカ「それでは、早速……。」

エリカはサトシとケンタが着替える予定の着物を差し出した。だが、

サ「……あ、あの、エリカさん。」

ケンタ「これ、明らかに女物ですよ。」

エリカが見せた着物を見た瞬間、サトシとケンタは顔を引きつらせた。エリカが差し出した着物とは、男物の着物ではなく、それも今カスミ達が着ているものと比べて少し派手目の花魁だった。

エリカ「そうですね、お気に召されなかったのですか。」

サ「あ、いや、そうじゃなくて……。」

ケンタ「それ以前に、俺たち男ですよ。」

スズナ「それなら、心配ないわよ。サトシ君たちが来る前に、2人に来てもらってるから。」

サ・ケンタ「2人？」

話に割り込んできたスズナの言ったことに首を傾げるサトシとケンタ。他の面々もサトシとケンタ同様に、首を傾げる。ノゾミはそ

の2人を知っているのか、ため息をつく。すると、別の部屋から、サトシ達も知っている2人の少年が女性用の着物、白塗りの化粧とといった女形の格好で現れた。

ハル「う、嘘でしょ!？」

アイ「ま、まさか……。」

その2人を見た瞬間、ハルカとアイリスは思わず口に出して驚いてしまった。

ハル「シ、シュウ!？」

アイ「もしかして、隣はシューティー!？」

シュウ「や、やあ、ハルカ。久しぶりだね。」

シューティー「……………」

スズナが言っていた2人とは今作品何十話ぶりの登場、シュウとシューティーだった。シュウは久しぶりに会うハルカに顔を引きつらせながら挨拶をする。一方のシューティーは、ショックが大きかったのか言葉を失っている。

ハル「ま、まさか、あなた達2人とも……………」

シュウ「断じてそんなことはない。」

シューティー「僕たちは男だ。」

シュウとシューティーはハルカが言おうとしていたことをきつぱり否定した。ただ、今の2人の姿からして、何を言おうがまるで説得力がない。

マリナ「もしかして、『ラルースの貴公子』と呼ばれているシュウ君？」

シュウ「そうですけど。そういうあなたはジヨウトのアイドルトップコーディネーターのマリナさんじゃないですか。」

マリナ「ええ、そうよ。でも、シュウ君はどうしてここに？」

シュウ「ええ、舞妓の踊りはコンテストの参考になると思ってここに来たのですが、途中から変な方向に向かって今に至ります。」

ベ「それでシューティー君はどうしてここに？」

シューティー「僕はエンジユ5姉妹とバトルが出来ると聞いて此処に来たんです。だけど、彼と同じく途中から変な方向になってこんな姿になってしまいました。」

シュウとシューティーはあまり詳しく話したくないのか少々曖昧な答え方をする。簡単に説明すると、シュウとシューティーはそれぞれの目的のためにここ歌舞練場を訪れたわけだが、そこへたまたま来ていたエリカとスズナに捕まり、無理矢理女物の着物を着せられたわけである。

ハル「ふふふ、でもシュウ。結構似合ってるかも。」

アイ「シューティーなんか、頭に刺してる簪可愛いわよ。」

ハルカとアイリスは必死で笑いをこらえながら言う。

シュウ「ハルカ……。褒められてもうれしくないし、笑いながら答えるのやめてくれないか。」

シューティー「こう見えても、結構傷つくんだ。」

シュウとシューティーはさらにため息をついた。すると、

カ「サトシ！」

マリナ「ケンタ！」

カ・マリナ「何処に行くの？」

カスミとマリナは超直感（笑）で女性陣がシュウ、シューティーと会話しているうちに逃走を図ろうとしたサトシとケンタに気づいた。

サ「あゝ、俺たちタケシのところに行こうかと。」

ケンタ「そうそう。」

サトシは逃げるための言い訳としてタケシのところへ行くとカスミ達に言った。ケンタもそれに同調して頷く。

ベ「タケシ君達なら、しばらく戻ってこないって言ってたわよ。」

コトネ「結構、買い込んでおкупって言ってたしね。」

ヒ「大人数での旅ですものね。」

その言葉を聞いて、サトシとケンタは絶望の淵に立たされた気分になった。

サ・ケンタ（こうなったら・・・。）

追い詰められたサトシとケンタは強行突破で歌舞練場から飛び出そうとした。だが、シュウがケンタの肩を、シューティーがサトシの肩をガシツと掴んで、

シュウ「君たちも同じ格好になってもらうよ。」

シューティー「逃さないよ。」

シュウとシューティーのみちづれ（というよりもくろいまなざし）により、サトシとケンタはもう逃げられない（笑）

サ・ケンタ「……………」

サトシとケンタは返す言葉がなくなってしまった。2人は観念して、女物の着物を着る羽目になった。どんな姿になったのかは、読者のご想像にお任せします。

マリナ「きゃー、ケンタ。可愛い！」

ヒ「サトシもすごく似合ってるわよ。」

サ・ケンタ「……………」

サトシとケンタはさらに言葉を失った。

シユウ・シユーター（彼らは本当に男なのか・・・。）

着物姿があまりにも似合ってるので、シユウとシユーターはサトシとケンタが男であることを疑った。それが自分達にも当てはまることも知らずに・・・

ケンタ「・・・俺、もうお婿に行けない（泣）」

マリナ「大丈夫よ。その時は、わたしが貰ってあげるから。」

サトシとケンタにとんだ災難が降りかかった時であった・・・

続いて後書きシヨ―

あの災難再来！？（後書き）

サ「作者、なんで俺たちにあんな恥ずかしい思いをさせた・・・。」

シユウ「そうだ。それに僕たち久々に登場したのにひどい扱いじゃないか。」

シユーティー「それに、酷い文だしね。」

天「悪かったな、シユーティー。なんか変わったギャグ話ないかなって思ったらこんなのが出来上がった。シユウ、シユーティーに関しては、今作品では元々良い扱いは設定してないからな。それよりもどうだ。シユウ、シユーティー、シャバの空気は。」

シユーティー「シャバの空気って（汗）、僕たちは出所直後の囚人か・・・。」

シユウ「いいわけないだろ。あんな格好させられて。」

天「とりあえず、シユウ、シユーティーファンには謝っておきます。それよりも、この間のアニメではシユーティーの幼少の姿が見れたな。シユーティー、焦り過ぎは禁物だぞ。」

シユーティー「どういう意味だ。僕は至って普通だ。」

天「だってそうだろ。アデクとバトルしたいがために強くなるうとするのは分かる。だが、あれはどう見たって強くなるうとして焦ってるようにしか見えないぞ。」

シューティー「君はもう一度ベストウィツシュの基本を学び直した方が．．．。」

天「また、出番なくしたいの（黒）」

シューティー「すみませんでした．．．（汗）」

サ・シュウ（作者、怖っ!?!）

天「さて、シューティーの肅清も済ませたところで、こんなクソ駄文で宜しければ感想お願いします。」

ライバルの来訪（前書き）

いつもどおり、壊滅的な文章の駄文です。

今回、前回のベストウィッシュで判明したアイリスのアレが出ます。

それにしても、サブタイが異常なまでに思いつかない（汗）

ライバルの来訪

前回、ノゾミを除く女性陣達とシュウ、シューティーによって、女物の着物を着せられたサトシとケンタ。

サ「……………」

ケンタ「……………」

魂が抜けたように元気がなくなっていた。DPでサトシが楽しそうにメイド服姿になっていたこともあった気がしたが、そこはスルーの方向で。

ノゾミ「…ホントにごめんね、2人とも。先輩達を止められなくて。」

ノゾミはサトシとケンタに申し訳なさそうに答える。

サ「もういいよ。起きたことは仕方ないし。」

と言いつつ、ため息をつくサトシ。

シュウ「僕からも謝るよ。少し、悪ノリが過ぎたようだ。」

ノゾミに続いてシュウも申し訳なさそうに謝る。だが、

…

ケンタ「シューティーだったけ。お前何やってんだ？」

シューティー「旅の記念に撮っておこうと思って。」

シューティーは自前のデジカメでみんなの着物姿を撮る。

ノゾミ「旅の記念って……（汗）。アンタ、少しは空気読みなさいよ。」

シューティーがデジカメで写真を撮るのを見て、呆れながらツッコむノゾミ。

シューティー「それにしても、サトシ。その姿、似合いすぎだろ。君は本当に男なのか。」

シューティーの追い討ちともいえる発言に、

サ「今の言葉、そっくりそのまま返してやるよ。」

サトシも負けじと抵抗。するとそこへ、

アイ「そんなことで喧嘩するなんて2人とも子供ね。」

アイリスが会話の中に割り込んできた。

サ「誰のせいでこうなったと思ってるんだ（怒）」

サトシは怒り交じりにアイリスに言う。

アイ「まあ、いいじゃない。サトシのは前にも見たけど、シューテ
イーもなかなか似合ってるわね。生まれてくる性別間違えたんじゃ
ないの？」

カチン！

今のアイリスの発言に、シューティーのなかで何かが切れた。B
Wでもサトシの言葉は無視するくせに、なぜか、アイリスの言葉に
は異様に反応する描写が多々見られる。

シューティー「バイバナラ．．。」

シューティーはボールを手に取り、バニプッチの最終進化形態・
バイバナラを出そうとした瞬間、

アイ「ち、ちょっと止めてよ。い、今のは冗談だってば！」

キバゴ「キバ？」

バニプッチと聞いた瞬間、アイリスは急に拳動不審になる。

シューティー「使う言葉には気を付けて欲しいものだ。基本だろ。」

シューティーはそうアイリスに言いながら、ボールをしまう。

ケンタ「アイリスの奴、急にどうしたんだ？」

ケンタは急に挙動不審になったアイリスを不思議そうに見つめる。

サ「ああ、アイリスは氷タイプのポケモンを見ると寒気がするくらい苦手なんだ。」

サトシはアイリスの挙動不審の理由を説明する。

シュウ「確か、バイバニラは氷タイプ。そういうことか。」

サトシの言うとおり、アイリスは氷タイプのポケモンを見ると寒気がするほど苦手である。竜の里でドラゴンタイプのポケモンと過ごしたせいなのか、ドラゴンタイプが苦手とする氷タイプのポケモンにかなり苦手意識を持っている。ちなみに、アイリスのオババ様も寒いのは苦手である。

サ「でもさ、シューティー。今は少しやり過ぎじゃないか。」

サトシはシューティーの今の行動に苦言を呈する。

シューティー「あれくらいやらないと、僕の気が済まないからね。」

サ「そうか……。」

シューティーのSっぷりが垣間見れた瞬間だった。

ケンタ「……ん？　なんだ、バクフーン。」

サ「ピカチュウもどうしたんだ。」

バクフーン「……………」

ピ「……………」

前回から外に連れ歩いているケンタのバクフーンと、その頭に乗っているサトシのピカチュウがじーっとケンタ、サトシを見つめる。

バクフーン「…バク！」

ピ「…ピカ！」

バクフーンとピカチュウはニヤツとしながら、必死で笑いをこらえる。

ケンタ「バクフーン……………」

ピ「ピカチュウ……………」

ケンタ・サ「お前たちまでからかうな」（怒）「」

これにはその場にいた全員が苦笑を浮かべた。そんなこんなでしばらくして、

？「たのも〜。」

とある2人のトレーナーが歌舞練場の玄関の戸を開けた。

ヒ「誰か着たみたいね。」

サクラ「ちょっと、わたし行ってくるわ。」

サクラが来訪者を迎え入れるために玄関へと向かう。そして、

ヒ「サクラ、一体誰だったの……って、ジュン!？」

ジュン「誰かと思ったら、ヒカリじゃねえか。久しぶりだな。」

歌舞練場を訪れたトレーナーの一人は、ヒカリと同じフタバタウン出身のジュンだった。

サクラ「知ってる人？」

ヒ「うん。アタシと同じ、フタバタウン出身のトレーナーでサトシのライバルなの。」

サクラ「へえ、そうなんだ。」

すると、サクラはヒカリの耳元で、

サクラ「(ボソツ)もしかして、ヒカリの彼？」

するとヒカりは、

ヒ「違う違う。」

即否定した。ちなみにサクラは、カスミに対しても一緒にいたケンジを絡めて同じようなことを聞いたことがある。

ヒ「ところで、ジュン。隣の人は誰？」

ヒカリはジュンの隣にいる人物が気になったので、ジュンに聞いてみた。

ジュン「ああ、こいつはジュンイチって言うんだ。ワカバタウン出身のトレーナーで、いかりのみずうみで出会ったんだ。そこでバトルしたんだけど、こいつすげえ強ええんだぜ。」

ヒ「そのバトルはどうだったの？」

ジュン「3対3のバトルにしたんだけど、結局引き分けだった。くうく、ホントにあの時は悔しかったぜ。でも、今度は負けないぜ。」

ジュンイチ「それはこっちのセリフだぜ。あつ、俺はジュンイチ。さっき、ジュンが言ったんだけどワカバタウンのトレーナーさ。」

ジュンイチはヒカリに自己紹介をした。

ヒ「こちらこそ、はじめまして。」

ヒカリはジュンイチに対して、お辞儀をする。

ヒ「ところで、ジュン。どうしてここに来たの。」

ジュン「ああ、実はジュンイチから聞いたんだけど、ここでエンジユジムのバッジを持っていれば舞妓とポケモンバトルができるって聞いたんだ。だから、この街のジムに挑戦してバッジをゲットしてこっちに来たって訳だ。ところで、サトシは何処だ？」

ジュンはサトシがないことに気が付く。

ヒ「サトシは今、別の場所にいるわ。そこでバトルの特訓でもしてるんじゃないかしら。」

ジュン「そっか、あいつも今度の大会に出るんだな。俺もこうしちやいらねえぜ。」

ヒ「アハハハハ・・・。」

ジュンの雰囲気は背中から炎が見えそうなくらいである。ヒカリは思わず苦笑した。

マリナ「ヒカリ、サクラ。一体、どうしたの？って、ジュンイチ！？」

ヒカリ達が談笑しているところへ、マリナが現れ、そこにいたケントと同じ幼馴染のジュンイチがいることに気づいた。すると、

ジュンイチ「うおおおお、マリナちゃん。一体、どうしたのその着物姿。すごく、すごくキュートで似合ってるよ！それにしばらく会わないうちにすっかり大人びたね！！！」

ジュンイチは興奮気味にマリナに詰め寄る。

マリナ「あ、ありがとう・・・。」

ジュンイチの行動にマリナは引いていた。

ジュン「・・・一体、なんだってんだよ（汗）」

ヒ「さ、さあ．．．。」

訳がわからず、啞然とするジュンとヒカリだった。ちなみに、ジュンイチはケンタ以上に幼馴染のマリナに好意を抱いている。ケンタとは違って、彼女に対するアプローチは積極的であり、その程度はタケシのナンパ行為と酷似もしくはそれ以上である。いつか、マリナを自分の彼女にすると知っているが、ケンマリ派の作者なので、無駄な努力である（笑）　　b y . ジュンイチ

サ「ヒカリ。誰か来ているのか？」

ケンタ「今、声がしたんだけど。」

別の部屋でバトルの特訓をしていたサトシとケンタが、ジュンイチの声を聞きつけてやって来た。

ジュン「．．．もしかして、サトシなのか？」

サ「お、お前は、ジュン!？」

ジュンイチ「隣は、ケンタ!？」

ケンタ「ゲツ!？ ジュンイチ．．．。」

ジュン、ジュンイチと鉢合わせになったサトシ、ケンタの運命は！？

続く．．．

ライバルの来訪（後書き）

次回、お互いに再会した4人の運命は！？

タッグバトル in エンジュシティ（前書き）

最悪なタイミングで再会を果たした、サトシとケンタ、ジュンとジュンイチ。一体、どうなるのか！？

サブタイ通り、タッグバトルを入れます。ですが、ギャグ要素も多めに入れ込んだり、しばらく離れていたサトヒカ要素を無理矢理入れ込んだりと、かなり意味不明な文が出来上がってしまいました（汗）

タッグバトル in エンジュシティ

前回の終わりで、サトシのライバル・ジュン、ケンタの幼馴染兼ライバル・ジュンイチと鉢合わせになったサトシとケンタ。さて、今回は……

サ「……………」

ケンタ「……………」

ジュン「……………」

ジュンイチ「……………」

4人の間には沈黙が流れる。それもそうだろう。ジュン、ジュンイチに至っては、自分のライバルがあり得ない格好で現れたのだから、

ジュン・ジュンイチ「……ぷっ!？」

すると、ジュンとジュンイチは沈黙の後、

ジュン「プハハハハ、なんだよサトシ。その格好、傑作じゃねえか! 面白すぎて、罰金だ!……!」

ジュンイチ「ケンタもなんだよ! しばらく会わないと思ったら、こんな格好で……プッ!? マズイ……。腹筋が壊れる……」

「

サ・ケンタ「笑うな（怒）」

突然大爆笑をしたジュン、ジュンイチに対して、怒りを露わにするサトシとケンタ。

ジュン・ジュンイチ「お前らまさかそんな趣味が……。」

サ・ケンタ「んなわけないだろ！」

サトシとケンタは声を八もらせて、否定した。ちなみに、ヒカリとマリナは必死で笑いをこらえながら様子をつかっている。しばらくして、他の面々もそろそろ集まってきた。するとジュンが、

ジュン「なあ、サトシ。久々に再会したことだしバトルでもしないか？」

ジュンはサトシに久々にバトルをしないかと提案する。

サ「バトル！？ やるやる。」

バトル好きのサトシは、即答でジュンの申し入れを受ける。

アイ「サトシったら、バトルの事となるとすぐにこれなんだから。」

シューティー「まあ、それが彼らしいと言えば彼らしいけど……。（そういえば、イツシュの時も僕に会った瞬間にバトルしようって言ってたよっな……。）」

シューティーはそう言いつつ、イツシュでのサトシの印象を思い出す。

ケンタ「いいなあ、サトシ。俺もバトルしたいな。」

ジュンイチ「俺もだぜ。」

ケンタとジュンイチはサトシとジュンを羨ましそうに見つめる。

サクラ「それだったら、タッグバトルをやってみたらどう?」

ケンタとジュンイチもバトルがしたいと言ったのを聞いて、サクラがタッグバトルをしてはと提案する。

サ「それいいかもな。なあ、ケンタ。俺と組まないか?」

ケンタ「俺とか!? もちろん、やるぜ。俺とサトシが組めば最強だぜ。」

ジュンイチ「それはどうかな。俺のポケモン達もケンタと会わないうちに強くなつたんだぞ。ジュンもだろ?」

ジュン「もちろんだぜ。サトシとシンオウリーグで別れた後、新しいのをゲットしながら、厳しい修行に耐えてきたんだぜ。負けねえよ。」

サトシはケンタと、ジュンはジュンイチとタッグを組んだ。そして、歌舞練場の庭のバトルフィールドで、それぞれのポケモン1体ずつのタッグバトルの火ぶたが切って落とされる。ちなみに、サトシのピカチュウ、ケンタのバクフーンはヒカリ、マリナ達とともに観戦に回っている。どうやら、このバトルではこの2匹は使わないようだ。

サ「ミジュマル、君に決めた！」

ミジュ「ミイイイジユ！」

ケンタ「それじゃあ、俺はコイツで行くぜ。頼むぞ、リーファイア！」

リーファイア「リイイイファイア！」

ミジュマルは元気よく、リーファイアは独特のオーラを醸し出しながら出てきた。

ジュン「それじゃあ、俺はコイツでいくぜ。」

ジュンイチ「それじゃあ、俺はコイツで。」

ジュン、ジュンイチもタッグバトルに使うポケモンを出した。だが、その出したポケモンがまずかった。ジュンはくさ・こおりタイプのユキカブリ、ジュンイチはむし・はがねタイプのミノマダム（ゴミのミノ）を出したのだ。こうとなれば観戦しているある2名が、

カ・アイ「い、いやああああ！」

むしタイプのポケモンが苦手なカスミ、こおりタイプが苦手なアイリスが突如悲鳴を挙げた。

エリカ「あら、お二方ともどうされたのですか？」

エリカはなぜ2人が突如悲鳴を挙げたのか分からず、きよとんとする。

ハル「あゝ、カスミはむしタイプのポケモンが苦手なんです。」

ヒ「アイリスはどうか、分かりませんが。」

ハルカとヒカリはカスミのむしタイプのポケモン嫌いについてエリカに説明するが、アイリスについては先ほどのサトシ達の会話に加わってなかったので分からなかった。

ノゾミ「そのアイリスって子、どうもこおりタイプのポケモンが駄目らしいよ。」

先程、サトシ達の会話に加わっていたノゾミが代わりに言った。

スズナ「それじゃあ、アタシのポケモン達は完全にアウトね・・・。」

ベ「えっ、それってどういうことですか？」

ノゾミ「スズナ先輩はこおりタイプの使い手のジムリーダーなんだ。」

ベ「・・・アイリスちゃんにとっては、最悪な組み合わせね（汗）」

ベルが苦笑を浮かべつつ、スズナは今後アイリスと仲良くやっていけるか心配になった。一応スズナは、こおりタイプではないチャーム、オニドリルを持っているが今回は連れてきていないようだ。バトルフィールドでは、

ジュン「一体、なんだってんだよ・・・。」

ジュンイチ「どうしたんだろう．．．。」

ユキカブリ「．．．．．。」

ミノマダム「．．．．．。」

ジュンとジュンイチは訳が分からず、そしてユキカブリとミノマダムも自分たちが出てきたことで悲鳴を挙げられたことにどうしたらいいのか分からず、啞然としていた。すると、

カ「ちょっと、よりによってなんでそのポケモンなのよ!」

アイ「別のポケモンにしてよ!」

ジュン・ジュンイチ「ハア!? 無茶言うなよ!」

カスミとアイリスはジュンとジュンイチにポケモンを変えろと言い出した。ジュンとジュンイチにとっては、迷惑な話である。

サ・ケンタ（いつになったら、始められるんだ．．．。）

サトシとケンタはため息をつきながらそう思った。結局、カスミとアイリスは目隠しをしながらの観戦（目隠ししている時点で観戦できないと思うが．．．）することになり、ジュンとジュンイチは何とかポケモンの入れ替えを免れた。そして、ようやくバトルが開始された。ちなみに審判は、サクラが務めている。

ジュンイチ「それじゃあ、俺たちからいくぜ。ミノマダム、リーフ
エアにむしくい。」

ミノマダム「ミノー。」

ミノマダムはリーファイアにむしくいで攻撃をしようとする。当たれば、草タイプのリーファイアにとって効果抜群の技である。

ケンタ「リーファイア、リーフストームでミノマダムを吹き飛ばせ。」

リーファイア「リーファイア。」

ケンタはリーフストームを利用して近づいてきたミノマダムを吹き飛ばした。

ジュン「おっしゃあー！ チャンスだ、ユキカブリ。こおりのついで。」

ユキカブリ「ユキー！」

ジュンはリーフストームの使用で隙ができたリーファイアにこおりのついでで攻撃を試みる。これも当たればリーファイアにとっては効果抜群の技である。

サ「ミジュマル。ユキカブリにシエルブレード。」

ミジュ「ミジュー！」

ミジュマルはリーファイアを援護するためシエルブレードでユキカブリを攻撃する。

ユキカブリ「ユキィ！」

ミジユマルのシェルブレードがユキカブリに当たる。だが、草タイプを持つユキカブリにとっては効果はいまひとつであった。

ケンタ「サンキューな、サトシ。」

サ「ああ。」

タッグバトルでは相手のポケモンとのコンビネーションをうまく利用すれば、避けて相手の攻撃を防ぐことが出来る。そういった面では直球一本槍なバトルスタイルのケンタにとっては好都合である。

ジュン「なかなかやるな。サトシ、ケンタ。」

サ「ジュン達もなかなかやるな。」

ケンタ「なんだか、燃えてきたぜ。」

ジュンイチ「こっちもだよ、ケンタ。」

4人の闘志にさらに火をつけたようだ。

ミジユ「ミジユ・・・。」

リーファイア「リィ・・・。」

ミノマダム「ミノ・・・。」

ユキカブリのとくせい『ゆきふらし』でバトルフィールドがあら

れ状態になっているため、ユキカブリ以外のポケモン達がダメージを受ける。

ジュン「悪いな、ジュンイチ。お前のミノマダムまでダメージ受けちまって。」

ジュンイチ「気にするなって。すぐに決着つけなければいいんだから。」

ジュン「それもそうだな。」

ジュンとジュンイチは気持ちを切り替えて次に進む。一方、観戦サイドでは、

エリカ「あのリーフィア、よく育てられてますわ。わたくしのポケモンにしたいくらいに。それに攻撃ははずれてしまいましたか、あのユキカブリもなかなかですわ。」

草タイプの使い手・エリカはケンタのリーフィアとジュンのユキカブリに興味を持ったようだ。

スズナ「サトシ君とケンタ君はあられ状態の中、どう戦っていくのか楽しみね。」

スズナは自分の得意先方の一つであるあられをサトシとケンタがどう乗り越えていくか見物だといった。一方、カスミとアイリスは、

カスミ「ムシハムシハムシハムシハムシハムシハムシハ．．。」

アイリス「サムイサムイサムイサムイ．．アタシナンダカネムクナツテキチャッタ。」

ハル「ちよつと2人ともしつかりして！」

ヒ「アイリス寝ちゃ駄目！」

目隠しの甲斐なく、意識が明後日の方向に向かっているカスミとアイリス。それを必死で看病（？）するハルカとヒカリ。

コトネ「カスミンとアイリン．．．大丈夫かしら（汗）」

ベ「だと思っわよ。多分．．．（汗）」

コトネとベルは顔を引きつらせながら苦笑した。さらには、

シュウ「．．．シューティアー、君は一体何をしてるんだい？」

シューティアー「彼らのバトルを形あるものに残して参考にしようと思って。」

シュウ「そっか．．．。」

シューティアーは自前のデジカメでタッグバトルの様子を撮っていた。シューティアーのこの行動はサトシのミジユマルのアクアジェットがコントロールできなかった原因を解明したというサトシにとっては皮肉にも役に立つことがある。

サ「ミジユマル、ミノマダムにアクアジェット。」

ミジユ「ミィィィジュー！」

次に先手をとったのが、サトシのミジュマルである。ここは無難にあられのダメージを受けているミノマダムに攻撃する。

ジュン「よっしゃあ、チャンスだ！ ユキカブリ、ミジュマルにぶき。」

ユキカブリのぶきがアクアジェットでミノマダムに突進するミジュマルに襲い掛かる。あられの効果で必中になったぶきはミジュマルにクリーンヒットした。

サ「ミジュマル！」

ミジュマルは徐々に氷漬けになり、身動きが取れなくなってしまった。

ケンタ「リーフィア、リーフブレードでミジュマルの氷を砕くんだけ。」

リーフィア「リィィイフ。」

リーフィアがミジュマルの氷をリーフブレードで砕く。砕けた氷からミジュマルが、

ミジュ「ミジュー!?!」

寒そうにしながら出てきた。これによりミジュマルはかなりのダメージを受けてしまった。

ケンタ「今度は俺だ。リーフィア、ミノマダムにつばめがえし。」

リーファイア「リイイイフ！」

リーファイアのつばめがえしがミノマダムに襲い掛かる。つばめがえしは必中攻撃のため、ミノマダムは避けることができない。

ジュンイチ「ミノマダム、こらえる。」

ミノマダム「ミノオオオ。」

ミノマダムはこらえるでつばめがえしを凌いだ。

ジュンイチ「そこから、じたばた。」

ミノマダム「ミノミノミノオオオ！」

ミノマダムのじたばた。こらえるによってギリギリまで凌いだつばめがえしのダメージによって威力がその威力を増大させる。

リーファイア「リイイイ。」

それにより、リーファイアも大ダメージを喰らってしまう。だが、先ほどのつばめがえしのダメージとあられによるダメージの蓄積によって、ミノマダムは倒れてしまった。

サクラ「ミノマダム、戦闘不能。」

サクラがミノマダムの戦闘不能をコールした。

ジュンイチ「ケンタ、忘れたのか。俺がコンボ技を得意としてることを。」

ケンタ「そういえばそうだった。でも、お前のミノマダムは倒れてしまったぜ。それにこっちはまだ2体残ってるんだ。」

ジュン「それはどうかな。こっちにはまだ無傷のユキカブリがいるんだ。」

ジュンの言うとおり、ケンタのリーフィアとサトシのミジュマルはかなりのダメージを受けている。一方、ジュンのユキカブリは最初のミジュマルのシエルブレードのダメージを受けている以外はほとんど無傷である。さらにいえば、氷タイプなので、あられによる追加ダメージを受けない。数的にはケンタとサトシが有利だが、ダメージの面で考えればジュンの方が有利である。

ケンタ（くっ、どうすれば……。はっ、そうだ！）

ケンタは何か閃いたようだ。そしてサトシに向かって、

ケンタ「なあ、サトシ。ミジュマルでもう一度アクアジェットしてくれないか。」

サ「えっ？ それじゃあ、またふぶきで……。」

サトシの言うとおり、ミジュマルのアクアジェットはあられで必中になったユキカブリのふぶきの餌食になる。だがケンタは、

ケンタ「ユキカブリに勝つにはこれしかないんだ。頼む。」

ケンタは真剣にサトシに懇願した。

サ「分かった。俺はケンタを信じる。ミジュマル、ユキカブリにアクアジェット。」

ミジュ「ミイイイジューー！」

ケンタの懇願通り、サトシはミジュマルにアクアジェットの指示をした。

ジュン「へっ。その手はもう通じないってんだ。ユキカブリ、ふぶき。」

ユキカブリ「ユウウウキイイ！」

先程と同じようにユキカブリのふぶきでミジュマルを氷漬けにしようとする。だが、

ケンタ「リーファイア、ミジュマルのアクアジェットに向かってリーフストーム。」

サ「えっ!?!」

ケンタはなんと、アクアジェットでユキカブリに突進しているミジュマルに向けてリーファイアのリーフストームを放ったのだ。すると、ユキカブリのふぶきがリーフストームによって吹き飛ばされていき、さらにはアクアジェットのスピードがさらに増したようにも見える。

ジュン「あれ、なんだってんだよ!?!」

ジュンも驚愕するほど、凄い光景だった。

サ「ケンタ。これって……。」

ケンタ「俺がとっさに思いついた、アクアジェットとリーフストームによるコラボ技だ。名付けて、『アクアストーム』だ。」

サ「うわあ、凄いな。それじゃあ、止めといくか。」

ケンタ「ああ、いくぜ。」

サ・ケンタ「いけえええ！ アクアストーム！」

ミジユ「ミイイイジューー！」

ミジユマルのアクアストームがユキカブリに向かってくる。あまりのスピードにユキカブリはよけきれず直撃してしまう。

ユキカブリ「ユキイイイ！」

ユキカブリはバトルフィールドの端まで吹き飛ばされた。

ジユン「ユキカブリ！」

ユキカブリ「ユキイ……………」

ミジユ「ミジユ……………」

ユキカブリは目を回して倒れていた。ミジユマルもアクアストームの威力を制御できずに目を回して倒れていた。

サクラ「ユキカブリ、ミジュマル戦闘不能。これにより、ジュン・ジュンイチサイドのポケモンが全て戦闘不能になったため、この勝負、サトシ・ケンタサイドの勝利。」

サ・ケンタ「やったあああ！」

サトシとケンタは勝利の喜びから高く飛び上がる。

ジュン「ユキカブリ、よくやったぜ。」

ジュンはユキカブリをボールに戻す。そして、ジュンイチとともにサトシとケンタに近づく。

ジュン「お前ら、すげえな。あんな凄い技思いつくなんて。」

サ「あれはケンタが思いついた技なんだ。あれがなかったら、俺たちは負けてた。」

ジュンイチ「それにしても、凄いな。それになかなかのコンビネーションだったし。」

ケンタ「サンキュー、ジュンイチ。お前とジュンもなかなかのコンビネーションだったぜ。あとサトシ、ごめん。ミジュマルまで戦闘不能になってしまった。」

サ「別にいいさ。あれがあったから、俺たちは勝てたんだから。」

謝るケンタにサトシは気にしてないと言う。その一言にケンタは救われた気分になった。

サ「よくやったな、ミジユマル。ゆっくり休んでくれ。」

ミジユ「ミジユ……。」

サトシはミジユマルを労うと、ボールに戻した。一方観戦サイドでは、

カ「あのミジユマル、可愛いだけでなく。強いだなんて。アタシもミジユマルが欲しくなったわ!」

アイ「それにサトシとケンタ。物凄く意気ピッタリだったし。」

ヒ「復活早っ!?!」

さつきまで失神寸前だったカスミとアイリスが突然飛び起きてきた。ヒカリはその2人に驚愕し、他の面々は苦笑を浮かべた。こうして、サトシ・ケンタVSジュン・ジュンイチのタッグバトルはサトシ・ケンタの勝利に終わった。その後、シュウ、シューティー、ジュン、ジュンイチの4人は先を急ぐと言って歌舞練場を後にし、ノゾミ、スズナ、エリカの3人はもう少しエンジュの街並みを観光すると言って、サトシ達と別れた。

もちろん、サトシ、ケンタ、シュウ、シューティーは普段の服装に戻ってます。

宿泊先に戻る直前……

サ「今日もいろいろあったな……って、あれはヒカリ?」

サトシは庭の縁側に腰を下ろしているヒカリを見つけた。

サ「ヒカリ。まだ着替えないのか。」

ヒ「うん、この着物気に入っちゃって。もう少し来てみようと思ったの。」

サ「そっか。でもそろそろ戻るから早めに着替えてくれよ。」

ヒ「わかったわ。」

ヒカリはそう言うと、そよ風をにわかを感じながら庭を眺めていた。さらに夕日の照らす光がより一層着物姿のヒカリを綺麗に引き立てる。

サ「……………」

サトシはヒカリをじっと見つめている。

ヒ「ん？ どうしたの、サトシ。」

ヒカリは自分に向けられるサトシの視線が気になったのか声をかけてみた。

サ「あつ、いや何でもない。」

サトシは急に視線をそらしながら言った。

ヒ「もしかして、着物姿のアタシに見とれてたとか？」

サ「／／お、俺、先に帰ってるから。」

サトシは急に顔を赤くしながら、ヒカリの元を離れた。

ヒ（もしかして、サトシってアタシのこと．．．。あのサトシがそんなわけないか。）

ヒカリは一瞬サトシが自分の気持ちに気づいたのかと思ったが、恋愛に疎いサトシのことと、サトシほどではないがヒカリ自体も鈍感なのでその考えはすぐに一蹴された。そして、しばらくして、ヒカリも普段着に着替えてサトシ達と宿泊先の施設に戻ることにした。その宿泊先にて、

サ「俺、なんかわすれてるような．．．。」

ケンタ「サトシ、お前もか？ 実は俺もなんだ。」

サトシとケンタはバトルに夢中になるあまり、なにか忘れていたような気分になる。そして数秒間の沈黙の後、

サ・ケンタ「あああああ！」「」

マリナ「一体、どうしたのよ。」

サトシとケンタは思い出したのか突然大声を出した。女性陣達は、突然の大声にびっくりした。

サ「タケシ達の荷物運び手伝って言ったのすっかり忘れてた。」

一方、タケシ達は・・・

タ「遅い！ 遅すぎるぞおおお！」

デ「ハハハハ、イツツ・待ちぼうけ・タアアアイム・・・。」

マサ・リュウカ・カズナリ（（この2人大丈夫なのだろうか・・・））

その後、慌ててタケシ達に向かったサトシとケンタが、タケシとデントの説教を喰らったのは言うまでもない・・・

続いて後書きシヨ

タッグバトル in エンジュシティ（後書き）

ヒ「今回は無駄に長いうえに、随分と意味不明なのが出来上がったわね。」

天「うう、それは言うなよ。無理矢理だけどサトヒカ要素入れたんだから許してくれよ。」

ヒ「まあ、今回はサトヒカ要素に免じてこのくらいにしておいてあげる。ところで今後は一体どうなるの？」

天「次の1話で小話を挟んで、舞台をアサギシティに移すつもりだ。そこでロケット団の活発な動きがサトシ達を巻き込んだりと、重要な場面を作ろうと構想を練ってるから。」

ヒ「ロケット団か……。あの連中は勘弁してほしいわ。」

天「まあ、そう言うなって。それにしばらく離れていたサトヒカも増やしていると思うてるからさあ。」

ヒ「じゃあ、楽しみにしてるわ。それでは最後になりましたが、次回もポケモンゲットで大丈夫！」

メロメロパニック!? (前書き)

今回は小ネタとして、エモンガのメロメロが引き起こしたちょっとした騒動の話です。

ポケモンに対する表現が雑な箇所がありますが、暖かい目でご覧いただけるとありがたいです。

メロメロパニック!?

翌朝、エリカからポケモンコンテストがタンバシティで開かれると知り、すぐにエンジュシティを後にして、次の目的地を途中の通過点であるアサギシティに決め、サトシ達は進むのだった。

ベ「チャオブー、ニトロチャージ。」

チャオブー「チャオチャオ！」

ケンタ「負けるな、バクフーン。かえんぐるまだ。」

バクフーン「バクフウウン！」

今は足を止めて、ベルとケンタがバトルをしている。バトルのきっかけはベルがケンタとバトルしたいと急に言い出したため（さらにポケモンはバクフーンを指名）、ケンタは半ば強引にバトルすることになった。さらに丁度昼食時だったので、一緒に昼食もとることにした。ベルとケンタのバトルのさなか、タケシとデントがほかの面々の手伝いも借りながら、昼食の準備をしている。

ケンタ「バクフーン、とどめのころがるだ。」

バクフーン「バアアアクフウウン！」

バクフーンのころがるがチャオブーに炸裂。いわタイプのころがるはほのおタイプのチャオブーにとっては効果抜群の技だ。

チャオブー「チアアアオ！」

チャオブーはころがるによって突き飛ばされ、目を回して倒れた。

ベ「チャオブー、よくやったわ。ゆっくり休んでて。」

ベルはチャオブーをボールに戻す。

ベ「やっぱり強いわ。ケンタ君。」

ケンタ「いやあ、強いのは俺じゃなくてバクフーンのほうだよ。」

サ「俺のピカチュウでも苦戦するほどだからな。」

ベルとケンタのバトルを見ていたサトシが、ケンタのバクフーンを評価する。

ベ「ねえ、サトシ君。お昼を食べ終わったら次バトルしてくれない。」

サ「おお、もちろんいいぜ。」

ベ「本当！？ やったあああ！」

ケンタ「今度は俺が見る番だな。」

そんなこんなで昼食が出来上がったので、全員昼食タイムとなった。

ベ「デント君の料理も美味しいけど、タケシ君の料理もなかなかだわ。」

タ「喜んでもらえたら、こっちも作った甲斐があるってものだ。」

ハル「でも、サトシは旅先でタケシやデントそれぞれの料理を食べたのね。なんか羨ましいかも。」

カ「本当ね。だって、こんなに美味しいものが毎日食べられるなんて、アంతって本当に幸せ者ね。」

サ「ハハハ、でも今こうして食べられるんだからいいじゃないか。」

デ「そうだよ。こうして大勢で囲いながら摂る食事。僕達がつた料理のテイストに楽しさのスパイスを加えた絶妙なハーモニー。ん、最高だ。」

ハルカとカスミから皮肉混じりのコメントに苦笑するサトシを、いつものテイステイングタイムに入りながらフォローするデント。サトシ達の食事場所から少し離れると、ポケモン達も同じく食事を摂っていた。そんな中、

エモンガ「エモ……………」

アイリスのエモンガがまだ食べ足りないのか、口惜しそうな顔になる。

ポ「ポチャポチャ。」

ミジユ「ミジユミジユ。」

エモンガの視線の先には、ポッチャマとミジユマルがタケシ特製

のポケモンフーズを美味しそうに食べている光景が目に入った。

エモンガ「エモ。エモモモモ。」

何か閃いたのか、エモンガは不敵な笑みを浮かべ、ポツチャマとミジユマルに近づいた。そして、

エモンガ「エモ〜。」

ポツチャマとミジユマルの目の前で、ゆっくりと倒れた。ベストウィッシュを見ている方ならご存じだと思うが、これはイタズラ好きのエモンガの演技である。

ポ「ポチャー!?!」

ミジユ「ミジユ!?!」

突然倒れたエモンガを心配してポツチャマとミジユマルが近づいた。

エモンガ「エモ。。。エモ。」

エモンガは2体に気づかれないようにニヤリと笑い、2体めがけてウイंकをした。そう、これはエモンガの『メロメロ』である。性別の違う相手のみメロメロ状態にして、時々相手の技を出させなくするという技である。エモンガはメス、ポツチャマとミジユマルはオスなので、メロメロは効く。

ポ「ポチャー!?!?!」

「ミジユ「ミジユー！！！」」

案の定、ポツチャマとミジユマルはメロメロ状態になり、目をハートマークに変える。

「エモンガ「エモ．．．、エモエモ。」

「ポ「ポチャ、ポチャポ。」

「ミジユ「ミジユミジユ。」

エモンガがポケモンフーズが欲しいと懇願すると、ポツチャマとミジユマルはどうぞどうぞと言わんばかりに自分のポケモンフーズをエモンガに差し出す。

「エモンガ「エモ．．．。エモー！」

エモンガは目にもとまらぬスピードでポツチャマとミジユマルのポケモンフーズを平らげた。そして、食べ終わった後、エモンガはすぐにその場を離れた。

「ポ「ポチャ．．．。」

「ミジユ「ミジユ．．．。」

未だ、メロメロ状態から覚めずに空の皿を持ってボーと立っているだけのペンギンとラッコ。数秒の沈黙の後、

「ポ「ポチャ．．．、ポチャ！？！」

ミジユ「ミジ．．．、ミジユマ!?」

ようやくメロメロ状態から覚めた2体は自分の持っているポケモンフーズが入ってたはずの皿が空になっていることに気づいた。そして、

「ここからは、ポッチャマとミジユマルの会話を通訳してお送りします。」

ポ「おい、ミジユマル。僕のポケモンフーズ食べただろ!」

ミジユ「それはこっちのセリフだ! ポッチャマだって、僕のポケモンフーズ食べただろ!」

自分のポケモンフーズを相手が食べたと、喧嘩を始めるペンギンとラッコ。

ポ「何だと! 僕は知らないぞ!」

ミジユ「僕だって知らないぞ!」

どうやら、この2体はエモンガのメロメロにかかっていたとは分かっていないようだ。

ポ「大体お前新入りのくせして、生意気だぞ!」

ミジユ「そんなの関係ないだろ! やるか!」

ポ「そっちがその気なら、こっちだって負けないぞ! 今度こそ、お前のその腐った根性をたたき直してやる!」

とうとう、取っ組み合いになってしまった。それにしても、ポッチャマはどこでその言葉を覚えたのやら……

以上、ポッチャマとミジユマルの通訳終了。

サ「おいおい、どうしたんだ。ミジユマル。」

ヒ「一体、何があったのよ。ポッチャマ。」

2体の取っ組み合いを慌てて止めに入るサトシとヒカリ。2人はポッチャマとミジユマルを素早く引きはがした。

ポ「ポチャ！ ポチャポチャ！」

ミジユ「ミジユミジユ！」

サ「おい、やめろって。ミジユマル。」

ヒ「おとなしくしてて。ポッチャマ。」

サトシとヒカリの腕の中で尚も暴れ続けるポッチャマとミジユマル。このままではいつまた取っ組み合いを始めるか分からない。そんな中、ポッチャマとミジユマルの喧嘩の原因の一部始終を見ていたポケモン達がいた。

再び、ここからポケモン達の会話を通訳付きで。

ツタ「はあ、またあの子ね。」

エンジュシテイで行ったサトシの手持ちの入れ替えと一緒に同行することになったツタージャがため息をつく。

ベイ「あれが、アンタの言ってたエモンガ？」

同じくサトシの手持ちの入れ替えと一緒に同行することになったベイリーフがツタージャに問いかける。

ツタ「そうよ。あの子、食いしん坊でいつもウチのバカなオスポケモンから、メロメロでポケモンフーズを横取りしてるのよ。」

ベイ「でも、メロメロならツタージャだって使えるでしょ？」

ツタ「アタシはそんな無駄な事には使わないわよ。」

ベイ「そう。」

いつもはサトシを巡って争う2体だが、なんだかんだ言って、結構仲良くなっているようだ。

ミミロル「あのエモンガ、メロメロが使えるのね。はっ、このままではピカチュウがあの魔性の女に……。」

エモンガにピカチュウがとられるのではと不安になる恋するウサギ。それにしても、一体、どこで『魔性の女』という単語を覚えたのだろうか。

以上、ポケモン達の会話の通訳終了。

サ「落ち着けて、ミジユマル。」

ヒ「おとなしくしてて、ポッチャマ。」

ピ「ピカピカ。」

とうとう、ピカチュウまでもが間に割って入って2体の喧嘩を止める始末。

ポ「ポオオオチャ！」

ミジユ「ミイイイジユ！」

ピ「ピカピカ……。」

ポッチャマはバブルこうせん、ミジユマルはみずてっぼうを放った。それが2体のちょうど真ん中にいたピカチュウに当たる。

ピ「ピカ……。ピイイイカチュウウウ！」

サ「ギヤアアアアア！」

ヒ「キャアアアアア！」

怒ったピカチュウが電撃を放ち、ポッチャマとミジユマルのみならず、サトシとヒカリまでも巻き込んだ。

ヒ「イヤアアア！ もう、なんなのよ。」

ヒカリは自分の爆発した髪形を見て悲鳴を挙げ、不満を漏らす。

タ「どうしたんだ、2人とも。」

アイ「なんか、すごい悲鳴が聞こえたんだけど。」

サトシとヒカリの悲鳴を聞いて駆け付けたほかの面々とポケモン達が続々とやって来た。

サ「実はポツチャマとミジユマルが急に喧嘩したんだ。」

マサ「えっ、なんで？」

ヒ「それがアタシ達にもよく分かんないのよ。」

すると、ポツチャマとミジユマルが自分たちの空の皿を持ってきて、必死に何かをアピールした。

コトネ「えっ、お皿？」

コトネは首を傾げる。すると今度は、デントが、

デ「もしかして、ポツチャマとミジユマルは自分たちのポケモンフーズを誰かが食べたんじゃないかって言ってるんじゃないかな？」

ポ「ポチャポチャ。」

ミジユ「ミジユミジユ。」

デントの推測に、ポツチャマとミジユマルはうんうんと首を縦に振る。

べ「自分で食べたんじゃないの？」

ポ「ポチャー、ポチャー！」

ミジユ「ミジユミジユ！」

ベルの一言に、ポツチャマとミジユマルは語尾を強めて否定する。

カズナリ「じゃあ、いったい誰が……。」

犯人が誰なのか悩んでいたサトシ達の元へ、見るに見かねたツタージャがやって来た。

サ「ん？ どうしたんだ、ツタージャ？」

ツタ「タージャ。」

ツタージャは自分のつるで、遠くに隠れていたエモンガをサトシ達のところへ差し出した。差し出されたエモンガは不機嫌な顔をする。

アイ「うわあ、いったいどうしたのその体。」

今のエモンガは2体分のポケモンフーズを食べたせいか、まんまに太っている体型である。あたかも、自分がやりましたといわんばかりの決定的な証拠である。

アイ「はあ、エモンガまたあなたなのね。」

エモンガ「エモ。」

アイリスはため息をつきながら、呆れた表情を浮かべる。エモンガはケロツとした顔でアイリスに笑顔を見せる。

アイ「一体どうすれば・・・あつ、そうだね。ねえ、サトシ。ポケモン図鑑貸してくれない？」

サ「えっ、別にいいけど何に使うんだ？」

アイ「ちよつと閃いたの。まあ、見てて。」

アイリスは笑顔でそうサトシに言うと、ポケモン図鑑を操作し始めた。他の面々もアイリスがどうするのか様子をうかがっている。

アイ「エモンガ、あまり食べてばかりいるとこんなものになっちゃうわよ。」

アイリスはエモンガに向けて、ポケモン図鑑を見せる。すると、

エモンガ「エモ！？ エモ〜。」

エモンガは少し青ざめた顔をして、その場でうつむいてしまった。そして、エモンガをボールに戻す。

アイ「サトシ、ありがとう。はい、これ。」

サ「あ、ああ。役に立てたならよかったぜ。」

サトシはアイリスから返されたポケモン図鑑をしてみる。すると、そこにはマクノシタのページが開かれていた。

サ「ハハハ、アイリスも考えたな。」

サトシは思わず苦笑を浮かべた。横から、タケシやヒカリ達も覗きにきて、全員苦笑を浮かべた。

ベ「アイリスちゃん、結構冴えてるところあるんだね。」

ちよつとした一波乱が起こった昼食時であった。そして、サトシ達は再びアサギシティへと向かうのだった。

その頃、アサギ港では、

ポオオオオオオオ!

一艘の国内外各地を廻っていた大型客船が寄港していた。そこからはジョウトへ観光目的の外国人が大勢下船していた。そのような中、

フルーラ「はあく、やっと着いたわ。もうすぐサトシに会えるのね。」

数日前、アーシア島を出発したフルーラが大きく深呼吸をして、アサギの地へ足を踏み入れた。

フルーラ「でも、サトシは何処なんだろう? とりあえず、会う人

会う人に聞いてみるかな。」

すると、フルーラはサトシが写っている1枚の雑誌の記事を取り出した。

フルーラ「待っててね、サトシ。」

フルーラは決意を新たに、サトシを探しにいったのだった。また同じ船の別の場所では、

カノン「ふう〜、かなりの長旅だったわ。ねっ、ラティアス。」

数日前にアルトマーレからこの船に乗船したカノンが、今はカスミの姿になっているラティアスに声を掛ける。ラティアスはうんうんとうなづく。このことからわかるように、フルーラとカノンとラティアスは同じ船に乗っていたのだ。

カノン「ふふふ、ラティアス。余程、サトシ君に会えるのがうれしいのね。まあ、わたしも楽しみなんだけどね。」

カノンは柔らかな笑みを浮かべる。すると、ラティアスは待ちきれずに船から颯爽と降りる。

カノン「もう、ラティアスったら。そんなに焦らなくても、いいのに。」

ラティアスに続いて、カノンも船から降りて、アサギの地へ足を踏み入れた。そして、フルーラ同様サトシをラティアスとともに探しにいくのだった。

続いて後書きシヨ

メロメロパニック!? (後書き)

フルーラ・カノン「ちょっと、作者。」

天「なんだ、2人とも。」

フルーラ「出してくれるのはありがたいけれど、なんか無理矢理過ぎない?」

天「それはすまなかった。次の舞台でお前ら2人を出そうとして、どのように登場させようか悩んだ拳句、こうなってしまったんだ。」

カノン「次も出番はあるんでしょうね。」

天「心配するな。この次の次の話はカスミ達と再会+初対面する描写もかいてあるから。まあ、その時はサトシはいないけどな。」

フルーラ「それって、どういうこと?」

天「これ以上はネタバレになるから、その時のお楽しみってことで。」

カノン「何よ、それ。」

天「それでは最後になりましたが、感想の方をよろしくお願いします。」

ジヨウト一の港町（前書き）

また、やっちまった感が・・・（汗）

とりあえず、いつもどおりあたたかい目で読んでもらえるとうり
たいです。

ジョウトーの港町

サトシ達一行は、多くの船が行き交いする港町・アサギシティに到着していた。

サ「久しぶりだぜ。ここに来るの。」

タ「本当だな。」

カ「なんか、以前来た時とは違った雰囲気があるわね。」

サトシ、タケシ、カスミの3人は久々に来たアサギシティについて感想を漏らす。

コトネ「港町そのものの情景は変わってないけど、灯台に以前はなかった展望台直通のエレベーターが出来たり、近くにはバトル用施設、コンテスト用施設がここ最近、沢山出来てるから、新鮮味溢れた雰囲気もまたアサギシティの特色ってことね。」

コトネはツアーガイドのように、簡単にアサギシティについて説明する。

サ「バトル用施設か……。行ってみたいな。」

ヒ「コンテスト用施設もいいわね。」

サトシ達は早速興味を示したようだ。

コトネ「バトル用施設はまだ建設途中だけど、コンテスト用施設は

もう完成してて『コンテストドーム』という名前で営業してるわ。」

ハル「じゃあ、今からコンテストドームに行きましょう。」

サ「そうだな。バトル用施設はまだ出来上がってないみたいだし。」

サトシ達はアサギシティの海岸沿いに出来たコンテストドームに向かうことにした。コトネの案内でしばらく歩いてみると、巨大なドーム型施設の目の前に着いた。

アイ「うわあ、おっきい！」

ベ「本当だわ。」

アイリスとベルの発言からわかるように、コンテストドームの建物としての大きさに一同驚愕していた。

サ「すごい。アサギシティにこんな施設が出来てるなんてな。」

コトネ「施設内には、コンテスト会場にもなるメインアリーナの他に、屋内プール、トレーニングルームなども併設されてるの。コ―ディネーターにとっては、うってつけの施設ってことね。」

ハル「本当かも。早速、中に入りましょう。」

ハルカの一言で一同コンテストドームの中へと入っていった。中へ入ると、サトシはオーキド博士に連絡を取るため、他の面々とは一旦別行動となった。その他の面々は、各々施設内を楽しむことにしたのだ。しばらくして、サトシも先程コトネの言っていた屋内プールに行くことにした。

サ「ここか。へえ、結構広いな。」

ピ「ピカア〜。」

サトシと肩に乗っていたピカチュウは、屋内プールのあまりの広さに驚愕していた。

？「あれ？ サトシじゃないか。」

サトシは誰かが自分を呼ぶ声がしたので、その方へ向くと、

サ「ケンゴ!? それに、シュウも。」

サトシが向いたほうにいたのは、コガネシティ以来のケンゴとい先日エンジュシティで出会ったシュウがいた。

サ「どうしたんだ。2人とも。」

サトシが2人がどうしてここにいるのか尋ねると、

ケンゴ「僕はミカンさんからコンテストドームができたってことを聞いたから、今度タンバシティで開かれるポケモンコンテストの特訓のために来たんだ。そしたら、偶然シュウさんに会って、今は休憩がてら雑談してるところ。」

シュウ「僕も彼と同じくタンバシティのコンテストのために特訓だよ。エンジュシティで考えていたパフォーマンスをここで試していたんだ。」

ケンゴはシンオウでコンテストの特訓の手伝ってもらっていたミカンとはあれから連絡を何度かとっていたようだ。

サ「へえ、2人とも頑張ってたんだな。」

ケンゴ「まあね。」

すると、ケンゴはヒカリ達がないことに気づき、

ケンゴ「ところでさ、ヒカリは一緒じゃないのか。」

シュウ「そういえば、ハルカもないみたいだけど。」

ケンゴと同じく、ハルカがいないことに気づいたシュウがサトシに聞いてみた。

サ「あー、俺さっきまでオーキド博士に連絡してたからみんなとは別行動になったんだ。でも、屋内プールにも寄るってことをいつてたから来るんじゃないか？」

ケンゴ「そっか。」

サトシの言ったことを聞くと、ケンゴは幾日ぶりにヒカリと会うことを少し楽しみにした。ここでも言っておくが、ケンゴは幼馴染のヒカリに好意を抱いている。すると、

ヒ「あつ、いたいた。サトシ〜！ って、ケンゴー!？」

ハル「あら、シュウ。」

ケンゴ「ヒ、ヒカリ!？」

シュウ「ハ、ハルカ!？」

サトシを探していたであろうヒカリとハルカがサトシ達の元へやって来た。ハルカとヒカリの突然の登場に思わず声を上ずらせてしまったケンゴとシュウ。

ハル「探したかも、サトシ。」

ヒ「ロビーを探しても、見つからなかったんだから。」

サ「そうだったのか、ごめんごめん。」

息を切らせながら自分を探していたハルカとヒカリに、謝るサトシ。

サ「ひよつとして、ハルカとヒカリもコンテストの特訓？」

ハル「ええ、そうよ。なかなか時間が取れなかったから、ここで少しでも今度のコンテストのためにコンディションを整えておこうと思っただけ。」

ヒ「カスミも後で来るって言ってたわ。カスミも今度のコンテストに出場するみたいよ。」

サ「カスミも出るのか。これは面白いコンテストになりそうだな。」

サトシは今度のポケモンコンテストタンバ大会への興味を言葉に表していた。するとサトシはハルカとヒカリの今の服装が気になり、

サ「ところでさ、ハルカとヒカリはなんで水着なんだ？」

サトシのセリフからもわかるように、ハルカとヒカリは今水着姿である。

ヒ「だって、この屋内プール。ポケモンとトレーナーと一緒に泳げるプールなんだもの。」

ハル「それにプールがあるんだから、水着に着替えててもおかしくないでしょ。」

サ「あつ、そりゃそっか。」

サトシは辺りを見回すと若干水着着用でない者もちらほら見えるが、大多数は水着に着替えてポケモン達と交流を深めている。

ヒ「ねえ、ケンゴ。急にどうしたの、ボーっとしちやって。」

ケンゴ「えっ!?!」

ハル「シュウも一体どうしたの?」

シュウ「あ、いやその・・・。」

ヒカリとハルカに声をかけられたことに思わずびっくりしてしまつたケンゴとシュウ。実は、ケンゴはヒカリ、シュウはハルカ、あまりお目にかかれないそれぞれの水着姿に見惚れていたのだ。

ヒ「本当にどうしたの、アタシ達に会うなりボーっとしちやって。」

ケンゴ「き、気のせいじゃないか．．．。」

ハル「そう？　でも気になるかも。」

シュウ「そ、そうかい．．．。」

ケンゴとシュウの顔を覗き込むように見つめるヒカリとハルカを尻目に、2人は必死に平静を装うとする。だが、それも効果はなく、

ケンゴ・シュウ（か、可愛い．．．。）

ケンゴとシュウは、2人の水着姿と仕草が可愛く思えた。

ケンゴ「サトシ！　僕そろそろここを出るから。またね。」

シュウ「僕もそろそろ、お暇いとまさせてもらおうよ。」

サ「そうか、それじゃあまたな。」

2人は場の雰囲気になえきれず、その場を立ち去った。当然、ハルカやヒカリには2人の水着姿が眩しかったとは言えるはずもない。

ヒカリ「ケンゴったら、急にどうしたのよ。」

ハル「2人とも、変よね。」

サ「本当にどうしたんだろう、2人とも．．．。」

3人はケンゴとシュウの思惑が全く分からず、首を傾げるばかり

だった。ましてや、ハルカとヒカリに関しては自分たちがその原因だとも知らずに。その様子を陰で見ていたカスミとアイリスは、アイ「あれくらいで照れるなんて、ケンゴもシュウもまだまだ子供ね。」

カ「3人とも分からないなんて、ある意味すごいわよ……。」

アイリスはケンゴとシュウの分かりやすい反応に対して、カスミはサトシとハルカとヒカリの鈍さに苦笑を浮かべた。

ハルカはサトシやヒカリと比べて鈍い性格ではないですが、一応この場面はこの設定でいきます。

ヒ「ところで、サトシはこれからどうするの？」

ハル「もしよかったら、わたし達の特訓に付き合ってくれない？」

サ「あゝ、そうしたいのは山々なんだけど、俺は疲れたから、もう少しこの施設を廻った後にポケモンセンターに戻るよ。」

ヒ「そう。ほとんど休めなかったものね。」

ハル「無理頼んじやってごめんね。」

サ「いいよ、別に。俺の方こそ、手伝えなくてごめんな。」

ハル「こっちこそ、別にいいわよ。じゃあ、またポケモンセンターで会いましょう。」

サ「ああ、また後でな。」

ハルカがそう言うと、サトシは屋内プールを出て、施設内をピカチュウとともに廻ることにした。しばらくして、丁度いい時間になったので、サトシはポケモンセンターに戻ることにした。

サ「ん？ あれはカスミ？」

ポケモンセンターへ戻ろうとするサトシは、カスミの姿が見えたので、

サ「おい、カスミ〜！」

大きな声でカスミに声を掛けた。するとカスミはサトシに気づき、サトシに近づいてきた。

サ「カスミ、お前も戻るのか？」

サトシがそう言うと、カスミは何も言わずにうんと頷いた。

サ「それじゃあ、一緒に．．．。」

サトシと一緒に戻ろうとカスミに言おうとすると、カスミは急にサトシの手を掴み、半ば強引にサトシを引っ張っていった。

サ「って、おい。どうしたんだ、カスミ!？」

ピ「ピカ!？」

サトシは突然のカスミの行動に驚き、肩に乗っていたピカチュウ

は落ちそうになるのを、必死にしがみ付いて何とか体勢を整えた。
カスミに半ば強引に連れ出される形になったサトシ。これが、後に
一波乱を巻き起こすことはサトシはおろか、誰も予想だに出来な
った。

続く

ジヨウト一の港町（後書き）

今まで読んで下さった読者なら、この後の展開は予想がつく……
多分。

サトシはいずれへ！？（前書き）

話の展開が急すぎるのはこの物語の仕様なのできにしないこと。

この話から、皆さんお待ちかね（？）の映画ヒロインの2人が本格的に出演します。

サトシはいずこへ!?

コンテストドームからアサギシティのポケモンセンターへと戻ってきたサトシ以外の面々は、全員深刻な顔をしてロビーに集まっていた。そう、ポケモンセンターに戻ると言っていたサトシが夜になっても戻ってこないのだ。

ヒ「一体、どうしたんだろう。サトシ。」

タ「こんなに遅くまで戻ってこないなんて、なんか変だぞ。」

カ「サトシに何かあったのかしら。」

アイ「こんなに心配させておいて、ホント子供なんだから。」

全員、サトシが帰ってこないことにサトシ自身に何かあったのではないかと心配になる。

コトネ「あっ、マリリン、ケンタ。サトシについて何か分かった?」

マリナ「いいや、全然。ジョーイさんにわたし達くらいの年齢でピカチュウを連れた少年が着ていなかったって聞いたんだけど、来ていないって。」

ケンタ「俺もポケモンセンターの近くを聞き込みに行ったんだけど、手掛かりは全くなしだ。」

マリナもケンタも、お手上げの状態である。そんな彼らのもとへ、

？「あれ？ カスミじゃない。」

？「あつ、ホントだ。カスミ〜！」

カスミを名を呼ぶ2つの声がしたので、全員声のする方へと向く。

カ「嘘っ！？ フルーラにカノン！？」

そこにいたのは、以前カスミがサトシの旅に同行していた時に出会ったフルーラとカノンであった。

フルーラ「久しぶり、カスミ。元気にしてた？」

カ「ええ、こっちは大丈夫よ。フルーラとカノンは？」

フルーラ「わたしは大丈夫。」

カノン「わたしもよ。おじいさんも元気にしてるわ。」

カ「そう、それは良かったわ。」

カスミは2人との久々の再会に喜んでいた。

フルーラ「あのカスミ。そちらの方々は？」

カノン「わたしもタケシは知ってるけど、他の人たちは初めてよ。」

フルーラはカスミの後ろにいる他の面々とは初対面である。カノンもタケシとは一度面識はあるが、カスミとタケシを除く面々とは初対面である。

カ「カノンは知ってるけどこっちから順にタケシ。それからハルカにヒカリ、アイリス、コトネ、ベル、デント、ケンタ、マリナ、カズナリ、マサト、リュウカちゃんよ。」

カスミはフルーラとカノンに丁寧に他の面々を紹介する。

タ「久しぶりだな、カノン。そして、はじめましてフルーラ。」

ハル「はじめまして、ハルカよ。」

ヒ「アタシ、ヒカリ。」

アイ「アタシはアイリス。」

コトネ「わたしはコトネ。」

ベ「はじめまして、ベルよ。」

デント「僕はデントです。以後、お見知りおきを。」

ケンタ「俺はケンタ。よろしくな。」

マリナ「私はマリナ。よろしくね。」

マサ「僕はマサト。」

リュウカ「わたしはリュウカです。はじめまして。」

タケシ達が自己紹介を終えると、今度はフルーラとカノンがタケ

シ達に自己紹介をした。

フルーラ「わたしはフルーラ。ここから遠く離れたアーシア島で巫女をしてるわ。」

カノン「わたしはカノン。アルトマーレという街に住んでるの。」

カスミ以外はフルーラが自分たちが見知らぬアーシア島で巫女をしていたこと、またカスミとタケシ以外はカノンが自分たちが見知らぬアルトマーレ出身だということに驚いていた。

フルーラ「そういえば、カスミ。サトシは何処？」

カノン「辺りを見回しても、いないみたいだけど。」

フルーラとカノンはカスミ達の近くにサトシがいないことに疑問を抱いていた。

カ「あゝ、実は数時間前にアタシ達と別れてからここに戻って来ないのよ。」

フルーラ「えっ、そうなの!？」

カノン「どうしたのかしら、サトシ君。」

カスミの答えを聞いたフルーラとカノンは、サトシのことが心配になった。ちなみに今まで読んでいただいた読者の方はご存じだとは思いますが、フルーラとカノンはサトシに好意を抱いている。

フルーラ「そういえば、カノンも誰かを探してるって言ってたよね。」

「カ、えっ、そうなの？ カノン。」

カノン「うん。一緒に同行してたんだけど途中ではぐれちゃったの。探してる途中でフルーラに会って、探すのを手伝ってもらってるの。」

カノンは自分の旅に同行していたある人物（？）とはぐれて、探している途中でフルーラと偶然でくわし、一緒に探してもらっているとのこと。

リュウカ「カノンさんの探してる人って、どんな人ですか？」

カノン「あゝ、人って言うよりも．．．うん、口で言うと説明しづらいかな．．．。」

カノンは急に口ごもるように言葉を濁した。その様子にリュウカは首を傾げる。

タ「．．．なあ、カノン。カノンが探してるのってまさか．．．。」

タケシが何かに気づき、カノンが探しているであろう人物の名前を言おうとした。

カノン「うん。その子はポケモンのラティアスなの。」

カスミ・タケシ以外「ええええええ！？」

カノンがラティアスを探しているといった瞬間、カスミとタケシ

以外は驚愕したように声を挙げた。

ケンタ「ラティアスって、あの伝説の……。」

マリナ「ていうか、なんでそんなポケモンとカノンが!？」

ケンタとマリナは驚いたように、聞いてみた。

カノン「わたしとラティアスは友達なの。いつもラティアスは街中を動き回ってはわたしやおじいさんと遊んでるの。」

ヒ「そ、そうなんだ。」

カノンの答えにカスミとタケシ以外は、開いた口が塞がらないくらい驚いた。

タ「それはそうと、サトシだけじゃなくラティアスまでいないとなると余計に心配だな。」

ラティアスはかなり珍しいポケモンなので、それなりにポケモンハンターなどに狙われる危険性がある。タケシはそれを危惧した。

カノン「一応、人間の姿になっていてとは言っておいたけど、それでも心配だわ。」

ベ「それじゃあ、サトシ君もラティアスも一緒に探しましょう。」

デ「そうだね。サトシがいなくなったのと、ラティアスがいなくなったのが必ずしも無関係だとは言い切れないしね。」

カノン「本当！？ みんなありがとう。」

カ「これくらい当然よ。」

コトネ「困ったときはお互い様ってことね。」

ベルの提案でサトシを探しに行くとともに、ラティアスも探しに行くことになった。すると、そんな彼らのもとへもう一人、

？「あれ？ みんな一体どうしたんだい？」

カ・タ「シゲル！？」

声を掛けてきたのは、サトシの幼馴染で初代ライバルのシゲルだった。

シゲル「なにかみんな困ってるみたいだけど、何かあったのか？」

シゲルが何かあったのか聞くと、カスミがサトシとラティアスがいなくなった経緯を簡単にシゲルに話した。

シゲル「そうだったのか。それは僕も心配だね。」

シゲルは自分の幼馴染であり永遠のライバルであるサトシ、珍しいポケモン的一种であるラティアスの安否を心配した。

シゲル「僕も何かできることがあったら、手伝うよ。」

カ「本当に！？ 助かるわ。」

シゲルもサトシ、ラティアス捜索に協力することになった。その後、アサギシティのジュンサーにも事情を説明し、カスミ達はポケモンセンターに待機するよう言われた。だが、カスミ達は仲間のピッチをただ待って過ごしてられるわけもなく、自分たちも探しに行くと言った。カスミ達の粘りに折れたジュンサーは無茶をしないという条件付きで創作に行くことを許可した。こうして、サトシとラティアスの捜索が始まったのだった・・・

続く

サトシはいずこへ！？（後書き）

サトシとラティアスの行方は！？

もうだいぶネタバレしたので、分かると思います。

サトシとラティアス（前書き）

サトシとラティアスがどうなったか、判明します。結構あっさりですが・・・

サトシとラティアス

フルーラ、カノン、シゲルも加えて、サトシとラティアスの行方を捜索することになったカスミ達。それぞれ分かれて、街中、海岸沿い、港と灯台付近、コンテストドーム付近などくまなく探した。

ヒ「ハアハア、タケシ。見つかった？」

ヒカリは息を切らせながら、タケシに聞く。

タ「いいや、こっちも駄目だ。手掛かりすら見つからない。」

ヒ「そう。。。」

ヒカリは悲しげな顔になる。

タ「そんな顔するなよ。サトシとラティアスなら大丈夫だ。」

ヒ「そうよね。もう一度、探しましょう。」

それから全員、同じところを何度もまわりながら、サトシとラティアスを探した。

カ「シゲル。そっちはどう？」

シゲル「全くもって駄目。」

ハル「ねえ、シゲル。サトシが行きそうなところとか分かる？」

シゲル「うーん、マサラタウン近郊とかバトル施設とかなら見当がつくんだけど、あいにくこの街のバトル施設はまだオープン前だしな。」

全員、お手上げの状態だが必ず見つけるとい意思が伝わってくる。

マサ「・・・ねえ、あそこにいるのってサトシじゃない？」

マサトは海岸の岩場で海を眺めている人物がサトシに似ていたので、みんなに聞いてみた。

ベ「ホントだわ。サトシ君らしき人がいるわね。」

リュウカ「というよりも、サトシさん本人ですよ。だって、そばにピカチュウがいますし。」

サトシの服装、そしてピカチュウがそばにいたことから、サトシ本人だということが分かった。ようやく、サトシを見つけることが出来た。

ハル「サトシ〜！」

ヒ「心配したわよ〜！」

ハルカとヒカリはサトシに声を掛けると、サトシとピカチュウは声のする方へ体を向けた。

サ「ハルカ！ ヒカリ！ それにみんな・・・。」

サトシは言いかけた言葉を急に引つ込めた。そして、驚愕したような顔つきになる。ピカチュウも鉄砲玉を喰らったような顔つきになる。

カ「ちよつと、急に黙り込んでどうしたのよ。」

カスミ達がサトシとピカチュウの近くへ移動しながら、サトシが急に黙り込んだことに違和感を覚えた。すると次の瞬間、カスミ達も急に黙り込み、目の前の光景が信じられないというような顔になる。

ヒ「う、嘘でしょ!?!」

ハル「こんなことって……。」

しばらくの沈黙の後、その場にいた全員、

全員「ええええええええええええ!?!」

驚きの大声を発した。サトシ達が互いに見た光景とは、

全員「カスミ（アタシ）が2人!?!」

サトシは今までピカチュウとともに遊んでいたカスミが、ハルカやヒカリ達はサトシとラティアスの搜索を一緒にしていたカスミが、自分達の反対側にももう1人いるのだ。ハルカやヒカリ側にいるカスミも自分が2人もいるということが一番びっくりしている。すると次の瞬間、

ヒ「き、消えた!?!」

突然サトシ側にいたカスミが姿を消した。これにも、その場に
いる一同びっくりしている。また次の瞬間、

サ「わ!? なんだ!？」

サトシ以外全員「ええええええ!？」

サトシが空中に浮かび、それにまた一同驚愕した。

サ「うわああああ!」

サトシは空中に浮いたまま、自分がいたのと反対方向に移動した。
そして、静かに着地すると再びカスミの姿が現れ、そのカスミはそ
っとサトシの頬に、

チュッ

触れるだけのキスをした。

サトシ以外全員「ええええええ!」

女性陣は顔を真っ赤にしながら、男性陣はきよとんとしながら、
驚きの表情を見せた。特にカスミに至っては、自分に扮した何者が
サトシにキスをしたので、もう訳が分からない状態になっている。

サ「カ、カスミ!? いきなりなにすんだよ!」

サトシは少しの沈黙の後、ハッと我に返り、カスミに急にキスをされたことに顔を赤くさせた。すると、サトシ側にいるカスミはニコツと笑い、本来の姿をサトシ達に見せた。

サ「ラ、ラティアス!?!」

ピ「ピカ!?!」

そう、サトシとピカチュウがカスミだと思っていた人物は、実はラティアスだったのだ。その後、騒ぎを聞きつけたジュンサーとカスミ達と別で捜索していた他の面々も合流し、サトシとラティアスが無事に見つかったので、ポケモンセンターへと戻ることにした。

カノン「もう、駄目じゃない。ラティアス。」

ポケモンセンターに戻った早々、ラティアスはカノンの説教を受けている。

フルーラ「まあまあ、落ち着いて。ラティアスだって、悪気があったわけじゃないんだし。」

カノン「でも、いくらサトシ君に会いたかったからって、サトシ君に迷惑かけちゃ駄目ですよ。」

カノンは少々興奮気味にラティアスを叱る。叱られている今回の騒動を引き起こした張本人ラティアスは、うつむいている。

サ「フルーラの言うとおりでござ。それに俺、全く気にしてないし、むしろラティアスに会えたことがうれしいんだ。だから、俺からもラティアスを許してやってくれないか。」

カノン「まあ、サトシ君がそう言うんなら……。ラティアス、これからは気を付けるのよ。」

すると、ラティアスはパアアと笑顔を開かせ、サトシに近づいて頬ずりを始めた。

サ「やめろって。くすぐったいってば。」

この光景を、ベイリーフとツタージャが見ていなかったことが不幸中の幸いというものだろうか。もしあの2体が見ていたら、間違はなく嫉妬の炎全開でラティアスの行為を邪魔するだろう。

カノン「はあ、分かってるのかしら。」

カ「アハハハハ……。。」

ため息をつくカノンに、他の面々は苦笑を浮かべた。その後、今回の騒動で疲れ果てたサトシ達は眠りについた……

続く

サトシとラティアス（後書き）

最近、サトヒカから離れているような気が・・・

事件の予感・・・（前書き）

物語が一気に急展開を迎えます・・・

一応、無印ネタを入れていますが、曖昧な記憶なため、不自然な点が多々あると思います。ですが、いつものように温かい目でご覧いただければありがたいです。

事件の予感・・・

サトシとラティアスの失踪という騒動から一夜明け、サトシを除く者達は、ポケモンセンターのロビーでくつろいでいた。

アイ「はあく、サトシったら、まだ起きないの？ こんな時間になるまで寝てるなんて、ホント子供なんだから。」

デ「まあ、昨晚あんなことがあったんだから仕方ないよ。疲れてるんだし、自分から起きてくるまでそつとしておいてあげようよ。」

未だ起きてこないサトシに不満を漏らすアイリスに、デントが苦笑しながら宥める。

マリナ「それにしても、シゲル。サトシがこんな時間まで寝てるのにいたって冷静ね。」

シゲル「まあね。サトシがねぼすけなのは今日に始まったことじゃないからね。」

マリナ「そうなんだ・・・。」

シゲルの答えに、マリナが苦笑を浮かべる。

サ「ふわあく、あれもうみんな起きてたんだ。」

サトシが談笑している仲間のもとにやって来た。

カ「もう、とつくの昔に起きてたわよ。」

ハル「サトシが遅いだけかも。」

カノン「まあまあ、それよりも昨日はホントにごめんね。」

サ「あゝ、もういいって。あれはあれで、結構楽しかったし。」

気にしてないと言ってくれたサトシに、カノンは自然と笑みを浮かべる。

サ「ところで、フルーラとカノンはどうしてここに来たんだ。」

フルーラ・カノン「えっ？」

サトシはジョウトから遠く離れた地から、どうしてフルーラとカノンがやって来たのか疑問に思った。フルーラとカノンは、サトシに会いにジョウトにやって来たわけだが、それを自分たちが好意を抱いている本人の前で言えるわけもなく、サトシへと返答に困ってしまう。

サ「どうしたんだ？ 2人とも。」

急に黙り込んだフルーラとカノンが気になり、顔を覗き込むように2人を見つめるサトシ。その視線が痛いのか、フルーラとカノンは自然と顔に赤みが帯びていく。

コトネ（まさか、あの子たちも。。。）

人一倍、恋愛事に敏感なコトネがフルーラとカノンのサトシに対する態度に、まさかの疑問を抱いた。

カノン「わ、わたしは観光よ。おじいさんから、たまには一人旅にでも行ってみたらどうだと言われてね。」

フルーラ「わたしもよサトシ。巫女の仕事は任せてって、姉さんから休養をもらったの。」

少々焦り気味に答えるフルーラとカノン。

サ「そっか。でも、俺はフルーラとカノンに会えてうれしいぜ。」

サトシの無自覚の満面の笑顔発動。これはサトシに好意を抱く人物には、効果抜群である。さらに寝起きのサトシということもあって、さらにさわやかさは倍増する。

フルーラ「そ、そう。わたしもサトシに会えてうれしいわ。」

カノン「わ、わたしもよ。サトシ君。」

フルーラとカノンは顔を赤くさせながら、サトシに返答する。サトシは急に顔が赤くなった2人に首を傾げるが、鈍感な性格のサトシにはその理由が分かるわけもない。

カ「い、いまはないわよ。サトシ／＼」

ハル（寝起きの笑顔なんて反則かも／＼）

ヒ（うう、眩しすぎる／＼）

アイ（イ、イツシュの時はなんとも思わなかったのになんなのこの

気持ち／＼／

コトネ（やっぱり、サトシの笑顔は素敵ってことね。）

べ（はあく、サトシ君やっぱりカッコいいわ／＼／）

遠くから見ている彼女たちもうっとりと見つめていた。その様子にマリナとリュウカと男性陣は、

マリナ「も、もしかして、みんなサトシのことが．．．。」

タ「お察しの通りだ。」

カズナリ「これは波乱の旅の予感が．．．。」

ケンタ「だな。」

デ・マサ・リュウカ「アハハハハ．．．」「」

シゲル（サトシ。君はいつからそんなにモテるようになったんだい．．．。）

ただ、呆然と見守るしかなかった。シゲルに至っては、しばらく会わないうちに周辺が変わってしまった幼馴染の姿に驚愕の様子だった。

サ「そういえば、シゲル。お前も相変わらず元気そうだな。」

サトシは今度はシゲルに声を掛けた。

シゲル「君も元気とねぼすけのところは変わらないみたいだね。サトシ君。」

サ「その言い方やめてくれないか。後、これでも少しは早起きできるようになったんだぞ。」

皮肉混じりに言うシゲルに、反論するサトシ。

マリナ「ねえ、サトシとシゲルって一体どついう仲なの？ 見たところ、結構長い付き合いみたいけど。」

マリナはサトシとシゲルの関係について、聞いてみた。

サ「俺とシゲルは小さいころから家族ぐるみの付き合いなんだ。今はポケモン研究者として活動してるけど、かつては俺と同じトレーナーだったんだぜ。」

ベ・ケンタ「それ本当！？」

シゲルが元ポケモントレーナーと知り、いち早くベルとケンタが反応した。

シゲル「えっ、あ、うん。」

ケンタ「それじゃあ、今度俺とバトルしようぜ。」

ベ「ちょっと、シゲル君とバトルするのはわたしよ。」

ケンタ「何言ってるんだよ。先に申し込んだのは俺だぜ。」

サ「ちょっと待った。俺だって、久しぶりに会ったんだ。シゲルとバトルするのは俺だ。」

ベ「ちょっと、サトシ君は幼馴染なんだからいつでもできるでしょ。」

ケンタ「そっだそっだ。」

シゲルとのバトルをめぐって、ベルとケンタが言い争いを始め、バトルと聞いてサトシまでもが言い争いに加わってしまった。

マリナ「はあ、ケンタったら。」

カ「サトシも、バトルって聞いたらすぐこれなんだから。」

3人の言い争いに3人以外の面々はため息をつく。当のシゲル本人は、突然のバトルの申し込みに呆然としている。そんな3人の言い争いを止めたのは、意外な人物だった。

マサ「ベル、ケンタ。シゲルはね、サトシの幼馴染というだけじゃないんだよ。」

ベ・ケンタ「どっいうこと(だ)?」「」

マサトの言葉に、すぐに言い争いをやめてマサトのほうへ振り向くベルとケンタ。

マサ「ふふふ。」

マサトはわざとらしい笑みを浮かべながら、

マサ「シゲルはあのポケモン研究の権威・オーキド博士の孫なんだよ。」

少々自慢げに言う。

マリナ「オーキド博士って、あのラジオのポケモン講座の？」

カズナリ「そんな有名なポケモン研究者の孫だなんて、凄いよ。」

シゲルがオーキド博士の孫という事実には驚愕する者がいる中、

ヒ「ふふふ、それだけじゃないんだよ。」

今度はヒカリがわざとらしい笑みを浮かべながら言う。

ヒ「オーキド博士はポケモン川柳研究家で、その孫である彼もまたポケモン川柳を作るのがうまいのよ。」

ズルっ！

ヒカリの発言に、ほとんどの者（特にサトシ、シゲル、タケシ）がずっこけた。

ヒ「あれ、みんなどうしたの？」

サ「ヒ、ヒカリ……。」

タ「ヒカリには、シゲルに対するイメージはポケモン川柳のお孫さんなんだな．．．。」

シゲル「できれば、博士の孫ということとポケモン川柳についてはあまり触れて欲しくないんだけどな．．．。」

ずっこけた者たちは、ただ苦笑を浮かべた。

ケンタ「なんなんだ？」

マリナ「さあ〜？」

そんなギャグを含んだ談笑をしていると、

サ「そういえば、シゲルはどうしてここに来たんだ？」

サトシはシゲルがアサギシティに来た理由を聞いてきた。

シゲル「実はうずまき列島のほとんどの島でポケモン達の異常行動が確認されてね。その調査のためにここに来たんだ。」

タ「異常行動って具体的にはどんなのだ？」

シゲル「異常行動というのは少し言い過ぎだけど、水鳥ポケモン達が頻繁に群れをなして周辺の空を飛びまわったり、洞窟のポケモン達が街に出没したり、海のポケモン達が浜に打ち上げられたりと奇妙な現象が度々目撃されてるんだ。」

カ「それはちょっと変ね。」

シゲル「うん。一部では天からの祟りだという人もいるみたいだけど、これは人為的な何かが原因で起きているというのが有力な説なんだ。」

デ「超常現象や異常現象には、それなりの科学的根拠があるからね。」

こういった超常現象などをあくまで科学的視点でとらえるサイエンス・ソムリエ（デントが自称しているだけだと思うが・・・）でもあるデント。シゲルの意見に賛同したようだ。

サ「とりあえず、うずまき列島に何かありそうだな。なあ、シゲル。俺たちに何かできることはないか？」

シゲル「サトシ、手伝ってくれるのか？」

サ「もちろんだぜ。シゲルは最初のライバルでもあり友達でもあるからな。」

ヒ「それに、困ったときはお互い様ですよ。川柳のお孫さん。」

シゲル「（川柳のお孫さん・・・。）みんな、ありがとう。でも、なるべく無茶はしないこと。これだけは約束してくれないか。」

マリナ「大丈夫よ。」

アイ「そうそう、サトシやケンタじゃあるまいし。」

サ・ケンタ「俺たちは余計だ！」

こうして、サトシ達はシゲルとともにうずまき列島周辺で起こっている異常現象について調べるため、うずまき列島に向かうことになった。

とある場所では、

ロケット団員「シラヌイ博士。たった今、うずまき列島周辺の海域調査の最新データが届きました。」

シラヌイ「うむ、ご苦労。度々申し訳ありませんが、バシヨウとブソンをここに連れてきてはくれませんか？」

ロケット団員「かしこまりました。」

ロケット団員はシラヌイ博士に言われると、すぐにロケット団特務工作部幹部のバシヨウとブソンをシラヌイ博士のもとへ連れてきた。

バシヨウ「お呼びでしょうか。シラヌイ博士。」

シラヌイ「今回、あなた方をここへお呼びしたのは、以前我々が失敗したルギアの捕獲及びデータ収集の任務に就いてほしいの任命するためです。」

ブソン「ルギアって、あの伝説のポケモンの・・・。」

シラヌイ「ええ、我々の野望を達成させるためのデータがルギアに

は備わっているのです。」

バショウ「かしこまりました。では早速、任務に就かせていただきます。」

シラヌイ「後、最後に。我々の要注意人物としてマークしている少年には気を付けるように。」

ブソン「少年とは？」

シラヌイ「この少年です。彼は度々我々ロケット団の目的達成を邪魔するので、上層部からもかなりの要注意人物として名があげられています。」

シラヌイ博士は、一枚の写真をバショウとブソンに見せる。

バショウ「わかりました。もし、仮に遭遇した場合、その時は何らかの始末方法を講じてもよろしいでしょうか。」

シラヌイ「そのところは、あなた方に任せます。では、健闘を祈ります。」

影では、ロケット団が本格的な始動に向けて準備段階に入っていた……

続く

事件の予感・・・(後書き)

進行の都合上、しばらくは後書きシヨの方をお休みします。

いざ、うずまき列島へ（前書き）

うずまき列島へ向かったサトシ達を待ち受けていたものとは！？

記憶が曖昧なので、少しうずまき列島についておかしな点があるか
もしれませんが、そんなこと気にしないという方はどうぞ。

いざ、うずまき列島へ

サトシ達は、うずまき列島で目撃されているポケモン達の異常行動について調査しているシゲルに協力するため、うずまき列島へと向かっていた。

マサ「ねえ、シゲル。本当に僕たちが手伝っても良かったの？」

恐る恐るマサトが聞いてみた。

シゲル「いや、むしろ手伝ってほしいくらいだよ。今回は、本来僕の単独調査の予定だったんだ。それに状況もあまり思わしくない方向に向かっているみたいだしね。」

サ「そっか。シゲル、俺たちに出来ることは少ないかもしれないが。出来る限りは協力するからな。」

シゲル「ありがとう、サトシ。そしてみんな。」

シゲルは自分に協力すると言ってくれたサトシ達に感謝した。

アイ「ところで、海へ出たのはいいけどどこに行くの？」

シゲル「とりあえずは黄岩島へ向かおうと思う。その島のオギシテイという街を調査の拠点としたいんだ。」

シゲルはうずまき列島の島の一つである黄岩島へと向かうと言った。

サ「黄岩島か．．．。」

カ「そういえば、ルカさん。元気にしてるかしら。」

カスミは以前旅で出会ったルカという女性のことを思い出した。

ヒ「ルカさんって？」

ヒカリは会ったことがないルカについて聞いてみた。ルカに会ったことがない他の面々も頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。

カ「ルカさんは以前アタシとサトシとタケシでこのうずまき列島を回っていた時に出会った人なの。うずまき列島を回っていた間は結構お世話になった人よ。」

カスミはヒカリ達にルカについて話した。彼女は、うずまき列島黄岩島のオギシテイ出身で、サトシ達と出会った頃は曾祖父の意思を受け継いで黄岩島のあたりに沈んだ船の財宝『銀色のはね』を探していた。その後、銀色のはねの謎を調べにオキ島に行き、そこで一度は別れたサトシ達と再会する。その後に判明したことだが、その銀色のはねは伝説のポケモン・ルギアのはねだった。

マサ「あつ、島が見えたよ。あれが黄岩島？」

シゲル「そうだよ。」

船の進行方向には黄岩島がサトシ達の目にも分かるようにはつきり見えた。

船長「おーい、そろそろ港に着くから降りる準備をしておいてくれ。」

シゲル「分かりました。」

港に船が着岸すると、サトシ達は続々と船から降りていった。そして、オギシティのポケモンセンターへと向かった。ポケモンセンターへ到着して、早速中へ入るとそこは普段通りなんら変化もない光景だった。

サ「あつ、ルカさんだ。」

ルカ「えっ、サトシ君!？」

サトシはうずまき列島を回っていた時に会ったルカとここオギシティで再会を果たした。

サ「お久しぶりです。ルカさん。」

ルカ「ホントに久しぶりね。カスミちゃんも、タケシ君も元気にしてた?」

カ「こっちは大丈夫です。」

サトシとカスミは普通に挨拶を交わす。だが、タケシは、

タ「自分も元気です。そしてルカさんのような美しい方に再会できたことにとても感動してます。」

ルカ「は、はあ……。」

タケシはいつも通りルカの手を取り、ナンパを開始していた。

ヒ「また始まったわ。タケシのいつものアレ。」

ハル「いい加減あの性格直してほしいかも。」

タケシのいつも通りの行動に呆れる一同。

カ・マサ「って、今はそんな場合じゃないでしょ!」「」

タ「イテテテテ!」

カスミはタケシの右耳、マサトは左耳を引っ張って、悲痛に叫ぶ
タケシをルカから離れた。

ルカ「ところでサトシ君達は、どうして黄岩島に?」

ルカはサトシ達が黄岩島へ来た理由を尋ねた。

シゲル「そのことは僕から。実はここはずまき列島で見られている
ポケモンの異常行動について調べているのです。サトシ達は、僕の
手伝いでついてきてもらってるのです。」

ルカ「そうだったの。それじゃあ、シゲル君はポケモン研究者か何
か?」

シゲル「はい。」

ルカの問いかけに丁寧に答えるシゲル。するとその時、ルカが首

にかけていたペンダントの周りがヒカリ出した。

ルカ「またね。いったい何が起きているの？」

ルカはペンダントを開けると、そこには銀色のはねが光を帯びていた。

サ「ルカさん、そのはね・・・。」

ルカ「ええ、そうよ。2、3日前から、度々光るようになったの。」

ルカのペンダントをサトシに続いて、ほかの面々も覗き込む。するとフルーラが、

フルーラ「もしかして、その銀色のはね。ルギアのですか？」

ルカ「ええ、そうだけど。どうしてそれを？」

ルカはサトシ、カスミ、タケシを除くほかの面々には銀色のはねがルギアのものだということをまだ話していない。

サ「実は、フルーラはアーシア島の巫女なんです。」

ルカの疑問にサトシが答える。

ルカ「アーシア島・・・。確か、ルギアを海神として祀っているオレンジ諸島にある島よね。そんな島の巫女さんがどうしてここに？」

フルーラ「実はアサギシティに観光に来たのですが、その時偶然サトシ達に出会ってそこから一緒にここへ来たのです。」

ルカ「そうなの。」

フルーラの答えにルカは納得した様子だ。ちなみに、フルーラがジヨウトへ来た本当の理由は、サトシに会いたかったということだが、いまこの状況下でそんなことは言えるわけもない。

デ「もしかしたら、その光り輝く銀色のはねと今回のポケモン達の異常行動、なにか関係があるかもしれないね。」

カズナリ「僕もそう思うよ。それに船に乗っていた時もポケモン達が泳いでいる雰囲気なんて全くなかったですもの。」

マリナ「そういえば、そうだね。これ、絶対におかしいよ。」

デント、カズナリ、マリナがそれぞれ言う。

ルカ「そうね。銀色のはねのこともあるけれど、最近銀岩島とオキ島近辺で目撃されている怪しい集団のことも気になるの。」

ヒ「怪しい集団？」

ルカ「まだ住民には直接危害を加えたわけじゃないけれど、彼らの不審な行動に住民の方たちはとても気味悪がっているわ。それにここ黄岩島でも出没するようになったの。」

頭にクエスチョンマークを浮かべるヒカリにルカが丁寧に答える。

シゲル「その銀色のはね、うずまき列島に出没する怪しい集団も併せて調べる必要があるみたいだね。」

マリナ「そういうことになるわね。」

シゲル「よしここは、3つに分かれて行動しよう。銀岩島へ向かうグループ、オキ島に向かうグループ、そしてここ黄岩島で待機するグループだ。」

シゲルはそう言うと、自分やルカも含めたサトシ達を3つにグループ分けした。グループの内訳は以下の通り、

A：サトシ、ヒカリ、ハルカ、シゲル、ケンタ、マリナ

B：デント、アイリス、コトネ、カズナリ、カノン、ルカ

C：タケシ、カスミ、ベル、マサト、フルーラ、リュウカ

その後の話し合いで、Aグループは銀岩島へ向かい、Bグループは黄岩島で待機、Cグループはオキ島へ向かうことになった。

シゲル「それじゃあ、僕たちはすぐに出発するよ。」

ルカ「無事に帰って来てね。」

オキ島へ行くには途中銀岩島を通るため、AグループとCグループは一緒に出発することになった。この時、これがロケット団の作戦の影響だということを誰も知る由がなかった。

続く

いざ、つずまき列島へ（後書き）

次回、Cグループ視点で進めます。

シルバーとの再会（前書き）

今回、無印ジョウト編で登場したルギアの子供・シルバーが登場します。ただし、鳴き声は都合により、カットしています。

CS放送の無印で確認された方もいらっしやると思いますが、懐かしんでいただければ幸いです。

シルバーとの再会

銀岩島まで一緒に行くことになったサトシ達のAグループとタケシ達のCグループ。銀岩島へ着くとCグループはオキ島へ続く洞窟へと向かった。その道中、

カ「アタシ、シルバーとオサムのことか心配だわ。」

タ「そういえば、シルバーとオサムとはしばらく会ってなかったな。」

カスミとタケシは、以前オキ島で出会ったシルバーとオサムのことか心配になった。

ベ「ねえ、カスミちゃん、タケシ君。シルバーとオサム君って誰？」

カスミとタケシ以外はシルバーとオサムについて知らない。

タ「オサムは俺達がこの先のオキ島で出会ったランターンを連れてきた子なんだ。シルバーってのは、オサムやランターンと仲良く遊んでいるポケモンだよ。」

マサ「どんなポケモンなの？」

カ「あゝ、それはアタシ達の口からは言えないわ。」

リュウカ「えっ!? どうしてですか?」

タ「・・・まあ、行けば分かるよ。」

タケシとカスミの返答にベル、マサト、フルーラ、リュウカは訳が分からなかった。だが、オキ島に行けばすぐに分かることなので、とりあえずはこの洞窟を抜けることにした。

フルーラ「あつ、出口が見えたわ。」

タケシ達はオキ島へ続く洞窟の出口を見つけた。

タ「あの先がオキ島だ。」

タケシ達はようやく洞窟を抜け、オキ島へと到着した。

ベ「うわあ、凄く良い景色だわ。」

フルーラ「本当ね。」

ベルとフルーラは洞窟を抜けた直後に見えた景色に酔いしれていた。

タ「感動してるところ悪いが、俺たちの目的を忘れないでくれよ。」

ベ「あつ、そうだった。ごめんね、タケシ君。」

フルーラ「わたしもごめんね。」

タケシ達はシルバーがいるであろう岩場へと向かった。その頃、

？「うわあ！？ やったな、シルバー。」

シルバーはとある少年と1匹のランタンとで仲良く水遊びをしていた。この少年の名前は、オサム。シルバーとは、ひよんなことから出会い、いつも仲良く遊ぶ仲である。

オサム「ん？ 誰かくる……。シルバー、隠れてて。」

オサムの指示に従ってシルバーは海中へと隠れた。

カ「あつ、オサムだ。久しぶり！」

オサム「なぐんだ。タケシとカスミが。」

タ「ごめんごめん、びっくりさせてしまつて。」

オサムは人影の正体が、カスミとタケシ達だったことに安心しようだ。

オサム「本当に久しぶりだね。ところで、そちらの方たちは。」

カ「全員、アタシ達の仲間よ。」

オサム「そうだったんだ。僕、オサム。この近くに住んでるんだ。」

オサムが自己紹介すると、タケシとカスミの後ろにいたベル、マサト、フルーラ、リュウカが、

ベ「わたしはベル。よろしくね、オサム君。」

マサト「僕はマサト。初めまして。」

フルーラ「わたし、フルーラ。よろしくね。」

リュウカ「わたし、リュウカ。」

笑顔でオサムに自己紹介をした。

オサム「みんな初めまして。ところでサトシは？」

カ「サトシとは訳あって別行動よ。」

オサム「そうなんだ。」

オサムはサトシがいないことに不思議がったが、カスミの答えに納得したようだ。

オサム「この人たちがタケシヤカスミの仲間なら安心だね。出てきて、シルバー。」

オサムが呼ぶと、シルバーと呼ばれたルギアの子供が現れた。

べ「嘘っ!?!」

マサ「これって、ルギアだよね。」

フルーラ「うん、正しくルギアよ。」

リュウカ「でも、本来より小さくないですか？」

オサム「シルバーは子供なんだ。」

リュウカの質問に、オサムがシルバーの頭をなでながら答える。

カ「久しぶり、シルバー。」

タ「俺たちのことを覚えているか？」

すると、シルバーはカスミとタケシのもとへ近寄り、可愛い鳴き声を上げた。どうやら、タケシとカスミのことは覚えているようだ。

ベ「うわあ、可愛い。わたしにも見せて。」

マサ「僕にも。」

ベルとマサトがシルバーに近づくと、シルバーは警戒してオサムのもとへと戻った。

オサム「シルバー、この人たちは悪い人たちじゃないから安心して。」

オサムがシルバーに説明する。

リュウカ「どうしたんですか？」

オサム「シルバー、見知らぬ人に対して警戒心があるんだ。」

カ「以前、襲われたこともあるしね。」

シルバーは以前ロケット団に襲われた経緯があるため、初めて会うベル、マサト、フルーラ、リュウカを警戒している。

べ「シルバー、わたしたちはあなたに危害を加えるつもりはないわ。」

マサ「僕たちは君と仲良くなりたいたけなんだ。」

リュウカ「だから、安心して。」

ベル、マサト、リュウカが説得するも、未だシルバーは警戒している。

フルーラ「あつ、そうだ。ねえ、ここはわたしに任せて。」

タケシ、ベル、マサト、リュウカ、オサムはフルーラが出てきたことにキョトンとした。カスミだけはフルーラが今から何をするのかが分かっているようで、ふふふと薄ら笑いを浮かべている。

フルーラ「世界の海深くに潜みし神の子供よ、我ここに優しき音色を捧げる……。」

フルーラは鞆をおろすと持ってきた貝殻の笛を取り出し、シルバ―に聞かせるように吹き始めた。

べ「綺麗な音色ね。」

リュウカ「ホント。」

その場にいた者たちは、フルーラが奏でる笛の音色に酔いしれた。シルバーも次第に警戒心を解き始め、ベル、マサト、フルーラ、リュウカに近づいた。

べ「すごいわ、フルーラちゃん。」

マサ「さすがはアーシア島の巫女さんだね。」

フルーラ「わたしはただ、やれることをやっただけで。」

リュウカ「でも、凄いですよ。」

ベル、マサト、リュウカはシルバーの頭を順番になでながら、フルーラに感謝する。感謝の言葉にフルーラは、恥ずかしそうに答えた。

オサム「フルーラさん、本当にありがとう。」

フルーラ「さっきも言ったけど、当然のことをしたまでよ。それとわたしのことは呼び捨てでいいわよ。」

お礼を言うオサムに、フルーラは笑顔で返した。その後、シルバーと仲良くなったベル、マサト、フルーラ、リュウカは楽しそうにシルバーと遊んでいた。

カ「ところで、オサム。最近何か変わったことなかった？」

オサム「そういえば、最近怪しい人達がこの辺をうろついているのを見たよ。僕もシルバーやランタンと見つからないように隠れて大変だったよ。」

タ「そっか。ここもあまり安全じゃないな。」

すると、突然、ところから無数の網が飛び出してシルバーを捕え

た。そして、目の前には巨大潜水艦が出現した。

オサム「シルバー!?!」

ベ「一体、なんなの?」

ベルが叫ぶと、

?「なんだかんだと聞かれたら・・・。」

?「答えないのが普通だが、特別に答えてやるつ。」

?「この2人だけじゃないぞ。」

?「俺たちもいるんだ。」

?「前回の借りを返しに来たぜ。」

巨大潜水艦とともに現れたのは、ヤマトとコサン・・・コサブロウ、○山線トリオだった。

タ「ヤマトに!」

カ・マサ「コサンジ!」

ベ「それに○山線トリオ!」

いつもどおりの展開に、コサブロウと○山線トリオは、

コサ「コサブロウだ! いい加減名前を覚えろ!」

カミ「○山線トリオって言うな！」

シモ「というよりも、作者。手抜きして○山線トリオで済ますな！」

なんか、文句ある（怒） by 天の河

シモ「いえ、ありません・・・。」

分ければよろしい。

フルーラ「ねえ、カスミ。あの人達誰？」

ヤマト、コサブロウ、○山線トリオとは初対面のフルーラがカスミに聞いてきた。

カ「アイツらは、ロケット団と言ってポケモンを悪いことに使う悪党よ。」

ヤマト「悪いこととは人聞きが悪いわね。」

ナカ「有効活用と言ってほしいものだ。」

ヤマトとナカオタイの返答に、

リュウカ「どこが有効活用よ！」

ベ「ポケモン達を強引な手で捕まえてるくせに。」

怒りを露わに言葉に出すリュウカとベル。

カミ「やかましい！ こうなったら、ドククラゲ達よ。やっておしまい。」

すると、潜水艦を囲うように無数のドククラゲ達が出現した。

タ「俺たちも戦うぞ。行け、ルンパツパ！」

ルンパツパ「ルンパルンパ！」

カ「お願い、サニーゴ！」

サニーゴ「サアアango！」

ベ「チラーミイ、あなたもお願い！」

チラーミイ「チラア！」

タケシはルンパツパ、カスミはサニーゴ、ベルはチラーミイで応戦した。

カミ「ドククラゲ達よ、一斉にどくばり攻撃！」

タ・カ・ベ「くっかわせ（かわして）！」「」「」

ルンパツパは持ち前のステップで、サニーゴとチラーミイも難なくかわした。

ベ「チラーミイ、くすぐるよ。」

チラーミィ「チラー！」

チラーミィはドククラゲに近づき、

チラーミィ「チラチラチラ．．．。」

くすぐるをドククラゲ達に喰らわす。ドククラゲ達はあまりのくすぐったさに身動きが取れなくなった。

ベ「今よ、タケシ君、カスミちゃん。」

タ「すまない、ベル。ルンパツパ、タネマシガン！」

カ「サニーゴ、とげキャノン！」

ルンパツパ「ルウウウンパ！」

サニーゴ「サアアアニイイ！」

ルンパツパのタネマシガン、サニーゴのとげキャノンがドククラゲ達に命中する。

カミ「くっ、何をやってる。ドククラゲ、あのチビに一発かましておやり。」

ドククラゲ達がチラーミィに掟破りの1対多の攻撃を仕掛けようとする。

ベ「こうなったら、一か八かよ。チラーミィ、メロメロ。」

チラーミィ「チラ．．．チラア。」

チラーミィがドククラゲに対して、メロメロを繰り返す。

コサ「ふん、そんな技。性別が同じなら意味がない。」

ところが、コサブロウの言葉とは裏腹に、ドククラゲ達は全てメロメロ状態になった。ベルのチラーミィはオス、つまり、ドククラゲ達は全てメスということである。

ヤマト「何!? 一体、どういうことよ。」

ナカ「お前達、しっかりするんだ。」

ナカオタイが必死でドククラゲ達に問いかけるが、メロメロ状態のため技が出せずにいる。

カ「今よ、サニーゴ。もう一度、とげキャノン!」

タ「ルンパツパ、お前もだ。もう一度、タネマシンガン!」

サニーゴとルンパツパの攻撃がドククラゲに命中する。さらに、バトルの最中にマサト、フルーラ、リュウカがシルバーを網から解放した。

シモ「ちっ、ここはひとまず撤退だ。」

シタオタイがそう言うと、ロケット団達はドククラゲ達を置いていて、潜水艦とともに海深くへと姿を消した。

オサム「シルバー！」

オサムがシルバーの無事を確認する。

オサム「シルバー、どこもけがないか？」

オサムの言葉にシルバーは大丈夫だと言わんばかりに羽根をばたつかせた。

オサム「みんな、どうもありがとう。」

タ「当然のことをしたまでだよ。」

ベ「それにシルバーが無事でよかったわ。」

オサムの御礼に、タケシとベルが返事を返していると、ロケット団に見捨てられた格好になったドククラゲ達が散り散りに沖合へと出ていった。

マサ「どうやら、ロケット団。野生のポケモンをも悪用してたみたいだね。」

リュウカ「全く、なんて奴らよ。」

リュウカはロケット団に対して、さらに怒りを露わにした。

フルーラ「ここは危ないわ。とりあえず、シルバーを安全な所へ避難させましょう。」

オサム「うん。」

タケシ達は先程ロケット団に捕えられそうになったシルバーをひとまず安全な場所へと避難させることにした。この時、この選択が逆にシルバーを危険にさらす目になるとは誰も知る由がなかった。

一方、ヤマト達は、

ヤマト「ルンバ博士。申し訳ありません、ルギアの子供の捕獲任務に失敗しました。」

ルンバ「ナンバじゃ。作者まで、間違えるでない。」

すみませんでした(汗) by 天の河

シモ「ところで、トンバ博士。次はどのような作戦でいきましょうか？」

ナンバ「ナンバじゃ、何度言わせたら分かる。その点については、安心するがよい。すでに次の手は打っておる。その際もお前たちに逝ってもらうがな。」

コサ「あの、ボサノバ博士。字間違えてますよ．．．。」

ナンバ「ナン．．．もうよい。そんなことより、お前たちは次の作戦まで全員待機じゃ。」

ヤマト・コサ・カミ・ナカ・シモ「はっ！」「」「」

ヤマト達はナンバ博士の部屋から出て行った。

ナンバ「うむ、なんとしてもシラヌイよりもルギアを捕獲せねば
」。。

どうやら、シラヌイ博士とナンバ博士は別々にルギア捕獲任務の
指揮を執っているようである。ようやく本格始動したロケット団。
サトシ達の運命は!?

続く

シルバーとの再会（後書き）

そんなシルバーに新たな危機が訪れる・・・

シルバーの危機（前書き）

シルバーを別の場所にかくまうことになったタケシ達。そんな彼らにまたもや危機が迫る！？

今回は、オリジナルのロケット団幹部を出します。後書きの方に掲載。

シルバーの危機

ヤマト、コサブロウ、○山線トリオの襲撃に遭い、シルバーをとらえられそうになったオサムとCグループの面々。一旦、シルバーを安全なところに避難させることにした。

オサム「とりあえず、この洞窟に避難しよう。」

フルーラ「そうね、ここなら人気もないし。」

オキ島にあるとある洞窟にシルバーとともにしばらく身を隠すことにした。一行はシルバーを連れて、洞窟内へと入っていった。

タ「まさか、またロケット団がこの島に現れるとはな。」

マサ「また?」

カ「ええ、さつきシルバーが襲われたって言ったでしょ。その時もロケット団に捕まったのよ。」

タ「奴らの本当の目的はルギアを捕まえることだったんだが、そのルギアの子供を捕まえて誘き寄せようとしたんだ。あの時は怒ったルギアが暴れてうずまき列島中を襲ったこともあったな。」

ベ「ホントに酷いことするわね。」

リュウカ「それだけの理由で、子供を捕まえるなんて。」

カ「ええ。あの時は大変だったわ。」

フルーラ「でも今回は捕まる前にわたし達で守ってあげましょ。」

ロケット団に捕えられる前にシルバーを守ろうと決意した、その時、

？「それはどうですかな。」

？「その決意も無駄になることでしょうか？」

どこからか人の声がシルバーを守っている面々の耳に入った。

べ「だ、誰!？」

すると、彼らの目の前に2人の人物が現れた。

タ「お前たちは一体何者だ！」

シュンカン「我が名はロケット団特務工作部幹部、シュンカン。」

クギヨウ「同じく、クギヨウ。」

その2名は、シュンカン、クギヨウと名乗った。

カ「ロケット団ですって!？」

オサム「どうしてここが？」

シュンカン「この洞窟を拠点として、ルギア捕獲任務のための準備をしていたのですよ。」

マサ「じゃあ、オキ島や銀岩島の怪しい集団って．．．。」

クギヨウ「ええ、あれは我々ロケット団の者達ですよ。彼らは今回の任務の調査担当の者です。」

オサム「それじゃあ、さつき岩場で僕達を襲ったのは．．．。」

クギヨウ「あれは我々とは別行動のロケット団です。」

シンカン「そろそろ、今回の任務を始動させようと思いき出そうと思ったのですが、そちらから出向いてくれるとはこれは我々としても好都合でした。」

クギヨウ「我々の所にルギアを差し出してくれるとは、感謝しますよ。」

シンカンとクギヨウの言葉に、

カ「誰がアンタ達に渡すものですか！」

ベ「それに感謝される筋合いなんて全くないわ！」

オサム「シルバーは絶対に渡さない！」

カスミ達はシルバーを庇うように前に出て、シンカンとクギヨウを睨み付けた。

シンカン「どうやら、我々はあまり歓迎されていないようですね。」

「

クギヨウ「手荒なことは避けたかったのですが、仕方ありません。」

シュンカンとクギヨウはモンスターボールを取り出し、そして投げた。出てきたのは、ゴローニヤとナットレイだった。

タ「頼む、ルンパツパ！」

ルンパツパ「ルンパ！」

カ「もう一度、お願い。サニーゴ。」

サニーゴ「サンゴ！」

ベ「あなたも、チラーミイ。」

チラーミイ「チラア！」

タケシはルンパツパ、カスミはサニーゴ、ベルはチラーミイでゴローニヤとナットレイに応戦するが、先程のバトルで3体には疲労がたまっている。ちなみに、タケシ、カスミ、ベルの他のポケモンは、黄岩島のポケモンセンターで預けてしまっている。

シュンカン「あなた達、ふざけているのですか。まあ、いいでしょう。ゴローニヤ、きあいだま。」

ゴローニヤのきあいだまがルンパツパ、サニーゴ、チラーミイに襲い掛かる。きあいだまは命中率の低い技だが、疲労困憊で思うように動けない3体に命中した。

タ「ルンパツパ！」

カ「サニーゴ！」

ベ「チラーミイ！」

その後もゴローニヤ、ナットレイに応戦するが、どの攻撃もことごとく外れて、逆に相手からの攻撃を受けてしまっ一方的な展開となってしまうた。

タ「ルンパツパ、タネマシンガン。」

カ「サニーゴ、バブルこうせん。」

ベ「チラーミイ、ハイパーボイス。」

3方向から攻撃を仕掛ける。これなら、比較的すばやさの低いゴローニヤとナットレイに命中する、はずだつた。

シュンカン「ゴローニヤ。」

クギヨウ「ナットレイ。」

シュンカン・クギヨウ「じならし。」

疲労困憊で技を出すスピードが格段に落ちている隙を突かれ、技を出す前にゴローニヤとナットレイのじならしを受けてしまい、失敗してしまつた。

シュンカン「クギヨウ、そろそろ終わりにしましょう。」

クギヨウ「ええ、少し予定が狂ってますし。」

シュンカン「ゴローニヤ、ロックブラスト。」

クギヨウ「ナットレイ、ジャイロボール。」

ゴローニヤとナットレイの攻撃がルンパツパ、サニーゴ、チラーミイに命中する。

ルンパツパ「ルンパ！」

サニーゴ「サニイイ！」

チラーミイ「チラアア！」

タ「ルンパツパ！」

タ「サニーゴ！」

ベ「チラーミイ！」

とうとう、3体は倒れてしまった。そして、シュンカンとクギヨウはシルバーを庇っていたいたオサム、フルーラ、マサト、リュウカに近づいていく。

クギヨウ「邪魔です。エアームド、ふきとばし。」

クギヨウはもう一体、エアームドを出すと吹き飛ばしを指示した。

オサム・マサ「うわあああ！」

フルーラ・リュウカ「きゃああああ！」

オサム、マサト、フルーラ、リュウカは成す術なく、吹き飛ばされてしまった。そして、シルバーはシュンカンによって檻に入れられ、捕えられてしまった。

シュンカン「最後に置き土産です。」

すると、ゴローニヤとナットレイが自爆を発動。大きな音とともに、上から岩が次々と落ちてきた。シュンカンとクギヨウは素早くゴローニヤとナットレイを戻して、その場から姿を消した。

タ「いかん、ここは一旦引くぞ。」

タケシ達は急いで洞窟を抜けだした。そして、一度体勢を立て直すために銀岩島へと戻ることにした。

続く

シルバーの危機（後書き）

オリジナルロケット団幹部の設定

1. シュンカン

名前の由来：平安時代の僧『俊寛』より

性格：冷酷で残忍、シラヌイ博士に忠実

ポケモン：

1. ゴローニャ

技：きあいだま、じならし、ロックブラスト、じばく

2. クギヨウ

名前の由来：鎌倉時代の僧『公暁』より

性格：シュンカンと同じ

ポケモン：

1. ナットレイ

技：メタルクロー、じならし、ジャイロボール、じばく

2. エアームド

技：ふきとばし、エアスラッシュ、きんぞくおん、ラス

ターカノン

とりあえず、簡単なキャラ設定です。物語の進行につれて、追加の予定です。

銀岩島の洞窟（前書き）

サトシ達Aグループ視点で進行します。

うずまき列島の地理については、本家でもあまり触れていなかったもので多少捏造しております。

銀岩島の洞窟

タケシ達がロケット団の襲撃に遭っていた頃、銀岩島の途中まで同行していたAグループはオキ島に続く海底洞窟とは反対側の洞窟に向かっていた。そして、洞窟に近づくにつれある異変に気付いた。マリナ「見て。洞窟の中にいるはずのポケモン達が外に出てるわ。」

普段は洞窟内に潜んでいるはずのズバットや岩ポケモンの大群が洞窟の外に出ていたのである。

ヒ「ホントだ。洞窟内で何かあったのかしら？」

シゲル「うーん、一応こういう現象は報告されていたんだけど、こ
うも酷いとは思わなかったな。」

サ「とりあえず、真相を確かめに洞窟に行ってみるしかないようだ
な。」

サトシ達が洞窟に向かって歩みを進めていると、

ハル「見て、あれ。」

サ「どうしたんだ、ハルカ？」

ハルカの指さす方を向くと、そこには1匹のキノココが倒れて蹲
っていた。

ケンタ「お、おい、このキノココ怪我してるじゃないか。」

マリナ「ホントだわ。」

キノココは見ただけで分かるくらいの傷をつくっていた。

シゲル「大変だ、すぐに手当てしないと。」

キノココ「キノ！」

そう言つとシゲルはバッグからいい傷薬を取り出して、キノココの傷の手当てを試みる。だが、キノココは抵抗して、シゲルが持っているいい傷薬をはたき落とした。

シゲル「キノココ、僕は君に危害を加えるつもりはないんだ。」

マリナ「ただ、あなたの傷の手当てをさせていただけなの。」

ハル「だから、落ち着いて。」

キノココ「キノ。。。。」

シゲル、マリナ、ハルカがキノココを説得しようとするが、未だキノココは警戒している。傷の手当てが出来ずに困り果ててしまう一同。すると、サトシがキノココに近づく。

キノココ「キノ！」

サ「ウツ！」

ハル・ヒ「サトシ！」

キノココは近くに落ちていた木の実をサトシに投げつける。サトシは一瞬痛がるそぶりを見せるが、ハルカとヒカリの心配をよそにキノココに再び近づこうとする。

サ「ほら、大丈夫だ。俺たちはお前を助けただけなんだ．．．。」

サトシは笑顔で近づきながら、キノココを優しく抱き上げた。

キノココ「キノ．．．キノ。」

キノココは落ち着きを取り戻し、サトシの腕の中に身を委ねる。

サ「シゲル、早くキノココの手当てを。」

シゲル「ああ、分かった。それにしても凄いな、サトシは。」

ケンタ「さつきまであんなに抵抗してたキノココをいとも簡単に落ち着かせたんだもんな。」

サ「いやあ、当然のことをしたまでだよ。」

照れながら言うサトシを、改めて凄いと思う一同。その後、キノココの手当ても終わり、サトシ達は再び洞窟へと歩みを進め、ようやく洞窟の入り口付近に到着した。

マリナ「ここね。」

シゲル「ああ、この洞窟にいるべきポケモン達が追い出されるようにして外に出ていた。この洞窟に何か真相があるということは間違

いないよ。」

サ「それなら、早速中に入ってみようぜ。」

サトシ達は洞窟付近に洞窟内のポケモン達がいることの真相を探るため、洞窟内へと入っていった。洞窟の中は、薄暗く何ら変哲もないものだった。ただ一つ言えることは、ポケモン達の気配が全くと言っていいほどなく、不気味な雰囲気醸し出している。

ハル「ただ今、ハルカ探検隊はポケモン達の異常行動の真相を探るため、銀岩島のある洞窟内に潜入しております。」

お馴染みのハルカ探検隊の登場である。こんな状況下でやるのもどうかと思うが、洞窟内の不気味な雰囲気払拭するためにはありがたいハルカの行動である。するとそんなハルカの行動に触発されたのか、ヒカリのポツチャマと、サトシのモンスターボールからミジユマルが飛び出して、

ポ「ポツチャマ！」

ミジユマル「ミジユマ！」

ヒ「ポツチャマ？」

サ「ミジユマル？」

ポツチャマとミジユマルは「僕たちに任せろ！」と言わんばかりに、サトシ達の先を胸を張りながら進んでいき、とうとうサトシ達の視界から消えてしまった。暫しの沈黙の後、

ポ「ポチャアアアア！」

ミジユマル「ミイイジュ！」

2体は血相を変えて戻ってきた。すると今度はサトシのピカチュウ、ケンタのバクフーンの背中に移動し、

ポ「ポオオチャ。」

ミジユマル「ミイイジュ！」

ピ「ピイイイ……。」

バクフーン「バアク……。」

「兄貴、頼みます！」と言わんばかりに2体の背中を押しして自分達より先に行かせようとする。

ケンタ「あいつら、どうしたんだ？」

ポツチャマとミジユマルの行動に疑問を抱くケンタ。するとそこへ、

ゴゴゴゴゴゴ！

サイドン「サアアアイ！」

大きな地響きとともにサトシ達の目の前に数体のサイドンが現れた。

サ「サイドンだ！」

マリナ「いくらなんでも、多過ぎよ。」

シゲル「とにかく、ここはいったん引くぞ。」

今のサトシ達の手持ちのポケモンでは到底無数のサイドンには応戦できないため、サトシ達はいったん引くことにした。

サ「戻れ、ミジユマル！ ピカチュウも逃げるぞ。」

ピ「ピイカ！」

ヒ「ポツチャマも急いで！」

ポ「ポチャ〜。」

ケンタ「バクフーン、お前もだ。」

バクフーン「バク！」

一目散に洞窟の出口へと急ぐサトシ達。だが、

サイドン「サアアアイドオオン！」

ここでサイドンの地割れが炸裂した。

ヒ・マリナ「「キヤア！」

サ「ヒカリ！」

ケンタ「マリナ！」

地割れによって地面に割れ目ができて、マリナとヒカリはそこから落ちそうになる。2人を助けようと、サトシはヒカリの腕、ケンタはマリナの腕をつかむが、

ヒ・マリナ「「キヤアアアアア！」

サ・ケンタ「「うわあああああ！」

ピ「ピイイイカアアア！」

ポ「ポオオオチャアアア！」

バクフーン「バアアアク！」

シゲル「サトシ、ケンタ！」

ハル「ヒカリ、マリナ！」

シゲルとハルカの叫びも空しく、4人は地面の割れ目からポケモン達もろとも洞窟の下層部へ落ちてしまった。

シゲル「くっ、僕たちは出口へ急ぐ。」

ハル「でも、サトシ達が。」

シゲル「悔しいけど、今の僕たちでは助けに行けない。今は出口に向かうことだけを考えよう。」

ハル「・・・サトシ、ヒカリ、ケンタ、マリナ。ごめんね。ムウマ、あなたも一緒に出口に急ぎましょう。」

ムウマ「ムウ・・・。」

下層部へ落ちていった4人に謝りつつ、シゲルとともに出口へと急いで向かうハルカ。マリナのムウマは、主人が落ちていった地面の割れ目を悲しげに見つめながらシゲル、ハルカとともに急いで洞窟を抜けていった。洞窟の下層部へと落ちていったサトシ、ヒカリ、ケンタ、マリナの運命やいかに！？

続く

銀岩島の洞窟（後書き）

洞窟の下層部へと落ちていったサトシ、ヒカリ、ケンタ、マリナに
さらなる災難が・・・

洞窟の謎（前書き）

ちょっと前に出てきたキノココですが、後に判明しますが野生のポケモンではありません。ジヨウトにはキノココはいないと違和感を持たれた方もいらっしゃると思いますが、そのところはご了承ください。

後、今回の話は著しく視点が変わるので、読みづらいかもしれません。

では、どうぞ！

洞窟の謎

サイドンの地割れによって出来た地面の割れ目から洞窟の下層部に落ちてしまったサトシ達。果たして彼らは無事なのだろうか。．．

ヒ「ん、んん。はっ、みんな大丈夫？」

サ「ん、何とか．．。」

マリナ「こつちも大丈夫よ。」

ケンタ「でも、体中が痛い．．。」

ピ「ピイカ．．。」

ポ「ポチャア．．。」

バクフーン「バアク．．。」

どうやら、落ちたところがたまたま柔らかかな地表だったため、全員比較的軽症で済んだようだ。

マリナ「これからどうする？」

ケンタ「上には戻れそうか？」

ヒ「掴むところがないし暗いし、それは無理みたい．．。」

サ「それなら、他の出口を探しにいこうぜ。」

マリナ「そうね。」

サトシ達は、上には戻れそうにないので自分たちが落ちた階層を進んでいくことにした。

side in ロケット団

クギヨウ「シラヌイ博士、こちらが例のものです。」

シラヌイ「ご苦労。では早速プロジェクト遂行のため、バシヨウとブソンのもとへ輸送する。」

ロケット団員達「はっ!」

クギヨウ、シュンカンが捕獲したシルバーはロケット団の潜水艦へ運ばれ、バシヨウとブソンのもとへと輸送された。

シュンカン「シラヌイ博士、我々はどういたしましょう。」

シラヌイ「こちらはバシヨウとブソンに任せる。クギヨウ、シュンカンには今回のプロジェクトと同時進行で進めているプロジェクトにあたってほしいと上層部から要請があった。」

クギヨウ「では、我々はそちらのほうに向かいます。」

シラヌイ「是非、あたってくれ。」

シユンカン「かしこまりました。」

クギヨウとシユンカンは次のミッションにあたるため、うずまき列島を後にした。

side out

サトシ達は別の出口を探しに、ひたすら歩みを進めていた。

ヒ「随分、奥深くまで来たわね。」

ケンタ「どうやら、俺たち道に迷ったみたいだな。」

サトシ達は道に迷ってしまったようだ。洞窟の暗闇の中、さらには先程のサイドンの影響で本来の道から外れてしまったのだから無理もないだろう。ちなみにサトシ達の手持ちのポケモンに、フラッシュユが使えるポケモンはいない。

マリナ「ムウちゃん。大丈夫かしら？」

マリナは落ちる際に残ってしまったムウマのことが心配になった。

サ「大丈夫だよ、マリナ。シゲルやハルカと一緒にいるんだ。」

ヒ「そうよ。だからアタシ達は出口を探すのに集中しましょう。」

ケンタ「このまま立ち止まっても、埒が明かないしな。」

マリナ「・・・そうね。ムウちゃんは大丈夫よね。みんなありがとう。」

サトシ、ヒカリ、ケンタの励ましにより、マリナは不安が解消されて気分が晴れたようだ。そして、4人は再び歩み出した。

side in ロケット団

ロケット団A「バショウ様、何者かがこちらのアジトに侵入した模様です。」

バショウ「そうですか、それは弱りました。」

ロケット団員の侵入者報告に、渋い表情を浮かべるバショウ。

ロケット団A「どのように対処しましょうか?」

バショウ「あなたは、他の団員たちとともにここに残ってください。侵入者の排除には私とブソンが行きます。」

ロケット団A「かしこまりました。」

ロケット団Aは本来の持ち場へと戻っていった。

バショウ「では行きますよ。ブソン。」

ブソン「ふっ、丁度体がなまってたところだ。久しぶりに腕が鳴るぜ。」

バショウとブソンは侵入者排除に向かった。

ヒ「ねえ、さっきから誰かに見られている気がするんだけど。」

サ「そうか？ 別に何ともないけど。」

ケンタ「ポケモンじゃないのか？」

ヒ「ううん。そうじゃなくて、何か鋭い目つきでにらんでいるような・・・今は、忘れて！ アタシの思い過ごしかもしれないから。」

マリナ「そう。」

ヒカリは自分が感じる気配についてこれ以上触れないことにした。しかしすぐに、ヒカリのは思い過ごしではなかったことを知る。

ブウウウ、シンニユウシャハツケン！

突然ブザー音とともに放送も流れた。

サ「一体なんなんだ!？」

サトシ達に緊張が走る。すると、サトシ達の目の前にケンタ、マ

リナにとっては会いたくない人物2人が現れた。

ブソン「おやおや、侵入者の正体はいつかのヒーローボーイ達か。」

バシヨウ「前回とは少々顔ぶれが違いますがね（それにしても、写真の少年がいるとは……。）。」

ケンタ「バシヨウ！」

マリナ「ブソン！」

突然登場したバシヨウとブソンを睨むケンタとマリナ。

サ「あいつらのこと、知ってるのか？」

ケンタ「知ってるの何も、あいつらもロケット団だ。」

マリナ「あいつらは以前、伝説のポケモンライコウを狙ったことがあるのよ。」

ヒ「てことは、悪い奴らには変わりないわね。」

ケンタとマリナの話サトシとヒカリもバシヨウとブソンを睨む。

バシヨウ「どうやら、私達は相当嫌われているようですね。」

ブソン「まっ、そんなこと怖がってたらロケット団なんて務まらないけどな。」

バシヨウ「どのみち、彼らは我々のプロジェクト遂行には邪魔な存

在です。今すぐここで始末しましょう。」

ブソン「あいつらには少々痛い目に遭ってもらわないとな。」

バシヨウはハガネール、ブソンはエアームドを出した。さらには2、3体のゴルバットまでもが飛び出してきた。

バシヨウ「ハガネール、ストーンエッジ。」

ハガネールのストーンエッジがサトシ達に襲い掛かる。

ピ「ピイイカチュウウウウ！」

ピカチュウの10万ボルトでなんとか防ぐことが出来た。

サ「サンキュー、ピカチュウ。」

ピ「ピツカ！」

ピカチュウは臨戦態勢に入る。

ケンタ「お前も行くんだ、バクフーン。」

ヒ「ポツチャマ、お願い。」

マリナ「あなたもお願い、ワニワニ。」

バクフーン「バアク！」

ポ「ポチャア！」

オーダイル「オオオダイル！」

ケンタはバクフーン、ヒカリはポッチャマ、マリナはオーダイルのワニワニで応戦した。

ヒ「ポッチャマ、うずしお。」

マリナ「ワニワニ、みずのはどう。」

ポッチャマのうずしお、ワニワニのみずのはどうがバシヨウのハガネールに向かう。だが、

ブソン「ゴルバット、エアスラッシュで吹き飛ばせ。」

ゴルバット達のエアスラッシュによって、うずしおとみずのはどうは吹き飛ばされてしまった。

サ「それなら、ピカチュウ。アイアンテール。」

ケンタ「バクフーン、かえんぐるま。」

ピ「ピイイイカアアア！」

バクフーン「バアアアク！」

ピカチュウのアイアンテール、バクフーンのかえんぐるまは見事ゴルバットに命中するが、

バシヨウ「ハガネール、はかいこうせん。」

ブソン「エアームド、お前もはかいこうせん。」

ピッコピイカア。」

バクフーン「バアアア。」

ハガネールとエアームドのはかいこうせんがピカチュウとバクフーンに直撃してしまった。

サ「ピカチュウ!?!」

ケンタ「バクフーン!?!」

さらには、無数のリングがサトシ達めがけて飛んできて、サトシ達はおろかポケモン達の身動きを封じ込んでしまった。

ヒ「な、なんなのよ、これ。」

バシヨウ「あなた達に好き勝手やられると困りますのでね。少し、おとなしくしていただきますよ。」

サ「卑怯だぞ、お前ら!」

ブソン「卑怯も何も、俺たちは最初からお前たちとバトルしようなんざ考えてなかったんだよ。お前たちを始末することが目的だったしな。」

ケンタ「くっ……。」

サトシ達はバシヨウとブソンを睨み続ける。

バシヨウ「このまま手ぶらで帰るのは少々惜しいですね。ではこのピカチュウとポッチャマを頂きましょう。小柄な体格の割にはかなりバトル慣れしてるようですし、我々の戦力としては申し分ないでしょう。」

すると、マジックハンドがピカチュウとポッチャマに向かってきた。

マリナ「ピカチュウ！」

ヒ「ポッチャマ！」

マリナ・ヒ「危ない！」

マリナとヒカリは、捕まりそうになる2体をかばおうと身動きが出来ない状態で飛びかかった。

マリナ・ヒ「キャアアアア！」

サ「ヒカリ！」

ケンタ「マリナ！」

ピカチュウとポッチャマの代わりにマリナとヒカリがマジックハンドに捕まってしまった。

マリナ「ちょっと、離してよ！」

ヒ」「そっよそっよ。」

マリナとヒカリはマジックハンドから逃れようと、必死に暴れる。

ブソン「こいつら、少々黙らせないといけないようだな。モジャンボ、ねむりごな。」

ブソンはもう一体モジャンボを出すと、モジャンボはねむりごなをマリナとヒカリに振りまいた。

マリナ・ヒ「ちよつとなにすんの・・・zzz。」

ねむりごなを浴びたマリナとヒカリはそのまま眠ってしまった。

バショウ「捕まえようとしたのとは違いますが、まあいいでしょう。彼女たちは人質として使えそうですし。」

サ「やめろ！ ヒカリとマリナを離せ。」

バショウ「ハガネール、すなあらし。」

ブソン「エアームド、ゴルバット、エアスラッシュ。」

サ・ケンタ「うわああああ！」

サトシの叫びを無視するかのようになり、バショウとブソンはすなあらしとエアスラッシュをサトシ達にお見舞いした。サトシ達はすなあらしで思わず目を瞑ってしまう。

ブソン「じゃあな、ヒーローボーイ。」

次に目を開けた時には、ヒカリとマリナは連れ去られた後だった。サトシとケンタ、そして連れ去られたヒカリとマリナの運命やいかに！？

続く

洞窟の謎（後書き）

ヒカリとマリナは一体どうなる!？

ヒカリ、マリナを救え！ ～前編～（前書き）

今回、ヒカリとマリナは同じくロケット団によって捕まったあのポケモンと対面します。

そして、洞窟の入り口付近にいたキノココの秘密も明らかになります。

ヒカリ、マリナを救え！ ～前編～

前回、バシヨウとブソンによって、ヒカリとマリナが連れ去られたサトシとケンタ。

ケンタ「だめだ。きつく締められていて全然外れない。」

サトシとケンタ、彼らのポケモン達は今自分たちを縛っているリングを外すのに奮闘していた。

サ「くそ。こうなったら出てこい、ミジュマル。」

サトシはわずかながらに動かせる手で、ボールホルダーからミジュマルが入っているボールをちょこんと投げた。

ミジュマル「ミイイイジユ。」

ミジュマルが元気よく出てきた。

サ「ミジュマル、シエルブレードで俺たちのリングを壊してくれ。」

ミジュマル「ミジユ！」

ミジュマルは任せると言わんばかりに、ホタチをポンツと叩いた。

ミジュマル「ミイイイジユウウ！」

ミジュマルはシエルブレードでサトシ、ケンタ、ポケモン達を縛っているリングを破壊した。

サ「サンキュー、ミジュマル。」

ミジュマル「ミジュミジュ。」

サトシはミジュマルに礼を言う。

ポツチャマ「ポチャ……。」

ポツチャマが落ち込んだようにうなだれていた。大好きなヒカリが自分を庇ったせいで捕まったのだから無理もない。

サ「ポツチャマ、心配するな。ヒカリは無事だ。」

ポツチャマ「ポチャ？」

サ「それにお前がそんな顔してたら、ヒカリだって悲しむだろ。だから、俺たちで絶対助けてやろうぜ。ほら、大丈夫大丈夫。」

ピ「ピカピカ。」

ポツチャマ「ポチャ……ポツチャマ！」

ヒカリの受け売りの『大丈夫』を含んだサトシとピカチュウの励ましにより、ポツチャマは立ち直ったようだ。

ケンタ「そうとなれば、一刻も早くヒカリとマリナを助けないとな。」

サ「ああ、でもアイツら何処に行ったんだ？」

サトシとケンタが悩んでいるところへ、今まで隠れていた洞窟のポケモン達が続々とサトシとケンタのもとへ集まってきた。

ケンタ「どうしたんだ、このポケモン達。」

サ「さあ．．．。」

首を傾げるサトシとケンタ。すると1匹のイシツブテが前に出てきて、

イシツブテ「ラッシャイ！」

ピ「ピカ、ピカピカ．．．。」

ポツチャマ「ポチャ？」

ミジュマル「ミジュミジュマ．．．。」

リーフィア「リィフ．．．。」

ピカチュウ、ポツチャマ、ミジュマル、リーフィアに話しかけた。すると今度は、

ピ「ピカピ、ピカピカ、ピカピカ。」

ポツチャマ「ポチャポーチャ。」

ミジュマル「ミジュミジュ。」

リーファイア「リイフライフ。」

何かをアピールするようにサトシとケンタに声を掛ける。洞窟のポケモン達もサトシとケンタの前に出て必死に何かをアピールしている。

ケンタ「ついて来いって、言ってるのか？」

サ「もしかしたら、ヒカリとマリナの居場所知ってるのか？」

すると洞窟のポケモン達はサトシとケンタの先を続々と進んでいった。

ケンタ「とりあえず、ついて行ってみようぜ。」

サ「ああ。」

サトシとケンタは洞窟のポケモン達の後をついていくことにした。

サ（ヒカリ、待ってるよ。）

ケンタ（マリナ、絶対助けてやるからな。）

一方、バシヨウとブソンによって捕えられてしまったヒカリとマリナ。2人は牢屋のようなどころへ連れていかれていた。

ヒ「……ん、ん。はっ、マリナ、マリナは何処!？」

目を覚ましたヒカリが自分と一緒に捕まったマリナを探す。

マリナ「ん〜、あつ、ヒカリ。大丈夫だった？」

ヒ「うん、アタシは何ともないわ。ただ、縛られて思うように動けないけどね。」

マリナ「それはわたしもよ。でもどこも怪我しなくてよかったわ。」

ヒカリとマリナがお互いの無事を確認しているところへ、

ガサガサッ！

ヒ・マリナ「何！？」「」

物音に反応して2人は警戒心を強める。すると暗闇から1匹のポケモンが現れた。

ヒ「う、嘘でしょ！？ マリナ、アタシの頬つぺたつねってみて。」

ヒカリに言われたとおりにマリナはヒカリの頬をつねった。

ヒ「イタタタ。間違いないわ、あれって・・・。」

すると、2人は息を合わせて、

ヒ・マリナ「ルギア!?!」

ヒカリとマリナの目の前に現れたのは、伝説のポケモン・ルギアだった。

マリナ「でも、ルギアにしては小さいわね。」

ヒ「きつとこのルギア、まだ子供なのよ。」

ヒカリとマリナの目の前にいるルギアは子供のサイズだった。ちなみにこのうずまき列島編を見た人ならもうお分かりだと思うが、この子ルギアは先程クギョウとシュンカンが捕まえたシルバーである。

マリナ「この子もきつと、ロケット団に捕まったのね。」

ヒ「可哀そう……。おいで、ルギア。」

ヒカリとマリナが優しくシルバーを呼ぶが、シルバーは怯えと警戒心から寄ってこない。

マリナ「大丈夫よ。わたし達はあなたと仲良くなりたいだけなの。」

ヒ「それにアタシ達も、あなたと同じで捕まっている状態だしね。」

ヒカリとマリナはニッコリと満面の笑顔をシルバーに向けた。すると安心したのか、シルバーはヒカリとマリナにすり寄って来て、頬ずりを始めた。

ヒ「うわあ、この子可愛い。」

マリナ「ホントね。」

シルバーが寄ってきたことによって、ヒカリとマリナの心も自然と和んできた。だが、そこへ、

？「どうやら、その子ルギアはあなた方に懐いたようですね。」

後ろから声が聞こえたので、ヒカリとマリナは笑顔を引っ込めて振り返った。そこには、バシヨウとブソン、バシヨウとブソンの上司・シラヌイ博士、その他ロケット団員が続々と集まっていた。ヒカリとマリナは彼らを鬼の形相で睨み付ける。

ブソン「おやおや、そんなに睨むとせつかくの可愛い顔が台無しだぜ。」

ヒ「アンタなんかに言われても嬉しくないわよ。」

マリナ「そうよそうよ。」

ブソンの皮肉たっぷり言葉に、さらに怒りを強める。シルバーもヒカリとマリナの後ろに姿を隠す。ヒカリとマリナもシルバーを庇おうとする。

バシヨウ「しかし困りましたね。あんなに懐かれてしまわれるとかえってプロジェクトの進行に支障が出るのでは。」

シラヌイ「その点については、大丈夫だ。きちんと考えてある。」

バシヨウの疑問に丁寧な答えるシラヌイ博士。

ヒ「プロジェクトって何よ！」

マリナ「そもそも、この子を捕まえてどうしようって言うの！」

バシヨウ「お前たちが知る必要はない。」

ヒカリとマリナの強みがあった一言を一蹴するバシヨウ。

シラヌイ「まあまあ、バシヨウ。どのみち、彼女たちはここから何も出来ないのだから、我々のプロジェクトR改について簡単に説明してさしあげよう。」

ヒ「プロジェクトR改？」

シラヌイ「今回のプロジェクトは以前、思わぬ邪魔によって失敗に終わったプロジェクトRをさらに改良させたプロジェクトだ。前回の進化強制システムに加え、今回はポケモンの戦闘能力を強制的に高めるシステムを追加したものだ。これにより、最強のポケモンを作り上げ、我がロケット団の勢力を世界に知らしめることが出来る。その子供のルギアはデータ用の親ルギアを捕獲するためのおとりとして捕獲したまでだ。今回のプロジェクトは伝説のポケモンのデータが大量に必要なものでね。」

ブソン「それに実験台のキノココが逃げたから、親ルギア捕獲後には実験台として一役買ってもらおうという役目もあるしな。」

ブソンの一言に、

ヒ「じゃあ、洞窟の外にいたキノココは……。」

ブゾン「あまりにも抵抗するもんだから、少々痛い目に遭ってもらったがな。」

「どうやら、洞窟の外にいたキノココはロケット団によって怪我を負わせられたようだ。」

ヒ「たったそれだけの理由でキノココを。」

マリナ「酷い．．．。」

バショウ「それにしても、あのサイドン達の防御網が侵入を助けたことになるとは、想定外でした。」

ヒ「あのサイドン達も．．．。」

サイドン軍団もロケット団の仕業だった。

マリナ「この子は絶対に渡さないわ!」

ヒ「あなた達の思い通りにさせてたまるものですか!」

ヒカリとマリナはさらにルギアを庇おうとする。

ブゾン「ふん、そんな身動きが取れない状態でどう立ち向かおうってんだ。」

ヒ・マリナ「くっ!」「」

ブゾン「それにお前たちが待っているヒーローボーイは来ないぜ。」

マリナ「そんなことはないわ！」

ヒ「サトシとケンタは絶対に助けに来る。そして、あなた達を絶対にやっつける！」

そんなヒカリとマリナの願いが叶ったのが、

サ・ケンタ「見つけたぞ！」

ヒ「サトシ！」

マリナ「ケンタ！」

続く

ヒカリ、マリナを救え！ ～前編～（後書き）

ヒカリ、マリナ、シルバーを助けるためにサトシ、ケンタ奮闘！

ヒカリ、マリナを救え！ ～後編～（前書き）

救世主、サトシとケンタ登場！

終盤で、サトヒカおよびケンマリ要素を無理矢理入れ込みました。

ヒカリ、マリナを救え！ ～後編～

サ・ケンタ「見つけたぞ！」

ヒ「サトシ！」

マリナ「ケンタ！」

ようやく、ロケット団の今回のプロジェクトの拠点であるマジトにたどり着いたサトシとケンタ。

ブソン「おやおや、ヒーローボーイのお出ませ。」

と、皮肉たっぷりのブソン。

バシヨウ「それにしても、どうしてここが。」

ケンタ「こいつらが案内してくれたのさ。」

サトシとケンタの後ろをよく見ると、そこにはロケット団のアジト建設のために住処を荒らされた無数のポケモン達がいた。

バシヨウ「虫けらどもが。」

すると、シラヌイ博士が今度はサトシとケンタの目の前に出てきて、

シラヌイ「おや、君とは確かいかりのみずつみ以来だったな。」

サ「シラヌイ！」

サトシは面識のあるシラヌイを見て、さらに睨みを利かせる。

ケンタ「知ってるのか、サトシ？」

サ「あいつは以前、いかりのみずうみでポケモンを強制的に進化させようとした奴らの首謀者だ。」

ケンタ「いかりのみずうみ……。赤いギャラドスのことか。」

マリナ「そういえば、そんなニュース聞いたことがあるわ。」

ケンタとマリナは何らかの方法でサトシ達が巻き込まれたいかりのみずうみでの事件は知っていたようだ。

シラヌイ「わたしの事を覚えていたとは、君はなかなかの記憶力だ。」

サ「ふん、お前達見たいにポケモンに酷いことをする悪い奴らは嫌でも覚えるぜ。」

そう言ってサトシはシラヌイ博士を睨み返す。するとヒカリとマリナの後ろに隠れていたシルバーがサトシに気づき前に出てきた。

サ「シ、シルバー！？」

ケンタ「ル、ルギア！？」

サトシは以前うずまき列島での旅で出会ったシルバーがヒカリと

マリナと同じく捕まっている事、ケンタは伝説のポケモン・ルギアがいることに驚いた。

シラヌイ「どうやら君は、そのルギアの事とは面識があるみたいだな。」

サ「シルバーをどうする気だ!」

サトシはシルバーとの再会に浸ってる暇もなく、さらに怒りを強める。

シラヌイ「そのルギアには、今回のプロジェクトに一役買っていただけのだよ。」

ケンタ「プロジェクト?」

ケンタが疑問を抱いていると、

マリナ「そいつらは、ポケモンを無理矢理進化させたり強化させたりして、強いポケモンをつくらうとしてるのよ。」

ケンタ「なんだって!?!」

代わりにマリナが答えて、ケンタはさらに驚きの表情を浮かべる。

サ「ポケモンを大事に育てているトレーナーの気持ちをお前たちはまた踏みにじるつもりか。」

シラヌイ「君たちに我々の野望を理解することはできないであろう。」

「

サトシの怒りの一言をシラヌイは一蹴する。

シラヌイ「しかし、以前みたいに邪魔をされては困るのでね。バシヨウ、ブソン。相手をしてやりなさい。」

バシヨウ・ブソン「はっ！」

シラヌイはバシヨウとブソンにサトシとケンタの足止めを指示して、自分は高見の見物という態度をとった。

バシヨウ「また、あなた達ですか。」

ブソン「もう一回痛い目を見ないと分からないようだな。ヒーローボーイ。」

サ「今度は負けないぜ！」

ケンタ「臨むところだ！」

サトシとケンタはボールに手を掛け、

サ「ヒカリは．．．。」

ケンタ「マリナは．．．。」

サ・ケンタ「そして、シルバーも．．．。」

サ・ケンタ「絶対に助ける！」

2つに分けたのは仕様ですので、気にしないでください。

サトシとケンタの真剣な姿に、

ヒ(サトシノノノ)

マリナ(ケンタノノノ)

遅しさと格好よさを感じたヒカリとマリナだった。

サ「それじゃあ、行くぜ。ミジュマル、君に決めた！」

ケンタ「リベンジだ、リーファイア！」

ミジュマル「ミィィィジュマ。」

リーファイア「リィィィ。」

バシヨウ「ハガネール、目にものをみせてやりなさい。」

ブソン「オニドリル、お前もだ。」

サトシとケンタ、バシヨウとブソンによるバトルの火ぶたが切つて落とされた。

サ「ミジュマル、ハガネールにみずてっぽづ。」

ミジュマル「ミィィィジュウウウー！」

ミジュマルはハガネールに向かってみずてっぽづを発射。

ブソン「オンドリル、エアーカッター。」

オンドリルはエアーカッターでみずてっぽうを吹き飛ばした。さらに、その攻撃がミジュマルに襲い掛かる。

ミジュマル「ミジュマ!？」

かなり近い距離のため、ミジュマルは攻撃を避けられない。絶体絶命かと思われたその時、

ケンタ「リーファイア、マジカルリーフでミジュマルを援護しろ。」

リーファイア「リイイファイイ!」

リーファイアのマジカルリーフでエアーカッターを防ぎ、ミジュマルはダメージを受けずに済んだ。

サ「サンキューな、ケンタ。」

ケンタ「気を抜くな、サトシ。」

サ「ああ。」

ミジュマルとリーファイアは体勢を立て直す。

バショウ「ハガネール、リーファイアにがんせきふうじ。」

がんせきふうじとは、たまに外れる技で威力もそこそこだが、当たれば相手のすばやさを下げる事が出来る技である。

ケンタ「リーフィア、上に向かってジャンプだ。」

リーフィア「フィィイ。」

リーフィアがジャンプしたことにより、がんせきふうじは外れてしまった。だが、リーフィアの目の前にはオニドリルがいた。

ブソン「ふん、避けたことが仇になったようだな。この至近距離からじゃあ、避けられないぜ。」

ブソンはケンタを鼻で笑うように言った。

ケンタ「誰が避けるって言った。」

ブソン「どういうことだ？」

ケンタ「こういうことだ。サトシ、今だ！」

サ「オニドリルに向かってミジュマルはアクアストーム、ポツチャマはつずしお。」

ポツチャマ「ポオオオチャアアア！」

ミジュマル「ミィィィジュウウウ！」

ミジュマルとポツチャマはいつの間にかオニドリルの真下に移動していた。そして、ポツチャマのつずしおに乗りながら、ミジュマルがアクアストームでオニドリルに向かってくる。オニドリルは怯んで動けず、アクアストームが直撃して、ミジュマルとともにどこ

かに飛んでいった。ハガネールとリーファイアは1対1になる。しかも、リーファイアはいつの間にかソーラービームの構えに入っていた。ケンタ「今だ、リーファイア。ソーラービーム、発射！」

リーファイア「リイイファイイ！」

リーファイアのソーラービームがハガネールに襲い掛かる。ハガネールはオニドリル同様怯んでしまい、ソーラービームが直撃した。

ケンタ「忘れたか、俺のバトルスタイルは直球一本槍。真つ向勝負だけ。」

ケンタは自慢げに言う。

ケンタ・サ「行くぜ、止めの……。」

サトシとケンタが止めの一撃をミジユマル、リーファイアに指示しようとした時、

ヒ・マリナ「キャ、離して……。」

ロケット団A「おっと、こいつらがどうなってもいいのか？」

ロケット団B「手を出せば、痛い目に遭ってもらっからな。」

2人のロケット団員がヒカリとマリナの身動きを封じる。

サ・ケンタ「くっ……！」

サトシとケンタは一度出しかけた言葉を飲み込んだ。ニジュマルとリーフィアも一旦引く。

ロケット団A「さあ、ここでおとなしくして・・・って、なんだ。こいつらは!？」

突然、ロケット団達を今までサトシとケンタの後ろにいた洞窟のポケモン達が攻撃し始めた。さらには、

ヒ・マリナ「えいっ!」「」

ロケット団A・B「痛つてえええ!」「」

怯んだ隙を突いてヒカリとマリナが自分たちを捕まえているロケット団員の足を思いつきり踏んづけた。

ヒ「サトシ!」「

マリナ「ケンタ!」「

ヒ・マリナ「受け取って!」「」

ヒカリとマリナは近くにいたシルバーを全身を命いっぱい使って、倒れながらもシルバーをサトシとケンタの方へ投げた。そして、すぐに立ち上がって自分達もサトシとケンタの方へ飛び込んだ。

サ・ケンタ「よし、キャッチ!」「」

サトシとケンタはシルバーを丁寧にキャッチして、自分たちの後ろの方へ降ろした。

サ「これで遠慮なくいけるぜ。ミジュマル、アクアジェット！」

ミジュマル「ミイイイジュウウウ！」

ケンタ「リーファイア、アクアジェットのミジュマルにリーフストーム！」

リーファイア「リイイイフウウウウ！」

サ・ケンタ「ハガネールに止めのアクアストーム！」

ミジュマルのアクアストームとリーファイアのリーフストームの合体技『アクアストーム』がハガネールに炸裂し、ハガネールは大ダメージを喰らって倒れた。さらには、洞窟内のポケモン達がアジト内の設備を次々と壊していく。

バショウ「くっ、どうやらここまでのようですね。」

ブソン「ひとまず撤退だ。」

シラヌイ「おのれ、どうやら君達は我々の邪魔をすることが好きなようだな。」

バショウ、ブソン、シラヌイは捨て台詞を吐きながら、団員たちとともにアジトの入り口付近に止めてあった潜水艦でアジト内から脱出した。銀岩島に建設されていたロケット団のアジトはサトシ、ケンタ、ヒカリ、マリナならびに彼らのポケモン達によって壊滅した。

ケンタ「大丈夫か、ヒカリ、マリナ。」

サ「今、外してやるからな。」

ピカチュウのアイアンテールでヒカリのリングを、ミジユマルのシエルブレードでマリナのリングをそれぞれ破壊した。

サ「どこもけがはないみたいだな。」

ケンタ「安心したぜ。」

ヒ・マリナ「……………」

サ「ん？ どうしたんだ、2人とも。」

ヒカリとマリナの返事がないので、サトシとケンタは首を傾げる。すると突然、ヒカリはサトシに、マリナはケンタに抱き付いた。

ケンタ「お、おい。一体どうしたんだよ。」

突然のことに2人は慌てる。

ヒ「…………グス、サトシ」（泣）」

マリナ「…………ケンタ、怖かったよぉ」（泣）」

抱き付いた2人は今までの恐怖心から解放されたのか、ヒカリはサトシの、マリナはケンタの胸に顔を埋めて泣き出した。

サ「そっか……………」

ケンタ「よく、頑張ったな。」

サトシとケンタは優しく微笑みながら、2人の頭を撫でる。もしこの光景を他のサトシLOVEズ、ジュンイチやマリナの熱狂的ファンが見たら、サトシとケンタに死亡フラグが付くのは間違いないだろう。

ヒ「ホントにありがとう。」

マリナ「何かお返しがしたい気分だわ。」

ヒカリとマリナは涙を拭って、サトシとケンタに改めて感謝の意を口にした。

サ「いいって、お礼なんか。」

ケンタ「2人が無事だったらそれで・・・。」

ケンタが言いかけたのを遮るようにヒカリはサトシの右横に、マリナはケンタの左横に移動して、それぞれ首に抱き着き、

チュッ

頬に触れるだけのキスをして、すぐにサトシとケンタから離れた。そばにいたピカチュウ、ポッチャマ、ミジユマル、リーフィアはポカンとしながら、サトシ達の方を見る。しばらくの沈黙の後、

サ・ケンタ「ええええええ！？」

サトシとケンタは顔を急に真っ赤にさせて、驚きの声を挙げた。

サ「い、いきなりなにすんだよ／＼」

ケンタ「い、いまのはなんなんだよ／＼」

マリナ「あれ、言わなかった？ お返しがしたいって。」

ヒ「今のキスがお返しだよ。」

ヒカリとマリナは満面の笑みをサトシとケンタに向ける。心なしか頬もほんのりと赤く染まっている。サトシとケンタはあまりの恥ずかしさにあたふたする。その光景が可愛らしく思えたのか、ヒカリとマリナはくすつと笑う。さらには、ケンタのモンスターボールから、

バクフーン「バクククク．．．。」

ケンタ「勝手に出てくんな、バクフーン！」

勝手にバクフーンが出てきて、にやにやしなからケンタをからかう。しばらくすると、サトシとケンタは何とか落ち着いた。

ヒ「信じてたよ。サトシ達が助けに来てくれるって。」

マリナ「ホントにありがとう。でもごめんね、足手まといになった上になにも役に立てなくて。」

ヒカリとマリナは改めてサトシとケンタに感謝の意を口に出す。だが同時に、自分たちが捕まったことでサトシとケンタに迷惑をかけてしまったことを申し訳なく思う。

サ「そんなことないさ、ヒカリとマリナだってシルバーを助けるために頑張ったんじゃないか。」

ケンタ「そうそう、あんだけ体を張ってシルバーを助けるなんてすごいじゃないか。」

サトシとケンタはさほど迷惑だったとは思っていないようだ。むしろ、ヒカリとマリナがシルバーを助けた行為をとて賞賛している。

ヒ「えへへ、そうかなあ。」

マリナ「わたし達もこの子は絶対に助けたいと思ってたからね。」

ヒカリとマリナはサトシとケンタに褒められたことを照れ臭そうにする。

サ「ほら、シルバーだってヒカリとマリナには感謝してるみたいだぜ。」

すると、シルバーはヒカリとマリナに飛びついて感謝の意を表す

かのように頬ずりをしだした。

ヒ「もう、くすぐったいってば。」

マリナ「この子ホント可愛い。」

どうやらシルバーはヒカリ達にかなり懐いたようだ。

ケンタ「それにしても、このルギア随分と小さいな。」

サ「シルバーはまだ子供なんだ。俺たちはこの銀岩島から少し離れたオキ島でオサムという少年と一緒に出会ったんだ。」

ケンタ「へえ、でも俺ルギアの子供なんて初めて見たぜ。」

シルバーはまだヒカリ、マリナとじゃれあっている。何とも微笑ましい光景であろう。サトシとケンタもその光景で心が和んでいく。そんな和やかなムードの中、突然、

バシャアアアアアア!

サ「な、何だ一体!？」

辺りを見回すと所々から、和やかなムードをぶち壊しにするように水が勢いよく噴き出していた。

ケンタ「お、おいこれかなりヤバいんじゃないか。」

ヒ「キヤ、足元が水浸しになってるわ！」

水が噴き出しているのに加え、サトシ達の足元から浸水も始まっている。実はこのアジト、元々地下の水場だったところをロケット団が水を吸い出して建てられたものである。今サトシがいるところは、アジトが出来る前は岩から噴き出る海水で水場が出来ていた。

マリナ「とにかく、ここから脱出しましょう。」

サ「そうだな、戻れミジュマル。ピカチュウ、俺の肩に早く乗るんだ。」

ピ「ピカピカ！」

ケンタ「リーフィア、お前も戻れ。」

ヒ「ポッチャマ、あなたも早く。」

ポッチャマ「ポチャ！」

ミジュマル、リーフィアをボールに戻し、ピカチュウはサトシの肩に、ポッチャマはヒカリに飛びつき、抱えられる状態になった。そして、急いでサトシ達はこの旧ロケット団アジトから脱出することにした。果たして、無事に脱出することが出来るのだろうか……

続
く

ヒカリ、マリナを救え！ ～後編～（後書き）

今回はタケシ達が黄岩島へ引き返してきた頃の話です。

さらなる襲撃（前書き）

黄岩島に一時撤退した面々と待機組の面々に、お馴染みのアイツらが襲い掛かる！？

さらなる襲撃

オキ島でロケット団幹部クギョウとシユンカンの襲撃にあったタケシ達は、黄岩島へ引き返して、デント達待機組とポケモンセンターで合流していた。さらにサトシ達とはぐれたシゲルとハルカも合流している。のだが、

ヤマト「アンタ達そこでおとなしくしてもらおうよ。」

コサンジ「さつきはよくもやってくれたな。って、作者。俺はコサブロウだって言ってるんだろ！」

はいはい。それはさておき、今タケシ達、シゲル、ハルカ、そして待機組はロケット団に身動きを封じられている。ロケット団側には、ヤマト、コサン．．コサブロウの他、○山線トリオ、その他ロケット団員、さらにはなぜかナンバ博士の姿もある。どうしてこのような状況に陥ったのかは、さかのぼること数時間前、

アイ「なんですって、ロケット団が!？」

タ「ああ、俺たちを襲ってきた。」

デ「ロケット団、いったい何を企んでいるのか．．。」

カ「アイツらは、捕まえたシルバーを使って何か悪いことをするのは間違いないわ。」

カノン「シルバー？」

カノンはシルバーという単語に首を傾げた。

ルカ「そっか、カノンちゃん達はシルバーのこと知らなかったんだっけ。オサム君、みんなにシルバーのこと話していいかしら。」

オサム「いいですよ、カスミさんやタケシさん達の仲間なら信用できますし。それにこんな非常事態だもん。」

ルカ「それじゃあ、話すね。」

オサムの許可を得ると、ルカはシルバーのことを知らないデント達にシルバーについて、そしてカスミがそのシルバーがロケット団幹部クギヨウとシユンカンによって捕まったことを話した。

コトネ「このうずまき列島にルギアの子供がいたなんて、ジョウト出身のわたしも知らなかったわ。」

カズナリ「ホント、びっくりだよ。」

アイ「でも、捕まっちゃったんでしょ。今すぐ助けに行かなくちゃ。」

タ「ああ、もちろんだ。ロケット団の事だから、シルバーが無傷でいられるという保障もないしな。」

タケシはそう言いながら、以前うずまき列島でシルバーがロケット団に捕まり親ルギアがうずまき列島中を襲撃したことを思い出す。

ルカ「そういえば、前にもこんなことがあったわね。あの時はシルバーの親ルギアが大暴れして大変だったわ。」

デ「そうなんですか。だったら尚更．．．。」

ルカ「そうしたいんだけど、雲行きもだんだん怪しくなってきた。行くのは危険だわ。それに銀岩島の洞窟のサトシ君たちの安否も心配だし。」

完全に手詰まり状態の彼らのもとに、ハルカが血相を変えて戻ってきた。

マサ「お、お姉ちゃん。一体、どうしたの!？」

リュウカ「そんなに慌てて、何かあったんですか!？」

マサとリュウカが聞くと、

ハル「サトシが、サトシが．．．!」

カズナリ「ハ、ハルカさん。落ち着いて!」

ハルカは今自分達が置かれた状況を説明しようとするが、慌てているため何を言っているのか分からない。カズナリが何とかハルカをおちつかせようとする。しばらくして、ハルカが落ち着きシゲルも戻ってきたので、サイドン達の襲撃でサトシ、ヒカリ、ケンタ、マリナとはぐれたことを説明した。

コトネ「そ、そんな。サトシ達が．．．。」

サトシ達の安否が心配になった面々。

シゲル「・・・僕のせいだ。あれだけ無茶をするなど言っておきながら、サトシ達を危険な目にあわせてるのは僕じゃないか。」

シゲルはサトシ達を危険な目に遭わせたことを悔やむ。

デ「シゲル。君の気持ちも分かるけど、今はサトシ達を信じる事が大事なんじゃないかな。」

シゲル「えっ？」

タ「デントの言つとおりだ。サトシ達ならきつと大丈夫だ。」

アイ「アタシ達との旅でもしよっちゅう危険な目に遭って、乗り越えてきたんだもの。」

ハル「それにサトシの幼馴染のあなたがサトシを信じなくてどうするの。」

デント、タケシ、アイリス、ハルカが落ち込んでいるシゲルを励ますように言う。

シゲル「・・・そうだね、あのサトシだ。きつと無事に帰ってくる。みんな心配かけてごめん。」

カ「謝らないで。アタシ達はこの状況下で出来ることをやり遂げましょう。」

シゲルが立ち直ったところで、次の行動に出ようとしたその時、

ガシャ！ ガシャ！ ガシャ！

ポケモンセンター内の人間全員を無数のリングが身動きを封じた。

タ「一体、なんなんだ!？」

タケシが驚きの言葉を発したその時、

？「『一体、なんなんだ!？』との声がある。」

？「ジャイロボールのようにやって来た。」

？「スターよ。」

？「ムーンよ。」

？「スペースよ。」

？「銀河に届けよジャースティス。」

？「宇宙に届けよギールティ。」

？「天国か地獄かその名を呼べば。」

？「誰もがシャキーンと背筋を正す。」

ヤマト「ヤマト!」

コサブロウ「コサブロウ！」

ツボツボ「ボツボツッ！」

ヤマト「本当の主役はあたしたち。」

コサブロウ「我ら正統派の。」

ヤマト・コサブロウ「ロケット団！」

そう、ヤマトとコサン・・・コサブロウと、

？「『一体、なんなんだ！？』と聞かれたら。」

？「名乗ってあげるのが当たり前。」

？「宇宙の破壊を防ぐため。」

？「宇宙の平和を守るため。」

？「恋と成熟の悪を貫く。」

？「お茶目で恋の敵役。」

カミ「カミオタイ！」

ナカ「ナカオタイ！」

シモ「シモオタイ！」

カミ「ロケット団あるところ。」

ナカ「世界は。」

シモ「宇宙は。」

○山線「君を待っている！　って、作者。○山線で済ますなあ
ああ（怒）」「」

○じゃなくてカミオタイ、ナカオタイ、シモオタイの3人が捕え
られている者たちの前に現れた。

コサブロウ「おい、○山線トリオ。俺たちとカブるなよ！」

ナカ「知るか！　そんなの。」

ヤマト「ちょっと、今は仲間割れなんかしてる場合じゃないでしょ。」

カミ「そうだぞ。今回は俺たちの上司・ゴタンダ博士もいらっしや
るのだからな。」

ナンバ「ナンバじゃ！」

名前を間違えたカミオタイを一喝するナンバ博士。

カ「またアンタ達ね。アタシ達を捕まえてどうするつもり？」

コサブロウ「決まってるだろ。お前達にうるついてもらうと困るの

でね。」

ポケモンセンター内の人間を全員拘束して、任務を遂行しようとするナンバ一味。なぜナンバ博士もいるのかは、ヤマコサ、○山線トリオをはじめとする部下達の度重なる失態を見かねたからである。そんなこんなで、現在に至る。

シモ「さてと、まずは手始めにポケモンセンターのポケモン達を頂くとしますか。」

ジョーイ「やめてください。ここには怪我や病気のポケモン達もいるのです。」

ナカ「黙れ！ そんなこと、我らロケット団の知ったこっちゃないわ。」

そんな中、ヤマトはフルーラに目をやり、

ヤマト「おやおや、ここにアーシア島の巫女がいるじゃないかい。」

カミ「アーシア島って確か、今回の我々のターゲットであるルギアを海神として祀っているオレンジ諸島の島だったな。」

カミオタイが言ったことに、

ナンバ「うむ、ならこの小娘は使えそうじゃな。ポケモン達よりもこの小娘を連れて行くのじゃ。」

ロケット団A・B・C「っ」はっ！」「っ」

すると、ロケット団員が2名ほどフルーラに近寄ってきた。

フルーラ「イ、イヤ。来ないで……。」

フルーラは怯えながらも身の危険を察知して、後ずさりする。

カ「待ちなさい！」

ハル「フルーラは渡さないわ！」

カスミとハルカが縛られながらも立ち上がり、フルーラをロケット団員たちの魔の手から守ろうとする。

ロケット団員A・B「邪魔だ！」

カ・ハル「キャツ！」

ロケット団員AとBはカスミとハルカを突き飛ばした。2人は額を強打し、出血する切り傷を負った。

コトネ「カスミン!？」

ベ「ハルカちゃん!？」

カスミ「みんな心配しないで……。」

ハル「わたし達は大丈夫よ。」

コトネとベルがカスミとハルカを心配するが、2人は痛がる素振りすら見せなかった。

ヤマト「あたし達にたて突かなきゃあ、こんな目に遭わないのになえ。」

コサブロウ「素直に言うことを聞かないと、今みたいに痛い目に遭うぜ。」

ヤマトとコサブロウがポケモンセンター内にいる者達を脅す。

フルーラ「止めて！ わたし、なんでも言うこと聞くから。」

フルーラがロケット団の方に向かおうとした時、

ルカ「駄目よ！ フルーラちゃん。」

カノン「そうよ。そんな悪い奴らの言うことなんて聞いちゃ駄目よ。」

ルカとカノンが何とかフルーラを呼び止めようとするが、

フルーラ「わたしのせいでみんなが傷つくのは嫌なの。だからわたし、行くわ。」

ルカとカノンの説得も空しく、フルーラはロケット団の方へと歩みを進める。

ロケット団B「ふん、最初から素直に聞いておけばよかったものを。」

ロケット団員達がフルーラを連れ去ろうとしたその時、

ロケット団員A「ん？ な、なんだこれは!？」

ロケット団員B「体が浮いている!？」

ロケット団員C「ど、どうなってんだ!？」

突然、フルーラを連れ去ろうとしたロケット団員3人の体が宙に浮いた。そして、

ロケット団員A・B・C「くくくあ〜れ〜。」「」「」

ポケモンセンターの天井を突き破って、空の彼方へと飛ばされていった。

ナンバ「い、今のはなんだったんじゃ!？」

ナンバ博士達は驚きの表情を見せ、辺りを見回す。すると、コサブロウが何かに気づき、ヤマトの肩をつついた。

ヤマト「なによ、コサンジ。」

コサブロウ「コサブロウだ。じゃなくて、あれを見るよ。」

ヤマト「ん？ あれってあいつらの仲間じゃない。」

コサブロウ「よく見てみる。おかしいだろ、アイツも俺たちが一緒に捕まえたはずだ。なぜ、平然と立っている。」

ナカ「お前ら、ふざけるのもいい加減にしろ。その小娘ならここに

「。。。」

ヤマコサ、○山線トリオ、ナンバ博士は今自分たちが見ている光景に目を疑った。

ヤマト「な、なんで同じ人間が2人いるのよ!？」

コサブロウ「お、おい。こいつらの仲間に双子がいるという報告は来てないぞ。」

彼らが見た光景、そう自分たちが捕まえたはずのカノンがもう一人、捕えられている者達がいる反対側に平然と立っていたのだ。

ベ「ねえ、カノンちゃん。あれって。。。」

カノン「うん。多分、あの娘よ。。。」

ベルとカノンはロケット団達に聞こえないように話す。もうお分かりだと思うが、ロケット団員を吹き飛ばした方のカノンはラティアスである。どうやら、ラティアスはロケット弾がポケモンセンタ―を占拠する際、カノン達のそばを偶然にも離れていたようだ。ロケット団員達を吹き飛ばした方のカノン改めラティアスはにっこりとした笑顔を引っ込め、睨み付けるように自らの技『ミストボール』を発動する。

コサブロウ「なあ、やっぱりこれって。。。」

シモ「ああ、いつもの。。。」

ナカ「お約束だな。。。」

ラティアスはミストボールをヤマコサ、○山線トリオ、ナンバ博士に向けて発射した。当然、彼らは避けることが出来ずに直撃、空の彼方へと吹っ飛ばされていった。

ヤマコサ「「やな気持ち」。」

○山線トリオ「「やな気分」。」

ナンバ「おのれ、覚えておれ！」

捨て台詞を吐きながら、彼らは星になった（笑）

カノン「助かったわ、ラティアス。」

カ「ホントありがとう、ラティアス。」

ラティアスはカスミ達やジョーイ、ポケモンセンターの客を縛っていたリングをサイコネシスで破壊し、カノンとカスミから感謝される。ラティアスは照れくさそうな反応を見せる。

ルカ「本当にこの娘、よくやるわね。」

カノン「ええ、このラティアス。普段は悪戯好きですけど、やる時はやるんですよ。」

ラティアスはますます照れ臭そうにカノンにすり寄ってきた。そんな和やかなムードの中、

デ「和んでいるところ悪いけど、これからどうする？」

デントの言葉にみんな真剣な眼差しになる。

コトネ「とりあえず、サトシ、ケンタ、ヒカリン、マリリンの無事を確認するのが先ってことね。」

タ「そうだな。サトシ達なら大丈夫だとは思うが。」

そんな時、ポケモンセンターの自動ドアが突然開いて、

全員「ヒカリ、マリナ!?!」

ヒカリとマリナが血相を変えて、慌てるように入ってきた。

ヒ「み、みんな大変よ。サトシが．．．!」

マリナ「ケンタが．．．!」

カズナリ「と、とりあえず落ち着いて!」

一体、サトシとケンタに何があったのか．．．

続く

さらなる襲撃（後書き）

サトシとケンタに何があったのか!?

脱出！？（前書き）

サトシ達がアジトを脱出する様子です。

マリナ「やだ!? もう水がここまで来てるわ。」

水位はサトシ達の膝に浸る程度まで上昇していた。

ケンタ「このままじゃ、まずいな。」

未だ脱出方法が分からず立ち往生していた彼ら。するとヒカリが、

ヒ「見て。あそこにハシゴがあるわ。」

アジトの奥にハシゴがあることに気づいた。

サ「よし、とりあえずあのハシゴの下まで行ってみようぜ。」

サトシ達は先程救出に成功したシルバーを連れて、ハシゴのすぐ真下まで移動した。

ケンタ「これで上まで行こう。」

マリナ「でもこのハシゴ、途中で切れてるわ。」

脱出の術となるハシゴを見つけたものの、そのハシゴは壊れて途中で切れていた。

サ「それなら大丈夫だ。ベイリーフ、ツタージャ、君に決めた。」

ベイリーフ「ベエイ!」

ツタージャ「タージャ。」

サトシはアジトの天井近くの足場にベイリーフとツタージャを出した。

ヒ「ハシゴの一番上からはベイリーフとツタージャのつるのムチで吊り上げてもらおうのね。」

サ「そういうことだ。ベイリーフ、ツタージャ、頼んだぞ。」

ベイリーフ「ベイベイ!」

ツタージャ「タージャタジャ!」

ベイリーフとツタージャは任せてと言わんばかりに鳴き声を出す。

サ「じゃあまずはヒカリとマリナが先に上に行ってくれ。」

サトシは女の子であるヒカリとマリナを先に行かせる。

マリナ「分かったわ。でもサトシ、ケンタ。わたし達が上っている間はハシゴの真下にいちゃだめよ。」

ケンタ「えっ、なんでだ?」

マリナの言ったことにケンタは首を傾げる。

マリナ「わたしは短パンだからいいとして、ヒカリはミニスカなのよ。」

サ・ケンタ・ヒ「」「」「」

サトシとケンタは納得したようだ。ヒカリがサトシ、ケンタと同様の反応を見せたことから、自分でも気づいていなかったようだ。そんなこんなで先にヒカリとマリナがハシゴを上ることになった。

ヒ「ふう〜、思ったよりきついね。マリナ、大丈夫？」

マリナ「うん、こっちは大丈夫。」

ヒカリとマリナはハシゴが切れるところまでたどり着いた。

サ「それじゃあ、ベイリーフ、ツタージャ。つるのムチで2人を上まで上げてくれ。」

ベイリーフ「ベエイ！」

ツタージャ「タージャ。」

ベイリーフはヒカリを、ツタージャはマリナをつるのムチで天井近くの足場まで上げた。

ヒ「ふう〜、やっとたどり着いた。ありがとう、ベイリーフ。」

マリナ「ツタージャも、ありがとう。」

ベイリーフ「ベイベイ。」

ツタージャ「タージャ。」

ヒカリとマリナは、ベイリーフとツタージャにひとまず例を言う。

ケンタ「マリナく、ヒカリく。上はどうなってるんだ。」

ケンタはヒカリとマリナに上の様子について尋ねる。

マリナ「うん、ただの足場かと思ったけど洞窟みたいなのがあるわ。」

ヒ「よくわかんないけど、出口につながってるみたい。」

マリナとヒカリが上った先には、洞窟が続いていた。その先にはうっすらではあるが光のようなものが差し込んでいるように見える。

ケンタ「それじゃあ、俺たちもそっちに行くから待っててくれ。」

マリナ「分かったわ。」

ケンタはそう言うと、ハシゴに足をかけ上り始めた。ケンタに続いてサトシもハシゴを上り始めた。

ケンタ「大丈夫か、サトシ?」

サ「こっちは平気だ。ピカチュウも落ちないように俺にしがみついてくれよ。」

ピ「ピッカー!」

ピカチュウはサトシの首にしっかりとしがみつく。順調にハシゴを上っていくサトシとケンタ。だがその時、

ケンタ「うわっ!?!」

ケンタがハシゴに上るのに集中するあまり、ハシゴのすべりやすい箇所を足にかけてしまった。その影響で思わず足を踏み外してしまった。

サ「だい．．．うっ!?!」

ピ「ピカッ!?!」

落ちてくるケンタが乗っかる形でサトシも下に落ちてしまっ。さらに、

バシャアアアアアア!

突然、横の岩場から海水が吹き出し、サトシとケンタを飲み込んだ。

ベイリーフ「ベイ!」

ツタージャ「タジャ!?!」

ベイリーフとツタージャは流されていくサトシとケンタをつるのムチで掴もうとするが、2人には届かなかった。

サ・ケンタ「うわああああ!」

ヒカリに礼を言うマリナ。ベイリーフとツタージャも心配して彼女たちの元に駆け付けた。すると、

サイドン「サアアアイ！」

岩とともに先程サトシ達を襲ったサイドン達がアジトへの入り口を塞ぐようにヒカリとマリナに立ちはだかった。どうやら、サイドン達をも見捨ててシラヌイ達は逃げたようだ。

マリナ「．．．とりあえず、逃げるわよ。ヒカリ。」

ヒ「そうね。ベイリーフ、ツタージャ、あなた達も逃げましょう。」

ベイリーフ「ベエイ！」

ツタージャ「タジャ！」

サイドン達から逃げるようにマリナとヒカリはサトシのベイリーフ、ツタージャとともにアジトとは反対方向の光が差し込んでいる方へと走り出した。

ヒ（サトシ．．．。）

マリナ（ケンタ．．．。）

ヒ・マリナ（無事でいて．．．。）

激流に流されたサトシとケンタを心配しながら．．．

以上、回想終了。

ヒ「．．．もしサトシに何かあったらアタシ．．．。」

マリナ「ケンタ．．．。」

ポツチャマ「ポチャア．．．。」

ベイリーフ「ベエイ．．．。」

ツタージャ「タージャ．．．。」

思わずマイナス思考になるヒカリ、マリナ、ポツチャマ、ベイリーフ、ツタージャ。ちなみにベイリーフとツタージャは、自分たちのモンスターボールを持っている主人が現在いないため、外に出たままである。

カ「ヒカリ、マリナ．．．。」

ハル「サトシ達なら大丈夫よ。」

アイ「ポツチャマ、ベイリーフ、ツタージャ。あなた達もよ。」

キバゴ「キバキバ！」

コトネ「それにヒカリンはサトシと一緒に旅をした仲間、マリリンはケンタとは幼馴染なんだから、2人のことは良く知ってるでしょ。」

「

べ「そうよ。わたし、みんなと違ってサトシ君やケンタ君と旅をする期間は短いけど、それでもあの2人が凄いつてことは分かるわよ。」

リユウカ「それにヒカリさんには『大丈夫!』って言葉があるじゃないですか。」

サトシ、ケンタはどんなピンチに遭つてたとえそれが原因で落ち込むようなことがあつても、必ず立ち直つてあの笑顔が素敵な本来の自分を取り戻す。それを伝えるようにコトネとベルとリユウカはヒカリとマリナに言う。

ヒ「・・・そうよね、みんな。サトシなら、帰ってくるよね。うん、ダイジョーブ、ダイジョーブ。」

マリナ「ケンタのことがみんなより私の方が知ってるはずなのに・・・。みんな心配かけてごめんね。」

カ「お礼なんていいわよ。」

アイ「それよりも、アタシ達が今できることを見つけてそれに取り組みましょう。」

そんな時だった。

男A「おーい、浜辺近くで誰かが流されてるぞ。今人手が足りないから、誰か手伝ってくれないか。」

この近辺に住む1人の男が突然、ポケモンセンターの方に入ってきた。

デ「大変だ！ 僕たち、手伝います。」

男A「おお、すまない。早速、浜辺に来てくれ！」

タ「困ったときはお互い様だ。俺たちも微力ながら手伝っよ。」

カ「アタシも行くわ。」

ハル「わたしも。」

ヒ「アタシも。」

アイ「アタシも手伝っわ。」

マリナ「わたしも。」

デントに続いて、タケシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、マリナも浜辺に行って流されている人の救助に向かった。果たして、流されている人を無事救えることが出来るのか！？

続く

脱出！？（後書き）

浜辺付近で流されている人物とは！？

サトシ、ケンタ、ピカチュウの運命（前書き）

なんか、意味不な文章になってしまったのは気のせいだろうか・・・

ケンマリ、サトカス（実際は、マリナ ケンタ、カスミ サトシ）要素を含みます。

サトシ、ケンタ、ピカチュウの運命

一方、ハシゴを上っている最中、突然横の岩場から吹き出た海水に飲まれたサトシとケンタ。どうやら、そのまま洞窟の外へと通じる穴に通って洞窟の外へと出ていたようだ。

ケンタ「．．．ぶはっ、サトシ！ ピカチュウ！」

なんとか海面に出たケンタは、辺りを見回してサトシとピカチュウを探す。

サ「．．．ぶはあ、ん。ケンタ！」

ピ「ピカピカ！」

サトシが海面に姿を現し、ケンタに気づく。続いてピカチュウも姿を現す。

ケンタ「今そつちに行くからな！」

サ「ケンタ、ピカチュウ！」

ピ「ピカピィ、ピピカー！」

2人と1匹はそれぞれ一点に集まろうとする。だが、海流の流れが激しくてなかなか近づけない。するとその時、

ケンタ「うわああああ！」

サ「うわああああ！」

ピ「チャア〜！」

大きな波がサトシ、ケンタ、ピカチュウを襲い、また海中へと飲まれてしまった。

ケンタ（サトシ・・・。）

サ（ケンタ・・・。）

ピ（ピカ・・・。）

それでも、2人と1匹はなんとか集まろうとする。だが、海面より海中の方の流れが急で思うように近づけない。そして、

ケンタ（・・・うっ!?!）

サ（・・・もうだめだ。）

ピ（・・・ピカ。）

サトシ、ケンタ、ピカチュウはそのまま意識を失ってしまった。

時を進めて、タケシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、マリ

ナは流されている人がいると聞いて黄岩島の海辺まで駆け付けていた。すると、

ハル「見て！ あそこ。」

ハルカが何かに気づき、そこを指さす。すると、気を失って海面をプカプカと流されている人がいた。

タ「早く助けないとまずいぞ。」

すると今度は、

アイ「ねえ、あれってケンタじゃない？」

流されている人はケンタに似ていた。

マリナ「あれはケンタよ。帽子をかぶってないから分かんないけど、正真正銘ケンタよ。」

幼いころからの付き合いであるマリナが、流されている人はケンタだと断定した。

ヒ「それじゃあ、尚更助けに行かなきゃ。」

タケシ達は急いでケンタの方へ向かった。ケンタが浅瀬まで流されたところでタケシが救出し、とりあえず砂場に寝かせた。

マリナ「ケンタ……。」

マリナは気を失っているケンタを見つめる。そして次の瞬間、マ

リナは意を決して、ケンタの気道を確保し、自らの口をケンタの口に近づけて空気を送り込んだ。いわゆる、人工呼吸である。

カ「えっ、ちよつとマリナ!?!」

その場にいた者たち（特に女性陣）はマリナの突然の行動に驚きを隠せない。

マリナ「わたしは何が何でも助ける。あなたもお願い。メリーちゃん。」

マリナは1つのモンスターボールを取り出し、ポケモンを出した。

メリープ「メエエエ!」

マリナ「メリーちゃん、ケンタに弱めに電気ショック。」

メリープ「メエエエ!」

メリープはケンタにじかなり弱めに数秒間電気ショックを当てた。その後にもたマリナは人工呼吸、そしてまた電気ショックと何回か繰り返した。

ケンタ「．．．ん。んん。」

マリナ「ケンタ!?!」

丁度5回目の電気ショックでケンタは意識を取り戻した。

ケンタ「あれ、ここは?」

マリナ「黄岩島の浜辺よ。」

「タ「ケンタが気を失って倒れているところを俺たちで救出したんだ。」

ケンタは今の状況を把握しようとする。それにマリナとタケシが丁寧に答える。

ケンタ「はっ！？ サトシとピカチュウ……。」

ケンタはサトシとピカチュウのことが心配になり、起き上がろうとするが、

マリナ「まだ、動いちゃダメ。」

あわてて、マリナが制止する。

ヒ「サトシとピカチュウはまだ……。」

ケンタ「そっか……。」

ケンタは落ち着いて呼吸を整える。その後、ケンタは担架で安全な場所へ移送された。

タ「後は、サトシとピカチュウだな。」

ヒ「サトシ、ピカチュウ。一体、どこにいるの。」

ポ「ポチャア……。」

キバゴ「キバ……。」

ポツチャマとキバゴもサトシとピカチュウを心配するように荒れる海を眺める。

アイ「大丈夫よ、キバゴ。サトシとピカチュウなら無事よ。」

すると、その時だった。

ピ「ピ〜カ〜。」

どこからかピカチュウの叫び声が聞こえた。

ハル「今のつてピカチュウよね。」

カ「うん。」

アイ「ピカチュウ〜！ どこにいるの〜！」

ピカチュウを必死に探す面々。すると、

ヒ「見て、あれ！」

ヒカリが指さす方向にピカチュウが何かにしがみついで海面に顔を出しているのを見つけた。

カ「ピカチュウ、今行くからね！」

カスミがピカチュウを救出しようと、海へ飛び込んだ。そして、

荒れる海流の中、泳いでピカチュウの元へと向かう。

カ「ピカチュウ。アタシに掴まって！」

ピ「ピカチュピ！」

ピカチュウは自分が浮くために使っていた何かをしつかりと啜えて、カスミにしがみついた。カスミはピカチュウを肩に乗せながら、再び浜辺へと目指す。行き同様、荒れた海とつづまき列島独特の海流のため、思うように泳げなかったが、なんとか浜辺へと到着した。

ハル「カスミ、大丈夫!？」

カ「ハアハア、なんとか大丈夫よ。それより、ピカチュウは？」

タ「ピカチュウは大丈夫だ。帽子を2つ啜えているみたいだけどな。」

ピカチュウが啜えていたのは2つの帽子だった。

ピ「ピカ。」

するとピカチュウは啜えていた2つの帽子のうち、1つを地面に落とした。

マリナ「これって、ケンタの帽子?」

1つはケンタの帽子だった。

アイ「それにもう1つは、サトシの帽子よ。」

もう一つはサトシの帽子だった。

タ「それじゃあ、ピカチュウはサトシとケンタの帽子を上手く浮かせて、沈まないようにしてたんだな。」

ヒ「えらいわ、ピカチュウ。」

ポ「ポチャポチャ。」

キバゴ「キバキバ。」

ピ「チャア〜。」

ヒカリがピカチュウをほめる。ポツチャマとキバゴもさすがと言わんばかりにピカチュウを称える。ピカチュウは照れくさそうな反応を示す。

カ「さあ、サトシの帽子も・・・。」

カスミがサトシの帽子を取ろうとしたその時、

ピ「ピカ！ ピカピカ！」

ヒ「えっ！？ ちょっとどうしたの、ピカチュウ。」

ピカチュウが海に向かって走り出し、帽子で海を指し示した。

ハル「危ないから戻ってきて、ピカチュウ。」

ハルカがピカチュウを呼び戻そうとする。だが、ピカチュウはなにかをアピールするように帽子で海の方を指し示し続ける。

アイ「もしかして、海に何かあるんじゃないかしら。」

カ「アタシ、確かめてくる。」

カスミがまた再び海に潜ろうとする。

ハル「カスミ、無茶よ。さっき、ピカチュウを助けに行ったばかりなのに。」

ヒ「それに、さっきロケット団から受けた傷が開いちゃうわ。」

ハルカとヒカリがカスミを止めようとする。

カ「傷なら大丈夫よ。それにアタシにもサトシみたいに無茶させて。」

ハルカとヒカリの制止を無視して、カスミは再び海へ飛び込んだ。

ハル「カスミ．．．。」

ヒ「あたし達は一体どうしたら．．．。」

カスミを心配するハルカとヒカリに、

タ「今はカスミを信じて待つしかないだろう。」

タケシが2人の肩にそつと手を置いて言った。一方再び海に潜水

したカスミは、

カ（うつ！？ 流れが速すぎて思うように泳げないし、視界も最悪だわ。）

海面からは分からなかったが、海の中は急な流れなうえに濁っていて大荒れだった。するとカスミは階層に絡まってゆらゆら揺れている何かを発見した。

カ（何かしら？ あ、あれは、サトシ！？）

カスミが見つけたのは海藻が足に絡まって気を失っているサトシだった。

カ（そっか、ピカチュウはあたし達にこれを知らせるために・・・）

ピカチュウが必死で海を指し示しながらアピールしていた理由が分かった。ピカチュウは海中をさまよっているときにこのような状態のサトシを発見してカスミ達に知らせたかったようだ。

カ（今、助けてあげるからね。サトシ。）

カスミはサトシの足に絡まっている海藻を取り除こうとする。だが、思ったより複雑に絡み合っていてなかなか取れない。カスミは息が続かず、海面へと浮上した。そして息を整えた後、再び潜水した。するとサトシのモンスターボール（ボールホルダーは外れずに残っていたようだ）から、ミジュマルが飛び出してきた。

ミジュマル「ミィィジュ！」

カ(ミジユマル!? そうだ、ミジユマル。サトシの足に絡まっている海藻を取るの手伝って。)

カスミはミジユマルにジェスチャーで手伝うよう求めた。

ミジユマル「ミジユ！」

ミジユマルはホタチをポンツと1回たたき、了承する。そして、カスミとミジユマルは協力してサトシの足の海藻を取り除こうとする。だが、ここでまたカスミの息が続かず2度目の浮上。

ミジユマル「ミジユ!?!」

カ(ごめんね。でも、あなたは続けて。)

カスミはミジユマルに申し訳なさそうに思いながら、海面に出て息を整える。そして、また再び潜水した。そこでカスミはふとあることに気づいた。

カ(待って。どのくらい経っているかは分からないけど、サトシは呼吸をしてないわ。)

そう、サトシは海中で意識を失っているため無呼吸状態だった。そこでカスミの脳裏に、先程のマリナがケンタにした人工呼吸の光景が過ぎる。

カ(あたしが少しでもサトシに空気を送り込んだら・・・。)

カスミはサトシを助けようと思を決して、両手でサトシの顔を包

み、自らの唇をサトシの唇にくっ付けて人工呼吸を開始した。

カ（サトシ．．．。）

カスミは息が続かなくなると海面へ浮上し、空気を思いっきり吸い込んで潜水した。そしてまた潜水し、サトシの元へ近づき人工呼吸を行う。それを何回か繰り返す。ミジュマルは黙々とサトシの足に絡まった海藻を取り除く。だが、カスミもだんだんと体力を消耗していき、

カ（．．．もう、駄目。）

カスミも意識を失ってしまった。

ミジュマル「ミジュ！？」

ミジュマルはどうしていいか分からなくなる。するとその時、

ゴゴゴゴゴゴ！

大きな音とともに、海深くから黒い影が現れた。

ミジュマル「ミジュマ！？」

ミジュマルはその影を見るなり、怖気ついて気絶してしまった。その黒い影はサトシ、カスミ、ミジュマルを連れて海面へと向かっ

ていった。その頃、浜辺では、

アイ「・・・カスミは何やってるの。海面に出たと思ったら、また海の中に潜って・・・。」

今、海の中で何が起きているのか状況が把握できないでいる面々。それに加え、カスミを信じるしか出来ない自分たちに歯がゆさを感じている。

ゴゴゴゴゴ！

ヒ「今度は、何!？」

突然の海鳴りに固唾を飲む面々。すると、沖合から少し大きな波が発生して、浜辺へと向かってきた。

タ「いかん！ここは一旦上がるぞ。」

浜辺にいた面々は浜辺を離れる。波が浜辺に到着した後、1匹のポケモンが現れた。それはシルバーの親であるルギアだった。

ハル「ル、ルギア!？」

突然のルギアの登場に驚く面々。するとタケシの脳裏に、以前シ

ルバーを捕えられたルギアが列島中を襲った記憶が過ぎる。

タ「待つてくれ、ルギア。シルバーは無事だぞ！」

タケシはルギアに島を襲わないように説得する。今度はヒカリが、

ヒ「タケシ、あれを見て。サトシとカスミ、それにミジユマルよ。」

ヒカリはルギアの背中に乗っているサトシ、カスミ、ミジユマルに気づいた。ルギアは浜辺に着くと、2人と1匹を優しくおろした。そこにタケシ達が近づく。

タ「もしかして、サトシ、カスミ、ミジユマルを助けてくれたのか？」

タケシの質問に、ルギアはうんと頷く。

アイ「ありがとう、ルギア。」

アイリスがルギアに礼を言うと、タケシはサトシを、ハルカはカスミを背負って、ヒカリはミジユマルを抱えて、安全な場所へと彼らを運んでいった。ルギアはそれを見届けると再び海の中へと引き返していった。

続く

サトシ、ケンタ、ピカチュウの運命（後書き）

カスミ サトシの要素は、かつて山口で再放送されていたアニメ『未来少年コナン』を参考にし、編み出しました。

うずまき列島編、終結！（前書き）

うずまき列島を舞台にした Rocket 団との戦いも、この話で一旦は
終結です。

オチにハーレム要素を使用。

うずまき列島編、終結！

タケシ達によつて、高台のポケモンと人間の医療療法が備わった施設へと運ばれたサトシ、カスミ、ミジユマル。

サ「カ「ん。んん。。。」

ハル「ヒ・アイ「サトシ、カスミ！」」

サトシとカスミが意識を取り戻した。

サ「。。あれ、ここは？」

サトシは今の状況が分からず、頭にクエスチオンマークを浮かべる。

ヒ「ここは黄岩島よ。」

ハル「サトシ、今まで海の中で意識を失ってたのよ。」

サ「そつか、俺。。。」

サトシは意識を失うまでの経緯をハルカ、アイリス、そしてサトシとほぼ同時に意識を取り戻したカスミに話した。

カ「そんなことがあったのね。」

アイ「ロケット団、絶対に許せないわ。」

カスミはサトシ達がどんな目に遭っていたのかを理解し、アイリスはそれに加え、ロケット団に対して怒りを露わにする。

サ「ところでなんでカスミが俺と同じく寝込んでたんだ？」

サトシはなぜカスミが今まで寝込んでいたかを聞いてみた。

ハル「あっ、そうそう。カスミったら、ホントに心配したんだから。」

サ「ん？ どういうことだ？」

ハルカの発言にサトシはさらに頭にクエスチョンマークを浮かべる。

ヒ「カスミはね、サトシとピカチュウを助けるために危険を承知で海を泳いだのよ。」

サ「えっ？ そうなのか。」

アイ「そうよ。でも、サトシを助けるつもりが自分まで意識を失うなんて。ホント、カスミも子供なんだから！」

カ「アハハハハ・・・。」

アイリスは、語尾を強めてカスミに言う。さすがのカスミも言い返せず、ただ苦笑を浮かべるだけだった。

ハル「でも、危険を顧みずにサトシを助けに行ったカスミはすごいかも。」

ヒ「あたし達はただ見守るだけしか出来なかったですものね。」

サ「そっか、俺なんかのためにありがとうな。カスミ。」

カ「ちょっと、俺なんかとか言わないでよ。アタシ達は、サトシの仲間なんだからこれくらい当然よ。」

サトシがカスミに礼の言葉を言ったその時だった。

ピ「ピッカー！」

ミジュマル「ミイイイジュ！」

ベイリーフ「ベエエエイ！」

ツタージャ「タージャ！」

ピカチュウ、ミジュマル、ベイリーフ、ツタージャが扉を開けてサトシ達の病室に入ってきた。

サ「アハハハ、みんなくすぐったいって。」

元気そうなサトシを見て安心したのか、我を忘れてサトシにすり寄るポケモン達。

カ「あつ、そうそう。ピカチュウとミジュマルに感謝しなさいよ。

ピカチュウはアンタの居場所を教えてくれたし、ミジュマルはあたと一緒にアンタの足に絡まっていた海藻を取ってくれたんだから。」

サ「そうなのか、ピカチュウ、ミジュマル？」

ピ「ピッカー！」

ミジュマル「ミジュ！」

サ「ピカチュウ、ミジュマル。ありがとうな。」

サトシはそう言うと、ピカチュウとミジュマルの頭をなでる。2匹とも照れ臭そうな反応を示す。その光景がその場の空気を和ませる。

ハル「あっ、サトシ、ヒカリ。あの時はごめんね、置き去りにして。」

ハルカはサイドン達に襲われたときにサトシ、ヒカリ、ケンタ、マリナを置き去りにしてその場を立ち去ったことを後悔していた。

サ「いいよ、俺たちは別に気にしてないって。」

ヒ「それにあの場に残っていたら、ハルカと川柳のお孫さんまで危険な目に遭ってただから仕方ないわよ。」

ハル「そう。。。。」

サトシとヒカリは気にしてないと言うが、未だハルカの気分は晴れない。

サ「過ぎたことは気にすんなって。今、俺たちはこうして生きてるんだからそれでいいだろ。」

ハル「・・・そうね、いつまでもうじうじしたって仕方ないものね。」

カ「ハルカ、その意気よ。ハルカには笑顔が似合うわ。」

サトシ達の励ましもあり、ハルカはパアアと笑顔を咲かせた。

サ「ところで、他のみんなは？」

ヒ「他のみんななら、ケンタの所に行ってるわ。」

サ「それじゃあ、ケンタは無事なのか。」

ハル「ええ、サトシと同じく意識を失ってたけど今は違う病室で寝ているわ。ふふふ、その時のマリナったら・・・。」

サ「えっ、マリナがどうかしたのか？」

アイ「ハルカ、子供なサトシに言っただってわかんないわよ。」

ハル「それもそうね。サトシ、最後のは何でもないわ。」

サ「何だよ。教えてくれたっていいじゃないか。」

サトシは頬を膨らませながら、不貞腐れる。その光景にカスミとヒカリは苦笑を浮かべた。

カ（こんな時に、アタシがサトシに人工呼吸したなんて言えないわね。）

カスミはサトシに人工呼吸をしたことについて自分の心の中にしまっておこうと思った。仮に今言えば、この場は修羅場と化すことが目に見えていたからである。それに、今の状態でそんな修羅場を勝ち抜く自信はカスミにはなかった。その後、サトシ達は療養のため、2、3日黄岩島に滞在した。そして、療養を終えてサトシ達は次の目的地に向けて出発することにした。

オサム「サトシさん達、もういつちゃうんですか？」

サ「ああ。ところで、シゲル、フルーラ、カノンはこれからどうするんだ？」

シゲル「僕はルカさんともう少しここに残るよ。今回の一件の後処理もしなきゃいけないしね。」

フルーラ「わたしも残るわ。ルギアが住むこのうずまき列島でアシア島の巫女としてしなければならぬことがある気がするの。それにわたし、この子に随分懐かれたみたいだしね。」

フルーラの足元には、シルバーが頬擦りをしている。

カノン「わたしも残るわ。あつ、サトシ君、ケンタ君、カスミ。もう体調の方は大丈夫なの？」

サ「俺は大丈夫だぜ。」

ケンタ「俺もだ。」

カ「あたしもよ。心配してくれてありがとう、カノン。」

カノン「どういたしまして。」

カスミは自分たちを心配してくれたカノンに礼を言う。

シ「それじゃあ、サトシ、ケンタ、コトネ、ベル。ワールドチャンピオンリーグ、頑張れよ。」

サ「ああ。」

ケンタ「もちろんだ。」

コトネ「頑張るってことね。」

ベ「シゲル君も、体には気を付けてね。」

ルカ「サトシ君たちも、元気でね。」

サトシ達は次の目的地に向かう船に乗り込んだ。そして、最後にサトシと肩に乗っているピカチュウが乗り込もうとしたその時、

フルーラ「あつ、そうだ。サトシ。」

カノン「サトシ君。」

サ「ん？ なんだ2人と・・・。」

サトシが振り返ろうとしたその時だった。フルーラはサトシの左側に、カノンはサトシの右側に移動して、

カノン「うん。」

フルーラとカノンは笑顔でお互いの顔を見る。一応、笑顔であるが目が笑ってないように見えるのは、気のせいだろうか。再三言っておくが、フルーラとカノンはサトシに対して好意を抱いている。

シゲル（サトシ、君も大変だね。。。）

シゲルは苦笑を浮かべながら、幼馴染のこれからを心配した。サトシは平常心を保とうとしつつ、船に乗り込み、船は出発した。

フルーラ「カノン、あなたもサトシのことが好きなのね。」

カノン「そういうフルーラもね。でも、サトシ君は絶対に譲れないわ。」

フルーラ「それはこっちの台詞よ。わたし達、これから親友でもあり恋敵ライバルでもあるわね。」

シゲル「・・・（君達、僕がいるということを忘れてないかい？）」

この時より親友兼恋敵ライバルとなったフルーラとカノン、その様子にさらに苦笑を浮かべるシゲルは地平線へと消えていく船を見送るのだった。一方の船内でも、

アイ「サトシ、アタシが大会の必勝祈願のためにおまじないのキスしてあげる。」

ヒ「ちょっと、アイリス。抜け駆けは許さないわよ。」

ハル「そういうヒカリだつて、抜け駆けかも。」

カ「ちよつと3人とも、待ちなさい！」

コトネ「サトシつて、モテモテつてことね。でもこれだけは譲れないわ。」

ベ「サトシくん、お互い頑張れるようにキスしよ。」

サ「えつ、ちよつとおま．．．．わあああ！」

サトシは少女6人に押し倒されて、顔中にキスされまくった（笑）
笑えるか！ by サトシ

ちなみに、ピカチュウはもみくちやにされる中、なんとか脱出してタケシ達のもとに避難した。

タ「サトシ．．．。羨ましい、実に羨ましいぞおお！」

マサト「僻^{ひが}まない、僻^{ひが}まない。」

デ「今後もサトシを巡るエキサイティングなテイストのバトル．．．
うん、怖いな。」

リュウカ・ケンタ・マリナ「アハハハ．．．。」

そんなこんなで、次の目的地・タンバシテイへと到着したのだつた。

最後に、公共交通機関を利用する際には、他の乗客のご迷惑に

ならないように、マナーを守って利用しましょう。

久々の後書きシヨ

うずまき列島編、終結！（後書き）

サ「作者」（怒）「 顔中にキスマーク。」

天「うわあ、これはまた派手にやられたな。」

サ「他人事みたいに言うな。なんなんだこのオチは。」

天「当分の間、ハーレム要素からも離れてたからな。こんなオチもたまにはいいだろ。」

サ「良くない！」

天「良かったじゃないか。女子8人からキスされるなんて。」

サ「ちつとも、うれしくないよ。俺、あの時窒息して綺麗な川を渡りかけたんだぞ。」

天「サトシ、間違ってもその川は渡るな。それは間違いなく三〇の川だ。」

サ「渡るわけないだろ！」

天「そりゃそつか、では次回からはタンバシティでのポケモンコンテストをお送りします。」

ポケモンコンテスト・タンバ大会！（前書き）

新章、突入！

久々にあの3姉妹も・・・

修正する場合、あり。

ポケモンコンテスト・タンバ大会！

サトシ達御一行は、黄岩島から出航した船に乗り、ようやくタンバシティへと到着した。その間、少女6人からキスされ続けるといふある意味拷問と言っている行為を受けたサトシはゲッソリしていた。だが、サトシLOVEズ6人はそんなこと気にする素振りもなく、上機嫌だった。

マサト「サトシ、大丈夫？」

サ「・・・まだ、だいじよばないかも・・・。」

マサトが心配して声を掛けるが、サトシは乾いた笑みを浮かべた返事しかできなかった。サトシが立ち直ったのは、それから4、5分後の事だった。

デ「ところで、カスミ、ハルカ、ヒカリはこの3週間後タンバシティで開かれるポケモンコンテストに出るんだよね？」

ハル「ええ、そうよ。」

ヒ「そろそろ、実戦に慣れておかないと思ってね。」

ケンタ「ところで、マリナは今回出るのか？」

マリナ「ううん、今回はカスミ達の応援に回ろうと思ってるの。」

ケンタ「そっか。」

マリナは今回のポケモンコンテストには参加しないようである。

ハル「そう。マリナと大会でコンテストバトルしたかったのに、ちよっぴり残念かも。」

マリナ「ごめんね。そのかわり、今回は命一杯3人のパフォーマンスを見させてもらうわ。」

ヒ「マリナの期待に添えられるどうかわかんないけど、頑張るわ。」

ハルカとヒカリはコンテストに向けての決意表明をした。

マサト「ところでカスミ、大丈夫なの？ いくら傷口が完治したと言っても、思ったような調整とかできなかったんじゃない？」

カ「マサト、心配してくれてありがとう。でもね、今回のポケモンコンテストのために、アタシはだいぶ前から準備してたの。確かに調整不足は否めないけど、水ポケモンマスターを目指す者として、今回ののは絶対にでたいの。それに、調整不足を補うために、こうして下見を兼ねて3週間前からここに来てるんだしね。」

カスミはウインクしながらマサトの質問に答える。

サ「そっか、今回のポケモンコンテストは水ポケモンを使ったコンテストだもんな。」

実は今回のポケモンコンテストの使用ポケモンは水タイプのみとなっている。

ポケモンコンテスト・タンバ大会の概要

1・使用するポケモンは水タイプに限る。

2・予選はポケモン1体のパフォーマンス演技で水上で行う。

3・予選上位8人が本選のコンテストバトルに進むことができ、その本選はタッグバトル方式で水中にて行う。

ハル「カスミ、今回のコンテストに向けて随分張り切ってたものね。」

ヒ「だからといって、カスミには負けないわよ。もちろん、ハルカにもよ。」

カ「あたしだって、2人には負けるつもりはないわ。」

ハル「ヒカリにはミクリカップの時の借りがあるから、わたしだって負けられないわ。」

3人ともただならぬ闘志を燃やす。

タ「おつ、早速仲間であるとともにライバル同士のバトルの始まったな。」

サ「あゝ、3人のうち誰を応援していいのか迷っちゃうぜ。」

そんな中で会話をする彼らのもとに、

？「君達、僕たちを忘れてないかい？」

？「ヒカリ達だけじゃなく、僕達だって出場するんだぜ。」

ハル「シュウ！」

ヒ「ケンゴ！」

彼らに声を掛けてきたのは、シュウとケンゴだった。

ハル「あなたもこのコンテストに出るの？」

シュウ「ああ、最近実戦から離れてたからね。そろそろ、ワールドチャンピオンフェスティバルに向けて調整を始めないとね。」

ヒ「ケンゴもなの？」

ケンゴ「うん。僕も今回のコンテストに出るよ。水ポケモンにエンペルトとフローゼルを持つてるからね。」

リュウカ「カスミさん、ハルカさん、ヒカリさんのだけじゃなく、シュウさんやケンゴさんも出るとなったらこのコンテスト、面白くなりそうですね。」

デ「君たちがどんなテイストのパフォーマンスを見せてくれるのか実に楽しみだよ。」

シュウとケンゴも加わり、会話に花開かせていたところに、

「あの・・・、ハナダジムのジムリーダーのカスミさんですよね。」

カスミ「ええ、そうだけど。」

恐らくこのコンテストを見に来たであろう少年少女5人がカスミに声を掛けてきた。

少女A「うわあ、本物のカスミさんだ。」

少女B「わたし、ファンなんです。」

少年A「握手してください。」

少年B「僕、こんなところでカスミさんに出会えるなんてツイてるな。」

少女C「ねえ、見て。カスミさんの隣にいるのは、ホウエンの舞姫・ハルカさん、シンオウのグランドフェスティバルでノゾミさんと接戦を繰り広げた・ヒカリさん、それにラルースの貴公子・シユウ様もいるわ。」

ハル・ヒ・シユウ「……えっ!?!」「」「」

少年少女5人はカスミだけでなくハルカ、ヒカリ、シユウにも群がる。カスミとシユウは慣れているのかそれなりの対応を見せるが、ハルカとヒカリはどうすればいいかわからず、困惑する。彼らは少年少女5人を落ち着かせるのにしばらくかかった。

カスミ「ん?　ねえ、その新聞。ちょっと見せてもらっていいかしら?」

少年B「ええ、別にいいですけど。」

カスミは少年Bが持っていた新聞を手に取り、目についた記事を凝視する。

カスミ「な、なんなのよ。これ！」

カスミは顔を赤くさせて驚愕の声をあげた。その記事には『世界の美少女！ おてんば人魚・カスミ！ タンバシティに見参！』とデカデカと書かれていて、髪を下した人魚姿のカスミの写真が掲載されていた。さらには、

？「我らハナダ美人姉妹の期待の星、カスミがタンバシティにやってきます。」

？「そして、今回のポケモンコンテストで素晴らしい演技を見せることでしょう。」

？「ぜひ、わたし達の妹・カスミを応援してね。お・ね・が・い。」

カスミを大々的に宣伝する大人の女性3人がカスミ達から少し離れて立っていた。この女性3人が誰なのかもうお分かりであろう。

サ「なあ、あれって。」

ハル「カスミのお姉さんたちよね。」

タ「ああ、あの綺麗なお姉さま方は間違いなくカスミの姉、サクラさん、ボタンさん、アヤマさんだ。」

一人可笑しい紹介の仕方だったが、カスミの宣伝活動をする女性3人とは今作品久々の登場、ハナダ美人3姉妹のサクラ、ボタン、

アヤメだった。

ケンゴ「うわあ、結構派手にやってるね。」

シュウ「あんな宣伝活動、初めて見たよ。」

ケンゴとシュウは、カスミの姉達の宣伝活動を見て、驚きの表情を浮かべた。

サ「カ、カスミ!?!」

そんな彼らの後ろで、笑顔だが目が笑っておらず、ドス黒いオーラを纏っているカスミ。

カスミ「ねえ、アタシちょっと逝ってくるわ……。」

ハル「カスミ、字が間違ってるわよ!」

ヒ「えっ、ちよつと!?!」

サ「待てよ、カスミ!」

カスミは猛スピードでサクラ達に向かっていった。そんな怒りモードMAXであろうカスミを制止しようとハルカ、ヒカリ、サトシが慌てて後を追う。

シュウ「一体、なんなんだ?」

ケンゴ「さあ……。」

シユウとケンゴはあまりにも突然すぎる出来事に開いた口が塞がらなかった。少年少女5人も訳が分からずにいる様子である。そんな中、

タ「サクラさん、ボタンさん、アヤメさん。あなた方とこのタンバシティでお会いできたのは、なにかのご縁があつてこそ。今すぐ、この愛の伝道師・タケシが．．．うっ!？」

ナンパモードに入ったタケシがサクラ達のもとに向かおうとした途端、タケシのグレッグルがタケシにどくづきを喰らわせて、

タ「しびれびれ〜。」

は、
タケシはお馴染みの台詞を吐きながら、その場に倒れた。さらには、

マサト「はいはい、僕たちはアイリス、カズナリ、コトネ、ベルが待ってるポケモンセンターに行こうね〜。」

マサトがタケシの耳を引張って、グレッグルと協力してタケシをポケモンセンターに連れていった。見事な連携プレーである。

デ・リュウカ・ケンタ・マリナ「~~~~~。」「~~~~~」

デント、リュウカ、ケンタ、マリナは今の光景に言葉を失った。

一方、カスミ達は、

カスミ「ちょっと、姉さん達。これはどういうことよ!」

サクラ「あら、カスミじゃない。」

ボタン「一体、どうしたの？ 大会まであと3週間もあるっていうのに。」

カスミ「それは、ここで会場の下見も兼ねてポケモンの調整……って、話を逸らすなー（怒）」

カスミはノリツッコミで、怒りを露わし、ハナダ美人3姉妹に飛びかかるうとした。

ハル「カスミ、落ち着いて！」

ヒ「ここで暴れたって、しよーがないでしょ！」

それを制止するハルカとヒカリ。

アヤメ「そうよ、カスミ。せっかくの可愛い顔が台無しじゃない。」

ボタン「わたし達の稼ぎ頭がそんなのじゃあ、駄目よ。」

実の妹を稼ぎ頭扱いするくらいにゴーイング・マイウェイを貫くハナダ美人3姉妹。

カ「稼ぎ頭って、それが実の妹に言うセリフ!？」

サクラ「もー、カスミったらそんなにカリカリしてたらますます血圧が上がっちゃうわよ。」

カ「血圧って、アタシはそこまで年寄りじゃないわよ（怒）」

サクラの一言でさらに怒りを強めるカスミ。その雰囲気は凄まじく、どんな凶悪なポケモン、おそらく伝説のポケモンでも逃げ出すほど怖さ十分である。怒り狂ったカスミを抑えるのにかなりの時間を要したという。

カ「ハアハア、もう好きにして……。」

カスミはこれ以上言っても無駄なので、この件に関してはあきらめた。

アヤメ「そういえば、カスミ。この大会にはリュウジ君も出るんですって。」

サ「えっ、リュウジさんも!？」

サトシは以前会ったことのある人物の名前があたり、驚きの表情を見せた。

ヒ「ねえ、リュウジさんって誰?」

ヒカリはまだ会ったことのないリュウジについて聞いてみた。ハルカもリュウジとは一度もあってない。

カ「リュウジさんは、フスベシティ近くにリュウグウジムというポケモンジムを構えているジムリーダーよ。ちなみにリュウジさんもアタシと同じ水ポケモンの使い手よ。」

ハル「ジムリーダー!? カスミもジムリーダーでしょ。2人のジムリーダー、しかも水ポケモンの使い手なんて、強敵かも。」

サ「あつ、いや、ポケモンジムといっても非公認のジムなんだ。」

ボタン「あー、それならこの間、協会に申請して無事に公認ジムとして認められたみたいよ。」

サ「えっ、そうなんですか？」

リュウグウジムはアニメで登場した際には、非公認のジムであった。本作品では、あれから協会への申請を経て、ジム協会公認ジムとして認められたという設定にしておく。

カ「ところで、そのリュウジさんはどこなの？」

アヤメ「リュウジ君なら、今ポケモンセンターにいるわよ。わたし達もこれから向かうところだから会場の下見も兼ねて、一緒に行きましょう。」

カ「そうね、そうするわ。サトシ達もそれでいいかしら？」

サ「俺は構わないぜ。久々にリュウジさんに会ってみたいし。」

ハル「わたいも全然問題ないかも。」

ヒ「あたしもいいわよ。」

サクラ「それじゃあ決まりね。早速行きましょう。」

サトシ達は再会したハナダ美人3姉妹とともに、会場の下見も兼ねてポケモンセンターに向かうのだった。

そんな彼らを尻目に、

？「ふふふ、ここで可愛いヒカリさんをお目にかかれるとは何かの縁。シンオウでは伝わらなかった僕の気持ちをあなたに伝えます。」

また、別の場所では、

？「はあく、やっぱりハルカちゃんは可愛いなあ。よーし、ここで俺の気持ちを伝えるぞ。」

ヒカリとハルカに忍び寄る影とは・・・

続いて後書きシヨ―

ポケモンコンテスト・タンバ大会！（後書き）

ヒ「いよいよ、あたし達のコンテストが始まるのね。」

ハル「あゝ、ホントに緊張してきたかも。」

カ「それにしても、水ポケモンのみのコンテストなんて考えたわね。」

天「ただ普通にしても良かったが、AGで出てきたR11のようなコンテストがやってみたかったんだ。」

ハル「ああ、わたしが出したコンテストリボンを1つ以上持ってるコ―ディネーターのみ出場できるあれね。」

天「ちなみに、3人とも新ポケモンをそれぞれ1匹ゲットしてる設定にしてるから。それは次回出すことにする。」

ヒ「新ポケモンって何かしら？」

カ「とりあえず、次回の投稿まで待ちましょ。」

天「それじゃあ、ハル力締めよろしく。」

ハル「それでは読者のみなさん、次回もポケモンゲットかも！」

コンテスト前日（前書き）

コンテスト前日の様子です。ほとんど、カスミ、ハルカ、ヒカリメインです。3人とも、新しいポケモンを1匹ずつゲットしている設定にしております。

ギリギリで18禁は抑えた。多分・・・

コンテスト前日

あれから、サトシ達はタンバシティのポケモンセンターでリュウジと会うことが出来た。コンテスト本番までの間、カスミ、ハルカ、ヒカリはポケモン達のパフォーマンス調整を集中して行っていた。そして、コンテストも翌日に迫った日の事。

サ「おつ、3人とも頑張ってるな。」

ヒ「あつ、サトシ。」

翌日の本番に向けて最終調整を行っていた3人のもとに、サトシ、その後ろにはハナダ美人3姉妹が近づいてきた。

サクラ「調子はどうかしら？」

カ「アタシも、ハルカも、ヒカリも大丈夫よ。」

アヤメ「それは良かったわ。それより、3人ともコンテストに出すポケモンは決まったのかしら？」

カ「アタシは決まったわ。予選はスターミー、本戦のタッグバトルはサニーゴとこの日のためにゲットしたこの子でいくわ。」

そう言うとカスミは1つボールを取り出し、ポケモンを出した。

ミロカロス「ミロオオオオオ！」

出てきたポケモンはミロカロスだった。

ハル「カスミ、いつの間にミロカロスゲットしたの!？」

カ「ええ、サトシがイツシユ地方に行つてた時にハウエンに行く機会があつてね。その時に釣りでゲットしたヒンバスを進化させたのよ。」

ハル「ええ、カスミってハウエンに来てたの!？ それならそうと、一言声を掛けてくれても良かったのに。」

カ「ごめんごめん、ハルカ。」

ヒ「それにしても、このミロカロスもなかなか良く育てられてるわ。さすがはカスミ。」

アヤメ「カスミったら、他のポケモン達と協力してこの子を一生懸命に育ててたものね。」

サ「こりゃ、ハルカとヒカリにとっては強敵になりそうだな。」

サトシはカスミのミロカロスに感心したように言った。ちなみにミロカロスは全ポケモンの中でもトップクラスの美しさを備えており、コンテストで使用するコーディネーターが多く、かなり重宝されている。

ボタン「カスミのポケモンは分かったわ。ハルカちゃんとヒカリちゃんはどのポケモンでいくの?」

ハル「わたしは、予選はカメールで、本戦は1匹は引き続きカメールで、もう1匹はこの子でいくわ。」

ハルカはカスミ同様、ボールを1つ取り出して、ポケモンを出した。

カブトプス「カッ！」

ハルカが出したポケモンはカブトプスだった。

サ「ハルカは、カブトプスをゲットしてたのか。」

ハル「この前、ある町でコンテスト関係で来たときに甲羅の化石を貰ったの。それをニビシティの博物館で戻したカブトを進化させたの。」

驚くサトシにハルカは丁寧に答えた。

カ「カブトプスのスピードは厄介になりそうね。」

ハルカがこのカブトプスのスピードをどうコンテストで活かすか見物である。

ヒ「次はアタシね。予選はポツチャマでいくわ。」

ポツチャマ「ポツチャマ！」

ヒカりに名前を呼ばれたポツチャマは大きく胸を張って答えた。

ヒ「本戦の1匹は引き続きポツチャマ、もう1匹は……。」

ヒカリもカスミやハルカ同様、1つのボールを取り出して、ポケ

モンを出した。

ビーダル「ビィィィダアアア！」

ヒカリのモンスターボールから出たポケモン。それは、ノーマル・みずタイプのビーダルだった。

ハル「ヒカリはビーダルをゲットしてたのね。」

ヒ「サトシがイツシユ地方に行ってる間にゲットしたの。ママのポケモンとは特訓してただけど、実は今回がコンテストデビュー戦よ。これからよろしくね。ビーダル。」

ポツチャマ「ポチャポーチャ。」

ビーダル「ビィィィ。」

ビーダルはヒカリとポツチャマに元気よく返事を返した。

サクラ「3人とも気合十分ね。それより、コンテストの衣装は決まったのかしら？」

サクラはカスミ、ハルカ、ヒカリの3人にコンテスト用の衣装はどうするのかと聞いてきた。ちなみに、コンテスト発祥の地であるハウエン、カントーではコーディネートは普段着のままコンテストに挑むのが主流だが、シンオウでのポケモンコンテストではコーディネーターもコンテスト用の衣装を着て挑むのが主流となっている。ちなみに、ジョウトではどちらが主流かは特に決まっていなかったがシンオウ方式の流れに向かいつつある。

カ「そういえば、フィールドがプールだから、水着にならなきゃいけないわね。」

ヒ「いつものようにドレスだと、やりにくいしね。」

今回、水ポケモンのみのしよとなつていているこのコンテストは、予選のパフォーマンスも本戦のコンテストバトルも巨大なプールを舞台としている。コンテストの衣装については特に決められてはいないが、演技中、水しぶきがコーディネーターにかかることが予想されるため、海パンやビキニ、ダイビング用のボディースーツなど水がかかっても大丈夫なものを着るのがふつうである。カスミ達がコンテスト用の水着に悩んでいたところへ、

？「どうやら、君たちはまだコンテスト用の衣装を決めてなかったみたいだね。」

ハル「シユウ!?!」

ヒ「ケンゴ!?!」

同じく今回のコンテストの出場者であるシユウが声をかけてきた。後ろには同じく出場者のケンゴもいる。どうやら、ここ何日かで、この2人は仲良くなつたようだ。

ハル「シユウ達はいいわよ。海パン穿いてればいいんだから。」

ハルカはシユウに対して、ムウウと頬を膨らませながら言う。

ケンゴ「カスミさんやハルカさんは良いとして、ヒカリはどうするんだい? 鈍重なヤドンのピカリだから、自分じゃ決められずにカ

スミさん達に迷惑をかけるのがオチだろ。」

ヒ「ヒ〜カ〜リ〜ですう〜。自分の水着ぐらい、自分で決められるわよ。」

ヒカリもケンゴに対して、ムウウと頬を膨らませながら言う。

シユウ「まあ、美しくないハルカに似合う水着があることを願うよ。」

ハル「なによそれ、やな感じ!」

ハルカはますます頬を膨らませる。それはまるでプリンのように、このまま空の彼方へ飛んで行ってしまふ勢いである。

サ「まあまあ、シユウにケンゴ。それくらいにしておいてやれよ。俺はハルカとヒカリが最高のパフォーマンスをしてくれると信じてるぜ。あつ、もちろんカスミもな。」

サトシのニコツと笑顔を見せ、カスミ、ハルカ、ヒカリに言った。そんなサトシの超鈍感必殺技(?)がサトシに好意を持つ彼女たちの心に響かないわけもなく、

カ・ハル・ヒ「ハハハサトシ〜。」

サ「おわっ!?!」

サトシは3人に抱き着かれた。

ヒ「やっぱり、サトシは違うわね〜。」

ハル「シュウとは、大違いかも。」

カ「あんたたまには、良いこというじゃない。」

サ「たまにはは余計だ。」

サトシは前、左、右の3方向から抱き着かれる格好になっている。その様子を啞然とした表情で見つめるシュウとケンゴ。そして、うふふと不敵な笑みを浮かべながらなんだか楽しんでいるハナダ美人3姉妹。さらには、

ハル「シュウ。」

ヒ「ケンゴ。」

ハル・ヒ「もっと、サトシを見習ったら。」

シュウ・ケンゴ（「ガーン、しまった。」）

シュウとケンゴは絶望の淵に立たされたような思いになった。先程のハルカに対するシュウの嫌味、ヒカリに対するケンゴの嫌味は2つとも照れ隠しのようなものである。ケンゴがヒカリに対して好意を抱いていることは今作品でも紹介したが、実はシュウはハルカに対して淡い恋心を抱いている。ただ、自分のプライドが邪魔してハルカに対して素直になれない一面がある。まっ、そんなことはサトシ総モテを作ろうとしている作者にとってはどうでもいいことだけれどね（笑） 良くなーい（怒） by シュウ、ケンゴ

ハル「丁度今の水着がきつくなつてたところだしね。」

いと思う?」

ポツチャマ「ポ、ポチャア〜。」ポツチャマに聞いても分かるわけがありません。

カ「まあまあ、本番まで時間があるんだしポケモンの調整はしてたんだから、じっくり見て選びましょうよ。」

ハル「でもこのショップ、品ぞろえが良過ぎかも。」

カ「まあね。このショップ、姉さん達一押し of ショップだもの。姉さん達、普段はあんな感じだけど、品を見る目は結構あるわ。」

3人が水着選びに没頭していたところに、

ポタン「3人ともちょっといいかしら?」

ポタンが話しかけてきた。

カ「何? ポタン姉さん。」

カスミは話しかけてきたポタンに首を傾げながら答える。

ポタン「あなたたちにおすすめの水着があるんだけど。」

カ・ハル・ヒ「「えっ!?!」「」

ポタン「この3つよ。」

するとポタンは徐おもむに自分が今持ってきた3つの水着をカスミ、ハ

ルカ、ヒカリに見せる。

ヒ「こ、これって・・・。」

ハル「あ、あまりコンテスト向きじゃないかも・・・。」

カ「・・・姉さん、真剣にあたし達の水着選ぶ気ある？」

カスミ、ハルカ、ヒカリが見た水着、それは露出度が高めのちよつとアレな水着だった。3人とも、その水着を見て啞然とした。カスミに至っては呆れた様子である。

ポタン「あら、これであの鈍感なサトシ君もイチコロだと思うけど。」

3人はサトシの名前が出た途端、

カ「さ、サトシは関係ないでしょ／＼／」

ハル「そ、そうですよ／＼／」

ヒ「な、なんでここでサトシが出てくるんですか／＼／」

急に顔を真っ赤にさせて、慌てふためいた。

ポタン「（ふふふ、この子たちからかい甲斐があるわ。）あら、さつき見た様子だと、あなた達サトシ君のこと好きでしょ。」

サクラ「だったら、こういうので頑張ってアプローチしなきゃね。」

アヤメ「それとも、わたし達があなた達の気持ちに気づかないでも思った？」

横入りするように会話に参加したサクラ、アヤメも3人をからかうように言う。

カ「さ、サトシはそんな色目使って誘惑しても気づかないわよ／／」

ハル「そ、そうですね／／」

ヒ「ていうか、コンテスト関係ないじゃないですか／／」

どうやら、ハナダ3姉妹はコンテスト用の衣装を選ぶ手伝いを名目に、3人の真意を探るのが目的だったようだ。ともあれ、3人は3姉妹から勧められた水着を丁重にお断りし、無事にコンテスト用の水着を購入したのだった。御勘定も済んで、ショップから出ようとした時、

ヒ「サクラさん、アヤメさん、ボタンさん。今日はあたし達のコンテスト用の水着選びに付き合っていたいてありがとうございます。」

ハル「わ、わたしからもありがとうございます。」

なんだかんだ言っ手伝ってもらったので、丁寧に礼を言うヒカリとハルカ。

サクラ「あら、そこまでかたっ苦しいお礼なんていいわよ。」

アヤメ「それに．．。」

ハル・ヒ「それに？」

ボタン「ハルカちゃんとヒカリちゃんのスリーサイズも分かったしね。」

ハル・ヒ「！？」

カ「ねえさん（怒）」

3 姉妹のもう一つの目的が判明（？）したところで、彼女達はタバンシテイのポケモンセンターへと戻っていった。

そんな、彼女達を後ろで、

？「ハルカちゃん、どんな可愛い水着でコンテストに出るんだろう。楽しみだなあ。」

？「ヒカリさん、可愛いあなたに相応しい水着楽しみにしてますよ。」

続く？ (いや、絶対に続きます！)

コンテスト前日（後書き）

次回、新キャラ2名登場。ついでにもう1人・・・

コンテスト・タンバ大会開幕！（前書き）

予告通り、新キャラ2名登場します。ついでに、今作品2度目の登場のあの人も・・・

ただ、3人とも扱いが酷いです（笑） 笑うところじゃない！

コンテスト・タンバ大会開幕！

前日、コンテストに着る水着も決まり、無事に本番を迎えることが出来たカスミ、ハルカ、ヒカリ。現在はサトシ、マサト、シュウ、ケンゴとともにコンテスト会場の前にいる。他の面々は、すでに会場入りしている。

ヒ「ここが、コンテストの会場ね。」

ハル「うわあ、久々の実戦だから緊張してきたかも。」

サ「大丈夫さ。3人ならきつといい演技を見せてくれる。俺はそう信じてるぜ。」

カ「サトシ……。」

ハル「ありがとうかも。」

ヒ「全力を尽くして頑張るわ。」

サトシの励ましのおかげで3人の緊張がほぐれた。ましてや想い人からの励ましなので、より良い刺激になったのは間違いなかった。

シュウ「それじゃあ僕たちは向こうの会場だから、ここでお別れだね。」

ケンゴ「ヒカリ、そしてカスミさん、ハルカさん。また、本戦で。」

ハル「シュウもがんばってね。」

ヒ「本戦のコンテストバトル、楽しみにしてるわ。」

カ「あたし達も頑張るから。」

シユウ、ケンゴの2人は会場前でカスミ達と別れた。今回のコンテストは2会場に分かれて行われる。予選のパフォーマンスは参加するコーディネーターを2ブロックに分けて行い、それぞれのブロックの上位4名ずつが次の本戦のコンテストバトルへと駒を進める。本戦のコンテストバトルは、決勝以外は2試合同時に行われるトーナメント方式になっている。例えば、第1試合と第2試合を2会場に分かれて同時進行するということである。

マリナ「3人とも、調子はどうかしら？」

サトシ達のもとに、今度はマリナが声を掛けてきた。そのマリナの隣にはケンタもいる。

ハル「うーん、久々の実戦だから緊張しっぱなしかも。」

カ「ハルカ、さっきからそればかりよ。」

ヒ「もうちょっと、リラックスしなきゃ。」

ハル「だって〜。」

ハルカの緊張ぶりに皆、苦笑を浮かべる。

サ「ハルカ、緊張する気持ちは分かるけど、お前がそんなんじゃないよ、ポケモン達も安心できないぜ。」

ケンタ「余計にプレッシャー掛けてしまつようです申し訳ないけど、俺も『ハウエンの舞姫』がそんなのじゃ、どうかと思つぞ。」

サトシとケンタの励ましの言葉に、

ハル「そ、そうよね。わたしだって、幾多のコンテストに出て、勝つたこともあれば負けたこともあった。そして、『ハウエンの舞姫』との異名まで付けられるようにまで成長した。それでなくても、わたしがこんなんじゃない、ポケモン達にも申し訳ないわ。うん、わたしならダイジョーブ！」

ヒ「あつ、それあたしのセリフ。」

マリナ「なにはともあれ、その意気よ。」

ハルカの緊張がほぐれたところへ、

？「ふふふ、見つけましたよ。ヒカリさん。」

？「ハルカちゃん！」

遠くから、ヒカリとハルカの名を呼ぶ声が聞こえた。

サトシ達「誰？」

ピ「ピカ？」

ポツチャマ「ポチャ？」

サトシ達が振り返るとそこには一部の人間のみ知っている人物2人が立っていた。

サトシ・ヒコ「コウヘイ!?!」

そのうちの一人はサトシ、ヒカリ、タケシがシンオウ地方で出会ったメガネのオク風トレーナー・コウヘイだった。

コウヘイ「お2人とも、この僕を覚えていたとはとても光栄に思います。特に、ヒカリさん。あなたのような可愛いお方に覚えていただけたのがなによりも幸運です。」

ヒコは、はぁ……(汗)「

コウヘイの執拗なアプローチにヒカリは引き気味だった。コウヘイはヒカリに対して好意を抱いている。

?「いやあ、ハルカちゃん。君とは、サウスシティ以来だね。」

ハル「……………」

?「ん? ハルカちゃん?」

?はハルカに声を掛けるが、ハルカは無反応である。

ハル「…………えっと、どちら様?」

ズルツ!

？は一人でズッコケた。

ハル「ねえ、サトシ。この人、知ってる？」

サ「いや、サウスシティにこんな奴いたっけ？」

ピ「ピカ？」

ハルカ同様、サトシ、ピカチュウも？について覚えていないようだ。すると、？は立ち上がった、

？「ひどいなあ、ハルカちゃん。俺だよ、シヨウタだよ。」

サ・ハル「シヨウタ……。ああああ、思い出した！」

サトシ、ハルカは？の人物を思い出した。？はシヨウタと言い、以前、サトシ、タケシ、ハルカ、マサトがサウスシティを訪れた時に出会い、ハルカに一目ぼれするもはかなく散っていった哀れなナインパ野郎（笑）である。その後、サトシ、ハルカがシヨウタに謝罪する光景が見られたという。

ちなみに、作者自身も存在は覚えていたが名前をド忘れしていたというのは別の話。

カ「それよりも、2人はどうしてここに来たの？（まあ、さっきのやり取り見てれば大体分かるけど……）」

コウヘイ「それは決まっていますよ。このコンテストに出場するヒカリさんの応援のためですよ。」

シヨウタ「俺はハルカちゃんの応援さ！」

カスミの予想通り、コウヘイはヒカリの応援、シヨウタはハルカの応援のためにここタンバシティへとやって来たのだった。さらに、

？「マリナちゃん！」

ケンタ・マリナ「ジュンイチ！？」

今作品久々に登場したジュンイチが、猛スピードでサトシ達のもとにやって来た。

ジュンイチ「マリナちゃんとは、エンジュシティ以来だね。それとケンタも。」

マリナ「そ、そうだね。ジュンイチ。」

ケンタ「ああ、って俺はおまけかよ。」

ジュンイチはマリナには丁寧に答えるが、ケンタに対しては適当に相槌を打つ程度だった。

コウヘイ「な、なんなんですか。彼は。」

シヨウタ「い、いきなり現れて。」 いや、お前たちもいきなり現れてるからね。 by・天の河

コウヘイ、シヨウタはキョトン顔でジュンイチを見つめる。

サ「あいつはジュンイチ。俺やコウヘイ、シヨウタと同じようにポケモントレーナーで、マリナやケンタとは幼馴染なんだ。」

コウヘイ「ああ、道理であの3人が親しげなわけですか。」

シヨウタ「俺たちと同じトレーナーか・・・。」

サトシの説明にコウヘイとシヨウタは理解したように頷いた。するとサトシはふと、

サ「なあ、コウヘイとシヨウタもワールドチャンピオンリーグに出るのか。」

2人に『ワールドチャンピオンリーグ』に出場するかと聞いてみた。

コウヘイ「ええ、君にはシンオウリーグでの借りがありますし、僕も今回の『ワールドチャンピオンリーグ』には興味がありますし。」

シヨウタ「俺も出場するぜ。あの時はまともなバトルが出来なかったしな。」

サ「そういえばそうだったな。」

サトシはサウスシティでの出来事を思い出す。当時はシヨウタとリョウというトレーナーのコンビと、サトシとトオイという少年のコンビによるバトルだったが、その時はまだトオイが過去のトラウマでポケモンに対して苦手意識を持っていたため、バトルにならず、

サトシ達のコンビが敗れたのだった。

ケンタ「それじゃあ俺たちはライバルになるわけだ。」

コウヘイ「というと、あなたも『ワールドチャンピオンリーグ』に出るのですね？」

ケンタ「ああ、そうだけ。あつ、俺ケンタ。これからよろしくな。」

コウヘイ「コウヘイです。以後、お見知りおきを。」

シヨウタ「俺、シヨウタ。よろしくな。」

お互い初対面のケンタ、コウヘイ、シヨウタは簡単に自己紹介を済ませた。

コウヘイ「自己紹介はそれくらいにして、あちらの彼は一体？」

コウヘイはマリナに執拗に言い寄るジュンイチを指さした。

ケンタ「さっきサトシも言ったけど、俺とマリナの幼馴染でジュンイチって言うんだ。アイツも『ワールドチャンピオンリーグ』に出るんだ。今はあんな感じだけど、バトルはすっげえ強いんだぜ。」

コウヘイ「そうですか、それは楽しみですね。（あの様子だと、ジュンイチさんはあのマリナという女性に好意を抱いているようですね。さしずめ、このケンタさんも。）」

コウヘイは持ち前の洞察力でケンタとジュンイチがマリナに対して好意を抱いていることに気づいた。さて、そんなジュンイチは、

ジュンイチ「マリナちゃん、今回のコンテストもがんばってね。」

ジュンイチはマリナが今回のコンテストに出ると思っ込んでいる様子である。

マリナ「あつ、いや。ジュンイチ……。」

ジュンイチ「ん、なにマリナちゃん？」

引き気味に答えるマリナにジュンイチは満面の笑顔で答えを待つ。

ケンタ「ジュンイチ、マリナは今回出ないぞ。」

困り果てるマリナの代わりにケンタがジュンイチに告げた。

ジュンイチ「またまた、ケンタは冗談が下手だな。」

ジュンイチはケンタの言ったことを信じていない様子だ。

マリナ「ジュンイチ、ケンタの言うとおりわたしはでないわ。コガネシティでの疲れもあるし今回はカスミ、ハルカ、ヒカリの応援に回ることにしてるの。」

マリナの一言で、ジュンイチの中で何かが崩れた。

ジュンイチ「Noooooooooooooooooo!」 欧米か! by .

天の河

ジュンイチはこの世の終わりかと思わんばかりに悲鳴をあげた。

ジュンイチ「そんなあ、俺コガネシティのコンテストを見られなかった分今回のマリナちゃんの晴れ舞台をしっかり焼き付けようと防水加工のデジカメまで買ったのに……。」

ケンタ「随分と無駄な出費だな。」

ジュンイチは今回のために無駄な出費をしてまで、準備をしていたようだ。天の河としては、デジカメまで買わなくても使い捨てカメラで十分な気もするが……

ジュンイチ「くそう、こうなったら君たちを全力で応援するからね。カスミちゃん、ハルカちゃん、ヒカリちゃん。」

カ・ハル・ヒ「……あ、ありがとう……。」

ジュンイチの気持ちの切り替えにカスミ、ハルカ、ヒカリは若干引き気味だった。

コウヘイ「な、なんなんですか。あの頭の残念そうな彼は……。」

サ「コウヘイ、それは言っちゃだめだ。」

ピ「ピーカ。」

なにはともあれ全員会場入りし、カスミ、ハルカ、ヒカリは出場者の控室に向かい、サトシ、ケンタ、マリナ、ジュンイチ、コウヘイ、シヨウタはタケシ達の待つ観客席へと向かった。今回のポケモンコンテスト、どのような展開が繰り広げられるのだろうか……

続いて後書きショー

コンテスト・タンバ大会開幕！（後書き）

コウヘイ・シヨウタ・ジュンイチ「「ちょっと、作者！」「」

天「なんだ、お前ら？」

コウヘイ「なんなんですか、僕は初登場というのにこの扱いは！」

シヨウタ「しかも、俺達の紹介雑じゃないか！」

天「いや、だってお前からこの作品からしたら、おまけみたいなものだし。」

コウヘイ「おまけって・・・。」

シヨウタ「酷いな、オイ。」

ジュンイチ「俺なんか久々の登場なのに、随分哀れな役回りじゃないか。」

天「ジュンイチ、お前だってケンマリのおまけみたいなものだし。」

ジュンイチ「くそ、作者がケンマリファンでも俺はいつかマリナちゃんとかくっついてみせるぞ！」

コウヘイ「僕もやがてヒカリさんと。」

リュウジ「俺もハルカちゃんと。」

天「無理だと思っけどな。特にコウヘイとジュンイチ。」

それでは、また次回・・・

予選ステージ（前書き）

コンテスト・タンバ大会の予選ステージ（アニメでは第1次審査と呼ばれるが、ここでは敢えてこのように表現。）でのカスミ、ハルカ、ヒカリの奮闘ぶりです。

序盤でサトシ争奪戦要素あり。

予選ステージ

タケシ達の待つ観客席に到着したサトシ達。だが、そこではちょっとした騒動が繰り広げられていた。

アイ「ちょっと、アタシがサトシの隣に座るんだから！」

ベ「いや、ここはわたしがサトシ君の隣に座るわ！」

コトネ「アイリンもベルルンも抜け駆けしないで！」

アイリス、ベル、コトネはサトシの隣の席を巡って言い争いをしていた。カスミ、ハルカ、ヒカリという強力な恋敵ライバルがいない今がチャンスと見計らって、サトシとより良い関係を築こうとしているのである。他の観客にとっては、この言い争いはいい迷惑である。

きちんとマナーを守って観戦しましょう。 by 天の河

サ（だれでもいいから決めてくれよ。俺、はやく座りたいんだけど。。。）

サトシは見慣れた光景に呆れた様子だった。もちろん、鈍感のオリンピックがあれば金メダル獲得は間違いない彼には、彼女たちの意図は分かるわけもない。

カズナリ「あれ、止めなくていいのかな？」

ケンタ「カズナリ、あれを止められると思うか？」

カズナリ「だよね。。。。」

デ」でも、そろそろあのエキサイティングな言い争いは止めた方が
良いと思うんだけど。他の人たちにだいぶ迷惑だし。」

マリナ「ここは同じ女の子のわたしが止めに入ってもいいけど、正
直あの雰囲気はダメだわ。ぶっちゃけ、物凄く怖いし。」

カズナリ・ケンタ・デ「。。。」「」

マリナの言うとおり、サトシを囲む3人の少女の周りには威圧感
MAXのオーラが纏っているように見える。それはどんな凶悪なポ
ケモンでも一瞬で逃げ出すほどである。

コウヘイ「ふふふ、今回のコンテストでヒカリさんの水着姿が見ら
れるとは。。。このコウヘイ、一生分の幸せを貰った気分です。」
シウタ「ハルカちゃんの水着姿が見られる。しっかりと目に焼き
付けておかなくちゃ。」

こっちはこっちで、変態発言の馬鹿2名。

タ「ふっ、君達甘いな。目に焼き付けておくだけじゃダメだ。こう
して、準備はしておくものだよ。」

訂正。馬鹿2名ではなく3名。タケシはいつ買ってきたのか、使
い捨てカメラを取り出した。

タ「これで、水着のお姉さん達を。。。ぐっ!？」

コウヘイ「うっ!？」

シヨウタ「ぐはっ!?!」

タケシのグレッグルのどくづきの鉄槌が馬鹿3名に下された。

タ・コウヘイ・シヨウタ「「「しびれびれ」」」

グレッグル「ケツ!」

は、グレッグルの鉄槌を受けた3人は、その場に倒れこんだ。さらには、

マサ「タケシ。これは僕が預かっておくよ。」

タ「あゝ、俺のカメラ．．．。」

タケシの悲痛な叫びも空しく、カメラは不気味にメガネを光らせたマサトによって没収された。

リュウカ（マサト君、怖いよ。顔が．．．。）

リュウカはマサトの表情に恐怖心を覚えた。一方、カスミ、ハルカ、ヒカリのいる控室では、

ハル・ヒ「「うっ!?!」　　なんだか、悪寒が．．．。」

カ「ちょっと、大丈夫?　本番前に風邪なんて引いたら元の子もな
いわよ。」

そんなこんなで、コンテストは開幕を迎えた。

リリアン「It's show time. ここタンバシテイにお越しくございました皆さん、お待たせしました。ポケモンコンテスト・タンバ大会『A 1コンテスト』、開幕です。それではみなさん、Can we, go!」

リリアンのアクティブな進行とともに歓声が沸きあがる。ちなみに、水ポケモンのみのコンテストにちなんで名づけられた『A 1』のAは Aqua のAである。そして、コンテストバトル進出のための予選ステージの火ぶたが切って落とされた。

リリアン「予選ステージ、トップバッターはカントーはハナダシテイが生んだお転婆人魚、そしてハナダジムジムリーダーでもある『カントーの人魚姫』、カスミさんです。」

リリアンの紹介が終わると、また歓声が沸きあがった。トップバッターということもあるが、それ以上の歓声である。そのことからカスミの知名度及び人気が高いものだとはつきり分かる。

マサ「すごい歓声だね。」

サ「カスミの名も有名になったものだな。」

カスミに対する感性を聞いて、マサトとサトシが感心するように感想を述べた。プールサイドにはカスミが白のレースを飾ったビキニを着たいかにも人魚姫を連想させる水着で登場した。

カ「さあ、行くわよ。マイイ...。」

カスミが予選に使うスターミーを出そうとしたその時だった。

サクラ「あら？」

サクラ達に預けていたカスミのモンスターボールの中の一つからポケモンが出る時の光が出て、カスミのいるステージに向かっていった。出てきたポケモンは、

コダツク「コパツ！？ コパア！？」

アニポケの元祖・お笑いポケモンのコダツクだった。ただコダツクが出てきたところが運の悪いことに水の上だったのである。カスミのコダツクは、超が何個も付くほど泳ぐのが苦手である。出てきたコダツクは、手足をばたつかせて必死に溺れないようにしている。

リリアン「おっと、予選ステージ開幕早々、ハプニングです。ステージ上に突然コダツクが現れました。」

突然のハプニングにさすがのリリアンも戸惑いを隠せない様子だ。

コンテスタ「お、泳げないコダツクを見たのは、初めてです。」

スキゾー「こ、これはこれで好きですね。」

ジョーイ「お、面白いコダツクですね。」

審査員のコンテスタ、スキゾー、タンバシテイのジョーイは顔を引きつらせながら、率直に感想を述べた。観客席からは若干笑い声も起き始めている。突然のハプニングに加え、恐らく世界中を探しても1匹しかいないであろうカナツチのコダツクを見れば、誰だっ
てどうなる。一方、当のコダツクの主人であるカスミは、

カ「コダック、あんたね。勝手に出てきちゃ駄目でしょ！」

カスミは恥ずかしさで顔を真っ赤にさせながら、手で顔を覆いながら呆れていた。

コダック「コパツ!? . . .コパツ？」

コダックはなんとか審査員側のプールサイドへと上がった。審査員の面々をみるといつものように首を傾げる仕草をする。そんなコダックに審査員の面々は困惑の表情を浮かべた。

カ「し、失礼しました！」

慌てて駆け寄ったカスミが審査員の面々にお詫びの一言とお辞儀をした後、コダックを抱えて、一旦ステージから姿を消した。そして数分後、カスミがステージに戻ってきた。ちなみにコダックはサクラ達に預けて今は観客席で即席のプールに浮き輪を使って浮いている。

マリナ「この子、泳げないの？」

コウヘイ「この僕、泳げないコダックにお目にかかるのは初めてですよ。」

ケンタ「俺もだ。」

シヨウタ「俺も。」

カスミのコダックを初めて見る面々は物見珍しさに浮き輪に浮い

ているコダックを見つめる。ステージ上では先程のハプニングから気持ちを切り替えようとカスミがボールに手をかけていた。

カ「気を取り直して、行くわよ。マーズステディ！」

スターミー「フウー！」

カスミはボールにひとつキスをすると上へ高く投げた。ボールからはスターミーが元氣よく飛び出した。

カ「スターミー、水上で高速スピンの。」

スターミー「フウ！」

スターミーは水上に移動すると高速スピンを始めた。

カ「そのまま、プールの周りを回って。」

スターミーは高速スピンのまま、プールの周りを回り始めた。高速スピんで発生した水しぶきとスターミー本来のすばやさが相まって、その様はまるでジェットスキーのようである。

マリナ「御前立てから、迫力のあるのをやってくれるわね。」

マリナはカスミ達のパフォーマンスを感心して見ていた。

カ「スターミー、潜水。」

次にカスミは、スターミーをまずは水中に移動させて、カスミ自身は泳いで中央の台座に移動し、その台座の中央にある大きな穴か

ら、水中へと潜水した。

サ「カスミの奴、次はどんなのを見せてくれるんだ？」

サトシ達を含め、観客全員固唾を見守る。すると会場の四方に設置された大型スクリーンにカスミの姿が映し出された。映し出されたカスミは指でスターミーを先導し始めた。カスミに先導されたスターミーは優雅にカスミの周りを移動し、ダンスを踊る。

カ（スターミー、みずてつぼう。）

するとスターミーは少し弱めにみずてつぼうを出しながら、ダンスを続ける。その様子はまるで、水のラインアートである。

カ（続けて、ほごしょく。）

スターミーはほごしょくで姿を消した。姿を消したスターミーが放つラインアートは、よりいっそう神秘的なものにする。するとカスミは目を瞑って両手を組み、祈りを捧げるポーズになった。

スターミー「フウ！」

スターミーの描くラインはカスミを包み始め、最終的には水で出来た繭のようなものを作り上げた。その繭はしばらくすると上部から徐々に消え始め、カスミとほごしょくを解いたスターミーが並んで現れた。最後にカスミとスターミーは丁寧にお辞儀をし、これでカスミのパフォーマンスは終了した。

リリアン「素晴らしい！ 高速スピンを活用したジェットスキーの迫力あるものから、水中での優雅なラインアート。トップバッター

を飾るに相応しいパフォーマンスです。」

コンテスタ「水上と水中を見事に駆使した素晴らしいパフォーマンスです。スターミーとの意気もぴったりでしたし、『人魚姫』^{マーメイド}と呼ぶのに相応しいものでした。」

スキゾー「好きですね。」

ジョーイ「水中での指示の難しさを難なく乗り越えたのが、スターミーとの良いコンビネーションを象徴させる一幕でした。」

最初のコダックによるハプニングはあったものの、それをものともしないカスミのパフォーマンスは審査員に高評価だった。

デ「カスミとスターミーの意気ピッタリなハーモニー、まさにグッドテイストなパフォーマンスだよ。」

デントの言葉からも分かるように、観客もカスミのパフォーマンスに釘付けだったようだ。その後数名のパフォーマンスの後、ハルカの出番がやって来た。

リリアン「続きまして、ホウエンはトウカシテイが生んだ『ホウエンの舞姫』、ハルカさんです。それでは、Ready, Go!」

リリアンの紹介とともに、フリル付の赤を基調としたビキニを着た南国の少女を彷彿とさせたハルカがプールサイドに現れた。

ハル「出ておいで、カメール。ステージ・オン!」

カメール「カメエ!」

ハルカの投げたモンスターボールからカメールが元気よく出てきた。

ハル「カメール、中央に移動して高速スピンの。」

ハルカの最初のパフォーマンスはカスミと同じく水上での高速スピンの使ったパフォーマンスのようだ。ただ、違うのはカスミはボールの周りを使ったものに対し、ハルカは中央の台座を利用したものだ。

ハル「回転しながら、バブルこうせん。」

カメール「カアアアメメメメメメ！」

カメールは高速スピンの中央の台座を回りながら、バブルこうせんで泡を発生させた。カメールの高速スピンとバブルこうせんの連携により、空中に向かって無数の泡が浮かんでいく。しばらくすると、カメールは回転を止め、止まった地点で立ち上がった。

マサ「お姉ちゃん、次は何をするつもりだろうか？」

観客は固唾を飲んでハルカを見守る。

ハル「カメール、ジャンプして再び高速スピン。そしてアクアテール。」

カメール「カメカ。カメ！ カアアアメメメメメメ！」

カメールは一旦高速スピンを止め、ジャンプしてからアクアテール

ルを繰り出しながら高速スピンを再開した。宙に浮いたカメールの高速スピンは、先程のバブルこうせんで作った辺り一面に浮かぶ泡を徐々に弾き割った。会場に差し込む日差しと弾けた泡がよりいっそうカメールのパフォーマンスを綺麗に引き立てる。

リリアン「カメールの高速スピンとバブルこうせんの見事なコンボ技。これはかなりアグレッシブなパフォーマンスです！」

コンテスタ「カメールが持つ技を最大限に活用した、見事なパフォーマンスです。」

スキゾー「いやあ、好きですね。」

ジョーイ「この天候も上手く活用した素晴らしいパフォーマンスです。」

ハルカとカメールの予選ステージも、審査員から高評価を得た。カメールは全ての泡を弾き終わると、高速スピンを止め、綺麗に台座に着地した。そして、ハルカとともに丁寧にパフォーマンス終了のお辞儀をする。

リリアン「続きましては、シンオウはフタバタウンからやって来たヒカリさんです。」

また数名のコーディネーターのパフォーマンスの後、いよいよヒカリの出番がやって来た。リリアンの紹介の後、ヒカリは観客に手を振りながら、ポツチャマとともにプールサイドに現れた。ちなみにヒカリの水着は、青を基調とした水玉模様のポツチャマをイメージさせるものだった。

ヒカリ「行くわよ！ ポツチャマ、チャーム・アップ！」

ポツチャマ「ポアアアチャアア！」

ポツチャマはお膳立てで元気よく上空に向かってバブルこうせんを放った。

ヒカリ「ポツチャマ、まずは潜水。」

ポツチャマ「ポチャ。」

ポツチャマはプールに向かって飛び込み、水中へと潜った。そして、中央の台座の真下へと移動する。その様子は会場の大型スクリーンに映し出されている。

ヒカリ「逆回転でうずしお。」

ポツチャマ「ポオオオチャア！」

ポツチャマはその場でうずしおを発生させる。それも1つではなく、複数も発生させている。通常、うずしおは回転しながら中央に向かって流れるが、ポツチャマはヒカリとの猛特訓により、逆回転のうずしおを発生させることに成功したのである。発生したうずしおは、水面にはつきりと現れ、台座を島に見立てた、まるでうずまき列島のような構図になっている。

ヒ「続けて、バブルこうせん。」

ポツチャマ「ポチャ。」

うずしおの影響で水中の流れが不安定になっているが、ポツチャマは絶妙なコントロールでバブルこうせんを放つ。バブルこうせんの泡は逆回転のうずしおに吸い込まれ、吸い込まれた泡はうずしおを通して水面から噴き出すように現れた。

タ「逆回転のうずしおにバブルこうせんの泡を吸い込ませるとは、ヒカリも考えたな。」

サ「うわあ、すげえ。」

ヒカリのうずしおとバブルこうせんのコンビ技に、感心するサトシとタケシだった。うずしおはしばらくするとおさまり、水面から泡が噴き出ることもなくなった。

ヒ「ポツチャマ、中央の台座に向かってバブルこうせん。」

ポツチャマ「ポオオオチャアアア！」

ポツチャマは今度は中央の台座に向かって、バブルこうせんを放つ。中央の台座には穴が開いているため、そこから噴き出るように外界に無数の泡が現れた。

サ「ヒカリ、今度は何をするつもりなんだ？」

観客席は静寂に包まれる。

ヒ「真上に向かって、つつく攻撃。」

ポツチャマ「ポオオオチャア！ ポチャポチャポチャ。」

ポツチャマは台座近くまで勢いよく移動し、穴からあふれ出ている泡をつつくと弾き始めた。外界の泡も徐々に弾けはじめ、しばらくすると、

ポツチャマ「ポチャー！」

台座の穴からポツチャマが元気よく飛び出した。その衝動で残っていた泡も全て弾けて消えた。弾けた泡がよりいっそうポツチャマを綺麗に引き立てる。

リリアン「ポツチャマの持てる技を駆使し、力強さを表現。これは今までの参加者とは違ったパフォーマンスです。」

コンテスタ「ポツチャマの個性がより良く表現された、素晴らしいパフォーマンスです。」

スキゾー「いやあ、好きですね。」

ジョーイ「うずまき島の地形を参考にした表現も取り入れられて、とても良いものでした。」

ヒカリのパフォーマンスも審査員から高評価だった。ヒカリもポツチャマとともに丁寧にお辞儀をして、予選のパフォーマンスを終えた。これにより、カスミ、ハルカ、ヒカリの3人全員が予選ステージのパフォーマンスを終え、結果発表を待つのみとなった。結果は、3人全員予選を通過し、本選のコンテストバトルへと駒を進めたのだった。

リリアン「本戦のコンテストバトルは、コーディネーターとポケモン達の疲労を考慮して、明日行われます。明日もこの会場でお会い

しましょう。」

今回のコンテストは水のフィールドということもあり、普段よりも疲労度が増している。その為、予選と本戦を2日に分けて行っている。そして会場のゲート前でサトシ達は予選を終えたばかりのカスミ、ハルカ、ヒカリと合流した。ちなみにハナダ3姉妹は、一足先に宿泊先のホテルへと戻っていった。

マリナ「3人とも、予選突破おめでとう。」

サ「3人とも、良いパフォーマンスだったぞ。」

ヒ「ありがとう、みんな。」

ハル「無事に終わることが出来たわ。」

カ「あたしは、最初のハプニングが無かったら順調だったんだけどね。」

カスミの一言に、サトシ達は一斉にコダックを見つめる。

コダック「コパア？」

当のコダックは首を傾げるポーズをとる。

カ「本当に分かってるのかしら。」

カスミの一言に全員苦笑を浮かべた。その後、会場の外へ出ると、別の会場で予選を戦っていたシュウ、ケンゴ、そしてリュウジが談笑しているところを見つけた。

サ「シュウ、ケンゴ、リュウジさん。」

シュウ・ケンゴ「サトシ!」「」

リュウジ「やあ、サトシ君。」

サトシに声を掛けられたシュウ、ケンゴ、リュウジは返事をする。

リュウジ「カスミちゃん、ハルカちゃん、ヒカリちゃん。その様子だと、君達も予選を通過したみたいだね。」

カ「はい、リュウジさん。」

ハル「わたし達、無事に通過できました。」

ヒ「ということは、リュウジさん達も予選を通過したんですね。」

シュウ「そうさ。」

ケンゴ「こっちも兵揃いの予選だったな。」

リュウジ「そうだったな。特に俺は2人のコーディネーターが気になったな。」

カ・ハル・ヒ「一体、誰ですか?」「」

カスミ、ハルカ、ヒカリはリュウジの言った2人のコーディネーターについて興味を持った。

シュウ「その2人のコーディネーターは実力もさながら、只者じゃないんだよ。」

ケンゴ「今、そのことについて、こうして3人で集まって話してたんだ。」

会場ゲート前でシュウ、ケンゴ、リュウジは自分たちの予選とある2人のコーディネーターのことについて、考察していたようだ。

カ「あたし達にも、詳しく聞かせていただけませんか。」

リュウジ「ああ、いいよ。」

シュウ、ケンゴ、リュウジから語られることは・・・!?

続く

予選ステージ（後書き）

シュウ、ケンゴ、リュウジが予選ステージで見たものとは!？

本戦前の出来事（前書き）

シウウ達が話していたコーディネーターのうち、1人が登場します。
キャラ設定は以下の通り・・・

サファイーさんからのリクエスト（編集の可能性あり）

名前：ナツミ

性別：女

年齢：ポケモンレンジャー・ヒナタと同じ年

性格：明るく超元気、正義感が強い

1人称：私

2人称：年下には君、ちゃん付けで、年上や目上の人にはさん付け

3人称：あなた達

容姿：赤茶色でショートとロングの中間ぐらいの髪、下ツインテールにしている

服1：ピンクのタンクトップ、青のミニスカ、その下に黒スパッツを着用、ピンクのブーツを履いている

服2：スカートに赤茶色のベルト、両手首にピンクのリストバンド、

青の帽子を着用している。

その他：ヒナタのいとこで、姉がシロナの幼馴染ということもあってか、シロナのことを『シロ姉』と呼ぶ。ヒナタからはサトシ、ハルカ、マサト、タケシ、ヒカリについては聞いており、知っている。姉の手伝いでポケモンレンジャーをしており、本来はコーディネーターではないが、大の水草タイプ好きもあってか、今回のコンテストに参加。

本戦前の出来事

シュウ、ケンゴ、リュウジ以外「ええー!? マナファイを使うコーデイネーター!?!」

リュウジから告げられた衝撃の事実にも、一同驚愕した。リュウジが言っていた2人のコーデイネーターのうち1人は、予選のパフォーマンスでマナファイを使ったという。

ハル「それ、ホントなの? シュウ。」

シュウ「ああ、それだけじゃない。珍しいだけじゃなく、パフォーマンスの方も、かなりの実力で恐らく審査員の評価も予選に参加したコーデイネーターの中ではトップクラスだったと思うよ。」

シュウの一言に一同黙り込む。カスミ、ハルカ、ヒカリは本戦を前にして圧倒されたというところか……

カ「……………」

ハル「……………」

ヒ「……………」

サ「どうしたんだ、3人とも。」

サトシは心配そうに3人に声を掛ける。

カ「……あかし、やっぱり今回のコンテストに出て正解だったわ。」

「
ハル「わたしもかも。」

ヒ「そんな凄い人達とコンテストで競い合えるなんて、夢のようだわ。」

先程のは訂正。3人とも圧倒されたのではなく、逆に闘志を燃やされたのだった。

シウ「確かに。この僕も、ここ最近強いコーディネーターが出てきているのには興味があるね。」

ケンゴ「ワールドチャンピオンフェスティバルにも、世界中の強いコーディネーター達が集まるしな。」

マリナ「ふふ、バトルもコンテストも自分より強い人が現れるとなんだかわくわくするよね。」

ヒ「確かに。」

ハル「なんだか、サトシの性格が移っちゃったかも。」

サ「俺の?」

カ「そうそう、アンタの強いトレーナーを見るとやる気が出るっていうところ。」

アイ「サトシはそれだけがいいところだもんね。」

サ「アイリス、それだけは余計だ。」

カスミ、ハルカ、ヒカリの明日に向けての意気込みも終わったところで、サトシ達はコンテスト参加者とその付添いの人たちのために用意されたホテルへと戻ることにした。コウヘイ、シヨウタ、ジユンイチも同行している。その道中、

ジユンイチ「そういえば、サトシ。俺達、ジョウトリーグ以来だったな。」

サ「あつ、そういえばそうだった。確か、あの時のバトルは引き分けだったけ？」

サトシとジユンイチはジョウトリーグの予選でバトルした時のことを思い出す。

カズナリ「えっ！？ サトシさんとジユンイチさんって、バトルしたことがあるんですか！？」

コトネ「カズナリ、びっくりし過ぎ……。。」

かなりのリアクションで驚くカズナリに呆れながら言うコトネ。

ジユンイチ「あ、ああ。俺がウツギ博士と電話してる時に会ったんだ。俺とサトシの他にモエって子も同じ組だったんだ。俺はサトシと対戦する前まではサトシは1勝、モエは1勝1敗、俺は1敗でサトシが勝つか引き分ければサトシが決勝リーグへ進出、俺が勝てば同点で3人が並ぶという状態だったんだ。」

サ「ホントにあの時は偶然だったな。だって、ウツギ博士と電話し

てる人がいたなんて思ってもみなかったぜ。そういえば、あの時ケンタとマリナの名前も出てきたな。」

ジュンイチ「そうだったな。俺だって、同じ組のトレーナーが博士と知り合いだったとは、思わなかったぜ。」

サトシとジュンイチは偶然とも思える当時の初対面について、懐かしんでいた。

マリナ「それだけじゃないんじゃないの、ジュンイチ？」

ジュンイチ「えっ!?!」

ケンタ「俺達と一緒にワカバタウンを旅立った奴が、寄り道のし過ぎで俺達と一緒にジョウトリーグに出られず、結局次の大会に一人で参加したのは良いものの、予選で1勝もできずに敗退。お前散々だな。」

マリナとケンタはジト目でジュンイチを見つめる。

ジュンイチ「うっ!?!」 ケンタ、マリナちゃん。それは、言うなよ。 . . . 。俺だって、寄り道したのと、モエとのバトルでメガニウムを温存したことには後悔してるんだから。」

サ「まあまあ、ケンタもマリナもその辺にしといてやれよ。俺、ジュンイチに結構苦戦したんだぜ。ジュンイチもケンタやマリナに負けじと強いつて証拠じゃないか。」

サトシはジュンイチのトレーナーとしての強さを称える。

ケンタ「まあ、サトシが言うんなら。」

マリナ「分かったわ。サトシに免じて、これくらいにしておいてあげるわ。昔のことだし、気にしたって仕方ないものね。」

ジュンイチはホッと、胸をなでおろした。

ケンタ「けどさ、ジュンイチ。寄り道もほどほどにしろよ。」

ジュンイチ「もう、分かったってば。」

ケンタの釘を刺す言動に、ケンタ、マリナ、ジュンイチを除く面々は皆苦笑を浮かべた。こうして会話をしながら歩いているうちにホテルへと到着した。

リュウカ「ここが本日、わたし達が泊まるホテルですね。」

マサ「結構大きくて綺麗なホテルだね。」

リュウカとマサトは建物の綺麗さと大きさに圧倒された。

コトネ「このホテル、ジヨウトでは一二を争うほど有名なのよ。他の地方の観光客はもちろん、最近ではタンバシティの近くに来たサファリゾーン目当てのトレーナーやコーディネーターもよく使っている話よ。この近くで獲れた海の幸をふんだんに使った料理、さらにはポケモンも一緒に入浴できる温泉も完備してあるってことね。」

コトネはサトシ達が本日泊まるホテルについて、丁寧に説明した。

カ「温泉かあ。」

ハル「今日のパフォーマンスでの疲れを癒すのに、うってつけかも。」

ヒ「それにしても、さすがコトネ。このホテルについてもしっかり調べてたのね。とても分かりやすい説明だったわ。」

コトネ「ありがとう、ヒカリン。わたしもこのホテルに来るのは初めてだけど、ジヨウトの良さを知ってもらうためにもこういった所はきちんと説明できないとね。それに、調べてる時も楽しかったし苦にはならなかったってことね。」

ヒカリンに褒められたコトネは笑顔でウィンクしながら言葉を返す。

サ「それじゃあ、早速入ろうぜ。」

シュウ「僕達も予選の疲れがあるし、中でのんびりしたいよ。」

ケンゴ「僕も。」

コーディネーター組の疲労も考慮して、すぐにホテル内へと入り、チエックインを済ませた。ちなみに、このホテルの温泉はナトリウム・塩化物・炭酸水素塩泉で、神経・関節・筋肉系の病気・怪我はもちろん、病後回復、健康増進、その他病気・怪我にも効能がある温泉である。サトシは、部屋に入ると早速ポケモン達を引き連れて、ケンタ、タケシ、シュウ、ケンゴ、コウヘイ、シヨウタ、ジュンイチらとともに大浴場へと向かった。ちなみに部屋は、男女分かれて使うことになっている。大浴場に到着するとサトシ達は、まず一日にたまった体の垢を落として、湯船につかった。

サ「ふう、やっぱり一日の疲れを取るにはこれに限るぜ。」

ケンタ「サトシ、入って早々オヤジ臭いこと言うなよ。」

オヤジ臭いセリフを使うサトシに、とりあえずツツコミを入れるケンタ。

コウヘイ「そういえば、2人とも。近々、シロガネタウンでワールドチャンピオンリーグの第1回の予選が開かれるそうですよ。」

サ・ケンタ「「えっ、そうなのか?」「」

コウヘイから衝撃の事実を知ったサトシとケンタは驚く。

コウヘイ「ええ、このワールドチャンピオンリーグの予選は4回の選考会方式で行われるそうです。第1回のシロガネタウンで開かれる選考会の開催をもって、ワールドチャンピオンリーグの開幕とするそうですよ。」

コウヘイはサトシとケンタに自身のメガネを光らせながら言う。

何故、風呂場でメガネをかけているかというツツコミは無しの方向で。 by・天の河

ケンゴ「そこでワールドチャンピオンフェスティバルの予選も行われるんだ。つい、3週間前に決まったことだけど、サトシもケンタも知らなかったのか?」

サ「あー、いや。俺達、その時はそれどころじゃなかったから。」

ジュンイチ「どういうことだ?」

タ「俺から話そう。」

タケシはうずまき列島でのロケット団との戦闘をケンゴ、シユウ、コウヘイ、シヨウタ、ジュンイチに分かりやすく説明した。

シユウ「き、君達も大変だね。」

シヨウタ「ひでえ奴らだな。そのロケット団つてのは。」

ジュンイチ「ああ、私利私欲のためにポケモンを悪いことに利用するとしてもない奴らだよ。俺とケンタとマリナちゃんの時だって、伝説のポケモン・ライコウを無理矢理捕獲しようとしてたものな。」

ジュンイチは自分がケンタとマリナそして伝説ポケモン研究者・ミナキとともにバシヨウとブソンと対峙した時のことを思い出す。その時のロケット団は、シラナイが発明した電気エネルギーを吸収するシステム『クリスタルフィールド・ジェネレーシヨンシステム』を使って、ライコウを捕獲する作戦を遂行していた。だがその時は、ケンタ、マリナ、ジュンイチ（そんなに活躍したっけ？）、ミナキの活躍により、作戦は失敗に終わっている。ちなみにジュンイチは、自分が好意を寄せているマリナのウケを狙って、マントを羽織って登場したのだが、逆にケンタとマリナのひんぎん鬮くを買ってしまったということをやってのけたのである（笑）

サ「それで、あのバシヨウとブソンはケンタとマリナのことを知ってたのか。」

サトシはうずまき列島で対峙したバシヨウとブソンが、ケンタとマリナのことを知ってることについて納得したようだ。しばらくの

間、男子たちは談笑を楽しんでいた。すると、

コウヘイ「ふふふ、今すぐ行きますよ。ヒカリさん。」

シヨウタ「おっ、お前もやるんなら、俺もやるぜ。まってね、ハルカちゃん。」

そう言うと、コウヘイとシヨウタは向こう側が女湯に続く壁を登り始めた。そう、彼らは女湯を覗こうとしている。

サ「お、おい、お前らやめろって。」

サトシが2人を止めようとする。だが、

コウヘイ「サトシ君、止めないでください。ここを登れば、可愛いヒカリさんの姿が拝めるんです。」

シヨウタ「ヒカリちゃんだけじゃない。ハルカちゃんも可愛い姿で風呂に入ってるんだぜ。」

シュウ・ケンゴ「何!?!」

コウヘイとシヨウタの変態発言に、思わずムツとくるシュウとケンゴ。そして、

シュウ（あいつなんかハルカの裸姿を・・・）

ケンゴ（ヒカリの裸姿を・・・）

シュウ・ケンゴ（見られてたまるかー!）

シュウとケンゴはそう思って、サトシとケンタ側に加わって、変態2人の野望を止めに入ろうとする。

コウヘイ「あそこから眺めるヒカリさんの全体の白く透き通った肌は、絶景ですよ。」

シヨウタ「ハルカちゃんの可愛い笑顔に秘められたナイスな身体も最高だぜ。」

シュウ・ケンゴ（えっ!?!）

次に出たコウヘイとシヨウタの発言に、シュウとケンゴは躊躇する。

シュウ（ハルカのナイスボディな身体・・・）

ケンゴ（ピカリの白い肌、触りたい・・・）

思わず、エロい妄想をしてしまうシュウとケンゴ。もう、鼻血を出す寸前までいつている。

ケンタ「その2人、変態発言止める。」

サ「いくらなんでも、まずいだろ。」

サトシとケンタが変態2人を必死に止める。だが、そこに新たな変態が出現した。

タ「ふっ、甘いな。あそこを登れば、綺麗なお姉さまたちがいる。

それにサトシとケンタには分からないのか、この男のロマンスが分からないのか。」

タケシが淡々と語り始める。だが話している内容は変態そのものである。

サ「分かりたくもないよ、そんなロマンス。」

ケンタ「そうだそうだ。」

ピ「ピカピカ。」

バクフーン「バクバク。」

タケシの変態発言をあつさり否定する。シュウとケンゴは未だボーンと突っ立っている。一緒に男湯に入っていたピカチュウとバクフーンもただ事ではないと思い、止めに入る。

なぜ、炎タイプのバクフーンがお湯に浸かっているのかというツッコミは無しの方で。

ジュンイチ「こんな男のロマンスが分からない2人はほつといて、さつさと登るうぜ。待っててね、愛しのマリナちゃん。このジュンイチ様がそっちに行くからね。」

ケンタ「お前もかい！」

サ「しかも字が違うし……。」

サトシとケンタの説得も空しく、変態へと道をただ突き進む4人。

一方、女湯のほうでは、

ハル「……………」

ヒ「……………」

マリナ「……………」

実は偶然にも覗きの対象とされている本人が3名入浴中だったのだ。しかも、今までの会話は彼女たちに筒抜けである。逆にあんな大声での会話が聞こえないという方が無理な話である。

マリナ「…ハルカ、ヒカリ。」

ヒ「ええ。」

ハル「準備はOKよ。」

3人は男湯に聞こえないようにアイコンタクトを取りながら、変態討伐へと準備をすすめる。その3人の背後にはドス黒いオーラを纏っているようにも見える。

ポツチャマ「ポチャ〜。」

一緒に入浴していたポツチャマは、恐怖心のあまり浴室の隅に隠れてしまった。

コウヘイ「ふふふ、もうすぐですよ。」

シヨウタ「待っててね、ハルカちゃん。」

ジュンイチ「マリナちゃんも、待っててね。」

タ「綺麗なお姉様たちがこの俺を待っている……。」

もう、救いようのない馬鹿4人。有頂天の4人には、この後地獄が待っていることは知る由もなかった。すると、壁の一番上から、ハルカ、ヒカリ、マリナの3人が笑顔で顔を出した。

コウヘイ「おおー、ヒカリさん。わざわざそちらから出向いてくれるとは。」

シヨウタ「まってたぜ、ハルカちゃん。」

ジュンイチ「いつにも増して綺麗だよ。」

ハルカ、ヒカリ、マリナ3人の登場にさらにハイテンションになる馬鹿3人。すると、ハルカ、ヒカリ、マリナはすぐに顔を引っ込め、次に出てきたのは、

オーダイル「オオオオダイル!」

カメール「カメエエエ!」

パチリス「チパチパチ!」

馬鹿4人「えっ!?!」

マリナのオーダイルの『ワニワニ』、ハルカのカメール、ヒカリのパチリスだった。

オーダイル「オオオオ！」

カメール「カアアアメエエ！」

オーダイルとカメールは馬鹿4人にみずてっぽうを浴びせた。そして、

ヒカリ「パチリス、ほうでん（怒）」

ヒカリが怒り度MAXで、パチリスにほうでんを指示した。パチリスは早速体に電気をためる。

ジュンイチ「ま、まさか．．。」

タ「お、オイ止める。そんなことしたら、お前たちまで。」

サトシ、ケンタ、シュウ、ケンゴはこの後の展開が読めたのか、ピカチュウ、バクフーンとともに脱衣場へと避難した。そして、

パチリス「チイイイパアアア！」

馬鹿4人「ギャアアアアアア！」

みずてっぽうで濡れた馬鹿4人に、ヒカリのパチリスによる怒りの制裁。一応、感電でショック死しない設定です。

ヒ「何考えてんのよ、馬鹿！」

ハル「ホント、信じられないわ！」

マリナ「ジュンイチも最低！」

ジュンイチ「ガーン。」

入浴姿を覗かれそうになった3人は馬鹿4人に対して、罵声を浴びせる。ジュンイチに至っては、マリナの『最低』が効いたのか、かなりシヨックを受けている。

シュウ・ケンゴ（（の、覗かなくてよかった．．．））

シュウとケンゴは自分達もあの4人と一緒に行動をとみにしていたらどうなってたかと思い、腰を抜かした。覗きにいかなかったこととでこの2人は命拾いしたのだ。

ハル「それと、タケシ。今、女湯には私たち以外、いないわよ。」

タ「ガーン。」

ハルカの説明に、タケシは自分の野望が崩れたことにシヨックを受けた。屍と化した馬鹿4人を放って、サトシ、ケンタ、シュウ、ケンゴとハルカ、ヒカリ、マリナは風呂から上がる。彼らは脱衣場の入り口で鉢合わせになったが、サトシ達は命が惜しいのでこれ以上触れないことにした。

丁度サトシ達が入浴していた頃、他の面々は、

カ「ここのホテル、部屋も充実してて最高だわ。」

コトネ「でしょ。何てったってジョウト有数のホテルだもの。」

ベ「ホント。下手したらここに住んでしまいそうな勢いだわ。」

このように、ロビーで談笑しながらくつろいでいた。

カ「そういえば、リュウジさん。少し聞きたいことがあるんですが。」

リュウジ「なんだい？ カスミちゃん。」

カ「リュウジさんは、シウヤケンゴと同じ会場で予選に出てたんですよ。マナフィ使いのコーディネーターについては分かりましたが、もう1人の凄腕のコーディネーターについて知りたいんですが。」

予選終了後に聞いた2人のコーディネーターのうち、マナフィ使いのコーディネーターについては聞いていたが、時間の都合上、ここではもう1人のコーディネーターについては聞けずじまいだった。

？「そこからは私から話すわ？」

？「以外全員「誰？」

すると見知らぬ女性の声が聞こえたので、一同声のする方へ振り返った。振り返るとそこには、浴衣姿の赤茶色のロングヘアとシヨートヘアの中間くらいの髪で、下ツインテールにしてるカスミ達とは少し年上の女性が立っていた。タケシがその場にいれば、間違いなくナンパするほどの女性である。

リュウジ「あああ、この人だよ。さっき言っていたもう1人のコーナーディネーターというのは。予選でジユゴンの技を最大限に使ったダイナミックなパフォーマンスをしたんだよ。」

カ「あなたがですか!？」

リュウジが目の前に現れた女性が今話題に上がっている人物本人だと言う。カスミは驚きの表情を浮かべる。

?「ふふふ、あなたがカスミちゃんね。さっきテレビで予選のダイジェストが放送されてたけど、あなたもなかなかのパフォーマンスだったわ。」

カ「あ、ありがとうございます。」

すると?は今度はマサトの方を向き、

?「そして、あなたがマサト君ね。」

?はマサトのことを知っているようだった。

マサ「えっ、なんで僕の名前を!？」

見知らぬ女性が自分の名前を知っていたので、驚くマサト。

?「あつ、自己紹介がまだだったわね。私はナツミ。ポケモンレンジャーのヒナタって覚えてる?」

マサ「あのヒナタさんですよ。もちろん覚えてますよ。」

ナツミ「ヒナタは私の同年のいとこな。そのヒナタから、サトシ君、ハルカちゃん、ヒカリちゃん、タケシ君、マサト君のことは聞いてるわ。」

マサト「そうだったんですか。道理で。」

ナツミの自己紹介を含んだ説明に、マサトは納得したようだ。

リュウカ「あの、マサト君。会話中のところ悪いんだけど、ヒナタさんって誰？」

マサトとナツミの間で勝手に会話が進められていたため、他の面々は置いてきぼりだった。代表してリュウカがマサトに尋ねた。

マサト「ヒナタさんっていうのは、僕達が旅をしていた時に会ったポケモンレンジャーの人だよ。」

リュウカ「へえ〜。」

マサトの説明に、リュウカは納得する。すると今度は、

デ「ポケモンレンジャーって何だい？」

イツシユ地方出身のデントがイツシユにはいない（多分）ポケモンレンジャーが何なのか聞いてきた。アイリス、ベルの他のイツシユ出身2人も首を傾げている。

ナツミ「ポケモンレンジャーというのは、『キャプチャー・スタイル』という道具で野生ポケモンを一時的に自分のポケモンにして、

その力を借りて自然災害や事故を解決する職業よ。」

ナツミはイッシュ組3人に丁寧にポケモンレンジャーについて説明した。

デ「サトシ達の住んでいる地方には、僕達の知らないポケモン関連の職業があるんだね。」

ベ「ポケモンレンジャー、なんかカッコいい職業ね。」

アイ「でも、大変そうな職業ね。」

ナツミ「まあね。でもポケモンを大事に扱うという点では、トレーナーやコーディネーターと共通してるわ。その一線で時には過酷な任務についてるけど、誇りとやりがいを感じてるわ。」

デント、ベル、アイリスは初めて知ったポケモンレンジャーについて、それぞれ感想を漏らす。

コトネ「でも、そんな人がどうして今回のコンテストに。」

コトネはナツミが今回のコンテストに参加した理由を尋ねた。

ナツミ「私、本来はトレーナーやコーディネーターじゃないけど、大の草タイプと水タイプ好きでね。それで今回、水ポケモンのみのコンテスト『A 1コンテスト』と聞いて、いても経ってもいられなくなつたのよ。」

このナツミの発言からわかるように、彼女は大の草タイプと水タイプのポケモン好きである。手持ちには、草タイプのポケモンと水

タイプのポケモンをそれぞれ半分ずつ入れるほどである。

カ「ナツミさんもですか！？ あたしも水ポケモンは大好きです。それに、カントーのハナダジムでジムリーダーをしています。」

リュウジ「僕もフスベシティの近郊でリュウグウジムというポケモンジムを構えています。」

カスミとリュウジはそれぞれ水ポケモン専門のジムを構えているとナツミに告げる。

ナツミ「ふふふ、カスミちゃんとリュウジ君とは気が合いそうですね。」

カ「そうですね。」

リュウジ「同じ水ポケモン使いとして光栄です。」

ナツミ、カスミ、リュウジはすっかり意気投合したようだ。

カズナリ「あの3人、すっかり仲良くなりましたね。」

デ「3人の醸し出すマイルドな雰囲気のテイストが新しい友情を生み出した。だが、心の中には明日のコンテストバトルへのエキサイティングな闘志も秘められている。ん、僕はコンテストソムリエとして明日が良いコンテストバトルが繰り広げられることを願うよ。」

コトネ「コンテストソムリエ？」

アイ「あー、気にしないで。またデントの面倒臭い性格が出ただけ

だから。」

何はともあれ、その後カスミ達はナツミも加えて談笑を続けていた。

カ「それでナツミさんはこれからどうするんですか？」

ナツミ「私は部屋に戻ってもう少ししたら、お風呂にするわ。」

カ「そうですね、あたし達ももう少しくつろいだらお風呂に入ろうと思っっているのよかったですら一緒に入りませんか？」

ベ「わたし達、もっとナツミさんとお話したいですし。」

ナツミ「ええ、いいわよ。その時はロビーで待ってるから。時間が来たら、声を掛けてね。」

カ・アイ・コトネ・ベ「……分かりました。」

4人とナツミは一緒に入浴する約束をしてから、それぞれの宿泊部屋に戻った。残ったデント、マサト、カズナリは入浴することにした。脱衣場で服を脱いで、大浴場に足を踏み入れた時、

デ・マサ・カズナリ「……。。。」

3人は湯船でノびている馬鹿4人を呆然と見つめていた。

デ「イ、イツツ・アンビーバブル・タアアアイム！」

デントはその光景に思わず絶叫した。その後、3人がかりで4人

を湯船から引張り出した。馬鹿4人はその後、意識を取り戻したが
気絶した理由は語りたがらなかったという。

続いて後書きシヨ―

本戦前の出来事（後書き）

多少、有名人ネタあり。

シヨウタ「おい、作者。」

コウヘイ「僕たち、完全に変態扱いじゃないですか。」

天「文句言つな。所詮、お前らはおまけキャラだし、そんなにひどい扱いでも支障はないだろう。」

シヨウタ「今の発言、撤回しろ。」

コウヘイ「そうですよ。シヨウタ、コウヘイのファンからクレーム着ても知りませんよ。」

天「おまけキャラのお前らにファンなんているのかよ。」 いたら、ごめんなさい（汗）

ジュンイチ「それよりも、俺完璧にマリナちゃんに嫌われちゃったじゃないか。」

天「何言ってるんだ。ジュンイチには最愛の嫁がいるじゃないか。」

ジュンイチ「俺はまだ10歳だ。そんなのいるわけないだろう。」

天「あれ、おかしいな。俺が聞いた話には、父親が元プロ野球選手のプロゴルファーの女性と結婚したと聞いたが。」

ジュンイチ「それは俺じゃない。石〇純一だ！」

ショウタ「ここで、有名人ネタかよ。」

コウヘイ「しかも酷い内容ですね。」

天「それはそうと、次回をお楽しみに！」

3人「」「」
「」
「」

ッ！
石〇純一のネタ。なんとなく、思いつきで出してみた。 オイ

新たな出会いとコンテストバトルの組み合わせ（前書き）

只今、絶賛サトヒカ要素欠乏症、執筆精度低下中。にもかかわらず更新を続ける馬鹿作者1名。

今回、オリジナル地方、オリキャラ登場します。

ナツミの手持ちポケモン

1・ウカバー（ドダイトス）

ナツミのパートナーポケモンで、性格はおとなしい。

使用技：ハードプラント、リーフストーム、ロッククライム、ギ
ガインパクト

2・リーフー（トロピウス）

性格は控えめ。

使用技：つばめ返し、空を飛ぶ、リーフストーム、リーフブレード

3・ローズー（ロズレイド）

性格は素直。

使用技：マジカルリーフ、ヘッド爆弾、花弁の舞、ギガインパクト

4・ゴンタ（ジュゴン）

予選ステージにて、使用。

性格はやんちゃ。

使用技：れいとうビーム、アクアテール、ダイビング、絶対零度

5・クロー（オーダイル）

コンテストバトルにて、使用。

性格は穏やか。

使用技：ハイドロカノン、気合玉、シャドークロー、ギガイんパ
クト

6・カメタ（カメックス） コンテストバトルにて、使用。
性格は勇敢。

使用技：ハイドロカノン、ギガイんパクト、気合玉、高速スピ

尚、他者からのキャラ（設定も含む）の無断転載はお断りします。

新たな出会いとコンテストバトルの組み合わせ

翌朝、サトシとケンタは昨日の騒動のおかげで癒えなかった疲れを癒すため、朝風呂に浸かろうとこのホテルの露天風呂に向かっていた。

サ「ふう、昨日は酷い目に遭ったぜ。」

ケンタ「まったくだ。」

ピ「ピカ。」

バクフーン「バアク。」

サトシとケンタは昨日の愚痴をこぼしながら、露天風呂へと向かう。一緒に同行しているピカチュウとバクフーンもサトシとケンタに同調する。

サ「でも、今は誰もいないみたいだな。」

ケンタ「朝早い時間帯だしな。」

サトシとケンタは誰もいない露天風呂を2人で満喫できると思い、わくわくしていた。

ケンタ「でも、あんまりくつろぎ過ぎてコンテストバトルに遅れないようにしないとな。」

サ「じゃないと、カスミ達に怒られるからな。」

サトシとケンタが会話をしているところへ、

？「誰!？」

ある2人の声が聞こえた。サトシとケンタが声のする方へ向いてみると、そこにいたのは、ヒカリとマリナだった。

サ「ヒカリ!？」

ケンタ「マリナ!？」

ヒ「サトシ!？」

マリナ「ケンタ!？」

4人はお互いに驚きの表情を見せた。

サ「お前ら、どうしてここにいるんだ？」

ヒ「サトシ達と同じよ。あたし達も朝風呂に入りに来たのよ。」

ヒカリとマリナもサトシとケンタと同じく朝風呂に入りに来たよ
うだ。

ケンタ「というか、ここ男湯だぞ。」

マリナ「ケンタ、何言ってるの。」「」「混浴よ。」

サ・ケンタ「「えっ!？」」「」

サトシとケンタが男湯だと思って入った露天風呂はなんと混浴だったのだ。

ケンタ「だったら尚更、何でマリナ達まで混浴に？」

マリナ「だって、誰も入ってこないと思ったから。」

ケンタ「そうか・・・。」

とりあえず、サトシとケンタは体を流して湯に浸かることにした。

サ・ケンタ「・・・・・・・・・・。」

ヒ・マリナ「・・・・・・・・・・。」

4人の間には沈黙が流れる。ヒカリとマリナは想い人と一緒に入浴している事、サトシとケンタは2人からキスされたこともあり、恥ずかしさでいっぱいだった。ピカチユウ、ポツチャマ、バクフーンが例のごとく一緒に入っているが、当の3体も4人が醸し出す雰囲気能耐えきれず、少し離れている。

サ「あ、あのさあ、どうしてヒカリ達はこの露天風呂に入ろうとしたんだ。」

ヒ「あ、それはね、この露天風呂、このホテルのお風呂の中でも秘湯と呼ばれる露天風呂なの。マリナから聞いてここは混浴だって知ってたけど、秘湯と聞いて一度は入ってみたかったし、朝早く入れば誰も来ないかなと思って。」

マリナ「そうそう。」

この露天風呂は、混浴ではあるがこのホテル随一の秘湯として有名である。ヒカリとマリナは誰も来ないであろう早朝に入ろうと思っただけだが、サトシとケンタが入ってくることは想定していなかったようだ。

サ「ここ、そんなに凄い露天風呂だったのか。全然、知らなかったな。」

サトシはこの露天風呂が秘湯だということを知り、驚きの表情を浮かべる。その後4人はなんとか、会話をつなげることが出来た。そんな時、

ヒ「ふう〜、ここって昨日の大浴場もそうだったけど、ここってホントにいいお湯ね。」

マリナ「わたし、ジヨウト出身だけどこんなに良い露天風呂に入っただけ初めてね。」

ヒカリとマリナがお湯を手を取って、自分の顔に少しかける。

サ・ケンタ「……………」

サトシとケンタはそんなヒカリとマリナの無邪気な姿に見惚れる。さらには、

ケンタ（そういえば、よく見るとマリナの胸デカいなあ〜。）

サ（ヒカリの肌、白く透き通ってて綺麗だなあ〜。）

間違いない。

サ「お、俺先上がってるから／／／」

ケンタ「お、俺も／／／」

サトシとケンタは慌てて露天風呂からあがり、すぐその場を立ち去った。

マリナ「2人とも、あんなに顔を赤くして。」

ヒ「可愛い。」

ヒカリとマリナは互いに顔をあわせ、くすつと笑った。今の一部始終を見ていたポケモン3体は、

side in ポケモン

ポツチャマ「ピカさん、バクさん。今のは一体どうすればいいのでしょうか？」

ピ「まあ、いいんじゃない。よくわからないけど、サトシもケンタもあれはあれで良い思いをしたみたいだし。」

バクフーン「そうそう。俺たちは黙って見守るのが一番だけ。」

ピ「僕たちが首を突っ込んだところで、なにか出来るわけでもないしね。」

ポツチャマ「そうですか。」

湯に浸かりながらくつろぐ3体であった。

side out ポケモン

しばらくして、ヒカリとマリナもピカチュウ、ポツチャマ、バクフーンとともに露天風呂からあがった。そして、他の面々も起きてきたので全員で朝食を済ませ、コンテストバトルが行われる会場へと向かうためにホテルを後にした。ちなみに、ナツミは一足早く会場へと向かっており、タケシがナツミに会えなかったことを後悔しつつ、グレッグルのどくづきを喰らっていたとかいないとか。

カ「そういえば、リュウジさん。ナツミさんもそうですけど、マナファイ使いのコーディネーターも予選は突破したのですよね？」

カスミは会場に到着早々、マナファイ使いのコーディネーターについて聞いてみた。

リュウジ「ああ、そうだよ。」

リュウジは即答する。

ヒ「一体、どんな人なんだろう。」

ハル「昨日、リュウジさん達から聞いた話だと、本戦でかなり手ごわい相手かも。」

ハルカとヒカリがそう言うと、

タ「カスミ、ハルカ、ヒカリ。このタケシがそのマナファイ使いのコーディネーターについて教えて進ぜよう。」

ハル「えっ!? タケシ知ってるの。」

ハルカはタケシの行動に驚く。

タ「この『お姉様大百科』（ていう名前だったような・・・）にか
ければ、どんな人でも一発でわかる。」

タケシが徐おもむに取り出したもの、それはかつてサトシが対戦した力
エデという女性トレーナーと戦った際に使った『お姉様大百科』で
あった。タケシが過剰に反応したことから分かるように、マナファイ
使いのコーディネーターは女性のものである。

タ「マナファイ使いのコーディネーター、名前はリリアさん。カント
ー、ジョウト、ホウエン、シンオウから遠く離れたコルドー地方出
身のコーディネーターで、別名『コルドーのレイン』と呼ばれるほ
ど世界的な実力を持つ女性だ。」

ヒカリ「あの『コルドーのコンテストレイン』のリリア様!?!」

ハル「嘘!? そんな人がこの大会に出てるなんて・・・。」

ヒカリとハルカは思わず声を上ずらせるほど驚いた。

ケンタ「なあ、マリナ。あの人って、そんなに有名なコーディネ
ーターなのか?」

サトシ達の後ろで立っていたケンタがリリアについて、マリナに

聞いてみる。

マリナ「有名も何も、リリア様は世界中で知らないコーディネーターはいないくらいのトップ・コーディネーターよ。わずか8歳でコンテストデビューを果たし、ポケモンを華麗かつダイナミックに魅せるパフォーマンスで数々のコンテストで優勝した実力者なの。そのおしとやかで華麗な雰囲気から別名『コルドーのコンテストレイン』と呼ばれてるわ。」

サ「そ、そんなに有名人だったのか・・・。」

マリナの説明に思わずサトシは驚きの言葉を発する。そんなサトシを尻目に、タケシは淡々と説明を続ける。だが、次に出てきたのは、リリアの趣味、特技、得意料理などコンテストには無関係の事ばかりだった。そんなタケシに、

カ「まーた、始まった。」

ヒ「そんな情報いらないわよ。」

カスミとヒカリが代表して、タケシにツッコむ。

タ「このリリアさんは・・・うっ!?!?」

キリがないので、ここはグレッグル氏によるどくづきで（笑）

タ「しびれびれ〜。」

グレッグル「ケッ!」

痺れながら倒れるタケシをいつも通りに引きづりながら去るゲルッグル。

シユウ「一体、どこへ行くんだい？」

サ「気にするな。いつものことだから。」

タケシとともにどこかへ行くゲルッグルをシユウが気にしたが、サトシはいつものことだから安心しろと声を掛ける。

？「ふふふ、あなた方はとても面白そうな会話をしていらっしやいますわね。」

そこへ、金色のウェーブのかかったロングヘアで頭に純銀製であるうティアラを乗つけたサトシ達より年上の美女が声を掛けてきた。

ヒ「あなたは？」

その美女に対し、ヒカリは名前を聞く。

？「これは失礼しました。わたくし、リリアと申します。」

リリアと名乗る美女は、礼儀正しくサトシ達に自己紹介をする。

ケンゴ「あー、この人だよ。予選でマナフィを出して、華麗なパフォーマンスを演じたのは。」

ケンゴが思い出したようにリリアが昨日の予選でマナフィを使ったコーディネーターだと言った。

リリア「ふふふ、覚えてくださって光栄ですわ。」

リリアはケンゴの驚きにも何一つ動じず、冷静に笑顔で対処する。すると今度はヒカリが、

ヒ「リリアさんは、あの『コルドーのコンテストレイン』のリリア様ですよね。」

リリア「わたくし、別名についてはあまり気にしたことはありませんが、おっしゃる通り、わたくしはコルドー生まれのコルドー育ちですよ。」

ヒカリの疑問に、ケンゴの時同様、冷静に対処するリリア。リリアの清楚で凄味のある姿に女性陣は、

カ（き、綺麗．．．。）

ハル（生で見るのは初めてだけど．．．。）

ヒ（テレビや雑誌で見るより．．．。）

アイ（とても、素敵な人．．．。）

コトネ（とてもわたし達じゃあ、比にならないってことね．．．。）

マリナ（やっぱり凄い／＼）

リュウカ（わたし達よりの何万倍も綺麗．．．。）

ベ（どうすれば、あんな素敵な人になれるんだろう．．．。）

リリアの美しさに圧倒され見惚れていた。まあ、無理もないだろう。

リリア「ん？ わたくしの顔に何か？」

リリアはカスミ達の視線が気になったのか、カスミ達に声を掛ける。

カ「い、いえ／＼／」

ハル「なんでもないかもです／＼／」

ヒ「ど、どうぞ。気にせず／＼／」

カスミ達は顔を少し赤らめながら慌ててリリアに言う。

シュウ「全く、君たちは。」

シュウは若干呆れながら、つぶやく。

リリア「それではもうすぐわたくしはポケモン達の準備がありますので、コンテストバトルであなた方とバトル出来ることを楽しみにしております。では、これにて。あっ、シュウさん。」

シュウ「はい、なんでしょうが。」

リリアはシュウに何かを思い出したかのように、声を掛ける。

リリア「昨日、あなたからの1本の白いバラ。ありがとうございま

すわ。」

シユウ「いえいえ、こちらこそ。」

どうやら昨日の予選終了後、シユウはリリアに白いバラをプレゼントしたようだ。ちなみに、白いバラの花言葉は、心からの尊敬・清楚・純潔・素朴などといったのがある。リリアはシユウに昨日のプレゼントの御礼を言った後、サトシ達から離れた。

ハル「シユウったら、相変わらずね。カッコつけて、バラのプレゼントなんて。」

シユウ「ふっ、僕はただ美しい女性に似合うプレゼントをしたただだよ。」

シユウはいつものようにキザッぽく振る舞う。

マサ「相変わらずだね。シユウの性格も。」

サ「そうだな。」

サトシ達はシユウの変わらぬ性格に苦笑を浮かべた。その後、コンテストバトルの組み合わせ発表の時間になり、トーナメントの組み合わせが発表された。

コンテストの組み合わせ（一部のみ）

1回戦第1試合：ハルカ対カスミ

1回戦第4試合：リュウジ対リリア

1回戦第8試合：ナツミ対ケンゴ

ヒカリは1回戦第2試合、シユウは1回戦第6試合に出場する。

ちなみにこのトーナメントは予選が行われた2会場で2試合同時に行われる。第1試合は第1フィールドで、第2試合は第2フィールドでという風に、奇数試合の場合は第1フィールド（カスミ、ハルカ、ヒカリが予選を戦ったフィールド）、偶数試合の場合は第2フィールド（シユウ、ケンゴ、リュウジ、ナツミ、リリアが予選を戦ったフィールド）で開催される。

タ「おつ、第1試合から、ハルカとカスミが当たるのか。」

ハル「カスミ、お互い悔いのないコンテストバトルをしましょう。」

カ「ええ。でも水ポケモンマスターを目指す者の名にかけて、負けないわよ。」

ハル「わたしだって。」

カスミとハルカは早くも戦闘モードに入ったようだ。

サ「いきなりのライバル対決だな。こりゃ、楽しみだぜ。」

ヒ「ふふふ、こうなったらわたしも負けてられないわね。予選とは違うフィールドになってしまったけど、カスミ、ハルカとコンテストバトル出来るように勝ち上がってくるわ。」

シユウ「僕達も忘れてもらっては困るよ。」

ケンゴ「僕たちだって、コンテストに対する気持ちは誰にも負けな
いからな。」

それぞれ意気込む中、いよいよコンテストバトルの熱き戦いの火
蓋が切って落とされたのであった。

新たな出会いとコンテストバトルの組み合わせ（後書き）

次回、注目ヒロイン対決！

コルドー地方の名前の由来

フランス南西部にある都市ボルドーとワインのコルクから。

ヒロイン対決！ カスミVSハルカ（前書き）

昨日、投稿予定でしたが、なろうで発生したバグが原因で本日投稿
します。では、どうぞ。

普通のタッグバトルと同じになっているような気もしないでもない
ですが、それでもあたたかい目でご覧いただければ幸いです。

ヒロイン対決！ カスミVSハルカ

1回戦第1試合で早くも当たることになったカスミとハルカ。控室にて水着に着替え、お互いコンテストバトル開始の刻一刻と待ち構えていた。

カ「いよいよね、ハルカ。」

ハル「うん。でもまさか初戦でカスミと当たることになるなんて思わなかったわ。」

カ「あたしもよ。第一、ハルカとバトルすること自体、初めてよ。」

ハル「言われてみれば、そうかも。」

カ「だからといって、手加減はしないわよ。」

ハル「それはこっちのセリフかも。わたし達は親友でありライバルでもあるんだから。」

カ「ふふふ、コンテストバトルが楽しみね。」

ハル「ええ、お互い全力を尽くしてバトルしましょう。」

カスミとハルカは互いに握手を交わし、控室を出てバトルフィールドへと続くそれぞれの入場ゲートへと向かった。

リリアン「皆様、お待たせしました。昨日、このコンテストバトル進出に向けての予選が繰り広げられたフィールドで、本日はその予

選を通過したコーディネーター達の熱きコンテストバトルがまもなく始まります。」

ここで再び説明するが、予選は水上をメインに行われたが、本選のコンテストバトルは海底を模した水中にて行われる。そのため、昨日予選で使われたプールがせりあがっており、観客席には水がかからないように可動式の屋根が上空を覆っている。冷房はプールの水温を下げないようにするために抑えているが、屋内での熱中症対策のため、通気性を良くしたり、観客席にて飲み物の格安での販売を行うなど、万全を尽くしている。

リリアン「1回戦第1試合は、予選ではスターミーを巧みに操り見事なラインアートを魅せた『カントーの人魚姫』マーメイドカスミさんと、カメールの軽快な動きと技のコンビネーションを証明した『ハウエンの舞姫』ハルカさんによるコンテストバトルです。」

現在、屋根を使っているため見えないが、カスミとハルカが入場し、プールサイドにてお互いの顔を合わせる格好になった。そして、呼吸用の器具を口に加え、水中へと飛び込んだ。

リウウカ「いよいよ、始まるんですね。」

タ「ああ、カスミは水ポケ専門のジムリーダーとして、ハルカはコーディネーターとして、それぞれの誇りがぶつかり合う激しいバトルになりそうだな。」

デ「地上とは違って水中はポケモンよりもコーディネーターの体力の消耗が激しい。途中の休憩時間を含んだインターバルをどう生かすかがこのトーナメントのカギだね。」

今回のコンテストバトルは、水中を舞台にしているため、人間の体力の消耗が地上よりも激しくなる。それを考慮して、3分をめぐに技の出し合いに一区切りをつけたところで、一旦浮上しなければならぬ。この時間をどう乗り越えていくのかも今回、コーディネーターの力量が測られる。

カ「行くわよ、サニーゴ、ミロカロス！」

サニーゴ「サニー！」

ミロカロス「ミイイイロオオオ！」

ハル「カメール、カブトプス、ステージ・オン！」

カメール「カメエエエ！」

カスミとハルカはそれぞれのポケモンを出し、リリアンのスタートコールを待つ。

リリアン「それでは、2人とも。Can we, go！」

カスミとハルカのコンテストバトルの火ぶたが切つて落とされた。

ハル「カブトプス、アクアジェット。」

先制を仕掛けたのはハルカのカブトプス。持ち前のスピードと無駄のない動きがアクアジェットをより良いものに引き立たせる。

サニーゴ「サニー！」

アクアジェットは見事にサニーゴに命中し、カスミのポイントが削られる。

カ「サニーゴ、反撃よ。カブトプスにとげキャノン。」

サニーゴ「サアアアニイイ！」

サニーゴはとげキャノンで反撃する。アクアジェットで至近距離に迫っていたカブトプスはよけきれずに命中し、ハルカのポイントが削られる。最初の一撃は両者ともにスピーディーかつ無駄なく攻めている。

ハル（やるわね、カスミ。さすがは、ハナダジムのジムリーダー。）

カ（ハルカもなかなかやるわ。『ハウエンの舞姫』もダテじゃないわね。）

両者ともに対戦相手の実力に感心する。

ハル「それならこれはどう？ カメール、高速スピンからバブルこうせん。」

カメール「カメ！ カアアアメエエ！」

カメールは高速スピンをしながら、バブルこうせんを放つ。カスミのサニーゴとミロカロスの視界には、辺り一面バブルこうせんの泡で一杯である。

カ「ミロカロス、たつまきで吹き飛ばして。」

ミロカロス「ミイイロオオオ！」

ミロカロスのたつまきで、辺り一面に散らばった泡は意図も簡単に弾き壊れていく。

ハル「カブトプス、げんしのちから。」

ハルカはサニーゴとミロカロスに隙が出来たところを見計らって、カブトプスにげんしのちからを指示する。そして、げんしのちからにより、砂から無数の岩が浮き出てくる。

ハル「カメール、アクアテール。」

高速スピンの勢いとアクアテールを利用して、浮き出た岩をサニーゴとミロカロスめがけて次々と弾いていく。

サニーゴ「サニー！」

ミロカロス「ミロオ！」

弾いた岩はほぼ全てがサニーゴとミロカロスに命中した。これにより、大幅にカスミのポイントが削られる。

ハル「さあ、ここで一気に決めるわよ。」

カ「それはどうかしら？」

ハル「えっ、どういう意味？」

少しばかりの笑みを見せるカスミにハルカは首を傾げる。カスミ

が次にとつた行動は、

カ「サニーゴ、ミロカロス、じこさいせい。」

サニーゴ「サアアアニイイ！」

ミロカロス「ミイイイロオオオ！」

ハル「嘘でしょ!？」

サニーゴとミロカロスはじこさいせいで今までのダメージを回復する。ハルカのポイントが僅かであるが、減っていく。コンテストバトルは、相手ポケモンにダメージを与えれば相手コーディネーターのポイントを減らすことが出来るが、自分に有利になる技を使った場合でも相手コーディネーターのポイントを減らすことが出来る減点方式で進められている。

デ「カスミのサニーゴとミロカロス、厄介な技をもっているようだね。」

マリナ「ハルカにとっては、あのじこさいせいをどう攻略するかがカギになるわね。」

その後もハルカのカメールとカブトプスの連携技でカスミのポイントを減らしていくが、カスミのサニーゴとミロカロスのじこさいせいさらには途中で使ったミロカロスのアクアリングに加え、その2体の反撃も暗い、ハルカのポイントも減っていく。

ハル（あのじこさいせいとアクアリングは厄介だわ。）

ハルカはほぼ手詰まり状態ではあったが、じこさいせいは全体力の半分しか回復できないのとアクアリングは使ったポケモンのみしか効果がないため、サニーゴの体力は徐々に減っており、ハルカにもまだ勝機はある。

ハル（一体どうすれば……。あつ、そうだね。）

ハルカは何かを閃き、早速行動に移る。

ハル「カブトプス、げんしのちから。カメール、浮き出た岩をハイドロポンプで弾いて。」

先程のカブトプスのげんしのちからを使った応用技を再び使う。そしてサニーゴとミロカロスに命中する。

カ「何度やっても同じよ。サニーゴ、ミロカロス、じこさいせい。」

サニーゴ「サニー！」

ミロカロス「ミロオ！」

サニーゴとミロカロスはじこさいせいで体力を回復する。ここまでは先程と同じパターンだが、

ハル「今よ、カブトプス。ミロカロスに近づいてしぼり取る。」

カブトプスは素早いかつ無駄のない動きでミロカロスに近づき、しぼり取るでミロカロスの回復した体力を減らしていく。

タ「しぼり取るは相手の体力が多いほど威力が上がる技。回復した

機会を狙って使うとは、ハルカの奴、考えたな。」

さらには、ハイドロポンプを繰り出し続けていたカメールが、

カメール「メメメメメメメ！」

サニーゴ「サニー！」

ミロカロス「ミロオ！」

サニーゴとミロカロスに襲い掛かる。

カ「サニーゴ、ミロカロス!？」

カスミのポイントが大幅に削られた。そして、

リリアン「タイム・アップ！ 激闘の第1試合を制したのは……」

果たして……

リリアン「わずかな差で、カスミさんです。」

その瞬間、観客席では歓声が挙がった。コンテストバトル1回戦
第1試合は、僅差でカスミが勝利をもぎ取った。

マサ「お姉ちゃん、負けちゃったね。」

タ「じこさいせいで粘られたのが痛かったな。」

サ」でも、2人とも凄いコンテストバトルだったぜ。」

第1試合から白熱したコンテストバトルにしばらく拍手喝さいが止まなかった。一方、コンテストバトルを終えたカスミとハルカは、海面へ浮上し、プールサイドへと上がった。

カ「いい試合だったわ。ありがとう、ハルカ。」

ハル「こちらこそ、カスミ。うう、でも悔しいかも。」

カ「ハルカだってやるじゃない。まさか、しぼりとるを使われるなんて思ってもみなかったもの。」

カスミとハルカは互いに握手を交わす。そして2人は控室に戻り、敗れたハルカは普段着に着替え、サトシ達がいる観客席へと向かった。

続く

ヒロイン対決！ カスミVSハルカ（後書き）

コンテストバトル描写、思ったより難しい・・・

ヒロイン対決?! カスミVSヒカリ(前書き)

進行の都合上、一部のコンテストバトルをカットしていることについてはこちらで承くください。

ヒロイン対決?! カスミVSヒカリ

第1試合は、カスミがハルカに勝利を納めた。その他の試合は、カスミとハルカのと同時刻に行われていたヒカリのコンテストバトルはヒカリが難なく勝利、第4試合で当たることになったリュウジとリリアは『コルドーのコンテストレイン』の圧倒的な実力を見せつけたリリアが勝利、第6試合のシュウは難なく勝利、そして1回戦第8試合で当たることになったナツミとケンゴだが、

ビビアン「1回戦第8試合の勝者は、ナツミさんです。」

激しい接戦の末、ナツミが勝利を納めた。ちなみに、第2フィールドの進行役はリリアンの姉・ビビアン、審査員はコンテスト協合理事2名、アサギシティのジョーイで務めている。序盤から激しいコンテストバトルとなった1回戦は終わった。その結果、第2回戦の組み合わせは、

第1試合：カスミVSヒカリ

第2試合：????VSリリア

第3試合：????VSシュウ

第4試合：????VSナツミ

執筆の都合上、メインキャラ以外は????で表記しています。

観客席では、カスミに敗れて戻ってきたハルカがサトシ達とともに自らの出来を総括していた。

サ「しかし、惜しかったな。ハルカ。」

ハル「うん、じこさいせいとアクアリングで粘られたのが痛かったわ。それにしほりとるを上手く使いきれなかったのが悔しいわ。でも次コンテストバトルでカスミと対戦するときは負けないかも。」

マサ「その意気だよ。」

ハルカはカスミに敗れたことを悔しがっていたが、それほどショックは大きくないようだ。

リュウカ「次はカスミさんとヒカリさんの対決ですね。」

デ「うん、どちらがハルカの時同様、どちらが勝ってもおかしくない顔合わせだね。」

観客席では2回戦第1試合の開始を今か今かと待ち望んでいた。一方、第1フィールドの控室では、第1試合で当たるカスミとヒカリが対戦直前の談笑をしていた。

カ「大変ね、ヒカリ。会場間を行ったり来たりして大変ね。」

ヒ「そうでもないわよ。実は2つの会場はコーディネーター専用の地下通路で繋がっていてそれでここまで来たの。」

カ「へえ、ここにそんな地下通路があったなんて知らなかったわ。」

ヒ「普段は一般利用されてないらしくて、イベント等でのみ使われ

る秘密の地下通路みたいだから知らないのも無理ないわ。」

ヒカリは、第2フィールドから第1フィールドの間を普段は一般利用されていない地下通路で移動したようだ。

カ「でも勝負は勝負。ヒカリには負けないわよ。」

ヒ「それはあたしもよ。だって、これに勝てばあのリリア様と対戦できるんだもの。負けられないわ。」

2回戦を勝ち抜けば次は準決勝になるわけだが、カスミとヒカリは組み合わせの都合上、リリアとその準決勝で当たる可能性がある。それにはリリアも2回戦を勝利する必要があるが、『コルドーのコンテストレイン』と呼ばれるほどの実力を持つ彼女が敗れる可能性は、リリアの対戦相手には失礼だが極めて低い。

カ「それじゃあ、バトルフィールドで。」

ヒ「ええ。」

カスミとヒカリは控室を出て、バトルフィールドの入場ゲートへと続くそれぞれの通路を進んだ。そして2回戦第1試合の開始時刻を迎える。

リリアン「1回戦の激闘から、さらなる白熱した展開を迎えるであろう2回戦に突入！ その初戦で熱きコンテストバトルを繰り広げるのは、1回戦で『ハウエンの舞姫』ハルカさんとの激闘を制した『カントーの人魚姫』カスミさんと、ポツチャマとビードルとの見事なコンビネーションを魅せた『シンオウの妖精』ヒカリさんです。」

プールサイドに入場したカスミとヒカリは、呼吸器具を付けて、バトルフィールドのある水中深くへと潜っていった。

リリアン「それでは準備はOK？ Can we , go !」

2回戦第1試合：カスミVSヒカリのコンテストバトルの火蓋が切って落とされた。

カスミ「サニーゴ、ミロカロス。マイ、ステディ！」

サニーゴ「サンゴ！」

ミロカロス「ミロオオオ！」

ヒカリ「ポッチャマ、ビーダル。チャーム・アップ！」

ポッチャマ「ポチャ！」

ビーダル「ビーダ！」

カスミとヒカリはそれぞれポケモンを出した。出されたポケモン達は元気よく飛び出た。

ヒ（さすがはミロカロス。ポケモンの中でもうつくしきナンバーワンだけはあるわ。それにあのサニーゴも侮れないわね。）

ヒカリはカスミのポケモン達を見て、ふと思う。

ヒ（けど、ダイジョーブ。あたしたちのコンビネーションだって、

抜群なんだから。」

ヒカリはポツチャマとビーダルを真剣な眼差しで見つめる。見つめられた2体はヒカリの視線に気づくと、まかせると言わんばかりに頷く。

ヒ「ポツチャマはつつく、ビーダルはとっしん。」

ポツチャマ「ポチャ！」

ビーダル「ビイダ！」

先手を取ったのはヒカリ。ポツチャマのつつく、ビーダルのとっしんがサニーゴとミロカロスに襲い掛かる。

カ「かわして。」

サニーゴ「サニ！」

ミロカロス「ミロ！」

それを難なくかわすサニーゴとミロカロス。

カ「ミロカロス、アクアリング。」

ミロカロス「ミロオオオ！」

ハルカのポケモン達を苦しめた技・アクアリングをヒカリ戦でも使うようだ。僅かながらヒカリのポイントが削られる。

カ「サニーゴ、とげキャノン。」

サニーゴ「サアンニイイ！」

サニーゴのとげキャノンがポツチャマとビーダルに襲い掛かる。

ヒ「かわして。」

ポツチャマ「ポチャ！」

ビーダル「ビイ！」

ポツチャマとビーダルも難なくかわす。だが、

ミロカロス「ミロオ！」

ポツチャマ「ポチャ!?!」

ビーダル「ビイダ!?!」

目の前にはミロカロスが現れた。それにポツチャマとビーダルは動揺する。

カ「ハイドロポンプ。」

ミロカロス「ミイイイロオオオ！」

ミロカロスのハイドロポンプがポツチャマとビーダルに襲い掛かる。

ヒ「ポツチャマ、ビーダル。落ち着いて回転しながらかわして。」

ポツチャマ「ポオオオチャ！」

ビーダル「ビイイイダア！」

すると、ポツチャマとビーダルはヒカリお得意の回転しながらかわすのを水中で試みた。2体はハイドロポンプの周りを回転しながら華麗にかわす。これにより、カスミのポイントが減らされる。さらにヒカリは反撃を強め、

ヒ「ビーダル、みずのはどう。ポツチャマ、うずしお。」

ビーダル「ビイイイダ！」

ポツチャマ「ポオオオオチャアア！」

ビーダルのみずのはどう、ポツチャマのうずしおがミロカロスとサニーゴに襲い掛かる。さらに2つの攻撃が合体して強力な『うずの波動』となる。

カ「ミロカロス、竜巻。」

ミロカロス「ミイイイロオオオ！」

ミロカロスの竜巻が『うずの波動』に向かっていく。そして、バトルフィールドの丁度真ん中で2つはぶつかり相殺される。そして大量の砂があたり一面に舞う。しばらくして砂が晴れると、

ヒ「サニーゴがない!?!」

ポツチャマ「ポチャ!?!」

ビーダル「ビイ!?!」

ミロカロスのそばにいたはずのサニーゴの姿が何処にもない。そのことに、ポツチャマとビーダルも動揺している様子である。

カ「今よ、サニーゴ。」

すると突然、ポツチャマとビーダルの背後に無数のサニーゴが出現した。

ポツチャマ「ポチャ!?!」

ビーダル「ビイダ!?!」

ポツチャマとビーダルはあまりにも突然なことに怯んでしまった。

カ「続けて、とげキャノン。」

サニーゴ「サアニイイ!」

ポツチャマ「ポチャー!」

ビーダル「ビイダアア!」

ヒ「ポツチャマ、ビーダル!?!」

ポツチャマとビーダルが怯んだ隙を、サニーゴのとげキャノンで

攻撃。攻撃は怯んで動けなくなってしまった2体に直撃する。

ヒ(ミロカロスのたつまきとサニーゴのほごしよくを使った見事なコンビネーション。さすがはカスミだわ。)

カ「ミロカロス、たつまき。」

カスミは再びたつまき+ほごしよくのコンビネーション技に打つて出る。

ヒ(でも、そう何度も同じ手は喰わないわ。)

たつまきで舞い上がった砂に紛れてサニーゴはほごしよくで姿を消す。そして今度は背後ではなく、ポツチャマとビーダルの周りに無数のサニーゴが現れる。

ヒ「ポツチャマ、ビーダル、背中合わせになって。」

ポツチャマ「ポチャ!」

ビーダル「ビィダ!」

ポツチャマとビーダルは互いに背中合わせになり、離れないようにがちりちりと手を握る。

ヒ「そのまま回転しながら、バブルこうせんとみずてっぽづ。」

ポツチャマ「ポオオオチャアアア!」

ビーダル「ビィィィダアアア!」

ポツチャマとビーダルは回転しながら、バブルこうせんとみずてっぽうを繰り出す。ヒカリもコンビネーション技で対抗する。

サニーゴ「サニーー！」

「回転しながらの攻撃なので、無数のサニーゴのうちの本物のサニーゴに当たる。」

ヒ「やったわ、このままいくわよ。」

カ「それはどうかしら？」

ヒ「えっ！？ どういう意味？」

すると大きな地響きとともに竜巻が発生し、

ミロカロス「ミロオオオ！」

地面から竜巻をまとったミロカロスが背中合わせの2体に向かって突撃してきた。

ポツチャマ「ポチャアアアア！」

ビーダル「ビィィィ！」

ヒ「ポツチャマ、ビーダル！？」

ポツチャマとビーダルに直撃。2体は壁に叩きつけられる。

ヒ(サニーゴに集中するあまり、ミロカロスのことすっかり忘れてたわ。)

サニーゴに気を取られているうちに、ミロカロスに対処できなかったことを悔やむヒカリ。

ヒ(いったいどうすれば。。。)

万事休すのヒカリ。

ヒ(あつ、ビーダルにはあの技があるわ。)

すると何かを閃いたヒカリは、ビーダルにささやくような声である技を指示した。それに気づいたビーダルもうんと1回頷く。

カ「ミロカロス、たつまき。」

たつまきから派生したコラボ技でトドメをさそうとするカスミ。サニーゴのかげぶんしんは先程の回転技で乗り切る。そして問題のミロカロスの攻撃だ。

ミロカロス「ミロオオオ！」

たつまきをまとったミロカロスが勢いよく砂から飛び出てきた。

ミロカロス「ミロ!?!」

しかし突然、ミロカロスの動きが止まり、砂から浮上できなくなってしまった。

カ「これは一体、どういうこと？」

カスミはミロカロスをよく見ると、尻尾に水草のようなものが絡まっている。

カ「まさか、くさむすび？」

ヒ「ええ、そうよ。万が一のためにビーダルにくさむすびを覚えさせておいたの。」

ヒカリがささやき声でビーダルに指示した技はくさむすびだった。

ミロカロス「ミロオ、ミロオ……。」

ミロカロスは水草を振りほどこうと奮闘するが、なかなかほどけない。

ヒ「今よ、ポツチャマ。サニーゴにうずしお。」

ポツチャマ「ポオオオオチャアアアア！」

ミロカロスの身動きがとれない今をチャンスと見計らって、ポツチャマでサニーゴを攻撃する。

サニーゴ「サニー！」

うずしおがサニーゴに直撃し、さらにはミロカロスと直線状に並ぶ形になるように移動する。

ヒ「今よ、ポツチャマはハイドロポンプ、ビーダルはみずのはどう。」

「 2つの技が合わさった強力な水の技が、直線状に並ぶサニーゴとミロカロスに襲い掛かる。」

サニーゴ「サニイイイ！」

ミロカロス「ミロオオオオ！」

サニーゴとミロカロスに直撃し、2体は倒れて目を回した。そして、審査員陣からカスミにバトルオフの審判が下される。

リアン「バトル・オフ！ 2回戦初戦の激闘を制したのは、ヒカリさんです。」

その瞬間、観客席では歓声が沸いた。

サ「ヒカリが勝った……。」

タ「ああ、水ポケモンを使いこなせる実力ではカスミの方が上手だったが……。」

デ「見事下馬評を覆した結果だね。」

コトネ「ヒカリンもカスミンもすごいってことね。」

サトシ達も激闘を繰り広げたカスミとヒカリを称賛した。一方、コンテストバトル後の2人はプールサイドへと上がり、

カ「見事だったわ、ヒカリ。」

カスミが自分を打ち負かしたヒカ리를称える。

ヒ「カスミだって、あんなに水のフィールドを上手く使いこなしたんだもの。さすがは、ハナダジムのジムリーダーね。」

カ「ありがとう、ヒカリ。でも、たつまきに頼りすぎたのが痛かったわ。ちよつとした閃きで対処法を思いつくなんてすごいわ。」

ヒ「ふふふ、これもサトシと旅をしていたおかげかしら。」

ヒカリは不利な状況を突然の閃きで有利に変えるサトシをふと思う。

カ「確かにね。」

カスミもヒカリの言ったことに納得する。

カ「ヒカリ、次はいよいよ準決勝ね。がんばりなさいよ。」

ヒ「ええ、誰と当たろうと全力を尽くして挑むわ。」

ヒカリは準決勝への意気込みを早くも入れたようだ。その後、カスミは普段着に着替え、控室からサトシ達のいる観客席へと向かった。

続く

ヒロイン対決?! カスミVSヒカリ(後書き)

勝ち上がったヒカリはどこまで進むのか・・・

圧倒的な実力差と大会の結果（前書き）

ヒカリはどこまで勝ち進められるのか・・・

圧倒的な実力差と大会の結果

カスミとヒカリのコンテストバトルの後は、リリアが1回戦に続き圧倒的な実力で勝利、シュウも2回戦を順当勝ち、ナツミも順当勝ちし、準決勝の組み合わせは以下の通りとなった。

準決勝組み合わせ

第1試合：ヒカリVSリリア

第2試合：シュウVSナツミ

ヒカリは『コルドーのコンテストレイン』と呼ばれるほどの世界的な実力者・リリアと対戦することになった。実力差では圧倒的にヒカリが不利だが、どのようなコンテストバトルを魅せてくれるのだろうか。

リリアン「今大会の決勝へと突き進むのは、どちらか！？ セミ・ファイナル第1試合を戦うのは、清楚な美しさの中にコンテストの情熱あり、世界にその名を轟かせる『コンテストレイン』リリアさんと、ここまで『ハウエンの舞姫』、『カントーの人魚姫』と次々と新参者を打ち負かした彼女もまたコンテストの新参者であるヒカリさんです。」

リリアンの説明の後、ヒカリとリリアがバトルフィールド上に現れる。ちなみに、リリアの水着は白のビキニに透明のレースを飾り、頭には高級な布で作ったティアラをモチーフとした頭飾りを着用しており、いかにも乙姫をイメージさせるものである。

ヒカリさすがは、リリア様。コンテストバトル前でも、気品あふれる

雰囲気は飲まれそうだわ。でも、あたしはあたしとポケモン達のコンビネーションを魅せるのみ。見ててください、リリア様。」

ヒカリはリリアの出すオーラに圧倒されつつ、集中力を高める。

リリアン「2人とも、準備はOK？ それじゃあ、行くわよ！
Can, we go!」

歓声とともに、コンテストバトルセミファイナル第1試合の火蓋が切って落とされた。

ヒ「ポツチャマ、ビードル、チャーム・アップ!」

リリア「マナフィ、フィオネ。魅せますわよ。」

ヒカリ、リリアともにそれぞれのポケモンを出す。

ハル「リリア様、マナフィだけでなく、フィオネも持っていたのね。」

デ「ヒカリが強敵相手にどんなテイストでぶつかっていくのかも楽しみだけど、あのフィオネとマナフィがどんなマリアージュを醸し出してくれるのかも見ものだね。」

観客席は、今から行われるバトルの戦況を見守る。

ヒ「ポツチャマ、マナフィとフィオネの周りにバブルこうせん。」

ポ「ポチャアアアア!」

ポツチャマはマナフィとフィオネの行動範囲を狭めるかのように、バブルこうせんを放つ。案の定、マナフィとフィオネは身動きがとり辛くなった。

リリア「マナフィ、フィオネ。回転しながら泡を弾くのです。」

マナフィ「マナア。」

フィオネ「フィネ。」

マナフィとフィオネはダンスを踊るかのように回転しながら華麗に泡を弾く。動きに無駄がなく、さすがといったところである。

ヒ「今よ、ビードル。ころがる。」

ビードル「ビィダ。」

マナフィとフィオネが一点に集まったところで、ビードルのころがる攻撃が2体に襲い掛かる。

リリア「かわしなさい。」

マナフィ「マナア！」

フィオネ「フィ！」

リリアはそれに動じる素振りをみせることなく、マナフィとフィオネにかわす指示を出す。それに動じるかのようにマナフィとフィオネも素早くかわす。

ヒ「は、早い!？」

ヒカリはマナフィとフィオネのあまりにも早いかわし方に驚愕した。

リリア「マナフィ、フィオネ。アクアリング。」

マナフィ「マナア！」

フィオネ「フィネ！」

すると、マナフィとフィオネは華麗にアクアリングを形成し、

リリア「そこから、てだすけでりんしょう。」

マナフィ「マ〜ナ〜」

フィオネ「フィ〜ネ〜」

2体は互いに手を繋ぎあい、りんしょうを始めた。2体の美しい歌声が、水を通して観客席にも響き渡り、人々を魅了させる。さらに、アクアリングの相乗効果で、バトルステージは2体の独壇場と化した。

ポッチャマ「ポチャ〜！」

ビーダル「ビィダー！」

りんしょうは元々攻撃技だったので、マナフィとフィオネの歌声に見惚れていたポッチャマとビーダルに直撃する。

ヒ「ポツチャマ、ビーダル!？」

その後も、マナフィとフィオネの素早いかわしとてだすけ+りんしょうのコンビネーション技に苦戦し、そして、

リリアン「バトル・オオオフ! ファイナルステージへの切符をゲットしたのは、リリアさんです。」

その瞬間、観客席では歓声があがった。ヒカリは序盤こそは健闘したものの、その後は圧倒的実力差に打ち負かされた格好になった。そして、コンテストバトルを終えた2人はプールサイドへとあがり、控室へと向かう。

リリア「ヒカリさんのポツチャマとビーダル。なかなかのコンビネーションでしたわ。」

リリアが対戦相手だったヒカリを労う。

ヒ「いえ、マナフィとフィオネのコンビネーションに比べたらまだまだですよ。さすがはリリア様です。」

すると、リリアは、

リリア「そこまで言われますと、わたくし照れちゃいますわ。でも、久しぶりのコンテストでしたから、それ程いい出来ではございませんでしたの。」

ヒ「ええ!?! あれですか!?!」

ヒカリはリリアがいつもよりは本調子ではなかったことを知り、驚愕した。それもそうだろう。リリアの演技は『コンテストレイン』と呼ばれるに相応しい美しさと迫力を兼ね備えた見事なパフォーマンスだったのだから。

リリア「では、わたくし。ファイナルに向けての準備がありますので。」

リリアがその場を立ち去ろうとした瞬間、

ヒ「あの、また会えますよね？」

ヒカリが恐る恐る聞いてみると、

リリア「わたくしも『ワールドチャンピオンフェスティバル』に出場しますから、また会えますわ。次に会える時を楽しみしております。」

ヒ「こちらこそ。」

その後、ヒカリは3位決定戦があるため着替えずに上着を一枚羽織り、サトシ達と合流した。そして、第2フィールドで行われているシューVSナツミのコンテストバトルを観戦するために第2フィールドへと向かった。その道中、

サ「惜しかったな、ヒカリ。あともう少しでファイナルだったのに。」

ヒ「うん。でもなんだか悔いはなかったって感じ。」

タ「なんだか、負けたというのに嬉しそうだな。」

タケシはヒカリが清々しい顔で答えていることに驚く。普段のヒカリなら、コンテストで負け続けた時は鬱状態になるくらいに落ち込みが激しくなる。だが今回は、それほどショックが大きい様子である。

ヒ「だって、相手があのリリア様だもの。これが世界の演技だということが分かっただけでも収穫よ。」

デ「負けたからこそ、得られるものはあるって言うからね。」

ヒカリは完膚なきまでに打ち負かされたものの、リリアとコンテストバトルが出来たことで得たものもあつたようだ。デントもそれに納得するように言う。

ハル「あゝ、リリア様とコンテストバトルで戦えたなんて、ヒカリ羨ましいかも。」

カ「あたし達だって、いつか戦えるわよ。もちろん、リリア様の他にも世界には並々ならぬ強敵がいるんだから。」

ハル「それもそうかも。」

そうこうしているうちに、一行はナツミとシュウのコンテストバトルが行われている会場へと到着した。早速観客席へと着くと、プール内ではナツミとシュウによる一進一退の攻防が繰り広げられていた。シュウはシャワーズとサクラビス、ナツミはカメックスの力メタ、オーダイルのクローを繰り出している。

ケンゴ「あつ、サトシ、ヒカリ。ヒカリ、セミファイナルはどうだった？」

サトシ達の姿に気づいたケンゴが、サトシ達に声を掛け、ヒカリにセミファイナルの結果を聞いてみる。

ヒ「惜しくも惨敗。でも、得られたものは大きかったわ。」

ケンゴ「まあ、相手が相手だったからな。」

ヒ「ところでそっちの状況は？」

ケンゴ「2人とも、いい勝負だよ。シュウさんはサクラビスと予選に引き続きシャワーズで、ナツミさんはカメックスとオーダイルでバトルしているよ。シュウさんは評判通りの実力だけど、ナツミさんも予選のジユゴンといい、なかなかの実力だよ。ナツミさんの2匹には僕も苦戦して、結局負けちゃったんだよな。」

ヒ「そう。」

一緒のフィールドで戦ってきたケンゴの言葉に、理解したように返事をするヒカリ。そして、サトシ達はケンゴとともにこの戦況を固唾を飲んで見守ることにした。ちなみに、シュウは水色の海パンを履いており、ナツミは赤のグラデーションビキニに頭には帽子の代わりに黄色のハイビスカスの髪飾りを付け、髪は下ツインテールにしている。

シュウ「シャワーズ、オーロラビーム。」

シャワーズのオーロラビームがクローに襲い掛かる。

ナツミ「カメラ、高速スピンドで受け止めて。」

カメラ「カメエエエ！」

カメラはオーロラビームを高速スピンドで見事に受け止め、はじき返す。

シュウ「サクラビス、避ける！」

弾き返されたオーロラビームがサクラビスに向かってきたので、避ける指示を出すシュウ。サクラビスも素早く反応し、それをかわす。

シュウ（まさか、これほどまでに苦戦するとは・・・。）

シュウは改めてナツミのカメラとクローのコンビネーションに驚愕する。

シュウ「（それなら、これでどうだ。）サクラビス、ゆうわく。」

サクラビスがゆうわくを繰り出す。

カメラ「カメ〜。」

クロー「オ〜ダ〜。」

これにより、カメラとクローは惑わされたかのように怯む。カメラとクローは2体ともである。ゆうわくは性別の違う相手にしかとくこうを下げられないので、シュウのサクラビスはである。

シュウ「シャワーズ、ハイドロポンプ。」

そこへ、シャワーズのハイドロポンプが炸裂。それが怯んでいた
カメタとクローに直撃した。

カメタ「カメエ。」

クロー「オーダ。」

カメタとクローはなんとか体勢を立て直す。

ナツミ「ここから反撃よ。カメタ、気合玉。」

カメタ「カアアアメエエ！」

カメタのきあいだまがシャワーズ、サクラビスに襲い掛かる。

シュウ「かわすんだ！」

シャワーズ、サクラビスともに難なくかわす。だが、サクラビス
の先には、

クロー「オオオオダ！」

クローが待ち構えていたのだ。

ナツミ「今よ、クロー。サクラビスに、シャドークロー。」

クロー「オオオオダアア！」

クローのシャドークロー。サクラビスは避けることが出来ず、直撃。

シュウ「サクラビス!？」

サクラビスはバトルフィールドへと叩きつけられた。その後もナツミは、カメタの高速スピントクローのシャドークローで攻勢を強め、シュウのポイントを減らしていく。そして、

ナツミ「これで終わりよ。カメタ、クロー、ハイドロカノン。」

カメタ「カアアアアアメエエエエ！」

クロー「オオオオオオダアアアアイル！」

2体の強力なハイドロカノンがシャワーズ、サクラビスに凄まじい勢いで向かってくる。シャワーズ、サクラビスは避けることが出来ずに直撃を受けてしまった。と、ここで、

ビビアン「タイムアップ！」

試合終了のアナウンスが出された。

ビビアン「セミアイナル第2試合の激闘を制したのは、ナツミさんです。」

終盤の追い上げが効いたのか、ポイント差でナツミが勝利をもぎ取った。そして2人は、プールサイドへと浮上していった。

ヒ「す、凄いコンテストバトルだったわ。」

サ「ああ、途中からでも十分迫力が伝わって来たぜ。」

マリナ「ケンゴ君の言ったとおりね。シユウ君もだけど、ナツミさんもコーディネーターとしてかなりの実力だわ。」

観客席にいたサトシ達は、シユウとナツミの戦況を振り返って、ふと声に出す。一方、コンテストバトルを終えて控室に戻った2人は、

ナツミ「いいコンテストバトルだったわ。ありがとう、シユウ君。」

シユウ「こちらこそ、カメックスとオーダイルの素晴らしいコンビネーションには圧倒されました。次は『コンテストレイン』とのファイナルですが、頑張ってください。」

ナツミ「ええ。シユウ君も次はヒカリちゃんとの3位決定戦だけど、頑張ってるね。」

シユウ「はい。」

ナツミとシユウはお互いの健闘を称えあい、握手を交わす。その後、ヒカリVSシユウの3位決定戦、リリアVSナツミのファイナルでも熱戦が繰り広げられた。

3位決定戦・・・

ヒ「ポッチャマ、バブルこうせん。」

シュウ「シャワーズ、オーロラビーム。」

ヒ「ビードル、ころがるで受け止めて。」

シュウ「サクラビス、ゆうわくで相手を惑わすんだ。」

ファイナル・・・

リリア「マナフィ、フィオネ、アクアリング。」

ナツミ「クロー、シャドークローでカメラのきあいだまを打つよ。」

リリア「マナフィ、フィオネ、かわすのです。」

ナツミ「今よ、クロー。近づいて、シャドークロー。」

どちらも白熱したコンテストバトルとなり、時間いっぱいまで行われた。その結果、3位決定戦ではヒカリがシュウを下し、ファイナルではナツミが強敵のリリア相手に奮闘するも、僅差でリリアに敗れた。こうしてポケモンコンテストタンバ大会『A 1』は、『コルドーのコンテストレイン』リリアの優勝で幕を閉じた。コウヘイ、シヨウタ、ジュンイチは『ワールドチャンピオンリーグ』の予選に向けて、シュウ、ケンゴ、リリアは『ワールドチャンピオンフ

エステイバル』の予選に向けて一足先にタンバシテイを発ち、サトシ達御一行、ナツミ、リュウジが残るのみとなった。そして彼らもタンバシテイを離れる時間になり、

カ「ところで、ナツミさんとリュウジさんはこれからどうするのですか？」

ナツミ「私はとりあえずヒナタの手伝いに戻るわ。」

リュウジ「僕は一旦、リュウグウジムに戻るよ。」

カスミの質問に丁寧に答えるナツミとリュウジ。

ヒ「コンテストにはもう出ないんですか？」

ナツミ「私はもう少し考えてからにするわ。今回、水ポケモン限定のコンテストってことで出場してみたけど、結構楽しかったものね。」

リュウジ「僕は難しいかな。思ったよりスケジュールが取れなくて。」

ヒ「そうですね。」

ナツミは今回のコンテストを経験したことで『ワールドチャンピオンフェスティバル』に対する意欲がわいてきたようだ。

ナツミ「それじゃあ、ここでお別れね。」

リュウジ「出来たら、リュウグウジムにも遊びに来てよ。」

サ「はい。それじゃあ、それまでお元気で。」

こうして、サトシ達、ナツミ、リュウジはそれぞれ別の船に乗り込み、タンバシテイを後にした。サトシ達の乗り込んだ船では、

サ「……………」

ピ「…ピカ？」

ピカチュウが何かに気づき、首を傾げる。

サ「ん？ どうしたんだ、ピカチュウ？」

ピ「ピカピー、ピカピカ。」

ピカチュウが何かを指し示すかのように指をさすので、サトシはその方角へと顔を向けた。すると、

キノココ「キノー！」

1匹のキノココが海鳥ポケモンたちに乗って、サトシ達の乗っている船に近づいてくる。

リュウカ「どうしたのでしょうか、あのキノココ。」

マリナ「あれ見て。あのキノココ、包帯巻いてるわ。」

ケンタ「てことは、銀岩島の洞窟で手当てしたキノココなのか？」

このキノココは銀岩島でロケット団に実験台にされそうになったところをサトシ達に助けられたキノココである。すると、キノココは突然海鳥ポケモンから飛び降り、見事船に着地した。

キノココ「キノオ、キノオ。」

キノココはサトシを見つけると、サトシの方にすり寄ってきた。

サ「ん？ どうしたんだ、キノココ。」

マサ「もしかして、このキノココサトシの仲間になりたいんじゃないの？」

サ「えっ、そうなのかキノココ。」

キノココ「キノ！」

キノココはうんと頷く。キノココの意図が分かったサトシは何の躊躇なく空のモンスターボールを取り出し、キノココに優しく当てる。ボールは少しの間点滅したが、すぐに止んだ。

サ「よし、キノココゲットだぜ！」

ピ「ピッ、ピカチュウ！」

こうしてサトシ達は新たな仲間を手に入れ、次の目的地へと進んでいくのだった……

続いて後書きシヨ

圧倒的な実力差と大会の結果（後書き）

サ「お疲れさん、カスミ、ハルカ、ヒカリ。」

カ「ありがとう、サトシ。」

ハル「それにしてもヒカリ、3位だなんてすごいかも。」

ヒ「それ程でもないわよ。リリア様には全然敵わなかったし、『ワールドチャンピオンフェスティバル』で戦うにはまだまだよ。」

カ「水ポケモン専門のコンテストだったから結構自信あったんだけど、アタシも水ポケモンマスターを目指す者としてまだまだだね。」

ハル「わたしもポケモン達とのコンビネーションがうまくかみ合っ
てなかったところもあったし、そういった反省点を見つけられたこ
とに関しては今回のコンテストは充実したものだっただかも。」

サ「3人とも、今回のコンテストで得たものがあってよかったな。
これから、俺達に出来ることがあったら協力するぜ。」

カ・ハル・ヒ「「「ありがとう、サトシ。」」」

ヒ「話は変わるけど、サトシが最後に怪我の手当てをしたキノココ
をゲットするなんて思わなかったわ。」

サ「俺もだよ。でも、仲間になったことは変わらないから、立派に
育てて見せるぜ。」

ハル「キノココがどんな成長をみせるのか、楽しみかも。」

ヒ「それじゃあ、最後はあたしが締めるわ。次回もポケモンゲットでダイジョーブ。」

草ポケモン大集合で、大丈夫！？（前書き）

今回、草ポケモン好きなあの自然系ジムリーダーが登場します。

草ポケモン大集合で、大丈夫！？

ポケモンコンテスト・タンバ大会を終え、サトシ達は次の目的地をチョウジタウンと決め、現在はエンジュシティとチョウジタウンの間ぐらいまで来ていた。

ケンタ「デント、いいバトルをよろしくな。行くぜ、リーフィア。」

リーフィア「リイイイファイア！」

デ「ケンタ、君のバトルをすっかりテイスティングさせてもらっよ。ヤナップ、マイ・ビンテージ。」

ヤナップ「ヤナップ！」

その道中、休憩も兼ねてケンタとデントによるシングルバトルをすることになった。ケンタはリーフィア、デントはヤナップを繰り出した。

デ「ヤナップ、タネマシンガン。」

ヤナップ「ヤナアアアア！」

ヤナップのタネマシンガンがリーフィアめがけて飛んでくる。

ケンタ「リーフィア、リーフストームで吹き飛ばすんだ。」

リーフィア「リイイイイファイイイ！」

リーファイアのリーフストームを利用して、タネマシンガンに対抗する。

デ「ケンタ。君とリーファイアもなかなか良いマリァージュを醸し出しているね。」

ケンタ「ありがとな、デント。デントのヤナップもなかなか強いじゃないか。」

それぞれ次の攻撃に入ろうとしたその時だった。

？「キヤー、リーファイアとヤナップよ！」

草陰から目をハートマークにさせた何者かがリーファイアとヤナップに飛びつくように現れた。

？「あゝん、もうこの肌触り最高〜！」

リーファイア「リイイイ。」

ヤナップ「ヤナ．．．。」

頬擦りを始めた？に、突然のことで困惑気味の2体。

ケンタ「な、なんなんだ!？」

デ「い、イツツ・クレイジング・タアアアイム！」

ケンタとデントも訳が分からなかった。すると？はそんな2人に近づき、

？「ねえ、このリーフィアとヤナップはあなた達のポケモン？」

ケンタ「そ、そうだけど．．．。」

リーフィアとヤナップがケンタとデントのポケモンだと確認した？は、

？「だったら、あたしのラフレシア、キレイハナと交換しない？」

ケンタ・デ「はあ？」

？は突然、リーフィアとヤナップを自分のポケモンと交換しようと言い出した。

？「コノハナとウツボットでもいいわよ。」

デ「あ、いやだから．．．。」

？の強引ぶりに困惑気味のケンタとデント。

リーフィア「リィィィ。」

ヤナップ「ヤナア．．．。」

リーフィアとヤナップも？の抱き着きに暑苦しさを感じている。
夏だしね。 by 天の河

リーフィア「リィィィ！」

ヤナップ「ヤナップ！」

ケンタ「リーファイア。」

デ「ヤナップ。」

ケンタ・デ「止め．．．。」

遂に我慢の限界が来たのか、リーファイアはリーフストーム、ヤナップはタネマシガンで？を攻撃する。それを見たケンタとデントが慌てて止めに入るが、

？「あゝ、いいわ。特にヤナップのタネマシガンが当たっているところ、ツボなのよね。」

この2体の攻撃に？は逆に喜んでいる。この？には、焼け石に水だったようだ。

サ「なんだなんだ。」

ヒ「一体、どうしたっていうのよ。」

騒ぎを聞きつけたサトシ達が続々と集まってくる。

？「あら、サトシ君にヒカリちゃん。それに、タケシ君も久しぶりね。」

？はサトシ、ヒカリ、タケシのことを知っていた。

サ・ヒ・タ「な、ナタネさん！？」

？の正体、それはシンオウ地方ハクタイジムジムリーダーで草ポケモンの使い手・ナタネだった。サトシ、ヒカリ、タケシはナタネとの思わぬ再会にびっくりする。（タケシは例のごとく、目をハートマークにさせて（笑））

ケンタ「知ってるのか、サトシ。」

ケンタがナタネについて聞いてきたので、サトシはケンタにナタネがシンオウ地方にあるハクタイジムのジムリーダーであることを簡単に話した。

ナタネ「ホントに久しぶりね。サトシ君、ヒカリちゃん、タケシ君。」

サ「お久しぶりです、ナタネさん。」

ヒ「お元気にしてましたか？」

ナタネ「ええ、こっちは大丈夫よ。」

サトシ、ヒカリ、ナタネが再会の挨拶を交わしていると、

タ「ナタネさん、あなたのような自然に打ち解けあう美しさを持った方との再会、このタケシは嬉しく思います。」

ナタネ「は、はあ。。。。」

いつものごとくナタネにナンパをするタケシ。そしてこの後恒例の、

タ「う！？ しびれびれ。」

グレッグル「ケツ！」

グレッグルがどくづきを喰らわし、ノビたタケシを引きずる。

ナタネ「・・・ねえ、前にも思ったけど彼大丈夫なの？」

カ「ああ、気にしないでください。いつものことですから。」

ナタネはタケシを心配するが、カスミはいつものことだからと一蹴する。その後、初めて会う同士で簡単な自己紹介をした。

サ「ところでナタネさんはどうしてここに？」

サトシがシンオウのジムリーダーのナタネが何故他の地方にいるのか聞いた。

ナタネ「今度、『ワールドチャンピオンリーグ』が開かれるでしょ。その影響でジムに挑戦するトレーナーが減っちゃってね。それで暇になったから、この際全国をまわって草ポケモンめぐりをしようかと思ったのよ。」

ヒ「相変わらず、草ポケモンが好きなのですね。」

ナタネ「ええ。ズバリ、草ポケモンあるところこのナタネありつてね。」

ナタネはカッコよくポーズを決めながら、自信満々に言う。

ベイリーフ「ベイ？」

ツタージャ「タジャ？」

キノココ「キノ？」

サトシの後ろからベイリーフ、ツタージャ、そしてうずまき島で新たにサトシがゲットしたキノココが現れた。3体とも草ポケモンである。となれば当然、

ナタネ「キヤー、草ポケモン3点セット。もう、最高よ。」

ナタネが目をハートマークにさせて、ベイリーフ、ツタージャ、キノココに飛びかかっていく。

ベイリーフ「ベイ！？ ベエイイイ！」

ツタージャ「タジャ！？ タアアジャアア！」

キノココ「キノ！？ キノオオオ！」

身の危険(?)を察知したのか、ベイリーフとツタージャはつるのムチ、キノココはタネマシンガンで素早くナタネに攻撃する。

ナタネ「あ〜ん、ベイリーフとツタージャのつるのムチ、キノココのタネマシンガン。なかなかの威力よ。もう最高〜。草ポケモンの攻撃喰らって死ぬのなら、本望だわ。」

デ「いや、死んだら駄目ですって！」

サ「お、おい、ベイリーフ、ツタージャ、キノココ止めるって（汗）」

ナタネは草ポケモンの攻撃を受け喜んではいるが、さすがにまずいのでサトシとデントが止めに入る。

ケンタ「あの人、余程草ポケモンが好きなんだな。」

ヒ「だって、『草ポケモンが好きな人に悪い人はいない』って言うくらいだもん。」

コトネ「そうなんだ、ヒカリン。」

カ「でも、なんとなくわかる気がする。」

アイ「アタシも。」

ナタネの草ポケ好き振りにケンタ達は苦笑を浮かべる。そんな中、水ポケモンマスターを目指しているカスミ、ドラゴンポケモンマスターを目指しているアイリスは、同じ1種類のタイプを極める者の匂いを感じたのかナタネに対して理解を示した。

ナタネ「あつ、ここでサトシ君たちと再会したのも何かの縁だね。サトシ君たちに見せたいポケモンがいるの。」

サ「俺たちに見せたいポケモン？」

見せたいポケモンがいると言うナタネに、首を傾げるサトシ達。

ナタネ「出てらっしゃい！」

ナタネは1つのモンスターボールを取り出すと、間髪入れずにポイントと上へと投げた。

サボネア「サボオオオ！」

出てきたのは1匹のサボネアだった。

マリナ「サボネアだわ。」

ベ「イツシユ地方にはいないポケモンね。」

アイ「アタシ、サボネア見るの初めて。」

サボネアの登場に、特にイツシユ組の面々はイツシユにはいないので珍しさを感じている。

サボネア「サボッ、サアボネエエエ！」

サボネアは突然、ナタネに飛びついた。

ナタネ「あゝ、あなたってホントに甘えんぼさんね。でも、そういうトコ嫌いじゃないわよ。」

ナタネは困惑するどころか逆に喜ぶ。先程何度も草ポケモンの攻撃を受けたにもかかわらず、嫌な顔一つしないとは、生粋の草ポケモン限定のマ○である。

タ「もしかして、そのサボネア。」

ナタネ「ズバリ、あの時の草ポケモンに好かれてた人のサボネアよ。」

サ「（草ポケモンに好かれてた人って、まあいいや……。）やっぱりか、久しぶりだなサボネア。」

ピ「ピカピカ！」

サトシとピカチュウはサボネアに何度も会ったことがあるので、サボネアに再会の挨拶を交わそうとする。

サボネア「サボサボ。」

サボネアもサトシ達との再会を懐かしむかのように返事をする。もうお分かりの読者もいるとは思うがこのサボネアは、ロケット団のコジロウのサボネアである。以前、ナタネがサボネアのニードルアームを見てドレインパンチをマスターさせたいと言ってスカウトしたのをきっかけにナタネの手持ちポケモンとなっている。

リュウカ「あのサトシさん。」

カ「あたし達、全く話が見えないんだけど。」

ナタネのサボネアに初めて会う面々は困惑気味に言う。

サ「あつ、ごめん。なあハルカ、マサトは覚えているか。ロケット団のコジロウがサボネアを持ってたこと。」

ハル「ああ、あのサボネアね。覚えてるわ。」

マサ「出てくる度にコジロウに飛びついてたサボネアでしょ。」

ハルカとマサトはコジロウのサボネアを覚えているようだ。

マサ「まさか、そのサボネア……。」

タ「その通り、アイツのサボネアだよ。」

ハル「嘘！？　じゃあ、なんで今はジムリーダーのポケモンになっているの？」

ハルカとマサトは自分たちが知っているサボネアが今はジムリーダーのポケモンになっていることに大分驚たいぶいているようだ。

ナタネ「それはあたし直々にスカウトしたからよ。」

ナタネはハルカとマサト、それにサボネアとは初対面の面々にサボネアをスカウトした経緯を話した。

ハル「それにしても、あのサボネアを手放すなんて信じられないかも。」

マサ「あんなに懐いていたのに。」

タ「コジロウ自身も、手放すときは俺達に特訓の手伝いを頼んだりかなり悩んでたみたいだったからな。」

ハルカとマサトはコジロウとサボネアの仲の良さは知っていたのでサボネアを手放したことが今でも信じられないようである。

サボネア「サボ？」

ナタネ「ん？ どうしたの、サボネア？」

サボネアが首を傾げる仕草をしたので、ナタネはキョトンとする。

サボネア「サボサボ、サボネ〜！」

すると突然サボネアが何かに気づいたのか、近くの木々に飛びつく。

？「いつてえええ！」

サボネアが飛びついた先から、1人の口髭を生やした男が痛がりながら現れた。

ケンタ・マリナ「だ、誰？」

突然の男の出現に、当然の反応を見せるケンタとマリナ。

？「や、止めるサボネア！」

男は必死にサボネアを引きはがそうとするが、当のサボネアはなかなか離れない。遠目で見ていたサトシ、ヒカリ、タケシ、ハルカ、マサトはこの光景に見覚えがあった。否、一時期ほぼ毎日見っていた光景だった。

サ「もしかして、コジロウか？」

サトシは飛び出した男がコジロウだとほぼ断定した。

？「コジロウ、誰だそれは。わたしはちょっとスマートなジェントルマン……。」

ハル・マサ「いや、その設定無理があるから。」

無駄なカモフラージュをするコジロウにツッコミを入れるハルカとマサト。

ニヤース「だから、言ったのにニヤ。」

コジロウに同行していたニヤースがつぶやく。

コジロウ「それにしても、サボネア。しばらく見ないうちに、お前随分と立派になったな。」

サボネア「サボサボ。」

再会したかつての主人であるコジロウに褒められ、嬉しそうにするサボネア。

ナタネ「この子には、今ではジム戦でも主力ポケモンとして頑張ってもらってるわ。それにドレインパンチもなかなかの威力にまで成長したし、やっぱりあたしの見込んだとおりだったわ。」

コジロウ「そっか、俺は嬉しいぞ。サボネア。」

サボネア「サボ〜。」

コジロウはそう言って、サボネアの頭を撫でる。

ナタネ「ねえ、このサボネアと誰か1対1のバトルしてみない？
個人的にはイッシュ出身のトレーナーとバトルしてみたいんだけど。」

ナタネは1対1のバトル、しかも自分の使用ポケモンはサボネア、相手のトレーナーはナタネが以前からバトルしてみたかったイッシュ出身のトレーナーと指定した。ちなみにサトシ達の中で、イッシュ地方出身者はデント、アイリス、ベルの3名である。

デ「どうする？ 僕はさっきまでケンタとバトルしてたから、君たちに譲るよ。」

アイ「あたしもさっきまでサトシのピカチュウとドリユウズでバトルしてたから、ベルに譲るわ。」

ベ「ホント！？ デント君、アイリスちゃんありがとう。」

ベルは『ワールドチャンピオンリーグ』前にイッシュ以外のジムリーダーと真剣バトルが出来ることになったので、非常に喜んだ。

ナタネ「それじゃあ、決まりね。今すぐ始めてもいいかしら？」

ベ「ええ、大丈夫です。」

これにより、ハクタイジムジムリーダーのナタネとベルによる1対1のシングルバトルをすることになった。果たして、成長したサボネアの実力は！？ ベルはどのポケモンでバトルに挑むのか！？

続
く

草ポケモン大集合で、大丈夫！？（後書き）

ベルとナタネ、バトルの結末やいかに・・・

ナタネVSベル！ そして新たな仲間・・・（前書き）

ナタネとベルによる1対1のシングルバトル！ その行方は・・・

終盤にタケシに新たな仲間が加わります。

ナタネVSベル！　そして新たな仲間・・・

ナタネ「行くわよ、サボネア。」

サボネア「サボサボ。」

ベ「チラーミー、出てらっしゃい。」

チラーミー「チラア！」

ナタネのサボネアに対して、ベルはチラーミーを繰り返した。

サ「ベルはチラーミーで来たか。」

デ「あのチラーミー、覚えている技がクセのあるテイストを醸し出すからね。それがキーポイントだよ。」

サトシ達が固唾を飲んで見守っていると、

コジロウ「頑張れ、サボネア！」

今は手放しているとはいえ、とりわけ自分にかなり懐いていたポケモンだったので、応援する気持ちを抑えられなくなったコジロウ。

ニヤース「自分のポケモンじゃないとはいえ、やっぱり心配なんだニヤ。」

そんなコジロウを見て、ふと言葉を漏らすニヤース。

ナタネ「先攻はそちらからでいいわ。」

ベ「それじゃあ、お言葉に甘えさせて。チラーミィ、サボネアに近づいて、おうふくビンタ。」

チラーミィ「チラア！」

チラーミィは素早くサボネアに近づく。

アイ「相変わらず早い動きね。」

アイリスはチラーミィの素早い動きに改めて感心する。

ナタネ「素早い動きなら、こつちも負けてないわ。サボネア、かわして。」

チラーミィ「チラ、チラ、チラ……。」

サボネア「サボ、サボ、サボ……。」

チラーミィのおうふくビンタを軽快なステップでかわすサボネア。あれからかなりスピード面でもアップしているのが見て取れる。

ナタネ「見せてあげて、サボネア。ドレインパンチ。」

サボネア「サアアアボネエエエ！」

サボネアのドレインパンチ。コジロウが預けた頃は、まだ完全にマスターしていなかったが、あれからナタネとの特訓の成果もあって、マスターして威力もかなり上がっているようだ。

チラーミィ「チラアアア！」

チラーミィに至近距離で当たり、攻撃を喰らったチラーミィは向こうへ吹き飛ばされた。

べ「チラーミィ!?」

チラーミィ「チラ．．．、チラ！」

まだバトルの序盤ということもあって、勝負を決める一撃にはならなかった。

べ「ここから反撃よ。チラーミィ、サボネアの背後を抑えて。」

チラーミィ「チラ！」

サボネア「サボ!?」

チラーミィはサボネアの背後に回り、そして全身でサボネアに巻きつく。

べ「そこから、くすぐるよ。」

チラーミィ「チラ、チラチラチラチラ。」

サボネア「サボッ、サボサボ。」

チラーミィのくすぐるがサボネアを襲う。サボネアはなんとか逃れようと試みるが、思うように身動きが取れず苦戦する。

コジロウ「あー、サボネア．．．。」

ニヤース「コジロウ、バトルは始まったばかりだニヤ。」

サボネア不利な戦況に見てられないという感じで悲痛に叫ぶコジロウ。ニヤースはそんなコジロウを宥める形になっている。

ナタネ「やるわね、でもこれはどうかしら？」

悲痛に叫ぶコジロウを尻目に、ナタネは意味深な言葉を発しながら至って冷静である。さすがはジムリーダーといったところか。すると、くすぐられながらもサボネアはなんとか脱出した。

ベ「続いて、メロメロよ。」

チラーミィ「チラ、チラア〜。」

チラーミィはサボネアが脱出した瞬間を見計らって、メロメロを発動。だが、ナタネはメロメロの発動によってチラーミィに一瞬の隙ができたところを見逃さなかった。

ナタネ「今よ！ サボネア、エナジーボール。」

サボネア「サボ！ サアアアボネエエエ！」

サボネアはメロメロをいとも簡単にかわすと、両手でエナジーボールを作り、それをチラーミィめがけて投げた。

チラーミィ「チラアアアア！」

チラーミィはかわそうとするも、サボネアのエナジーボールが向かってくるスピードのほうが速く、直撃を喰らった。

べ「チラーミィ!？」

チラーミィはそのまま吹き飛ばされた。だが、すぐさま立ち上がった。

ナタネ「続けていくわよ、エナジーボール。」

サボネア「サアアアボネエエエ！」

サボネアは両手でエナジーボールを作り、またチラーミィめがけて投げた。

べ「こうなったらチラーミィ、10万ボルトよ。」

チラーミィ「チィィラアアア！」

ベルはチラーミィに10万ボルトを覚えさせていたのだ。サボネアのエナジーボールとチラーミィの10万ボルトが丁度中央でぶつかり合う。

ドカアアアアアン!

サボネア「サボオオオ！」

チラーミィ「チラアアアア！」

そして爆発が発生し、その爆風でサボネア、チラーミイともに吹き飛ばされてしまう。2体は辛うじて体勢を維持している。だが、爆発の煙が晴れた瞬間、

サボネア「・・・サボ。」

チラーミイ「・・・チラア。」

ナタネ「サボネア!？」

ベ「チラーミイ!？」

サボネア、チラーミイともにその場に倒れ、目を回す。このシングルバトルは、引き分けに終わった。

ケンタ「す、スゲエバトルだったな。」

サ「ああ、まさかベルのチラーミイが10万ボルトを覚えているのには驚いたぜ。」

ケンタとサトシは今のバトルをこう評価する。

ハル「あのサボネアがここまで強くなってるなんて。」

ヒ「あたし達が、最後に遭った時よりも格段に強くなってわ。」

ハルカとヒカリがサボネアの成長ぶりに感心していると、

マサ「サボネア、これからもナタネさんに育ててもらえればもっと強くなるんじゃないの。」

マサトの一言に、

コジロウ「これでいいんだ、どうせ俺のような無能なトレーナーに育てられるよりも．．．。」

コジロウは地面にくの字を書きながら酷く落ち込んだ。

ハル「こ、こら、マサト!」

マサト「だって、本当のことじゃないか。」

マサトのあまりにも正直すぎる毒舌ぶりが発動。

リュウカ（マサト君、それはあまりにも言いすぎだよ．．．。）

リュウカはそんなマサトに若干引いていた。

正直なのは結構ですが、時と場合を考えましょう。

ナタネ「いいバトルだったわ、ありがとうベルちゃん。」

ベ「こちらこそ、ありがとうございます。」

ナタネとベルは互いに今のバトルを褒め称える。そして、サトシ達が2人に近づいてきて、

ケンタ「見せてもらったよ、なかなかハラハラするバトルだったぜ。」

サ「こうなったら、俺達も負けてられないな。ピカチュウ。」

ピ「ピカ！」

ヒ「それにしても、サボネアはエネルギーボールを覚えていたのですね。」

ナタネ「ええ、まだ覚えてただけで今日のバトルで感じたのが、やっぱり覚えさせておいて正解だったわ。」

ナタネはサボネアにエネルギーボールを覚えさせておいたことで収穫を得られたと自己評価する。するとそこへ、

コジロウ「サボネア、お前エネルギーボールを覚えていたのか。凄いぞ、サボネア。」

サボネア「サボサボ！」

先程まで落ち込んでいたコジロウが復活し、エネルギーボールを覚えてサボネアに颯爽と近づき褒める。

ヒ「復活、早！？」

ニヤース「やれやれニヤ。」

コジロウの復活ぶりに驚愕するヒカリと、呆れるニヤース。

アイ「ところでなんでアンタ達がここにいるの？ それと、1人足りない気がするんだけど。」

アイリスの発言から分かるように、今回ムサシがいない。アイリスはその理由とともに、なぜコジロウとニヤースがここにいるのか聞いてみた。

ニヤース「今日、ニヤー達は非番だニヤ。それで暇つぶしにコジロウと散歩したら、偶然おみゃーらを見つけて隠れてみていたというわけだニヤ。ちなみにムサシは、『自分磨き』とか言いながら、エステに行ってるニヤ。」

アイ「そう．．．。」

ニヤースの説明に理解した様子 of アイリス。

ニヤース「そろそろムサシのエステも終わるころだから、ニヤー達はこれでおさらばするのニヤ。」

ニヤースはそう言うと、帰り支度を始める。とは言っても、そんなに持ち合わせはないのだが．．．

コジロウ「あ！ それと、ジャリボーイ。今度会ったときこそ、ピカチュウをゲットしてやるからな。覚悟しておけよ。」

サ「ああ、いつでも相手になってやるぜ。」

急に思い出したように言うコジロウに、もう慣れたのか冷静に答えるサトシ。

コジロウ「それじゃあ、達者でな。サボネア。」

サボネア「サボ！」

こうして、コジロウとニャースは嵐のように現れて嵐のように去っていった。

ナタネ「さて、アタシもそろそろここを去るわ。」

ヒ「ナタネさんはこれからどうするんですか？」

ナタネ「うーん、ジムに帰っても暇だし、新たな草ポケモンを求めて各地をまわってみるわ。」

マサ「沢山草ポケモンが見つかるといいですね。」

ナタネ「ふふふ、ありがとう。それじゃあ、みんなまたね。」

サ「お元気です。」

ナタネもまた新たな草ポケモンを求め、サトシ達のもとを離れた。そして、サトシ達も次の目的地へむかうために再び歩を進めた。

サトシ達は、丁度スリバチ山の山道を歩いていたとき、

マサ「随分、霧が濃くなったね。」

コトネ「このスリバチ山の山道は、霧が深くなるってことで有名よ。みんな、気を付けてってことね。」

マサトとコトネの会話から分かるように、辺り一面先が見えないほど霧が濃くなっていた。

サ「そういえば、俺とカスミとタケシでこのスリバチ山の山道を歩いてた時もこんな濃い霧だったな。」

サトシ達がこのスリバチ山を通った時も突然霧が濃くなって立ち往生したのだ。

カ「それで、どこかの誰かさんは幻の綺麗なお姉さんにデレデレしてたしね。」

サ「そういえばそうだったな。」

タ「うっ!?!」

サトシとカスミはその時に遭遇した出来事を思い出す。そして、2人はタケシをジト目で見つめる。そんな2人の視線にタケシが居心地の悪さを感じた。

ヒ「えっ、それってどういうこと?」

ハル「ちゃんと、説明してほしいかも。」

ヒカリとハルカに促され、サトシとカスミはその時に遭遇した出来事を話した。その出来事とは、スリバチ山で立ち往生していた時に偶然出会ったロココという女性にとある屋敷で休ませてもらった時のことである。そのロココという女性はキュウコンが作り出した幻で、そのキュウコンは200年もの間屋敷を留守にしている屋敷の主人を待ち続けていた。そこへサトシ達が通りかかったところをロココの姿で現れ、サトシ達を屋敷に泊めていたのである。特にタケシはその屋敷の主人にとても酷似しており（おまけに、男前）、あわよくばロココの姿でタケシと結ばれようともくろんだのである。だが、自身を縛っていたモンスターボールが壊れるとサトシ達を解放し、自らも自由の身となり屋敷から去っていった。

マリナ「そんなことがあったのね。」

ハル「ていうか、タケシったら幻の女性にナンパするなんて。」

ヒ「どうかしてるわよ。」

サ「ホントだぜ、なにが透き通るほどの美しさだ!」

カ「そうよ、飛びかかったときにすり抜けた時点で普通気づくでしょうが!」

タ「面目ない。。。。」

サトシ、カスミ、ハルカ、ヒカリがタケシを責めたてる。タケシは何も言い返せずに落ち込む。本来なら、誰かが止めに入るのだが、

タケシのナンパはほぼ全てタケシの自業自得なので、同情の余地がなかった。

デ「まあまあ、それくらいにしておこつよ。」

ベ「そうよ、あまり言い過ぎるとタケシ君が可哀そうよ。」

かと言って、このままでは雰囲気的にマズイので、デントとベルが止めに入る。

サ「だってよデント、ベル。」

ベ「過ぎたことをいつまでも引きづってたらキリがないでしょ。」

デ「僕たちは『ワールドチャンピオンリーグ』と『ワールドチャンピオンフェスティバル』に向けて、旅をしているんだ。ここで雰囲気悪くしたら、ここまで積み上げてきたものが台無しになってしまうよ。」

サ「うう、ベルとデントがそこまで言うんなら。」

ベルとデントの説得もあって、サトシは渋々ながらも2人の言ったことを聞き入れる。カスミ、ハルカ、ヒカリもサトシに同調する。ケンタ「それにしても、ポケモンの不思議なことってたまに遭遇するんだよな。俺だって、サトシ達と出会ったまでは、そんなことあったしな。」

マサ「そうだね。僕だって、お姉ちゃんとサトシとタケシとで旅してた頃はそういったことに遭遇してたからね。」

ケンタとマサトがこんな会話をしていたその時だった。

リュウカ「霧の中に誰かいますよ。」

リュウカが深い霧が立ち込める中、サトシ達に近づく人影を見つけた。

？「皆さん、お久しぶりです。」

人影は次第にサトシ達の方へと近づいてきて、サトシ達に話しかけた。

サ・カ「あ、あなたは!？」

タ「ロココさん!」

サトシ達の目の前に現れた人物、それは先程まで話題に上がっていたロココ本人であった。ロココが現れたことにより、サトシ達は驚きを見せる。ただ、タケシだけは目をハートマークにさせていたが……

サ「ど、どうしてここに。」

カ「あなたはもう自由の身なのよ。」

サトシとカスミは、ロココに自分達の目の前に現れた理由を聞き出す。

ロココ「確かに、わたくしはお館様のモンスターボールがない今、

自由の身です。ですが、あの時以来お館様と顔が瓜二つのタケシさんのことが忘れられませんでした。屋敷の近くを歩いていたら、あなた達が偶然通りかかったので思わず声を掛けてみました。」

ロココはこのようにサトシ達の目の前に現れた理由を説明する。心なしか、顔も少し赤い。

タ「ロココさん、自分もあなたのことを忘れたことなど一度もありませんでした。ここはぜひ、以前はかなわなかった自分との永遠の愛を……。」

くどいようだがロココはキュウコンが作り出した幻である。このナンパ男には学習能力というものがないのだろうか(汗)

カ「タケシ……(怒)」

サ「あんな……(怒)」

サ・カ「だあくかあくらあく(怒)、あれはキュウコンが作り出した幻だろ(でしょうが)！」

鬼の形相＋見事なハモリでタケシにキレルサトシとカスミ。

タ「いや、俺はもうこの際幻だろうがなんだろうがこのロココさんを幸せにしてみせる！」

ハル・ヒ「ちょっと、タケシ!?!」

サトシ達の制止も空しく、ロココに飛びつこうとするタケシ。するとそこへ、

タ「うっ!?!」

グレッグルがどくづきを喰らわす。それも一発だけでなく、

タ「あっ!?!」

タ「がっ!?!」

タ「ぐはあ!?!」

何発も喰らわした。

タ「し、しびれびれ〜。」

いつも以上に弱弱しい声でその場でぐったりと倒れるタケシ。今回は何発も喰らっているの、普通ならやり過ぎというところだろうが、

全員（ナイス、グレッグル!）

状況が状況だったので、サトシ達は自らの手を下してまでタケシを止めたグレッグルを褒め称えた。ちなみに、タケシに対しては同情的「ど」の字も浮かび上がらなかったという。そりゃないだろ〜（泣） by・タケシ

カズナリ「見てください、霧が次第に晴れていきますよ。」

久々のセリフ（これまた酷い）のカズナリが、霧が晴れていくことに気づく。すると、目の前のロココは消え、代わりに1匹のキュ

ウコンが現れた。

コトネ「あれがさっきまで話してたキュウコンってことね。」

カ「うん。でもホントにどうしたんだらう?」

タ「確かに、気になるな。」

ヒ「復活、早!?!」

キュウコンの出現に疑問を抱いているところへ、あれだけグレッグルのどくづきを喰らっておきながら立ち上がったタケシに驚くヒカリ。とそこへ、問題のキュウコンがタケシに近づき、頬ずりを始めた。

カズナリ「もしかして、そのキュウコン。タケシさんにゲットしてもらいたいんじゃないんでしょうか?」

マサ「うん、きっとそうだよ。」

タ「えっ、そうなのか? キュウコン。」

タケシがそう言うと、キュウコンはうんと頷く。すると、タケシは無言のまま1つのモンスターボールを取り出し、キュウコンに当てる。キュウコンが入ると、しばらくボールは点滅したがすぐに止んだ。

タ「キュウコン、ゲットだぜ。」

ケンタ「新しい仲間が増えたな。」

サ「やったな、タケシ。」

サトシ達の旅に、また新たな仲間が増えた瞬間だった・・・

続く

ナタネVSベル！ そして新たな仲間・・・（後書き）

タケシ、キュウコンゲット！ 今後、どう活躍していくのだろうか
・

恋する熱血少女！（前書き）

今回の話で、100話目達成！

ここで、新たな争奪戦参加者が出てきたのは単なる偶然・・・

恋する熱血少女！

『ワールドチャンピオンリーグ第1回予選選考会（仮）』、『ワールドチャンピオンフェスティバル第1回予選選考会（仮）』が同時に開かれるシロガネタウンに向けて旅を続けていたサトシ達。現在はチヨウジタウンに到着していた。

コトネ「みんな、ここがチヨウジタウンよ。」

ヒ「へえ、随分静かな町ね。」

カ「久しぶりに来たけど、良いところね。」

サトシ達はそれぞれチヨウジタウンに着いた感想を漏らす。ここ、チヨウジタウンはいかり饅頭で有名な町である。近くにはいかりの湖があり、そこはコイキングがよく釣れる絶好の釣りスポットとしてジヨウトの中でもかなりの観光名所となっている。一見、小さく静かな町であるが、かつてはロケット団が『プロジェクトR』の遂行のために潜伏していた町でもある。

サ「一度、ヤナギさんのところにも顔を見せに行かないとな。」

タ「確かにな。」

サトシ達がこのような会話をしているところへ、

？「うわああああ、止まらへくん！」

タ「な、なんだ？」

大きな叫び声が聞こえたので、サトシ達はその方を向くとサトシ、カスミ、タケシは以前会ったことのある人物が急な下り坂を駆けていくのが見えた。

サ・カ・タ「「「も、モエ（ちゃん）！？」「」」

その人物とは、サトシがジョウトリーグ予選でバトルした炎ポケモン使いのモエだった。

カ「どうして、あんな状況に？」

タ「どうやら、下り坂を自力で止められずにそのまま突っ走っているってところだな。」

デ「そんな悠長な事言ってる場合じゃないよ。」

カズナリ「あのモエって子が向かっている先に大きな岩がありますよ。」

モエの進む先には、大きな岩があった。モエは猛スピードで下り坂を下っているため、自力では止められない。このままいけば、モエが大怪我を負う大惨事になりかねない。

サ「危ない！」

ヒ「ちょっと、サトシ！？」

サトシがモエを助けようと岩に向かって、駆けだした。

モエ「あわわわわわ、もうダメや〜。」

モエは思わず目を瞑ってしまふ。

モエ「ん、あれ？ 痛くない・・・。」

モエは不思議と痛みを感じなかった。しかも、硬い岩にぶつかっただけなのに、受けた感触が柔らかい。モエは恐る恐る目を開けると、そこには自分が好意を寄せる人物が目の前にいた。

モエ「さ、サトシはん!？」

サ「大丈夫か、モエ。」

サトシの登場に驚くモエに、にっこりと笑顔を見せるサトシ。

モエ「(う〜、その笑顔反則や〜)。(サトシはん、どうしてここに〜」

サ「今、俺は仲間と一緒に旅をしていたんだけど、丁度チヨウジタウンに向かったところなんだ。そこへ、偶然モエが大変な目に遭っているのを見つけてとっさに俺が助けにいったわけだ。」

サトシの説明に、

モエ「……………」

サ「ん、モエ?」

急に黙り込んだモエにサトシは首を傾げるが、

モエ「サトシは〜ん。」

モエは急にうつとりして、両手を合わせた。

モエ「うちのピンチに駆けつけてくれるとは、やっぱりサトシはんはうちの運命の王子様や〜。」

サ「ははは、そうか。まあ、無事で何よりだったぜ。」

うつとりするモエにサトシは訳が分からず乾いた笑みを浮かべるも、モエが無事だったことに安心する。

モエ「それにサトシはん。意外と大胆な人やったんやな。」

サ「はっ?」

サトシは訳が分からず、自分たちの状態を見る。モエを助けるあまり気づかなかったのだが、サトシは今、モエを抱きかかえている状態いわゆるお姫様抱っこの状態である。

サ「あっ、ごめん。今降ろすから。」

サトシはモエが迷惑だろうと思いつつ、モエを降ろそうとする。

モエ「いや、もう少しこのままでもいいさせて〜な。」

だが、サトシに好意を寄せるモエにとっては逆にありがたいことだったので、サトシから離れようとしなない。

サ「えっ、でも……。」

サトシが困惑する中、モエはサトシを独占するかのようには振る舞う。だが、それを今までサトシと旅をしていたサトシLOVEズが見過ごすはずもなく、

カ「ちょっと、モエ。あまり調子に乗らないでくれるかしら。」

サトシLOVEズを代表して、カスミはモエを睨み付けながら言う。ハルカ、ヒカリ、アイリス、コトネ、ベルの他のサトシLOVEズの面々もモエを睨み付ける。

モエ「なんや、カスミか。」

彼女たちの視線に居心地の悪さを感じたのか渋々サトシから離れ、そしてカスミ達を睨みつける。

モエ（そうか……。カスミだけじゃなく、あの連中もサトシはんのこと……。）

モエは自分に対して向けられている視線から、カスミの後ろにいるマリナ、リュウカ以外の女性陣がサトシに好意を抱いていることに気づく。完全に蚊帳の外となっているタケシ、デント、マサト、リュウカ、カズナリ、ケンタ、マリナはこの修羅場と化している光景に苦笑を浮かべる。当のサトシはなぜ彼女たちがにらみ合っているの分ならず、首を傾げる。ある意味、凄い（汗） by 天の河

サ「あの、モエ。再会のところ悪いけど、俺手持ちの入れ替えをしにポケモンセンターに行ってもいいか。」

モエ「ああ、別にええで。うちもこれから用事があるし、それにうちも『ワールドチャンピオンリーグ』に出場するんや。」

サ「そつか、じゃあその時までまたな。」

モエ「その時は、リベンジバトルしよな。」

サトシはポケモンセンターに向かうため、その場を離れた。モエはそのサトシの後ろ姿を眺めながら、手を振る。

ケンタ「あっ、俺も手持ちのポケモンの入れ替えにポケモンセンターに行ってくる。」

ケンタもサトシの後ろを追うようにポケモンセンターに向かう。

マリナ「逃げたね、ケンタ……。」

マサ「うん。」

マリナとマサトはケンタのあまりにも拳動不審ぶりに、そう感じた。実際、そのとおりである。

モエ「はあく、サトシはん。後ろ姿も素敵やわあく。」

モエはサトシの後ろ姿を見て顔を両手で押さえながら、ウツトリする。だが、すぐさま表情を強張らせてカスミ達の方を向く。

モエ「それはさておき、カスミ。アンタまだサトシはんのコーチやってたんかいな。」

モエは喧嘩口調でカスミに言う。

カ「あら、悪いかしら。」

カスミも負けじと対抗。

モエ「それにサトシはんも可哀そうな男や。カスミの他にもこないな女共に誑かされてるとは。」

モエの思わず出た一言に、

ハル「な、なんですって。」

ヒ「どついつ意味よ。」

アイ「そうよそうよ。」

コトネ「別にサトシを誑かしているつもりはないわ。」

ベ「勝手なこと言わないで。」

他のサトシLOVEズの面々がムツと来て、モエに対する怒りを露わにする。

モエ「うちはアンタらと違って、サトシはんとの愛の絆があるんや。」

ヒ「愛の絆って何よ。」

モエ「それはな．．。」

「ここから、モエの回想．．．

モエ「やったで。うちのマグマッグがマグカルゴに進化したで。」

サ「やったな、モエ。」

モエ「ホンマや。これもサトシはんのバトルがあつたからや。みんなサトシはんのおかげや。」

サ「俺は何もしてないよ。今までのモエの努力があつたからこそその結果だけ。」

モエ「でも、サトシはんには感謝の気持ちでいっぱい．．。」

モエの言葉を遮るかのようにサトシが後ろから抱き付いてきた。

モエ「さ、サトシはん!？」

サ「他にあるとしたら、俺とモエとの愛かな。」

モエ「サトシはあん／＼／」

サトシとモエはお互いに見つめあふ。そして、徐々に2人の距離が狭まっていき．．．

カッって、こんなシーンなかったわよ！」

ハル「なによこれ！」

ヒ「ていうか、あなたの妄想丸出しじゃない！」

アイ「勝手に話を捏造するなんて、ホント子供ね！」

コトネ「勝手に話を塗り替えないで欲しいってことね！」

ベ「そうそう。」

ヒロイン＋コトネ＋ベルは、妄想に浸って勝手にサトシとの思い出を捏造していたモエに対して声を荒らげる。

モエ「別にええやないか。それにサトシはんとこのバトルの後にマグマッグが進化したんは、ホンマの話なんやから。」

モエは自分だけの世界を邪魔されたことに腹を立てる。それは

それで問題があると思うが．．． b y ・ 天の河

モエ「それにそのミニスカ女！」

モエはヒカリの方を向く。

ヒ「ヒ〜カ〜リ〜で〜すう。何よ一体。」

ヒカリは『ミニスカ女』といわれた事にさらにモエに対する怒りを膨らませる。

モエ「なんやねん、その異常に短いやつ。それでサトシはんを誘惑しようって根端かいな。そんなんやつたら、逆にサトシはんが引くで。」

ヒ「な、なんですって!」

ヒカリの怒りモードさらに激化（爆）

モエ「それにその色黒女も、今はもう流行らへんのにヤマンバメイクか。」

今度はアイリスに暴言を吐く。

アイ「これは生まれつきよ!」

アイリスは『色黒女』と言われてさらにムツとする。さらにモエは、ハルカ、ベル、コトネに対しても暴言を吐き、さらに修羅場と化してしまった。

一方、その様子を伺っていた面々は、

カズナリ「あれ止めなくていいんですか？」

マリナ「うーん、ここは同じ女の子のわたしが止めに入ってもいいんだけど……。」

タ・デ・カズナリ「……だけど？」

マリナ「あんまり、気が進まないわね。正直、物凄く怖いし。」

タ・デ・カズナリ「……。。。。。」

マリナの発言にタケシ、デント、カズナリは言葉を失った。ちなみにマサトは、あまりの恐怖心から念仏のようにぶつぶつ言いながらお祓いのような行為をしていた。それを心配するリュウカの姿も見られたとか。

モエ「はあはあ、今回はこれくらいにしといたる。でも、サトシはんはうちのものや。」

カ「それはこっちのセリフよ。」

ハル「カスミ、どさくさに紛れて抜け駆けしないで。」

ヒ「サトシはあなたみたいなのに、ぜえええつたいに渡さないんだから。」

モエの宣戦布告に、それぞれ対抗するサトシLOVEズ。

モエ「あっ、そうや。いつつもヌルイ水ポケモンばかり使ってるカスミにこれ渡しといたる。」

カ「な、なによ。」

モエはカスミに一枚のポスターを渡した。それにはこう書かれていた。

『いかりのみずうみにて、ポケモン釣り大会開催!』

カ「つ、釣り大会!?!」

カスミはいかりのみずうみで釣り大会があることに驚く。

モエ「炎ポケモン使いのうちにとっては無縁の話や。アンタみたいなサトシはんに付き纏っているヌルイ奴にはお似合いや。」

カ「一言余計よ。まあ、御礼だけは言っておくわ。」

モエ「もう少し素直にいったらどうや。」どっちが!?

モエは皮肉たっぷりそのまま、カスミ達と別れた。

ハル「カスミ。やっぱり、釣り大会出るの?」

カ「当然よ。水ポケモンマスターを目指すあたしにとっては、仲間を増やすのには絶好の機会よ。」

カスミはいかりのみずうみでさらなる水ポケモンを求めての参加だ。ここでいかりのみずうみにはコイキングとギャラドスしかないのではという疑問を持たれた読者もいらっしやるとは思うが、その真相はまた次回にて。

アイ「あたしも出ようかな。確かいかりのみずうみにはギャラドスに進化するコイキングがいるって聞いたわ。あたし、コイキングが欲しい。」

カ「あたしも参加を薦めるわ。ドラゴンポケモンマスターを目指すんだったら、ギャラドスは欠かせないわよ。」

カスミの言うとおり、コイキングから進化したギャラドスはドラゴンマスター・ワタル、フスベジムのジムリーダー・イブキが手持ちとして持っているほど、ドラゴンポケモン使いのトレーナーにとっては必須となっているポケモンである。そういったこともあって、アイリスも参加意欲を示した。ちなみにワタルのギャラドスはいかりのみずうみでゲットした色違いの赤いギャラドスである。

ヒ「それじゃあ、アタシも参加しようかな。」

ハル「わたしも出たいかも。」

コトネ「それじゃあ、みんなで出るってのはどう?」

ベ「それ賛成。」

カ「それじゃあ、タケシやサトシ達にも知らせておかないとね。」

カスミ達は近くで様子をうかがっていたタケシ達、ポケモンセン

ターに戻るとサトシとケンタに釣り大会のことを話し、カズナリ、マサト、リュウカ以外の3人の参加を確認した。そして、翌日のいかりのみずうみにて開催される釣り大会を待ち望むのだった・・・

続いて後書きショー

恋する熱血少女！（後書き）

モエ「ちよつと、作者はん！」

天「ん、なんだ？」

モエ「なんだ？」やあらへんわ。ウチの扱いヒドないか？」

天「だつて仕方ないだろ。お前なんか、本家でも2回しかメインの話がなかったんだから……。」

モエ「それにしても、あれはないやろ。もっとウチとサトシはんの絡みを作つてもよかつたんちゃう？ ウチがこの記念すべき100話目に登場したのは何かの縁やと思うし。」

天「えー、それは単なる偶然だと思うぞ。」

モエ「ウチはそうは思わへんな。それとあんさん、ウチのセリフなんだかぎこちなかつたやないか。」

天「それも仕方ないだろ。俺は生まれも育ちも山口県だし。」 実際、関西弁がここまで難しいものだと思ったというのは別の話。

モエ「まあ、ええわ。最後に作者はんにお問い合わせ。もっとウチとサトシはんの絡みを増やしてーな。」

天「まあ、考えておくよ。それでは最後になりましたが次回もお楽しみに！」

モエ「うちからも、次回もポケモンゲットやで。」

いかりのみずうみ釣り大会！（前書き）

サトシ達がいかりのみずうみでの釣り大会に参加する。

今回は、カスミとデントがほとんどメインです。さらに言えば、作者のご都合主義も入れ込んでるので注意が必要です。 作

いかりのみずうみ釣り大会！

チヨウジタウンにて、ほのおタイプの使い手の少女・モエと再会し、そんなモエとカスミ達は凄まじいサトシ争奪戦を繰り広げた。分かれ間にモエから、いかりのみずうみでの釣り大会のことを聞いた面々はその翌日、早速いかりのみずうみへと歩を進めた。そして……

サ「ここも久しぶりだな。」

カ「ここ、結構静かなところだったけど、今はだいぶにぎやかになつてるわね。」

コトネ「このいかりのみずうみは釣り大会が行われるまでは静かな湖だったの。今では釣り大会のおかげでにぎやかになつてるとね。」

コトネはサトシ達に丁寧に説明する。いかりのみずうみはコイキングとギャラドスが生息する静かな湖であった。それが少し前から開催されるようになった釣り大会で多くの釣り人達で賑わうようになった。賑わいを見せると同時にマナーの悪い者達が捨てるゴミ問題も深刻となっていたがチヨウジタウン警察と地元ボランティア団体の協力もあってかなり改善されてきている。

タ「しかし、ここにロケット団のアジトがあったのが、嘘みたいだな。」

サ「確かにな。そういえばここで初めてワタルさんに出会ったんだっけ。」

前回も話した通り、ここいかりのみずうみはかつてシラヌイ博士がプロジェクトリーダーを務めていた『プロジェクトR』の拠点アシトがあつた場所でもある。その『プロジェクトR』はサトシ達とカントーとジヨウトのチャンピオンマスターでポケモンGメンの1人でもあるワタルによって阻止され、実行部隊隊長のタツミとその他数名の団員が『ポケモン保護法違反』で逮捕される結果となつた。

マリナ「えっ、ここにワタルさんも来たの!?!」

ワタルという単語に素早く反応したマリナ。

サ「えっ、そうだけど……。」

サトシが言うと、マリナは、

マリナ「ちょっと、サトシ達だけずるーい。わたしだってまだ一度も会ってないのに!」

サ「ちょっと、やめろ……。」

ワタルLOVEのハートに火が付いたマリナがサトシにチークスオーパーをかける。

ケンタ「お、おい、マリナ。落ち着けて。」

慌ててケンタがマリナを止めに入る。

ベ「あーん、マリナちゃんだけ楽しむなんてずるーい。わたしもやる!」

今の光景をどう解釈したら楽しいと思えるのかは疑問だが、ベルもケンタを跳ね除けてサトシの首に掴みかかる。

アイ「ちよつと、ベル。あなたまで加わらないでよ！」

ヒ「サトシのことも考えて！」

サトシがマリナとベルから解放されるのに相当の時間がかかった。当のサトシは、首を掴まれてぐったりしている。なにはともあれ、釣り大会の参加手続きをするために受付のテントへと向かう一行。そして参加手続きを済ませ、カスミとテント以外はレンタルの釣竿を渡された。

カ「さあ、優勝目指して釣るわよ。」

ハル「物凄い気合かも。」

ヒ「あたし達も負けてられないわ。」

釣り大会ということもあり、カスミのテンションは最高潮。そしてもう一人、釣りでテンションが上がる人物がいた。

デ「イツツ・フィッシング・タアアアイム！」

ケンタ「デント！？」

突然叫びだしたデントに驚くケンタ。

アイ「あー、またデントの面倒臭い性格が出てきた・・・。」

デントのテンションに呆れ気味のアイリス。

デ「竿のしなり具合、そして洗礼された光り輝く釣り糸。今日もグツト・テイストなコンディションだ。」

デントは竿と釣り糸を見て、コンディションを確認する。

ハル「釣れるかなあ〜。」

ヒ「あー、なんだか緊張してきた。」

釣りに不慣れなハルカとヒカリは不安を感じる。

カ「大丈夫よ、何も考えずに竿を構えていればポケモン達も自然と寄ってくるわ。」

カスミがハルカとヒカリの不安を取り除こうと試みる。

デ「釣りは奥が深いんだ。何の戦略も立てない素人の考えは、バツト・テイストを生み出すことになるんだよ。」

デントの『素人』という単語に、

カ「誰が素人ですって!」

カスミがムツと来た。

カ「いいわ、デント。あなたと勝負よ。」

デ「いいだろう。この釣り大会の優勝をかけて、イツツ・フィッシング・タイムだ！」

カスミとデントによる釣り対決の火蓋が切って落とされた。

ハル・ヒ「・・・あ、あのわたし（あたし）たちは（汗）」

完全に忘れ去られた2人は、ポカンとしていた。

アイ「デントもだけど、カスミも意外に面倒臭い性格だったんだ・・・」

アイリスはただ苦笑を浮かべた。

サ「それはそうと、ベルはどうしたんだ？」

マリナ「あっ、そういえばいないわね。」

サトシはベルがいないことに気づく。すると、

ベ「わああああ、どいてどいて！」

突然ベルが叫びながらサトシ達の方に突進してきた。この後に待ち受ける展開といえば、

サ「うわあ！」

ベルはサトシとぶつかり、当のサトシは湖の中へとダイブした。

タ「さ、サトシ。大丈夫か!？」

タケシとテントが慌ててサトシを湖から引き揚げる。そしてサトシは上半身裸の状態でたき火をしながら服を乾かす。

大会関係者の許可を得て、たき火を行っています。公共の場でのたき火は絶対にしないでください。

ベ「サトシ君、ホントにごめん。」

サ「いって、あまり気にするな。」

サトシに必死で謝るベル。ある意味、これがサトベルの基本形かもしれない。サトシの服が丁度乾いた頃、釣り大会はようやく開幕を迎えた。

司会「皆様、おまたせしました。いかりのみずうみ恒例行事となりつつある釣り大会の開幕を迎えました。ここいかりのみずうみには名物コイキングはもちろん、多種多様の水ポケモン達が生息しています。これを捕まえるも、より大物を狙って逃がすのも参加者の自由。ぜひ、この釣り大会で自分好みの水ポケモンを釣ってみてください。さて、この釣り大会には素敵な優勝賞品があります。その優勝賞品とは、『進化の石セット』と伝説のポケモンや化石のポケモンをも釣り上げることが出来ると言われる『おそろしくすごいつりざお』です。」

優勝賞品が発表されると、所々からどよめきと歓声が挙がった。

カ「嘘でしょ!? 世界じゅう渡り歩いても人生に一度お目にかかれるかどうか分からない貴重なあのつりざおが!？」

デ「尚更、君に負けるわけにはいかないね。」

カ「それはこっちのセリフよ。デント。」

優勝賞品の『おそろしくすごいつりざお』に目を光らせたカスミとデントは、再び火花を散らせる。

サ「あの、俺達も参加するんだけど。」

ケンタ「つりざおの凄さはイマイチよく分かんないけど、進化の石セツトも捨てがたいな。」

こうして各々、釣り大会の開幕とともに一斉に釣りを始めた。

ここで、釣り大会の概要について説明。

- 1・大会はいかりのみずうみ全域にて行われる。
- 2・大会前にあらかじめ手持ちから1体ポケモンバトル用のポケモンを選んでおき、そのポケモンを登録しておく。
- 3・釣り上げたポケモンは、事前に登録しておいたポケモンでポケモンバトルを行い、その過程でゲットする。
- 4・ゲットの為に使うボールには、事前に渡されるルアーボール20個が使用できる。
- 5・登録以外のポケモンを使ったり、渡されたルアーボール以外のボールでゲットした場合、強制的に失格となる。また、とんぼがえりやボールチェンジなどの強制的に他のポケモンと交代する技を使

用した場合にも、失格処分とする。

6・捕まえたポケモンは、ただ単に大きさや進化系のポケモンだからということでは評価されるのではなく、さまざまな特徴を踏まえたうえで総合的に評価される。

7・尚、ゲットしたポケモンはそのまま自分のポケモンにすることも可能である。

ベ「さあ、珍しいポケモンたくさん釣るわ。」

ベルは十分な気合の入れようだ。

ベ「行くわよ、それ！」

ベルは思いつきり竿を水の中へ投げ入れた。だが、

バツシャアアアアン！

ベ「あれ？ 釣りの始めって、こんな大きな音したっけ？」

突然発生した大きな音に疑問を抱くベル。

ヒ「あの、ベル……。」「

ケンタ「ベルが竿を投げた方向見てみる・・・。」

ベ「えっ!?!? だってわたし普通に・・・ってサトシ君!?!?」

なんと、ベルの釣り糸に引っかかってそのままサトシが本日2度目の水中ダイビングをするはめになった。当のサトシは、水に飛び込んだ衝撃で辛うじて意識を保っているという状態である。タケシとケンタが慌ててサトシを救助し、サトシは何とか一命を取り留めた。

ピ「ピカピ。」

サ「ああサンキュー、ピカチュウ。」

超人的な速さで復活したサトシが、ピカチュウからタオルを受け取る。

ベ「サトシ君、本当にごめん!」

2度目ということもあって、土下座で謝るベル。

アイ「もっと周りに気を遣ってよ。ベルもホント子供なんだから。」

ベ「うっ!?!?」

アイリスに言われ、言い返せずにさらに落ち込むベル。

サ「まあ、アイリス。それくらいにしておいてやれよ。ベルだって、周りが見えなくなるほど楽しんでるみたいだしさ。それに、もっと良い気分で楽しみたいだろ。」

アイ「さ、サトシがそこまで言うんなら。」

ベ「ありがとう、そしてホントにごめんね。」

アイリスはサトシに促され渋々ベルを叱るのを止める。ベルはサトシに申し訳なさを感じつつも励まされたことにパアアと笑顔を咲かせる。一方、優勝を賭けて火花を散らしているカスミとデントはというと、

カ「……………」

デ「」

カスミは先程のデントの「素人」発言にピリツとしており、デントは優雅な表情ではいるがそれでも凄味は感じられる雰囲気で釣り糸を垂らしている。

マリナ「あの2人から、なんだか凄い雰囲気を感じるわ……………」

カズナリ「下手に話しかけない方が良くも……………」

カスミとデントから出る異様なオーラに全員圧倒されていた。すると、

カ「!?!?」

カスミの釣竿がかなり引いている。

カ「かなりの大物だわ。世界の美少女、お転婆人魚のカスミちゃん

がこれを逃す手はないわ。」

世界の美少女と釣りが関係あるのかはともかく、カスミが引き当てたのはかなりの大物のようである。カスミは両手で竿をしっかりと持つと慎重ではあるものの、スピーディーかつ正確にリールを巻いていく。そして、

カ「いつけえええ！」

最後の仕上げでカスミは思いっきり竿を振り上げた。カスミが釣り上げたポケモンは通常より一回り大きいアズマオウだった。

マサ「アズマオウだ！」

リュウカ「見てください！ あのアズマオウ、色違いですよ。」

リュウカの指摘通り、カスミが釣り上げたアズマオウは通常は赤い部分がオレンジ色になっている色違いだった。通常より一回り大きいかつ色違いとなると、かなりの高得点が期待できる。

カ「これをゲットすれば優勝はあたしのもの。行くわよ、マアアア
イ、ステディー！」

カスミがバトル用として選んだポケモン、

スターミー「フウ！」

カスミの主力・スターミーだった。

カ「行くわよ、スターミー。高速スピーン！」

スターミー「フウ！」

前ポケモンの中でもトップクラスの素早さを誇るスターミーが先手を取った。高速スピンドアズマオウに攻撃を仕掛ける。するとアズマオウはかわそうとはせずに、角をスターミーの方に向けながら突撃してきた。そう、アズマオウはメガホーンを繰り返している。さらに言えば、かわさずに真正面から突撃してきたことから勇敢な性格といったところか。

スターミー「フウウ！」

スターミーは凄まじいパワーに弾き飛ばされてしまった。

サ「なんてパワーなんだ。」

タ「あのアズマオウ、かなりのレベルだぞ。」

アズマオウのメガホーンを見て、サトシとタケシはこう評価する。

カ「なかなかやるわね、あのアズマオウ。ますます欲しくなってきた。ちやっただ。」

カスミはアズマオウゲットに更なる闘志を燃やす。すると今度はアズマオウがスターミーに向けて放水する。

スターミー「フウ！」

カ「ここから反撃よ。スターミー！」

アズマオウの攻撃は水タイプのスターミーにとって、あまりダメージはなかった。その後、スターミーはすぐに体勢を立て直し、アズマオウとの一進一退の攻防を繰り返す。その結果、アズマオウの体力を徐々に減らすことが出来たのだが……

スターミー「フウ……。」

アズマオウよりもスターミーの体力の消耗の方が一段と激しかった。

マサ「あんなに体力を消耗するなんて……。」

ヒ「何だかおかしいわ……。」

マサトとヒカリはスターミーのあまりの体力の消耗に疑問を抱く。それもそうだ。カスミはジムリーダーであり、ポケモンの体力に配慮した粘りのバトル戦法を熟知しているはずである。

タ「そうか、さっきのアズマオウの攻撃はねっとうだったんだ。」

ケンタ「ねっとう?」

アズマオウが放水したのは、みずてっぼうではなくねっとうだった。ねっとうは、相手にダメージを与えると同時に時々やけど状態にさせるという水タイプの技には変わった効果を持っている。スターミーをよく見ると、コアの下部にくつきりとやけどの跡がある。この影響でスターミーは時間の経過とともに徐々に体力を消耗していったのである。

カ「これはまずいことになったわ。」

スターミー「フウウウ！」

スターミーのハイドロポンプが真上のアズマオウ目掛けて放たれた。それが渦によって怯んだアズマオウに直撃、アズマオウは空中に跳ね上げられた。

カ「いつけえええ、ルアーボール！」

カスミは勢いよくアズマオウにルアーボールを投げた。アズマオウに当たり、中にアズマオウが入ると、水面で点滅を始めた。しばしの点滅の後、それは止んだ。

カ「やったわ、アズマオウゲットよ！」

ピ「ピ、ピカチュウ。」

カスミがアズマオウの入ったボールを網で回収し、アズマオウをゲットした喜びを体いっばいに表現する。ピカチュウも思わず、「ゲットだぜ！」とカスミにつられてしまうほどの喜びが感じられる。

サ「やったな、カスミ。」

ハル「色違いのアズマオウをゲットするなんて、凄いかも。」

カ「みんな、ありがとう。」

カスミを祝福する面々に、カスミ自身笑顔で返す。そんな中、アズマオウとの死闘を終えたスターミーがカスミのもとへと近づいてきた。

カ「ありがとう、スターミー。ゆっくり休んで。」

カスミはスターミーを労うと、スターミーをボールに戻した。カスミはスターミーの残りの体力のことも考えてここでリタイアし、結果を待つことにした。カスミが色違いのレア物アズマオウをゲットしたその頃、デントの竿も引いていた。

デ「イツツ・フィッシング・タアアアイム！」

竿の引きを確認するとデントは竿を両手に構え、

デ「まずは、じっくりと様子を見る。」

竿の引く方向を冷静に確認、

デ「そしてしなやかな竿の動きとともにリールを巻き……。」

竿の動きに合わせてゆっくりとリールを巻き、

デ「仕上げにベストなマッチングのテイストになったところで、一気にフィニッシュー！」

そして、釣り糸が切れない程度にスピーディにリールを巻き上げるデント。デントが竿をあげると、そして1体のポケモンが放り出された。

又オー「又オオオオ！」

サ「又オーだ！」

コトネ「見て、あのヌオーも色違いよ。」

ケンタ「カスミに続いて、デントも色違いを釣り上げるとは。」

デントも色違いのポケモンを釣り上げたことに皆驚愕した。デントが釣り上げたのはサイズは通常とほぼ変わりはないものの、尾や背中の子いヒレが水色の、つまり完全な水色になっているヌオーだった。

デ「色違いのヌオー。洗礼されたボディ、見ただけでも分かるレベルの高さ、なかなかのマリアージュを醸し出しているね。」

こんな状況下でも、しっかりポケモンソムリエとしての職務を全うするデント。

デ「是非、テイステイングさせてもらおうよ。ヤナップ、マイ・ビンテージ！」

ヤナップ「ヤナップ！」

デントは釣り大会のバトル用のポケモンとして登録しておいたヤナップを繰り出した。

デ「ファースト・テイステイング！ ヤナップ、タネマシンガン。」

ヤナップ「ヤナアアア！」

ヤナップがタネマシンガンでヌオーに先制攻撃を仕掛ける。

ヌオー「ヌオッ！」

だが、又オーは躊躇なく尻尾でタネマシンガンを弾き返す。

又オー「又ウウオオオオ！」

マサ「又オーのマッドショットだ。」

又オーがマッドショットで反撃。

ヤナツプ「ヤナア！」

又オーのマッドショットはヤナツプに直撃した。又オーの攻撃はマッドショットだけに終わらなかった。

又オー「又オツ！」

ヤナツプ「ヤナツ！？」

間髪入れずに又オーはヤナツプの目の前に素早く移動する。ヤナツプは思わず怯んでしまう。

又オー「又ウウオオオオウ！」

ヤナツプ「ヤナア！」

又オーのかわらわりが炸裂。至近距離での攻撃にヤナツプは避けられずに水面へと叩きつけられた。だがヤナツプは素早く体勢を立て直し、近くに浮いていた葉っぱに乗った。

デ「色だけでなく防御にも使える尻尾、そしてさっきの素早い動き

からのかわらわり。見事に洗礼されたテイストだ。」

見た目だけでなくかなりの強さを持つヌオーに思わず感心するデント。

デ「これは確実にゲットしないとね。ヤナツプ、ここから反撃だよ。」

ヤナツプ「ヤナアプ！」

ヤナツプは再び戦闘態勢に入る。だが、ヌオーは意外な技を繰り出してきた。

ヌオー「ヌウウウオオオオ！」

ハル「れ、れいとうビーム!？」

ヌオーがヤナツプに向けて放った技、それはれいとうビームだった。

ヤナツプ「ナアプ！」

ヤナツプは直前に躲して辛うじて直撃を免れたが、足に命中し、ヤナツプの足は氷漬けになった。

ヌオー「ヌオオオオ！」

ヌオーはヤナツプにトドメの一撃を刺そうと、素早くヤナツプに飛び掛かる。

デ（又オーがれいとうビームを持っていたこと、それでヤナップの足が凍らされたのは計算外だ。一体どうすれば……。）

絶体絶命のデント。

デ（ん？ そうだ。一か八かの賭けだけど、今はこれしかない！）

デントは何かを閃き、早速実行に移す。

又オー「又オオオオ！」

一方、又オーとヤナップとの間の距離は徐々に縮まっていく。そして、又オーとヤナップとの間が5メートル程になったその時だった。

デ「今だ、ヤナップ。又オーの背後に飛び乗るんだ。」

デントはヤナップに又オーの背後に回り、背中に飛び乗るよう指示した。

ヤナップ「ヤナ！」

又オー「又オオオオ！」

ヤナップは凍った片足を必死に動かしながらジャンプし、回転しながら又オーの背中に飛び乗った。サトシ達は、このヤナップのバトルスタイルに見覚えがあった。

ヒ「これって、あたしがコンテストに使っているのと似てる。」

デ「似てるのも当然だよ。ヒカリのコンテストを参考にした作戦なんだからね。」

ヒカリの疑問に、デントが笑顔で答えを返す。

デ「ヤナップ、かみつく。」

デントは更に、ヤナップにかみつくを指示した。

ヤナップ「ヤナ！」

又オー「又オ……。」

ヤナップに噛み付かれた又オーは背中中のヤナップを振り落とそうと必死に抵抗する。だが、ヤナップも負けじと粘り強く又オーの背中に張り付く。

デ「続けて、ソーラービーム。」

デントはまた更に、ヤナップにソーラービームを指示した。ちなみに現在のいかりのみずうみの天候は、強い日差しが燦々と刺す、ソーラービームの使用には最高の天候である。ちなみに、天候が強い日差し状態（ポケモンの技なら、『にほんばれ』）でソーラービームを使うと、相手を攻撃するのに溜めの1ターン、発射の2ターンと発射までに時間がかかっていたのが、溜めの1ターンを省いてすぐに発射できるようになる。さらに言えば、よりよくその特性を持つポケモンが使えば、素早く相手に攻撃できる確率が格段にあるという優れた効果を持っている。

ヤナップ「ヤアアアアアアア！」

又オー「又オオオオ！」

ヤナップは片手でソーラービームを発射した。至近距離での攻撃は確実に又オーに直撃した。みず・じめんタイプの又オーには効果抜群の攻撃である。

又オー「又オ．．．。」

又オーはそのまま水面へと叩きつけられた。そして、

デ「さあ、仕上げのシーズニングだ。マイ・ルアーボール！」

デントは又オー目がけてルアーボールを投げた。ルアーボールはしばしの点滅の後、ピタリと動かなくなった。

デ「又オー、ゲットでグッド・テイスト！」

ヤナップ「ヤナア。」

デントは又オーの入ったボールを網で回収すると、自らの決めポーズをとった。バトル直後のヤナップも片手を突き上げ、それに呼応する。

アイ「やったね、デント。」

サ「カスミに続いて、デントまで色違いのポケモンをゲットするなんて夢みたいだぜ。」

デ「ありがとう、サトシ、アイリス。」

サトシとアイリスの祝福に対し、丁寧に返事を返すデント。デントはその後、片足を氷漬けにされたヤナツプの残り体力も考えて、ここでリタイアした。その後釣り大会は、順調に釣り上げる者、そうでない者、とんでもない掘り出し物を釣り上げてしまう者、さらにはサトシとベルの釣り糸が絡まり（釣り用語でいう『お祭り』状態）、サトシが3度目の水中ダイビングを見せるなどいるんな意味で盛り上がりを見せた。そして、大会は終了の時刻を迎え、結果発表となった。

司会「このいかりのみずうみを舞台にした釣り大会も、優勝者の発表を残すのみとなりました。さて、この優勝賞品の進化の石セット、そして『おそろしくすごいつりざお』を手に入れる優勝者は……。」

参加者全員、固唾を飲んで発表を待つ……

司会「カスミさんとデントさんの御二方です。」

カ「えっ!?!」

デ「僕たちが!?!」

カスミとデントが自分たちが優勝したことに驚く。一応、優勝を狙ったの参加だったが、まさか現実のものとなるとは思ってもみなかったようだ。

ヒ「2人ともおめでとう。」

ハル「同時優勝なんて、すごいかも。」

ヒカリとハルカが同時優勝の2人を祝福する。

カ・デ「あ、ありがとう。」

カスミとデントは、若干照れ臭そうにしながらも笑顔でヒカリとハルカに返事を返す。

司会「さあ、お二方とも壇上へ。」

カ・デ「はい。」

司会に促され、カスミとデントは優勝賞品の置かれた壇上へと向かう。

司会「それでは優勝メダルの授与です。」

カスミとデントは2人のアシスタントに首に優勝メダルを掛けられると、お互いに顔を合わせながら優勝の喜びに浸る。

司会「優勝賞品なんですが、進化の石セットと『おそろしくすごいつりざお』それぞれ1つしかないのですが……。」

カ「あつ、どうしよう……。」

司会から優勝賞品がそれぞれ1つずつしかないと聞かされ、困惑するカスミ。すると、

デ「じゃあ、僕が進化の石セットを貰いますから、つりざおは彼女に差し上げて下さい。」

デントは司会に思わぬ提案をする。

カ「えっ、デントもこのつりざおが欲しかったんじゃ……。」「

デ「そうなんだけど、実は進化の石セットの方が欲しかったんだ。それに、レディーファーストということだ。」

カ「そう、ありがとう。デント。」

デントの紳士的な振る舞いに思わずお礼を言うカスミ。

司会「御二方、それでいいですね。」

カ・デ「はい。」「」

司会「それでは皆さん。暖かい譲り合いの精神も見せた優勝者に拍手を。」

会場はここ一番の盛り上がりを見せ、終了した。

ヒ「さすがはデントね。」

サ「ああ、仲間に対する思いやりは良いもんだな。」

アイ「ホント、サトシは子供ね。」

サ「えっ、なにが?」

デントの紳士的な振る舞いを仲間に対する思いやりとしか感じて

いないサトシにお馴染みのセリフを言うアイリス。 にはともあれ、
釣り大会も終わり、いかりのみずうみを後にし、一行は次の目的地
へと向かった。

続いて後書きショー

いかりのみずうみ釣り大会！（後書き）

天「みんなお疲れ様〜。」

ヒ「ふう〜、あたし1匹も釣れなかったわ。」

ハル「わたしもかも〜。」

コトネ「カスミンとデントが同時に優勝だなんて驚いたわ。」

カ「最初から優勝するつもりで挑んだけど、いざ現実のものとなると緊張しちゃった。」

デ「それは僕もだよ。」

ヒ「それにしても、2人とも色違いポケモンで優勝するなんて考えたわね。」

天「まあ、それは今回のご都合主義の一環だ。」

ハル「なによそれ。」

天「それはそうと、改めてカスミンとデント、優勝おめでとう。」

ヒ・ハル・コトネ「「あたし（わたし）たちからも。」」

カ・デ「「ありがとう、みんなそして作者。」」

天「（俺はおまけかよ。）それじゃあ、今回はこれにて失礼いたし

「ます。」

いざ、竜の聖地へ・・・(前書き)

序盤から、グダグダ展開です(笑)

今回は、サトアイ要素がメインです。

いざ、竜の聖地へ．．．

いかりのみずうみの釣り大会を終え、サトシ達一行は次の目的地をフスベシティと決め、歩を進めていた。フスベシティはジョウト地方北東部に位置する都市で、そこにあるポケモンジムはドラゴンポケモンを専門に扱ったジム、さらにはフスベシティの北には竜の穴と呼ばれるドラゴンポケモンには神聖な洞窟があったりと、ジョウトの竜の聖地として有名である。尚、このフスベシティに向かうにはワカバタウンから北上するルートその他、チョウジタウンから出発して氷の抜け道という洞窟を通っていくルートがある。サトシ達一行は氷の抜け道ルートでフスベシティに向かっている。

サトシ達「．．．．．」

ただ、サトシ達は現在、氷の抜け道内で立ち往生（正確にはカタツムリのスピードで進んでいる）している。ここは氷の抜け道。辺り一面、氷が張り巡られた酷寒の洞窟である。となれば、

アイ「うう、さむいよお。」

キバゴ「キバア．．．。」

歩を進めてはいるものの、肌を感じる寒気のせいでかなり動きが鈍い。それをアイリスの髪の中に潜っているキバゴが心配そうに見つめる。

デ「だ、大丈夫かい？ アイリス。」

サ「やっぱり、一回ワカバタウンに戻って遠回りした方が良くないんじ

や．．．。」

サトシとテントがアイリスに心配そうに声を掛ける。だが、

アイ「だめよ．．．。ここを抜ければアタシが行きたかった竜の聖地・フスベシテイなのよ。やっとここまで来たのに引き返すなんていやよ．．．。ハアハア。」

アイリスは頑なにサトシの提案を拒む。だが、その一言一言にはいつものアグレッシブさは微塵も感じられず寧ろ弱弱しい。ついでに言えば、吐く息も少々荒い。

ヒ「アイリス．．．。全然大じよばないよ（汗）」

アイリスのドラゴンマスターを指す想いなしは執念深さを感じながらも、アイリスを心配して声を掛けるヒカリ。

アイ「アイリス、こんなところでへこたれちゃあだめよ。もうすぐ竜の聖地にたどり着く。それまでの辛抱よ．．．。」

アイリスは弱弱しくも自分に言い聞かせるが、竜の聖地に行く前に別の意味での聖地に向かおうとしているくらい危険な状態に陥っている。心なしか、アイリスの頭の周りには数体の天使みたいなのが飛んでいるようにも見える。

マサ「ねえ、あれどうにかしないとまずいよ。」

誰もが見てもアイリスが相当まずいというのは分かる。一応氷の抜け道にもポケモンセンターはあるが、それまで間に合いそうにもなさそうである。さすがに1人の少女を酷寒の洞窟に置いていくわ

けにはいかない。

サ「はぁ．．．。仕方ないなあ．．．。」

サトシがため息をつきながら、アイリスに近づく。

サ「アイリス。」

アイ「な、なによ。サト．．．。」

アイリスがサトシと言いかけたその時だった。なんとサトシは自分が着ていた上着を脱いでアイリスに掛けたのだ。

サトシ以外全員「えっ!?!」

これにはサトシ以外全員ポカンとする。

アイ「サトシ?」

サ「あまり暖かくはならないと思うけど、ないよりはましだろ?」

ポカンとするアイリスにサトシが笑顔で答える。

アイ「でも、それじゃサトシが．．．。」

アイリスが心配そうにサトシを見つめるが、

サ「俺は平気だぜ。だって『子供は風の子』って言うだろ。」

サトシはこれまでにない笑顔をアイリスに向ける。サトシの満面

のえがおを間近で見たアイリスは、

アイ（／／／／／／／／）

言葉にならないくらいに頬を赤らめる。

サ「それに仲間が困っている時に助けるのが普通だしな。」

またまたサトシの満面の笑顔。これには遠くで見ていた他のサトシLOVEズの面々も、

（なんて、カッコいいこと言うの／／／／／）

サトシの優しさにカッコよさを感じ頬を赤らめる。これにサトシ、サトシLOVEズ以外の面々は苦笑を浮かべた。

アイ「あ、ありがとう・・・。」

サ「例には及ばないぜ。」

とりあえずサトシに礼を言うアイリス。その後再び一行は歩みを進めた。

アイ「〜」

自らが好意を抱いているサトシの優しさに触れ、心も身体も暖かくなり、先程まで感じていた寒さが吹っ飛んだアイリス。

ハル（う〜、アイリス・・・。）

ヒ（うらやましいわ．．。）」

カ（出来れば変わってよぉ〜。）」

コトネ（アイリンだけずるいってことね〜。）」

ベル（わたしだって、サトシ君に暖かくしてもらいた〜い。）」

上機嫌になったアイリスに対し、羨ましさを感じる他のサトシLOVEズ。サトシ、サトシLOVEズ以外の面々はさらに苦笑を浮かべた。こうして少々時間はかかったものの、サトシ達一行は氷の抜け道を無事抜けたのだった。

アイ「サトシ、さっきはありがとう。何かお礼がしたいなあ。」

アイリスはサトシに借りた上着を返し、礼を言う。

サ「いって、俺はアイリスが良かったんならそれで．．。」

サトシが言い終わる前にアイリスはサトシの右横に移動し、そして．．．

チュッ

サトシの右頬に触れるだけのキスをした。この光景を見た他のサトシLOVEズの面々は、

べ「アイリスちゃん、ちゃんと説明しなさい！」

逃げるように去っていったアイリスを必死に追いかけるカスミ、ハルカ、ヒカリ、コトネ、ベル。

サ「．．．なあ、あれはどういうことになってるんだ？」

事の発端（というかアイリスによって引き起こされたのだが）である本人は、核兵器並みに鈍感なため、当然彼女たちの心境に気づくことはなかった。

デ「あ、あまり深く考えない方がいいんじゃない．．．？」

カズナリ「というか早く追いかけてみましょうよ。もう見えなくなりそうですよ。」

ケンタ・マリナ（サトシ．．．）

サトシはアイリスにキスされた右の頬を摩りながら、他の残された面々とともにサトシLOVEズを追いかけた。ケンタとマリナは、サトシの鈍感ぶりがここまで群を抜いていたことに驚き苦笑を浮かべるしかなかった．．．

続いて後書きシヨ

いざ、竜の聖地へ・・・（後書き）

アイ「作者、ありがとう。サトアイを書いてくれて。」

天「おい、あんまり褒めるなよ。俺はあくまでサトヒ力派なんだから。」

アイ「ところでどうして急にサトアイを書こうと思ったの？」

天「このジョウト編で、サトシ×歴代ヒロインのCPを出してみようと思ったのがきっかけ。」

アイ「へえ、それじゃあ今後もサトアイを書いてね。」

天「気が向いたらな。それとキバゴには新しい技を覚えてもらおうと思っている。」

アイ「新しい技？」

キバゴ「キバア？」

天「まあ、それは今後の展開を見てくれれば分かる。それじゃあ、最後の締め、よろしく。」

アイ「分かったわ。次回もポケモンゲットでドドンガドーンよ。」

アイリス、至福の時！？（前書き）

フスベシテイに到着した、サトシ達。今回はどんな波乱（？）が彼らを待ち受けているのだろうか・・・

今回も、gggg展開です。

アイリス、至福の時!?

フスベシティへと到着したサトシ御一行は、以前ジョウト地方を旅ことがあるサトシ、カスミ、タケシ、ハルカ、そしてジョウト地方出身のマリナ、ケンタ、コトネ、カズナリ以外のメンバーはフスベシティについてよく知らないのとおりあえず街中を散策している。

ヒ「ここがフスベシティね。」

デ「山奥にある街だけあって、とても静かな雰囲気の街だね。」

まずヒカリとデントがフスベシティの第1印象を口に出す。

アイ「街中がドラゴンポケモン一色。まさにドラゴンポケモンの聖地だわ。」

メンバーの中で一番のテンションを見せるアイリス。

ベ「アイリスちゃん、なんだかうれしそうね。」

アイ「もう嬉しそうってもんじゃないわよ。アタシ、思い切って竜の里を飛び出して言った甲斐があったわ。」

ジョウト地方ドラゴンポケモンの聖地・フスベシティに来た喜びを心一杯にかみしめるアイリス。その光景はまるで欲しかったプレゼントを貰って喜んでいる子供のようである。

アイ「ところでサトシ。竜の聖域へはどういったらいいの?」

アイリスはかねてから行きかけた竜の穴がある竜の聖域へと行き方をサトシに聞く。

サ「それなら一回、フスベジムに行かなきゃいけないぜ。」

アイ「えっ、どうして?」

サトシの答えに首を傾げるアイリス。

カ「竜の聖域は代々、フスベジムのジムリーダー一族が守っているのよ。今はイブキさんがジムリーダーとしてその役目を果たしているわ。」

アイ「へえ、それじゃあジムに行ってイブキさんに会えば竜の聖域に行けるのね。」

サ「まあ、そういうことだな。」

アイ「それじゃあ、のんびり街の散策なんてしてる場合じゃないわ。早速、ジムに行きましょう。」

リュウカ「ちょっと、アイリスさん。そんなにあわてなくても。」

サトシ達はアイリスの催促により、フスベジムに向かおうとする。その時だった。

?「おや、そこにいるのはサトシ君じゃないかの?」

誰かがサトシ達に声を掛けてきた。サトシ達が振り返るとサトシ、カスミ、タケシは面識のある一人の老人がそこにはいた。

サ「カブラギさん。」

そこにいたのはイブキの侍従じじゆうで先祖代々フスベジムに使っている老人・カブラギだった。サトシ達は再会したカブラギの方へ近づく。

サ「お久しぶりです。カブラギさん。」

カ「お元気そうで何よりです。」

サトシとカスミがカブラギと再会の挨拶を交わす。

カブラギ「サトシ君達もお元気そうで何よりじゃ。」

カブラギも好意的にサトシとカスミに再会の挨拶を交わす。だが、カブラギはこれだけでは終わらなかった。

カブラギ「久しぶりだけに、お久しぶりプリン。」

どっから持ってきたのかプリンの模型を取り出し、ベタなダジャレを言う。

サトシ、カスミ、タケシ以外「はい？」

カブラギとは初めて会う面々は、なぜ急にカブラギがダジャレを言ったのか訳が分からなかった。

タ「ああ、カブラギは会話の中にこづしてよくダジャレを言うんだ。

」

コトネ「そういえば、わたしがイブキさんに挑戦した時もそうだったわ．．．。」

タケシが苦笑を浮かべながら言い、コトネは自分がイブキに挑戦した時のことを思い出し同じく苦笑を浮かべた。カブラギは会話の中にダジャレを混ぜることが多々あるが、それがあまりにも寒すぎる。ジムリーダーのイブキもこれには頭を悩ませているとか．．．

マサ「うーん、何というか．．．。」

デ「び、微妙なテイストのダジャレだね．．．。」

初対面の人にダジャレが寒すぎるというのも失礼なので（再会直後の相手に寒いダジャレを言うのもどうかと思うが．．．）、カブラギとは初対面の面々はただ苦笑を浮かべるしかなかった。

サ「それはそうと、イブキさんは今ジムにいますか？」

サトシはイブキの所在をカブラギに聞いてみる。

カブラギ「イブキお嬢様ならジムにおられるが、何かお嬢様に用ですかの？」

サ「はい。とは言っても、用があるのは俺じゃなくてこちらのアイリスなんです。」

サトシがそう言うと、カブラギはアイリスの方に視線を向ける。

アイ「はじめまして。あたし、アイリスです。ドラゴンポケモンマスターを目指してサトシ達と旅をしています。」

カブラギの視線に反応し、アイリスは元気よく自己紹介をした。

カブラギ「ほう、ドラゴンポケモンマスターを目指しておられるとは。それは同じドラゴンポケモンを愛するものとしてお嬢様もさぞお喜びになるであろう。ジムまで案内しますぞ。」

アイ「本当ですか！？　ありがとうございます。」

アイリスはこれまでにないくらいに嬉しくなり、カブラギに精いっぱい感謝の意を表す。

マリナ「あの、わたし達もついて行ってもいいですか？」

今度はマリナがカブラギに同行してもいいかと聞く。

カブラギ「おや、以前イブキお嬢様に挑戦なされたマリナ殿にコトネ殿ではありませんか。それに後ろにおられるのは同じくお嬢様に挑戦なされたケンタ君にカズナリ君では？」

マリナに声を掛けられたカブラギは、後ろにいたケンタにも気づく。どうやら、ここから類推してケンタとマリナはフスベジムに挑戦する際にカブラギに会ったことがあるようだ。

ケンタ「お久しぶりです。カブラギさん。」

コトネ「お久しぶりです。」

カズナリ「お、お久しぶりです。」

ケンタはカブラギと再会の挨拶を交わす。

カブラギ「一緒にいて行ってもいいかという質問でしたな。もちろんですじゃ。イブキお嬢様もさぞお喜びになられることでしょう。」

こうして、サトシ達はイブキの待つフスベジムへと行くことになった。その道中、カブラギが寒いダジャレを連発し、苦笑を浮かべる者、うんざりする者が現れる中、サトシ達はフスベジムへと到着した。

カブラギ「イブキお嬢様、今帰られましたぞ。」

カブラギは玄関を開けると、イブキに帰った旨を報告した。

イブキ「ご苦労様。あれ、そこにいるのはサトシ君？ それに、カスミちゃん、タケシ君、それにケンタ君にマリナちゃん、コトネちゃんにカズナリ君も。」

イブキはサトシ達が来たことに大層驚いた。

サ「お久しぶりです。イブキさん。」

イブキ「ホント、ジム戦以来ね。元気にしてた？」

カ「あたし達は元気ですよ。」

マリナ「イブキさんもお元気そうで何よりです。」

サトシに続いて、カスミとマリナもイブキに再会の挨拶を交わす。

その後、同じようにケンタ、コトネ、カズナリもイブキと再会の言葉を交わした。だが、そんな中、ナンパ癖のあるこの男は、

タ「いや、イブキさん。自分のことを覚えてくださるとは光栄です。」

タケシはイブキの手を取り、いつものようにナンパを始める。

イブキ「タケシ君？」

イブキはタケシに手を取られたことにキョトンとする。

カ「あーあ、また始まった……。」

コトネ「もういい加減にしてほしいってことね……。」

もう見慣れた展開にあきれ顔のカスミとコトネ。

カブラギ「いやあ、タケシ殿も相変わらずですな。結構、結構、コケッコォー。」

ケンタ・カズナリ「いや、ダジャレ言ってる場合じゃないですって。」

相変わらず寒いダジャレを言うカブラギに、ツッコミを入れるケンタとカズナリ。

タ「今日、再会できたのも何かの縁。どうですか、これから自分とお茶でも……。」

イブキ「は、はあ．．．。」

どうすればいいのか分からず困り果てるイブキ。こうなったタケシを止める術はもちろん、

ブスッ！

タ「うっ！？ しびれびれ．．．。」

グレッグルの『どくづき』を喰らい、その場で悶絶するタケシ。そんなタケシを無視するかのように、グレッグルはタケシを引き摺っていった。

イブキ「一体、どこへ行くのかしら？」

コトネ「き、気にしないでください。いつものことですから。」

カ「しばらくしたら、戻ってきますので。」

グレッグルがどこに行くのか気になるイブキに、コトネとカスミが苦笑を浮かべながら説明。

イブキ「あ、それはそうと今日は急にどうしたの。わたしに何か用？

イブキはサトシ達がなぜ自分を尋ねた理由を聞く。

サ「今日、イブキさんに用があるのは俺じゃなくてこちらのアイリスなんです。」

サトシがそう言つと、後ろからそーっとアイリスが出てきた。

アイ「は、初めまして。あ、アタシ、あ、アイリスと言います。ドラゴンマスターを目指さ．．．いったあああい！」

アイリスはドラゴンポケモン使いの先輩・イブキに会った緊張から、思いつきり舌を嚙んだ。

キバゴ「キバキバ．．．。」

相棒のキバゴが落ち着けと宥めるが、今の状況では無意味である。

イブキ「初めまして、アイリスちゃんね。そんなに緊張して喋らなくてもいいわよ．．．。」

イブキはアイリスを見て、緊張を解きほぐそうと笑顔で優しく言った。イブキの笑顔を見たアイリスは少しずつだが落ち着き始めたようだ。

サ「アイリス、大丈夫か？」

カ「少しは落ち着いた？」

サトシとカスミがアイリスを心配そうに見つめる。

アイ「うん、今はだいぶ落ち着いたわ。ありがとう、サトシ、カスミ。」

キバゴ「キバ。」

アイリスはだいぶ落ち着きを取り戻したようだ。相棒のキバゴもそれを見て、ホッと一安心する。

アイ「先程は失礼しました。アタシ、アイリスと言います。ドラゴンポケモンマスターを目指して、サトシ達と旅をしています。」

アイリスはイブキの方に視線を移し、先程の無礼を謝りつつ、改めて自己紹介をする。

イブキ「気にしなくてもいいわ、誰にだって緊張するときはあるもの。アイリスちゃんとは初めて会うけど、そちらの方々とも初めてね。」

イブキは今度は初対面のハルカ、ヒカリ、デント、ベル、マサト、リュウカに気づく。その後イブキは、ハルカ達とも挨拶を済ませ、再びアイリスの方に視線を戻した。

イブキ「そういえばわたしに用があるって言ってたわね。いったい何の用かしら？」

イブキが聞くと、

アイ「あたし、この街にある竜の聖域に行ってみたくなんです。竜の聖域については、以前竜の里のオババ様から聞きました。その話を聞いて以来、ドラゴンポケモンマスターを目指す者としては行かな

くてはと思うようになったんです。」

イブキ「あなた、イツシュ地方にある竜の里の出身なのね。」

アイ「はい。あつ、今のお願いは無理ならいいんです。竜の聖域は神聖な場所ですから、下手に出入りするわけにもいかないと思うんです。」

イブキ「良いわよ。竜の里はわたしにとっても随分と縁が深い場所だしね。それにあなたはサトシ君の仲間、聖域を荒らす心配もないわ。」

遠慮がちに言うアイリスに、イブキは優しく答えた。竜の里とは深い縁があること、それとアイリスがサトシの仲間であることを理由に、竜の聖域への出入りを許可した。

アイ「いいんですか！？ ありがとうございます。」

アイリスは念願だった竜の聖域に入れることになり、精いっぱい喜びを噛み締めた。同時にサトシの仲間であることを心の中で感謝した。

サ「よかったな、アイリス。」

アイ「うん、みんなアタシの為にきてくれてありがとう。」

ヒ「いいわよ、別に。」

ハル「仲間として当然のことをしたまでかも。」

アイリスはここまでついてきてくれた仲間達に、改めて感謝の意を述べた。こうして、サトシ達は竜の聖域へ行くことになった。と、その前に、

イブキ「あつ、ちょうどよかったわ。実はね、サトシ君に会わせたい人物がいるの。」

サ「俺に会わせたい人物ですか？」

イブキ「ええ、サトシ君が来るとは思ってたけど、その合わせたい人物もサトシ君を知ってるわ。」

サ「俺を知ってる人物？」

イブキ「まあ、その人物と竜の聖域で会う約束してたから、わたしも竜の聖域に行かなきゃならなかったんだけどね。まあ、行けばわかるわ。」

イブキがサトシに会わせたい人物とは・・・

続く

アイリス、至福の時！？（後書き）

イブキが合わせたい人物・・・。イブキの交友関係を知っていれば、おのずと分かるはずですよ。

キバゴ、新技覚える！？（前書き）

イブキがサトシと会わせたい人物とは・・・

そして、キバゴがああ技を・・・

キバゴ、新技覚える!?

竜の聖域の前にある広い野原で、イブキの言っていた人物の登場を待つサトシ達。ちなみにサトシに同行しているのは、サトシLOVEズの他にデント、マサト、リュウカである。他の面々は、カブラギとともにジムで待機している。

サ「イブキさんが俺に合わせたい人物。一体、どんな人なんだろう？」

サトシは今から会う人物について、考えていた。

イブキ「サトシ君、来たわよ。」

丁度、その時だった。どうやらイブキが本日会う予定の人物が現れたようだ。

カ「えーと、イブキさん。その人は何処に？」

イブキ「あそこよ。」

イブキはそう言つと、空を指さした。

ヒ「空？」

マサ「ん？ 何か近づいてきてるよ。」

マサトは空から自分たちの方に近づいてくる何かに気づいた。

アイ「・・・リ、リザードン？」

サトシ達に近づいてくるのは、数体のリザードンだった。しかも、そのうちの1匹に人が乗っている。

カ「あれは、ジークさん!？」

1匹のリザードンに乗っていた人物、それは以前サトシ、カスミ、タケシがリザフィックバレーというリザードンを保護している場所
で出会って以来、度々お世話になっている女性・ジークだった。一
方のジークも、

ジーク「ん？ あれはサトシ君、カスミちゃん、タケシ君じゃない
の。」

久々に顔を見るサトシ達に大層驚いていた。

リザードン「グオオオオオ！」

リザフィックバレーで預かっていたサトシのリザードンは、サト
シを見つけるや否や、喜びを表現するかのよう
に雄たけびをあげた。

ジーク「ふふふ、久々にご主人のトレーナーに会えてうれしいのね。」

ジークはサトシのリザードンを見て、微笑ましい気分になった。

サ「ピカチュウ、見てみるよ。俺のリザードンだ。近くまで行ってみようぜ。」

ピ「ピツカ！」

サトシは嬉しさのあまり、リザードンに近づくように走っていった。ピカチュウもサトシと同じように久々にリザードンの顔を見れて嬉しそうである。

アイ「サトシ、リザードン持ってたの!？」

タ「ああ、元々はとあるトレーナーに捨てられたヒトカゲだったんだけど、それをサトシがゲットしてリザードンにまで進化させたんだ。」

アイ「そうだったの。サトシ、アタシとデントとで旅をしていた時には、一回もそのことには触れなかったわ。」

デ「そういえば、イッシュ地方に来る前のサトシのことほとんど話さなかったね。」

アイ「少しくらい、話してくれてもいいのに。ホント、子供なんだから。」

アイリスはサトシがイッシュに来る前のことをイッシュでの旅の時に話さなかったのを、不満げに言う。

タ「まあ、許してやれよ。サトシだって、別にわざと離さなかったわけじゃないんだしさ。」

アイ「それはそうだけど．．．。」

アイリスはまだ不満そうである。

デ「これから、サトシと旅をした思い出を作ればいいんじゃないかい。」

カ「そうよ、あたし達はこうしてサトシと旅をしているんだから。」

ハル「それにわたし達、サトシと旅をして楽しいもの。」

ヒ「サトシだけじゃないわ。あたし達だって、あなたの仲間よ。それにあたし達だって、まだサトシの知らないところもあるんだから。」

アイ「．．．そうよね。昔よりも今が大事ね。アタシももっとサトシやみんなのこと知らなくちゃ。」

アイリスの不満が吹っ切れたところで、視点をサトシに戻そう。

サ「おーい、リザードン！」

ピ「ピカピー！」

サトシはピカチュウとともにリザードンに向かって、手を振りながら叫んでいる。

リザードン「グオオオオオ！」

リザードンも返事を返すように、雄たけびをあげる。するとリザードンはサトシに向かって、

リザードン「グオオオオオ！」

かえんほうしゃを放った。しかしサトシとピカチュウは避けようとせず、体いっぱいリザードンのかえんほうしゃを喰らった。

サ「リ、リザードン。前にも増して、すごい威力だな．．．。」

ピ「ピカ．．．。」

かえんほうしゃをまともに喰らったサトシとピカチュウは、丸焦げになった。

ケンタ「サトシ、大丈夫か．．．。」

ケンタがサトシを心配そうに声を掛ける。

アイ「あれ、ホントにサトシのポケモンなの？」

アイリスはリザードンが本当にサトシのポケモンなのか疑問視した。普通なら、懐いているポケモンならトレーナーに攻撃するなんてことは少ない。

タ「ああ、あれがりザードンの挨拶みたいなものだからな。」

ハル「そういえば、バトルフロンティアにサトシが挑戦してた時こんなことあったけ。」

ハルカはサトシがカントーのフロンティアブレン・ダツラに挑戦した時のことを思い出す。その時は、ダツラのフリーザーに対し、サトシはリザードンで挑もうとして呼び寄せたのだが、その時もサトシはリザードンの手荒い再会の挨拶を受けている。

マサ「相変わらず、サトシのリザードンは大胆なことするよね。」
デ「うーん、随分と刺激的なテイスト。でも、こういうのもありかも。」

デントはサトシのリザードンの愛情表現に多少驚いたが、変わった愛情表現だと受け流すことにした。 ホントにいいのか!？ b

y・天の河

ジーク「驚いたわ、サトシ君も来てたなんて。」

サ「俺も、ここでジークさんに会えるなんて思ってもみませんでした。」

ジーク「それは光栄だわ。ところで今は一人旅なの？」

サ「いえ、今はジークさんも知ってるカスミとタケシの他に、ハルカ、ヒカリ、アイリス、マサト、デント、コトネ、カズナリ、そしてコガネシテイから一緒にいるケンタ、マリナと一緒に旅をします。」

サトシ、カスミ、タケシ以外「はじめまして。」

サトシはジークに今一緒に旅をしている仲間を順に紹介した。

ジーク「はじめまして。サトシ君のご紹介の通り、わたしはジーク。リザフィックバレーというリザードンの保護区で保護官をしているわ。」

ジークは初対面の面々に丁寧に自己紹介をした。

ジーク「それにしてもサトシ君、随分大人数の旅で楽しそうね。あなたの肩に乗ってるピカチュウも楽しそうだしね。」

サ「ええ。なつ、ピカチュウ。」

ピ「ピカ！」

サトシとジークが一通り挨拶を交わしたところで、

アイ「それにしても、さっきのリザードンのかえんほうしゃには驚いたわ。あれって、リザードンにとっては挨拶みたいなものなのね。」

サ「ああ、でも何度も受けてるうちに慣れたよ。」

アイ「ハハハ、そうなんだ。」

アイリスは苦笑を浮かべた。

ジーク「それにしても、サトシ君も遅くなったのね。今もポケモンマスターを目指しているの？」

サ「もちろんです。小さい頃からの俺の夢でしたから。」

すると突然、

タ「はい、ジークさん。自分はサトシ達との旅の経験を活かして、ポケモンドクターになりました！」

タケシがサトシとジークの間に割り込むように入ってきた。

ジーク「タケシ君？」

タケシの割り込みにキョトン顔になるジーク。

タ「ジークさん、あなたのような方とお会いできるなんて思ってもみませんでした。これから自分とこれまでの近況をゆっくりと……」

グサア！

タ「かつ！？ しびれびれ〜。」

グレッグル「ケツ！」

グレッグルのどくづきがタケシに炸裂（爆） ていうか、何回喰らうの！？ by・天の河

グレッグル「んー、んー。」

そしていつものようにタケシをどこかへ引き摺っていった。

イブキ「・・・ねえ、前から言おうと思ってたんだけど。」

ジーク「タケシ君、大丈夫なの？」

イブキとジークは前から思っていたタケシについての疑問をぶつけてみた。

カ「ああ、気にしないでください。」

ヒ「いつものことですから。」

イブキ・ジーク「そう・・・。」

カスミとヒカリが苦笑を浮かべながら答え、イブキとジークはキョトンとした顔でとりあえず納得する。

ジーク「でも、タケシ君がポケモンドクターになっていたのには驚いたわ。」

イブキ「ブリーダー経験のあるタケシ君には、ぴったりの職業ね。」

イブキとジークはタケシがポケモンドクターになっていたことに感心する。その後、タケシも無事に戻ってきたので、合流したジークも含め、サトシ達は竜の穴の中へ入ることにした。

アイ「うわあ、ここが竜の穴ね。いかにも、神秘的って感じがいいわ。」

アイリスは早速、竜の穴に入った第一印象を身体いっぱいと感じ取る。

ヒョかったわね、アイリス。竜の聖域に行くという念願がかなって。」

アイ「うん。それにここにいると、ドラゴンポケモンマスターを目指す者としての血が騒ぐわ。」

ジーク「余程、ドラゴンポケモンにはものすごい愛着があるのね。」

まるで遊園地に来た子供のようにはしゃぐアイリスに、

イブキ「ねえ、アイリスちゃん。あなたの頭の上に乗っているキバゴに新しい技を覚えさせる気はない？」

アイ「新しい技ですか？」

キバゴ「キバ？」

イブキ「ええ、ドラゴンタイプの技の中でも特に威力が高い技なんだけど、『りゅうせいぐん』という技よ。」

アイ「りゅうせいぐんか……。キバゴ、やってみる？」

キバゴ「キバ……。」

キバゴはしばらく考える。

キバゴ「キバ！ バアゴゴー！」

アイ「キバゴ、やってみたいのね。分かったわ。イブキさん、やってみます。」

イブキ「そう、それならあそこに竜の祠に広い場所があるからそちらに移動しましょう。」

一同、アイリスのキバゴのりゅうせいぐん習得の為に、竜の祠のある場所へと移動した。

ジーク「りゅうせいぐんと言えば、おタツさんは元気にしてるかしら?」

コトネ「おタツさん?」

ジーク「ええ、シンオウ地方にいるおばあさんで、ドラゴンポケモンにりゅうせいぐんを教えている人よ。わたしやイブキも随分とお世話になったわ。」

サ「その人なら知ってます。ヒカリとタケシとでシンオウを旅した時、俺のフカマルにりゅうせいぐんを教えてもらいましたから。」

ジーク「あら、そうだったの。」

ジークはサトシ達がタツと面識があることに驚いていた。サトシ達がアサツキタウンに向かう途中、りゅうせいぐんを放つチルタリスと一人の老人(この人が、タツである)に出会ったのがきっかけである。この時、フカマルはりゅうせいぐんを覚えたかったらしく、試しに放つも失敗し、その流れ弾がヒカリのポツチャマに当たりその後もポツチャマを苦しめたというのはDPでも有名な話である。

ちなみに、当時のフカマルはまだ野生のポケモンであったが、すぐにサトシがゲットしている。

イブキ「アイリスちゃん。まずはわたしのハクリューでお手本を見せてあげるから、よく見ててね。」

アイ「はい。」

すると、イブキはモンスターボールを取り出し、

イブキ「ハクリュー、りゅうせいぐん。」

ハクリュー「ハアアアア！」

勢いよく飛び出したハクリューはりゅうせいぐんを放つため、力を込める。そして、

ハクリュー「クウウウウ！」

ハクリューはりゅうせいぐんの素となる球体を空高く発射した。球体はしばらく上昇すると、四方八方に分かれ、きれいにむすうの流星を描いた。

アイ「す、すごい……。」「

アイリスはりゅうせいぐんに圧倒されるばかりだった。以前からりゅうせいぐんを見たことはあるものの、ジムリーダーのポケモンのりゅうせいぐんを見たのは初めてだった。

イブキ「コツはお腹に思いつきり力を込めることとそれに必要な集

中力よ。早速やってみましょう。」

アイ「はい。キバゴ、いくわよ。」

キバゴ「キバア！」

キバゴは思いっきり気合を入れる。

アイ「行けー、キバゴ。りゅうせいぐん！」

キバゴ「キイイイイ！」

キバゴは先程のハクリュー同様、腹のあたりに力を込めてりゅうせいぐんの素となる球体を作る。そして、

キバゴ「バアアアア！」

キバゴは空高く球体を発射した。

カ「やったわ、成功よ。」

りゅうせいぐん発射までの過程は完璧で、誰もが大成功だと確信した。だが、球体は四方八方には分かれずに急停止し、突然急降下を始めた。

マリナ「・・・ねえ、あの流星、こっちに向かってきてるような気がするんだけど。」

ケンタ「ど、どうやらこっちに向かってきてるみたいだ。」

球体は離れて見守っていた面々の方に落ちてくる。

アイリス、イブキ以外「う、うわああああ！」

全員、散り散りに逃げていく。すると球体は突然向きを変え、着弾した。

ポツチャマ「ポチャアアアア！」

着弾したところ、それはヒカリのポツチャマのいるところだった。

ヒ「ポ、ポツチャマ!?!」

ヒカリが驚いたようにポツチャマに声を掛ける。するとポツチャマは猛スピードでアイリス、イブキ、キバゴの方に近づき、

ポツチャマ「ポチャ！ポチャポチャ！」

キバゴ「キバキバ。」

その顔からも分かるようにキバゴを怒り出した。キバゴは必死に謝るも、怒りのあまり頭に血が上っているポツチャマは、冷静に考えられずにいる。

アイ「あわわ、ごめん。ポツチャマ。」

アイリスも必死でポツチャマに謝るも、今のポツチャマには焼け石に水である。

ヒ「ポツチャマ、大丈夫？」

すると、ポツチャマを心配してヒカリが駆け寄ってくる。

ポツチャマ「ポチャ、ポチャア」。

ポツチャマは泣きながら、飛びつく。

ポツチャマ「ポチャ、ポチャ」。

ポツチャマは何か泣きつく。だが、ポツチャマが泣きついたのはヒカリではなかった。

ピ「ピーカ、ピカ」。

ポツチャマが泣きついたのはサトシのピカチュウだった。泣きつかれたピカチュウは、よしよしと慰めるようにポツチャマの頭を撫でる。

ポツチャマ「ポチャ」。

ポツチャマは泣きつきの対象を間違えて恥ずかしそうにしながら、ピカチュウからそつと離れる。

ピ「ポツチャマ」。。。。あたしはごごよ。」

そう言いながらヒカリは恥ずかしさのあまり固まっているポツチャマを抱き上げる。

アイ「ポツチャマ、ホントにごめん」。。。。」

キバゴ「キバ．．．。」

ポツチャマ「ポチャ．．．。」

改めてアイリスとキバゴが申し訳なさそうに謝る。ポツチャマは納得していないが、このまま引き摺ってもどうかと思うので、もう気にしてないと渋々アピールする。

ジーク「どうして、ポツチャマは急に怒り出したのかしら？」

イブキ「確かに、今のはわざとじゃないし、尋常じゃないくらいに怒ってたわね。」

ジークとイブキはポツチャマが尋常じゃないくらいに怒っていたので、疑問を抱いた。

ヒ「それは、シンオウでもポツチャマが同じ目に遭っていたからです。」

イブキ・ジーク「?????」

ヒカリが2人の疑問に答えるが、当然その時の状況を知らないイブキとジークは訳が分からなかった。その後、ヒカリがイブキとジークにサトシがフカマルを持っていること、そのフカマルのりゆうせいぐんの特訓のとばっちりをポツチャマが何度が受けていたこと、そのせいでポツチャマが家出みたいなことなど話を話した。

ジーク「あなたのポツチャマもとんだ災難ね。」

話を聞き、イブキとジークはポツチャマに哀れみの眼差しを向ける。

ポツチャマ「・・・ポチャア。」

当のポツチャマは、またりゅうせいぐんの流れ弾を受けなければならぬのかと思い、恐怖心でガタガタ震えている。そんなポツチャマに一同苦笑を浮かべた。

アイ「それはそうと、キバゴ。今回は失敗しちゃったね。」

キバゴ「キバア・・・。」

キバゴはりゅうせいぐんを習得できなかったことに落ち込みの様子。

ハル「仕方ないわよ。今回が初めてだったんだし。」

イブキ「初めてにしては、溜めの集中力が半端じゃなかった。あとはそれをどうコントロールするかだわ。」

落ち込むキバゴを励ます形で、ハルカとイブキがアイリスに言う。
ジーク「りゅうせいぐんはドラゴンタイプの技の中でも、トップクラスの技よ。そう簡単に習得できるものではないわ。何度も特訓を重ねることが大事よ。」

サ「俺もそう思うよ。俺のフカマルだって、完璧にマスターするまで結構かかったんだから。」

アイ「そうね、それならキバゴ。こんなところで、落ち込んでられないわ。これからりゅうせいぐんの特訓頑張りましょう。」

キバゴ「キバ．．．、キバ！」

サ「その意気だぜ、アイリス、キバゴ。」

アイリスとキバゴがりゅうせいぐん習得のために意気込んだところで、一行は竜の穴を出ることにした。そして、サトシ達はフスベジム待機組と合流し、イブキとジークに別れを告げ、フスベシテイをあとにした。これからサトシ達の旅は．．．。そして、キバゴは大技・りゅうせいぐんを習得できるのか．．．

続いて後書きショー

キバゴ、新技覚える！？（後書き）

アイ「キバゴの新技って、りゅうせいぐんのことだったのね。」

天「ああ。DPでサトシのフカマルがりゅうせいぐん習得のために奮闘したところから、引つ張り出してきた。だから、ポッチャマのあのクダリもそのまま出してみた。」

ヒ「へえ〜。でもあたしのポッチャマ、これから苦労することになりそうね。」

天「ポッチャマには申し訳ないが、あのクダリも実は俺のお気に入りだったりする。」

ヒ「そうなの・・・。」

天「まあ、キバゴがりゅうせいぐんを完璧にマスターするまでの辛抱だ。」

アイ「ところで、最近この小説の更新もこの後書きショーも読者の感想返信も雑になってる気がするんだけど・・・。」

天「・・・さて、最後になりましたが感想の方をよろしくお願いします。」

ヒ・アイ「逃げたわね・・・。」

ドラゴンバスター登場（前書き）

なんら変哲もないサブタイで誰が初登場するかお分かりですね。

注意

今回初登場のキャラは、作者の悪ふざけによる酷い扱いを受けます。

ドラゴンバスター登場

イブキ、ジークと別れ、フスベシティをあとにしたサトシ御一行。そしてイブキからキバゴのりゅうせいぐんの習得を提案され、快諾したアイリス。キバゴのりゅうせいぐん習得に向け、今もなお、キバゴとともに特訓に励むアイリスだった。他の面々はその様子を見守っていたり、食事の準備をしたりしている。

アイ「いっけえ、キバゴ。りゅうせいぐん。」

キバゴ「キイイイイ！」

キバゴはイブキのアドバイス通り、腹に力を込めてりゅうせいぐんの素となる球体をつくる。

キバゴ「バアアアア！」

高い空めがけて発射する。ここまではほぼ完璧だ。ただ、問題はそこからだった。通常のりゅうせいぐんなら、球体がある程度上昇すると綺麗に四方八方に分かれる。だが、キバゴのつくりだした球体は四方八方に分かれずに急停止し、そのまま落下していく。こうなれば当然、

ドカアアアアーン！

ポツチャマ「ポチャアアアア！」

ポツチャマが被弾するというお決まりのパターン。

ポツチャマ「ポチャ！ポチャポ！」

キバゴ「キバキバ。」

被弾したポツチャマは猛スピードでキバゴに近寄り叱りつける。
これもお決まりのパターンである。

ヒ「ポツチャマ、止めて！」

アイ「ポツチャマ、大丈夫!？」

それを慌ててヒカリとアイリスが止めに入る。

ポツチャマ「ポチャ、ポチャア。」

そして、ポツチャマはヒカリに泣きつく。

アイ「ヒカリ、ポツチャマ、ホントにごめんね。」

キバゴ「キバ……。」

アイリスとキバゴはヒカリとポツチャマに申し訳なさそうに謝る。

ヒ「いいわよ、アイリス。ポツチャマは可哀そうだけど、キバゴだ
って、悪気があったわけじゃないんだし。」

ポツチャマ「ポチャ．．．。」

ヒカリは気にしていないとアイリスとキバゴに言う。ポツチャマも納得はしていないものの、もう開き直る他なかった。

サ「でも、俺のフカマルの時といい、アイリスのキバゴの時といい、なんでポツチャマにりゅうせいぐんが当たるんだ？」

ヒ「．．．ん、なんでだろう？」

サトシの唐突な疑問に、ヒカリ自身答えられるはずもなかった。『なぜ、ポツチャマにばかりりゅうせいぐんが当たるのか？』。D Pでも最大の謎と言える疑問である。

ヒ「でも、アイリス。これからも特訓は続けて。ポツチャマには申し訳ないけれど、あたし達だってキバゴには是非りゅうせいぐんを覚えてもらいたいもの。」

アイ「ええ、もちろんよ。アタシだって、このままじゃ駄目なのはわかってるもん。キバゴ、絶対にりゅうせいぐんを覚えましょう。」

キバゴ「キバ！」

ヒカリの励ましに、アイリスとキバゴは改めてりゅうせいぐん習得に向けて意気込むのだった。すると、その時だった。

？「ドラゴンポケモンの匂いがすると思ったら、やっぱりアンタだったのね。」

サ・アイ「ラングレー!?」「」

サ・アイ以外「だ、誰？」

サトシ達の目の前にある人物が現れた。それはイツシユ地方のある場所で出会った自称ドラゴンバスターのポケモントレーナー・ラングレーだった。サトシとアイリスは彼女との再会に驚き、ヒカリを含めたアイリスの特訓を見守っていた面々はラングレーとは初対面のため、当然キョトン顔である。

アイ「なんで、アンタがここにいるのよ！」

ラングレー「そりゃあ、わたしだってトレーナーのはしぐね。近々開催される『ワールドチャンピオンリーグ』の第1回予選選考会に出場するためよ。」

ラングレーは今度シロガネタウンで開催される『ワールドチャンピオンリーグ・第1回予選選考会』に出場するため、はるばるジユウト地方にやって来たと言う。

ラングレー「それにアンタの相変わらずそのデカイ頭。なんとかならないの。」

アイ「ふん、アンタにこのアグレッシブな髪型の良さなんて分かりっこないわよ。」

ラングレー「何よ。」

アイ「そっちこそ、何なのよ。」

アイリスとラングレーはお互いに睨み合う形になった。心なしか

2人の間には火花が散っている。

ヒ「ねえ、サトシ。あの子誰なの？」

ヒカリは初めて会うラングレーについてサトシに聞いてみた。

サ「アイツはラングレー。イッシュ地方での旅の途中に出会ったアイリスのライバルさ。」

サトシは、ラングレーがドラゴンバスターを名乗るくらいドラゴンポケモンを目の敵にしていること、その理由が以前竜の里でポケモンバトルをした際にドラゴンポケモンにコテンパンにやられたこと、ドンバトルでは自分と対戦したことなどを話した。

ハル「ドラゴンバスターになった理由って、それ単なる逆恨みなんじゃ……。」

ハルカはふるそう思い、口に出した。ハルカの発言で、ハルカ以外はみな苦笑を浮かべるしかなかったとか……

ラングレー「でも残念ね。今はあなたの味方のゾロアがないんじゃないあね。」

ラングレーは嫌味な感じでアイリスに言う。

アイ「ふん、ルークのゾロアに頼らなくなっちゃってアンタには勝てるわよ。それとも、アタシが怖いのかしら……。」

アイリスも負けじとラングレーに言い返す。

ボンクレー「わたしがアンタなんかに負けるわけないでしょ。って、作者。名前間違えるなああああ！」

あつ、間違えた。ボンクレーはワ〇〇ースだった・・・

乱暮「当て字を使つな！」

はいはい（汗）

ボ〇カレー「発売から43年。今も変わらぬ人気。元祖・・・って、わたしはレトルト食品かー！」

ナイス、ノリッツコミー！

ガンバレー「何を!？」

しつこいくらいに訂正。

〇流・ア〇カ・ラングレー「なんか、余計なものついてる!」

うるさい女だ（怒）。お前は〇野貴〇子か。

ラ〇カ・リー「いい加減にしるー!」

ここで、作者とラングレーによる漫才的展開終了（爆）

サ「ラングレーのやつ、なにやってるんだ。」

アイ「さあ・・・。」

ヒ（なんか、最後らへんに他作品アニメが入ってたような・・・。）

サトシ達は、ラングレーの奇行にひどく引いていた。

ラングレー「はあはあ・・・。おい、アイリスの子供。ここで会ったのも何かの縁、せっかくだからポケモンバトルしてあげるわ。」

アイ「それを言うなら、子供のアイリスでしょ。いいわよ、やってやるっじゃないの。」

ラングレー「じゃあ、決まりね。1対1のシングルバトルで行くわよ。」

アイ「いいわ、臨むところよ。」

こうして、変な風にポケモンバトルをすることになったラングレーとアイリス。この2人のバトルの結末やいかに・・・

続いて後書きシヨ

ドラゴンバスター登場（後書き）

ラングレー「おい、作者！」

天「ん、なんだ？」

ラングレー「「なんだ？」じゃないわよ。何よ、あの扱い。」

天「ある日ふと思いついて書いたら、こうなった。」

ボ○カレー「何よ、その棒読み説明！　だあかあ、わたしはレトルト食品じゃなあああい！」

天「え、最近食べてないけど俺ボ○カレー結構好きなんだけどな。とりあえず、ラングレーファンの皆さん、ごめんなさい。」

ラングレー「それはそうと、次回はわたしとアイリスの子供とのバトルなのね。」

天「ああ、そうだ。それとアイリスの子供じゃなくて、子供のアイリスな。」

ラングレー「そんなことどうでもいいわ。まっ、あんな運だけの女にわたしが負けるわけないけどね。」

天「（コイツ、一度イブキかワタルかゲンジの誰かにやられればいいのに……。）それでは最後になりましたが、ここまでお付き合いいただきありがとうございます。」

バトルから、急展開！？（前書き）

アイリスVSラングレーでのライバルバトル。ですが、思わぬ邪魔が入ります。

久々にアイツらの登場です。

バトルから、急展開!?

ラングレーの突然の登場に、アイリスとのにらみ合い、そしてポケモンバトルをすることになったアイリスとラングレー。

アイ「行くわよ、ドリュウズ。」

ドリュウズ「リュウズ!」

ラングレー「コマタナ、出陣よ!」

コマタナ「コマタ!」

アイリスはドリュウズ、ラングレーはコマタナを繰り出した。

タ「アイリスはドリュウズ、ラングレーはコマタナか。」

マサ「どちらもはがねタイプだから、タイプの相性は互角だね。」

タケシとマサトは2体の第一印象をこう述べる。

カ「そういえば、アイリスのポケモンバトル。滅多に見たことなかったわね。」

ヒ「あっ、そうね。」

マリナ「アイリスがどんなバトルをするのか、楽しみね。」

それぞれアイリスのバトルスタイルについて興味を示す。今作品

でアイリスは、ロケット団とのバトルをしたことはあるが、状況が状況だったため、じっくりポケモンバトルを見ることはできなかったのである。

ベ「アイリスちゃん、ポケモンバトル結構強いんだから。」

アイリスのバトルに興味を示した彼女たちの元へ、ベルが言う。

サ「ベルの言うとおりだぜ。ドン・バトルの決勝で俺とアイリスが当たっただけで、その時俺はピカチュウを出したんだけど、アイリスのドリュウズに負けちゃったんだ。」

サトシはドン・バトル決勝でアイリスとバトルした時のことを思い出す。

カ「へえ、サトシのピカチュウに勝つなんて。」

ハル「アイリスのバトル、ますます見てみたいかも。」

デ「サトシとピカチュウとの関係に負けないくらい、アイリスとドリュウズも強い絆で結ばれているからね。コンビネーションは最高のテイストだというのは、保障するよ。」

カスミ達はさらにアイリスのバトル振りに興味を示し、デントはポケモンソムリエらしく、アイリスとドリュウズとの関係について語る。

ラングレー「コマタナ、メタルクロー。」

コマタナ「コマタ！」

先手を取ったのはラングレーのコマタナ。コマタナはメタルクロ
ーで、アイリスのドリリュウズに接近する。

コマタナ「コオオオマアアア！」

ドリリュウズ「……………」

徐々に近づいてくるコマタナを凝視しながら、アイリスからの指
示を待つドリリュウズ。

アイ「ドリリュウズ、かわして。」

ドリリュウズ「リュウズ！」

ドリリュウズはアイリスの指示通り、素早くコマタナのメタルクロ
ーをかわした。

ラングレー「手を休めるな！ 続けて、アイアンヘッド。」

ラングレーは休むことなく、コマタナにアイアンヘッドを指示す
る。

コマタナ「マッター！」

コマタナのアイアンヘッドが、ドリリュウズに襲い掛かる。

アイ「ドリリュウズ、あなをほる。」

ドリリュウズ「ドリリュウー！」

ドリュウズはあなをほるでそれをかわす。そしてドリュウズは、
地中へと姿を消した。

コマタナ「マタ．．．。」

コマタナは、ドリュウズが現れるときを静かに待つ。そして、

ドリュウズ「リュウズ！」

ドリュウズがドリルライナーで地中から姿を現した。

ラングレー「コマタナ！ アイアンヘッドで迎え撃て！」

コマタナ「コオオオマアアア！」

ドリュウズ「リュウウウズ！」

コマタナとドリュウズが互いに接近して攻撃を仕掛ける。と、
その時だった。

コマタナ「コマ！？」

ドリュウズ「リュウズ！？」

どこからか網が飛び出てきて、コマタナとドリュウズを捕えてしま
まう。

ラングレー「コマタナ！？」

アイ「ドリユウズ!？」

ラングレーとアイリスは突然のことに、声を上げる。そして、

?「ナー、ハハハハハ!」

サ「一体、何なんだ!？」

何人かの声が聞こえたので、それにサトシが反応する。

?「何だかんだの声でした・・・。」

いちいち書くのメンドイので、以下省略。

ヤマト・コサンジ「オイッ!」

コサンジ「って、俺はコサブロウだああ!」

てなわけで、ロケット団のヤマトとコサン・・・もといコサブロウの登場。

ラングレー以外「ロケット団!」

ラングレー以外は、突然現れてコマタナとドリユウズを捕えたヤマトとコサブロウを睨み付ける。

ラングレー「アイツら、誰?」

デ「ロケット団について、人のポケモンを奪ったり、ポケモン達を悪いことに使う悪党だよ。」

Rocket団とは初対面のラングレーはデントの説明を聞いて、サトシ達と同じようにヤマトとコサブロウを睨み付ける。

ラングレー「おい！ ヤマトにコサンバ！」

コサンバ「コサブロウだ！」

ヤマト「一体、何かしら？」

コサブロウは名前を間違えられ激昂するが、ヤマトは冷静にラングレーに言う。

ラングレー「わたしのコマタナを返せ！」

アイ「アタシのドリユウズも返して！」

ヤマト「やゝだね。」

コサック「返せと言われて返す悪党が何処にいる。って、作者。俺はウクライナの伝統舞踊か！」

コサックダンスはロシアの伝統舞踊と誤認することが多いですが、ホパークとも呼ばれるウクライナの伝統舞踊です。ちなみに、コサックは『軍事的共同体』という意味です。

サ「お前達、アイリスとラングレーのポケモンを捕まえてどうするつもりだ？」

サトシがさらに睨みを利かせて、ヤマトとコサブロウに問いかけ

る。

ヤマト「決まってるじゃない。」

コサブロウ「こいつ等を我らロケットグループの裏ルートで売りさばくのさ。イッシュ地方のポケモンは、ここではかなり高額で売れるんでね。」

コサブロウの答えに、

ラングレー「なんですって!?!」

アイ「それはアタシ達の大切なポケモンよ。そう安々とアンタ達に渡すわけにはいかないわ!」

アイリスとラングレーは自分達のポケモンが見ず知らずの人物に売られることを知り、怒りを露わにする。

ドリュウズ「リュウズ。」

コマタナ「マッタ。」

いつの間にか捕まえられた網から檻に移されたドリュウズとコマタナも主人と離れるのが嫌なのか、抵抗して脱出をしようとする。そして、2体は互いに頷き、檻に向かって体当たりを仕掛ける。だが、

ドリュウズ「リュウズ!」

コマタナ「コマタ!」

檻があまりにも頑丈過ぎて、2体とも跳ね返されてしまった。さらに、追い討ちをかけるように、

ドリュウズ「リュウウウズ！」

コマタナ「マアアアアアアア！」

四方八方から炎が吹き出し、ドリュウズとコマタナを襲う。鋼タイルを持つ2体にとっては、かなり不利な状況である。

アイ「ドリュウズ!?!」

ラングレー「コマタナ!?!」

アイリスとラングレーは思わず声をあげる。

ヤマト「ははは、無駄無駄。」

コサブロウ「この檻は頑丈に作られているうえに、抵抗したポケモンのタイプに合わせて反撃を喰らわすよう設計されてるんだぜ。」

ヤマトとコサブロウは高笑いしながら言う。

タ「ドリュウズとコマタナははがねタイプ。だから、相性の悪い炎系の反撃を喰らったのか。」

カ「なんて酷いことを……。」

サ「一体、どうすれば……。」

ヤマト「さあ、どうする気だい？」

コサブロウ「檻の中からの攻撃は反撃を喰らう、さらに言えば外からの攻撃も人質に危害を加えかねない、八方ふさがりとはまさにこのことだな。」

コサブロウの一言に、とうとうサトシ達は黙り込んでしまった。

ケンタ「一体、どうすればいいんだ・・・。」

マリナ「わたし達から、向こうを攻撃したらドリユウズとコマタナを無事に救出できないわ・・・。」

サ「くっ！」

打つ手なしの状況のサトシ達。

サ「こうなったら、行くぞピカチュウ。」

ピ「ピカ！」

ヒ「えっ、ちよつとサトシ!？」

ヒカリの制止する間もなく、サトシはピカチュウとともに檻に向かって走り、そのまま飛びついた。すると檻からは電撃が流れ、飛びついたサトシとピカチュウを襲う。

サ「うわあああああ！」

ピ「ピイイイイ！」

ヒ「サトシ！ ピカチュウ！」

ハル「無茶よ！」

檻の中のドリュウズとコマタナ、サトシのピカチュウにとって電撃は平気だが、生身の人間のサトシにとってはかなりの苦痛を伴う。そしてしばらくすると電撃は止んだ。

サ「ごめんな、ドリュウズ、コマタナ。今助けてやるからな．．．」

サトシは弱弱しくも、ドリュウズとコマタナに言う。

ドリュウズ「リュウズ．．．。」

コマタナ「マッタ．．．。」

自分たちの為に自らを犠牲にして助けに来たサトシを心配そうに見つめるドリュウズとコマタナ。

サ「ピカチュウ、10万ボルトで檻を壊してくれ。」

ピ「ピカ!?!」

サトシはピカチュウに10万ボルトを放つよう指示する。だが、ピカチュウはその指示に躊躇する。それもそのはずだ。先程も言ったが、電撃は檻の中にいるドリュウズとコマタナ、ピカチュウには相性の関係で大したダメージを受けない。だが、檻にしがみ付いて

いる生身の人間のサトシには、かなりの苦痛を伴う。大切な主人の苦しむ姿を見たくないという思いが募り、ピカチュウは躊躇してしまったのである。

デ「サトシ！　いくらなんでも無茶だ！」

ヒ「そうよ！　それじゃあサトシが危ないわ！」

サトシの思わぬ提案に、止めようとする仲間達。さらには、

ヤマト「アンタ、死にたいの？」

ヤマトが挑発するようにサトシに言う。

サ「ふん！　そんなの俺や仲間のポケモン達が傷つけられるのに比べたら、どうってことないぜ。」

サトシは涼しげな笑みでそれを一蹴する。

サトシLOVEズ（サトシ／＼／＼／＼／＼／＼）

涼しげな笑みでカッコいいセリフを言っただけのサトシに、思わず胸がキュンとなるサトシLOVEズ。さらには、

ラングレー（な、なんなの、アイツ・・・。）

自分のポケモンでもないのに自らを犠牲にしてまで守ろうとするサトシの勇姿に、ラングレーも心の中で何かが揺れ動く。

サ「なあ、頼む。ピカチュウ。」

ピ「ピカ．．、ピカ！」

サトシの懇願に負け、ピカチュウは意思を固めて10万ボルトを放つことを決める。

サ「よし、ピカチュウ。10万ボルト。」

ピ「ピイイカチュウウウウ！」

ピカチュウは思いつきり10万ボルトを放った。先程檻から流れた電撃による相乗効果から、威力がさらに上がっている。

サ「くっ！」

ピカチュウの電撃をまともに喰らっているサトシは苦しそうにする。だが、その成果もあって、檻には徐々にヒビが入る。どうやらあれ程大がかりな特殊構造でありながら、ムサシ、コジロウ、ニヤースのように十分な電撃対策は施していなかったようだ。そして、ついに、

ガシャアアアアン！

ドリリュウズ「リュウ！」

コマタナ「コマタナ！」

檻が完全に崩れ、中からドリュウズとコマタナが放り出された。ドリュウズとコマタナ、ピカチュウは上手く地面に着地したが、サトシは地面に叩きつけられてしまう。

ドリュウズ「リュウズ！」

コマタナ「コマタナ！」

アイ「ドリュウズ！」

ラングレー「コマタナ！」

ドリュウズはアイリス、コマタナはラングレーのもとへ近づき、そして飛びついた。

ヒ「サトシ！」

地面に叩きつけられたサトシを心配して、サトシのもとに近づく仲間達。そして、

カ「よくもサトシを酷い目に遭わせてくれたわね・・・。」

ハル「あなた達を絶対に許さない・・・。」

カスミとハルカという言葉からも分かるように思いを寄せる人物が傷つけられたことにより怒り心頭のサトシLOVEズの面々。

アイ「アタシ達のポケモンを奪おうとしたこと・・・。」

ラングレー「きっちり、償わせてもらおうよ。」

それに加え、自分のポケモンを奪われそうになったことに対するアイリスとラングレーの怒りも加わり、かなりのものである。

カ「サニーゴ、とげキャノン。」

ハル「カメール、ハイドロポンプ。」

ヒ「ポツチャマ、うずしお。」

コトネ「カポエラー、インファイト。」

ベ「サトシ君の仇（まだ、死んだわけじゃないけれど・・・）。
チャオブー、ニトロチャーヂ。」

サニーゴ「サアアアニイイイ！」

カメール「カアアアメメメメ！」

ポツチャマ「ポオオオチャアアアア！」

カポエラー「カアアアポオオオ！」

チャオブー「チャオチャオチャアアア！」

キラリ、

アイ「ドリリュウズ、あなたも行くよ。いつけえええ、ドリルライナ

「！」

ラングレー「コマタナ、お前もだ。ハサミギロチン。」

ドリユウズ「リュウウウウズウウウウ！」

コマタナ「コマアアアアアア！」

ピカチュウ「ピカ、ピカピカピカピカ！」

ドリユウズ、コマタナ、そして大好きなサトシを傷つけられたことによる怒りが最も大きいピカチュウの攻撃も加えて、合計8体による一斉攻撃がヤマト、コサンジもといコサブロウに襲い掛かる。

ヤマト「ねえ、これっていつもの・・・。」

コサブロウ「だな・・・。」

ヤマトとコサブロウはこれから起こることが目に見えたので、覚悟を決めた。合計8体はやり過ぎのような気もするが、悪党への制裁にはこれが十分である。

ドカアアアアアーン！

ヤマト・コサブロウ」「やな気持ち。」

ヤマトとコサブロウはいつものごとく、星になった（笑）

サトシLOVEズ「サトシ（君）！」

サトシLOVEズの面々は、すぐさまサトシに声を掛ける。

ヒ「サトシの馬鹿！ あんな無茶して！」

ハル「死んじゃってたかもしれないのよ！」

カ「アンタには学習能力がないの？」

アイ「アタシ達に心配かけて、ホント子供なんだから！」

サ「ごめん……。でも仲間や友達のポケモンが傷つけられるのはほっとけなかったんだ。これだけは分かってくれないか……。」

コトネ「サトシのポケモンと仲間を思う気持ちは分かっているから心配しないでってことね。」

ベ「でも、もうあんな無茶しないでよ。」

サ「あつ、うん。分かっているよ。」

カ「どうだか……。前にもそんなこと言っておいて、今回のことだからね。」

サ「うっ！」

カスミの鋭い指摘に、サトシは返す言葉がなかった。

ドリュウズ「リュウズ……。」

コマタナ「コマタ……。」

するとサトシ達のもとへ、ドリュウズとコマタナがサトシにお礼を言いたいのか近づいてきた。

サ「ああ、いいって。お前たちが無事ならそれでいいんだ。」

ドリュウズ「ドリュ……、リュウズ！」

コマタナ「コマタマタ！」

満面の笑顔で答えるサトシに、自然とドリュウズとコマタナも笑顔になる。

ラングレー「ホント、アンタなんでそこまで人のポケモンの事まで心配できるの？ 今だって、死んでたかもしれないのに……。」

ラングレーがサトシがどうしてここまで他人のポケモンにまで気を遣うのか、聞いてみた。

サ「ポケモンをトレーナーやコーディネーターが必死に育てた努力は、俺だってよく知ってるからな。コマタナだって、ラングレーが努力に努力を重ねて育てたんだろ？」

ラングレー「それはそうだけど……。」

サ「そんなトレーナーやコーディネーターの努力を他人であろうと無駄にしたくないんだ。それに俺は必死にポケモンを大事にする奴が大好きだしな。」

ここで、今作品何度目かと思うくらいのサトシの満面キラスマイル(爆)

サトシLOVEズ+ラングレー(//////////)

当然、サトシLOVEズの面々は耐え切れずにすぐに赤面。ラングレーもサトシの笑顔に対する体制がないせいか、顔を赤くさせる。サトシはそんな彼女たちに首を傾げるも、深く追求しないことにした。

ラングレー(さっきも感じたけど、なんなのこの気持ち////)

初めてサトシの優しさを目の当たりにしたラングレーは、平常心でいられなくなっていた。まさか、ラングレーにもそのような感情が芽生えてきたのだろうか……

ラングレー「まあ、いいわ。それよりもアイリスの子供。」

アイ「だから、子供のアイリスだってば。」

また『アイリスの子供』といわれたことにムツとくるアイリス。それよりも、子供といわれた事にはツツコミを入れないのだろうか……

ラングレー「邪魔が入ったから、今回のバトルはノーカウントよ。」

まあ、どの道ドラゴンポケモンじゃなかったからそのつもりだったけど。」

アイ「なによそれ。」

ラングレー「だが、今度会ったときはお前を完膚なきまでに叩きのめしてやる。覚悟しな。」

アイ「望むところよ。その時は返り討ちにしてあげるわ。」

ラングレー「ふん。あつ、それとサトシと言ったわね。」

サ「どうしたんだ、ラングレー？」

ラングレー「・・・ま、また会いましょう。」

サ「あ、ああ。」

ラングレーは振り返らずにそのまま逃げるように去っていった。ラングレーはこの後、自らの気持ちについて究極の選択を強いられることになるなど知る由もなかった・・・

サ「ラングレーの奴、一体なんだったんだ？」

首を傾げるサトシに、

アイ以外サトシLOVEズ（まさか・・・。）

アイ（ちょっと、サトシ。ラングレーだけはやめてよ！）

心の中で、またライバル（？）が増えたのかと危惧する彼女達であつた。その後、しばらく休養を取ってサトシ達は再びシロガネタウンへと歩みを進めていくのだった・・・

続いて後書きシヨ―

バトルから、急展開！？（後書き）

ヒ「ちょっと、なんでまたあたし達のライバルを増やしたのよ！」

カ「そうよ、増やされるあたし達の身にもなつてよ！」

天「そうガミガミ言うなよ。いつまでもお前たちだけでサトシ争奪戦繰り広げられても、盛り上がらないだろ。」

ハル「余計なお世話かも！」

アイ「だいたいなんでよりによって、ラングレーなのよ。」

天「誰か適当な奴いなかと思つて、思いついたのがこのドラゴンバスターの小娘だ。まあ、コイツはかなりの読者から嫌われてるみたいだけだな。」

カ「まあ、仕方ないわよね。」

ハル「ドラゴンバスターになったきっかけ、どう見たって竜の里に対する逆恨みじゃない。」

ヒ「アイリス、あんな女に目を付けられて災難ね。」

アイ「ホントよ。ラングレーもサトシ以上に子供なんだから。」

ヒ「でも、ダイジョーブ。あたし達はアイリスの味方だから。」

ハル「そうそう、あんな逆恨み女に負けちゃ駄目よ。」

カ「あたしもアイリスの気持ちすごく分かるわ。あたしだって、同じように水ポケモンで逆恨みされたらたまったもんじゃないですもの。」

アイ「みんな、ありがとう。」

天「．．．なんか、毎度のことながら変な方向に進んだ後書きシヨ！ですが、次回もお楽しみに！」

大会直前の波乱〜前編〜（前書き）

シロガネタウンに着く前に、少し波乱の展開・・・

いろんな描写を無理矢理かつ大量投入です。

大会直前の波乱〈前編〉

サトシ達は『ワールドチャンピオンリーグ』予選第1選考会が開かれるシロガネタウンに向けて、さらに歩みを進めていた。

アイ「はあ〜。」

サ「どうしたんだ、アイリス。」

突然、アイリスがため息をついたので、心配して声を掛けるサトシ。

アイ「あ、うん。そういえばアタシ、サトシ達の故郷の地に来て、一度もドラゴンポケモンをゲットしてないなあって。」

ヒ「あつ、そういえばキバゴ以外にアイリスのドラゴンポケモン見たことないわ。」

マサ「ドラゴンポケモンはおるか、他のタイプのポケモンすらゲットしてないよね。」

アイ「うう。。。。」

思わず出たマサトの鋭い指摘に、言葉を濁らせるアイリス。

ハル「こら、マサト。アイリスが余計に落ち込んだじゃない。」

マサ「だって〜。」

そんなマサトを叱る姉・ハルカ。

アイ「うう、ドラゴンポケモンをゲットできないなんてドラゴンポケモンマスターを目指す者として一生の不覚だわ。ああ、なんで釣り大会の時にコイキングゲットできなかったのよ。」

アイリスはいかりのみずうみ釣り大会でのことを思い出す。アイリスはいかりのみずうみ名物の一つ・コイキングを狙っていた。コイキングは育てて進化させればドラゴンポケモン使い愛用のギャラドスへと進化する。だが、アイリスは釣竿の引きすら感じ取ることが出来ず、1匹も釣れなかった。

サ「なあ、アイリス。そんなに焦ったってポケモンは寄り付かないぞ。」

デ「サトシの言うとおりだよ、アイリス。ここはゆっくり熟成させることが大切だよ。」

アイ「それは分かってるんだけどさあ……。」

アイリスはさらに頭を悩ませる。そんな時だった。

チルット「チル〜。」

マサ「あつ、チルットだ。」

1匹のチルットがサトシ達の目の前に現れた。

アイ「チルットはノーマル・ひこうタイプ。だけど育てて進化させ

れば、ドラゴン・ひこうタイプのチルタリスになる……。これは
イッシュを飛び出して最初のドラゴンポケモンゲットの絶好の機会
だわ。」

アイリスは早速、チルットをゲットすることに決めたようだ。

チルット「チルツ。」

チルットもサトシ達に気づいたのか、可愛くウインクをする。

ベ「きゃ〜、あのチルット。可愛いわ〜。」

そんな可愛らしい仕草をするチルットに、今度はベルが顔を赤く
させながら過剰に反応する。

ベ「あのチルット、わたしがゲットしてみせるわ。」

ベルもチルットをゲットすることに決めたようだ。

アイ「ちょっと、ベル。あのチルットをゲットするのはアタシよ！」

ベ「そんなの早い者勝ちよ、アイリスちゃん。それじゃあ出てきて、
チャオブー。」

チャオブー「チャオチャオチャアー！」

アイリスの制止を無視して、ベルはチャオブーを繰り出した。

ベ「チャオブー、チルットにニトロチャージよ。」

チャオブー「チャオチャオチャオチャオアアアア！」

チルットにスピード勝負を仕掛けるチャオブー。

チルット「チルウ！」

ところが、チルットはそれを難なくかわす。

タ「なんて素早いかわし方だ。あのチルットなかなかやるぞ。」

タケシはチルットの素早いかわし方を見て、冷静にこう分析する。

チルット「チルッ！」

チャオブー「チャオ？」

チルットは持ち前の素早さを活かして、チャオブーの後ろに回り込む。チルットの姿を見失ったチャオブーは躊躇する。

チルット「チィィイル。」

チルットはチャオブーに向かって、ウインクをした。すると、チルットからは大量のハートが表れて、それらはチャオブーの周囲を囲む。そして、

チャオブー「チャオ．．．、チャオウ！」

チャオブーは両目をハートにさせながら、チルットの方を見る。

リュウカ「あのチルット、メロメロを覚えているんですね。」

ケンタ「確か、ベルのチャオブーはオス……。」

マリナ「メロメロが効いたってことは、あのチルットはメスね。」

ケンタとマリナの会話からも分かるように、オスのチャオブーにチルットのメロメロが効いたということは、チルットはメスということが判明したのである。

チルット「チイイルウウウ！」

チルットはメロメロ状態のチャオブーに対し、さらに攻撃を仕掛ける。

カズナリ「チルットのドラゴンダイブだ！」

ベ「チャオブー、かえんほうしゃで迎え撃って。」

チャオブー「チャオ〜。」

しかし、メロメロ状態のチャオブーにはベルの指示は届かなかった。

チャオブー「チャオオオオオ！」

そのままチャオブーはチルットのドラゴンダイブをまともに喰らってしまふ。

チャオブー「チャオ〜。」

チャオブーはドラゴンダイブの一撃で戦闘不能になってしまった。
べ「チャオブー！」

ベルは急いでチャオブーのもとへ駆け寄る。結局、ベルはチルツトをゲットはおろか、ダメージを与えることすらできなかった。

アイ「次はアタシの番ね。あのチルツトがメスなら、エモンガでいくわよ。いつけえええ、エモンガ！」

エモンガ「エンモ！」

アイリスはチルツトがメスだということが分かったので、同じ性別のエモンガを戦闘に出した。

チルツト「チィィイル。」

チルツトはエモンガに対してもメロメロを仕掛ける。チャオブーの時同様、無数のハートがエモンガを取り囲むが、

エモンガ「エモ？」

同じメスのエモンガには当然効果がなかった。

アイ「さあ、行くわよ。エモンガ、めざめるパワー。」

エモンガ「エエエエンモオオオ！」

チルツト「チルウウウ！」

エモンガのめざめるパワーはチルットにクリーンヒットした。

チルット「チル．．．、チルチル。」

チルットはすぐさま体勢を立て直し、

チルット「チィィルウウウ！」

エモンガ「エンモオオオ！」

反撃のドラゴンダイブ。この一撃はエモンガに命中した。だが、

チルット「チルウ．．．。」

アイ「やったわ、チルットがまひ状態になったわ。」

エモンガの特性『せいでんき』が発動。エモンガに直接攻撃を仕掛けたチルットは、この効果でまひ状態になった。

アイ「エモンガ、トドメの．．．。」

アイリスがエモンガにトドメの一撃を指示しようとしたその時だった。

チルット「チィィルウウウ！」

チルットは何かの技を発動させる。その瞬間、アイリスは思わず躊躇ってしまった。すると、

チルット「チル！」

チルットは何事もなかったかのように振舞っていた。少しわかりづらいつらと思うが、チルットのまひ状態が回復したのである。

アイ「う、嘘でしょ!？」

アイリスはチルットが自力でまひ状態を回復させたことに驚く。

タ「そうか。あのチルットはリフレッシュを覚えているんだ。」

マサ「チルットは、リフレッシュを使ってまひ状態を回復させたんだね。」

チルットが使った技は『リフレッシュ』という技である。『リフレッシュ』は、どく、やけど、まひ状態のときに使うと、それらを回復させる特殊な技である。

チルット「チイイル。」

チルットは、自らの周りからしろいきりを発生させた。しろいきりはたちまち、サトシ達をも包み込み、あたり一面真っ白になった。

ケンタ「チルットのしろいきりだ。」

ハル「マサト……。どこにいるの?？」

マサ「お姉ちゃん、僕はここだよ。」

ヒ「何も見えないよ。」

しろいきりに包まれ、サトシ達は少々パニック状態である。しばらくして、霧が晴れると、

アイ「・・・あれ？ チルットは？」

チルットの姿はどこにもなかった。

カズナリ「どうやら、しろいきりを使って逃げたみたいですね。」

チルットはしろいきりでサトシ達がパニックを起こしているときに、隙を見て逃げ出したようだ。

ベ「あ〜ん、もう。あのチルット可愛くて強かったし、絶対にゲットしたかったわ。」

アイ「あたしも。絶対に立派なチルタリスになるわ。」

ベルとアイリスは、チルットをゲットできなかった悔しさをにじませる。

アイ「今度会ったら、絶対にゲットしてみせるわ。」

ベ「ちょっと、アイリスちゃん。あのチルットはわたしがゲットするんだから。」

アイ「何言ってるの、ベル。ゲットするのはアタシよ。」

ベ「こっとなったら、アイリスちゃん。どっちが早く、チルットをゲットするか勝負よ。」

アイ「臨むところよ。」

ベルとアイリスはどちらが先ほどのチルットをゲットするかで勝負することになった。

ヒ「な、なんか、変な方向に入っちゃったわね．．．。」

マサ「もう一度あのチルットに会える保障はないのに．．．。」

思わぬ形で火花を散らすベルとアイリスを見て、サトシ達は苦笑を浮かべた。その後サトシ達は、日が沈むころになったので、しばらく進んだところでテントを張り、野宿+夕食を摂ることにした。

キバゴ「キバー！」

ポツチャマ「ポチャー！」

サトシ達が夕食の準備、ポケモン達のケアを行っている中、キバゴとポツチャマは追いかけてこをしている。ポツチャマはキバゴからりゅうせいぐんの失敗作『りゅうせい』の被害にあっているが、なんだかんだ言って、仲の良い2体である。

キバゴ「キバ！」

ポツチャマ「ポツチャマ！」

とある草陰に首を突っ込むキバゴとポツチャマ。

キバゴ「キバ？」

ポツチャマ「ポチャ？」

キバゴとポツチャマは何かを発見したようだ。しかもそれは見覚えのある代物だった。

キバゴ「キバキバ！」

ポツチャマ「ポチャポチャ！」

キバゴとポツチャマは慌てて草陰から抜け出し、それぞれの主人のもとへ駆け寄る。

キバゴ「キバキバ！」

ポツチャマ「ポチャ、ポチャポ！」

アイ「えっ、ちょっとキバゴ。どうしたのよ。」

ヒ「ポツチャマもどうしたの？」

あまりに突然のことに、驚きと困惑の表情を浮かべるヒカリとアイリス。

マリナ「なにか指差しているみたいだけれど。」

ケンタ「あそこに何かあるのか？」

ムウちゃん「ムウ？」

バクフーン「バアク？」

マリナとケンタがキバゴとポツチャマがどこかを指差していることに気づく。そして、マリナのムウちゃん、ケンタのバクフーンもそんな2人に反応する。

ポツチャマ「ポチャ！」

キバゴ「キバキー！」

ポツチャマとキバゴが指さしている方向、それは先程まで自分たちが顔を突っ込んでいた草陰だった。

サ「とにかく、あそこに行ってみようぜ。」

ピ「ピカ！」

ヒ「ええ。」

アイ「ああ、デント達はそのまま夕食作りを続けてて。」

デ「うん、分かったよ。」

サトシ達は直接ポツチャマとキバゴが指さす方向に行ってみることにした。するとそこには、1匹のニヤースが倒れていた。サトシはそのニヤースを優しく抱き上げる。

ケンタ「お、おい、このニヤース、大丈夫なのか？」

サ「とりあえずは……。気を失っているだけみたいだな。」

ヒ「でもこのニヤース、体中傷だらけよ。」

アイ「とにかく、向こうまで運んで手当てしてあげましょ。」

マリナ「そうね。」

ピ「ピイカ。」

ヒ「あつ、それとポツチャマ、キバゴ。よく知らせてきてくれたわね。」

アイ「あなた達が知らせてきてくれなかったら、このニヤースが危なかったわ。」

ポツチャマ「ポツチャマ！」

キバゴ「キバキー！」

ヒカリとアイリスは、ポツチャマとキバゴが素早くこの事を知らせに来たことを褒めた。サトシ達は、傷だらけで気を失っているニヤースを夕食作り、ポケモンのケアをしている面々のもとへと運んだ。そして今は、デントと手分けして夕食の準備をしていたタケシが丁度夕食の準備も終えていたのでニヤースの応急処置をしているところである。

ヒ「タケシ、どう？」

タ「ああ。だいぶ弱ってたが、ポツチャマとキバゴが早く知らせに来てくれたおかげで、早く手当てが出来たよ。」

ヒ「そう……。それは良かったわ。」

タケシからニヤースが無事だと言ったことを知り、ホッと一安心するヒカリ。するとそこへ、

アイ「タケシ、薬草とオレノの実を混ぜて飲み薬を作ったんだけど、良かったらこれ使ってみて。」

タ「ああ、助かるよ。アイリス。」

薬草の知識が豊富なアイリスが、特製の飲み薬の入った瓶をタケシに手渡す。タケシは手渡された飲み薬を、ニヤースに優しく飲ませてあげた。

カ「ところで、アイリス。どうしてそんなに薬草について詳しいのかしら？」

アイ「あ、うん。アタシの住んでいた竜の里では多くの薬草が生えてたの。小さい頃から、それをよく取っては薬を作って遊んでたりしたから、自然と身についたってところかな。」

カ「へえ、そうなんだ。」

カスミは感心したように言う。

デ「アイリスの薬草の知識には、僕やサトシもいろいろと助けられたよ。」

サ「そういえば、俺のミジュマル以外のポケモンがタマゲタケの毒にやられた時も、アイリスが看病しながらみんなの分の薬を作って

助かったんだよな。」

デントとサトシは、イツシュでの旅でアイリスの薬草の知識に何
度も助けられたことを思い出す。

アイ「いやあ、アタシはただ薬を作っただけで、薬草を採ってきた
のはサトシとデントよ。」

アイリスは自らを謙遜しながら言う。ちなみに、タマゲタケの毒
に効く薬草と取っている最中、サトシがガマガル、デントがマツギ
ヨをゲットしている。

タ「まあ、今回アイリスの薬草の知識には助けられたよ。俺からも
礼を言う。」

アイ「どういたしまして。」

アイリス特製の飲み薬をニヤースに飲ませた後、しばらく様子を
見ることにした。そして、

マサ「あつ、気が付いたみたい。」

ニヤースの顔がビクツと動いた。

ニヤース「ニヤニヤ、ここは何処ニヤ．．．。」

目を開けたニヤースは、突然喋り出した。

全員「しゃ、喋った!?!」

ニヤースが人間の言葉を発したことに全員驚く。

サ「てことは、お前ロケット団のニヤースか？」

ニヤース「んん、その声はジャリボーイ達じゃニヤか!？」

なんと、倒れていたニヤースはムサシ、コジロウとともにいたニヤースだった。この後、ニヤースが語ることは一体……

続く

大会直前の波乱〜前編〜（後書き）

後編にて、ニヤースが衝撃の告白をする！？

大会直前の波乱〜後編〜（前書き）

ニヤースの身に何が！？

そして、終盤にサトシのかつてのあのポケモンが・・・

大会直前の波乱(後編)

サ「なあ、ニヤース。いきなりで悪いんだけど、どうしてあんなところで倒れていたんだ？」

ヒ「随分傷だらけだったし。」

サトシとヒカリは、ニヤースに当然の疑問をぶつけてみる。

ニヤース「それはニヤ．．．。」

ニヤースはサトシ達に倒れる前までの経緯を淡々と語り始めた。ロケット団のとある大型プロジェクトの重要任務で失敗しクビになったこと、そのせいでムサシやコジロウと別れることになったこと、ムサシとコジロウは引き続きロケット団員であること、クビになったニヤースは各地を転々とする放浪の旅に出ていることなどをサトシ達に語った。

マリナ「そ、そんなことが．．．。」

デ「ここまで大変だったね．．．。」

マリナとデントが代表して、ニヤースに言葉をかける。するとケンタの頭の中でとある疑問がわいてきた。

ケンタ「ちよつと、待った。前に会ったときはお前達普通に仲良かったよな？」

そう、ケンタの言うとおり、以前サボネアがナタネとサボネアに

会いにきた時は、いつもどおりのロケット団だった（ムサシはいなかったが・・・）。

ニヤース「重要任務がニヤー達に下されたのは、おみゃー達と別れたすぐ後にや。でも、その頃からムサシもコジロウもそしてボスも、みんな様子がおかしかったにや。」

マサ「様子がおかしかった？」

ニヤース「幹部連中は何かある人物について、物凄く警戒心を持っていたんだニヤ。それと、ロケット団の他に大きな機密組織があるとかニヤーとか。詳しくはニヤー達は分かんやけど、これから大がかりなことが起きるってことは確かニヤ。ニヤーが知ってることはそれだけにや。」

タ「いや、それだけ詳しく話してくれたら大丈夫だ。」

デ「ある人物と機密組織か・・・。」

デントは顔を渋らせて、考え込む。

ケンタ「ロケット団の動向は気になるけれど、俺達はとりあえず第1選考会に向けて集中しないとな。」

コトネ「そうね、ここで考えたって分からないものは仕方ないってことね。」

ひとまず、ロケット団に関するところはここで終えることにした。

サ「ところで、ニヤース。これからどうするんだ？」

ニヤース「ニヤーはこのまま放浪の旅を続けるにや。ロケット団に入る前はそうだったしニヤ。助けてくれたおみゃー達には感謝するニヤ。このご恩は一生忘れないニヤ。」

ニヤースはそのまま立ち上がってサトシ達から離れようとした。だが、かなりの大怪我なのかすぐに膝をついてしまった。

タ「無茶だ。今、手当てをしたばかりなのに。」

カ「そうよ。また、途中で倒れたらどうするの?」

ニヤース「ニヤーのことは心配するなニヤ。」

ニヤースは頑なにサトシ達の助けを借りることを拒む。だが、

サ「なあ、俺達と一緒に来ないか?」

ニヤース「ニヤ? おみゃー達とかニヤ?」

サトシの突然の提案にキョトンとするニヤース。

マサ「傷もしばらくの間は癒えないから、僕もそうした方が良くと思うよ。」

アイ「また、途中で倒れられても困るしね。」

サトシ達はニヤースが旅仲間になることに抵抗はないようである。

ニヤース「おみゃー達には、苦勞をかけたにやのにか?」

カ「まあ、二度と悪事を働かないって条件付きだけどね。」

ニヤース「ニヤーはもうロケット団をクビになった身だニヤ。もう悪事を働く意味なんてないニヤ。」

ケンタ「んじゃ、決まりだな。」

コトネ「これからよろしくってことね。」

ピ「ピカピカ！」

ポツチャマ「ポチャポーチャ！」

キバゴ「キバキ！」

バクフーン「バアク！」

ムウちゃん「ムウウ！」

サトシ達は新しく仲間になる元ロケット団・ニヤースをポケモン達とともに歓迎した。こうして、ニヤースはサトシ達の仲間になった。その後サトシ達は、夕食を摂り、しばらくして眠りについた。翌日、シロガネタウンに向けて、出発した。

ハル「ねえ、マサト。あとどれくらいでシロガネタウンに着くの？」

マサ「もうすぐだよ。順調にいけば、お昼くらいには着くよ。」

ハルカの問いかけに、マサトは自分のポケナビを見ながらチエツ

クする。

サ「そろそろか。あー、久々の公式試合だからワクワクするぜ。」

ケンタ「俺もだぜ。なあ、サトシ。予選選考会が始まる前に1回バトルしないか？」

サ「バトル!? やるやる。最終調整にはもってこいの相手だぜ。」

そんな会話をしているサトシ達に突然、

ギヤアアアアン!

リュウカ「何、今の音!？」

突然の大きな音に驚くリュウカに、

タ「大変だ。あの崖から、岩が落ちてくるぞ。」

タケシが指さす方向を見ると、右隣の崖から大きな岩がサトシ達めがけて落ちてきた。

デ「みんな、逃げろ!」

サトシ達は辛うじて大きな岩を避けた。これで一安心と思いきや、

？「バンギヤアアアア！」

ヒ「こ、今度は何！？」

何かの鳴き声を聞き、声のする方へ向くと1匹のバンギラスが立っていた。

カズナリ「バンギラスだ！」

突然のバンギラスの登場に、皆警戒心を強める。すると、

？「ヨー。」

バンギラスの後ろから1匹のヨーギラスが顔を出した。

ヨーギラス「ヨー、ヨーギ。」

マリナ「あのヨーギラス、わたし達に話しかけてない？」

ヒ「ニヤース、ちょっと通訳してくれる？」

ニヤース「お安い御用ニヤ。」

ヨーギラスが何かを伝えたがっているようだったので、人間とポケモン両方の言葉が分かるニヤースが通訳する。それによると、

ニヤース「『久しぶり、サトシ、ピカチュウ、カスミ、タケシ。』
って言ってるニヤ。」

サ・カ・タ「『俺（あたし）達！？』」

ピ「ピイカ？」

ヨーギラスはサトシ、ピカチュウ、カスミ、タケシと面識があるようだ。ニヤースの通訳を聞いたサトシは、ふと思いついた。

サ「お前、もしかして俺のヨーギラスか？」

ヨーギラス「ヨー。」

ニヤース「『そうだよ。』って言ってるニヤ。」

するとヨーギラスは、バンギラスの背中から降りて、サトシ達の方へ向かう。

サ「久しぶりだな、ヨーギラス。」

タ「昔と比べて、今では随分たくましくなったな。」

カ「ホントね。」

ピ「ピツカ！」

サトシ、カスミ、タケシ、ピカチュウはヨーギラスとの再会に心を弾ませる。

ニヤース「ニヤーもおみゃーに会うのは久しぶりだニヤ。」

ニヤースもヨーギラスの顔を見て、心を弾ませた。

ヒ「ねえ、サトシ。このヨーギラス知ってるの？」

いまいち、話の展開が読めない面々を代表して、ヒカリが聞いてみた。

サ「知ってるも何も、コイツは俺のポケモンだったんだ。」

サトシから、ヨーギラスはウツギ博士から預かったタマゴから孵したことで、母親のバンギラスが密漁団から狙われて無理矢理母親から引き離されたこと、その密漁団をポケモン保護官をしているムトウという女性とともにやつつけて無事に母親とヨーギラスを再開させることが出来たことを、ヨーギラスを知らない面々に話した。

ヒ「サトシがヨーギラスを持っていたなんて。」

ハル「それだけでびっくりかも。」

カ「サトシが持っていたポケモンは、このヨーギラスだけじゃないわよ。」

タ「ピジヨットやラプラスも持ってたしな。」

ヒ「そういえば、あたしのエデホースもそうだし、この前ゲットしたバタフリーもサトシのポケモンだったわね。」

サトシがかつて持っていたポケモンの代表例としては、タケシやヒカリが挙げたポケモンがまず出る。ピジヨットはサトシがボールでゲットした2番目のポケモン・ピジョンでそれが進化した際にサトシ自身が逃がし、ラプラスはオレンジ諸島で出会ったはぐれポケモンで仲間の群れと再会するまではサトシのポケモンだった。ヒカ

リが言つてたエデホースは、サトシの帽子を狙っていたのがきつかけでサトシがゲットしたエイパムで、今はオウと言う男性にポケモンピンポンの才能を見込まれてクチバシティでポケモンピンポンの特訓をしている。

公式では、ヨーギラスはゲットしていないということになりますが、ここではゲットしている設定にしておきます。

ベ「それにしても、このヨーギラス。可愛い〜。」

ヨーギラス「ヨヨー!？」

突然ドアップでベルがヨーギラスに接近したため、ヨーギラスはびっくりした表情を浮かべる。そしてベルは、半ば強引にヨーギラスを抱き上げる。

サ「ああ、ベル。その辺にしておいたほうが．．．。」

ベ「ええ〜、なんで?」

ベルはサトシの忠告の意味が分からなかった。

ヨーギラス「ヨヨ．．．。」

ヨーギラスは今にも泣きそうな顔をしている。

タ「ま、まずい．．．。」

ニヤース「あのヨーギラス、あの後確か．．．。」

タケシとロケット団時代にサトシ達を散々追いかけてまわっていたニヤースは、ヨーギラスの性格を知っているせいかな、この後の展開が読めた。

ヨーギラス「ヨヨ．．．。ヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨ！」

ヨーギラスのいやなおとが発動。

マサ「よ、ヨーギラスのいやなおとだ。」

ヒ「もう、なんなの〜。」

ピ「ピイカア．．．。」

ポツチャマ「ポチャア．．．。」

キバゴ「キババ．．．。」

バクフーン「バクウ．．．。」

ムウちゃん「ムウウ．．．。」

あまりのうるささにポケモン達もろとも、耳を塞いでしまう。その後、ヨーギラスのいやなおとはしばらく続いたが、ピカチュウとポツチャマがなんとかヨーギラスを宥め、ひとまず落ち着いた。

サ「このヨーギラス、人見知りか激しいんだ。」

カ「あたし達と一緒にいた時も、サトシとピカチュウ以外にはなかなか懐かなかったしね。」

ヒ「そうだったの……。」

サトシとカスミがヨーギラスの人見知りの性格について全員に説明した。サトシのヨーギラスは人見知りが激しく、最初はなかなか心を開かなかった。少しのことでもびっくりして顔を隠すほどである。それでもサトシ達の旅を通じて、最終的にはポケモン保護官の連中にもなれるほどにまで改善したが、ベルの急接近に驚いたところから完全には直っていないようである。

ベ「ホント、ごめんね。ヨーギラスちゃん。」

ヨーギラス「ヨヨ……。」

ピ「ピイカ。」

ポツチャマ「ポチャ。」

ベルはヨーギラスに謝るが、先程のベルに対する恐怖心があるのか、ピカチュウとポツチャマの後ろに隠れてしまった。

ベ「うう、サトシ君。わたし、ヨーギラスちゃんに嫌われちゃった（泣）」

ベルは泣きながらサトシに訴える。

サ「ま、まあ徐々にヨーギラスも慣れてくると思うよ。」

サトシはそんなベルを慰めるように言う。いくら知らなかったとはいえ、初対面の者に過剰すぎるスキンシップをされて驚かないと

いう方が無理な話である。読者の皆さんも動物と接する際には、無理矢理頬を引張ったり、抱き上げたり、はたまたテイステイングだからと言って自らの舌で動物の体を舐めるような行為は絶対にやめましょう。しないとは思いますが……

ヒ「ダイジョーブよ。あたし達はあなたの仲間だから。」

リュウカ「わたし達は、ただあなたと仲良くなりたいただけなの。」

だが、ヨーギラスはさらに怯えてしまう。ピカチュウとポツチャマが大丈夫と言うが、恐怖心は完全に拭いきれていないようである。

ヒ「なんで、あたし達まで……。」

ヒカリとリュウカは落胆の表情を浮かべた。

アイ「もう、ベルのせいよ……。」

ベ「……グス、みんなごめん。」

ベルはさらに申し訳なさそうに謝る。これから、ヨーギラスはヒカリ達とどう打ち解けていくのか前途多難である。

ニヤース「それはそうと、このヨーギラス。またおみゃー達と旅がしたいって言うってたニヤ。」

サ「えっ、そうなのか?」

ヨーギラス「ヨー、ヨーギ!」

ニヤースの通訳によると、ヨーギラスはまたサトシ達の仲間に入りたいと言っているようだったので、サトシがヨーギラスに確認する。すると、ヨーギラスは、うんと頷く。

サ「俺は別にかまわないけれど、バンギラスはどうするんだ？」

今度はバンギラスの方を向くと、

バンギラス「バンギ、バンギヤ。」

バンギラスはニツコリ笑顔で頷く。どうやら、ヨーギラスがサトシ達と旅することに抵抗はないようだ。

ヒ「あたし達も構わないわ。」

コトネ「仲間はたくさんいる方が楽しいってことね。」

ケンタ「俺たちも大丈夫だぜ。」

マリナ「サトシのヨーギラスのこと、もっと知りたいしね。」

サ「そっか、それじゃあまたよろしくな。ヨーギラス。」

ピ「ピカピカ！」

ポツチャマ「ポチャポーチャ！」

キバゴ「バゴゴ！」

バクフーン「バアクバク！」

ムウちゃん「ムウムウ！」

サトシ達はヨーギラスを快く歓迎する。

ヨーギラス「ヨー！」

ヨーギラスは満面のニッコリ笑顔をサトシ達に向ける。こうして、サトシ達にまた新たな仲間が増えた。そして、サトシ達はようやくシロガネタウンに到着したのだった……

続いて後書きシヨー

大会直前の波乱〜後編〜（後書き）

サ「それにしても、ロケット団のニヤースが俺達の仲間になるとはな。」

ニヤース「ニヤーもびっくりだニヤ。」

天「これはBWでニヤースがロケット団をクビになって、サトシ達に救出された回を参考にして書いたものだ。まあ、今後の展開がよく分からないから、ニヤースがこの後裏切る可能性がゼロではないけどな。」

ニヤース「ニヤーはもうクビになった身だニヤ。悪さをする必要もないし、裏切る必要もないニヤ。」

サ「どうだかな。俺達はそれで何度もお前達には騙されてるしな。」

ニヤース「まあ、それを言われると仕方ないニヤ。」

天「えらく冷静だな。」

ニヤース「ニヤーは教養のあるポケモンだニヤ。最低限の考え方は出来る方だニヤ。」

天「まあ、それには並々ならぬ努力も積み重ねてるしな。それでは時間になりましたので、この辺でお開きといたします。」

サ・ニヤース「次回もポケモンゲットだぜ（だニヤ）！」「」

シロガネタウン到着！（前書き）

元ロケット団のニヤース、かつての仲間だったヨーギラスを仲間に加えたサトシ達は、『ワールド・チャンピオン・リーグ』と『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の予選第1選考会が開催されるシロガネタウンに到着した。さて、今回のお話はどうなることやら……

この話にラングレーが再登場しますが、かなり嫌味な描写になっています。ラングレーファンの方は見ないことをお勧めします。

シロガネタウン到着！

サトシ達は『ワールドチャンピオンリーグ』の予選第1選考会、『ワールドチャンピオンフェステバル』の予選第1選考会が開かれるシロガネタウンに到着した。

カ「コンテストの受け付けは向こうだから、ここで一旦お別れね。」

マリナ「また後で、合流しましょう。」

ハル「サトシ、わたし達がいなかったら寂しがないですよ。」

サ「寂しがないって（汗）」

ケンタ「アハハハハ・・・。」

カスミ達コンテスト組は、リーグとは別々に分かれている受付に向かうため、サトシ達バトル組と別れた。ちなみに、カスミ達にはリュウカ、カズナリ、タケシ、そして新しく仲間になったニヤースが同行している。

サ「俺達も受け付けに行こうぜ。」

コトネ「そうね。」

サトシ達バトル組も受付で出場の手続きを済ませに行くことにした。

ケンタ「なあ、アイリス。」

アイ「何、ケンタ？」

ケンタ「お前もこの第1選考会に出場するのか？」

アイ「うーん、そうね．．．。」

ケンタの突然の質問に、アイリスは深く考え込む。

デ「アイリスも出場しなよ。世界大会の予選なんて、滅多に挑戦することなんてないんだし。」

マサ「僕からも勧めるよ。」

デントとマサトがアイリスの出場を強く勧める。そんな2人のためにアイリスは、

アイ「．．．分かったわ。アタシもサトシ、ケンタ、コトネと一緒にこの第1予選会に出るわ。キバゴ、それでいいわよね。」

キバゴ「キバ！」

第1選考会に出場することを決めたようだ。キバゴもそれを了承する。

サ「アイリスも出るのか。」

ケンタ「まだ当たるか分からないけれど、俺一回アイリスとバトルしてみたかったんだ。」

コトネ「それじゃあ、私たちはライバル同士になるってことね。」

アイ「ええ、でも仲間だからと言って手加減はしないわよ。」

コトネ「それはわたしもってことね。」

サ「臨むところだ。なっ、ピカチュウ。」

ピ「ピツカ！」

ケンタ「俺達も負けてられないな、バクフーン。」

バクフーン「バクフウウン！」

サトシ、アイリス、コトネ、ケンタは早くもお互いに闘志を燃や
す。

ベ「ちょっと、わたしもいるってことを忘れないですよ。」

サ「あっ、ごめんごめん。」

ベルも加わり、開会前から激しさを増す第1予選選考会となる。

マサ「ねえ、みんなあれ見て。」

サ「どうしたんだ、マサト？」

マサトの指さす方向に顔を向けると、そこには一人の白髭を生や
した老人が子供達に風船を配っている姿が見えた。

サ「タマランゼ会長！」

その老人とは、ポケモンリーグ大会責任者であるタマランゼ会長だった。サトシ達はタマランゼ会長の姿を見つけると、すぐさま彼のもとに駆け寄った。

タマランゼ「おや、君はサトシ君ではないかの。それに、ジョウトリーグに出場したケンタ君にコトネちゃん、サトシ君と一緒に旅をしていたアイリスちゃん、イッシュリーグに出場したベルちゃんも久しぶりじゃな。」

サ・ケンタ・コトネ「「お久しぶりです。」「」」

アイ「アタシ達のことを覚えていてくれてたなんて光栄です。」

ベ「ホントにお久しぶりです。」

サトシ達は再開したばかりのタマランゼ会長に丁寧に挨拶をする。BWで会長がイッシュ地方に来るかどうかは現時点で不明だが、この『主人公総受け』ではイッシュ地方にきてリーグの大会責任者をしていくことにしておく。

タマランゼ「ここにいるということは、サトシ君たちは『ワールドチャンピオンリーグ』の予選第1選考会に出場するんじゃない。」

サ「はい。世界じゅうのトレーナーが集まるこの『ワールドチャンピオンリーグ』で俺達の実力がどこまで通用するか試してみたいんです。」

タマランゼの質問にサトシが代表して簡潔に答える。

タマランゼ「世界中のトレーナー達とこの様な大会でバトルする機会は滅多にないからの。いや、結構なことじゃ。」

ケンタ「それで会長はどうしてここで風船配りを？」

タマランゼ「わしはこうして子供たちと触れ合うことが大好きでの。まあ、公務の息抜きと一種のファンサービスみたいなものじゃ。それにしても、こうして子供達や出場トレーナー達と交流を深められるとは。いやあ、たまらんな。」

子供A「おじいさん、風船まだ？」

子供B「私達にも、風船ちょうだい。」

タマランゼ「おやおや、それはすまんかった。」

タマランゼ会長は、子供達に急かされ、風船を配る。そして全員に風船を配り終わると再び視線をサトシたちの方に向けた。

タマランゼ「それじゃあ、わしはそろそろ戻る時間じゃから、これにて失礼するぞ。おお、練習場はすぐそこじゃから、是非最終調整に使うといい。」

サ「はい、何から何までありがとうございます。」

タマランゼ会長と別れた後、サトシ達は教えてもらった練習場に向かった。そこにはコンテスト組の姿もあり、アイリスが選考会に出場することを報告すると、コンテスト組全員からゲキを飛ばされた。とりあえずサトシ達はそこで大会前日の最終調整をすることに

した。ところが・・・

ラングレー「アイリスの子供！ また性懲りもなく、現れたわね。」

アイ「だあかあ、それを言うなら子供のアイリスでしょ！ 別にいいでしょ。アタシだって出場するんだから。それとも、アタシに負けるのが怖いのかしら・・・。ホント、子供ね。」

ラングレー「そうよ、子供よ。アンタなんか、本番で叩きのめしてやるんだから。」

アイ「その言葉、そっくりそのまま返してあげるわ。覚悟なさい！」

偶然同じ練習場にいたラングレーとアイリスがいつものようににらみ合いを始める。見慣れた光景にサトシ達は全員苦笑を浮かべるしかなかった。その後、ケンタが預けているポケモン達の様子を見にポケモンセンターに行くと言いサトシ達から離れて、ケンタ以外は開催前日の最終調整をすることにした。

ラングレー「でも、残念ね。アンタのキバゴをコテンパンにやっつけてやるうと思ったけど、そのりゅうせいぐんじゃあ、使い物にならないわね。」

アイ「なんですって！ キバゴ、アイツに目にも見せてやりましょー！」

キバゴ「キバツ！」

ラングレーの挑発に乗っかるようにアイリスはキバゴのりゅうせいぐんを発動させた。となれば当然、

ポツチャマ「ポチャア……。ポチャアアアア！」

ポツチャマにりゅうせいぐんの失敗作『りゅうせい』が落ちてくる。ポツチャマはすぐさまりゅうせいから逃げる。その先には、

ラングレー「えっ、ちょっと!? こっちは来ないでよ！」

なんと、逃げるポツチャマはラングレーに向かっていただけだった。

ポツチャマ「ポチャー！」

りゅうせいはいつものようにポツチャマに当たった。だが、今回は、

ラングレー「キヤアアアア！」

ラングレーも巻き添えを喰らった。

ニヤース「あのジャリガール。大丈夫かニヤ？」

ニヤースは巻き添えを喰らったラングレーを心配する。

ラングレー「もう！　なんでよりによってドラゴンタイプの技を受けなくちゃならないのよ。」

ラングレーは、りゅうせいの巻き添えを喰らったことに苛立つ。ドラゴンバスターを名乗る彼女が、ドラゴンタイプの技を自らが受けるというのは、屈辱のなにもでもない。

ラングレー「それにこのポツチャマ。逃げるんならもつと安全なところへ逃げてよね。全く、躰けてるトレーナーの質を疑っちゃうわ。」

ラングレーのこの発言に、

ヒ「何ですって!」

ポツチャマ「ポチャー!」

ヒカリが逆上する。ポツチャマも自分と主人のヒカリが馬鹿にされたことにヒカリに同調する。

ラングレー「まあ、いいわ。おい、アイリスの子供!」

アイ「だから、何度言わせたら分かるのよ。それを言うなら、子供のアイリスでしょ。」

ホント、ラングレー。もっと、言葉を勉強しましょう。 中高の国語の成績が壊滅的だった作者より。

ラングレー「本番でアンタをボコボコにしてあげるから、覚悟しろ!」

アイ「さっきも言ったけど、その言葉そっくりそのまま返してあげるわよ!」

アイリスとラングレーはまたお互いに睨みあう。

ヒ「アイリス、あたしも応援するわ。あんな逆恨み女に負けたら許

さないからね！」

アイ「ありがとう、ヒカリ。大丈夫よ、あんな奴なんか絶対に負けないから！」

ヒカリは先程自分とポツチャマを馬鹿にされた怒りからか、アイリスにゲキを飛ばす。アイリスはヒカリという有力な応援を手にした（爆）

ラングレー「・・・まあ、いいわ！ 本番で当たるのが楽しみね。」

ラングレーは捨て台詞を吐きながら、サトシ達から離れていった。

ヒ「なんなのよ、あの女。」

ヒカリはこの一件で、ラングレーに対する嫌悪感が湧いたようだ。こんなふうに険悪なムードはあったものの、サトシ達はしばらくの間練習を続けた。

マリナ「そういえば、ケンタが戻ってこないわね。」

サ「あれから、随分経つけど一体どうしたんだろう？」

ケンタはサトシ達が練習を始める前にポケモンセンターに行つて以来、戻ってこないのだ。

デ「行き違いになるかもしれないけれど、とりあえずポケモンセンターに行ってみよう。」

サ「そうだな。あつ、ポケモン達はどうしよう・・・。」

ヒ「それなら、あたし達が面倒見てあげるわ。もう少し練習したいし。」

ニヤース「それにポケモンと話せるニヤーがいれば、何か問題があっても対処しやすいニヤ。」

ハル「だから、サトシ達はケンタを呼びに行つて。」

サ「そうか、サンキューな。」

サトシ、マリナ、デントの3人は、ポケモン達をタケシ達に任せ、ケンタを連れ戻しにシロガネタウンのポケモンセンターに向かった。ケンタのみに何が起きたのかは、それはまた次回……

続く

シロガネタウン到着！（後書き）

サトシ達は無事にケンタと合流できるのか・・・

第1選考会開幕！（前書き）

ケンタの身に何が！？

そして、あの勘違いポケモン・ソムリエールが初登場！

第1選考会開幕！

サトシ達はケンタがいるであろうシロガネタウンのポケモンセンターの中に到着した。

マリナ「ケンタは何処かしら？」

サトシ「電話ボックスを探してもいないみたいだしな。」

デント「一体どうしたんだろうね・・・。」

どうやらケンタはポケモンセンターの中にはいなかったようだ。

デント「マリナ。ケンタの手掛かりになるようなものはないかい？」

マリナ「あっ、わたしとジュンイチと一緒に撮った写真があるけれど。」

マリナはそう言うと、一枚の写真を取り出す。その写真はケンタ、マリナ、ジュンイチの3人が仲良く写っていた写真であった。

サトシ「そっか、それを頼りにケンタを探すんだな。」

デント「グット・テイスト！ その通りだよ、サトシ。」

デントは指をパチツと鳴らしながら言った。

マリナ「そうするのが一番ね。それじゃあ早速・・・。」

マリナがサトシ達に探しに行こうと言おうとした途端、

デント「イツツ・ディテクティング・タアアアイム！」

デントの探偵心（？）にスイッチが入ったようだ。

マリナ「で、デント？」

サトシ「ああ、いつものことだから気にするな、マリナ。」

デントの変貌振りに一瞬キョトンとするマリナだが、サトシにいつものことだからと言われる。これはアイリスの言葉を借りれば、「面倒くさいのが出た」と言った所か……

デント「真実はいつも一つ！ この名探偵デントの名に懸けて、ケンタを見つけてみせる！」

幼児化した某高校生探偵や祖父が超有名人な某高校生探偵の台詞が少々混じっているのは置いといて、デントは早速ケンタを探す状態に入った。

マリナ「デント……。」

マリナはデントの変わり様に引き気味だった。

サトシ「と、とりあえず、ケンタを探そうぜ。」

サトシ、マリナ、デントの3人は、マリナが持っていた写真を頼りに聞き込みを始めた。何度か聞き込みを繰り返していると、一人の少年がケンタらしき人物が裏庭に出ていくのをみたということ

知り、

デント「僕たちも裏庭に行こう。」

サトシ達は、ポケモンセンターの裏庭に行くことにした。ちなみに裏庭は、ポケモンの世話をしたり、トレーナーやコーディネーター同士の交流を深めることが主目的だが、一応バトル用のスペースもある程度は確保されているので、ポケモンバトルをすることもできる。サトシ達は、ポケモンセンター内部から出て、裏庭に到着した。すると、

ケンタ「も、もう勘弁してくれ。」

遠くからでもわかる大きな声で、ケンタが悲痛に叫ぶのが聞こえた。

サトシ「今の、ケンタだよな？」

マリナ「うん。」

デント「とにかく、行ってみよう。」

サトシ達はケンタの声がしたほうに行ってみた。そこに行ってみると、いかにも困り果てた表情のケンタとそしてサトシ、デントが知っているある人物が腕を組んで仁王立ちしていた。

サトシ・デント「カ、カベルネ!?!」

その人物とは、イツシュ地方で出会ったポケモンソムリエール・カベルネだった。サトシ、デントは彼女の姿に気づき、思わず声を

上げる。

カベルネ「あああああ！ いつも渋いテイストのピカチュウと一緒に
緒のトレーナーと、そして憎きデントー！」

一方のカベルネもサトシとデントに気づく。

マリナ「だ、誰？」

カベルネとは初対面のマリナは当然キョトン顔。その後、サトシからカベルネのことを聞き、マリナはとりあえず彼女について理解した。ただ、そのあまりの理不尽な過去に苦笑をうかべていたか
いなかったとか・・・

マリナ「ねえ、ケンタ。とりあえず、どうしてこうなったか説明し
て。」

ケンタ「ああ、それは・・・。」

ケンタはこれまでの経緯を説明し始めた。それは遡ること、ケン
タがポケモンセンターに到着して、手持ち及び預かりのポケモンの
チェックを済ませた直後のことだった・・・

回想シーン

ケンタ「ここが、裏庭か。結構広いな。」

ケンタはジョーイから裏庭にはバトルスペースがいくつか整備されていることを聞き、練習がてら他のトレーナーとバトルをしようと裏庭に出ていた。

ケンタ「これならポケモン達の調整にうってつけだぜ。」

ケンタがポケモン達の調整に取り掛かろうとしたその時だった。

？「ちよつと、その人．．。」

ケンタ「えっ、誰？」

どこからかケンタを呼ぶ声がしたので、ケンタはその方へ振り向く。すると、誰かが手招きしているのが見えた。ケンタは手招きされるがままに、そこに行った。

ケンタ「あの、君は誰？」

カベルネ「私はカベルネ。イッシュ地方でポケモン・ソムリエールをしているわ。」

ケンタ「ポケモン・ソムリエール？」

カベルネ「ポケモン・ソムリエールとは、ポケモンの特徴やトレーナーとの相性診断をする女性のポケモン・ソムリエのことよ。」

カベルネは簡単にポケモン・ソムリエールについて説明する。

ケンタ（ポケモン・ソムリエール．．．。デントみたいなことを女

性がしているってことか。」

ケンタは今自分と旅をしているデントを連想する。

カベルネ「ポケモン・ソムリエはイツシュ地方でしか根付いていない職業だから、もしよかつたらもつと教えてあげるけれど。」

ケンタ「別にいいよ。知り合いにポケモン・ソムリエがいるから。」

ケンタはカベルネにそう言った。だが、敢えてデントの名前は出さなかった。もちろんだが、この時点でカベルネがデントに対して強いライバル心を抱いているということはケンタは知らない。

カベルネ「そう、それなら話が早いわ。私があなただの手持ちポケモンを診断してあげる。」

ケンタ「えっ!? でも……。」

カベルネの突然の提案にケンタは躊躇する。身近にはポケモン・ソムリエAランクのデントがいるので、他のポケモン・ソムリエ（又はソムリエール）の意見を聞く必要はないと判断したのだろう。

カベルネ「多くの人のアドバイスを聞いてそれを活かすことも、トレーナーとしての成長に繋がると思っけれど。」

カベルネは強くケンタにポケモンの診断を勧める。

ケンタ「確かに、それも一理あるな。それじゃあ、よろしく頼むぜ。」

カベルネの言うことも間違いではないので、ケンタはカベルネにポケモンの診断をしてもらったことにした。

カベルネ「それじゃあ、ボンジュール・テイステイングタイム・シルブプレ。」

カベルネは自分のテイステイングの際の決め台詞を言って、ケンタの手持ちポケモンのテイステイングをする体勢に入る。

ケンタ「みんな、出てこい！」

ケンタは手持ちのポケモンをカベルネの目の前に差し出す。

カベルネ「うーん、全員見た目は悪くないわね。」

カベルネのケンタの手持ちポケモンに対する第一印象は、まずまずのようだ。

カベルネ「まずは、このリーフィアからね。」

カベルネはリーフィアの診断から始める。

カベルネ「……………」

ケンタ「……………」

カベルネはじーっとリーフィアを見つめ、ケンタはそれを固唾を飲んで見守る。リーフィアは見つめられているのには一切動じずじっとしている。

カベルネ「駄目ね。この無表情さ、無味無臭の何の味もないテイストね。トレーナーとの相性もはつきり言って最悪ね。」

ケンタ「ええええ!?!」

ケンタはカベルネからリーフィアとの相性は最悪だと聞き、驚きの表情を見せる。

カベルネ「それにこの耳と尻尾、ビジュアル的に合っていないわ。」

カベルネはそう言いながら、リーフィアに気安く触れる。主人以外のトレーナーからいきなり触れられるとなると当然、

リーフィア「リィ、リィィィィィィィィ!」

カベルネ「キヤアアアア!」

ケンタ「お、おい、リーフィア!?!」

リーフィア怒りのリーフストームがカベルネを襲う。ケンタは慌てて止めに入り、その場はすぐに事をおさめた。

カベルネ「随分乱暴なリーフィアね。性格も最悪だわ!」

いや、他人のポケモンを気安く触ったあなたの方が悪いと思うけれど……

カベルネ「とにかく、次よ次!」

カベルネは次のポケモンの診断に取り掛かる。次に選んだのはス

ピアーだ。カベルネはリーファイアの時同様、スピアーをじーっと眺める。そして、

カベルネ「眺めているだけじゃ、分からないわね。」

カベルネはそういうと、自らの舌でスピアーのテイ스팅をしようとする。ム〇〇ロウか！ by・天の河

スピアー「スピ！？」

スピアーは舌を出しながら迫るカベルネに驚く。そして、カベルネを敵だと思い込み、思わず自らの2本の針でカベルネを攻撃した。

カベルネ「痛い！ 痛い！ もう、このスピアーも最悪のテイストだわ！」

だから、ポケモンを舐めようとするあなたが悪いって……

ケンタ「本当に大丈夫なのかよ……。」

ケンタはカベルネのテイ스팅に疑問を抱き始めた。まあ、当然と言えば当然か……。その後カベルネはあまりの扱いの酷さにケンタの手持ちポケモン達に攻撃され、悲惨なものとなった。

ケンタ「いよいよ最後だな。バクフーン……。」

バクフーン「バク……。」

今までの光景を目の当たりにして、ケンタとバクフーンのテンションはガタ落ちだった。

カベルネ「最後はこのバクフーンね。今までが最悪だっただけに、この子がどんなテイストを見せてくれるかが楽しみね。」

と言い、カベルネはバクフーンのテイスティングを始める。だがすぐにそれを止め、

カベルネ「じっくりテイスティングするまでもないわ。この渋い感じに鋭い目つき、今までのあなたのポケモンの中で最悪のテイストだわ。」

ケンタ「お、おい、俺とバクフーンは俺がトレーナーとして旅立った時から一緒にいて、苦勞も共にした仲間なんだぜ。そんなバクフーンがどうして最悪なんだよ。」

ケンタはカベルネのテイスティングの結果に異論を唱える。今までのポケモンでは何とか我慢できたが、バクフーンはケンタの一番の相棒のポケモンであるため、これだけは譲れなかった。

カベルネ「わたしのテイストに狂いはないわ。それに以前あなたとバクフーンと同じようなトレーナーとポケモンを診断したことがあるの。それとほとんど同じケースよ。」

ケンタ「まじかよ……。」

ケンタはまだ納得がいかなかった。

バクフーン「バク……(怒)」

すると、自分と大切な主人のケンタを馬鹿にされたことに対する

怒りで、バクフーンの中で何かが切れた。そして、

バクフーン「バァアアクウウウウ！」

バクフーンはカベルネに向かって怒りのかえんほうしやを放った。かえんほうしやをもろに喰らったカベルネは、黒こげになり、髪も即席のアフロヘアーに変化した（笑） 笑うな！ by・カベルネ

カベルネ「あああ、もう！ あなたの手持ちポケモン、全て最悪だわ。今から手持ちの総入れ替えよ！」

ケンタ「はあ！？ 無茶言うなよ。」

カベルネのあまりにも横暴さにケンタは頭を悩ませる。そして、現在に至ったのである。

回想シーン終了

サトシ「それで、こんな状況に・・・。」

サトシ、マリナ、デントは今の説明で大体の状況を把握した。尚、

今のカベルネはかえんほうしやを喰らってアフロヘアーのままである。

デント「ところで、カベルネ。今のランクはどうなんだい？」

カベルネ「い、一応、Bランクに上がったわよ。」

ズテーン！

サトシ「1ランク上がっただけかよ（汗）」

デント「それでも、一応上がったんだね（汗）」

サトシとデントは苦笑を浮かべるしかなかった。ただ、ポケモンソムリエのランクは1ランクあがるだけでもかなりの努力を必要とするので、デントはそれなりにカベルネを評価した。

ケンタ「手持ちの総入れ替えって、これから予選選考会だっつうのに、どうすればいいんだよ……。」

と、未だ困惑するケンタに、

デント「大丈夫だよ、ケンタ。僕のテイスティングでは、君とポケモン達の相性はバッチリだよ。」

デントはケンタに手持ちの総入れ替えをする必要はないと、フォロワーのテイスティングをする。

ケンタ「デント、サンキューな．．．。」

このデントのフォロワーは手持ちのポケモンを全否定され困惑しているケンタにとってはありがたいことだった。

カベルネ「間違ったポケモンソムリエのテイスティングを参考にするなんて．．．。残念ね．．．。」

マリナ「そう言うあなたが、一番聞き耳立てているけれど（汗）」

カベルネは口ではデントのテイスティングを否定するが、何気に聞き耳を立てている。そんなカベルネにマリナはただ苦笑を浮かべる。

カベルネ「まあ、手持ちの総入れ替えは見逃してあげるわ。そのかわり、この予選選考会でわたしのテイスティングが正しかったことを証明して見せるわ。覚悟なさい！」

そう捨て台詞を吐いて、カベルネはその場を去っていった。

ケンタ「．．．はあ、疲れた〜。」

ケンタはカベルネからの威圧から解放され、安心したのかその場

に崩れるように座り込んでしまった。

マリナ「大丈夫？ ケンタ……。」

そんなケンタをマリナが励ます。

サトシ「カベルネの奴、相変わらずだったな……。」

デント「うん。でも、1ランク上がったということはそれなりに彼女も努力を積み重ねてたんだね。」

サトシとデントは再会したカベルネについて、こう述べる。その後、サトシ達は練習場に戻り、ポケモン達の世話を任せていた連中と合流し、宿泊先の施設に戻り、明日から始まる予選選考会に備えた。そして、翌日……

タマランゼ「全国いや世界各国のトレーナー諸君、この大会で君たちの熱きバトルとポケモン達との巧みなコンビネーションを魅せてくれることを楽しみにしていますぞ。それでは只今より、『ワールド・チャンピオン・リーグ』および『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の開会を宣言する。」

合同で行われることになっていた『ワールド・チャンピオン・リーグ』と『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の開会式が無事に行われた。ここから、世界各国のトレーナー及びコーディネーター達による熱きバトルとパフォーマンスが繰り広げられることになる……

続いて後書きショー

第1選考会開幕！（後書き）

ケンタ「いよいよ、始まるんだな！」

サトシ「待ってたぜ、ようやく世界に向けての第1歩ってところか。」

天の河「おつ、早速気合十分だな。2人とも。」

ケンタ「この緊迫感で気合入れなくてどうすんだ。」

天の河「それもそっか。」

サトシ「俺としては、ケンタと決勝でバトルしたいな。」

ケンタ「まず、その為にも勝っていかないと。サトシ、俺とバトルするまで負けるなよ！」

サトシ「そっというケンタだって。」

天の河「さて、2人の熱き意気込みも聞けたところで、今回はお開きにします。次回もお楽しみに！」

予選ステージ1日目(1) (前書き)

予選選考会の予選ステージ) ややこしい表現ですが・・・、ついに開幕!

そんな中、サトシLOVEズの一人であるあの人の再登場だったり、大会史上醜い前哨戦があったりと面白描写満載です(笑)

予選ステージ1日目(1)

『ワールド・チャンピオン・リーグ』の予選選考会は、3日間の予選ステージの後、2日置いて、4日間の決勝トーナメントが行われる。予選ステージは全出場トレーナーを1プール3人ずつに分け、全部で16プールある。そのプール内で総当たりのリーグ戦をおこない、プール内での勝ち点上位1位のみが決勝トーナメントに進むことが出来る。ちなみに獲得できる勝ち点は、勝ちが3点、引き分けが1点、負けが0点となっている。また、勝ち点で並んだ場合は、KO勝ちの数、倒したポケモンの総数の順に順位を決定する。それでも決まらない場合は、予選ステージの翌日に確保しておいた予備日を利用して、1対1のシングルバトルで最終決定する。ただ、過去の大会記録で、1対1のサドンデスにまでなった例は、滅多にない。尚、使用ポケモンは、予選ステージ、決勝トーナメントともに1人3体までである。予選選考会の組み合わせは以下のとおりである。

1 『ワールド・チャンピオン・リーグ』の組み合わせ(一部のみ、????は一般出場者)

プールA

ケンタ、ラングレー、カベルネ

プールC

アイリス、モエ、????

プールE

ジュン、アニポケキャラA、????

プールI

コトネ、ジュンイチ、????

プールJ

シヨウタ、コウヘイ、サトシ

プールL

シューティー、ベル、リラ

一方、カスミ、ハルカ、ヒカリが出場する『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』は、全出場コーディネーターが予選のパフォーマンスステージに挑むのは通常のコンテストと一緒にだが、全出場コーディネーター72人を3日間さらに午前と午後に分けて行う。そこでの得点が上位16位以内に入れば、2日置いて、2日間のファイナルステージのコンテストバトルに進むことが出来る。予選選考会の組み合わせは以下のとおりである。

『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の組み合わせ（一部のみ）

1日目：ヒカリ（午前）、ハルカ（午前）、ケンゴ（午後）、サオリ（午後）

2日目：リリア（午前）、カスミ（午後）、シュウ（午後）、アニポケキャラB（午後）

3日目：ノゾミ（午前）、アニポケキャラC（午前）

* 両方の組み合わせでアニポケキャラと書かれているのは、今作品において未登場かつこの大会で出す予定のキャラです。また、この他にもアニポケキャラは多数出演する予定です。

組み合わせにより、1日目に試合のないサトシは、同じく1日目に試合のないコトネ、1日目の午後に試合が組まれたベル、2日目の午後に予選が組まれたカスミ、そしてタケシ、カズナリとともに息抜きでシロガネシティを散策していた。

サトシ「カスミ、タケシ、俺達がジョウトリーグでここに来たときとは街の雰囲気が違うな。」

タケシ「ああ、それには俺も驚いたな。」

カスミ「あたし達が前来た時は、こんなに沢山の一軒家やお店なんてなかったものね。」

サトシ、カスミ、タケシの3人はシロガネタウンの街の風景が様変わりしていることに驚きを見せる。

コトネ「以前まではジョウトリーグが開かれるとき以外は静かな街だったわ。今年、『ワールド・チャンピオン・リーグ』と『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の予選選考会が開かれると言うことで、以前から街の開発が進められていたの。あと、カスミン、ハルルン、ヒカリン達のようなコーディネーターのためのお店や施設も、ハウエンが発祥のコンテストが全国的に有名になった際に建設されたのよ。それで、にぎやかになったってことね。」

コトネは詳しくシロガネタウンのことについて、サトシ達に説明する。

カズナリ「この街も衰退の一途を辿ってたからね。」

さらにカズナリによれば、シロガネタウンも全国的な社会問題となっている少子高齢化の波に押され、過疎化が進んでいた。その対策として、政府の援助を受けての予選選考会の誘致、その補助金を活用した街の開発、その他若者の流出阻止のための施策を講じてきた。現在では、過疎化の進行にだいぶ歯止めがかかっている。

サトシ「アイリスのバトルまで、シロガネタウンめぐりしてみようぜ。」

女性陣「賛成〜。」

サトシ達は、本日1日目にバトルをすることになっているアイリスのバトル開始時間まで、シロガネタウンじゅうを巡ってみることにした。ちなみに、アイリスの初戦の相手は、モエである。サトシ達が、街めぐりを始めようとしたその時だった。

？「あれ、サトシ達じゃないかい？」

誰かがサトシ達を呼ぶ声がしたので、サトシ達はその方へ向いた。

サトシ「リ、リラ？」

サトシ達が向いた方向には、カントー・フロンティアブレーン『タワータイクーン』のリラがいた。サトシ達は、リラのほつに近づく。

サトシ「久しぶりだな、リラ。そういえば、リラも予選選考会に出場するんだっとな。」

リラ「そうだよ。僕もフロンティアブレーンの一人として、世界の

強豪たちとバトルしてみたかったからね。」

リラは、世界じゅうのトレーナーが集まるこの『ワールド・チャンピオン・リーグ』で自分の実力がどこまで通用するか試したかったようだ。リラの言葉からは、この予選選考会でベストを尽くす自信が感じられる。

カスミ「久しぶり、リラさん。」

コトネ「久しぶりってことね。」

リラ「お2人とも、久しぶり。」

リラ、カスミ、コトネは笑顔で再会の挨拶を交わす。一応、笑顔ではあるが、この3人は同じ人物・サトシに好意を寄せるいわゆる恋敵同士である。なので、笑顔のほかにただならぬオーラが彼女達から感じとれる。

カズナリ「（ボソツ！）ねえ、タケシさん。ここはあまり刺激を与えない方が……。」

タケシ「よく分かってるな、カズナリ。こういうのは第三者が下手に首を突っ込んだら、タダじゃすまされないからな……。」

カズナリとタケシは他の人には聞こえないような声で会話しながら、カスミ、コトネ、リラから少しずつ距離を置く。

サトシ「カズナリとタケシ、なんか少しずつ後ずさりしてるような……まっ、いつか。」

ピカチユウ「ピカア？」

サトシは、カズナリとタケシの行動の意図が分からなかったが、あまり気にしないことにした。

ベル「ねえ、あなたはわたしと同じプールに入ってたわよね。あつ、わたしはベルよ。これからよろしく。」

ベルは予選ステージで同じプールに入ったリラに話しかける。

リラ「こちらこそ、よろしく。お互いに良いバトルをしましょう。」

ベル「ええ、もちろんよ。リラちゃん。」

リラ「リラちゃん？」

ベル「ん？ どうしたの？」

リラ「あつ、いやぁ……。僕ちゃん付けで呼ばれることなんて滅多になかったから、慣れなくて……。」

ベル「あら、そうだったの。でもわたしはこれからあなたのことちゃん付けで呼ぶつもりだけど、それでもいいかしら？」

リラ「えっ、あつ、はい。」

リラは少し躊躇しながらも、ベルにちゃん付けで呼ばれることになった。

サトシ「ベル。リラはかなり手ごわい相手だぞ。」

タケシ「サトシも一度は敗れた相手だものな。」

サトシとタケシがリラの実力をベルに説明する。

サトシ「それにリラは、ポケモンと心を通わせることが出来るんだ。言葉を交わさずに心の中でシンクロして技を指示するんだ。俺もそれには苦戦したぜ。」

サトシはリラとのバトルを思い出しながら、ベルにリラの強さを説明する。

リラ「いやあ、サトシとピカチュウとの強い絆には負けるよ。」

リラは、謙遜しながら言う。

ベル「へえ、心の中で技の指示が出来るなんてすごいわ。ますます、バトルが楽しみになって来たわ。」

リラ「僕もだよ、ベルさん。」

ベルはリラの『ポケモンと心を通わせる能力』に興味を示し、リラはベルとのバトルが楽しみになってきた。お互いにバトルに対する意気込みが感じされたひと時だった。その後、サトシ達はリラと別れ、アイリス対モエの試合が始まるのでスタジアムに戻ることにした。

そのバトルはというと、ちょっとした事件が起きていた。それはプールBのラングレー対カベルネ戦の試合前の出来事だった。

ラングレー「おい、観客席にいるアイリスの子供。あたしのバトル振りを見て、せいぜい怖気づいておくんだな！」

カベルネ「デント。このバトルでわたしのテイストの方が正しかったってことを証明してあげる。覚悟なさい！」

ラングレーとカベルネは、観客席のどこかを指さしながら、それぞれのライバルに対して挑発とも取れる言葉を投げ掛ける。

ラングレー「ちょっと！ このバトルに勝ってアイリスの子供をギヤフンと言わせるのはあたしよ！」

カベルネ「何言ってるの！ バトルに勝って憎きデントをアツと言わせるのはわたしよ！」

ラングレー「いや、あたし！」

カベルネ「わたしよ！」

ラングレーとカベルネは傍から見ればどうでもいいこと言い争いを始めてしまい、しばらく続いた。次第に観客席から、「早く始めろ！」とか、「何やってんだ！」とか、数々の野次が飛び交い始

めた。

デント「ハハハ、僕達巻き込まれちゃったね。アイリス。」

アイリス「はあ、ホント2人と子供ね。しかも、指差してる方向全然違うし・・・(汗)」

アイリスとデントはただ苦笑。はっきり言って、2人にとってはとんだとばっちりである。一方、ラングレー、カベルネと同じプールに入って対戦する予定のケンタは、

ケンタ「俺、あんな2人とバトルするのか・・・。」

マリナ「ケンタ・・・。」

ケンタは対戦する2人に対し、お先真っ暗の状態になっていた。マリナはケンタに対して掛ける言葉が見当たらなかった。この前哨戦は、『ワールド・チャンピオン・リーグ』史上最も醜い前哨戦として語り告がれることになったとか。さて、この2人のバトルは大して取り上げるほどでもないので、ダイジェスト形式にて。 どういう意味よ！ by・ラングレー、カベルネ

<ラングレー対カベルネ戦ダイジェスト>

1・最初に出したポケモンは、ラングレーはコマタナ、カベルネはフタチマル。この勝負はコマタナの背後を取ったフタチマルがシエルブレードの一撃で、フタチマルが勝利。

2・ラングレーが次に出したポケモンは、ジョウト地方に入ってゲットしたグランプル。コマタナ戦での体力消耗が響いたフタチマル

は、グランブルの攻撃に耐えられず、戦闘不能。

3・カベルネが次に出したポケモンは、メブキジカ。ここで、ラングレーはグランブルから相性の良いツンベアーに交代。ツンベアーはメブキジカを氷技で圧倒し、勝利。

4・カベルネの最後のポケモンは、ムーランド。ドン・バトルのサトシ戦でも見せた3つのキバを組み合わせた攻撃で健闘するも、ツンベアーのパワフルな攻撃には敵わずあえなく敗北。この結果、3対1でラングレーの逆転勝利となった。

次の試合は、アイリス対モエである。この2人は、バトルフィールドに入る前に鉢合わせになったが、チョウジタウンの時の遺恨もあって、ピリピリしたムードが漂っている。

モエ「その色黒女！　ウチが勝ったら、サトシはんは貰っていくで。」

アイリス「色黒女って何よ！　アタシにはアイリスっていう立派な名前があるんだから！　それに勝手な事言わないでよ！」

モエの挑発に、思わずムツとくるアイリス。

アイリス「あなたには絶対に負けないわ！」

モエ「それはウチのセリフや。」

早くからこの両者は、恋敵同士ということもあり、火花を散らしている。そんな時だった。

サトシ「おつ、2人とも早速バトルモードだな。」

ある意味グッド(?)なタイミングで、サトシ達がアイリスとモエのもとへやって来た。

アイリス・モエ「さ、サトシ(はん)！？」

2人は思わず驚きの表情を浮かべる。

モエ「サトシはん、ホンマびつくりしたわ。」

アイリス「もう、心臓止まるかと思ったじゃない。」

サトシ「ごめんごめん。まさか、そんなにびつくりするとは思わなくてさ。」

サトシが鈍感ゆえに発生した一種のアクシデントといったところか。

モエ「まあ、ええわ。サトシはん、もしウチが勝ったら、ウチとデートしてな。」

サトシ「は、はあ！？」

モエは一方的にサトシとデートの約束をしながら、サトシに手を振りながらその場を去った。

アイリス「ちょっと、勝手に決めないでよ！」

アイリスはモエの去り際の行動に、さらにムツとくる。そして、

その場はサトシとアイリス2人だけになった。

サトシ「アイリス、言っておくけれどモエも手強い相手だぞ。」

アイリス「ええ、それは百も承知よ。それでも、アタシは絶対に勝つて見せるんだから！」

アイリスはサトシの忠告にも屈せず、勝利への闘志をさらに燃やす。

サトシ「その意気だぜ。アイリス。」

アイリス（あんな奴なんかには、サトシとデートはさせない！）

そして、アイリス対モエのポケモンバトルが幕を開ける・・・

続いて後書きショー

予選ステージ1日目(1) (後書き)

ラングレー・カベルネ「ちょっと、待ったああ!」

天の河「どした?」

カベルネ「どした?」じゃないわよ! なによ、この扱い!」

ラングレー「これじゃあ、あたし達単なるお粗末キャラじゃないのよ!」

天の河「だって、お前ら異常なくらいに他の作者様及び読者様から嫌われてんだぜ。これをネタにしない手はほかにないだろ。」

ラングレー「なによ、それ。あたし達は、お笑いキャラじゃないわよ!」

天の河「今後もこの設定で行くから。あと俺、大して実力もないクセに威張るカベルネが嫌いだから。」

カベルネ「えっ、それってわたしの設定作者の感情が入ってるってこと?」

天の河「まっ、そういうこと。」

カベルネ「そりゃないわよ!」

天の河「さて、うるさい2人ですが、今後とも暖かい目で見守っていただければ幸いです。まあ、無理だと思いますが・・・。」

ラングレー・カベルネ「」どついつ意味よ!」「

終われWWW

予選ステージ1日目(2) (前書き)

アイリス対モエ、いろんな意味で白熱するバトルの行方は!?

予選ステージ1日目(2)

審判「ただいまより、アイリス選手とモエ選手による予選ステージ
プールB第1試合を行います。(以下略)」

バトルフィールド上には、アイリスとモエがお互いに顔を見合わ
せている。そしてお互いにモンスターボールを手に取り、最初の1
体をフィールド上に繰り出す。

モエ「ほな行くで、キュウゴン！」

アイリス「出番よ、エモンガ！」

キュウゴン「キュウウウウ！」

エモンガ「エエエエモン！」

アイリスの最初のポケモンはエモンガ、モエはキュウゴンだ。タ
イプの相性としては、互角の組み合わせである。

サトシ「モエのやつ、あの時のロコンをキュウゴンに進化させてた
のか。」

タケシ「しかも、かなりのレベルだぞ。」

サトシはモエがキュウゴンに進化していたのに驚き、タケシは以
前モエがサトシとバトルした時のことと見た目から、モエのキュウ
コンを考察する。

コトネ「アイリン、大丈夫かしら？」

カスミ「コトネ、大丈夫よ。モエも結構クセのあるトレーナーだけど、アイリスはそれに負けにくいぐらいのトレーナーだもの。」

コトネ「そうね、アイリンならきつと勝てるってことね。」

観客席にいる仲間達は、心からアイリスの勝利を願う。

アイリス「エモンガ、先制攻撃よ！ めざめるパワー！」

エモンガ「エエエエンモオオオ！」

まず、先手を取ったのはエモンガ。エモンガのめざめるパワーがキュウコン目掛けて飛んでくる。

モエ「かわすんや！」

キュウコン「キュウ！」

キュウコンはそれを難なくかわす。

モエ「こっちも行くで。キュウコン、燃える攻撃・かえんほうしゃ！」

キュウコン「キュウウウコオオオン！」

キュウコンのかえんほうしゃがエモンガに襲い掛かる。

アイリス「かわして、エモンガ！」

エモンガ「エモッ！」

対するエモンガも先程のキュウコン同様に、難なくかわす。

モエ「アイリスとか言っただな。アンタのエモンガ、なかなかやるやないか。」

アイリス「あなたのキュウコンもね。」

最初の一撃の直後、アイリスとモエはお互いの実力を褒め称える。

モエ「ほなこれはどうや。キュウコンとっておきのあやしいかぜ！」

キュウコン「キュウウウウ！」

キュウコンは怪しげな雰囲気醸し出しながら、一見穏やかに見える風をエモンガに向ける。

エモンガ「エモ？ エモオオオオ！」

エモンガは怪しげな雰囲気に怯んでしまい、あやしいかぜをかわすことが出来なかった。

アイリス「エモンガ!?!」

エモンガ「エモ．．、エモ！」

エモンガはすぐさま立ち上がる。序盤ということもあり、勝負を決定づける一撃にはならなかったようだ。

モエ「まだまだや！ キュウコン、燃える大技・だいもんじ！」

キュウコン「キュウウウウコオオオオン！」

モエはさらに攻勢を強め、キュウコンにほのおタイプトップクラスの大技・だいもんじを指示。

エモンガ「エンモオ！」

だいもんじはそのままエモンガに直撃する。

デント「アイリスにとって、だいぶ不利なテイストになってきたね。」

リュウカ「それに、なんだかだいもんじが普段より威力が増している気がするんですけど。」

デント「きつとあやしいかぜの追加効果だろう。あやしいかぜは時々、全ての能力をあげることがあるんだ。」

ゲーム版のあやしいかぜは、1割の確率で、攻撃、防御、素早さ、特殊攻撃、特殊防御、5つ全ての能力を上げることがある追加効果がある。観客席サイドからも分かるように、アイリスが不利な状況であることは明らかだ。

キュウコン「キュウウウウウ！」

キュウコンはエモンガにトドメの一撃を喰らわせようと接近してくる。

アイリス「（ここは仕方ないわ……。）エモンガ、ボルトチェンジ！」

エモンガ「エンモ！」

エモンガはボルトチェンジで接近してくるキュウコンに攻撃を与え、自分はボールの中へと戻っていった。キュウコンの残り体力を考えれば、会心の一撃とまではならない。だが、エモンガの蓄積されたダメージ、今後の攻略をも考慮に入れば、最善の策と言えるだろう。ちなみに、ボルトチェンジは自らがボールに入った後、強制的に別のポケモンがランダムに繰り出される。次に出てきたアイリスのポケモンは、

ドリュウズ「リュウズ！」

ドリュウズだった。キバゴは元からボール外に出ているため、必然的にドリュウズになる。はがねタイプを持つドリュウズにとってはほのおタイプのキュウコンに対して相性的に不利であるが、ドリュウズはじめんタイプの技を使えるので、キュウコンにとっても不利である。この両者の対決も、相性的に互角と言っていいたろう。

アイリス「ドリュウズ、ドリルライナー！」

ドリュウズ「リュウウウウズ！」

ドリュウズがドリルライナーで、キュウコン目がけて突進してくる。

モエ「かわすんや、キュウコン！」

キュウコン「キュウ！」

キュウコンはそれをあっさりかわした。だが、

アイリス「今よ！ ドリユウズ、きあいだま！」

ドリユウズ「ドオオオリユウウ！」

キュウコンの背後をとったドリユウズはきあいだまでキュウコンをさらに攻撃。先程のドリルライナーは、キュウコンの背後をとるための策だった。

キュウコン「キュウウウウ！」

きあいだまは、そのままキュウコンに直撃。至近距離かつかなりの威力を持つ攻撃はまさに会心の一撃といった所か。

キュウコン「キュウ．．．！」

モエ「キュウコン！」

キュウコンはそのまま地面に叩きつけられ、ダウン。

審判「キュウコン、戦闘不能。ドリユウズの勝ち！」

審判がキュウコンの戦闘不能の審判を下す。

モエ「なかなかやるなやないか．．．。」

モエは改めてアイリスの実力を噛み締める。

モエ「せやけど、ウチのポケモンはほのおタイプばかりと思うたら大間違いやで。このポケモンはどうや！」

モエが次に出したポケモンは、

スターミー「フウ！」

スターミーだ。じめんタイプのドリユウズには不利な相手である。

アイリス「スターミーか。ここでエモンガに替えてもいいけれど、エモンガはさっきのでかなり体力を消耗してるわ。」

アイリスは、みずタイプの弱点であるでんきタイプのエモンガに後退させることを考えるが、先程のキュウコン戦でかなり削られた体力がネックとなっている。

ドリユウズ「リュウズ！」

アイリス「ドリユウズ？」

ドリユウズはアイリスに何かを伝えるようにアイリスに言っている。それはまるで「俺に任せろ！」と言っているようだ。

アイリス「ドリユウズ、まだやれるの？」

アイリスはドリユウズの気持ちを汲み取り、ドリユウズに続投の意思を確認する。

ドリュウズ「リュウズ！」

ドリュウズはうんと頷く。ドリュウズの答えは、「やる！」だ。

アイリス「分かったわ、あなたに賭ける！」

アイリスはドリュウズの気合の入れようを見て、続投を決めた。

モエ「敢えて相性の悪いポケモンで向かおうってわけやな。サトシはんと旅してただけのことはあるやないか。」

萌えはアイリスを、相性にはこだわらずに真正面で立ち向かってくるサトシの姿を重ねていた。そして、両者は再びバトルモードに入る。

モエ「ほんなら、遠慮なしにいかせてもらっで。スターミー、かけぶんしん！」

スターミー「フウウ！」

スターミーはまず、ドリュウズをかげぶんしんでかく乱させる。

ドリュウズ「リュ、リュズ!？」

スターミーのかげぶんしんは、ドリュウズの周りを取り囲む。

モエ「今や！ スターミー、みずてっぼう！」

スターミー「フウ！」

スターミーのみずてっぼう。四方八方からの攻撃にかげぶんしんに躊躇していたドリュウズは、

ドリュウズ「リュウウズ！」

そのまま、直撃を喰らってしまった。みずてっぼうの威力はそんなに高くはないが、かげぶんしんを組み合わせた四方八方から喰らっては、ひとたまりもない。まさに、『塵も積もれば山となる』である。

ドリュウズ「リュウ、リュウズ……。」

その後もスターミーのかげぶんしんとみずてっぼうを組み合わせた攻撃に苦戦、ドリュウズのダメージは蓄積していく。だが、ドリュウズは根性で辛うじて持ちこたえており、少しずつではあるが、スターミーの体力も削っていつている。

アイリス（ドリュウズの体力も残り少ないわ。）

ドリュウズの残り体力を心配し、次の攻撃に悩みに悩むアイリス。

アイリス（一体どうすれば……。）

ドリュウズ「リュウズ……。」

悩みに悩みつつも、アイリスはドリュウズとともに次のスターミーの攻撃に備えていた。

モエ「スターミー、もう一度かげぶんしん！」

スターミーはかげぶんしんまた作る。どうやら今度の攻撃も、か
げぶんしんの組み合わせでいきそうだ。

モエ「トドメのみずてっぼうや!」

スターミー「フウウウウ!」

再び分身・スターミーたちの攻撃が、ドリュウズに襲い掛かる。
だが、

アイリス「ドリュウズ、あなをほるでかわして。」

ドリュウズ「リュウズ!」

モエ「なんやて!?!」

ドリュウズはアイリスの指示通りに、あなをほるでみずてっぼう
を見事にかわす。モエは突然のアイリスの奇策に驚きの表情を浮か
べる。

スターミー「フウ!?!」

モエ「落ち着くんや、スターミー。」

攻撃をかわされなおかつみずてっぼうがドリュウズのいた場所で
跳ね返り、かげぶんしんが解けてしまったことに動揺を隠せないで
いるスターミー。と、そこへ、

ドリュウズ「リュウズ!」

ドリュウズが地上へと姿を現した。

アイリス「今よ、ドリュウズ！ ドリルライナー！」

ドリュウズ「リュウウズウウウウ！」

そしてすぐさま、ドリルライナーでスターミー目掛けて攻撃する。

スターミー「フウウ！」

ドリルライナーはスターミーにクリーンヒット。今までの蓄積されたダメージと重なり、スターミーはダウンした。そして、

審判「スターミー、戦闘不能。ドリュウズの勝ち。」

スターミーに戦闘不能の審判が下された。これにより、モエのポケモンは残り1体、アイリスにリーチがかかった。その上、アイリスはまだ1体も倒されておらず、俄然アイリス有利の状況だ。

コトネ「アイリンにリーチがかかったわ」

デント「あと1体を倒せば、アイリスの勝ちだね。」

サトシ「だけど、モエも最後まで粘りのあるバトルをするからな。アイリスとて、油断はできないぜ。」

タケシ「サトシも最後のポケモンで苦戦してたものな。」

サトシ、タケシは以前のバトルのことを思い出す。その時モエは、最後のポケモンにエレブーを出した。このエレブーは相手がほのお

タイプに対抗してみずタイプのポケモンを出した時のためのポケモンで、サトシはその裏を読む形でゴマゾウを出したが、モエはマグマグに交代し、倒されてしまったという経緯がある。モエはほのおタイプをこよなく愛する熱血トレーナーではあるが、一方でほのおタイプの相性対策を講じてくるといふ冷静さも兼ね備えている。

モエ「ウチの最後のポケモンはこれや！」

モエが最後の1体を選んだポケモン、

エレブー「エレエエエエ！」

先程話題が上がっていた、エレブーだった。じめんタイプのドリユウズに対して、でんきタイプのエレブーは最後のポケモンとはいえ無謀ではあるが、このことが決して無謀ではなかったことをこの時モエ以外知る由もなかった。

アイリス「一気に決めるわよ！ ドリユウズ、あなをほる！」

ドリユウズ「リュズ！」

ドリユウズは地中深くへと姿を消した。

エレブー「エレ．．．。」

エレブーはじっと待つ。しばらくして、

ドリユウズ「リュウウウズ！」

アイリス「ドリユウズ、ドリ．．．。」

アイリスがドリルライナーを指示しようとした時だった。

モエ「今や、エレブー！ れいとうパンチ！」

アイリス「な、なんですって!？」

モエはなんとエレブーにれいとうパンチを指示したのだ。これにはアイリスも思わず指示を途中でやめてしまう。

エレブー「エエエエレエエ！」

モエの指示の通り、エレブーはれいとうパンチを繰り返した。

ドリユウズ「リュウウウズ！」

エレブーのれいとうパンチは、ドリユウズにクリーンヒット。ドリユウズは飛ばされて、そのまま地面に叩きつけられた。

ドリユウズ「リュウズ。。。」

審判「ドリユウズ、戦闘不能。エレブーの勝ち。」

スターミー戦で蓄積されたダメージも重なり、ドリユウズはエレブーに一撃で倒されてしまった。

カスミ「モエ、エレブーにれいとうパンチを覚えさせていたのね。」

デント「アイリスの残りポケモンは、エモンガとキバゴ。どちらもこおりタイプには相性の悪いポケモンだ。エレブーの投入でアイリ

スにとって一気に不利なテイストになってきたね。」

アイリスの残りポケモンは2体、対するモエはエレブー1体のみ。アイリスが未だ数的優位を保っているが、エモンガはキュウコン戦で体力をかなり消耗しており、キバゴはこおりタイプに相性が悪いうえに能力でも圧倒的にエレブーに分がある。ドリュウズが倒されたことで、アイリスも油断できない状況になった。

モエ（サトシはんのゴマゾウとバトルしたときの経験が生きたわ。ありがとな、サトシはん。）

モエはサトシとのバトルを研究し、相性対策で投入したエレブー対策を相手がした時の為に、エレブーにれいとうパンチを覚えさせておいたようだ。相性対策には、そうとうの自信を持ってこのバトルに臨んでいることが伺える。

アイリス（エレブーがれいとうパンチを覚えていたことには驚いたわ。。。エモンガはキュウコンとバトルした時のダメージがある、キバゴは相性的にも能力的にも不利。。。）

アイリスが次のポケモンで悩んでいる時だった。

キバゴ「キバ、キバア！」

アイリスの頭に乗っていたキバゴが必死に声をかけている。

アイリス「キバゴ？　あなたがいつてくれるの？」

キバゴ「キバ、バアゴゴ！」

アイリスの問いかけに、キバゴはうんと頷く。

アイリス「キバゴ……。分かったわ、あなたを信じる。能力の差、相性の悪さなんて跳ね返してらっしゃい！」

アイリスが次に選んだポケモンはキバゴだ。

リュウカ「アイリスさんはキバゴ。これはかなり苦戦するバトルになりそうです。」

デント「うん。だけど、アイリスのキバゴはあの小さな身体とは比べ物にならないくらい強力な技を覚えている。それをいかに活用して、有利なテイストに持っていかかキーポイントになるよ。」

観客席もアイリスの勝利がかかったこのバトルを固唾を飲んで見守る。

モエ「エレブー、スピード勝負や！」

エレブー「エレエエエ！」

エレブーは持前のスピードを活かして、素早くキバゴに接近する。そして、

モエ「そこで、かみなりパンチや！」

エレブー「エエエエレエエブウウ！」

エレブーのかみなりパンチがキバゴに襲いかかる。

キバゴ「キバアアア！」

キバゴはエレブーのスピードに翻弄され、かみなりパンチをまとも食らう。

アイリス「キバゴ!？」

キバゴ「キバ、キバ……。」「

キバゴは数メートル飛ばされて、地面にたたきつけられた。

キバゴ「キバア……。キバ!」

だが、そこは持ち前の根性でキバゴは立ち上がった。

アイリス「ここから反撃よ。キバゴ、りゅうのいかり!」

キバゴ「キバツ!」

キバゴはりゅうのいかりを放つ体勢に入る。

キバゴ「キイイイイバアアアア!」

キバゴのりゅうのいかりがエレブーに向かっていく。だが、

モエ「かわすんや、エレブー!」

エレブー「エレエ!」

スピードでは圧倒的に勝るエレブーは、それを難なくかわす。そ

の後も、キバゴはエレブーのスピード攻撃に苦戦する。だが、そんななかでもエレブーが接近した時にみだれひつかきやりゆうのいかりを喰らわすなど、粘りを見せ、両者ともほぼ五分五分に体力を消耗していつている。

モエ「エレブー、一気に決めるで！」

エレブー「エレエエエ！」

再度、エレブーのスピード攻撃がキバゴに襲いかかる。そして、エレブーが直接攻撃の射程圏内まで迫ってきたところで、

アイリス「（ここは、やるしかない！）キバゴ、エレブーにげきりん！」

キバゴ「キイイイバアアア！」

ドラゴンタイプトツプクラスの威力を誇る・げきりんが発動。

エレブー「エレエエエエ！」

モエ「エレブー！？」

攻撃を仕掛ける途中だったエレブーは、げきりんをかわすことが出来ず、そのままクリーンヒット。体格差ではエレブーのほうが勝っているとはいえ、威力の高い技を喰らえばひとたまりもない。

アイリス「そのまま、一気に決めるわよ！」

キバゴ「キバア！」

げきりんは技を発動したポケモン自らがこんらん状態になるまで、1〜2回は続く技である。ちなみに、キバゴのげきりんは2回続いた。

エレブー「エレ．．．。」

2回目のげきりんが命中して、エレブーはダウンした。そして、

審判「エレブー、戦闘不能。キバゴの勝ち。よって、勝者・アイリス選手。」

モエの手持ち3体すべてが戦闘不能となり、アイリスの勝利が確定した。

アイリス「やったね、キバゴ。アタシ達、勝ったんだよ。」

キバゴ「キバ、キバ！」

バトルを終えたキバゴは真っ先にアイリスのもとに飛び込み、アイリスとともに勝利の喜びを噛みしめる。

モエ「御苦労やったな、エレブー。」

エレブー「エレ．．．。」

モエは、バトルを終えたエレブーを労う。負けはしたものの、アイリスとの白熱したバトルを繰り広げられたことで、清々しい気持ちになっている。

モエ「アイリスとか言うたな。アンタ、ほんまに強いな。」

アイリス「あなたのバトルっぷりもなかなかのものだったわよ。」

モエとアイリスはお互いに健闘を称えあう。

モエ「次のバトルも頑張りや。まあ、負けたらウチにも決勝トーナメント進出の望みが出てくるわけやけど。(ボソツ)それと、サトシはんはまだあきらめたわけやないで。」

アイリス「言ってくれたわね。サトシも渡さないし、次も負けないわよ!」

モエに釘を刺されたことで、さらに次のバトルに向けてさらには恋の闘志を燃やすアイリス。こうして、プールBのアイリスとモエのバトルは、アイリスの勝利に終わった。

カスミ「やったわ、アイリスが勝った!」

リュウカ「最初、キュウコンに苦戦した時はどうなるかと思いましたが。」

デント「白熱したバトルに痺れるようなスパイスの効いたテイスト。ん、なかなかエキサイティングに楽しめたよ。」

アイリスが勝利したことで、観客席のサトシ達はホッと一安心したようだ。その後、サトシ達はバトルを終えたばかりのアイリスと合流し、現在予選のパフォーマンスステージに臨んでいるハルカ、ヒカリの様子を見に行くことにした。

そのパフォーマンステージのダイジェスト・・・

ハルカ「エネコロロ、そこでふぶき！」

エネコロロ「エネコオオ！」

ヒカリ「トゲキッス、回転しながらゴッドバード！」

トゲキッス「トウウウス。」

ハルカはエネコロロ（今作のコントー編でサトシを追いかけている最中に進化した設定）が舞いながらのふぶき、ヒカリはトゲキッスの飛行中に回転しながらのゴッドバードといった動きのあるパフォーマンスで観客を魅了した。ハルカはこの暑い時期に合う涼しげなパフォーマンス、ヒカリはトゲキッスのゴッドバードが火の鳥のようにみえる迫力のあるパフォーマンスと観客ならびに審査員陣のウケはさいこうだった。2人は、パフォーマンスを終え、控室にて待機している。

ノゾミ「2人とも、お疲れ様。」

ハルカ・ヒカリ「ノゾミ！」

そんな2人に、ノゾミが声を掛けてきた。

ヒカリ「ノゾミ、どうしてここに？」

ハルカ「確かノゾミは、3日目だったでしょ？」

ノゾミ「まあ、そうなんだけどね。他のコーディネーターのパフォーマンスがどんなものか見たくてね。」

ヒカリ「いつも自分のパフォーマンスだけではじゃなくて、相手のパフォーマンスの研究もするなんて、さすがはノゾミだね。」

ハルカ「わたし達には、そう簡単には真似できないかも。」

ノゾミ「2人もその気になれば出来るさ。そんなに難しいことじゃないし。」

自分だけではなく、相手にも目線を配り、参考にできるところは参考にする、常にコンテストに対して真剣に取り組む姿勢はさすがはノゾミといった所か。そんなノゾミに、ヒカリとハルカはノゾミのコンテストに対する熱意に改めて感心するが、ノゾミは謙遜する。

ノゾミ「今日の2人の応援もあっただけだね。特にヒカリのトゲキッスのパフォーマンスには驚いたよ。こんなこと言ったらトゲキッスに失礼だけど、あんなおっとりした容姿とは裏腹に、今回の迫力のあるパフォーマンス、ものすごいギャップを感じたよ。」

ハルカ「あれには、私もおもわず身震いしたわ。」

ヒカリ「いやあ、ホントは失敗するんじゃないかって心配したけど、成功した今は十分な達成感でいっぱいよ。これも、トゲキッスのおかげよ。」

ノゾミとハルカに褒められ、ヒカリは胸を張りながらも、少し謙遜が混じった口調で言う。

ヒカリ「ねえ、ノゾミ。これからサトシ達のところへいくんだけど、一緒に来ない？」

ハルカ「それいいかも。」

ノゾミ「もちろんだよ。断る理由なんてないしね。」

ハルカ「それじゃあ、決まりね。」

ヒカリ「早速行きましょう。」

ハルカ、ヒカリ、ノゾミはサトシ達と合流するために控室をあとにした。予選ステージ第1日目はバトル、コンテストともに、午前の部を終えた。午後からも白熱したバトルとパフォーマンスが繰り広げられることになる。

続く

予選ステージ1日目(2) (後書き)

コンテストの方の描写が雑になってしまったことをお詫び申し上げます。

予選ステージ1日目(3) (前書き)

午前の部から、バトルもコンテストも白熱の展開を繰り広げる。午後の部も目が離せない展開に!?

ちよつとその前に、アニポケシリーズのサトシのライバルキャラ2人が初登場します。

ヒント:1J002、0空

予選ステージ1日目(3)

サトシ達は予選のパフォーマンスステージを終えたハルカ、ヒカリと、その2人が控室で再会したノゾミと合流し、今は会場の外にある出店がいつぱい密集している一帯へと来ていた。今サトシと行動をともにしているのは、カスミ、ハルカ、ヒカリ、タケシ、マサト、デント、ノゾミの6人、そしてニャースである。

サトシ「しかし、ノゾミがハルカとヒカリと一緒に来た時は驚いたぜ。そっちの調子はどうだ？」

ノゾミ「世界大会の予選ということで緊張はあるけれど、バツチリだよ。というより、アタシが現れたのハルカやヒカリにも驚かれたよ。」

サトシ「そうなのか、ハルカ、ヒカリ？」

ハルカ「うん。ノゾミに声をかけられた時はびっくりしたかも。」

ヒカリ「あたしも。でも、ノゾミが他のコーディネーターのことで調べてたってことを聞いた時は、感心しちゃったわ。あたしなら、こんな緊迫した場面じゃあ自分のことで精一杯なもの。」

サトシ「へえ、すごいじゃないか。」

ノゾミ「別に大したことじゃないよ。やるうと思えばサトシ達にもできることだし、ヒカリが自分のことだけで精一杯になる気持ちは分からなくもないよ。」

タケシ「こんな大舞台じゃあ、尚更だしな。」

デント「4年に1度の世界大会だものね。プレッシャーは相当なものだと思っよ。」

ノゾミ「それはそうと、あのニヤースがサトシ達のところに来てたのには正直一番の驚きだったね。」

ノゾミはそう言うと、ニヤースのほうに視線を向ける。

ニヤース「ニヤーはロケット団をクビになって、ジャリボーイ達にけがの手当てをしてもらってから、お世話になってるニヤ。」

ノゾミ「クビになったって……。アンタも苦労してるんだね。」

ニヤース「ニヤーはロケット団に入る前も放浪続きの毎日だったから、苦労することには慣れてるニヤ。人間の言葉がつかえるのも、ロケット団に入る前に相当勉強したからニヤ。正直、今のニヤーには人間の言葉が話せるのが、唯一の取り柄ニヤ。ニヤにか困ったことがあれば、いつでもニヤーに相談するニヤ。」

ノゾミ「そう、それじゃあその時はよろしく頼むよ。」

サトシ達はこんな感じで他愛もない会話をしていた。

?1「よお、サトシじゃないか!」

?2「なに、サトシだって?」

2人の人物がサトシを呼ぶ声がしたので、サトシ達は一斉に声の

した方へ体を向けた。そこには、サトシのライバル2名がいた。

サトシ「マサムネ！ ケ「ニ」ヤン！」 ケニヤンのアクセントは、「」で表現。

サトシを呼んだのは、1人はホウエン地方で出会ったマサムネ、もう1人はイツシュ地方で出会ったケニヤンだった。

ケニヤン「アクセント違うけど、まっ、いっか。」

ケニヤンはアクセントを間違えられたが、サトシに再会できたことの気分を優先した。

サトシ「2人とも、元気そうだな。」

ケニヤン「ああ、俺もポケモン達もみんな元気だぜ。」

マサムネ「おいらのポケモン達もみんな元気だべ。」

サトシ、マサムネ、ケニヤンは、ライバル同士の再会に心を弾ませる。

ヒカリ「ねえ、サトシ。この2人は誰？」

カスミ「あたしも、初めて会っけれど・・・。」

ヒカリはマサムネ、ケニヤンとは初対面で2人のことをよく知らないで、サトシに聞いてみた。カスミもマサムネ、ケニヤンとは初対面なので、ヒカリに同調する。サトシ以外の今いるメンバーで、マサムネのことを知っているのはハルカ、タケシ、マサトで、ケニ

ヤンのことを知っているのはデントのみである。

サトシ「ヒカリ達は、2人に会ったの初めてだっけ。こっちはマサムネ、こっちはケニヤン。」

サトシは、みんなにマサムネとケニヤンを紹介する。そして、お互いに初対面の挨拶を交わす。また、その際にもケニヤンはアクセントを間違えられたとか・・・

ケニヤン「それにしても、サトシ達はみんな旅をしてるのか？」

サトシ「ああ、今いるメンバーの他にもいるんだ。結構、楽しい旅だぜ。」

マサムネ「へえ、サトシはすごいな。旅の途中でいろんな人と出会ってはみんな仲間になってるもんな。」

サトシ「いやあ、それほどでもないぜ。」

サトシは照れ臭そうにしながらも、答える。

サトシ「ところで、2人は確か同じプールに入ってたんだっけ。」

ケニヤン「ああ。この辺を散歩してた時に、マサムネに偶然会ったんだ。」

マサムネ「それで話してるうちにすっかり友達になったわけだべ。」

「
どうやら、マサムネとケニヤンは偶然出会って会話をしているう

ちに意気投合したようだ。

マサムネ「こりゃあ、明日のバトルが楽しみだ〜。わくわくすつぞ
！」

ケニヤン「俺もマサムネとバトルが楽しみだぜ。」

マサムネ「ケニ「ヤ」ンには負けてられねえな。上をいくバトルをしねえと。」

ケニヤン「アクセント違うけど、まっ、いつか。それなら俺は上の上をいくぜ。」

マサムネ「それなら、おいらは上の上の上をいくべ〜。」

ケニヤン「それなら俺は上の上の上だ。」

マサムネとケニヤン、両者互いに譲らぬ意地の張り合いが延々に続いた。

サトシ「2人とも、気合十分だな。」

タケシ「見てるこっちも楽しみになる気分だ。」

ハルカ「でも、ちょっと暑苦しいかも・・・。」

ノゾミ「それ程2人とも、バトルに対する意気込みが強いってことだね。」

サトシ達は、マサムネとケニヤンの明日の対決に向けての意気込

みを間近で感じ取った。

ケニヤン「それにしても、午前の部で見たあのダーククライ使いのトレーナーはすごかったな。」

マサムネ「ダーククライ1体で、相手の手持ち3体すべてを倒しちまうんだもんな。」

マサムネとケニヤンは、たまたま会場前のスクリーンで見た、凄腕トレーナーについて語り始める。

サトシ「タクトさんのことか？」

サトシは、2人の言う凄腕トレーナーと面識があった。

マサムネ「なんだ、サトシ。知ってんのか？」

マサムネはサトシがそのトレーナーのことを知ってたことに驚きの表情を見せる。

ヒカリ「知ってるも何も、サトシはシンオウリーグの準決勝でタクトさんと当たったのよ。」

タクシ「そのダーククライをシンオウリーグの参加トレーナーの中で唯一倒したんだ。」

ケニヤン「あのダーククライを！？ すごいな。」

サトシ「でもダーククライを倒すのに手持ち全て使うことになったけどな。」

サトシはタクトと対戦した時、タクトが最初に繰り出したダークライにヘラクロス、コータス、フカマルの3体を倒されるといって圧倒的に不利な展開になった。4体目のポケモンとして送り込んだジユカインでダークライは倒したものの、タクトの2体目・ラティオスはそのジユカインと5体目のオオスバメを倒し、サトシを追い込んだ。最後のピカチュウはラティオスと死闘を繰り広げるも、相打ちでサトシのすべての手持ちが戦闘不能になったため、敗れてしまった。尚、タクトはそのまま決勝戦でもダークライ1体で勝利し、シンオウリーグ優勝を勝ち取っている。

マサムネ「こりゃあ、ますます明日のバトルは負けられねえべ。」

ケニヤン「それは俺も同じだ。でも明日は良いバトルをしようぜ。」

マサムネ「もちろんだべ。」

サトシ「2人とも楽しみにしてるぜ。」

マサムネとケニヤンは改めて明日のバトルに向けて闘志を燃やす。その後、サトシ達はマサムネ、ケニヤンと別れ、そろそろ午後の部の始まる時間になったので、再びバトル組、コンテスト組に分かれて、観戦することになった。

サトシ「今から、俺と同じプールのショウタとコウヘイのバトルが始まるのか。」

タケシ「2人とも、トレーナーとしては申し分ない実力だ。サトシも油断できないぞ。」

デント「そのために、このバトルはしっかり見ておかないとね。」

サトシは、アイリス、タケシ、デント、コトネ、ケンタ、マリナとともにサトシと同じプールに入っているシヨウタとコウヘイの試合を見に来ていた。だが、そのシヨウタとコウヘイの試合の前に、珍事件が発生する。

シヨウタ「ハルカちゃん！ この俺のカッコいいバトルを見てくれ！」

コウヘイ「ふふふ、ヒカリさん。バトルで見せる僕の勇姿をしっかりと目に焼き付けておいてください。」

なんと、シヨウタはハルカに、コウヘイはヒカリに、それぞれ好意を寄せる人物に向けて愛の告白ともいえないことを言ったのだ。しかも、観客席からも分かるくらい目立つように。

B o o o o o o o o o o o o o o o o !

観客席からは時折ブーイングが聞こえた。ハルカは『ホウエンの舞姫』、ヒカリは『シンオウの妖精^{フェアリー}』の異名を持つほど、コーディネーターとして知名度及び人気がある。特に、その可愛らしい容姿から、男性からの人気は絶大で、「マリナに次ぐアイドル・コーディネーターの登場か!？」と業界では言われている。

サトシ「なあ、シヨウタとコウヘイは何やってんだ？」

タケシ「い、今は気にしない方がいいぞ。」

デント「僕からもそうお勧めするよ。」

サトシ「????」

シヨウタとコウヘイの行動はいつもお姉さま方にアプローチをするタケシをも引かせるほどだった。サトシは2人の行動の意図が全く分からなかった。

コトネ「(ボソツ) ねえ、カスミン。これがハルルンとヒカリンの耳に入ったら……。」

カスミ「……大変なことになるわね。」

カスミとコトネは今の出来事がハルカとヒカリの耳に入った時のことを心配した。だが、同時にシヨウタがハルカと、コウヘイがヒカリと結ばれればサトシを巡るライバルが減ると腹黒いことを考えていたとか……

シユウ「……。」

ケンゴ「……。」

一方、会場の外では、この一部始終をたまたまスクリーンで見ていたシユウとケンゴは、啞然としていた。だが、2人ともふと我に返り、

シユウ・ケンゴ「(サトシ、あんな奴やっつけてくれ!)」

心の中で、シヨウタとコウヘイがサトシに敗れることを願った。ちなみに、シユウはハルカ、ケンゴはヒカリに対して好意を抱いている。ハルカとヒカリはサトシに対して好意を抱いているため、シユウとケンゴにとっては恋敵になるが、バカ2人（シヨウタとコウヘイのこと）と結ばれるよりはサトシの方がマシだと直感したのだ。こんな茶番劇の中で、当のハルカとヒカリは、

ハルカ・ヒカリ「うう！？」

ノゾミ「どうしたんだい、2人とも？」

ハルカ「なんだか、寒気が……。」

ヒカリ「あたしも……。」

ノゾミ「ちょっと、今からだって言うのに風邪なんて引いたら元の子もないよ。」

ハルカ「あ、これは風邪というより……。」

ヒカリ「悪寒？」

ノゾミ「なにそれ？」

ノゾミとともに、他のコーディネーターのパフォーマンスを見るためにバトル会場とは別の場所にいた。つまり、バカ2人の愛の告白は空振りに終わったのだ。実に、哀れwww

さて、肝心の試合の方はシヨウウタはトロピウス、ボーマンダ、カメックスを、コウヘイはヤドキング、ツボツボ、ヨノワールを繰り出した。戦況は、コウヘイのヨノワールのトリックルームにシヨウウタが苦戦し、さらにはボーマンダのはかいこうせんをツボツボのこらえるで耐えられて、その後のきしかいせいで返り討ちに遭うなど、一方的な展開でコウヘイが勝利をつかみ取った。

サトシ「ヨノワールのトリックルームはやっぱり厄介だな。」

タケシ「サトシもあれにはてこずってたものな。それにコウヘイは緻密に計算された戦略を練ってくる。以前のサトシとのバトルを受けての対策は立てているはずだ。」

デント「ますます油断できないね。サトシ。」

サトシ「それでも俺は勝ってみせるぜ。」

コトネ「ふふふ、サトシらしいってことね。」

シヨウウタ対コウヘイ戦の後は、1試合置いてプールLのシューテイー対ベルのカノコタウン出身対決である。本来はこのバトルをじっくり取り上げたかったのだが、先程の茶番劇（笑）のせいで無駄な字数を費やしてしまったため、こちらのバトルもダイジェスト形式でお送りする。

ベル「チャオブー、二トロチャージ！」

シューテイー「ケンホロウ、かげぶんしんでかわせ！」

シューティー「バイバナラ、こおりのつぶて！」

ベル「チラーミー、かわして！」

こちらのバトルは白熱した接戦となった。この他にシューティーのプルンゲルの特性『のろわれボディ』、ベルのチラーミーは接近戦の持ち込んでメロメロを発動したりと、お互いに相手に攻撃を出させにくくしながら一步も譲らぬ攻防が繰り広げられた。結果は、両者ともに3体全てを出し切り、辛くもシューティーが勝利を納めた。尚、ジョウト地方では滅多にお目にかかれないイツシユ地方のポケモン同士のバトルに観客は珍しかったとか。試合後のベルは、すぐにサトシ達と合流した。

サトシ「惜しかったな、ベル。」

サトシは、シューティーに敗れたベルを労う。

ベル「わたし負けちゃった。あゝ、もう悔しい〜！」

ベルは悔しさから、その場で地団駄を踏む。

デント「相手があの子シューティーだったからね。仕方ないよ。」

コトネ「ベルルン、まだ本大会への挑戦が完全に閉ざされたわけじゃないんだから。」

カスミ「そうよ。今後の為にも、次の試合を頑張らなくちゃ。」

ベル「みんな……。そうよね、ここでよくよしたって仕方ないじゃない。わたし、頑張るわ。」

サトシ「その意気だぜ。」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

サトシ達は、コンテストのパフォーマンスステージを観戦しているハルカ、ヒカリ、ノゾミと合流するため、バトル会場を後にした。そのコンテストでは、

ケンゴ「フローゼル、うずしお！」

フローゼル「フウウウロオオオオ！」

ケンゴ「そこからアクアジェットで流れに乗るんだ！」

フローゼル「フロオオオゼエエエル！」

サオリ「バタフリー、しびれごな！」

バタフリー「リイイイイ！」

サオリ「ぎんいろのかぜ！」

バタフリー「フウウウリイイイ！」

ケンゴはフローゼルのうずしおとアクアジェットを組み合わせた力強く元気あふれるパフォーマンス、サオリはバタフリーのしびれごなをぎんいろのかぜでさらにエレガントに引き立てるパフォーマンスと午後の部も見どころ一杯だった。

ハルカ「サオリさん、さすがかも。」

ノゾミ「コガネシティの時より、格段にポケモンを引き立てるのに磨きがかかってるね。」

ヒカリ「まさに大人のパフォーマンスって感じだね。ケンゴも負けず劣らずのパフォーマンスだったし。」

ノゾミ「予選選考会から兵つわものぞろいの『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』。これは今後も油断できないね。」

ハルカ、ヒカリ、ノゾミは午後の部の参加コーディネーター達のパフォーマンスに思わず魅了された。そして3人とも改めて決勝ステージのコンテストバトルに向けて意気込むのだった。こうして、『ワールド・チャンピオン・リーグ』、『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の予選第1選考会は、早速白熱した盛り上がりを見せて1日目を終えた。

続く

予選ステージ1日目(3) (後書き)

2日目は、いよいよサトシとケンタが今大会初登場！

予選ステージ2日目（前書き）

序盤にサトヒカ要素を入れました。ヒカリのキャラってこんなのだ
ったか正直自信が・・・ オイツ！

それと、ケンタのバトルスタイル『直球一本槍』がうまく表現でき
たかどうかも不安です（汗）

予選ステージ2日目

みんなが寝静まった夜のこと。サトシは一人目が覚めた。ちなみにサトシと同じ部屋なのは、サトシLOVEズの5人、デント、カズナリ、マサトである。

サトシ「ん、んん．．．。」

ピカチュウ「ピイカ．．．。」

ポッチャマ「ポチャア．．．。」

同時にピカチュウとヒカリのポッチャマも目が覚めてしまった。

サトシ「ピカチュウ、ポッチャマ、起こしちゃったか。ごめんな。」

ピカチュウ「ピイカピカ。」

ポッチャマ「ポチャポチャ。」

サトシはピカチュウ、ポッチャマを起こしてしまったことを謝るが、当の2体は気にしていないようである。

ポッチャマ「ポチャ？」

そこでポッチャマはふとあることに気がつく。自分の主人であるヒカリがベッドにいないのである。

サトシ「あれ、ヒカリは？」

サトシもヒカリがいないことに気づく。ふと辺りを見回すとベランダに続く戸が少し開いていたので、サトシはピカチュウを肩に乗せ、ポツチャマを抱きかかえ、他の面々を起こさないように外に出た。

サトシ「ヒカリ、そこにいたのか。」

ヒカリ「あつ、サトシ。」

サトシとヒカリはお互いに目を合わせる。サトシは抱きかかえていたポツチャマをヒカリに手渡した。

サトシ「どうしたんだ、こんな夜遅くに。」

ヒカリ「あつ、うん。少し眠れなくて。」

ヒカリはなかなか眠れなくて、ベランダで涼んでいたという。

サトシ「それにしても、今日のパフォーマンスは凄かったみたいだったな。ノゾミから聞いたぜ。」

ヒカリ「あ、ありがとう。でも、決勝ステージに上がれるかまだ不安なの。」

ヒカリは決勝ステージに向けての不安をサトシに打ち明ける。

ヒカリ「今日のトゲキッスのパフォーマンスは自分でもよく出来てた。これはあたしも自信を持って言える。だけど、今までのコンテストとは違って、この予選選考会は世界中のコーディネーターが集

まる大会。この前あたしとコンテストバトルを戦ったりリア様のよ
うな強敵も数多くいるわ。そんな中で、あたしが勝ち抜けるかどう
か心配で……。」

サトシ「ヒカリ……。」

ヒカリ「サトシはどうなの？ 世界中のトレーナーとバトルするに
あたって。」

ヒカリはサトシはどうなのかと聞いてみた。サトシの答えは、

サトシ「そりゃあ、俺だって不安だよ。俺が今までにバトルしてき
たライバル達とは比べ物にならないくらい強いトレーナーも出てく
る。そんな中でちゃんとしたバトルが出来るのが正直心配さ。だけ
ど俺、なんだかワクワクするんだ。」

ヒカリ「えっ!?!?」

サトシ「だって、世界中の数多くのトレーナーとバトルする機会な
んで滅多にないんだぜ。それだけじゃない、今までにバトルしたラ
イバル達だって、この時に向けて、特訓してきたんだ。そのことを
考えたら、不安よりもワクワクのほうが強くなっちゃって。」

サトシは不安よりも多種多様のトレーナーとバトルできる好奇心
の方が沸き立つとヒカリに言う。

ヒカリ「確かに、あたしも世界中のコーディネーターや今までに出
会ってきたコーディネーター達と一度に競い合える機会なんて滅多
にないわ。なんだか、あたしもワクワクしてきたわ。」

サトシ「だろ。それに俺やヒカリだけじゃない、カスミやハルカやマリナ、ケンタやベルやコトネだって不安なはずだぜ。不安なのはみんなお互い様ってことだ。」

ピカチュウ「ピイカ。」

不安なのは誰だって一緒、みんなヒカリと同じ気持ちのはずとサトシはヒカリに言う。それに呼応するように、ピカチュウもヒカリに笑顔を向ける。

ポツチャマ「ポチャ。」

さらには、ヒカリをポツチャマが励ます。

ヒカリ「そうよね。みんな強い気持ちを持ってこの予選選考会に臨んでいるんだもんね。サトシ、ピカチュウ、ポツチャマ、みんなに打ち明けてよかったわ。ありがとう。」

サトシ「お礼なんていいよ。なあ、それより今後に向けていつもの俺達がやっていたあれやってみないか？」

サトシは手のひらをヒカリに向ける。

ヒカリ「あれね。分かったわ。」

そういうと、ヒカリもサトシに手のひらを向ける。そして、

パチッ！

サトシ、ヒカリはお互いにハイタッチをした。

サトシ「そうと決まれば、今日はもう寝ようぜ。ここで身体壊したら元の子もないしさ。」

ヒカリ「そうね、そうしましょう。ピカチュウとポッチャマも眠そうだし。」

ピカチュウ「ピカ……。」

ポッチャマ「ポチャア……。」

サトシとヒカリは部屋の中へと入り、それぞれのベッドに潜ると、そのまま深い眠りに入った。そして、夜が明けて予選選考会は2日目を迎えた。

マサト「いよいよだね。今日なんでしょ、サトシとケンタとコトネの初戦。」

サトシ「ああ、そうだぜ。」

ハルカ「確か、ケンタは最初の試合だったよね？」

ケンタ「ああ、バトル前からワクワクとドキドキでいっぱいだぜ。」

ケンタは2日目の最初の試合に出ることになっている。ちなみに、相手はカベルネである。

マリナ「それでコトネは、午後の部の初戦でジュンイチとあたるんだっけ？」

コトネ「そうよ、マリリン。わたしも今から楽しみってことね。」

コトネは午後の部最初の試合で、ジュンイチとワカバタウン出身対決をすることになっている。お互いに小さい頃からの付き合いなので、相手の手の内は知り尽くしている。それだけに、どんなバトルになるのか見物である。

ハルカ「バトルだけじゃないわ。コンテストも午後の部でカスミのパフォーマンスもあるのよ。」

サトシ「おっと、そうだった。俺とケンタとコトネは見に行けないけれど、頑張れよ。」

ケンタ「決勝ステージにいけるように応援してるぜ。」

コトネ「頑張ってるね、カスミン。」

カスミ「ええ、まかせて。」

バトル組はバトル会場へ、コンテスト組はコンテスト会場へ足を進めた。そして、『ワールド・チャンピオン・リーグ』予選第1選考会予選ステージ2日目の初戦、ケンタ対カベルネ戦の試合開始時

刻を迎える。

カベルネ「今日はどんな渋いテイストを見せてくれるのかしら？」

バトルフィールドでお互いに顔を見合わせると、早速カベルネはケンタに皮肉交じりに言い放つ。全く、こつという性格は直してほしいものだ。

ケンタ「俺と俺のポケモン達がどんなに言われようと、バトルはバトル。絶対に勝って見せる！」

ケンタはバトルに集中しようと、カベルネの皮肉交じりの言葉を一蹴する。

カベルネ「臨むところよ！ このバトルでわたしのテイスティングが正しかったことを証明みせるわ。ボンジュール、テイスティングタイム、シルブプレ。」

ケンタとカベルネはお互いにモンスターボールに手をかけ、最初の1体を出した。

リーファイア「リイイフ！」

ムーランド「ムウウウラアアン！」

ケンタはリーファイア、カベルネはムーランドをフィールド上に出した。

ケンタ「まずは先手必勝！ リーファイア、ムーランドに近づけ！」

リーファイア「リィファイ！」

リーファイアは素早く攻撃の射程圏内にムーランドをとらえる。

ケンタ「そのまま、マジカルリーフ！」

リーファイア「リィィィィィィィ！」

リーファイアのマジカルリーフ。マジカルリーフは必中の攻撃技なので、ムーランドに当たった。

ムーランド「ムウウウウウ！」

攻撃を受けたムーランドは、思わず目を瞑る。さらには、マジカルリーフの葉っぱの一部がムーランドの口の中に入ってしまふ。

カベルネ「ムーランド、「ぺっ！」しなさい！」

ムーランドは、口に入った葉っぱを吐き出した。

カベルネ「なかなかやるじゃない。ならこれはどう？ ムーランド、かみなりのキバ！」

ムーランド「ムウウウウラァァァン！」

ムーランドがかみなりのキバでリーファイアを攻撃。だが、くさタイプのリーファイアには、でんきタイプのかみなりのキバは効果はいまひとつである。

ケンタ「そんなんじゃ、ちょっとしかダメージが与えられないぜ。」

ケンタはこの時、油断してしまった。

カベルネ「からの、ほのおのキバ！」

ケンタ「なんだって!？」

カベルネの思わぬ指示に、ケンタは驚いた。ムーランドのかみなりのキバがほのおのキバに変化する。こうなれば状況は一変する。

リーフィア「リイイイイ！」

ほのおタイプの攻撃を受けて、リーフィアは効果抜群のダメージを受けた。さらに、追加効果で火傷を負ってしまった。これにより、リーフィアは時間の経過とともに少しずつダメージを受けることになる。

カベルネ「続けて、たいあたり！」

ムーランド「ムウウウウ！」

さらにカベルネは攻勢を強め、ムーランドにたいあたりを指示する。

ケンタ「リーフィア、回転しながらたいあたりを受け流せ！」

リーフィア「リィフ！」

リーフィアは軽くジャンプすると前回転してムーランドのたいあたりを受け流し、ムーランドの背後を取った。これはサトシがヒカ

リのコンテストバトルを参考にして編み出した回転技によく似ている。どうやらケンタもマリナのコンテストバトルを参考にして編み出したバトル戦法があるようである。

カベルネ「な、なんて変わったテイストなのよ……。」

ムーランド「ムウ!?!」

これにはカベルネも驚きを隠せない。ムーランドは攻撃をかわされたこと、さらには背後を取られたことで一瞬怯んでしまった。回転で攻撃を受け流したただけなら普通に攻撃をかわしたただけが、それだけで終わらないのはケンタである。これを上手く次の攻撃に繋げるのである。

ケンタ「そのまま、マジカル・リーフ!」

リーファイア「リイイイファイイイ!」

ムーランド「ムウウウウウウ!」

リーファイアのマジカル・リーフがムーランドにクリーンヒット。
さらに、

ケンタ「トドメの、リーフストーム!」

リーファイア「リイイイファイイイ!」

くさタイプでトップクラスの威力を誇るリーフストーム。先程マジカルリーフを受けたばかりのムーランドがかわせるはずもなく、

ムーランド「ムウウウウ！」

そのままバトルフィールドラインぎりぎりまで吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。

ムーランド「ムウ……。。」

ムーランドは目を回して倒れている。

審判「ムーランド、戦闘不能。リーフィアの勝ち。」

審判によって、ムーランドの戦闘不能が宣告される。まずはケンタが1体目を倒し、優勢に立った。

カベルネ「お疲れ様、ムーランド。なかなかのスパイスの効いた奮闘ぶり。無駄にはならなかったわ。」

カベルネはムーランドを労うと、モンスターボールに戻る。

カベルネ「次はあなたよ、メブキジカ！」

カベルネの次のポケモンは、メブキジカだ。

記憶が曖昧なので、メブキジカの鳴き声は省略します。

ケンタ「リーフィア、戻れ！」

カベルネの次のポケモンがメブキジカだと分かると、ケンタはリーフィアをボールに戻した。くさタイプ同士のリバトルとなると、お互いに互角の勝負を強いられることになるため、持久戦になること

は必至である。持久戦に持ち込まれるとなると、火傷状態のリーフイアには、少々分が悪い。良い判断である。

ケンタ「行け、マツスグマ！」

マツスグマ「マアス！」

ケンタの次のポケモンは、マツスグマだ。

カベルネ（ここは無難に相性でバクフーンを出してくるかと思ったけれど、メインディッシュは最後にとっておこうってわけね。）

カベルネはケンタが相性を攻める戦術をとらなかつたことに驚いてはいたが、すぐにバトルに集中することに専念した。

ケンタ「マツスグマ、きりさく攻撃！」

マツスグマ「マアス、マアアアスウウウ！」

マツスグマはメブキジカにきりさく攻撃を仕掛ける。

カベルネ「メブキジカ、かわして！」

メブキジカはマツスグマの攻撃をスルリとかわす。

カベルネ「そのまま、メガホーン！」

マツスグマの背後を取ったメブキジカはメガホーンでマツスグマを攻撃。

マツスグマ「マアアアス！」

メガホーンはマツスグマにクリーンヒットし、マツスグマはそのまま地面に叩きつけられた。

カベルネ「からの、ウッドホーン！」

さらに攻勢を強めるカベルネは、メブキジカにウッドホーンを指示。このままでは、地面で蹲っているマツスグマに直撃である。

ケンタ「ウッドホーンを両手で受け止める！」

マツスグマ「マアス！」

なんとケンタはマツスグマにウッドホーンを両手を使って攻撃を当たらないようにする指示を出したのだ。いかにも、『直球一本槍』で真っ向勝負のバトルスタイルを好むケンタらしい指示である。マツスグマは指示通りにウッドホーンを両手で受け止めた。いわゆる『真剣白羽どり』というものである。

カベルネ「なっ!?!？」

カベルネはケンタの思わぬ奇策に再び驚かされる。

ケンタ「そのまま、投げ飛ばせ！」

マツスグマ「マアアアスウウウウ！」

マツスグマはそのままメブキジカを投げ飛ばした。そして、

ケンタ「続いて、シャドークロー！」

マッスグマ「マアス、マアアアアスウウウ！」

マッスグマのシャドークロー。メブキジカはかわすことが出来ず、クリーンヒット。メブキジカはそのままダウンした。

審判「メブキジカ、戦闘不能。マッスグマの勝ち。」

ケンタ「やったぜ、あと1匹だ。」

メブキジカのダウンにより、ケンタにリーチがかかった。

カベルネ（なんて変わったテイストなの……。これはドン・バトルでバトルしたあのサトシって奴と似たテイストだわ。）

カベルネはケンタのバトルスタイルを、ドン・バトルでバトルしたサトシと重ね合わせる。カベルネの思うとおり、サトシとケンタのバトルスタイルには、相性にこだわらないこと、真っ向勝負、突然のひらめきで展開を変えるなど酷似した点が多々見受けられる。一つ違う点を挙げれば、サトシに比べてケンタはかわす指示を出すことはほとんどないところか……

カベルネ「不利なテイストだけど、最後まで全力を尽くして見せるわ！」

カベルネは3体目のポケモンをボールから出した。カベルネ3体目のポケモンは、フタチマルだ。

ケンタ「戻れ、マッスグマ。」

ケンタはマツスグマをボールに戻す。相性を考えれば次に交代するポケモンは火傷状態ながらもリーフィアが妥当である。リーフィアに交代する、会場中誰もがそう思った。

ケンタ「最後はお前でいくぜ、バクフーン！」

バクフーン「バアク！」

その瞬間、会場中がどよめいた。ケンタはみずタイプのフタチマルに、相性の悪いほのおタイプのバクフーンを戦闘に出したのだ。ちなみにバクフーンは、ボールには入らずにケンタのそばで今までの戦況を見つめていた。

マサト「な、なんで！？ 相手はみずタイプのフタチマルなのに。」

アイリス「あと1体倒せば、勝てるのに。相手に流れを渡すようなことをして……。」

マサトとアイリスは驚きを隠せない。

マリナ「それはどうかしら？ ケンタのバクフーンは少しばかり違うのよね。」

マリナはなぜケンタがバクフーンを出したのか分かっているかのように言った。まあ、マリナでなくとも、『ライ伝』を見てた読者なら分かると思うが……

アイリス「えっ、マリナ。それってどういう意味？」

アイリスはマリナに聞いてみる。

コトネ「まあ、見てて。アイリン。」

マサト・アイリス「?????」

マサトとアイリスはますます分からなくなった。一方、バトルフィールドでは、

カベルネ「あら、相性の悪いほのおタイプで来るなんて、どういう風の吹き回しかしら?」

カベルネもまたケンタが相性の悪い組み合わせで来たことが気になっていた。

ケンタ「ふん、俺のバクフーンはちょっと違うんだぜ。」

カベルネ「????」

カベルネはケンタの発言の意図が全く分からなかった。とりあえずは、バクフーン対フタチマルのバトルが始まった。

カベルネ（相手は今まで真っ向勝負のバトルを仕掛けてきた。だから、そう簡単にかわすことはしないはず。。。）

カベルネは今までのバトルを踏まえ、ケンタがかわす指示は出さない真っ向勝負タイプのトレーナーと改めて思った。

カベルネ「だったら、一気に決めさせてもらおうわ。フタチマル、思いつきりみずてっぼう!」

フタチマル「フタアアアチイイ！」

フタチマルのみずてっぽう。

バクフーン「……………」

バクフーンは何もせずじっと待つ。そしてカベルネの読み通り、バクフーンはそれをかわさなかった。

マサト「うわあ、効果は抜群だよ。」

マリナ「まあ、見てて。今に分かるから。」

マサト「そんな悠長な……………」

ウインクしながら答えるマリナに、マサトはさらに心配になる。

その頃、バクフーンはフタチマルの攻撃をもろに受けていた。

カベルネ「さあ、どうする気？ このままだとバクフーンがやられちゃうわよ。」

カベルネはケンタに追い討ちをかけるように言い放つ。だが、この時カベルネは、ケンタが不敵な笑みをしたことに気づかなかった。

バクフーン「……………バクウ。」

バクフーンは相性の悪いみずタイプの攻撃を受けているのにも関わらず、ほぼ全く効いていない様子である。

カベルネ「う、嘘！？ 効いてない！？」

カベルネは今までにないような驚きの表情を見せる。

ケンタ「俺のバクフーンはみずタイプの攻撃を受けても平気なんだけ。」

ケンタは自信満々に答えた。

マサト「僕、あんなの見たの初めてだよ。」

マリナ「ね、言ったとおりでしょ。」

これにはマサトも驚きを隠せなかった。

サトシ「やっぱ、すげえぜ。ケンタとバクフーン。」

サトシは自分と似たバトルスタイルのケンタとみずタイプの攻撃を受けてももろともしないバクフーンに凄みを感じた。

ケンタ「バクフーン、ころがる攻撃！」

バクフーン「バアアアクウウウ！」

バクフーンの反撃のころがる攻撃。

カベルネ「かわして！」

フタチマル「フタ！」

これはあっさりかわされる。だが同時に、バクフーンはフタチマルの背後をとった。

ケンタ「続けて、かえんほうしゃ！」

バクフーン「バアアアクフウウウウン！」

バクフーンの強力なかえんほうしゃがフタチマルに襲い掛かる。

フタチマル「フタア！」

かえんほうしゃは見事にフタチマルにクリーンヒットした。

カベルネ「フタチマル！？」

カベルネ、またもやケンタの突然のひらめきに圧倒される。バクフーンはまるくなり、再びころがる攻撃を仕掛けた。

ケンタ「バクフーン、かえんぐるま！」

ケンタはころがる状態のバクフーンにさらにかえんぐるまを出すよう指示。

バクフーン「バアアアアクウウウウ！」

転がりながら、バクフーンはかえんぐるまを発動。それは火を纏った大玉もしくは車輪のように見える。

サトシ「な、なんなんだあれは！？」

タケシ「まるくなるところがるのコンボ技に、かえんぐるまが加わった合体技か．．．。」

マサト「見るからにもの凄い威力だよ！」

デント「名前を付けるとすれば、『火炎大車輪』といったところだね。」

まるくなるところがるのコンボ技に、かえんぐるまを加えた合体技にサトシ達を含め、会場中が度肝を抜かれた。デントはこの合体技を『火炎大車輪』と名付けた。

カベルネ「フタチマル、かわして！」

フタチマルはかわそうとするが、先程のかえんほうしゃで火傷状態になっていたようで、思うように動くことが出来ない。

フタチマル「フタアアアア！」

フタチマルはそのまま『火炎大車輪』をもろに喰らってしまった。いくらほのおタイプの技には強いとはいえ、強大な威力の技を喰らえば一溜まりもない。尚、余談ではあるが、この『火炎大車輪』は、ビクティニの『Vジエネレート』に匹敵する威力を誇るとか．．．

フタチマル「フタア．．．。」

フタチマルはダウンした。

審判「フタチマル、戦闘不能。バクフーンの勝ち。よって勝者、ケンタ選手。」

カベルネの手持ち全てが戦闘不能になり、ケンタの勝利が審判から告げられた。その瞬間、会場中が歓声に沸いた。

ケンタ「やったぜ、バクフーン！」

バクフーン「バアク、バアク！」

ケンタとバクフーンは、勝利の喜びを噛み締めあつ。

カベルネ「ご苦労様、フタチマル。ゆっくり休んでて。」

フタチマル「フタア……。」

一方、カベルネはフタチマルを労うと、モンスターボールの中に戻した。カベルネはリーフィアを火傷状態にするなど健闘はしたものの、ケンタの突然の閃きから生み出された戦術に圧倒され、ストリート負けを喫した。

カベルネ「なかなか変わったスパイスの効いたテイストを仕掛けてくるじゃないの。」

ケンタ「あ、ありがとう。」

ケンタとカベルネはバトル後の握手をかわす。

カベルネ「ただ、渋いテイストなのは相変わらずだけどね。」

ケンタ「は、はあ……。」

カベルネはまだケンタを渋いテイストのトレーナーだと言いつつた。一つの負け惜しみというものであるうか。全く、素直に負けを認めればいいのに．．． by 作者。

カベルネ「次も頑張りなさいよ。」

ケンタ「ああ、もちろんだぜ。」

カベルネにゲキを入れられたケンタは、バトルフィールドをあとにすると、観客席で見守っていたサトシ達と合流した。ケンタの圧勝で幕を開けた予選ステージ第2日目もここから、白熱したバトルが繰り広げられることになる。

続く

予選ステージ2日目（後書き）

ケンタは初戦を白星で飾った。

サトシはこれに続くことが出来るのか！？

予選ステージ2日目(2) (前書き)

いよいよ、サトシの世界への第1歩となる予選選考会初戦です。

予選ステージ2日目(2)

予選ステージ初戦を勝利で飾ったケンタは、バトル会場の廊下で観客席で観戦していたサトシ達と合流した。

マリナ「ケンタ、まずは初戦勝利おめでとう。」

ケンタ「ありがとう、マリナ。」

マリナを筆頭にまずはケンタの勝利を今いるメンバー全員で祝福する。

タケシ「凄いバトルだったな。」

デント「サトシのとは別のテイストをしっかりと味わえたいバトルだったよ。」

タケシとデントも、ケンタのバトル振りにかなりの関心を示した。

マサト「僕が思うに、最後のバクフーンがカッコ良かったな。みずタイプの攻撃を受けても平気だし、なにしろあのころがるとかえんぐるまの合体技が迫力あったなあ。」

マサトはケンタのバクフーンが一番の印象だったようだ。

サトシ「そういえば、あの合体技はどうやって作ったんだ？」

サトシはケンタに『火炎大車輪』の誕生の経緯を聞いてみた。

ケンタ「あは、俺が前にテレビでやっていたお祭りの伝統行事を見たのを思い出して、それを参考にこの合体技が思いついたんだ。」

コトネ「もしかして、前にテレビジョウトで放送された『全国のお祭り大特集!』って番組の?」

ケンタ「そうそう、それだよ。」

ケンタは、以前自分がテレビ番組で見たお祭りの伝統行事を見て、『火炎大車輪』を編み出したようだ。

ケンタ「俺も正直驚いているんだ。まさか本当に成功できるなんて思ってもみなかったぜ。」

アイリス「見た目からして凄い威力だったものね。」

ケンタ「ただ、これはいざという時やトドメの一撃で使う合体技な上にリスクもかなり負うから、連続で使うことは出来ないけどな。」

サトシ「確かに、バクフーンかなり疲れてるものな。」

バクフーン「バアク...。」

バトル後で疲労がかなり溜まっているように見えるバクフーンを見て、サトシはそう言った。以前サトシのミジュマルとケンタのリーファイアで編み出した『アクアストーム』といい、今回のバクフーンの『火炎大車輪』といい、合体技には今後も改善の必要があるようだ。

ケンタ「今度はサトシの番だぜ。お前も予選突破できるように絶対

に勝てよ。」

ケンタは午後の部で初戦を迎えるサトシに対してゲキを飛ばす。ちなみにサトシの初戦の相手はコウヘイである。

サトシ「もちろんだ。絶対に勝って見せるぜ。」

マサト「僕達も応援してるよ。」

タケシ「本線に向けての重要な第1歩だからな。」

ケンタに続けて他の面々も次々とサトシにゲキを飛ばす。サトシは初戦に向けてさらに気合を入れるのだった。その後、サトシ達は各々に分かれて行動することになった。

ケンタの勝利で幕を開けた午前の部は、その後も激闘の連続だった。中でもプールDの試合は圧巻だった。シンオウリーグでサトシから勝利を納め優勝も勝ち取ったタクトの第2戦があったのだが、相手トレーナーのポケモンに対して1回もダメージを許すことなく圧勝した。尚、タクトはこの試合でダークライは使用せずラティオス1匹のみで勝ち抜いた。また、シンジやナナコなどサトシが旅で出会ったライバル達も続々と白熱したバトルを繰り広げている。こうして、午前の部は初日に負けない盛り上がりを見せた。午後の部

には、サトシの初戦が待ち構えている。

サトシ「相手はコウヘイか。シンオウリーグでは勝ったとはいえ、油断はできないな。」

昼の休憩時間、サトシは早くもコウヘイとの初戦に向けて英気を養っていた。サトシはシンオウリーグではコウヘイに勝利している。ただ、コウヘイの編み出した『勝利の方程式』、ヨノワールの『トリックルーム』に苦戦をした。

サトシ「ピカチュウ、今回はタケシ達と試合を見ていてくれないか？」

ピカチュウ「ピカ！」

どうやら、サトシはコウヘイ戦でピカチュウは使用しないようだ。コウヘイがヨノワールを使ってくるという確証はないが、『トリックルーム』は使用後しばらくの間（ゲームでは5ターンの間）は素早さの低い順に行動できるという効果を持っているので、スピード重視のバトルスタイルのサトシにとってはかなり不利である。さらに言えば、スピードが売りのピカチュウは『トリックルーム』を使われるとその持ち味を発揮できずに終わってしまう。ピカチュウもそれを理解しているのか、サトシの提案を快諾した。

サトシ「さて、どのポケモンでバトルするか・・・。」

サトシはコウヘイ戦に出すポケモン3体を考えている。

サトシ「よし、決めた！」

ピカチュウ「ピカ！」

どのポケモンでいくか決めたようだ。サトシはピカチュウを肩に乗せ、ポケモン転送機能のあるパソコンの台へと向かった。

マサト「いよいよ、コトネの初戦が始まるね。ケンタ。」

昼の休憩時間も終わり、午後の部が始まった。午後の部ではサトシの初戦が行われるが、その前にコトネの初戦が行われる。尚、コトネの初戦の相手はジュンイチで、ワカバタウン出身対決となっている。

ケンタ「ああ、だけどどっちも小さい頃からよく知ってるから、なんか複雑だな。」

ケンタは幼馴染同士のバトルを楽しみにしている反面、どっちもがんばって欲しいと言う思いもあり、複雑な心境である。

タケシ「まあ、知り合い同士のバトルならそう思うのも仕方ないよな。」

タケシはそんなケンタを見て、同情の言葉を述べる。

デント「でも、公式戦でこういうバトルを見るのも楽しみの一つだと思うよ。ここはどっちを応援するとか言うのは無しにして、観戦を楽しむことに専念したらどうかかな？」

ケンタ「えっ!?!」

デント「僕だって、ポケモンソムリエという立場から離れて一人の

ポケモントレーナーとしてバトルを楽しむことがあるんだ。その時にしか見えない視点も結構あって楽しいよ。」

デントの提案に、

ケンタ「確かに、デントの言うとおりだな。よし、俺もこのバトルの観戦を楽しむことにするぜ。」

ケンタ達はこのコトネ対ジュンイチのバトルも含め、午後の部の観戦は楽しめそうだ。ここで、コトネ対ジュンイチ戦をダイジェスト形式でお送りする。

<コトネ対ジュンイチ戦ダイジェスト>

コトネ「キリンリキ、しねんのずつき！」

ジュンイチ「ミノマダム、こらえる！」

コトネ「カポエラー、インフアイト！」

ジュンイチ「レアコイル、かげぶんしん！」

コトネ・ジュンイチ「メガニウム、ソーラービーム！」

コトネ対ジュンイチ戦は一進一退の接戦だった。中でも両者3体目として出てきたメガニウム同士のソーラービームは観客を驚かせた。結局、そのソーラービームの一発でお互いのメガニウムが戦闘不能となり、引き分けとなった。コトネ対ジュンイチ戦が終わり、次はサトシとコウヘイの試合である。2人とも歓声とともにバトルフィールドに立つ。

コウヘイ「僕が君と公式戦でバトルするのは2回目ですね。サトシ君。シンオウリーグでは負けましたが、今回はそうはいきませんよ。」

サトシ「臨むところだ！」

両者お互いにバトルに向けての闘志を燃やす。そして審判から、試合開始の合図が出される。

サトシ「ガマガル、君に決めた！」

ガマガル「ガルルルル！」

コウヘイ「行きますよ、ベロベルト！」

ベロベルト「ベロベエル！」

サトシはガマガル、コウヘイはベロベルトを最初の1体にした。

サトシ「ガマガル、ちょうおんぱ！」

ガマガル「ガアアアマアアア！」

ガマガルのちょうおんぱがフィールド上に響き渡る。

ベロベルト「ベロ．．．。」

ベロベルトはこれにより思うように動けない。

サトシ「続けてマッドショット！」

ガマガル「ガアルウウウ！」

スピード重視のバトルスタイルが売りのサトシならではの素早い攻撃の指示。ガマガルもそれに合わせるかのようにマッドショットを放つ。

ベロベルト「ベロオ！」

マッドショットはベロベルトにクリーンヒットした。まずはガマガルが先手を取った形だ。

コウヘイ（素早い指示に合わせるかのように繰り出されたマッドショット。さすがはスピード重視のサトシ君らしい戦い方です。ヨノワールを温存しておいたのは少し痛いですが、こちらとてなにも考えていないわけではないのですよ。）

コウヘイはサトシのスピーディな戦い方に改めて感心する。

サトシ「一気に決めるぞ！ ガマガル、ハイドロポンプ！」

ガマガル「ガマアアアガアアアア！」

ガマガルの強烈なハイドロポンプ。

コウヘイ「かわすのです！」

ベロベルト「ベロオ！」

ベロベルトはそれをなんなくかわした。

コウヘイ「まずはガマガルの身動きを封じましょう。」

ベロベルト「ベロ、ベロオ！」

ベロベルトはガマガルに急接近すると、自らの長い舌にガマガルを巻き付けて身動きを封じた。

ガマガル「ガマア！？」

サトシ「ガマガル！？」

ガマガルは巻き付けられた直後、なんとか逃れようと奮闘するが、なかなか抜け出せない。

コウヘイ「そのまま、パワーウィップ！」

ベロベルト「ベエエエロオオオオオ！」

ガマガル「ガルルルル．．．。」

くさタイプでもトップクラスの威力を誇るパワーウィップは、みず・じめんタイプのガマガルにとってかなりのダメージを喰らう技である。

サトシ「くっ．．．。戻れ、ガマガル！」

サトシはなくなりガマガルをボールに戻した。

サトシ「行け、カビゴン！」

カビゴン「カビカンビ！」

ガマガルの代わりにサトシが出したポケモンはカビゴンだ。

コウヘイ「ベロベルト、10まんボルト！」

ベロベルト「ベエエエロオオオオ！」

ベロベルトの10まんボルトはカビゴンに命中した。

カビゴン「．．．カビ？」

だが、すばやさ以外はトップクラスの能力を誇るカビゴンには、あまり効いていないようだ。

コウヘイ「それなら、接近攻撃です！」

ベロベルト「ベロベエー！」

ベロベルトはカビゴンに攻撃を仕掛けようと接近する。

サトシ「今だ！ ベロベルトにれいとうパンチ！」

カビゴン「カアアアビイイイ！」

カビゴンのれいとうパンチが至近距離でベロベルトに襲い掛かる。

ベロベルト「ベロオオオオ！」

れいとうパンチはベロベルトにクリーンヒットした。

サトシ「トドメのメガトンキック！」

カビゴン「カアアアビイイイ！」

カビゴンの強力なメガトンキック。

ベロベルト「ベロオオオオ！」

ベロベルトはかわすことができず、続けて攻撃を受ける。

ベロベルト「ベロ、ベロオ……。。」

そして、ベロベルトはダウンした。

審判「ベロベルト、戦闘不能。カビゴンの勝ち。」

サトシ「よし、まずは1体目！」

サトシは最初の1体目を倒したことでさらに勝利への自信をつける。

コウヘイ（少々、あのカビゴンを甘く見過ぎていました。それなら、このポケモンが有効ですね。）

コウヘイはすぐさま次のポケモンをフィールド上に出した。

ツボツボ「ツボオオ！」

コウヘイ2体目のポケモンはツボツボだ。

サトシ「カビゴン、まだいけるか？」

カビゴン「カビ！」

サトシ「そっか、それならお前を信じるぜ。」

対ツボツボ戦も引き続きカビゴンでいくようだ。

サトシ「カビゴン、れいとうパンチ！」

カビゴン「カアアアビイイイ！」

ツボツボ「ツボオオオ！」

カビゴンのれいとうパンチはツボツボにクリーンヒットした。その後もカビゴンはツボツボに攻撃を与え続ける。

ツボツボ「……………」

だが、ツボツボは抵抗しなかった。

コウヘイ（いいですよ、そのまま攻撃を続けてください。）

実はこの時、1体目を倒した嬉しさのあまり、サトシはコウヘイの術中にはまっていたことに気づかなかった。

サトシ「トドメのはかいこうせん！」

カビゴン「カアアアビイイイ！」

カビゴンの強力なはいかいこうせんが、ツボツボに襲い掛かる。これもクリーンヒットし、ツボツボが戦闘不能になったと会場じゅう誰もがそう思った。だが、

ツボツボ「…………ツボ。」

サトシ「何!?!」

なんとツボツボは皮一枚で持ちこたえていたのだ。

コウヘイ「はいかいこうせんが当たる前に、こらえるを使わせていたかったです。先程、抵抗しなかったのはこの為ですよ。」

コウヘイは事前にサトシのカビゴンを調べて、はいかいこうせんを覚えていることを知ったのだ。そして、そのはいかいこうせんをトドメの一発で打たせようと、わざと今までの攻撃を受けて、カビゴン

がを誘導させたのだ。

カビゴン「・・・カビィ。」

カビゴンははいこうせんの影響で身動きが取れない。

コウヘイ「僕のツボツボの反撃の一手はこれです。ツボツボ、きしかいせい。」

ツボツボ「ツウウオオオオ！」

ツボツボはきしかいせいでカビゴンに攻撃を仕掛ける。きしかいせいは、残り体力が少なければ少ないほど威力が上がるかくとうタイプの技である。

カビゴン「カアビィィ！」

きしかいせいは身動きの取れないカビゴンにクリーンヒットした。さらに言えば、ノーマルタイプのカビゴンにとっては効果抜群の攻撃である。

カビゴン「・・・カビィ。」

カビゴンはこの一撃でダウンした。

審判「カビゴン、戦闘不能。ツボツボの勝ち。」

コウヘイがカビゴンを倒し、再び1対1のタイに持ち込ませた。

サトシ「いつけねえ、最初の一体を倒したからって、つい油断しち

やった。」

サトシは改めて気を引き締める。

サトシ「コータス、君に決めた！」

コータス「コオオオオオ！」

サトシの3体目はコータスだ。

コウヘイ「よくやりました。ツボツボ。」

コウヘイはツボツボをボールに戻した。カビゴンを倒すのに、かなりの体力を消耗したツボツボに連戦させるのはあまりにも分が悪すぎる。

コウヘイ「今度は正攻法でいかせてもらいますよ。」

コウヘイもまた3体目のポケモンを出す。

ヤドキング「ヤアアアドオオオ！」

コウヘイの3体目はヤドキング。相性を攻める戦術に打って出た。

サトシ「コータス、かえんほうしゃ！」

コータス「コオオオオオオオオオオ！」

コータスのかえんほうしゃがヤドキングに襲い掛かる。

コウヘイ「ヤドキング、まもる！」

ヤドキング「ヤアアアドオオオ。」

ヤドキングはまもるでこれを防いだ。

コウヘイ「ヤドキング、みずのはどう。」

ヤドキング「ヤアアアドオオオオ！」

今度はヤドキングがみずのはどうで反撃する。

サトシ「コータス、こっちもまもるだ！」

コータス「コオオオオオ。」

コータスもみずのはどうをまもるで防いだ。まずはまもるの応酬で、このバトルは始まった。

ヤドキング「ヤドオオオオオ！」

まもるの応酬から今度は、ヤドキングが攻撃の為にコータスに接近してきた。

コウヘイ「みずのはどう。」

ヤドキング「ヤアアアドオオオオ！」

サトシ「かわせ！」

コータス「コオ！」

ヤドキングのみずのはどうを、コータスは難なくかわす。だが、

コウヘイ「これはかわせますかな？ ヤドキング、サイコネシス。

」

ヤドキング「ヤアアアドオオオ．．．。」

ヤドキングのサイコネシスが発動。

コータス「コオ！？」

サトシ「コータス！？」

サイコネシスはコータスに当たり、コータスは餌食となつてしまつた。

ヤドキング「ヤアアアドオオオ！」

コータス「コオオオオオオオオ！」

コータスはフィールドの隅ギリギリまで投げ飛ばされた。その後、コータスはじわりじわりとヤドキングのダメージを削っていくが、相性の悪さが重なつて、不利な状況に立たされた。

ヤドキング「ヤドオオオオオ！」

ヤドキングはまた接近からみずのはどう、サイコネシスの組み合わせてコータスに攻撃を仕掛ける。

サトシ（接近からの攻撃は厄介だ。それにあのヤドキングのスピードには驚いたぜ。）

通常のヤドキングはそうすばやさの高いポケモンではない。だが、コウヘイのヤドキングは素早い動きをしながら攻撃している。今のサトシは攻めあぐねている状態だ。

サトシ（・・・ん？　そうか、この手で・・・。）

サトシは何か閃いたようだ。

ヤドキング「ヤアアアドオオオオオ！」

ヤドキングは案の定みずのほうを放った。今までならコートスはかわすところだが、今回はかわそうとはしなかった。そして、コートスはそのまみずのほうを喰らってしまう。

コウヘイ「ふふふ、これで決まりですね。」

この時、会場じゅう誰もがコートスの戦闘不能を確信していた。

コートス「・・・。。。」

だが、コートスは殻にこもって攻撃を持ちこたえていたのだ。みずのほうが当たる前に『てっぺき』を発動させていたようだ。

コウヘイ「なっ!?!?」

これにはコウヘイも驚きを隠せなかった。てっぺきは通常物理攻

撃にしか効果はないが、アニメでは使い方次第によっては特殊攻撃でも十分対応できる。

ヤドキング「ヤア!？」

さらに言えば、ヤドキングはコータスに接近している最中である。これは絶好の攻撃のチャンスだ。

サトシ「コータス、最大パワーでオーバーヒート！」

コータス「コオオオオオオオオオオオオ！」

コータスの強烈なオーバーヒートがヤドキングに襲い掛かる。いくら相性の悪いみずタイプでもこれだけ強大な威力の攻撃を喰らえば一溜まりもない。

ヤドキング「ヤドオオオオオ！」

オーバーヒートはヤドキングにクリーンヒットした。ヤドキングは数メートル先まで吹っ飛ばされた。

ヤドキング「ヤド．．．。」

審判「ヤドキング、戦闘不能。コータスの勝ち。」

ヤドキングはそのままダウン、相性の壁を打ち壊したコータスの見事な逆転勝利だった。

コウヘイ（どうやらここまでのようですね．．．。）

コウヘイはこの時負けを確信した。まだコウヘイには、ツボツボが残っているが、このツボツボはカビゴンを倒すために、ギリギリまで体力を消耗している。こらえるは連続で使用すると失敗する確率が高くなるため、ツボツボが回復系の技を覚えていない限り、ここでの逆転はほぼ不可能である。そして、案の定、ツボツボはコータスに倒され、この試合はサトシの勝利に終わった。

ケンタ「ナイスバトルだったぜ、サトシ。」

ピカチュウ「ピカピ、ピカピカ！」

サトシ「サンキュー、ケンタ、ピカチュウ。」

観客席の面々と合流後、早速ケンタとピカチュウから祝福を受けるサトシ。

コトネ「でも、コータスの時にヤドキングが出てきたときにはヒヤッとしたわ。」

サトシ「ああ、でも相性に負けるほど俺とポケモン達はそう弱くはないさ。」

デント「相性の悪さ、さらには相手の巧みな戦術で不利になった状況をサトシ持ち前のテイストで見事勝利に導いた結果だね。」

ベル「さすがはサトシ君だわ。」

サトシ「いやあ、それほどでもないさ。最初の一体目を倒した時に少し油断しちゃったし。」

仲間達からの祝福に、少し照れくさそうにしながら、今回のバトルの反省をするサトシ。

タケシ「まあ、とりあえずは初戦突破おめでとう。」

サトシ「サンキュー。」

一通りのサトシの初戦突破の祝福が終わった後、サトシ達はコンテスト組と合流するためにバトル会場を後にした。

？「さすがはサトシ、やっぱり強いなあ。」

ケンタ達と同様にサトシ対コウヘイ戦を観戦していた一人の少女がつぶやいた。まだ名前は明かさないが彼女もこの予選選考会に出場しているトレーナーの一人である。

？「サトシ．．。」

その少女は妙にサトシのことを気に掛ける。その顔はほんのり赤く染まっていたとかいなかったか．．

カスミ「スターミー、バブルこうせん！」

スターミー「フウ！」

カスミはバブルこうせんと高速スピンを使って、空中でバブルリングを作ったり、それを弾いたりして、観客を魅了した。また、終

盤で巨大な泡をシャボン玉のように膨らませてスターミーをそれに包み込ませた。それをバブルこうせんの連用で中で大量の泡を作り、高速スピンドで弾くことで発生した水しぶきにより綺麗に引き立てるというスターミー自身にも見せ場を作った。これには審査員の面々も高評価を出した。

シュウ「舞え、ロズレイド。」

ロズレイド「ロズレエエイド。」

同じく、2日目にパフォーマンスが組まれていたシュウは、ロズレイドのはなびらのまいを利用して、優雅なダンスパフォーマンスを見せた。観客はその優雅さに見惚れていた。特にシュウファンの女性は、目をハートマークにさせながら見入っていたとか．．．。こうして、コンテスト部門も盛り上がりを見せ、2日目も初日に負けないくらいの大盛況で幕を閉じた。

続く

予選ステージ2日目(2) (後書き)

次回の3日目は、短くなるかも・・・

予選ステージ3日目（前書き）

あらかじめ決めておいた設定と矛盾が生じないかが不安です・・・

予選ステージ3日目

予選ステージ2日目の初戦を終えたサトシは、ケンタ、マサムネ、ケニヤンとともに宿泊先のホテルのロビーにて談笑していた。

ケニヤン「それにしても、サトシもケンタも凄いバトルだったな。」

マサムネ「遠くから観てたオイラ達からも、熱気が伝わって来ただべ。」

ケニヤンとマサムネは自分たちが観戦していたケンタとサトシのバトルの感想を率直に述べた。

サトシ「それをいうなら、お前たちのバトルもかなりのものだったぜ。」

ケンタ「そうそう、マサムネとケニヤ」ンのあの痺れるようなバトル、今でも目に焼き付いてるぜ。」

ケニヤン「アクセント違うけど、まっ、バトルの方はマサムネの粘り強さには正直驚いたな。」

マサムネ「オイラも、こんな熱くなったバトルは久々だべ。引き分けに終わったけど、こんな楽しいバトルをさせてくれたケニヤ」ン」には感謝してるぞ。」

ケニヤン「また、アクセント違うけど、こっちも楽しかったぜ。ありがとう。」

ケニヤンとマサムネの試合は、両者ともに3体全てを出し切る接戦となり、結果は引き分けとなった。だが、2人とも清々しい表情をしていることから分かるように、充実した一戦だったことが伺える。

マサムネ「次バトルするときは、負けねっからな！」

ケニヤン「臨むところだぜ。」

マサムネとケニヤンは今回のバトルを通して、良きライバル同士となったようだ。

ケンタ「なあ、これからピンポンやらないか？俺とサトシ、マサムネとケ「ニ」ヤンが組んでさ。」

ケンタがサトシ、マサムネ、ケニヤンに温泉旅行の醍醐味(?)であるピンポンをする提案をした。

サトシ「ピンポンか……。いいな。」

ケニヤン「またアクセント間違えられたけど、面白そうだな。」

マサムネ「オイラもやるべ〜。」

ケンタ「んじゃ、決まりだな。」

サトシ、ケンタ、マサムネ、ケニヤンは、4人でピンポンをすることになった。

マサムネ「サトシ、ケンタ、やるからには負けねっぞ！」

ケンタ「臨むところだ！」

サトシ「俺も負けられないからな！」

ケニヤン「俺もだぜ！」

ピカチュウ「ピカピカ！」

バクフーン「バクバアク！」

サトシ達は、卓球台のある場所へ移動し、サトシとケンタ対マサムネとケニヤンのダブルスをした。試合中、ピカチュウとバクフーンは羽織袴姿で応援していた。このダブルスの結果がどうなったかは読者のご想像にお任せします。そして、予選ステージは3日目を迎えた。

サトシ「いよいよ、今日で決勝トーナメントの進出者が決まるんだな。」

ピカチュウ「ピカア……。」

その日の朝、サトシは誰よりも早起きして英気を養っていた。

サトシ「今日の俺の相手はシヨウタか。相手にとって不足はないぜ。」

サトシの2戦目の相手はシヨウタである。シヨウタとはサウスシテイで一度タッグバトルをして、勝利したことがある。ただ、その時はバトルらしいとはとても言えない状況だった。公式戦で顔を合

わせるのはもちろん初めてである。

サトシ「今日は頼むぞ。ピカチュウ。」

ピカチュウ「ピカピ！」

サトシは今日、ピカチュウを加えるようだ。試合前から決めつけるのは良くないが、シヨウタの勝利は限りなくゼロに近くなった（笑） どちらという意味だ！ by シヨウタ

サトシ「今日が楽しみだぜ。」

ピカチュウ「ピカチュウ！」

サトシとピカチュウは気合を入れ直した。その後、他の面々が続々と目を覚まし、朝食を摂った後、バトル組はバトル会場へ、コンテスト組はコンテスト会場へと向かった。

ノゾミ「ムウマージ、Ready、Go！」

予選選考会コンテスト部門の3日目は、ノゾミのパフォーマンス演技から始まった。

ノゾミ「ムウマージ、かげぶんしん！」

ムウマージ「ムウマアアア。」

まず、ノゾミはムウマージにかげぶんしんを指示。

ノゾミ「でんげきは！」

ノゾミの後、数名のパフォーマンス演技の後、マリナの番がやってきた。マリナはプクリンの『ピンクちゃん』を予選のポケモンに選んだ。

マリナ「ピンクちゃん、サイコネシス！」

プクリン「プウウクウウウウ！」

まず、プクリンはサイコネシスを発動。

マリナ「続けてエコーボイス！」

プクリン「プウプルルプウクリイイイイ．．．。」

続けてプクリンはエコーボイスを繰り返して、歌い始めた。そして、マリナと一緒に踊り出す。マリナのパフォーマンス演技は、プクリンと一体となったダンスパフォーマンスのようだ。

プクリン「プウウクルルル．．．。」

プクリンは集中力と笑顔を決やさず、歌い続け、マリナとともにダンスを楽しむ。そしてフィニッシュの時、

プクリン「プウウウルルル．．．。」

ステージの中央で、プクリンは歌を続ける。歌いながら発動しているサイコネシスの影響で、プクリンが鮮やかに見える。マリナのパフォーマンスは、観客をうっとりさせた。トップコーディネーターの実力を思う存分見せつけたノゾミとマリナは、もちろん審査

員からも絶大な高評価を受けた。

ラングレー「ツンベアー、つららおとし！」

ケンタ「スピアー、こうそくいどう！」

サトシ「ハイガニ、クラブハンマー！」

シヨウタ「カメックス、からにこもる！」

一方、バトル部門もコンテスト部門に負けなくらいの盛り上がりを見せた。ラングレーを相手にしたケンタ、シヨウタを相手にしたサトシは、接戦を繰り広げたものの、初戦の勝利の勢いそのままに勝利をもぎ取った。これでサトシとケンタは、2戦全勝で決勝トーナメントへと駒を進めた。アイリスとコトネも順当勝ちし、同じく決勝トーナメントへ駒を進めた。さらに言えば、ベルとリラのバトルで、ベルはリラ相手に接戦を繰り広げるものの、結果的にリラがフロンティアブレーンの実力を見せつけ、辛くもリラが勝利し、そのリラは初戦でシューティーとは引き分けで勝ち点で並んでいたが、倒したポケモンの総数で上回ったために決勝トーナメントへの切符を勝ち取った。これでジュンとシンジが入っているプールE、プールN、プールOの3組以外の決勝トーナメント進出者が決まったのだ。ちなみに、翌日ジュンとシンジは、決勝トーナメント進出を賭けて、1対1のサドンデスマッチを行うことになっている。

カスミ「ふう〜、なんか長く感じられた3日間だったわ。」

ハルカ「そうね、でもわたし達の戦いはまだ終わってないわ。」

ヒカリ「ええ、予選通過したからと言ってまだ『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の本戦の切符を手にしたわけじゃないし。」

マリナ「まあ、とりあえずはみんな予選通過したことだし、今は3日間で溜まった疲れを癒しましょう。」

カスミ・ハルカ・ヒカリ「『賛成〜!』」

カスミ、ハルカ、ヒカリ、マリナの4人は、一足早く入浴でこの予選ステージの3日間で溜まった疲れを癒そうと、大浴場に向かっている。ちなみに、コンテスト組は全員予選通過を果たしている。

ヒカリ「それはそうと、なんだか様子がおかしくない?」

ハルカ「そういえば、さっきからやけにジュンサーさんが通っているわね。」

大浴場へ向かう4人は、先程からちらちらと見えるジュンサー達の姿に、疑問を抱いていた。それもみれば分かるくらいに物々しい雰囲気である。疑問を抱きながらも4人は脱衣場の手前に到着したのだが、

マリナ「なんか、騒がしいわね。」

カスミ「なにかあったのかしら?」

ヒカリ「とりあえず、行ってみましょう。」

4人は事の真相を確かめるために、1人のジュンサーに事情を聞くことにした。この物々しい雰囲気の正体とは・・・

続く

予選ステージ3日目（後書き）

次回と次々回は、少し大会から離れてサトシ達が騒動に巻き込まれます・・・

変態は忘れたころにやって来る（爆）〜序章〜（前書き）

『天災は忘れたころにやって来る』をモジったサブタイですが、本当に変態が2組も登場します．．．。1つは以前この作品で変態の限りを尽くしてきたアイツらですwww

この話には、一部不快にさせるような表現がございますので、読む際には自己責任でお願いします。

変態は忘れたころにやって来る(爆)〜序章〜

物々しい雰囲気の中、カスミ、ハルカ、ヒカリ、マリナの4人は大浴場の入り口の前にいる1人のジュンサーに事情を聞くことにした。ちなみに、同じく3日間の疲れを癒そうと大浴場に向かっていたサトシとケンタとも合流している。

ヒカリ「あの、ジュンサーさん。」

ジュンサー「ん？ 何かしら？」

ヒカリが声を掛けると、ジュンサーは反射的に返事を返す。

カスミ「何か物々しい雰囲気ですけど、何かあったんですか？」

カスミが事の真相を確かめようと、何があったか聞いてみると、

ジュンサー「実はね、最近この近辺で女性を狙った覗き及び盗撮、下着泥棒が頻発してるのよ。しかもポケモンを悪用してるケースが多いの。それでもしこの大会の出席者に悪影響があつてはいけないから、こうして見回りをしてるのよ。」

ハルカ「そうだったんですか。」

ジュンサーの説明を聞いて、一同状況を理解したようだ。

マリナ「覗きと盗撮、下着泥棒の被害に遭うのは嫌だけれど、こうして監視されながらお風呂に入るのもなんかね……。」

マリナの言うことも一理ある。できればこんな物々しい雰囲気ではなく、ゆっくりと一日の疲れをとって入浴したいものである。

ジュンサー「ごめんね、でも仕方ないのよ．．．。」

ジュンサーは申し訳なさそうに一同に謝る。

マリナ「あっ、いえ、ジュンサーさんが悪いわけじゃないんですよ。」

ヒカリ「そうですよ、悪いのは覗きや盗撮、下着泥棒をする人たちなんですから。」

カスミ「全く、そういうことをするなんて最低ね。」

ハルカ「ホント、女の敵だわ。」

事情を知り、怒りを露わにする女性陣。

サトシ「それにポケモン達を悪用するなんて許せないな。」

ケンタ「俺もサトシに同感だ。」

サトシやケンタもポケモンを悪用しているということに対して、怒りを露わにする。

マリナ「ジュンサーさん、大変ですけど頑張ってください。」

カスミ「あたし達、犯人が捕まることを願っています。」

ジュンサー「みんな、ありがとう。一刻も早い事件解決のためにも、頑張るわ。」

一同の励ましに、感謝の意を表すジュンサー。その後、ジュンサーから入浴に人数制限を設けていて、しばらくしないと入れないことを聞き、一同は脱衣場の前の談話コーナーで待機することになった。

黒マント男「ぐふふふ、僕好みのキュートな女の子ばかりで迷っちゃうなあ……。」

変態スリーパー「マスター、今回の予選選考会の参加者の女子達は、レベルが高いのが大勢いますぜ。」

読者の皆さん、このコンビを覚えているだろうか。以前、タマムシジムでジムリーダー・エリカの入浴を除き見し、その後、怒りを乗り越えた状態のサトコもといサトシに成敗された変態黒マント男と変態スリーパーである。彼らの手元には、高性能CCDカメラや大量の女性物の下着がある。そう、覗き見及び盗撮、下着泥棒の犯人とはこの変態コンビのだったのである。

変態スリーパー「それにしても、やっぱりポケモンのメスより人間のメスですなあ。わたしの性欲が満たされますよ。」

黒マント男「僕もだよ、スリーパー。やっぱり、君とは気が合うね。」

変態スリーパー「わたしもあなたのようなお方にお会いできて光栄です。」

妄想を膨らませながら、不気味な高笑いをする変態コンビ。

変態スリーパー「そういえば、マスターが元いた世界も粒ぞろいの美少女がいたそうですが．．．。」

黒マント男「うん、特に僕のクラスメートで一番の美少女と評判の子なんか、毎日お風呂に入っているんだ。もうそれは、僕に覗いてくださいと言ってるようなもんだよ。あれは絶好な覗きスポットだったなあ。」

変態コンビの会話からして、黒マント男はアニメの世界とは別の異世界から来た人物で、『クラスメート』という単語から学生だと言っていることが分かる。黒マント男は抑えきれずにさらに性欲と妄想を膨らませる。まったく、このマザコンギツネは．．． by .
天の河

黒マント男「ちょっと、作者。それじゃあ、僕の正体がかつちやうでしょ。」

別にいいじゃん。もうメンドくさくなってきた．．．

黒マント男「まあ、別に正体ばれようがどうでもいいけれど。」

ここで読者の皆さんに黒マント男の正体を明かすでしょう。作者の天の河が思わず口にした『マザコンギツネ』という単語からも分かるように、その正体は他の作者の方々の作品でその変態振りを思

う存分發揮したスネ汚である。コイツの変態振りが如実に表れている作品の例としては、小河健太さん作のドラえもん小説や天の河自身が執筆した『世にもつまらない会話集〜ドラゴンボール編〜』（只今、非公開）が挙げられる。小河健太さん、勝手に宣伝してすみません。 by . 天の河

黒マント男「今日はどんな女の子が撮れるかなあ。最近の子は発育がいいし。」

変態スリーパー「ええ、これは今夜も楽しみですなあ。」

ふたたび不気味な高笑いをしながら、変態コンビはその場を去った。だが、覗き・盗撮魔及び下着泥棒の犯人はこの変態コンビだけではなかった。

男A「さすがは世界大会の予選選考会。有名な可愛い子ばかりがそろってて、ウハウハだな。」

男B「そうだな。『カントーの人魚姫』^{マイメイト}のカスミちゃん、『シンオウの妖精』^{フェアリー}のヒカリちゃんがいるぞ。」

男C「俺としては『ホウエンの舞姫』のハルカちゃんいいなあ。あの子、おっぱい大きいし。」

男D「バトル部門の予選選考会に出ていたアイリスちゃんも可愛かったな。俺、あの子タイプだわ。」

4人の男が変態コンビとは別の場所で、ヒロインについて語り合っていた。ただ、彼らの手元にも高性能CCDカメラや大量の女性を盗撮した写真があった。

男B「今回は4人が一緒にいるみたいだぞ。」

男D「ホントかそれは!？」

男C「これは絶好のチャンスだぞ。」

男A「早速、イってみようぜ。」 字が違うのは気にしないこと。

そういうと4人の男たちも、その場を去っていった。さて、狙われたアニメポケヒロインならびに今予選選考会女性出場者の運命やいかにかに!？

変態は忘れたころにやって来る(爆)〜序章〜(後書き)

次回、シンオウチャンピオンマスターのあの人が登場!?

変態は忘れたころにやって来る(爆) 〔第2章〕(前書き)

ハーレム要素のやっちゃったバージョンです(爆) これでも、自重した方。

予告通り、シンオウのチャンピオンマスターのあの人が初登場ですが、何処を間違えたのか、暴走キャラになってしまいました(汗)

最後に、サファイアさんからのリクエストキャラが2名登場します。

変態は忘れたころにやって来る(爆) 　　↓第2章↓

サトシ達は覗き及び盗撮、下着泥棒騒動の影響で人数制限がかかっている大浴場が空くのを待っている為に、現在大浴場近くの談話コーナーにいる。ちなみに、待機している途中でアイリスもサトシ達に合流している。

カスミ「まだ、時間がかかりそうね。」

サトシ「ああ、そうだな。」

アイリス「こんなことだったら、トランプとかUOOとか持って来ればよかったわね。」

まだ、サトシ達が入浴できるようになるまでかなり時間がかかりそうである。アイリスの言うとおり、トランプやUOOなどを持ってきていけば、暇つぶし程度に遊べる。まあ、トランプはともかくUOOがアニメの世界にあるかどうかは不明だが・・・

ケンタ「まあ、状況が状況だし、気長に待っていようぜ。」

マリナ「そうね、決勝トーナメントのこととかプライベートのこととか話していればお風呂も空くだろうしね。」

サトシ達は何もすることがないので、バトル部門とコンテスト部門それぞれの決勝トーナメントについて、今いるメンバーのプライベートについて、もろもろ話しながら暇をつぶすことにした。すると、サトシがふとあることを思い出す。

サトシ「そういえばこんなこと、前にもあったよな。」

ヒカリ「あっ、そういえば。」

アイリス「あったわね。」

サトシが言っている以前の出来事とは、サトシ達がタمامシジムの覗き魔騒動のことである。

マリナ「前にもって?」

ケンタとマリナはその頃はまだサトシ達とは同行していなかったため、当然知らない。サトシはマリナとケンタにタمامシジムでの覗き魔騒動のことを話した。

ケンタ「そんなことが・・・。」

マリナ「全く、女の子のお風呂の覗き見なんて最低なことをする人の気がしれないわ。」

ケンタとマリナは説明を聞いて理解し、マリナに至っては覗きの犯人に対して怒りを露わにする。

アイリス「ねえ、サトシ。あの時みたいに・・・。」

サトシ「絶対、ヤダ!」

アイリスが言おうとしていたことが分かったのか、サトシはアイリスの言葉を遮って、断固拒否した。ちなみにアイリスが言おうとしていたことは、サトシが女装をさせて事件解決に一役買ってもら

おつというこゝとである。

アイリス「我ながらに良いアイデアだと思ったのに。」

アイリスの『サトシ、サトコ化作戦』は失敗に終わった（笑）

アイリス以外のサトシLOVES（サトシの女装姿、見たかったなあ．．．。）

実はただサトシの可愛い女装姿を見たかっただけだったとか．．．
（汗）

ケンタ「ま、まあ、とりあえずはここで暇をつぶそうぜ。」

ケンタは機転を利かせて、話題を変えようとする。その後、ケンタ達はしばらく談話コーナーで談笑していた。そんな時だった。

？「あれ、サトシ君？」

？「えっ、サトシ君だった？」

？「サトシ君？」

？「えっ、あの子がサトシ君？」

4人の人物がサトシを呼ぶ声がした。しかも、年上の女性の声．．

サトシ「ナツミさん！」

1人はタンバシテイでのポケモンコンテストで出会ったナツミだった。しかもナツミの後ろにいる3人のうち2人の人物にもサトシは見覚えがあった。

サトシ「シロナさんにヒナタさん!？」

ハルカ「嘘っ!？」

ヒカリ「どうしてここに!？」

サトシ同様、ヒナタを知っているハルカ、ヒナタとシロナを知っているヒカリも突然のことに驚きを隠せない。

シロナ「私は、今回の『ワールド・チャンピオン・リーグ』の第1予選選考会の来賓として来てるの。ここにいたって、不思議はないでしょう。」

ヒカリ「ああ、なるほど。」

シロナの説明に納得するヒカリ。

ヒナタ「私はこの近くのポケモン保護区での任務で来てるわ。ここに立ち寄ったのは、任務の疲れを癒すためよ。」

ナツミ「私はヒナタの任務のサポートで来てるの。此处に立ち寄ったのはヒナタと同じ理由よ。」

サトシ「そうだったんですか。」

ハルカ「ところでヒナタさんとナツミさんは親しそうに見えますけ

れど、どういづご関係なんですか？」

ハルカはヒナタとナツミの人間関係について聞いてみた。

ヒナタ「私とナツミはいとこ同士なの。小さい頃からよく遊んだり、今では私のポケモンレンジャーの任務をよく手伝ってもらってるわ。」

ナツミ「まあ、ヒナタとは腐れ縁みたいなものね。ちなみに、シロ姉は私のお姉ちゃんと幼馴染よ。」

シロナ「ええ、ナツミのお姉さんとは私がポケモントレーナーになる前からの仲よ。それとヒナタともよく仕事で一緒になることがあるわ。」

サトシ「凄い人間関係ですね。」

ヒカリ「ポケモンレンジャーの人とチャンピオンマスターが知り合いだなんて、びっくりだね。」

サトシ達は3人の人間関係について、驚きの表情を見せる。

シロナ「あら、わたし達にとっては普通のことよ。サトシ君たちみたいな旅仲間のようにね。」

サトシ達とシロナ、ナツミ、ヒナタは微笑ましく笑う。

ヒカリ「ところで、そちらの方は？」

ヒカリは、シロナ、ナツミ、ヒナタの3人の後ろにいるもう一人

の女性が気になった。

ナツミ「彼女はメグミ。さっき言ってた私のお姉ちゃんというのは、この人のことよ。」

メグミ「初めまして、私はメグミ。あなた達がサトシ君、ハルカちゃん、ヒカリちゃんね。あなた達の話は、ナツミ、ヒナタ、シロナから聞いているわ。」

サトシ・ハルカ・ヒカリ「「「はじめまして。」」」

メグミ「それとあなたがカスミちゃん、アイリスちゃん、ケンタ君、マリナちゃんね。あなた達の話もナツミから聞いているわ。初めまして。」

ヒナタ「挨拶が遅れたけれど、私とシロナさんからも初めまして。」

カスミ・アイリス・ケンタ・マリナ「「「はじめまして。」」」

ひと通りの挨拶と自己紹介を終えると、シロナはふとあることを聞いてみた。

シロナ「そういえば、なんでお風呂の人数制限がかっているのかしら?」

ヒナタ「そういえば、私達が今まで通ってきたところもなんか物々しい雰囲気だったわね。」

シロナは大浴場の人数制限の理由について知らないようである。そこでサトシが4人に分かりやすく簡単に説明した。

ナツミ「そんなことがあったの．．．。」

メグミ「私達、任務や公務に夢中だったからそんなことがあったなんて知りもしなかったわ。」

シロナ達は、ここ最近任務や公務で多忙な毎日を過ごしていたため、仕事以外の情報入手が疎かになっていた。まあ、無理もないだろう。

ヒナタ「そうだったら、ゆっくりとお風呂に入れないわよね。」

アイリス「ええ、まったく。」

ヒカリ「ホント、ボディガードが欲しいくらいです。」

ちなみにサトシ達が宿泊する施設では諸事情により、ポケモンとの入浴が禁止されている。このような状況下で、ポケモンと入浴ができない分、自分の身を自分自身で守らなければならないので不便である。

ジュンサー「あなた達、たった今女湯が空いたわよ。」

カスミ「あっ、ありがとうございます。」

ジュンサーが女湯が空いたことを報告しにやって来た。

シロナ「ジュンサーさん、私達もお風呂にしたいんだけど、今入れるかしら？」

ジュンサー「あなたは、この予選選考会の来賓であるシロナさん。ええ、シロナさん達を含めても2人程の余裕がありますよ。」

シンオウのチャンピオンマスターであるシロナに気づくと、ジュンサーは1回敬礼をして話をする。このジュンサーの行動からして、シロナは警察とも友好な関係であることが伺える。ジュンサーの話によると、後から来たアイリス、ナツミ、メグミ、シロナ、ヒナタを含めても2人程度の余裕があるそうだ。

ジュンサー「あつ、それとサトシ君とケンタ君。ごめんね、男湯の方はもう少し待たないと空かないみたい。」

サトシ「そうですか。」

ケンタ「大丈夫ですよ、俺達ならここでサトシと待ってますから。」

謝るジュンサーにサトシとケンタは自分達は気にしていない素振りを見せる。

マリナ「サトシ、ケンタごめんね。わたし達だけお先に失礼しちゃって。」

ケンタ「だからいって。マリナ達も風呂でゆっくりしたかったんだろ?」

マリナもジュンサーに続いて謝るが、それもケンタが気にしていないと答えを返す。

シロナ「...ねえ、私いいこと思いついたんだけどこんなのはどうかしら?」

ヒカリ「なんですか、シロナさん？」

突然、シロナがあることを閃いたという。

シロナ「ヒカリちゃん、さっきボディガードが欲しいって言ったわよね？」

ヒカリ「ええ、そうですね。」

シロナ「じゃあこんなのはどうかしら？」

シロナは話を続ける。

シロナ「今、女湯は2人程度の余裕があるわよね。それなら、一緒にサトシ君とケンタ君もどうかしら？」

シロナ以外「はい!？」

シロナの突飛押しもない提案に一同啞然とする。まあ、突然混浴の提案をされたら誰だって驚くか……

サトシ「あのシロナさん、俺達男ですよ。」

ケンタ「それにいくら状況が状況だからって、さすがに女湯に入るのは……。」

サトシとケンタは、当然のごとく戸惑いを見せる。

シロナ「それなら心配いらないわ。言いだしっぺの私がきちんと責

任を持つから。それに男湯が空いてないのなら、丁度いいじゃない。

「

サトシ・ケンタ「……………」

自信気なシロナに、サトシとケンタは返す言葉がなかった。さらには、

カスミ「ま、まあ、あたし達なら構わないけれど。」

アイリス「サトシとアタシ達、タمامシジムの時も一緒に入ってるもんね。」

ハルカ「そういえばそうかも。」

ヒカリ「少し抵抗があるけれど、あたしもダイジョーブかな。」

マリナ「サトシとケンタなら、ボディガード役にもなれるしね。」

サトシ・ケンタ「お前らな(汗)」「」

アニポケヒロインズとマリナによる援護射撃(爆)。彼女たちは、混浴に関しては了承の意向だ。

ケンタ「仮にマリナ達が良くても、そんなことジュンサーさんが……………」

そんなご都合主義の反良俗的行為がジュンサーから許されるはずがない、ケンタは自信を持っていた。だが、

ジュンサー「まあ、サトシ君とケンタ君なら大丈夫かしら。この2人の人柄の良さは、我々警察の間でも知れているし、分かったわ私の責任のもと、許可します。」

サトシ・ケンタ「ジュンサーさん(泣)」

サトシとケンタの最後の望みが絶たれた(笑)。というより、警察の人間がこんなことを許しているものだろうか・・・書いてるお前が言うな!

シロナ「あとは、ナツミ、メグミ、ヒナタさん次第だけれど。」

メグミ「私は構わないわ。」

ナツミ「サトシ君とケンタ君の人柄の良さは知ってるし、私もお姉ちゃんたちと同じく構わないわ。」

ヒナタ「私も大丈夫よ。ケンタ君とは初対面だけれど、サトシ君と仲がいいんなら悪い人でもなさそうだし。」

ナツミ、メグミ、ヒナタも了承の意向だ。

サトシ・ケンタ「はあ、分かりましたよ・・・。」

サトシとケンタは彼女たちの説得をあきらめた。不本意ながらも渋々、混浴を了承する。恐るべし、シンオウチャンピオンマスター・シロナ・・・

続く

変態は忘れたころにやってくる(爆) 〔第2章〕(後書き)

ナツミとメグミはサフィーさんからのリクエストキャラです。

変態は忘れたころにやって来る（爆） 〔第3章〕（前書き）

イツツ・お風呂・タアアアム！ デントっぽく言ってみた。

果たして、サトシとケンタは無事に理性を保つことが出来るのか！？

くそっ、リア充め！ だったら、こんなの書くな！

変態は忘れたころにやって来る(爆) 〔第3章〕

シロナの強引(爆)な提案により、サトシとケンタは女性陣達とボディガードという名目で混浴をする羽目になった。

サトシ「なあ、ケンタ。どうしてこうなったんだろ．．．。」

ケンタ「．．．頼むから、俺に聞かないでくれ。サトシ。」

サトシ「わりい。」

一体、どうしたらこうなるのか俺自身わかりません．．． by
天の河

ケンタ「作者、あなたが分からなくてどうする。」

あつ、そうでした。 by 天の河

サトシ「もう、どうにでもなれ。俺達がみんなを待たせたらまずいだろうから、さっさと準備しようぜ。」

ケンタ「そうだな。」

ちなみにサトシとケンタは、大浴場に入ったすぐそばのお手洗いで着替えている。さすがに女性陣達も恥じらいがあるので、準備と風呂あがりの時だけは別々ということになった。サトシとケンタは腰にタオルを巻き付け、女性陣達の入浴の準備が終わるのを待った。同じ頃、女性陣達はというと、

ヒカリ「サトシってばあんなに照れちゃって。」

アイリス「こういうの、サトシは何とも思わないと思ったけれど、結構かわいいところあるじゃない。」

カスミ「あたし達もサトシと旅をして変わったけれど、サトシも精神的に変わってきてるものね。」

ハルカ「今回の旅だっそうだしね。」

アニポケヒロインズはサトシとの今回の旅を通して、自らも変わったところを感じつつ、サトシの精神面での変化にも微妙に感じ取っていた。

シロナ「ふふふ、あなた達サトシ君のことよく知ってるのね。」

ヒカリ「ええ、あたし達はよくサトシにコンテストバトルの練習相手にもなってもらってたし、あたし達からもサトシの練習相手になっていた時もありましたから。」

カスミ「それに以前、一緒に旅をしてた名残もありますし。」

アイリス「最初に出会ったときは、変な奴だと思ってたんですけどね。」

ハルカ「今では大切な仲間の1人です。」

シロナ「確かに、サトシ君は勇気があって優しく、それにカッコいいものね。」

アニポケヒロインズとシロナは微笑ましく会話を進める。

シロナ「もちろん、ケンタ君もサトシ君に負けない勇気と優しさ、カッコよさを持つてるわ。よね、マリナちゃん。」

マリナ「ええ、昔と比べて少し大人びてきて、背も伸びてきてますし。幼馴染としてでなく、ケンタは大切な仲間です。」

ケンタのことを聞かれて、マリナは楽しそうに返事を返す。

シロナ「あなた達の場合、仲間としてでなくもつと特別な感情が彼らに対してあるんじゃないかしら？」

アニポケヒロインズ+マリナ「特別な感情？」

シロナの突然の話題変更に、キョトンとするアニポケヒロインズとマリナ。

シロナ「例えば、サトシ君とケンタ君のこと恋人として見てるとかね。」

シロナはニッコリしながら彼女達に言う。

アニポケヒロインズ+マリナ「／／／／／／／／／／！？」

シロナの発言を聞いた瞬間、アニポケヒロインズとマリナは顔をこれ程にもないくらいに真っ赤にさせる。

ヒカリ「し、し、シロナさん！？ な、な、な、何言ってるんですか／／／」

ハルカ「そ、そ、そ、そうですよ。」

カスミ「さ、さ、さ、サトシと恋人同士!？」

アイリス「さ、さ、さ、サトシとはまだそんな関係じゃないですよ
／／／」

マリナ「へ、へ、へ、変なこと言わないでください／／／」

5人とも、かなり必死である。

ナツミ・メグミ・ヒナタ（（うわあ、分かりやすい反応・・・。
））

ナツミ、メグミ、ヒナタの3人は5人の反応を見て、思った。

シロナ「ふふふ、ごめんね。でも、まだってことはいずれは恋人関係になりたいのかしら?」

アニポケヒロインズ+マリナ「／／／／／／／／／／／」

入浴前だというのに、すでに逆上させているアニポケヒロインズとマリナ。

シロナ「さっきも言ったけれど、サトシ君とケンタ君って、勇気があるつえに優しく、それにカッコいいものね。私がどちらか恋人にしたいくらいだもの。」

シロナ、爆弾発言(爆) というか、暴走しまくりWWW

ヒカリ「だ、駄目ですよ！」

カスミ「いくらシロナさんでもそれは嫌です！」

アイリス「さ、サトシは渡しません！」

マリナ「ケンタだって渡しませんから！」

シロナに激しく反論するアニポケヒロインズとマリナ。

シロナ「冗談よ（少しは本気だったんだけどね．．．）。それよりも、これからサトシ君とケンタ君を恋人に出来るように頑張ってる。」

ヒカリ「シロナさ〜ん！」

シロナは本音（？）を隠しつつ、気絶寸前くらいまで顔を真っ赤にさせているアニポケヒロインズとマリナに一言声を掛けて、大浴場へと向かった。

ナツミ「お姉ちゃん、シロ姉今の絶対楽しんでるよね。」

メグミ「うん、シロナはああやって自分より年下の反応を見るのが好きだからね。」

ヒナタ「そ、そうなんだ．．．。」

ナツミ、メグミ、ヒナタは今回判明したシロナのドSっぷりに、ただ乾いた笑みを浮かべた。その後、サトシとケンタも合流して、全員大浴場へ向かったのだ。

ヒカリ「な、なんで!？」

アイリス「あ、アンタも入ってたなんて……。」

大浴場にはすでに3人の先客がいた。

?1「それはこっちのセリフだ、アイリス。」

?2「あなたも入って来るとはね、ピ・カ・リさん。」

?3「あなた達は、憎きデントの仲間の……。」

話の内容からわかるように、上からラングレー、ウララ、カベルネである。その後、ヒカリはいつものごとく『ピカリ』と言われたことに反論した。尚、ウララは今作品初登場であるが、それが入浴シーンとは……作者のお前が言うな!

カベルネ「それよりも、なんで渋いテイストのアンタ達までいるのよ!」

当然、男であるサトシとケンタがなぜ女湯に入ってきたことに疑問を抱く。

ウララ「サトシさん、あなたにもそんな趣味があったなんて……。」

ウララは少々覚めた目つきで、サトシとケンタを見る。

サトシ「ご、誤解だ、ウララ!」

サトシはウララの誤解を解こうとする。だが、この状況下では説得力のない行為である。

シロナ「3人ともこれには訳があるの。サトシ君とケンタ君も一緒に入浴を薦めたのは私よ。」

ウララ「あなたは、シンオウチャンピオンマスターのシロナさん！？」

ウララはシロナがいることに驚きを見せる。チャンピオンマスターでその名前を知らない人はいない程の有名人が公衆が集う大浴場に入浴するなんてまず誰も思わないだろう。シロナはラングレー、カベルネ、ウララの3人にここまでの経緯を事細かに分かりやすく話した。

ラングレー「まあ、そういうことなら仕方ないわね。」

カベルネ「盗撮と覗きは私も嫌だしね。」

ウララ「全く、サトシさんとケンタさんがボディーガードをする羽目になるなんて、(変態に対して)反吐が出るわ。」

サトシ・ケンタ「……………」

シロナの説明を聞いて、ラングレー、カベルネ、ウララの3人は不本意ながらも納得したようだ。それでもサトシとケンタは手放しではホッとできなかつたようだが……

ウララ「それはそうと、さっきから人のことじーっと見てなんのつ

もりかしら?」

ウララは自分を見つめるサトシの視線が気になる。

サトシ「あ、いや、ウララの髪の毛って結構長いんだなって。」

ヒカリ「あっ、そういえば。」

ハルカ「ウララが髪を下したところ見るの初めてかも。」

サトシの返答にヒカリとハルカが反応した。今のウララの状態は、普段着用している髪飾りを外して髪を完全に下している。

ウララ「そういえば、あなた達にこの姿を見せるのは初めてでしたわね。」

ヒカリ「ウララも、お風呂に入る時は髪を下ろす派なんだ。」

ウララ「ええ、じゃないと洗えませんからね。」

ウララは淡々と答えた。髪飾りなどで髪をまとめている人が入浴時にどうするかは正直分からないが、ほとんどはそうするのだろう。

ウララ「それよりも、サトシさん。今の私を見てどうかしら?」

サトシ「どうって、なんかいつもと違うなって。」

ウララ「それだけかしら?」

サトシ「それだけって、あと何を言えればいいんだ?」

ウララ（噂の通り、かなりの鈍感ね．．．。）

ウララはサトシのあまりの鈍感さにあきれる一方、サトシから期待していた返答が返ってこなかったことに少しがっかりした。実はこのウララ、サトシに淡い恋心を抱いている一人である。

サトシ「なあ、ウララ。段々近くなってないか？」

ウララ「あら、嫌だったかしら？」

サトシ「別に嫌じゃないけれど．．．（目のやり場に困る．．．。）」

ウララはサトシとの距離感を徐々に縮めていた。サトシに対する好意からなのか、はたまた逆上させているだけなのか、顔もほんのり赤い。サトシはウララが近づくのに抵抗はなかったが、目のやり場に困っていた。サトシとウララとの距離は数十センチのところまで来ていた。だが、それをサトシLOVEズのアニポケヒロインズが見逃すわけがなく、

ヒカリ「ちょっとウララ！ 何どさくさに紛れてサトシに近づこうとしてるのよ！」

カスミ「そうよ！ ずるいったら、ありやしないわ！」

ハルカ「サトシから、離れて！」

アイリス「そうよそうよ！」

サトシに急接近しようとするウララを4人がかりで無理矢理引きはがした。

ウララ「ちょっと、何するんですの。あなた達はサトシさんの恋人でもないのにそんな権利あるのかしら？」

ウララはムツとした表情で4人を睨み付ける。

カスミ「べ、別にいいでしょ！」

ヒカリ「それにサトシが困ってるじゃない！」

アイリス「駄目なものはだめなの！」

お互いに睨みあう中、サトシLOVEズとウララによる言い争いが勃発してしまった。

サトシ（風呂に入ってる時くらい、仲良くしてくれよ・・・。）

事の発端であるサトシは、この何度も見慣れた光景をただ呆然と見守るしかなかった。ただ、くどいようだが、サトシには何故彼女たちが言い争っているのか分からない。

シロナ「ふふふ、サトシ君ったらモテモテね。まあ、それも当然ね。」

ナツミ「シロ姉、感心してないで止めなよ！」

メグミ「下手すれば、この大浴場が使えなくなるわよ！」

ヒナタ（この人、絶対楽しんでる・・・。）

のほほんと今の光景を見つめるシロナに、ナツミとメグミがツツコミを入れる。ヒナタは乾いた笑みを浮かべるしかなかった。ただこのまま放っておけば冗談抜きで大浴場を出入り禁止になりかねないので、ナツミ、メグミ、マリナが3人がかりで言い争いをしていく面々を止めにいった。

アニポケヒロインズ＋ウララ「サトシ（さん）は、絶対に渡さない！」

この一件で、サトシに対する独占欲がさらに強まったとか・・・

カベルネ・ラングレー「完全に忘れ去られている・・・。」

そんな中で、カベルネとラングレーは完全に蚊帳の外となってしまう。ただ、ラングレーに関しては、今の光景で心の中のモヤモヤがさらに強まっていた。その後、サトシ達は風呂から上がった。ただ、この後、ある意味重大な事件に巻き込まれていたことを身を持って体験することになる・・・

続いて後書きショー

変態は忘れたころにやって来る(爆) 〔第3章〕(後書き)

アイリス「ちょっと、なんでウララまで争奪戦に入れたのよ!」

天の河「言っただけでなかったか? サトシLOVEズはほぼ無限に増殖すると。」

ヒカリ「だからって、なんでよりによってウララなのよ!」

天の河「サトヒカ派の俺としては不本意だが、こっぴつけたほうがもっと面白くなるんじゃないかと、この作品のコンセプトを忠実に守りたかったってこともあるけどな。」

ウララ「あら、2人とも。サトシさんをモノにできる自信がないのかしら?」

ヒカリ・アイリス「なんですって!」「」

ウララ「少なくとも、私は自信がありますわ。あなた達と違ってどうせなら、既成事実でも作ってしまおうかしら。」

天の河「えらく自身たっぷりだな。ていうか、なにどさくさに紛れ

て突飛押しもないこと言っただけだ!？」

ヒカリ「そんなことさせないわ。ウララなんかよりあたしの方がサトシと一緒にいる時間が長いんだから。」

アイリス「アタシだって、サトシと一緒に過ごした日々があるんだから。他のみんなには負けないわ!」

ウララ「私だって、サトシさんは絶対に譲りませんわ!」

天の河「さて、争奪戦が激しくなりそうなので、この辺でお開きにしたいと思います。次回もお楽しみに!」

変態は忘れたころにやって来る(爆) 　↳解決の章↳(前書き)

なんか、無限ループが発生したような・・・

無理矢理、滅茶苦茶、意味不明な拍子揃った話ですが、どうぞ・・・

カベルネ、ラングレー、ウララファンの方は読まないことをお
勧めします。

変態は忘れたころにやって来る(爆) 〱解決の章〱

大浴場から上がったサトシ達は、脱衣場で着替えるところだった。サトシとケンタは当然、お手洗い場で着替えることになっている。だが、そこである事件が起きた。

カベルネ・ラングレー・ウララ「……」

カベルネ、ラングレー、ウララの3人は何かを黙々と探しているようである。

サトシ「どうしたんだ、あの3人？」

ケンタ「さあ、でもあのままだと湯冷めしてしまうぜ。」

カベルネ、ラングレー、ウララは着替えずに体にタオルを巻きつけたままである。まあ、その理由はすぐにわかることなのだが……

ヒカリ「どうしたの、ウララ？」

ヒカリはとりあえずウララに声が掛けた。

ウララ「!? な、なんでもないわよ！」

ウララは突然声を掛けられたことに驚くが、何でもない素振りを見せる。他の2人も、同じように何事もなかったかのようにそのまま何かを探す。だが、アイリスはそれを見逃さなかった。

アイリス「もしかして、着替え忘れちゃったのお？」

アイリスは小悪魔っぽく、3人に聞いてみた。

カベルネ・ラングレー・ウララ「「!?」「」」

3人はビクツとした表情を浮かべる。

アイリス「凶星なんだ。お風呂に入るのに、着替えを忘れてくるなんて子供ねえ」。

アイリスはさらに3人（特にラングレーに対して）に言い放つ。しかも、

ヒカリ「へえ、そうなんだあ。ウララもそういう一面があるんだあ」。

ヒカリもアイリス側に回り、アイリスとともに3人（特に今まで意地悪され続けたウララに対して）にからかい混じりに言い放つ。

ラングレー「きちんと持ってきたわよ！ でもないのよ！」

どうやら、3人も持つてきたはずの着替え及び下着がなく、必死で探していたようだ。だが、今の状態で脱衣場から出るわけにもいかず、自分が宿泊する部屋にも戻れず、困り果てていたという状況である。

ヒナタ「大浴場に入る前にはあったのよね？」

ウララ「ええ、ありましたわよ。」

ナツミ「てことは、その間に無くなっただってことになるわね。」

メグミ「一体、その後何があったのかしら？」

ヒナタ、ナツミ、メグミは神妙な面持ちになる。

カベルネ「まさか、アンタ達が盗んだんじゃないわよね？」

アイリス「ちょっと、変な言いがかり付けないでよ！」

ハルカ「だいたい、わたし達があなた達の盗んで何のメリットがあるっていうのよ！」

それもそうだ。女性が女性物の使用済みの衣類を盗むというのは、いろんな意味でまずいことだ。それも考えずに人を疑うとは、全くテイステイングも推理も最悪なバカソムリエールだ。悪かったわね！ by・カベルネ

ラングレー「てことは、。。。。」

サトシ「お、おい、ちょっと待てよ！」

ケンタ「第一、俺達は3人が風呂に入ってた事なんて知らなかったんだぜ。」

ラングレーに至っては、サトシとケンタを疑うが、サトシ達はカベルネ、ラングレー、ウララが大浴場にいたこと自体知らなかった。彼らを疑う以前の問題である。お門違いもいいところだ。

マリナ「みんな、ジュンサーさん呼んできたわよ。」

マリナが機転を利かせて、ジュンサーを連れてきた。

ジュンサー「わたしがいながらこのようなことが起きてしまい、申し訳ございません。」

ジュンサーは脱衣場に入るや否や、すぐに謝罪の弁を述べる。

カスミ「頭を上げてください。ジュンサーさん。」

ヒカリ「そうですよ、ジュンサーさんが全て悪いわけじゃないんですから。」

ウララ「私達はただ、この状況を解決してくださいなにも言いませんわ。」

カスミ、ヒカリに続いて、ウララも必死でフォローをする。普段はキツイ性格の持ち主ではあるが、意外と気の利いたことが出来るようだ。意外とはどういう意味ですの！ by・ウララ

シロナ「とりあえずは、湯冷めしないうちに着替えたほうがいいわね。」

カスミ「ええ、身体も濡れたままだと気持ち悪いですし。」

ケンタ「そうだな。」

とりあえず、皆は着替えることにした。カベルネ、ラングレー、ウララの着替え及び下着がなくなっただけに、状況的に何者かに盗まれた線が強い。だが、着替える時にまた事件が起きてし

まった。

ナツミ「ねえ、ジュンサーさん。」

ジュンサー「何かしら？」

ナツミが急に話し掛けてきたので、ジュンサーはナツミの方に身体を向けた。

ナツミ「下着泥棒って、殺しても罪にはなりませんよね．．．。」

ナツミは突然、恐ろしいことを言い出した。しかも笑顔ではあるが、口元が完全に笑ってなかった。

ジュンサー「いや、いくらなんでも殺人は罪になると思っけれど．．．。」

ジュンサーは少し引き気味に答えを返した。

メグミ「ナツミ、そんな奴の為に刑務所に入る必要はないわ。ここは十分に痛めつける程度にしないと．．．。」

ナツミの姉・メグミが止めに入ったと思いきや、メグミも未恐ろしいことを言い放った。

ジュンサー「ま、まさか．．．。」

ナツミ・メグミ「ええ、そのまさかです。」

どうやら、ナツミとメグミも着替え及び下着を盗まれてしまった

ようだ。

ナツミ「さて、人の下着を盗むゴミクスをどう痛めつけてやるうかしら．．．。」

メグミ「ナツミ、今から楽しみね。」

ヒナタ「ナツミ、メグミ、とりあえず落ち着いて!」

ナツミとメグミが黒化し始めていたので、慌ててヒナタが抑えに入る。ただ、ナツミとメグミの下着泥棒に対する怒りは相当のものである。このまま脱衣場に居座っても他の宿泊している者達の迷惑になるので、着替え及び下着を盗まれた面々は施設から浴衣もろもろを借りて難をしのいだ。現在は全員談話コーナーにいる。

カスミ「でも、下着泥棒も相当手が回らなかったのね。あたし達は盗まれてなかったし。」

ハルカ「確かにかも。」

ラングレー「それはそうと、早く盗まれたものを返してほしいわ!」

ウララ「全くですわ!」

ラングレー、ウララは改めて下着泥棒に対する怒りを露わにする。さらに、

ナツミ「さあて、メグミお姉ちゃん。下着泥棒への『O・K A・E・S H I』のことにに関してだけど．．．。」 笑顔であるが、目が笑ってない．．．。

メグミ「ナツミ、盗んだ分すっかりと落とし前をつけてもらわないとねえ……。」
「こちらも、笑顔ではあるが、目が笑っていない……。」
ナツミ・メグミ以外「……………」

かなりドス黒いオーラを出しながら笑顔でいるナツミとメグミに恐怖感を感じ、全員呆然とした。

ジュンサー「困ったわ。事件が起きたとなると、余計にわたし達がここを離れるわけにもいかないし……………」

シロナ「それなら、私達で犯人を捜しますけれど。」

困り果てるジュンサーにシロナが犯人捜しを代行すると言い出す。

ジュンサー「えっ、でも本当によろしいのでしょうか？」

ヒカリ「私達に任せて、ジュンサーさん。」

カスミ「女の子に最低なことするなんて、許せないわ！」

サトシ「俺達も協力します。」

ケンタ「そいつ下着泥棒な上にポケモンも悪用してるんだろ。だってら尚更許すわけにはいかないな。」

サトシ達も犯人探しには協力的だ。

ジュンサー「みなさん、ご協力感謝します。」

こうして、サトシ達は下着泥棒の犯人捜しをすることになった。普通、こういうのは警察の仕事ではあるが、都合上手一杯の人員の為、やむを得ない状況である。

カベルネ「私達もやられっぱなしじゃ、気が済まないわ!」

ラングレー「アイリス、ここは一時休戦だ。」

ウララ「ヒカリさん、私達も一時休戦ですわ。」

ヒカリ・アイリス「ええ、絶対に犯人を見つけましょう!」

普段いがみ合う者同士が手を組む、異例の大搜索(?)が始まった。

ヒナタ「まずは、協力してくれるポケモンをキャプチャしないとね。」

そう言うと、ヒナタは念のために所持しておいた『キャプチャ・スタイラー』を構え、搜索に使うポケモンを探す。暗闇の為、サトシ達の手持ちポケモンでは搜索には一部を除いて多少の難がある。

ホーホー「ホー、ホー。」

ヒナタ「よし、あのホーホー達がいいわね。」

ヒナタはとある木に隠れていたホーホーの群れを見つけるとそれを搜索用のポケモンに決めた。シロガネ山付近にホーホーがいるの

かどうかというツツコミは無しの方向で。

ヒナタ「キャプチャ・オン！」

ヒナタはホーホー達のキャプチャに取り掛かる。キャプチャ・スライラーから出たキャプチャ・ディスクというコマのようなものがホーホーの周りを取り囲む。そして見事、キャプチャに成功した。

ヒナタ「キャプチャ完了！」

そして、お決まりのセリフ。

ケンタ（ポケモンレンジャーの仕事、初めて生で見たけれどすげえ
。。。）

ケンタは初めて見るポケモンレンジャーの仕事ぶりに感心するばかりだった。ただ、口に出せるような状況ではないので心の中で留めておいた。

ヒナタ「早速だけど、怪しい人物がいないか空から搜索して。」

ホーホー「ホー。」

ヒナタはホーホーに指示すると、ホーホーは空高く飛び上がり、搜索を開始した。サトシ達も暗闇の中、搜索を始めた。しばらくして、ホーホー達が何かを見つけたのか、サトシ達のもとへ飛んできた。ホーホーに案内されるがまま、サトシ達はそれについていった。

ヒカリ「見つけたわ！」

スネ汚「ゲツ!? もう見つかった!」

サトシ達は2つの人影を見つけた。それは以前、タمامシジムでの覗き魔である変態黒マント男ことスネ汚と変態スリーパーだった。何故、ド○○○んキャラのスネ汚がこのアニポケの世界にいるのか、名前の表記が間違っているというツッコミは無しの方で・・・

カスミ「見て、あれ。」

カスミが指差した方向には、学校の水泳バッグとアタツシユケーすが1つずつ変態コンビのそばにあった。しかもどうやって入れたのかは定かではないが、学校の水泳バッグの方には、明らかに盗んだ者であるう女性物の衣類が詰め込まれていた。

ケンタ「下着泥棒というのはお前だな!」

サトシ「盗んだ者を返せ!」

サトシとケンタは下着泥棒の犯人である変態コンビを睨み付ける。

スネ汚「やなこった! せっかく集めた僕の(自主規制)の為にコレクションをみすみす手放してなるものか!」

スネ汚は即答で返却を拒否した。

カベルネ「じ、冗談じゃないわよ!」

ラングレー「なんで、アンタの欲望の為に私達が一役買わなきゃいけないのよ!」

ウララ「絶対に嫌ですわ！」

衣類を盗まれた3人は、スネ汚に対してさらに敵対心を燃やす。

スネ汚「こうなったら、スリーパー。アイツらやつつけちゃって！」

スリーパー「かしこまりました、マスター。」

すると、スリーパーはアニメポケヒロインズ、マリナ、カベルネ、ラングレー、ウララに向かって、サイコキネシスを発動した。

女性陣「キャアアアアアアアア！」

アニメポケヒロインズ、マリナ、カベルネ、ラングレー、ウララは遠くまで吹っ飛ばされてしまう。しかも、その着地点が・・・

サトシ「どわっ!?!」

サトシだった。そのままサトシは吹っ飛ばされた者達の下敷きとなってしまう。

ヒカリ「いったあああい！」

アイリス「もう、なんなのよ。」

思わず、愚痴を漏らすヒカリとアイリスだったが、

サトシ「うう・・・。」

数秒間、吹っ飛ばされた者達はサトシを下敷きに行っていることに

気づかなかった。

ヒカリ「さ、サトシ!?!」

カスミ「あつ、ごめん。今すぐ退くから!」

彼女たちはすぐさま、サトシから退いた。

ヒカリ「サトシ、大丈夫?」

ヒカリはしやがみながら、サトシに声を掛ける。

サトシ「ああ、平気d...。」

サトシが平気だと言いかけて目を見開いた時だった。サトシの視界に不可抗力でヒカリのスカートの中が入ってしまった。先程、女性陣達と混浴した恥ずかしさもあり、サトシの理性はここで崩壊してしまった。

ブッ!

サトシは鼻血を出して、そのまま気絶してしまった。

ウララ「さ、サトシさん!?!」

これには、さすがのウララも心配になる。

アニポケヒロインズ「サトシ!？」

アニポケヒロインズも当然急に鼻血を出して気絶したサトシを心配するが、彼女達にはその原因が分かることはなかった。

シロナ「あら、サトシ君も結構ウブな子だったのね．．。」

今までの状況を静観していたシロナはサトシの気絶した理由に大体の察しがついたのか、サトシの人間性をこう評する。やっぱり、シロナはある意味謎多き女性である．．．

ハルカ「よくも、サトシをこんな目に遭わせてくれたわね！」

アイリス「この落とし前、きっちりつけさせて貰うわよ!！」

ヒカリ「あなただけは絶対に許さない!！」

スネ汚「えっ、今の僕のせい!？」

まあ、直接サトシを気絶させたのは少なからず彼女たちなのだが、その発端となったのは変態スリーパーの放ったサイコネシスである。4人は、それぞれ手持ちのポケモンを総動員させる。

カベルネ「私達からも、お返しさせてもらおう!！」

ウララ「あなたのせいで、大迷惑を被ったんだから!！」

ラングレー「この怒り、アンタに全てぶつけてやる！」

カベルネ、ラングレー、ウララも参戦。

メグミ「ナツミ、私達もいくわよ！」

ナツミ「ええ、お姉ちゃん。あのバカ共には痛い目に遭ってもらわないとね。」

カベルネ、ラングレー、ウララと同じく、下着泥棒の被害を被ったメグミとナツミも、丁度持っていたポケモンを総動員させた。

ヒナタ「もう、止めないわ。」

さっきはメグミとナツミの暴走を止めていたヒナタも、今回はかりは止める気すら起きなかった。状況からして当然といえば当然か

スネ汚「むむう、こつなつたら・・・。」

スリーパー「逃げますか！」

結局、逃げるのかい！ by 天の河

スネ汚「どわっ!？」

だが、スネ汚は慌てて逃げようとした為、足を躓かせてしまった。その拍子に、アタッシュケースが空いて中から大量の写真がばらまかれた。

ケンタ「ん？　なんだこれ？」

数枚の写真がケンタのもとに飛んできて、ケンタはそれを拾い上げた。ちなみに、ケンタはピカチュウとポッチャマとともに先程気絶したサトシを介抱している。

ケンタ「うっ!？」

ケンタは思わず声を上ずらせた。その写真とは、アニメケヒロインズ、マリナ、さらにはベルヤコトネ、カベルネ、ラングレー、ウララその他女子キャラの盗撮写真であった。中にはここでは言えないような内容のものまであり、サトシ同様ケンタも先程の混浴の恥ずかしさから、

ブッ!

鼻血を噴き出して、気絶してしまった。

ピカチュウ「ピピカ!？」

ポッチャマ「ポチャポ!？」

ピカチュウとポッチャマは突然のことに驚きの表情。

陣にとってはそんなことはどうでも良かった。

ヒナタ「う、うわぁ・・・。」

ヒナタはあまりにもおぞましい光景に空いた口が塞がらなかった。ちなみに、気絶したケンタに代わり、ヒナタがサトシに加えてケンタの介抱をしている。

カベルネ「あゝ、なんだかすつきりしたわ。」

女性陣は変態を撃退したことで、非常に清々しい表情だ。

ジューンサー「写真や盗まれた物品は、しばらくの間証拠物として取り扱わせていただきます。持ち主への返却に関してはこちらが責任を持って行います。」

シロナ「ええ、よろしく頼むわ。」

盗撮写真と盗まれた衣類はとりあえず事件の証拠品として押収された。

ヒカリ「あつ、サトシとケンタ。」

ヒカリは気絶していたサトシとケンタのことを思い出す。

ナツミ「大丈夫よ。ヒナタが2人をなんとか屋内まで運んだみたいだから。」

アイリス「そうですか。よかったあゝ。」

メグミ「事件も無事解決したことだし、私達も中に入りましょう。」

シロナ「そうね。」

こうして、下着泥棒及び盗撮事件は犯人に恐ろしいくらいの制裁を加えたことにより、無事解決した。かに思われた・・・

男A「おい、ばっちり獲れたか？」

男B「ああ、絶好のシャッターチャンスだったぜ。」

男C「うおお、これはいいのが獲れたな。」

男D「カスミちゃん、ハルカちゃん、ヒカリちゃん、アイリスちゃんだけじゃなく、他の女子達もメツチャレベルが高いじゃねえか。」

男A「それにまさかシンオウチャンピオンマスターの入浴姿まで盗撮できるとはな。」

男B「これは思わぬ収穫だな。」

男C「俺達の身代わりになってくれたイツらにも感謝しないとな。」

そう、変態黒マント男ことスネ汚と変態スリーパーは撃退されたものの、この変態集団がまだいたのだ。こいつらは盗撮に成功したに加え、スネ汚達のおかげで警察に捕まらずに済んだのだ。この事件、まだ続きそうだ・・・(汗)

オマケ

リュウカ「ねえ、マサト君。サトシさんとケンタさんはなんで気絶して寝込んでるのかしら？」

マサト「さあ？」

まあ、こんな感じで予選選考会は1日の休養日を経て、決勝トーナメントへと舞台を移すのだった・・・

続いて今作品最もカオスであろう後書きショー（爆）

変態は忘れたころにやって来る(爆) ー解決の章ー(後書き)

変態コンビ「こ、ここはどこだ!?!」

天の河「ここは、次元と次元との間を行き来することが出来る狭間だ。」

スネ汚「さ、作者!?!」

天の河「ふふふ、スネ汚と変態スリーパー。お前らはかつてこのなるう作者であつた自由自在さんの『キャラ崩壊』に飽き足らず、俺の『主人公総受け』でよくも好き勝手やってくれたな(黒怒)」
背後には阿修羅像やら金剛力士像やら阿形吽形像やら...

変態コンビ「えっ、ちよつとまっ...。」

天の河「待たん! この変態共、次元の狭間に消え去れい!」時
才力で森の神殿のボスを倒した時のガノンドロフのセリフを変えて
みた。

変態コンビ「ギャアアアアアアアアアアアアアアア!」

変態コンビは作者権限によって、『O・S・H・I・O・K・I』を加

えたいと要望のあったフォック・リザハートさん、サファイーさんの
元へ転送された・・・

白熱の決勝トーナメント開幕・・・(前書き)

今朝はお騒がせしました・・・

それはさておき、日曜日に気づいたこと。『戦いの火蓋を切って落とす』は誤り表現で、『戦いの火蓋を切る』が正しい表現だということ。俺、この作品で結構使ってたな(汗)

今回、KIDさんリクエストのオリキャラが2名登場します。1名は名前だけです・・・

白熱の決勝トーナメント開幕・・・

変態騒動から二夜明けて、予選選考会は決勝トーナメントへとその舞台を移していた。サトシとピカチュウは他の面々とは行動を別にして、朝早く決勝トーナメントの会場をぶらついていた。

サトシ「いよいよ、今日から決勝トーナメントが始まるんだな。」

サトシはピカチュウを肩に乗せ、決勝トーナメントへの意気込みを新たに気持ちに込める。

サトシ「これからどんな強敵が待ち受けているかは分からない。でも俺とポケモン達はそれでも立ち向かっていかなければいけない。厳しい戦いになると思うけど、頼むぞ。ピカチュウ。」

ピカチュウ「ピカ、ピカチュウ！」

ピカチュウは「サトシ、任せろ！」と言わんばかりに、真剣な眼差しでサトシを見つめる。

????「あれ？ サトシ？」

サトシ「だ、誰だ？」

ピカチュウ「ピイカ？」

そんな時だった。突然、サトシを呼ぶ声がしたので、サトシとピカチュウは声のした方へ身体を向けた。

サトシ「み、ミズキ!？」

ミズキ「やっぱり、サトシだ。」

サトシが振り向いた方向にいたのは、茶髪のショートヘアに茶色の瞳でサトシより少し背が低く、グレーのベレー帽、黄色のシャツに青色のオーバーオールを羽織ったボーイッシュな少女がいた。サトシはその少女をミズキと呼んだ。

サトシ「久しぶりだな、ミズキ。」

ミズキ「マサラタウンの途中の道で出会って以来だね。ピカチュウも元気にしてた?」

ピカチュウ「ピカピカ。」

サトシとミズキ、そしてピカチュウは再会したことに喜びを感じる。会話の感じからして、ミズキは誰にでも親切に接することが出来る気さくな性格のようだ。

サトシ「ミズキもシロガネタウンにいるってことは、この予選選考会に出場してるんだな?」

ミズキ「ええ、もっちりんよ。予選ステージは2戦とも勝って突破したわ。後は決勝トーナメントで勝ち進んでいくのみよ。」

サトシ「ミズキの夢も俺と同じ『ポケモンマスター』だものな。」

ミズキ「ええ、だからこの『ワールド・チャンピオン・リーグ』で自分の実力を試すいい機会だと思うんだ。サトシ、決勝トーナメン

トで当たることになったら、全力でバトルしようね！」

サトシ「ああ、もちろんさ。その時は絶対に負けないぜ！」

ミズキ「私だって、負けるつもりでバトルする気はさらさらないよ！」

サトシとミズキは決勝トーナメントでバトル出来ることを願い、お互いに闘志を燃やす。

サトシ「ところで、ミノリは一緒じゃないのか？」

ミズキ「ああ、ミノリならまだ部屋で寝てるわ。まあ、起きていてもなかなか外には出られないでしょうね。サトシだって、ミノリの性格知ってるでしょ？」

サトシ「あつ、ミノリは引っ込み思案だったんだっけ？」

ミズキ「サトシと初めて会った時よりは、少しマシになった方だけどね。それでも、初対面の人は苦手みたい。ミノリもミノリなりに努力してるんだけどね。」

サトシはミズキにミノリという人物がどうしているか聞いてみた。ちなみにミノリは、ミズキの双子の妹である。ミノリもミズキとともにサトシと会ったことがある。

ミズキ「私、そのミノリのが心配だからそろそろ戻るね。」

サトシ「ああ、ミノリにもよろしく言っておいてくれ。」

ミズキ「ええ、じゃあまた決勝トーナメントで。」

ピカチユウ「ピイカ。」

ミズキはサトシに手を振りながらサトシから離れた。サトシもそろそろ他の面々が起きる時間帯なので、宿舎へ戻ることにした。そして、バトル部門とコンテスト部門ともに決勝トーナメント開催の時間を迎え、その組み合わせが発表された。

例のごとく、一部のみの紹介です。

<ワールド・チャンピオン・リーグ部門>

1回戦第2試合：アイリスVSコトネ

第3試合：サトシVSミズキ

第5試合：リラVSケンタ

その他、予選通過者：タクト、ジュン、ケニヤン

<ワールド・チャンピオン・フェスティバル部門>

1回戦第3試合：ハルカVSノゾミ

第4試合：リリアVSサオリ

その他予選通過者：ヒカリ、ミノリ、シュウ、カスミ、ウララ

サトシは先程再会したばかりのミズキと対戦することになった。今作品にてミズキの手持ちポケモンは未だ不明だが、『ポケモンマスター』を指すだけあってかなりの実力だということは言っておこう。サトシにとってはかなり苦戦を強いられるバトルになりそうだ。一方、ワールド・チャンピオン・フェスティバル部門の方は、ミズキの双子の妹・ミノリも予選を突破している。ミズキ同様、ミノリも同じく決勝トーナメントのコンテストバトルに挑む面々にとっては強敵になりそうだ。勿論、ミズキやミノリの他に海外からの強敵トレーナーやコーディネーター達もいることを忘れてはならない。予選ステージからの熱気は決勝トーナメントに舞台を移しても続きそうだ……

続く

白熱の決勝トーナメント開幕・・・(後書き)

ミズキとミノリ(どちらも、KIDさんリクエスト)が今後サトシ
争奪戦にどう影響を及ぼすのか・・・

今回は、コトネ対アイリスの試合をお送りします。

1回戦第2試合、アイリス対コトネ！（前書き）

ひねりのないサブタイでごめんなさい（汗）

1回戦第2試合、アイリス対コトネ！

決勝トーナメントは1回戦第1試合から、度肝を抜かれる展開となった。なんとあのダークライ使いのタクトが登場したのだ。タクトは例のごとく、ダークライやラティオスを使うのかと思いきや、フーデインを最初に出してきた。だが、このフーデインも凄まじい力を発揮して、相手のポケモンに対してストレート勝ちし、2回戦進出を果たした。このことからして、タクトは伝説のポケモン抜きにしてもかなりの実力のトレーナーだと分かった。さて、第1試合から白熱してきた中で、次の第2試合ではアイリスとコトネが激突することになっている。

コトネ「まさか、決勝トーナメントの初戦で、アイリンとバトルすることになるなんて思わなかったわ。」

アイリス「アタシもよ、コトネ。」

コトネ「だけど、仲間だからといって手加減は無しってことね。」

アイリス「臨むところよ！アタシだって、絶対に負けないんだから！」

アイリスとコトネは試合前のやりとりで、さらに闘志を燃やす。そして、試合開始の時間が間近となり、両者ともバトルフィールド上に出たのだった。

ケンタ「コトネとアイリスのバトルか．．．。」

デント「2人とも、この度で徐々にトレーナーとしての力を付けて

きている。バトルスタイルは全く違うけれど、面白いテイストバトルになるのは間違いないよ。」

タケシ「どっちが勝ってもおかしくない試合だな。」

観客席で見守る面々も固唾を飲んで、試合開始を待つ。

審判「これより、決勝トーナメント1回戦第2試合アイリス選手とコトネ選手によるバトルを行います。それでは、試合開始！」

今ここに、アイリスとコトネの2回戦進出を賭けたポケモンバトルの火蓋が切って落とされた。

アイリス「まずはあなたからよ、キバゴ！」

キバゴ「キバア！」

コトネ「いくわよ、キリンリキ！」

キリンリキ「リイイイイ！」

アイリスはキバゴ、コトネはキリンリキを最初の1体目に選んだ。

コトネ「キリンリキ、先手必勝ってことね。」

キリンリキ「リインリ！」

キリンリキは攻撃を仕掛ける為、キバゴに近づく。

アイリス「キバゴ、受け止めて！」

キバゴ「キバ！」

キバゴは持ち前の根性でキリンリキを受け止めた。2体は取っ組み合いの状態である。

コトネ「キリンリキ、しねんのずつき！」

キリンリキ「キイインリイイイ！」

キリンリキのしねんのずつき攻撃。

アイリス「キバゴ、避けて！」

キバゴ「キイイバ！」

キバゴは辛うじてキリンリキの攻撃をかわした。

アイリス「反撃よ、キバゴ。ひっかく攻撃！」

キバゴ「キイイバアア！」

キバゴはキリンリキに攻撃を仕掛ける。

コトネ「キリンリキ、こうそくいどつー！」

キリンリキ「リイイ！」

キリンリキはこうそくいどつで素早くキバゴの背後を取った。

キバゴ「キバ!？」

突然のことに驚くキバゴ。

コトネ「キリンリキ、キバゴにもう一度しねんのずつき!」

キリンリキ「キイイイイリイイイイ!」

キリンリキのしねんのずつき。今度はキバゴに命中した。

キバゴ「キバアアアア!」

アイリス「負けないで、キバゴ。りゅうのいかり!」

キバゴ「キバ! キイイイイバアアア!」

キリンリキ「リイイイ!」

キバゴは地面にたたきつけられる前に、りゅうのいかりをキリンリキに向けて放った。攻撃の直後だったキリンリキはかわしきれず、そのまま喰らってしまった。

コトネ「キリンリキ!？」

キリンリキはそのまま地面にたたきつけられた。

アイリス「そのまま一気に決めるわよ。キバゴ!」

キバゴ「キイイイイバアアア!」

キバゴはさらに攻勢を強め、キリンリキに接近する。

コトネ「キリンリキ、バトンタッチ！」

キリンリキは辛うじて、バトンタッチでキバゴの攻撃を凌いだ。バトンタッチによりキリンリキの代わりにエーフィが戦闘に出された。

アイリス「やるわね、コトネ。」

コトネ「ありがとう、アイリン。勝負はここからってことね。」

両者ともにバトルへの集中力を高める。

アイリス「キバゴ、休んでて。」

キバゴ「キバ！」

アイリスも一旦キバゴを交代させるようだ。

アイリス「出番よ、エモンガ！」

エモンガ「エエエエンモ！」

アイリスの次のポケモンはエモンガだ。両者共にポケモンを交代させるという形になった。

コトネ「エーフィ、こうそくいどう！」

エーフィ「エエエエフィ！」

まずはエーフィがこうそくいどうでエモンガを攪乱かくらんさせる。

アイリス「エモンガ、ほうでん！」

エモンガ「エンモオ！」

エモンガはエーフィに向かって次々とほうでんを放っていく。だが、相手の動くスピードが速すぎてことごとくかわされる。

コトネ「エーフィ、サイケこうせん！」

エーフィ「エエエエエファイイイイ！」

エーフィのサイケこうせんがエモンガに襲い掛かる。

エモンガ「エモオオオオオ！」

サイケこうせんはエモンガに直撃した。

アイリス「エモンガ!?!」

エモンガ「エモオ、エモ．．．。」

エモンガはなんとか耐えきった。

コトネ「まだまだよ。エーフィ、サイコキネシス！」

エーフィ「エーフィ．．．。」

エーフィのサイコネシス。

エモンガ「エモ!? エモエモエモ・・・。」

続けざまの攻撃にエモンガはサイコネシスの餌食となってしまう。エモンガはもがくが、思うように身動きが取れない。

エーフィ「エエエエエフィィィ!」

エモンガ「エモオオオオ!」

エモンガはそのまま投げ飛ばされた。

アイリス「エモンガ、すぐに体勢を立て直して!」

エモンガ「エモ!」

アイリスはエモンガにすぐに体勢を立て直すよう指示、さらに投げ飛ばされたのを利用して、

アイリス「そのまま、エーフィの背中に飛び乗るのよ!」

エモンガ「エエエエモオオオオ!」

エモンガは猛スピードでエーフィに向かっていった。

コトネ「エーフィ、こうそくいどつ!」

コトネはエーフィにこうそくいどつでかわすよう指示するが、

エモンガ「エモ。」

エーフィ「エフィ!?!」

「こうそくいどうを繰り返す前にエモンガがエーフィの背中に飛び乗った。」

アイリス「そのまま、ほうでんよ!」

エモンガ「エエエエエンモオオオオ!」

エモンガの思いつきりのほうでん。

エーフィ「エエエエエフィイイイ!」

背中に張り付いたエモンガの攻撃を間近で受けてしまうエーフィ。これだけを見れば一見エモンガの優勢だと誰もが思った。

エモンガ「エモ!?!」

エモンガは突然ほうでんを止めた。そして、

エモンガ「エモオオオオ!」

何らかの攻撃を受けてしまった。

アイリス「エモンガ!?!」

アイリスは突然エモンガがダメージを受けてしまったことに驚く。一部お分かりの方もいらっしゃると思うが、なぜエモンガが突然ダ

メージを受けてしまったのかは、

アイリス「み、みらいよち……。」

コトネ「当たりよ、アイリン。エモンガがエーフィの背中に飛び乗る時を使わせてもらったわ。」

エモンガはみらいよちの攻撃を受けていた。エーフィはエモンガが自らの背中に飛び乗った時を利用して、みらいよちを発動させたのだ。どうりである時あまり抵抗がなかったわけだ。

エモンガ「エモオオオオオ！」

エモンガはさらにみらいよちの攻撃を受け続ける。

エモンガ「エモ……。」

みらいよちの攻撃が終わったときには、エモンガは目を回して倒れていた。

審判「エモンガ、戦闘不能。エーフィの勝ち。」

エモンガは健闘したが、エーフィのみらいよちを使った時間差攻撃の前に成す術がなかった。

アイリス「ご苦労様、エモンガ。」

アイリスはエモンガをボールに戻した。

アイリス「次はあなたよ、ドリユウズ！」

ドリュウズ「リュウウウウズ！」

アイリスの次のポケモンはドリュウズだ。

アイリス「ドリュウズ、ドリルライナー！」

ドリュウズ「リュウウウウズウウウ！」

ドリュウズは出たとほぼ同時にドリルライナーでエーフィに攻撃を仕掛けた。

コトネ「エーフィ、かわして。」

コトネはエーフィにかわすよう指示するが、

エーフィ「エフィ……。」

エーフィはまひ状態になり、身体が痺れて動けなくなっていた。先程のエモンガのほうでんの追加効果を受けていたようだ。エモンガの健闘も無駄にならずに済んだ。

ドリュウズ「リュウウウウズウウ！」

エーフィ「エエエエエフィィィィ！」

エーフィはそのままドリュウズのドリルライナーをまともに喰らってしまい、そのまま目を回して倒れた。

審判「エーフィ、戦闘不能。ドリュウズの勝ち。」

これで1対1のタイに持ち込んだ。これでどちらが勝つかますます分からなくなってきた。

コトネ「ありがとう、エーフィ。ゆっくり休んで。」

コトネはエーフィを労うとボールに戻した。

コトネ（エーフィがまひ状態になったのは誤算だったわ。）

コトネは次のポケモンが入ったボールを手に取り、

コトネ「出てきて、キリンリキ！」

キリンリキ「キイリイイイ！」

キリンリキが再びバトルフィールドに姿を現した。

アイリス「よくやったわ、ドリユウズ。」

するとアイリスもドリユウズを戻した。

アイリス「またお願いね、キバゴ。」

キバゴ「キバ！」

アイリスはキバゴと交代させた。これで、コトネはキリンリキ、アイリスはキバゴと最初と同じカードになった。

アイリス「キバゴ、りゅうのいかり！」

キバゴ「バアアアアゴオオオオ！」

キバゴのりゅうのいかり。これをキリンリキはあっさりかわした。

キバゴ「キバ！」

だがキバゴは、キリンリキがかわしている間に急接近していた。

アイリス「続けて、ひっかく攻撃！」

キバゴ「キイイバア！」

キバゴの思いっきりの効いたひっかく攻撃。

アイリス「連続でひっかく攻撃！」

キバゴ「キバ、キバ、キバ！」

さらにキバゴはひっかくでキリンリキを攻撃する。

コトネ「キリンリキ、こっちはダブルアタックで反撃よ！」

キリンリキ「キイリ、キリイイイ！」

キバゴ「キバアアア！」

キリンリキはダブルアタックで抵抗した。その後も、両者一進一退の攻防が続き、お互いの体力をじわりじわりと削っていった。そして、

アイリス「キバゴ、げきりん！」

コトネ「キリンリキ、しねんのずつき！」

アイリスとコトネはそれぞれのポケモンが持つ攻撃技の中で一番の威力を誇る攻撃技を指示。威力差ではキバゴのげきりんの方が上回るだが、ポケモンの能力差ではキリンリキの方が上回るため、ほぼ互角と言っていていまさに一騎打ちである。

キバゴ「キイイイイバアアアア！」

キリンリキ「リイイインリイイイ！」

キバゴ、キリンリキともに最大パワーでお互いに向かい合う。そして、

ドカーン！

それぞれの攻撃がバトルフィールドの中央で当たり、たちまち土煙が立ち込めた。しばらくすると土煙は晴れて……

キバゴ「キバア……。」

キリンリキ「キリイ……。」

キバゴ、キリンリキともに目を回して倒れていた。

審判「両者、戦闘不能。」

キバゴとキリンリキのバトルは引き分けに終わった。これでアイリス、コトネともに残り1体となった。

アイリス「キバゴ、よくやったわ。」

キバゴ「キバア……。」

アイリスはキバゴに近づき、ゆっくりと抱き上げた。通常、試合中にトレーナーがポケモンに近づくことは許されないが、アイリスのキバゴはサトシのピカチュウ同様、ボールに入ったポケモンではない為、特例で許可されている。

コトネ「キリンリキ、ゆっくり休んでて。」

キリンリキ「キリイ……。」

コトネもキリンリキを労い、ボールの中へと戻した。

アイリス「ここで決めるわよ、ドリユウズ！」

コトネ「いくわよ、ハッサム！」

ドリユウズ「リュウウウウズ！」

ハッサム「ハッサム！」

ドリュウズ、ハッサムお互いにバトルフィールド上で睨みあう。

コトネ「ハッサム、つじぎり！」

ハッサム「ハッサ！」

まずはスピードで有利なハッサムが先手を取った。つじぎりでドリュウズに攻撃を仕掛ける。

アイリス「ドリュウズ、受け止めて！」

ドリュウズ「リュウズ！」

ドリュウズはハッサムの両手のハサミを掴み、攻撃を受け止めた。

アイリス「続けて、ドリルライナー！」

ドリュウズ「リュウウウウズウウウ！」

間髪入れずにドリュウズはドリルライナーでハッサムに攻撃を仕掛ける。

ハッサム「ハッサア！」

だが、ハッサムは冷静かつ素早くそれをかわした。

コトネ「よくやったわ、ハッサム！」

アイリス「なんて早さなの．．。」

アイリスはハツサムの驚異的な素早さに驚きを見せる。

コトネ「ハツサム、れんぞくぎり！」

ハツサム「ハツサ！」

ハツサムは持ち前の素早さでドリュウズに急接近する。

アイリス「こつちだつて負けてられないわよ、ドリュウズ。みだれひっかきで対抗よ！」

ドリュウズ「リュウズ！」

ドリュウズも真つ向からハツサムに向かっていく。

ハツサム「ハサ、ハサ、ハツサア！」

ドリュウズ「リュズ、リュズ、リュウズ！」

バトルフィールドのほぼ中央で、ハツサムのれんぞくぎり、ドリュウズのみだれひっかきの切り合い引つ掻き合いが始まった。お互い引けを取らない連続攻撃である。

ハツサム「ハサ！」

ドリュウズ「リュウウウ！」

しばらくれんぞくぎりのみだれひっかきの応酬が続いた後、ハツ

サム、ドリュウズともにお互いに離れ、距離をとった。その後もキバゴとキリンリキの時同様またはそれ以上に一進一退の攻防が続く。そして、

ドリュウズ「リュウズ、リュウズ……。」

ハッサム「ハサ、ハッサム……。」

持久戦の展開に疲労困憊のドリュウズとハッサム。

アイリス「ここで決めるわよ、ドリュウズ。メタルクロー！」

コトネ「ハッサム、こっちもメタルクロー！」

アイリス、コトネともにそれぞれのポケモンにメタルクローを指示した。

ドリュウズ「リュウウウウズウウウウ！」

ハッサム「ハアアアサアアアア！」

ドリュウズとハッサムはそれぞれの相手にメタルクローを仕掛ける。状況からして、これが一騎打ち……否、最後の一撃といった所か……

ドリュウズ「リュウズ！」

ハッサム「ハッサム！」

どちらの攻撃も決まった。しばし、沈黙が続く……

ハッサム「ハッサツ!? ハッサム……。」

先に倒れたのはハッサムだ。倒れたハッサムは目を回している。

審判「ハッサム、戦闘不能。ドリュウズの勝ち。よって勝者、アイリス選手。」

コトネの手持ちが全て戦闘不能になったため、アイリスの勝利が確定した。

アイリス「やったあ、ドリュウズ。2回戦進出よ。」

ドリュウズ「リュウズ、リュウズ!」

キバゴ「キバキバ!」

アイリスとドリュウズは勝利の抱擁を交わす。

コトネ「よく頑張ったわ、ハッサム。ゆっくり休んでってことね。」

敗れたコトネはハッサムをボールの中へと戻す。そして死闘を繰り広げた相手・アイリスの方に歩み寄った。

コトネ「アイリン、わたし負けちゃったけど良いバトルだったわ。」

アイリス「アタシの方も燃えたバトルだったわ。ありがとう、コトネ。」

アイリスとコトネはバトル後の握手を交わす。

コトネ「次はサトシのバトルね。」

アイリス「ええ、早く観客席に戻りましょう。」

アイリスとコトネは次の第3試合に組まれたサトシの試合を観戦するため、直ぐにバトルフィールドから去った。さて、サトシの決勝トーナメント初戦、相手は今朝再開したばかりのミズキ、どんなバトルが繰り広げられるのだろうか・・・

続く・・・

1 回戦第2 試合、アイリス対コトネ！（後書き）

白熱したバトル続きの予選選考会・・・

次はサトシの決勝トーナメント初戦のバトル！

サトシ、決勝トーナメント初戦・・・（前書き）

いよいよ、サトシが決勝トーナメント初戦を迎える・・・

ですが、今回の話はバトル前のやり取りと最初の1体同士のバトルのみです。

サトシ、決勝トーナメント初戦・・・

サトシの決勝トーナメント初戦である1回戦第3試合が始まるおよそ20分前、サトシはタケシ、デント、マサトと試合前のやり取りをしていた。

タケシ「いよいよだな、サトシ。」

デント「決勝トーナメントでも、君とポケモン達の深みのあるテイストを醸し出してくれるのを楽しみにしてるよ。」

サトシ「ありがとう、タケシ、デント。」

マサト「頑張ってるね、サトシ。」

そんな彼らのもとに、

ミズキ「サトシ〜!」

サトシ「あつ、ミズキ!」

サトシの対戦相手であるミズキが駆け寄ってきた。

ミズキ「しかし、決勝トーナメントの初戦でまさかサトシと当たるなんて思わなかったな。」

サトシ「俺もびっくりしたぜ。でも、お互い全力でバトルしような。」

ミズキ「もちろんさ。」

サトシとミズキは互いに握手を交わした。

マサト「ねえ、サトシ。その人、サトシの次の対戦相手のミズキさ
んだよね？　なんか親しげに話してるけど……。」

マサトがふと疑問に思ったことを口に出した。サトシの次の対戦
相手は自分が見ず知らずの人物で、その人がサトシと親しげに話し
ているのだから、当然の疑問である。

サトシ「ああ、マサト達は初めて会ったな。もう組み合わせ
発表の時に分かってると思うけど、コイツはミズキ。俺とカスミと
タケシでのジョウトの旅を終えてホウエンに旅立つ前に出会ったん
だ。ミズキも俺と同じポケモンマスターを目指してるって聞いたか
ら、出会った直後にすぐに仲良くなったんだぜ。」

タケシ「あの時に……。自己紹介が遅れたね。俺はタケシ。」

マサト「へえ、サトシと同じポケモンマスターを目指してるんだ。
あつ、僕はマサトです。初めまして。」

デント「僕はデントと言います。以後お見知りおきを。それにし
ても、同じ夢を追いかけている者同士で打ち解けあうなんて、いか
にもサトシらしいね。」

ミズキ「はじめまして、サトシのご紹介通り私はミズキ。以後、よ
ろしく。」

タケシ、マサト、デントとミズキは、互いに初対面の挨拶を簡

単に交わす。

タケシ・マサト・デント（）（ひょっとして、女の子!？）（）

タケシ、マサト、デントの3人はミズキの一人称が『私』であることから、ミズキが女の子であることを理解し、同時に驚いた。なぜなら、ミズキのボーイッシュな格好と活発的な感じから女の子だと思っていたからだ。ただ、ミズキ本人のことも考えてそのことは口に出さなかった。実を言えば、ミズキは男の子と間違えられることを気にしており、それが唯一の悩みである。

サトシ「じゃあ、俺そろそろ行くな。ミズキ、良いバトルが出来るのを楽しみにしてるぜ。」

ミズキ「こつちも楽しみにしてるよ。お互い良いバトルをしよう。」

サトシとミズキは再びお互いに握手を交わす。そしてサトシはピカチュウとともにその場から去っていった。

ミズキ「それにしても、サトシってやっぱり優しいな。今から対戦すると言うのにも関わらず、こんなにフレンドリーに接してくれるなんて。」

タケシ「まあ、それがサトシのいいところなんだけだな。」

ミズキはサトシのフレンドリーな人柄について呟く。

ミズキ「それに、カッコいいしね。」

タケシ・マサト・デント「」「えっ!?!」「」

突然放たれたミズキの発言に驚きを見せるタケシ、マサト、デント。

ミズキ「良いバトルを楽しみにしてるよ、サトシ．．。」

ミズキはそう言いながら、サトシと握手を交わした方の手をじっと見つめる。それはいかにも恋する乙女の眼差しのようにであった。

タケシ・マサト・デント（（ま、まさか！？）（））

3人とも同じことを思った。この3人の推測、当たりである。ミズキはサトシに好意を抱いている。その後ミズキも、その場から去っていった。

マサト「ねえ、タケシ。あのミズキって人も．．。」

タケシ「ああ、あの様子からしたら間違いないな。」

デント「これから、サトシを巡って微妙なテイストになりそうだね．．。」

3人はこれからますます激しくなるであろうサトシを巡る争奪戦のことを思い、重々しい気分になるのであった。その後、3人は観客席に戻っていった。そして、サトシとミズキによる1回戦第3試合の試合開始の時が来た。

審判「只今より、サトシ選手とミズキ選手による1回戦第3試合を行います。それでは試合開始！」

サトシ「ピカチュウ、今日はお前からだ！」

ピカチュウ「ピツカ！」

ミズキ「今日も行くよ、エレキッド！」

エレキッド「エレエエエエ！」

サトシ対ミズキの試合の火蓋が切って落とされた。サトシのトッ
プバッターはピカチュウ、ミズキはエレキッドだ。

マサト「うわぁ、電気タイプ同士のバトルだ！」

デント「経験ではサトシのピカチュウが上だけど、ミズキのエレキ
ッドもなかなかのマリアージュだよ。」

タケシ「これは、今までより激しくなりそうだな。」

観客席は固唾を飲んで、戦況を見守る。

ピカチュウ「ピカ・・・。」

エレキッド「エレエ・・・。」

ピカチュウとエレキッド、お互いに電気タイプ同士で睨みあう。
周りを圧倒させるほどの雰囲気だ。

ミズキ「エレキッド、かみなりパンチ！」

エレキッド「エレエキ！」

先手を取ったのはエレキッド。エレキッドは素早くピカチュウに近づき、かみなりパンチで攻撃を仕掛ける。

サトシ「かわせ！」

ピカチュウ「ピカア！」

スピードではピカチュウも負けていない。ピカチュウは難なくエレキッドのかみなりパンチをかわした。

サトシ「ピカチュウ、でんこうせっか！」

ピカチュウ「ピツカチュ！」

今度はピカチュウが反撃に出る。持ち前のスピードとでんこうせっかで増したスピードでエレキッドを至近距離に捕えた。

サトシ「続けて、アイアンテール！」

ピカチュウ「ピイイカアアア！」

ピカチュウのアイアンテールがエレキッドに襲い掛かる。

ミズキ「かわすんだ、エレキッド！」

エレキッド「エレッ！」

エレキッドもすばやく相手の攻撃をかわした。まずは両者ともに、相手の攻撃を持ち前のすばやさでかわした格好だ。

サトシ「なかなか、やるな。ミズキのエレキッド。」

ミズキ「サトシのピカチュウも相変わらずやるね。でも私のエレキッドもこのバトルには負けられないからね。」

ピカチュウ「ピカア！」

エレキッド「エレエ！」

お互いのポケモンを褒め合うサトシとミズキに、再び距離を置いて睨みあうピカチュウとエレキッド。さらに言えば、エレキッドのバトル中での真剣な眼差しとアクティブなバトル運びから、ミズキのエレキッドはかなり好戦的な性格のようである。

サトシ「ピカチュウ、10万ボルト！」

ピカチュウ「ピイカチュウウウウウ！」

ミズキ「エレキッド、こっちも10万ボルト！」

エレキッド「エエレキイイイイイ！」

お互いの10万ボルトがバトルフィールドの丁度中央でぶつかり合う。そして、

ドカアアアアアーン！

爆発とともにフィールド上には煙が立ち込めた。

ピカチュウ「ピカ……………」

真つ先に煙から出たピカチュウはエレキツドの行動を警戒して、辺りを見回す。

サトシ「気を付ける、ピカチュウ。」

サトシもエレキツドがどこから出てくるのかとじっくり辺りを見回す。

エレキツド「エレエエエエー！」

すると突然、エレキツドがクロスチョップの構えをしながら、煙の中から姿を現した。

サトシ「ピカチュウ、アイアンテールで迎え撃てー！」

ピカチュウ「ピカ！　　ピイイイカアアアア！」

ピカチュウのアイアンテールとエレキツドのクロスチョップがぶつかり合う。

ドカアアアアン！

ピカチュウ「ピカア！」

エレキッド「エレエ！」

また、爆発が起きた。ピカチュウとエレキッドともに爆風で吹き飛ばされた。その後地面に叩きつけられたがすぐに立ち上がった。

サトシ「ピカチュウ、10万ボルト！」

ミズキ「エレキッド、こつちも10万ボルト！」

ピカチュウ「ピイイイカチュウウウウウ！」

エレキッド「エエエエレエエエエ！」

再び、ピカチュウとエレキッドの10万ボルトがぶつかり合う。そしてまた、爆発が起こり、煙が辺り一面に立ち込めた。

ピカチュウ「ピカア……………」

ピカチュウは煙の中にいるエレキッドを再び警戒する。

サトシ「同じ手は喰わないぜ。」

ミズキ「それはどうかな？」

エレキッドは果たしてどうピカチュウを攻撃してくるのか・・・

エレキッド「エレキイ！」

エレキッドが煙の中から姿を現した。しかし今度はクロスチョップの構えではなく、両手かみなりパンチの格好だ。エレキッドは右手のかみなりパンチでピカチュウの攻撃にかかった。

サトシ「かわせ！」

ピカチュウ「ピツカチュウ！」

ピカチュウはエレキッドの右手攻撃をスルリとかわした。

エレキッド「エレエ！」

エレキッドは今度は左手でピカチュウの攻撃を凶る。ただ、左手もかみなりパンチと思われていたが、そうではなかった。

サトシ「ね、れいとうパンチ!？」

ピカチュウ「ピカッ!？」

サトシとピカチュウは思わず驚きの表情を見せる。

エレキッド「エエエエレキイイイイ！」

エレキッドの左れいとうパンチがピカチュウ目がけて襲い掛かる。

ピカチュウ「ピカアアアア！」

攻撃はそのままピカチュウにヒットした。ピカチュウは数メートル先まで吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。その後、ピカチュウ、エレキッドともに相手の体力を徐々に消耗させていき、まさに一進一退の攻防が繰り返された。

サトシ（ミズキのエレキッド、なかなか手強いなあ。一体、どうすれば……。）

サトシは次の攻撃の策を考えていた。

サトシ（よし、こうなったら……。）

サトシは一か八かの賭けに出て、次の指示を出した。

サトシ「ピカチュウ、その場で回転しながらエレキボール！」

ピカチュウ「ピカ！　ピイイカアアアア！」

ピカチュウはその場で回転しながら、無数にエレキボールを放った。放たれたエレキボールは四方八方に飛散し、いくつかがエレキッドに向かってきた。

ミズキ「かわして、エレキッド！」

エレキッド「エレ！　エレ！　エレエ！」

エレキッドは自分に向かってきたエレキボールを次々とかわした。外れたエレキボールはスタジアムの壁へと向かっていく。壁にぶつ

かったエレキボールは普通、そのまま消えるが・・・

ミズキ「嘘!?!」

壁にぶつかったエレキボールは消えずに跳ね返って再びバトルフィールド上のピカチュウ、エレキッドの方に向かってきた。

サトシ「ピカチュウ、エレキボールをアイアンテールで跳ね返せ!」

ピカチュウ「ピカ! ピカ! ピカ!」

ピカチュウは自分に向かってきたエレキボールをアイアンテールで確実に跳ね返していく。さらに言えば、エレキボール同士がぶつかり合い、予測が難しい動きをしている。その光景はまるでビリヤードのようである。

エレキッド「エレエ!」

エレキッドにはエレキボールの動きが予測できない為、いくつか受けてしまう。そして、

エレキッド「エレエエエエ!」

ミズキ「エレキッド!?!」

最後の1個がエレキッドに当たったとき、エレキッドは空中に浮かび、完全無防備の状態になった。

サトシ「ピカチュウ、トドメのボルテッカー!」

ピカチュウ「ピカ！ ピカピカピカピカアアアア！」

ピカチュウの大技・ボルテッカーがエレキッドに襲い掛かる。

エレキッド「エレエエエエエエ！」

そのままエレキッドにクリーンヒット。しばらくすると、エレキッドは地面に叩きつけられるように落下した。

エレキッド「エレキイ．．．。」

エレキッドは目を回して倒れていた。

審判「エレキッド、戦闘不能。ピカチュウの勝ち。」

まずはサトシがミズキの1体目を倒し、数的優位に立った。だが、勝負はこれからである。果たして、この勝負どちらが勝利を掴み、次に進むのだろうか．．．

続く

サトシ、決勝トーナメント初戦・・・(後書き)

ミズキの最初の一体を倒したサトシ。ここから調子の波に乗れるの
だろうか・・・

サトシとミズキ、決着の時！（前書き）

サトシとミズキ、勝負の女神はどちらに微笑むのだろうか・・・

サトシとミズキ、決着の時！

ミズキ「ご苦労様、エレキッド。」

ミズキは倒れているエレキッドを労うと、ボールの中に戻した。

ミズキ「サトシのピカチュウは強いね。さすがは百戦錬磨のポケモンってところかな？」

サトシ「サンキュー、ミズキ。ミズキのエレキッドもなかなかだったぜ。」

ピカチュウの一見不利な状況でもそれを慣れた手つきで覆したバトルっぷりに、こう評するミズキ。

ミズキ「それじゃあ、次のこの子はどうかかな？」

ミズキは2体目のポケモンが入ったボールを投げた。

バタフリー「フレイイイイ！」

中から出てきたのは、バタフリーだった。

サトシ「ピカチュウ、下がっていてくれ。」

ピカチュウ「ピイカ。」

サトシは先程のエレキッド戦で体力を消耗しているピカチュウを温存させるようだ。

サトシ「ポカブ、君に決めた！」

ポカブ「ポカアブ！」

サトシの次のポケモンはポカブ。ここは無難に相性を攻めると言
った所か・・・

サトシ「ポカブ、ひのこ！」

ポカブ「ポカ、ポオオオカアアアア！」

ポカブのひのこ攻撃がバタフリーに襲い掛かる。

ミズキ「かわして、バタフリー！」

バタフリー「フリー、フリーイイイイ！」

バタフリーは冷静にそれをかわしていき、さらには羽根を使って
ひのこを吹き飛ばした。

ミズキ「バタフリー、こっちはたいあたり！」

バタフリー「フィイイイ！」

バタフリーがたいあたりでポカブに向かってくる。

サトシ「かわせ！」

ポカブ「ポカツ！」

ポカブも相手の攻撃を難なくかわした。さらにバタフリーの背後を取り、絶好の攻撃のチャンスが到来した。

サトシ「今だ、ポカブ。かえんほうしゃ！」

ポカブ「ポオオオカアアアアア！」

ポカブのかえんほうしゃがバタフリーに襲い掛かる。背後からの攻撃なので、避けきれないのがふつつである。

ミズキ「かわして、バタフリー！」

バタフリー「ファイ！」

だが、バタフリーは背中を仰け反らせて、かえんほうしゃの攻撃を冷静にかわした。バタフリーのかわし方は、まるで棒高跳びのベリールのようなのである。

サトシ「な、何!?!」

ポカブ「ポカ!?!」

これにはサトシとポカブも驚いた。

ミズキ「手を休めずに行くよ。バタフリー、あまいかおり！」

バタフリー「フウリイイイイ！」

バタフリーのあまいかおり。この攻撃は相手の回避率を下げる効

果がある。いわば自分の技が当たりやすくなる技である。

ポカブ「ポカ．．．、ポカア〜。」

そのままポカブはあまいかおりの虜になってしまった。

サトシ「ポカブ!?」

ミズキ「続けて、どくのこな!」

バタフリー「フウリイイイイ!」

バタフリーがどくのこなをポカブに向けてまき散らす。あまいかおりの虜になっているポカブはそのままどくのこなを受けてしまい、どく状態になった。

ミズキ「まだまだ。バタフリー、ちょうおんぱ!」

バタフリー「フリーイイイ!」

ポカブ「ポカ．．．．、ポカ．．．。」

バタフリーのちょうおんぱにより、ポカブはこんらんした。

サトシ「ポカブ!」

ポカブ「ポカ! ポカ! ポカア!」

こんらん状態のポカブは自分を攻撃し始めた。さらにどく状態になっているため、ダメージが蓄積していく。ミズキのバタフリーは

高い威力の技は持ち合わせていないものの、相手の攻撃をかわしつつ、相手を状態異常にさせて徐々に体力を削っていくという地道な戦法を得意としているようである。サトシはその術中にはまっていたようだ。

サトシ「戻れ、ポカブ！」

サトシはなくなりポカブをボールに戻した。

サトシ「頼む、ドンファン！」

ドンファン「ドンファアアアア！」

ポカブの代わりにドンファンが戦闘に出された。

サトシ「ドンファン、めざめるパワー！」

ドンファン「ドン、ドンファアアアア！」

ミズキ「かわして！」

バタフリー「フリーイイイイ！」

ドンファンのめざめるパワーはバタフリーにあっさりかわされた。

ドンファン「ドンファアア！」

バタフリー「フリー!?!」

だが、ドンファンはめざめるパワーの発射と同時にバタフリーに

突進していた。

ドンファン「ドンファアアアア！」

バタフリー「フィィィィィ！」

ドンファンはそのままバタフリーに向かって突進を続け、攻撃そのものはバタフリーにクリーンヒットした。

ミズキ「な、なんてはやさなの．．．。」

ミズキはめざめるパワーを発射した後、ドンファンが次の攻撃へ移行する切り替えの速さに驚く。

ミズキ「だけど、これはかわせないだろう。バタフリー、あまいかおり！」

バタフリー「フウウウリィィィィ！」

バタフリーはバトルフィールド一面にあまいかおりをまき散らす。

ドンファン「ドンファ〜！」

そして案の定、ドンファンはあまいかおりの虜になる。

ミズキ「続けて、ちょうおんぱ！」

バタフリー「フウリィィィィ！」

ドンファン「ドンファア!? ドンファ．．．．．。」

バタフリーのちょうおんぱで、ドンファンはこんらんした。

ドンファン「ドンファ、ドンファ！」

こんらん状態のドンファンは自分を攻撃し始めた。

サトシ「ド、ドンファン！」

こんらん状態はポケモンを交代させれば治るが、ピカチュウはエレキッド戦での疲れ、ポカブはこんらんによるダメージとどく状態であることから、交代しようにもできなかつた。

ミズキ「バタフリー、たいあたり！」

バタフリー「フィィィィ！」

ここからバタフリーのたいあたりの応酬が始まった。たいあたり自体の威力は小さいものの、そこは『塵も積もれば山となる』である。何度もたいあたりを喰らっては防御力がかなり高いドンファンとてひとたまりもない。

サトシ「負けるな、ドンファン！ バタフリーにとっしんだー！」

ドンファン「ドンファ・・・、ドンファアアアア！」

こんらん状態にも関わらず、ドンファンはバタフリーにとっしんを仕掛けた。このようにこんらん状態でも相手に技を繰り出せる場合がある。

ミズキ「バタフリー、しびれごな！」

バタフリー「フィィィィ！」

バタフリーはさらにドンファンの動きを封じようと、しびれごなを撒き散らした。

ドンファン「ドンファ．．．。」

サトシ「負けるな、ドンファン！」

まひ状態のドンファンにゲキを入れるサトシ。

ドンファン「ドン．．．、ドンファ。ドン、ドンファアアアア！」

そんなサトシの熱意が伝わったのか、ドンファンは気合でとっしんを再開した。そして、

バタフリー「フィィィィ！」

ミズキ「バタフリー！」

見事とっしんはバタフリーにクリーンヒットした。

バタフリー「フィ．．．。」

バタフリーはその後地面に倒れこみ、目を回していた。

審判「バタフリー、戦闘不能。ドンファンの勝ち！」

これでサトシがミズキの2体目を倒し、2回戦進出にリーチをかけた。

ドンファン「ドンファ．．．。」

ところが、ドンファンも審判のコールの後に力尽きてしまった。

審判「ドンファン、戦闘不能。」

これでサトシが残り2体、ミズキは残り1体、数的にはサトシが有利だが、サトシのピカチュウ、ポカブともかなりの体力を消耗している。ミズキの残り1体は無傷だということを見ると、試合の展望は分からなくなってきた。

サトシ「ご苦労様、ドンファン。」

サトシはドンファンを労うとともに、ドンファンをボールへと戻した。

サトシ（俺のポケモンはポカブとピカチュウが残ってるけど、どちらも体力をかなり消耗してる。それに引き替えミズキの残りの1体はまだ分からない。どうなるか分からないけど、俺はポケモン達を信じるのみ！）

サトシは決意を改め、次の段階へと進んだ。

サトシ「ピカチュウ、もう一度行ってくれ！」

ピカチュウ「ピィカ！」

サトシはピカチュウに全てを賭けたようだ。仮にどく状態のポケモンを出すと、出した直後にどくのダメージを受けてそのまま戦闘不能になって最悪の結果に成りかねないので、得策と言える得策である。

ミズキ「私の3体目はこの子でいくよ！」

ミズキの3体目のポケモン。それは・・・

ガラガラ「ガラアアアア！」

じめんタイプのガラガラである。でんきタイプでさらには体力が残り少ないピカチュウにとっては圧倒的に不利である。これは万事休すか・・・

サトシ「相性が悪くても、全力で戦うのみ！ ピカチュウ、でんこうせつか！」

ピカチュウ「ピカ、ピイカ！」

ピカチュウはでんこうせつかで、ガラガラに近づく。

サトシ「そこから、アイアンテール！」

ピカチュウ「ピイカ、ピイイイイカアアアア！」

ピカチュウのアイアンテール。でんこうせつかから派生したピカチュウらしいスピード攻撃である。

ミズキ「ガラガラ、ホネこんぼうで受け止めて！」

ガラガラ「ガラア！」

ピカチュウ「ピカ!?」

ガラガラはなんとピカチュウのアイアンテールをホネこんぼうで受け止めたのだ。さらに、

ミズキ「そのまま投げ飛ばして！」

ガラガラ「ガアアアアアアアア！」

ピカチュウ「ピツカア！」

ガラガラはそのままピカチュウを空高く投げ飛ばした。

ミズキ「今よ、ホネブーメラン！」

ガラガラ「ガアアアアアアアア！」

ピカチュウ「ピカ、ピカア！」

ホネブーメランの連続攻撃。

ミズキ「まだまだ、ボーンラッシュュ！」

ガラガラ「ガラア！」

ピカチュウ「ピィカア！」

さらには、ボーンラッシュと骨攻撃の容赦ない攻撃がピカチュウに大ダメージを与える。

ピカチュウ「ピカア．．．。」

ピカチュウは辛うじて立ち上がっている。

ミズキ「どう、サトシ。私のガラガラはバトルになると相手を完膚なきまでに叩き潰すくらい容赦ないよ。」

サトシ「クツ．．．。」

サトシはガラガラの情け容赦のない攻撃を目の当たりにして苦虫を噛んだ。

アイリス「うわあ、あのガラガラ容赦ないわね．．．。」

コトネ「でも、ピカチュウもよく耐えきったわ．．．。」

観客席で見守る面々もガラガラの攻撃を目の当たりにして、開いた口が塞がらない状態になる。その後もピカチュウはガラガラの骨攻撃3連発を受けながらも、ガラガラの体力も消耗させていった。

ガラガラ「ガラアアアア！」

ガラガラはまたもピカチュウに攻撃を仕掛ける。

サトシ「でんこうせっかでかわせ！」

ピカチュウ「ピカー！」

それをピカチュウはでんこうせっかでかわした。

ミズキ（あれだけダメージを受けているのに、エレキッド戦の時とスピードはほとんど変わっていないいうえに何度でも立ち上がってくる。少々見くびり過ぎていたようだね。）

ピカチュウの並外れた根性に驚愕するミズキ。

サトシ「（ここは一か八か・・・）ピカチュウ、ボルテッカー！」

ピカチュウ「ピカ！ ピカピカピカピカピカア！」

サトシはなんと電気タイプの大技・ボルテッカーをピカチュウに指示した。

ミズキ（えっ！？　じめんタイプのガラガラには電気技は効かないのに・・・。）

ミズキには、サトシの指示の意図が全く分からなかった。

サトシ「そこで、アイアンテール！」

ピカチュウ「ピカア！　ピイイイイカアアアア！」

さらにサトシは手を休めることなく、アイアンテールを指示した。ピカチュウはボルテッカーで付いた勢いを利用してアイアンテールを繰り返し出す。これがいつかのDPでも放送された『アイアン・ボルテッカー』である。

ガラガラ「ガラア!? ガラアアアア!」

電気技が来て油断していたガラガラはそのまま『アイアン・ボルテッカー』を喰らってしまう。

サトシ「そのまま、連続攻撃!」

ピカチュウ「ピカ! ピカ! ピカア!」

ガラガラ「ガラ! ガラ! ガラアアアア!」

ピカチュウは先程のガラガラの骨攻撃のお返しと言わんばかりに、『アイアン・ボルテッカー』を連打する。ガラガラは成す術がなく、連続攻撃の餌食となる。そして、空中へと跳ね上げられた。

サトシ「ピカチュウ、ジャンプしてトドメだ!」

ピカチュウ「ピカア! ピイイイイカアアアア!」

ピカチュウは跳ね上げられて無防備となったガラガラにさらに最大パワーでアイアンテールを喰らわした。

ガラガラ「ガラアアアア!」

ミズキ「ガラガラ!」

ガラガラはそのまま地上へと落下し、地面に叩きつけられた。辺り一面には土煙が舞う。

ガラガラ「ガラア...。」

ピカチュウ「チャア〜。」

ガラガラは目を回して倒れており、さらにはピカチュウも力を出し切ったのか、そのまま力尽きて倒れてしまった。

審判「ガラガラ、ピカチュウ、ともに戦闘不能。よって、この時点でミズキ選手の手持ちが0体となったため、この勝負、サトシ選手の勝利。」

審判がサトシの勝利を宣告した。その瞬間、1回戦とは思えないほどの激闘を繰り広げられたことに拍手喝さいが巻き起こった。

サトシ「ピカチュウ！」

ミズキ「ガラガラ！」

サトシとミズキは、倒れているピカチュウとガラガラのもとへと向かった。

サトシ「ごめんな、ピカチュウ。無理させちゃって。」

ピカチュウ「ピカピ、ピカピカア。」

謝るサトシにピカチュウは弱弱しくも「気にするな！」と言いたげに答える。ピカチュウはかなり疲れてはいるものの、かなり充実したバトルのようだった。その証拠にしっかりと右手で勝利のVサインをしている。

ミズキ「ガラガラ、あなたもよくやったよ。」

ガラガラ「ガラア．．．。」

ミズキはガラガラを労うが、当のガラガラは申し訳なさそうに俯いている。

ガラガラ「ガラア．．．、ガラアアアアアアアアア！」

すると突然ガラガラは負けたのが相当悔しかったのか泣き出してしまった。

ミズキ「あちゃあ。ガラガラ、泣かなくても誰もあなたを責めたりはしないよ。」

ガラガラ「ガラア、ガラア、ガラア．．．。」

ミズキはガラガラを慰めるものの、ガラガラは依然泣き続けている。バトルではピカチュウに対して情け容赦ない攻撃で完膚なきまでに倒そうとしたポケモンと同じポケモンだとはとても思えない光景である。

サトシ「い、一体どうしたんだ？」

ピカチュウ「ピイカ？」

サトシとピカチュウが、突然泣き出したガラガラを心配してミズキとガラガラのもとへやって来た。

ミズキ「ああ、サトシ。この子、結構人情深くて涙もろい性格なんだ。ピカチュウとのバトルに負けて余程悔しかったんだろうね。」

ミズキは未だ泣き止まないガラガラを抱き寄せながら答える。

サトシ「嘘だろ……。あんなにピカチュウに容赦ない攻撃を仕掛けてたのに……。」

サトシはミズキのガラガラの意外な一面を見て、驚愕の表情を浮かべた。

ガラガラ「ガラア……。」

ガラガラは先程よりは落ち着いたものの、自分を負かしたピカチュウを少し警戒するようにミズキの後ろに隠れた。

ピカチュウ「ピカア……。」

ピカチュウはガラガラと仲良くしたいと思っていたが、ガラガラの反応を見て少し困った。だが、そこはトレーナー譲りのコミュニケーション能力を持つピカチュウである。ピカチュウはサトシの肩から降りて、

ピカチュウ「ピカピカ、ピッカチュウ！」

ピカチュウはガラガラに握手を求めた。

ガラガラ「ガラア？」

ミズキ「大丈夫よ、ガラガラ。ピカチュウと握手しておいで。」

ガラガラ「ガラア。」

ガラガラは恐る恐るピカチュウに近づき、握手を試みる。

ピカチュウ「ピカピカア！」

ピカチュウは優しく笑顔で応えた。

ガラガラ「ガラ．．．、ガラアアアア！」

ピカチュウの優しさに触れたガラガラは、感極まってピカチュウの差し出した右手を両手でしっかりとつかみ、号泣した。

サトシ・ミズキ「アハハハ．．．。」

サトシとミズキはその場で苦笑を浮かべた。

アイリス「あのガラガラが、あんなに涙もろかったなんて．．．。」

コトネ「うん、なんか意外なギャップでびっくりしたってことね。」

観客席のアイリスとコトネもガラガラの意外な一面に驚きを見せる。

アイリス「だけど．．．。」

コトネ「うん、それよりも．．．。」

アイリス・コトネ「．．．」
「なんで、サトシとあのミズキって子があんなに仲良さげなの！」「」

アイリスとコトネは声を合わせてサトシとミズキが親密に話していることに嫉妬した。現時点でアイリスとコトネは、ミズキがサトシに対して好意を抱いていることを知らない。

デント（これからもっと、サトシを巡るバトルがピリツと辛いテイストになりそうだな・・・。）

デントはアイリスとコトネを見て、率直に思った。恋愛もポケモンバトルもコンテストも白熱した展開を見せる展開はまだまだ続く・・・

続く・・・

サトシとミズキ、決着の時！（後書き）

バトル部門も盛り上がりを見せる中、コンテスト部門の様子は・・・

バトルとコンテストの行方、そして激しさを増す争奪戦・・・(前書き)

今回はコンテストのダイジェストと小休止としての会話シーンがメインです。

そんななかで争奪戦要素を無理矢理入れ込んだわけですが・・・

バトルとコンテストの行方、そして激しさを増す争奪戦・・・

1回戦第2試合でアイリス、第3試合でサトシが勝利を納めたバトル部門、第4試合でも観客を度肝を抜くバトルが繰り広げられていた。なんと、タクトの他に伝説のポケモンを使うトレーナーが表れたのだ。そのトレーナーは海外から来たトレーナーで、名前はアルフレッド。伝説のポケモンが出されたのは彼の2体目で、そのポケモンはドラゴン・こおりタイプのキュレムだ。相手を威圧するプレッシャーだけでなく、攻撃の技自体もかなりの高威力で相手の最後のポケモンをあっさり倒してしまった。また、キュレムだけでなく、最初に出てきたポケモンも相手の2体をストリートで倒していることから、このアルフレッド、かなりの凄腕トレーナーである。バトル部門もより一層の盛り上がりを見せる中、コンテスト部門の方もそれに負けないくらいの盛り上がりを見せた。

ヒカリ「ミニミロール、とびはねる！」

まずは1回戦第2試合に登場したヒカリである。ヒカリはミニミロールのとびはねるを使ったコラボ技で相手を圧倒した。特に圧巻だったのは、『とびはねる 空中で回転 回転しながらいとうビーム』この状態で相手のポケモンが怯んだ隙を狙って真上から突撃』のコラボ技だった。このコラボ技は空中から氷のドリルが急降下しているように見えることから後に『フライアイス・ドリル』と名付けられたというのは別の話。というわけで、ヒカリは2回戦進出を決めた。

ハルカ「グレイシア、シャドーボール！」

ノゾミ「リーフィア、エナジーボールで迎え撃て！」

次の1回戦第3試合はハルカとノゾミとミクリカップ以来の組み合わせである。ハルカはグレイシア、ノゾミはリーフィアと、イーブイの進化系同士のコンテストバトルとなった。ハルカは相性を攻める他に多種多様の技を覚えているグレイシアならではの魅せる攻撃を仕掛け、リーフィアを追い詰めていった。だが、そこは経験でまさるノゾミ。リーフィアはグレイシアの攻撃を受けながらも、所々かげぶんしんを利用して巧みに攻撃をかわしていき、マジカルリーフ、リーフブレード、つばめがえしを使ったスピード攻撃でグレイシアを下し、ノゾミはミクリカップでの雪辱を晴らした。

リリア「エルフーン、しんぴのまもりですわ。」

サオリ「バタフリー、こつちもしんぴのまもり。」

その次の1回戦第4試合は特に圧巻だった。ここでサオリとリリアが激突したわけだが、まさに『大人の演技』そのものだった。リリアはエルフーン、サオリはバタフリーで1回戦に臨む。序盤はしんぴのまもりで両者ともに魅せる技で会場を魅了した後、エルフーンはぼうふうを使ったコラボ攻撃、フェイク攻撃でバタフリーを攻撃、一方のバタフリーは得意のむしタイプ技はもちろん、エスパ―技を組み合わせた形で応戦した。もちろん、技だけでなく、攻撃のかわし方も華麗で他のコンテストバトルを圧倒させるものだった。両者譲らずの接戦の末、『コンテストレイン』の異名を持つリリアがなんとか勝利をつかみ取った。

ヒカリ「サオリさん、リリア様。見事なコンテストバトルでしたよ。」

ハルカ「わたし達のコンテストバトルよりずっとすごかったかも。」

ノゾミ「どちらも隙を見せない、出す技にもムラがなく、はたまたポケモン自身にも見せ場を作る。まさに最高のコンテストバトルでした。」

ヒカリ、ハルカ、ノゾミの順にコンテストバトルを終えたばかりのサオリ、リリアを褒め称える。

サオリ「ふふふ、なんだか皆からそんなに褒められると照れちゃうわ。」

リリア「あなた達のコンテストバトルもわたくし達に負けないくらい見事なものでしたわよ。」

サオリとリリアは少し頬を赤く染めながら言う。

リリア「それにしてもあなた達とお話してとても楽しい気分になりますわ。まあ、元々わたくしはじっとしているよりこうして皆様と楽しくお話するときが一番好きなのですが……。」

ヒカリ「そうだったんですか!？」

ノゾミ「意外ですね。リリア様のイメージとは全く違いますね。」

リリア「あら、そうでしたか？ わたくし、こう見えても結構お話しするのは好きですし、外出もよくしますですよ。」

ハルカ「そ、そうだったんだ……。」

清楚で物静かなイメージのあったリリアが以外にも活動的な性格

だったことに、ハルカ、ヒカリ、ノゾミは驚きの表情を見せた。その後、ハルカ、ヒカリ、ノゾミ、サオリ、リリアの5人は楽しく談笑した。

サオリ「ところで、ハルカちゃん、ヒカリちゃん、ノゾミちゃんはサトシ君のことどう思ってるのかしら？」

ハルカ・ヒカリ・ノゾミ「えっ!?!」

サオリから突然の質問をされたことに、キョトンとする3人。

リリア「わたくしもあなた方との旅に同行しているサトシ様のこと気がなつてましたのですわ。」

ハルカ「そういえば、途中からサトシの話しかしてなかったかも。」

ヒカリ「ああ、確かに……。」

リリアもタンバシテイで出会って以来、サトシに興味を示していた。サオリとリリアがサトシのことを知りたがっていたので、ハルカ、ヒカリ、ノゾミは自分たちがサトシと触れ合っただけで感じたことなどを簡潔に説明した。

サオリ「ふふふ、あなた達からの話からすれば、サトシ君ってとても良い子なのね。」

リリア「確かに、まだそれ程お会いしていないわたくしでも、サトシ様がとても勇敢で優しいお人だということが分かりますわ。」

サオリとリリアはサトシに初めてお目にかかった第一印象をこう

語る。

ヒカリ「勇敢なのはいいんですけど、たまに自分の身を顧みずに無茶することがあるんですけどね。」

ハルカ「あれはホントに止めてほしいです。心臓に悪いかも。」

サオリ「まあ、それがサトシ君のいいところでもあるんじゃない。そこまで勇敢な男の人って、そうはなかなかいないわよ。」

ノゾミ「ハルカとヒカリに比べて、サトシと触れ合う機会が少ないあたしでもサトシの良いところをあげるとすればキリがないですね。それに面白い奴ですし。」

サトシに対して無茶はしてほしくないと思いつつも、そんなサトシの事を嫌いには慣れない様子の3人。それを見たりリアは、

リア「お話から察するに、あなた方はサトシ様に対して特別な感情をお持ちのようですね。」

ヒカリ「特別な感情？」

リアの一言に頭にクエスチョンマークを浮かべながら首を傾げる3人。

サオリ「ふふふ、例えば恋愛対象として見てるとかね。」

ハルカ・ヒカリ「//////////////////!?!?」

サオリの『恋愛対象』という言葉に敏感に反応し、顔をこれまで

にもないくらい真っ赤にさせるハルカとヒカリ。何とも分かりやすい反応だ(汗)

サオリ「あら、図星だったかしら？」

サオリは冗談のつもりで言ったように振る舞うが、明らかにわざとらしい。

ハルカ「さ、サオリさん！？ な、な、なんてこといんですか／＼」

ヒカリ「そ、そうですね！？ サトシを恋愛対象として見るだなんて／＼」

ハルカ、ヒカリはあたふたしながら言う。ホントに分かりやすい反応である。大事な事なので、2度言いました。

リリア「でも、あなた方がサトシ様にご好意を抱かれるのも分かりますわ。わたくし世界中を回ってきましたが、あのような素敵な殿方はなかなかいませんもの。」

リリアもサトシに対しては好印象のようである。

リリア「このわたくしですら、フィアンセとして是非お迎えしたいと思いましたが。」

リリアの口から、突飛押しもない爆弾発言。

ハルカ「り、リリア様！？」

ヒカリ「い、いくらリリア様でもそれは嫌です！」

サトシとリリアが結ばれることを思い、頑なに拒むハルカとヒカリ。別にハルカとヒカリでなくても、他のサトシLOVEズの面々でも同じ反応をすることは間違いないだろう。

リリア「あら、わたくし冗談のつもりでしたのに。」

リリアは冗談だと言い張るが、先程のサオリ同様、どう見てもわざとらしい。

ハルカ「それよりも、ノゾミはどうしてそんなに冷静なのよ！」

ヒカリ「そうよ。ノゾミだって、サトシのこと好きでしょ！」

いきなりノゾミに詰め寄るハルカとヒカリ。だが、ノゾミは、

ノゾミ「好きだよ。」

あっさりと言いのけた。

ハルカ・ヒカリ（い、言っちゃったあああ!?!）

ノゾミ「確かにアンタ達みたいに積極的にアプローチした方が、サトシは振り向いてくれるよ。だけど、アタシにはアタシなりのやり方というものがあるからね。それにアンタ達みたいに喧嘩まがいのことして、サトシに嫌われたくないし……。」

ハルカ・ヒカリ「うっ!?!」

ノゾミの熱弁に、ハルカとヒカリは思わず言葉を飲み込んだ。

ハルカ「ノゾミの言いたいことは分かったわ。だけど、サトシは誰にも譲る気はないんだから！」

ヒカリ「あたしだって、サトシのことが好きなのは誰にも負けないつもり．．．いや、誰にも負けられないわ。」

ノゾミ「アタシだって、サトシの事は他のみんなには負けないよ！」

今回はハルカ、ヒカリ、ノゾミだけだが、今回の一件でまたさらにサトシ争奪戦がより一層激しくなった模様。この無限に規模が拡大していく争奪戦に終止符というものがあるのだろうか．．．

リリア「なんだか、サトシ様を巡って今後の展開が楽しみですわね。サオリさん。」

サオリ「ええ、これから苦勞が絶えない日々が続くサトシ君には申し訳ないですけど、面白くなりそうですね。」

争奪戦を繰り広げる3人の少し遠くで、サオリとリリアが歯止めを知らないサトシ争奪戦についてこう語った。この2人、明らかに楽しんでいるようである．．．

ハルカ「それはそうと、バトル部門のほうはどうなったか見に行かなくちゃ。」

ヒカリ「あつ、今日は午前アイリスとコトネとサトシ、午後にはケンタが1回戦を迎えるんだっけ。」

ノゾミ「午前の部は大方終わってると思うよ。」

ハルカ、ヒカリ、ノゾミはバトル部門が気になったため、直ぐにコンテスト会場を後にし、サトシ達がいるであろうバトル会場へと向かった。その後、アイリスとサトシが2回戦進出したことを知り、みんなで祝福をしたのは言うまでもない・・・

続く

バトルとコンテストの行方、そして激しさを増す争奪戦・・・(後書き)

次回、午後の部が始まる！

以心伝心！？ ケンタVSリラ（前書き）

サブタイがモロパ○リですが、どうぞ。

以心伝心！？ ケンタVSリラ

コンテストとバトルともに激しさを増す会場から場所を変えて、ここはジョウト地方最大の都市・コガネシティ。この街にあるコガネジムでも、予選選考会の展望を見守る光景が見られた。

アカネ「みんなはよ来てーな。終わってまうやん。」

ナオコ「アカネちゃん、まだ始まってもないのにそう早く終わるわけないでしょ。」

ミカ「それにそんなに急がなかったって、テレビは逃げませんよ（汗）」

このコガネジムのジムリーダー・アカネは次に放送されるバトル部門の試合が楽しみに仕方ないようだ。そんなアカネに対して呆れ半分にツッコミを入れるジム・トレーナーのナオコとミカ。

アカネ「ナオコはん、ミカはん、そんなこと気にしてたらあかんで。ウチはこの試合が楽しみで夜も寝られへんかったんやから。」

ミカ「いや、昨日の夜はぐっすり寝てたじゃないですか（汗）」

アカネ「・・・ミカはん、細かいこと言うたらキリがないで。」

ミカ「・・・もういいです。」

笑顔でマイペースに答えるアカネに対して、返す言葉が見当たらないミカ。

アカネ「ああ、はよしまらへんかな。」

アカネは今か今かと試合開始を待ち望む。

ナオコ「アカネちゃん、あの子とバトルして以来、随分と熱が上がってるみたいね。」

ミカ「ええ、まるで．．．いやあれは完全に恋する乙女の輝きですよ（汗）」

テレビの前でワクワクが抑えきれなくなっているアカネを見て、ナオコとミカは啞然とアカネを見た。

アカネ「がんばってな．．．。」

するとアカネは顔を少し赤らめながらお目当てのトレーナーの名前を言う。

アカネ「ケンタはん／＼／」

そして、午後の部が始まり1回戦第5試合に組まれたケンタVS
リラの試合開始時刻が刻一刻と迫っていた。

ケンタ「相手はカントーのフロンティアブレーン。サトシからリラ
について聞いているけど、今日の試合、一筋縄ではいかないな。気
合入れていくぞ、バクフーン。」

バクフーン「バアアアアク！」

ケンタは改めて気を引き締めながら、連れ歩きのバクフーンとと
もにバトルフィールドへと向かった。そして・・・

審判「只今より、1回戦第5試合、ケンタ選手とリラ選手によるポ
ケモンバトルを始めます。それでは、試合開始！」

審判のコールにより、ケンタとリラの戦いの火蓋が切られた。

ケンタ「行くぜ、マッスグマ！」

リラ「行くよ、Go, my friend!」

そして、お互いに最初の1体をバトルフィールド上に出す。ケンはマツスグマ、リラはエーフィである。

マツスグマ「マアアアスウウウ!」

エーフィ「エエエエフィィィィ!」

マツスグマ、エーフィともに元気よく飛び出てきた。

ケンタ「マツスグマ、でんこうせっか!」

マツスグマ「マアアアアスウウウウグ!」

マツスグマがでんこうせっかでエーフィの攻撃にかかる。

リラ「かわすんだ、エーフィ!」

エーフィ「エーフィ!」

エーフィはそれを難なくかわす。それと同時にリラは、自らの『ポケモンと心を通わせる能力』を使い、エーフィの思考を読み取った。

リラ（分かったよ、エーフィ。これがやりたいんだね。）

エーフィ「エーフィ。」

リラは心の中でエーフィに語りかけ、エーフィはリラに対してう

んと頷いた。

リラ「エーフィ、サイコネシス！」

エーフィ「エエエエフィィィィ！」

エーフィのサイコネシス。

マツスグマ「マアス!？」

マツスグマはサイコネシスにより、動きを封じられた。

リラ「続けて、アイアンテール！」

エーフィ「エエエエエフィィィィ！」

自らのサイコネシスで身動きを封じたマツスグマに対し、エーフィはさらにアイアンテールで攻撃を図る。

マツスグマ「マアアアアス！」

アイアンテールは見事、マツスグマにクリーンヒットした。

ケンタ「負けるな、マツスグマ。でんこうせつかで反撃だ！」

マツスグマ「マアス！」

マツスグマはすぐさま体勢を立て直し、再びでんこうせつかでエーフィへの攻撃を図る。だが、これもエーフィにあっさりとかかわられる。

ケンタ「まだまだ、きりさく攻撃！」

マツスグマ「マアス！」

マツスグマはでんこうせっかをかわされると同時にきりさくをエーフィに対して繰り出した。

エーフィ「エフィイイイ！」

至近距離での攻撃に、エーフィは急所を突かれ、大ダメージを負った。

リラ「エーフィ、サイコショック！」

エーフィ「エエエフィイイイ！」

エーフィはすかさずサイコショックで反撃。

マツスグマ「マアアス！」

エーフィのサイコショックもマツスグマに急所に当たるダメージを与えた。

リラ（あのケンタってトレーナー、真剣にバトルに取り組む姿勢と
いいバトルスタイルがサトシに似てるね。これは何が起こるか分
からないけど、それでも僕は全力で戦うよ。）

リラはケンタとのバトルを通して、ケンタのバトルスタイルがサトシと似た特徴があることを感じ取った。

リラ「それならこれはどうだ！ エーフィ、サイコショック！」

エーフィ「エエエエフィィィィィ！」

エーフィのサイコショック。

ケンタ「マツスグマ、ジャンプしてでんこうせっか！」

マツスグマ「マアス、マアアス！」

マツスグマはジャンプでサイコショックを受け流すと、ジャンプの反動を利用してでんこうせっかを繰り出した。

リラ「（驚いたな。普通はかわすだけなのにそれを攻撃に利用するなんて考えたね。だけど、これはこっちにとっては好都合だよ。）

エーフィ、でんじほう！」

エーフィ「エエエエフィィィィィ！」

エーフィのでんじほう。でんこうせっかで一直線にエーフィに向かっていたマツスグマがかわせるはずもなく、

マツスグマ「マアアアス！」

そのままでんじほうを喰らってしまい、進行方向とは逆の方向に吹っ飛ばされてしまった。さらに、でんじほうの追加効果でまひ状態になるという非常に不利な展開となった。

ケンタ「マツスグマ、ねむるー！」

マッスグマ「マアス、zzz」

マッスグマはねむるで体力を回復し、さらにまひ状態も回復した。

リラ（ねむるか、厄介な技を使ってきたね。だけど、眠っている状態ならエーフィの攻撃はかわせないよ。）

リラの思うとおり、ねむるは体力が全回復するうえに状態以上を直すという効果もある反面、しばらくの間ねむり状態になり、技を出したり攻撃をかわしたりすることが出来なくなるといいうリスクも負う。ただこれは、ある技を覚えていなければの話だが・・・

リラ（エーフィ、一気に決めるよ。）

エーフィ「エフィ。」

リラとエーフィの心がシンクロし、リラはエーフィに攻撃の指示を与える。

リラ「エーフィ、サイコショック！」

エーフィ「エエエエエフィィィィィ！」

エーフィのサイコショックがねむり状態のマッスグマに襲い掛かる。

マッスグマ「！」

エーフィ「エフィ!？」

リラ「シャ、シャドークロー!?!」

なんとねむり状態で技が出せないはずのマツグマがシャドークローでサイコシヨックを軽く相殺したのだ。これにはエーフィとリラは開いた口が塞がらないくらい驚きの表情を見せた。

リラ「ねごとを使ったんだね。」

そう、マツグマはねごとを使ってシャドークローを繰り返したのだ。さらにマツグマはさらにねごとででんこうせっかでエーフィに接近する。

ケンタ「マツグマ、トドメのシャドークロー!」

マツグマはシャドークローでエーフィに襲い掛かる。エスパータイプのエーフィにとって、ゴーストタイプの技・シャドークローは効果抜群の技である。

エーフィ「エエエエフィフィフィフィフィ!」

エーフィはかわすことが出来ず、急所に当たるダメージを負った。そして、そのまま目を回して倒れた。

審判「エーフィ、戦闘不能。マツグマの勝ち。」

マツグマ「マアス、マツス!」

審判のコールとともに、マツグマもねむり状態から覚めた。

ヒカリ「まずはケンタが1体目を倒したね。」

タケシ「ああ、だけど相手はあのリラだ。このまま楽に終わるとは到底思えないな。」

サトシ「リラもかなり手ごわいな。油断はできないぜ、ケンタ。」

ピカチュウ「ピイカ。」

ケンタが1歩リードしたものの、観客席で見守るサトシ達は安心することは出来なかった。ケンタの相手は『孤高の天才』と言われるリラである。一筋縄ではいかないのは間違いないであろう。

リラ「気を取り直して、Go, my friend!」

リラは次のポケモンをバトルフィールドに出す。

シュバルゴ「シュバアアアア!」

出てきたのはシュバルゴだった。

ケンタ「イツシュ地方のポケモンか。」

リラがどういった経緯でシュバルゴをゲットしたのかは定かではないが、イツシュ地方のポケモンとバトル経験が少ないケンタにとっては戦況がどう動くか全く読めない状況である。

リラ（シュバルゴ、君はこうしたいんだね。分かったよ。）

リラはシュバルゴと心をシンクロさせ、シュバルゴの心の中を読

み取った。

ケンタ「マツスグマ、一気に決めていくぞ！ でんこうせっか！」

マツスグマ「マアス、マスマスマアアス！」

ケンタはシュバルゴの低い素早さ、マツスグマのスピード性を活かして、一気に勝負を決めにかかった。

リラ「（これを待っていたんだ。）シュバルゴ、ファスト・ガード！」

シュバルゴ「シュバア！」

シュバルゴはファストガードで必ず先制攻撃ができるでんこうせっかの攻撃を凌いだ。

リラ「マツスグマにギガインパクト！」

シュバルゴ「シューウウウバアアアア！」

シュバルゴの強力なギガインパクトが、至近距離でマツスグマに襲い掛かる。

マツスグマ「マアス！？ マアアアアス！」

マツスグマは躊躇して、そのまま大ダメージを喰らった。

マツスグマ「マアス……。」

マツスグマはそのまま吹っ飛ばされ、地面に着地した際には目を回して倒れていた。

審判「マツスグマ、戦闘不能。シュバルゴの勝ち。」

ケンタ「マツスグマ!？」

ケンタは一撃でマツスグマが倒されたことに驚きの表情を見せる。

アイリス「あのシュバルゴ、一撃で倒しちゃった……。」

コトネ「ねむるで体力回復してたはずなのに……。」

デント「かなりの攻撃力があるみたいだね、あのシュバルゴ。それに随分とパンチの効いたテイストを引き立ててるよ。」

マサト「ケンタが勝つのか、リラさんが勝つのか、全く分かんなくなってきたよ。」

今のアイリス、コトネ、デント、マサトの会話からも分かるように、この試合も全く今後の戦況が読めない状況となった。

ケンタ「なんてパワーだ。シュバルゴ……。」

ケンタはねむるで体力回復したマツスグマを一撃で倒すほどのシュバルゴのパワーに圧倒されていた。

バクフーン「バク! バクバアク!」

そんなケンタを見て、バクフーンは「しっかりしろ!」と声を掛

ける。

ケンタ「そうだな、バクフーン。ポケモンバトルは最後まで何が起るかわからない。それでも全力を尽くさなければいけないんだっ
たな。サンキュー。」

バクフーン「バクウ！」

ケンタとバクフーンは改めて気を引き締める。

ケンタ「2体目はお前でいくぞ、バクフーン。」

バクフーン「バアク、バアアアクフウウウウウ！」

ケンタの2体目はバクフーン。むし・はがねタイプのシュバルゴには最良のポケモンだ。

リラ（相性では不利だけど、あのバクフーン。それだけじゃなさそうだね。）

リラはバクフーンから感じ取れる雰囲気から、ケンタのバクフーンには能力や相性以上のなにかがあると推測する。フロンティア・ブレーンとして挑戦者を迎える立場上、ケンタとのバトルもじっくりと楽しみたいという思いも次第に湧いてくる。

ケンタ「バクフーン、かえんほうしゃ！」

バクフーン「バアアアアクウウウウウウ！」

バクフーンのかえんほうしゃ。シュバルゴはギガインパクトの影

響で身動きが取れない為、これをかわす術がない。

シュバルゴ「シュバ……………」

かえんほつしやは身動きが取れないシュバルゴに猛威をふるつ。
シュバルゴの体力が徐々に減らされていく。

リラ（耐えてくれ、シュバルゴ……………」

リラはシュバルゴが攻撃を耐えてくれることを願うほかなかった。

シュバルゴ「シュバ……………」

しばらくしてシュバルゴは身動きが取れるようになり、かえんほつしやを振り払った。ただ、効果抜群の攻撃を受けて、かなりのダメージを負っている。

ケンタ「一気にいくぜ！ バクフーン、かえんぐるま！」

バクフーン「バアク、バクバクバクバアアアアク！」

バクフーンはさらに攻勢を強め、かえんぐるままでシュバルゴに向かつていく。

リラ「かわすんだ、シュバルゴ！」

シュバルゴ「シュバ！」

ただこれは、シュバルゴが辛うじてかわした。

リラ「シュバルゴ、反撃のきしかいせい！」

ケンタ「何！？」

シュバルゴはきしかいせいを発動。きしかいせいは残りの体力が少なければ少ないほど威力が上がるかくとうタイプの技である。つまり、先程のかえんほうしゃで大ダメージを喰らっているシュバルゴには最適の技である。

シュバルゴ「シュバア、シュバシュバシュバアア！」

バクフーン「バク、バク、バアク……………」

シュバルゴのきしかいせいによる波状攻撃が、バクフーンを襲う。

ケンタ「くつ……………」

ケンタは思わず苦虫を噛んだ。

ケンタ「…負けるな、バクフーン。かえんぐるまだ！」

リラ「えっ！？」

ケンタはバクフーンがきしかいせいを受けている中、かえんぐるまの指示を出した。

バクフーン「バアク…………、バク。」

バクフーンは目に睨みを利かせ、かえんぐるまの準備に入る。

バクフーン「バアク、バアアアアクウウウウ！」

シュバルゴ「シュバ．．．。」

バクフーンはかえんぐるまの体勢に入ると、すぐさまかえんぐるまを繰り出す。シュバルゴは手に感じた熱さで思わずバクフーンから離れてしまい、攻撃を中断した。

バクフーン「バアアアクウウウウ！」

シュバルゴ「シュバアアアア！」

バクフーンはそのままシュバルゴにかえんぐるままで体当たりした。その瞬間土煙があたり一面に立ち込める。そして土煙が晴れて、

シュバルゴ「シュバア．．．．．。」

審判「シュバルゴ、戦闘不能。バクフーンの勝ち。」

シュバルゴはきしかいせいで形勢逆転を狙ったが、一步及ばなかった。

リラ（バクフーンの粘り強さには正直驚いたな。それとバクフーンとケンタの間にはかなり強いきずなで結ばれてるみたいだね。）

リラはバクフーンの相手からの攻撃にも屈しない粘り強さ、そしてバトルを通して感じたケンタとバクフーンの絆の強さに改めて感服される思いだった。

リラ「（それなら尚更全力でぶつかるのみ！）Go, my fr

「iend!」

リラは3体目のポケモンをバトルフィールド上に出す。

メタグロス「メタアアアア!」

リラの3体目はメタグロスだ。

ケンタ（相手ははがねタイプ。相性ではバクフーンの方が有利だけど、バクフーンはさっきのシュバルゴとのバトルでかなり体力を消耗している。。。）

メタグロスははがねタイプ、バクフーンはほのおタイプと、相性の観点からいえばバクフーンの方が有利だが、バクフーンの残り体力を考慮に入れるとメタグロスにも多少の分がある。

リラ「（わかったよ、メタグロス。。。）メタグロス、バレットパンチ!」

メタグロス「メエエエエタアアアア!」

メタグロスは必ず先制攻撃ができるバレットパンチで、バクフーンを攻撃する。

バクフーン「バアク。。。」

バクフーンはかなりの体力を消耗しているせいか動きが鈍く、バレットパンチをまともに喰らってしまった。

ケンタ「バクフーン!」

ケンタは思わず声を上げる。

バクフーン「バク……。」

バクフーンはなんとか耐えきつた。だが、この後もメタグロスの猛攻を受け、バクフーンの体力は極限まで削られていく。そして、

リラ「メタグロス、はかいこうせん！」

メタグロス「メエエエエタアアアア！」

メタグロスのはかいこうせん。

バクフーン「バクウウウウ！」

バクフーンははかいこうせんをまともに食らい、大ダメージを負った。そして、そのまま地面に倒れこんだ。

バクフーン「……………」

しばらくしても立ち上がらないバクフーン。

ケンタ「バ、バクフーン！」

審判「バクフーン、戦闘……………」

審判がバクフーンの戦闘不能をコールしかけたその時だった。

バクフーン「バク……。バアアアアクウウウウ！」

バクフーンは突然雄たけびをあげながら、立ち上がった。しかも体中に炎を纏いながら……

ヒカリ「あれって、もうか？」

タケシ「そうみたいだ。バクフーンの体力が極限まで削られていたんだ。いつ発動してもおかしくない状態だ。」

この会話からもわかるように、バクフーンは自らの特性『もうか』を発動したのだ。『もうか』は残り体力が極限まで少なくなるとほのおタイプの技の威力が上がる特性である。

ケンタ「バクフーン……。」

思わず呆然となるケンタだったが、バクフーンのもうか発動の他の異変に気付いた。

バクフーン「バク、バク！」

バクフーンはケンタに何かを伝えるかのように声を出す。

ケンタ（……そうか、わかったぜ。バクフーン。この技が使いたいんだな。）

ケンタはその様子を見て、バクフーンが新たな技を出したがって

いることに気づく。この時、ケンタとバクフーンの心が最高にシンクロした。

ケンタ「それなら、俺はお前を信じる！ バクフーン、オーバーヒート！」

ケンタはバクフーンがたった今覚えた技『オーバーヒート』を指示した。

バクフーン「バアアアアアクフウウウウウウウ！」

バクフーンの強力なオーバーヒートがメタグロスに襲いかかる。

リラ「しまった。今メタグロスははかいこうせんを使っていて身動きが取れない……。」

メタグロスははかいこうせんの反動で動けない状態である。メタグロスはほぼ無傷であるが、ほのおタイプの技に相性が悪いこと、バクフーンはもうか状態であること、さらに付け加えて言えばオーバーヒートは早い段階で使えばかなりの威力を誇っていることなどを考慮すれば、いくらほぼ無傷のメタグロスでも一溜まりもない。

メタグロス「メタアアアア！」

メタグロスは様々な要素が重なって『Vジエネレート』以上の威力となったオーバーヒートをまともに喰らってしまう。

メタグロス「メタア……………」

そして案の定、メタグロスは一撃で倒されてしまった。

審判「メタグロス、戦闘不能。バクフーンの勝ち。よって、勝者、ケンタ選手。」

審判のコールとともに拍手喝さいとともに歓声が湧きあがった。

バクフーン「バクウ……………」

それと同時に全力を出し切って大技を繰り出したバクフーンがその場に倒れこんだ。

ケンタ「バクフーン!?!」

それを見たケンタは慌ててバクフーンの元へ駆け寄った。

ケンタ「バクフーン、大丈夫か!?!」

バクフーン「バアク、バアク……………」

ケンタは心配そうに声をかける。だが一方のバクフーンは弱弱しくも返事を返した。

ケンタ「それにしてもすげえな。お前、もうかの状態でオーバーヒートを覚えるなんて……………」

バクフーン「バアクフウ。」

ケンタの褒めに、バクフーンは照れ臭そうな仕草をする。確かに万事休すの状態でもオーバーヒートを覚えたバクフーンもだが、それをよく理解したケンタも凄い。ケンタとバクフーンがお互いに褒め

称え合っているその時だった。

リラ「まさかあそこでもうかを発動されるなんて、完敗だよ。」

リラが近づいてきて、ケンタに声を掛けてきた。

ケンタ「いやあ、そちらのメタグロスもかなりのものだったぜ。正直、俺バクフーンが倒されていたら跡がなかったものな。」

リラ「？　どういう意味だい？」

ケンタ「だって、俺の残り1体はスピアーだったんだ。」

リラ「ああ、そういう意味か。」

リラはケンタの言ったことの意味を理解した。ケンタの残り1体のスピアーはむし・どくタイプ、はがねタイプのメタグロスにはどくタイプの技は全く効かない。さらに言えば、ケンタのスピアーはどくびし、ベノムシヨックといった技を持っていてこれを利用したコンボ技が使えるが、シュバルゴとメタグロスがはがねタイプの為『宝の持ち腐れ』である。だから、ケンタはバクフーンのゴリ押しでいくしかなかった。

リラ「それでも、君とポケモン達、特にバクフーンとはかなり強いきずなで結ばれてんだね。」

ケンタ「うーん、よく分からないけどそういうもんかな。てか、そういうことが分かるのか？」

リラ「僕はポケモンと心を通わせることが出来るんだ。だから、ポ

ケモン達が今出したい技が分かったり、ポケモンバトルではポケモンと心をシンクロさせてバトルすることが出来るんだ。」

ケンタ「へえ、やっぱりポケモン達との絆ってのは大事なもんだな。」

リラ「まあね。でもやろうと思えば僕みたいに心の中を読めなくても通わせるくらいなら、誰にでもできることなんだよ。」

ケンタ「確かにな。俺もバクフーンとの絆の強さならかなり自信があるぜ。なっ、バクフーン。」

バクフーン「バアク、バクウ。」

その後、ケンタとリラは談笑しながら観客席のサトシ達と合流するためにバトルフィールドをあとにした。

サトシ「すごいバトルだったな。ピカチュウ。」

ピカチュウ「ピッカ！」

デント「互いに洗練された見事なテイストのハーモニーがよりバトルを盛り上げていた感じだよ。」

アイリス「確かにすごいバトルだったわ。」

コトネ「ケンタもよくフロンティアブレーション相手に粘り勝ちしたってことね。」

このケンタとリラの1回戦第5試合は、観客席の面々をも圧倒さ

せた。

マサト「あれ？　ところでニヤースは？」

タケシ「そういえば、途中からいないな。」

マサトと一緒に観戦していたニヤースがいないことに気が付く。

ニヤース「勝手に抜け出してごめんニヤ。」

するとそこへ、当のニヤースが戻ってきた。

アイリス「もう、何処に行ってたのよ。」

ニヤース「ちよつとそこで飲み物を買ってたからちよつと遅くなっ
たニヤ。」

サトシ「本当にそれだけか？」

ニヤース「二、ニヤーを疑ってるニヤか。」

タケシ「お前達には何度も騙されているからな。」

ヒカリ「そうそう、ポケモンと話せるってことで助かるけど、完全
に信用したわけじゃないからね。」

ニヤース「・・・まあ、今までのことを考えたら仕方ニヤか。それ
よりも試合を終えたジャリボーイを迎えにいかニヤ。」

コトネ「・・・そうね、とりあえずはケンタを迎えに行かなきゃっ

てことね。」

サトシ達もケンタと合流するために観客席をあとにした。

ピカチュウ「ピイカ……………」

ピカチュウはニヤースに対して首を傾げながら、ジト目で見つめていたとか。何はともかく、決勝トーナメントも予選ステージに負けないくらいの盛り上がりを見せ、初日を終えた。

続く

以心伝心！？ ケンタVSリラ（後書き）

次回と次々回は大会から離れて争奪戦要素の話をお送りします。

ただ、サトシだけとは限りませんが・・・

やはりこうなるのか・・・(汗)(前書き)

なぜか、『ダイナマイト・プリティ・ギャル』のあの人が(汗)

前回を読んだ人ならお分かりですが・・・

やはりじつなるのか・・・(汗)

決勝トーナメントの1日目を終えて、サトシはケンタ、マサト、デント、リュウカ、そして同じく決勝トーナメントに進んだジユン、ケニヤンと仲良く宿泊施設のロビーにて談笑していた。ちなみに彼らのポケモン達はポケモンセンターで体力の回復を行っている。

マサト「サトシ、ケンタ、とりあえずは2回戦進出おめでとう。」

サトシ「サンキュー、マサト。」

なんとか2回戦進出を決めたサトシとケンタを祝福するマサトに、サトシが答えた。

ジユン「それにしても、サトシもケンタもすげえバトルだったな。」

ケニヤン「ああ、サトシの時はピカチュウ、ケンタの時はバクフーン、どっちもピンチになったときは正直ハラハラしたぜ。」

ジユン、ケニヤンもサトシ達とは別の場所で観戦していた。2人は今でもサトシ、ケンタのバトルの余韻ないしは興奮が冷めていない様子である。

ケニヤン「俺たちは2回戦には進めなかったけど、サトシとケンタが次も勝てるように応援してるぜ。」

ジユン「次、簡単に負けたら罰金だからな！」

サトシ「ああ、もちろんだ！」

ケンタ「次勝つたら、『ワールド・チャンピオン・リーグ』本戦への切符を手にすることができるとだ。負けてられないぜ。」

ケニヤンとジュンにゲキを入れられたサトシとケンタは、早速2回戦に向けて気合いが入った。

リュウカ「ところでお2人は海外のトレーナーと1回戦で当たったんですよね？」

リュウカがジュンとケニヤンに1回戦の対戦相手について聞いてみた。

ジュン「ああ、そうだけ。」

ケニヤン「まあ、負けちまったけどな。」

1回戦でジュンはダニエル、ケニヤンはディエゴというそれぞれ海外のトレーナーと対戦した。ジュンはダニエルのスピード戦術に、ケニヤンはディエゴの終始一貫した攻撃戦術に、接戦は繰り広げられたものの、惜しくも敗れてしまった。

サトシ「しかし、惜しかったな。2人ともあともう少しってところまでいったのに。」

ジュン「ああ、でも本戦に行けるチャンスはあと3回あるんだぜ。」

ケニヤン「負けたのは悔しいけど、俺達は次の予選選考会に向けてこれまで以上に特訓しないと。」

ただ、ジュンとケニヤンは敗れはしたものの、あまり悲観的にはなっていない様子だ。

デント「勝って得るものもあるけど、負けた時にこそ得るものもある。ポケモンバトルにおける重要なテイストだね。」

デントはポケモンバトルについて、自分が思うことを口に出した。

サトシ「なあ、そろそろポケモン達も回復が終わるころだし、それに腹も減って来たから、みんなで食へに行かないか？」

ジュン「おお、それいいな！」

ケンタ「そういえば、俺も丁度腹減ってたんだ。」

ケニヤン「俺も一緒に行くぜ。ポケモン達の様子も見にいかなくちゃいけないしな。」

デント「僕も行くよ。」

マサト「僕も。」

リュウカ「私も行きます。他の人たちのことも気になりますし。」

サトシ達は預けていたポケモン達を引き取るため、ポケモンセンターに向かった。そこでポケモン達を引き取った後、夕食をとるため、施設内のバイキング形式のレストランに向かった。そこにはすでに他の面々が到着しており、今夜食べる料理を取るところだった。サトシ達はプレート1つと取り皿数枚を持つと他の面々と同じように料理を取り始めた。

サトシ「うん、どれにしようかな・・・。」

ピカチュウ「ピカ・・・。」

サトシはどれを食べるか迷っていた。このバイキングは世界各国の定番料理はもちろん、デザートも豊富に並べられている。それにバイキング会場も普段サトシ達が使っているとはけた違いに広い
どれも

いかにも美味しそうな感じなので、迷うのも無理はない。

ヒカリ「サートシ。」

サトシ「ん？ なんだ、ヒカ・・・。」

サトシは振り向いてヒカリの方に顔を向けようとした時だった。

ヒカリ「はい。」

サトシ「はんむ!?!?」

ヒカリがサトシの口に何かを入れた。サトシは口の中に何が入ったのか分からず驚きの表情を見せるが、口の中に広がる味わいでそれが何なのか分かった。

サトシ「・・・これ、トマト?」

ヒカリ「当たたり〜! それで、どうかしら?」

サトシ「なんかこのトマト、野菜というよりフルーツに近い味がす

るし、それにピカチュウみたいな黄色だし。」

ピカチュウ「ピイカ。」

ヒカリ「このトマト、『ゴールデンレイブ』っていう種類で、世界では珍しいトマトなんですって。さわやかさの中にほんのりフルーティーな味わいのフルーツトマトよ。」

ポツチャマ「ポチャ！」

サトシに食べさせたトマトについて、ヒカリが丁寧に分かりやすく説明する。

サトシ「へえ、ヒカリ詳しいじゃん。」

ヒカリ「えへへ、実はあたしも今さっきそこで説明書きの看板見て知っただけだね。」

サトシ「それにしてもすごいぜ。説明書き見ただけで覚えるなんて。」

ヒカリ「ありがとう、サトシ。」

サトシとヒカリはお互いに顔を見合わせながら、楽しそうに会話をしている。特にヒカリは、サトシに「アーン」が出来たことに内心喜んでいて。ところが、そんなほのぼのとした光景をぶち壊すかのよう

ウララ「サトシさん、わたくしと一緒に食べになりますか？」

サトシ「えっ、ウララと？」

ウララの突然の誘いに驚くサトシ。

ウララ「あら、嫌でしたかしら？」

サトシ「別に嫌じゃないけど・・・。」

ウララ「じゃあ、構いませんわね。たまには、他の人との食事もあるしいかと思つて、お誘いしたのですよ。」

サトシ「でも、何で俺なんだ？」

ウララ「・・・それは、なんとなくですわ／＼」

ウララは不自然ながらもはぐらかすように答えるが、

サトシ「・・・それもそうだな。」

鈍感王（爆）サトシにとっては、そんなことどうでもよかった。だが、そこですんなり終わらないのがこの『主人公総受け』流。

ヒカリ「ちよつと、ウララ！ 邪魔しないでよ、せつかくいい雰囲気だったのに！」

ヒカリは良い雰囲気になっていたところを邪魔されたこと、サトシを奪う形で誘おうとするウララに対する怒りをぶつけた。

ウララ「あら？ あなたはサトシさんに食べさせて良い思いをしたんだから、いいでしょ。ピ・カ・リさん。」

ヒカリ「ヒィ〜カァ〜リィ〜で〜すう〜！ サトシはあたしと食事するって約束したんだから！」

サトシ「えっ？ 俺達、そんな約束したか？」

ウララ「どうせ、あなたが今とっさに思いついたことですよ。」

ヒカリ「うっ！？」

ウララに凶星を突かれ、ヒカリは成す術がなくなった。その後、他のサトシLOVEズの面々も合流（という名の争奪戦参戦）し、静かに火花を散らせながらお互い睨みあいあった。サトシLOVEズと同行したサトシにとっては、とんだ夕食時になってしまった。

食事くらい、穏やかにしとこうよ（汗） by 天の河

ケンタ「・・・サトシも大変だな。」

ケンタはその光景を見ながらただ苦笑を浮かべた。ただ、あれを止めに行くのは自殺行為に等しいのに加え、より状況を悪化させることにもつながりかねないので、見て見ぬふりしか出来なかった。そんなケンタにも、

？「ケンタは〜ん！」

ケンタを呼ぶ声がしたので、ケンタが振り向くと、

ケンタ「ア、アカネさん！？」

なんと、昼にコガネジムでケンタ対リラの試合をテレビ観戦して

いたジムリーダー・アカネがいた。

アカネ「久しぶりや、ケンタはん！」

ケンタ「どわっ!？」

アカネはケンタに近づくや否や、いきなりケンタに抱き付いた。ケンタは体勢が崩れそうになりながらもなんとかアカネを抱きとめた。

ケンタ「アカネさん、こんなところまでどうしたんですか？」

アカネ「なんやって、ケンタはんの応援に来たからやないか。」

アカネはすぐにケンタから離れると、シロガネタウンに来た理由を話した。

ケンタ「それは、ありがとございます。ところでジムの方は大丈夫なんですか？」

アカネ「それはミカはんに任せてるから大丈夫や。それにしてもこの辺、意外に複雑やな。ウチ、ここに来るまでに何度迷ったことやら……。」

ケンタ「ハハハ、そうなんですか……（それは、単にアカネさんが方向音痴なだけだと思うけど（汗））。」

実はアカネ、かなりの方向音痴である。サトシ達と初めて出会った時も、コガネシティを案内すると意気込んだものの、迷いに迷った拳句、サトシ達を大冒険へと駆り立てたのだ（笑） 某海賊漫画

風に・・・

アカネ「まあ、そないなことは置いといて、ケンタはんは食事は済ませたんかいな？」

ケンタ「いえ、今から料理をとるところですけど・・・。」

アカネ「それなら丁度えかったわ。料理ならウチがとつたる。」

ケンタ「えっ、ちょっとアカネさん!？」

アカネがケンタの右手をとり、半ば強引に料理のあるテーブルへと連れて行こうとした時だった。

マリナ「ちょっと、アカネさん!」

マリナがケンタとアカネを呼び止めた。

アカネ「なんや、マリナはんか。マリナはん、別にケンタはんの彼女さんでもないのにそんなん止める権利あるんかいな。」

アカネもマリナに呼び止められたことにムツとするアカネ。彼女にとつてはせつかくケンタと2人つきりになれると思つたのを邪魔された格好になつたのだから。前回の話でもうお分かりの読者がいるだろうが、実はアカネはケンタに対して異性としての感情を抱いている。

アカネ「ケンタはんかて、嫌がつてへんに止めんといてくれる。なっ、ケンタはん。」

ケンタ「えっ、ちょっとアカネさん!？」

アカネは笑顔で答えながら、ケンタの腕に自らの腕を絡ませた。ケンタはこういうのに慣れていないせいか、どうすればいいのかわからなかった。

マリナ（何よ、ケンタ。あんなに照れちゃって!）

マリナはケンタに近づき、

ケンタ「ちょっと、マリナまで!？」

アカネに対する嫉妬から、アカネが絡ませているのは反対のケンタの腕を自らの腕に絡ませた。

アカネ「ちょっと、マリナはん。ウチの真似せんといってくれる?」

マリナ「あら、それならアカネさんがケンタから離ればいいことじゃないですか。」

アカネ「悪い冗談やな。そない言うんやったら、マリナはんが離ればええやん。」

ケンタ「……………(汗)」

バクフーン「バクウ……………」

ケンタを間に挟みながら、アカネとマリナは静かに火花を散らす。ケンタはサトシ同様成す術がなく、あまりの雰囲気冷や汗を垂らしている。パートナーのバクフーンは完全に蚊帳の外である。

男A「ああ、俺のマリナちゃんが．．．。」

男B「ヒカリちゃん、ハルカちゃん．．．。」

男C「アイリスちゃんやコトネちゃんまで．．．。」

男D「さらには、ジムリーダーのカスミちゃんやアカネさんまでもが．．．。」

男E「ハアハア．．．。」

一人興奮してるバカはほつといて、多方面からこのような声が飛び交い始めた（特に男性）。声の内容からして、トレーナー、コーディネーター、ジムリーダーとしての人気が絶大である彼女たちの熱狂的なファンの部類だろう。

男A・B・C・D（（あのサトシとケンタって奴、ぶっ殺す！））

男E（ハアハア、ヒカリたん、マリナたん．．．。）

一人興奮して妄想に浸っているバカはほつといて、いつの間にか多方面からサトシとケンタに対する殺意が芽生えていた。いわゆるモテない男共の醜い嫉妬である。とまあ、こんな感じでグダグダな食事風景だったのである。

続いて久々の後書きショー

やはりいつなるのか・・・(汗)(後書き)

マリナ「ちょっと、作者！　あなた、ケンマリ派じゃなかったの！
？」

天の河「そうだが、ただ普通にすすめるのは俺のガラじゃないからな。てなわけで、ケンタにも争奪戦を味あわせてみた。」

マリナ「全く、余計なことしないでよ！」

アカネ「別にええやないか。それともケンタはんを自分のものにする自信がないんかいな？」

マリナ「そ、そんなわけじゃないですよ！　ケンタは誰にも渡しませんから！　それがたとえアカネさんでも！」

アカネ「ウチかて誰にもケンタはん譲る気ないで！　マリナはんには負けへん！」

天の河「さてサトシ争奪戦が激しくなる中、ケンタ争奪戦も勃発した今作品、次回もお楽しみに！」

大胆！？（前書き）

またまた、暴走キャラが・・・

というよりも今作品何回目だ、この描写！？ 作者のお前が言っな
！

大胆！？

サトシ争奪戦がより一層激しさを増し、さらにはケンタ争奪戦も勃発する中、サトシ達は各々食事をとっていた。もちろん、サトシは円卓にサトシLOVEズに囲まれながら、ケンタはマリナとアカネに挟まれながらの食事である。ちなみにサトシの両脇には、じゃんけんで左側にカスミ、右側にヒカリが座っている。他のサトシLOVEズの面々は羨ましそうに2人を見ていたとか・・・

サトシ「そういえば、コンテストの方はどうなったんだ？」

ケンタ「あつ、俺も気になってたところなんだ。」

サトシとケンタは先程聞きそびれたカスミ、ハルカ、ヒカリ、ウララが出場しているコンテスト部門の様子について聞いてみた。

ヒカリ「あたしは2回戦に進出したわ。」

カスミ「あたしも2回戦進出よ。」

ハルカ「わたしはノゾミと当たって、負けちゃったけどね。」

サトシ「そっか、ハルカは残念だったな。」

ハルカ「今回負けちゃったけど、まだチャンスはある。次に向けて頑張るのみよ！」

ハルカはそれ程苦にはしていないようだ。

ヒカリ「そういえば、ウララ。ウララは海外のコーディネーターと当たったんだよね？」

ヒカリはウララの1回戦の対戦相手について聞いてみた。ウララは1回戦で海外から来たコーディネーターと対戦していたのだ。

ウララ「ええ、でもなんとか善戦はしましたが、序盤は全く歯が立ちませんでした。相手のドレディアにうまくしてやられたわ。」

ウララはちょうのまい、はなびらのまい、フラフラダンスと、踊り技三つを組み合わせたパフォーマンス攻撃の術中にはまってしまい、善戦はしたものの惜しくも1回戦敗退となった。

ケンタ「マリナはウララと1回戦で当たったその海外コーディネーターと2回戦で対決するんだろ？」

マリナ「ええ、そうよ。ウララのコンテストバトルは間近で見っていたから、余計に緊張してるわ。いくらわたしでも、これほど緊張したことなんてなかったわ。」

マリナは2回戦でウララを破った相手に対して、かなりのプレッシャーを感じているようである。

ケンタ「バトル部門もだけど、コンテスト部門も続々と海外の強敵が現れてるみたいだな。でも、マリナなら大丈夫だよ。」

サトシ「ヒカリやカスミもだぜ。俺達は見に行けないけど、応援してるぜ。」

サトシとケンタが2回戦へ進出した面々を元気づける。

マリナ「ありがとう、サトシにケンタ。」

カスミ「ここで躓いてちゃだめね。」

ヒカリ「勝ったからにはもっと上を目指さなくちゃ。」

ウララ「わたくしも今回は負けてしまいましたが、次に向けて頑張りますわ。」

ハルカ「私も。」

サトシ「みんなその意気だぜ！」

全員、「ワールド・チャンピオン・リーグ」、「ワールド・チャンピオン・フェスティバル」の本戦出場に向けて意気込んだところで食事も一通り済ませたので、一同解散した。しばらくすると、サトシとケンタは入浴の準備をして、大浴場前の談話コーナーに足を運んだ。

サトシ「バトル部門もだったけど、コンテスト部門も世界中の強敵が続々と出始めてるんだな。」

ケンタ「確かに、この予選会は『ワールド・チャンピオン・リーグ』、『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』出場がかかっているもんな。」

サトシ「今までに見たこともないトレーナーや、俺がシンオウリーグで戦ったタクトさんのように伝説のポケモンを使うトレーナーまで俺達のライバルになるわけか。もちろん、今までに出会ったライ

バルトレナーたちもだけどな。」

ケンタ「俺達の実力が世界でどれ程通用するのはまだ分からない。それでも、全力を尽くして戦うのみだ。」

サトシ「もちろんだ。ケンタ、お互い頑張ろうぜ！」

ケンタ「おうよ！ それともし、俺とサトシがバトルすることになったら、その時は負けないぜ！」

サトシ「俺だって、負けないぜ！」

サトシとケンタはこの予選会で全力を尽くすことを誓い合ったとともに、この『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』予選会・本戦での再戦出来ることを願った。

アカネ「あれ？ ケンタはんとサトシはんやないか。」

？「えっ、サトシさん？」

？「サトシ君？」

サトシとケンタが会話しているところへ、アカネがやって来た。しかも、アカネの後ろにはもう2人の女性がいた。

サトシ「アカネさん、それにエリカさんとミカンさんまで。」

アカネの後ろにいたのは今作品久々の登場のエリカと、ジヨウトのアサギシティのジムリーダーで今作品初登場のミカンだった。

エリカ「幾日ぶりですわ、サトシさん。」

ミカン「サトシ君とは、シンオウで出会って以来ね。それとケンタ君も久しぶり。」

サトシ「エリカさん、ミカンさんお久しぶりです。」

ケンタ「お元気そうで何よりです。」

サトシとケンタ、エリカとミカンは再会の挨拶を交わす。

アカネ「再会の挨拶はそれくらいにしといて、サトシはんとケンタはんはそこで何してたんや？」

アカネが4人の間に割って入り、サトシとケンタが談話コーナーにいる理由を聞いた。

サトシ「俺達はただ、ここで『ワールド・チャンピオン・リーグ』について話してただけです。」

ケンタ「エリカさんとミカンさんはどうしてここにいるんですか？
それもアカネさんと一緒だなんて。」

今度はケンタがエリカとミカンにシロガネタウンに来た理由、さらにどうしてアカネ、エリカ、ミカンの面子なのかを聞いてみた。

ミカン「私達はアカネに『いい温泉があるから。』って聞いて、ここに来たの。」

エリカ「わたくしも同じ理由ですわ。そんなにいい温泉なら、是非

と思いでまして。」

ミカン「簡単に言えば、観光かしら。まあ、丁度予選選考会の時期と重なったのは偶然ね。」

エリカとミカンはアカネに誘われてシロガネタウンに来たようだ。

アカネ「ウチとエリカはん、ミカンはんは昔からの付き合いなんや。時々、こう集まってはジムリーダー同士の交流を深めてんねんで。」

サトシ「へえ、そうだったんですか。」

ケンタ「いいですね。ジムリーダー同士の交流って。」

エリカ「ええ、実際こう集まるだけでも話は弾みますし、楽しいものですね。」

サトシとケンタはアカネ、エリカ、ミカンに交友関係があることに少々驚きを見せた。

アカネ「今のサトシはんとケンタはんの様子を見たら、まだお風呂には入ってへん見たいやな。」

サトシ「ええ、今から入るところです。」

アカネの問いかけに丁寧に答えるサトシ。だが、次に放たれたアカネの発言はその場の雰囲気を一変させるものだった。

アカネ「それならウチらと一緒に入らへん？」

サトシ・ケンタ・エリカ・ミカン「……はい!?」「」「」

他の4人は一瞬キョトンとする。

アカネ「さっき聞いた話やけど、サトシはんとケンタはん、この間ボディーガードで女の子達と一緒に風呂に入ったゆう話やんか。」

アカネは、サトシとケンタがボディーガードという名目で女湯に入った(というか入らされた)ことを知っていた。

ケンタ「アカネさん、その話誰に聞いたんですか?」

アカネ「さっき会ったシロナっていう人から。」

サトシ・ケンタ「……」

どういった経緯で出会ったのか定かではないが、アカネはこの事実をシロナから聞かされたようだ。そのことに関してはサトシとケンタはあまり追求しなかった。

サトシ「でもさすがに2回目は。」

ケンタ「そ、そうですよ。」

サトシとケンタは頑なに断る。ただでさえ、あの時は理性を保つのに精いっぱいだったのだ。当然といえば当然である。

アカネ「そっか、うちらとは入れへんねや……。」

エリカ「それもそうですよね……。」

アカネといつの間にかアカネ側についたエリカはがっかりした表情を浮かべる。アカネに関しては今にも泣きそうな顔をしている。

サトシ「アカネさんとエリカは良くても、ミカンさんはさすがに許してくれませんよ。」

ケンタ「ですよ、ミカンさん。」

サトシとケンタはミカンの返答を待った。

ミカン「わ、私はサトシ君とケンタ君だったら別に構わないけど。」

サトシ・ケンタ「……………」

頼みの綱がなくなり、サトシとケンタはアニメヒロインズ+との入浴直前と同じ状況に立たされた。

ケンタ「……………」

サトシ「だから、顔を上げてください。」

アカネ「ほんまか！ ケンタはん、太っ腹や！」

エリカ「さすがはサトシさんですわ。よく決断してくれました。」

ケンタ・サトシ「……………」

ケンタとサトシはアカネとエリカのあまりの早さの立ち直りっぷりに、言葉を失った。どうやら、アカネとエリカの落ち込んだ表情

は、泣き脅しだったようだ。恐るべし、アカネとエリカ（汗）

アカネ「ほな、ウチらは先行って準備してくるさかい。」

エリカ「お待ちしておりますわ。」

アカネとエリカは上機嫌で脱衣場へと向かった。

ミカン「・・・ごめんね、サトシ君にケンタ君。あの2人、一度暴走すると止めるのが難しいから。」

サトシ「アカネさんはなんとなく分かってましたけど、いつもお淑やかなエリカさんは意外でした。」

ケンタ「もうどうしようもできないことですから、謝らないでください。」

この後、サトシとケンタは念のためにジュンサーに聞いてみたが、期待した答えは帰って来ず、むしろ快諾されたとか・・・。本当にそれでいいのだろうか・・・ by 天の河 作者のお前が言うな！

そして・・・

アカネ「はあく、ほんまええ湯やわあく。」

エリカ「そうですね、旅の疲れを癒すにはとても良いですわ。」

ミカン「アカネ、エリカ、あなた達楽しんでるでしょ．．．。」

完全に温泉旅行気分のアカネとエリカに、ただ呆れるしかないミカン。

アカネ「まあまあ、ミカンはんもそう固いことゆつたらあかんで。」

エリカ「そうですね。わたくし達は楽しむためにここまで来たのですから。」

ミカン「それはそうだけど．．．。」

ミカンはゴーイング・マイ・ウェイ（爆）を貫く2人についている自信がなかった。

エリカ「それはそうと．．．。」

アカネ「サトシはんにケンタはん、なんでそないにウチらと離れてんねん？」

アカネとエリカは自分達とは離れて入浴しているサトシとケンタに目を向けた。

サトシ「えっ！？ だって．．．。」

ケンタ「そ、それは．．．。」

サトシとケンタは正直、目のやり場に困った。前回は自分達と同

年代の女子との入浴だったが、今回は自分よりも年上のいわばお姉様世代の女性との入浴である。離れて入浴しない限り、理性がいくつあっても足りない状況だ。

エリカ「そんなに離れてては、わたくし達とお話しできませんわ。」

アカネ「2人が来ないんやったら、ウチらから来させてもらうで。」

痺れを切らしたのかアカネとエリカは、サトシとケンタの方へ近づいた。

アカネ「なあ、ウチらのことどう思う？ ケンタはん．．．。」

エリカ「サトシさん．．．。」

アカネとエリカは少々上目遣いでサトシとケンタを見つめる。普通の男なら、即陥落であろう。

ケンタ「ど、どうって．．．。」

サトシ「俺達どう反応すれば．．．。」

ただ、こういう事情には疎い2人には、あまり効果がなかった。ただ、目のやり場には困っていたが．．．

アカネ（なんや、がっかりやわ．．．。）

エリカ（これはかなり重症のようですね．．．。）

アカネとエリカはサトシとケンタに期待通りの反応が得られず、

少々落ち込んだ。エリカに関しては、サトシの鈍感ぶりにかなり驚いていたとか・・・

アカネ「ウチら、サトシはんとケンタはんにこういうふうになかなか会える機会少ないやん？」

ケンタ「ええ、一応俺とアカネさんはポケギアの番号交換してますけど・・・。」

アカネ「でも実際会うのはそこまで多いわけやないしな。ウチ、もつとケンタはんのこと知りたいねん。」

エリカ「わたくしもサトシさんの旅の話とかもお聞きしたいですわ。」

サトシ・ケンタ「は、はあ・・・。」

アカネとエリカは徐々にサトシとケンタとの距離を縮めていく。

アカネ「ケンタはん・・・。」

エリカ「サトシさん・・・。」

サトシ・ケンタ（・・・ゴクリッ。）

サトシとケンタは思わず生唾を飲んだ。アカネとエリカとの距離はあともう少しで唇が触れるか触れないかの距離にまで近づいている。いろいろな意味でマズイ！

アカネ・エリカ「……………」

サトシ・ケンタ「……………」

ミカン「はい、ストップ！」

アカネ「って、ミカンはん!？」

エリカ「あら……………」

状況を察してミカンがアカネとエリカを止めに入った。

アカネ「なんやねん、ミカンはん。せつかくええ雰囲気だったのに。」

エリカ「そうですね、出来れば邪魔しないで欲しかったですわ。」

ミカン「いやいや、今のは絶対10歳の男の子にすることじゃないでしょ!」

アカネとエリカに対して、激しくツッコミを入れるミカン。

サトシ・ケンタ（・・・ナイス、ミカンさん。）

サトシとケンタはこのままいけば何が起こるのか分からなかったが、よろしくないことが起こりそうだったのは予想していたので、とりあえず暴走気味のジムリーダー2人を止めてくれたミカンに感謝した。

？「あれ、サトシ？」

？「嘘！？ サトシ？」

？「えっ、サトシ君がなんで女湯に入ってるの！？」

そこへ、バッドタイミングでサトシのことを知っている3人が入ってきた。

サトシ「ノゾミ、ミズキ！ それにミノリも！」

その3人とは、この予選選考会コンテスト部門決勝トーナメントでハルカに勝利して2回戦に進出したノゾミ、本日のサトシの対戦相手だったミズキ、そしてそのミズキの妹のミノリだった。

ノゾミ「ところで、この状況は一体・・・。」

ミズキ「まさか、サトシにそんな趣味が・・・。」

サトシ「ご、誤解だ、ミズキ（汗）」

サトシはノゾミとミズキに疑いの目を向けられ、慌てて今までの経緯を説明した。

ノゾミ「そういうことだったんだね。」

ミズキ「それにしても、アカネさんとエリカさんでしたね。サトシとケンタに何やってるんですか（汗）」

ノゾミとミズキはサトシの必死の弁解により、現在のこの状況を把握した。ミズキはサトシとケンタに混浴をすすめたアカネとエリカに心底呆れていた。

ミカン「3人とも、驚かせちゃってごめんね。ほら、アカネとエリカも。」

アカネ「ノゾミはん、ミズキはん、ミノリはん、びっくりさせてもうてごめんな。」

エリカ「わたくしも少々悪ノリが過ぎましたわ。」

アカネとエリカはミカンに促されるように、ノゾミ、ミズキ、ミノリに申し訳なさそうに謝る。

ノゾミ「まあ、普通こんなことないですし多少は驚きましたけど、あたし達は気にしてないので顔をあげてください。」

ミズキ「それに、サトシの人柄の良さは私も知ってますし、ケンタもサトシ同様悪い人でもなさそうですしね。アカネさんとエリカさんの気持ちもわかります。」

「ノゾミ」それに、混浴なんてめったにできることじゃないですしね。」

ミズキ「まあ、サトシとケンタなら良いかなって。」

サトシ・ケンタ「……………」

ノゾミとミズキの一言余計な発言に、サトシとケンタは言葉を失った。ノゾミとミズキはどんな経緯で出会ったのかは定かではないが、この2人、完全に意気投合しているようである。

「ミノリ（ど、どうしよう。サトシ君と一緒にのお風呂だなんて……………」

ノゾミとミズキは問題なかったが、ミノリは大丈夫ではなかった。友好的な性格の姉・ミズキに対し、妹のミノリは引っ込み思案で人見知りが激しい性格である。ただでさえこのような性格なのに、男性と混浴というのは以ての外である。

サトシ「ミノリ？」

ミノリ「ひ、ひゃい!？」

サトシは久々に出会ったミノリに声をかける。ちなみにサトシとミノリの初対面はミズキと同時期である。

ミノリ「ひ、ひ、久しぶり、サトシ君！ 私は大丈夫だよ！」

サトシ「とてもそうには見えないけど……………」

ミノリの慌てようにサトシは余計心配になる。現在、ミノリの頭の中では様々な思考が錯綜している。

サトシ「具合でも悪いんじゃない？」

サトシがミノリの具合を見ようと近づぐ。

ミズキ「あっ、サトシ。それ以上近づいたら……。」

ミズキはこの後の展開が読めたのが、サトシを制止しようとするが、

ミノリ（さ、サトシ君が……。）

シューウウウウウ、ボタン！

サトシ「み、ミノリ！？」

ミノリはこういったのに対する免疫がないせいか、恥ずかしさのあまり、急激に逆上させて気絶した。

ミズキ「（あちゃ〜）ノゾミ、ごめん。ミノリを運ぶの手伝って。」

ノゾミ「あっ、うん。分かったよ。」

アカネ「あのミノリっちゆう子、あかんことになってるやないけ。」

ケンタ「とりあえず、俺たちも上がりましょう。」

ミカン「ええ。」

エリカ「その方が良さそうですわね。」

ミズキとノゾミは気絶したミノリを抱きかかえて、脱衣場へと運んだ。サトシ、ケンタ、アカネ、ミカン、エリカはこの状況下ではさすがに風呂にはいり続けるのは困難なので、上がることにした。

ミノリ「ん、んん。はっ、っはっ。。。。」

エリカ「大浴場のすぐそばの談話コーナーですわ。」

ミズキ「ミノリ、入浴中に逆上せて気絶したのよ。」

ミノリ「あっ、そうか。私、急にサトシ君に声を掛けられて……
うっ！？」

ミノリは気絶する前のことを思い出す。そして、また急に赤面する。

アカネ「ミノリはん、大丈夫かいな。さっきも、まだ入ったばかりやっつのに逆上せて。」

アカネはミノリのことさらに心配になる。

ミズキ「実はこのミノリ。引つ込み思案で人見知りが激しいんです。」

ノゾミ「えっ、さっきあたしと話してた時は普通に接してたよね？」

ミズキ「うん、だけどさっきの状況を考えてみて。」

ノゾミ「あっ、サトシとケンタか。」

ノゾミは先ほどの状況を思い出し、納得した。

アカネ「……ごめんな。こうなったのも、ウチらがサトシはん、ケンタはんと一緒に入ろう言っただからや。」

エリカ「わたくしからも謝りますわ。」

ミカン「私も止めていればこんなことには……。」

アカネとエリカはさらに罪悪感を感じ、ミノリに謝る。

ミノリ「あ、謝らないでください。済んだことは仕方ないんですから．．．。」

ミノリは謝る3人を見て、申し訳なさを感じた。

ミノリ「ただ、サトシ君の顔が近くに來たから．．．。」

するとミノリは先程の急な赤面から、今度はほんのりと頬を赤く染めて話す。その様子を見たノゾミは、

ノゾミ「（ボソツ）ねえ、ミズキ。まさか、ミノリもサトシの事を．．．。」

ミズキ「（ボソツ）うん。ミノリも私たちと同じでサトシが好きなの。」

ノゾミ「そう．．．（サトシ、アンタも罪作りな男だね．．．）」

ノゾミはまた恋のライバルが増えて、ため息をつく。

エリカ「あら、サトシさんったらモテモテなのですね。」

アカネ「そんな悠長なこと言うてええんかいな。エリカはん、アンタもサトシはんが好きなんやろ。」

エリカ「ええ、サトシさんは優しい殿方ですから．．．。」

ミカン「・・・サトシ君も大変ね。」

ミカンはこれからより一層激しくなるであろうサトシ争奪戦の今後を心配した。

サトシ「大丈夫か、ミノリ？」

ケンタ「急に気絶したからびっくりしたぜ。」

そこへ、サトシとケンタが浴衣姿で女性陣のもとへやって来た。

ミノリ「う、うん、今はだいぶ落ち着いたわ。ごめんね、私のせいで心配させちゃって。あつ、それとサトシ君、2回戦進出おめでとう。」

サトシ「あ、サンキュー、ミノリ。」

ミノリは気を取り直して、サトシの2回戦進出を祝福した。

ミズキ「次のサトシの対戦相手は、あのキュレム使いのトレーナーだっけ。かなり手ごわい相手になるだろうけど、頑張って。」

サトシ「もちろんだぜ。ミズキの分も全力を尽くして俺は戦う。」

ミズキ「あと、ミノリも人の事ばかりじゃなく自分の事も気にしてね。」

ミノリ「分かってるよ、お姉ちゃん。」

ノゾミ「そういえば、ミノリの次の相手はヒカリだったね。」

ミノリはコンテスト部門の1回戦を勝ち抜き、次の2回戦ではヒカリと対戦することになっている。

サトシ「ああ、ヒカリとミノリか。どっちも知ってるから複雑だな。。。。」

ケンタ「その気持ち分かるな。俺もコトネとジュンイチの試合じゃ同じこと思ったもんな。」

ケンタは予選プールのコトネ対ジュンイチ戦の観戦中で今のサトシと同じ心境になり、デントからバトルはただ観戦するだけじゃなく、楽しむことも大事だということを教えられたという経緯がある。

ケンタ「まあ、あまり気負いせずに俺達は俺達の役目を果たすべきだと思うぜ。」

ケンタはデントに教わったようにサトシに言う。

サトシ「それもそうだな。よし、明日も勝てるように頑張るぞ！」

サトシは明日に向けて気合を入れ直した。

エリカ「その意気ですわ、サトシさん。」

アカネ「みんな応援してるさかい、頑張ってるな。」

ミカン「ふふふ、明日が楽しみね。」

一同、明日の2回戦への意気込み、楽しみを心に秘めながら、そ

れぞれ自分たちの就寝部屋へと戻っていった。そして、夜が明けて、バトルもコンテストも白熱した2回戦が幕を開ける・・・

続いて後書きシヨ―

大胆！？（後書き）

ミノリ「／／／／／／／／／／／／／／／／」

ノゾミ「これ、どうすんのさ。作者。」

天の河「大丈夫！」

ノゾミ「大丈夫って（汗）」

ミズキ「ただでさえ、ミノリは引つ込み思案なのに……。全く、ミノリにとってはとんだ初登場になったじゃないのよ（汗）」

天の河「まあ、俺だつてこれ書いた時は申し訳ないと思ってるんだから。」

ノゾミ・ミズキ「……。絶対、思っでないでしょ。」

天の河「あつ、バレた？」

ミズキ「読者からクレーム来ても知らないよ。」

天の河「それ覚悟でこんなの100話以上も書いてるんだから、これからも書き続けていくぞ！」

ノゾミ「はあ、もう勝手にしなさい。こんな作者の作品ですが、これからもよろしく願います。」

コンテストも負けられない！（前書き）

今までバトル部門ばかりの話でしたが、今回はコンテスト部門中心の話です。

決勝トーナメント2回戦に進んだヒカリ……。ミズキの妹・ミノリにどう挑むのだろうか……

コンテストも負けられない！

予選選考会も決勝トーナメント2日目を迎え、さらなる盛り上がりを見せていた。コンテスト部門の会場では、パートナーのポツチャマを抱きかかえたヒカリが一足先に到着していた。

ヒカリ「ポツチャマ、あたし今日も頑張って勝ち進んで見せるから応援しててね。」

ポツチャマ「ポチャ！」

ヒカリはベスト4進出に向けてさらに自信をのぞかせた。ちなみにベスト4に進出すれば無条件で『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』本戦への出場権を獲得できる。そういった面で今日の2回戦は、『絶対に負けられない戦い』である。

？「あ、あの・・・、ヒカリさんですよ。」

ヒカリ「だ、誰？」

誰かがヒカリを呼ぶ声がしたので、ヒカリはポツチャマを抱きかかえた状態で振り向いた。

？「!？」

そこにいたのは茶色のツインテールの髪型、白い服の中には赤のシャツを着用、下は白のスカートを履いた年齢はヒカリと同じくらいの少女が立っていた。少女はヒカリが振り向いた途端、突然ヒカリから離れ、物陰に隠れたのだが・・・

ヒカリ「あ、あの隠れてないけれど．．．。」

ポツチャマ「ポチャア．．．。」

少女は隠れたつもりでいたが、物がある方向とは逆の方向に体を向けていて丸見えだった。例えば、某海賊漫画のトナカイ船医（声がピカチュウの）を想像されると良い。

？「ハア、ハア、先程は取り乱してごめんなさい。」

ヒカリ「どう、落ち着いた？」

？「はい、私引つ込み思案な性格で、人前では緊張してしまうんです。少しは直そうと努力しているのですが．．．。」

ヒカリ「そうだったんだ．．．。でも無理しなくても大丈夫よ。」

？「あ、ありがとうございます。コンテストの時はいつもどおりに出来るんですけどね。」

少女は人前では緊張するが、コンテストの時はそれほどまでに緊張しないと云う。

ヒカリ「コンテスト？ てことはあなたもあたしと同じポケモン・コーディネーター？」

？「はい。申し遅れましたが、私ミノリと言います。」

その少女はバトル部門の1回戦でサトシと当たったミズキの妹・

ミノリだった。

ヒカリ「ミノリ……。今日のあたしの対戦相手！」

ミノリ「はい。今日はよろしくお願いします。」

ミノリは丁寧にお辞儀をする。

ヒカリ「あっ、自己紹介が遅れたわ。さっき名前言ってたから知ってると思うけど、あたしはヒカリ。そしてこっちは、パートナーのポッチャマ。」

ポッチャマ「ポッチャマ！」

今度はヒカリとポッチャマが自己紹介をする。

ヒカリ「それと、あたしの事はタメ口でいいわ。年齢もそんなに変わらないみたいだし。」

ミノリ「えっ、いいんですか!？」

ヒカリがタメ口で良いと言ったので、多少驚きを見せるミノリ。

ヒカリ「ええ、いいわよ。今日はよろしくね、ミノリ。」

ミノリ「こちらこそよろしく、ヒカリ。」

ヒカリとミノリは今日のコンテストバトルを全力でぶつかり合うことを誓い、早速親友同士になった。そして、ヒカリとミノリによる2回戦第1試合の開始時刻となる。

ヒカリ「いくわよ、トゲキッス！」

まずはヒカリがトゲキッスをフィールド上に出す。

トゲキッス「トウウウウス！」

トゲキッスはボールから出るや否や、ゆっくりと空中を旋回した。しばらくして地上に着地すると、

トゲキッス「トウウウス！」

大きく羽根を広げて、優雅にポーズを取った。気品あふれるトゲキッスらしい登場の仕方だ。

ミノリ「出番です、ピジヨット！」

次にミノリがピジヨットをボールから出した。

ビュウウウウウウー！

ボールから出たのはピジヨットではなく、1つのたつまきだった。しばらくすると、

ピジョット「ピジョットオオオ！」

たつまきを掻き消すかのように、ピジョットが姿を現した。何とも斬新な登場の仕方である。この2匹の登場に会場は歓声とどよめき起きた。ヒカリもミノリも、まずは観客の心をつちりと掴んだようだ。そしてヒカリとミノリの戦いの火蓋が切られた。

ミノリ「ピジョット、あたり一面にたつまき！」

ピジョット「ピジョ！ ピジョ！ ピジョットオオオ！」

ピジョットはあたり一面にたつまきを発生させ、トゲキッスの身動きを封じにかかった。激しいたつまきがトゲキッスの周りを取り囲む。

ヒカリ「トゲキッス、かわして。」

トゲキッス「トウス、トウウウウス。」

だが、トゲキッスは持ち前の柔らかな動きを使って、たつまきを次々とかわしていく。その光景は、優雅にしつとりと踊っているようにも見える。これにより、ミノリのポイントが削られる。

ピジョット「ピジョットオオオ！」

しかし、ピジョットはそれに動じることなくでんこうせつかとつばめがえし、さらにはスピードを組み合わせた攻撃でトゲキッスに近づく。

トゲキッス「トウウウウス！」

ピジヨットのスピードに翻弄されたトゲキッスは、そのままピジヨットの攻撃を喰らってしまう。ヒカリのポイントも削られる。

ヒカリ（あの、ピジヨット。はやい……。）

当のヒカリもピジヨットのスピードに圧倒されていた。

ヒカリ「（でも、負けてられないわ！）トゲキッス、エアスラッシュユ！」

トゲキッス「トウウウウスウウウウ！」

トゲキッスはすぐに体勢を立て直し、エアスラッシュでピジヨットに攻撃を仕掛ける。

ミノリ「たつまきで受け流して！」

ピジヨット「ピジヨオオオオ！」

ピジヨットはたつまきを利用して、エアスラッシュを簡単に受け流した。

ヒカリ「ピジヨットは何処？」

トゲキッス「トウス？」

たつまきが晴れると、ピジヨットはトゲキッスの目の前から姿を消した後だった。

ヒカリ「!? トゲキツス、上よ！」

トゲキツス「トウス！」

ピジョットはそらをとぶで空高く舞い上がっていた。そして、なにやら力を吸収している体勢に入っている。

ミノリ「ピジョット、ゴッドバード！」

ピジョット「ピィィィィィジョオオオオ！」

ピジョットが凄まじい勢いとスピードのゴッドバードで、トゲキツスに襲い掛かる。

トゲキツス「トウウウウス！」

ピジョットのスピードに翻弄されていたトゲキツスが避けきれずもなく、そのまま大ダメージを受けた。これにより、大幅にヒカリのポイントが削られる。

ヒカリ（このままじゃ・・・。）

ヒカりは引く手あまたの状態だった。その後もピジョットのスピードを生かした攻撃に圧倒され、ヒカりはさらにポイントを削られる。ただ、そんな状況下でもトゲキツスが粘りを見せ、徐々にミノリのポイントを削っていった。

ヒカリ「（こうなったら、一か八か！）トゲキツス、空高く飛び上がって！」

トゲキツス「トウウウウス！」

トゲキツスは空高く飛び上がった。

ミノリ「後を追って、ピジヨット！」

ピジヨットがトゲキツスの後を追いつ、空高く飛び上がる。

トゲキツス「トウウウウス！」

ピジヨット「ピジヨットオオオオ！」

2体はみるみるうちに上昇していく。だが、スピードで有利なピジヨットがトゲキツスとの距離を徐々に縮めていき、遂には追いついてしまった。

トゲキツス「トウウウウス！」

だが、トゲキツスはそれに動じることなく、飛び続けていた。さらには両手で光り輝く球体を作り出している。

ミノリ「!?」ピジヨット、今すぐトゲキツスから離れて！」

ピジヨット「ピジヨ!?」

ミノリは何かに気づき、ピジヨットを急停止させてトゲキツスから離れるよう指示した。だが、時すでに遅し……

ヒカリ「トゲキツス、ピジヨットにはどうだん！」

トゲキッス「トウウウウ！」

トゲキッスは急停止し、その反動を利用して上昇中に作っていたはどうだんを持ち上げ、そして、

トゲキッス「スウウウウウウウ！」

ピジョット目がけて、バスケのダンクシュートの要領で投げた。

ピジョット「ピジョオオオオオ！」

至近距離の攻撃に避けられるはずもなく、ピジョットははどうだんをまともに喰らった。そして、そのままはどうだんとともに落下し、地面に叩きつけられた。

ピジョット「ピジョオ．．．。」

辛うじてピジョットは立ち上がった。その後もトゲキッス、ピジョット、両者譲らずの攻防が続き、残りのポイントも時間もあとわずかとなっていた。

トゲキッス「トウウウウ．．．。」

ピジョット「ピジョオ．．．。」

トゲキッス、ピジョット、お互いに向き合う形でエネルギーを吸収し始めた。

ヒカリ「トゲキッス．．．。」

しばらくして、土煙が晴れ、

トゲキッス「トウス……。」

ピジョット「ピジョオ……。」

トゲキッス、ピジョットともにまだ立っていた。するとここで、タイムアップを迎えた。

トゲキッス「トウス……。」

ピジョット「ピジョ……。」

ヒカリ「トゲキッス！」

ミノリ「ピジョット！」

タイムアップと同時に死力を尽くしたトゲキッス、ピジョット、どちらも倒れこんだ。それを見たヒカリとミノリが慌ててそれぞれのポケモンのもとへ駆け寄る。

ヒカリ「良くやったわ、トゲキッス。」

ミノリ「あなたもがんばったね、ピジョット。」

トゲキッス「トウス……。」

ピジョット「ピジョオ……。」

死闘を繰り広げた2体を労うヒカリとミノリ。トゲキッスもピジ

ヨットも、弱弱しくも返事を返した。そして、ヒカリとミノリは改めてスクリーンを見上げた。結果は、ミノリが僅差でヒカリのポイントを上回っていた。

ミノリ「嘘！？ 私、勝っちゃった。やったよ、ピジヨット。」

ピジヨット「ピジヨオ。」

ミノリはピジヨットを抱きしめ、勝利の喜びを噛み締める。

ヒカリ「おめでとう、ミノリ。負けたのは悔しいけど、良いコンテストバトルだったわ。ありがとう、ミノリ。」

ミノリ「こちらこそ、ありがとう。ヒカリ。」

ヒカリとミノリは死闘を繰り広げた者同士称えあい、握手を交わした。このヒカリとミノリのコンテストバトルは、『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』史上稀にみる凄まじいバトルとして語り継がれることになった。

続いて後書きシヨ

コンテストも負けられない！（後書き）

天の河「2人とも、お疲れさん。」

ヒカリ「いいコンテストバトルだったわ。」

ミノリ「さすがは『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の予選選考会ね。私達のもだったけど、他のもハラハラしたわ。」

天の河「まあ、世界中から多種多様のコーディネーターが集まる4年に1度の世界大会という設定だからな。これくらいやらないと盛り上がらないと思って。」

ヒカリ「それと、リア様やバトル部門のタクトさんもだったけど伝説のポケモンを使うコーディネーターやトレーナーが続々と出てくるわね。」

天の河「それに関してはさっきも言ったけど、4年に1度の世界大会だ。観客をアツと言わせるほどの展開があっても不思議じゃないだろう。伝ポケ使い勢揃いもその一貫だ。」

ヒカリ・ミノリ「なるほど。」

天の河「さて、2人がご理解いただけたようで今回はこの辺でお開きにいたします。次回もお楽しみに！」

キュレムのトレーナー、アルフレッド（前書き）

アイリスのドリユちゃん・・・もといドリユウズがタクトのダークライ相手に大健闘！

そして、キュレム使いのトレーナー・アルフレッドが今作品初登場！

キュレムのトレーナー、アルフレッド

ヒカリとミノリの2回戦第1試合が終わったその頃、バトル部門ではアイリスがダークライ使いのタクトと2回戦を戦っていた。

アイリス「．．．やっぱり、ダークライは強敵ね。」

アイリスはかなり苦戦していた。タクトが一体目からダークライを出して、アイリスのエモンガ、キバゴを次々と倒して、あっという間に窮地に立たされていた。

アイリス「ドリュウズ．．。」

ドリュウズ「リュウ、リュウズ．．。」

アイリスは勝機が見いだせないでいた。だが、ドリュウズがまだ戦いたい意思を示している為、最後まで全力でダークライに立ち向かっている。ドリュウズも自分がかろう相手ではないと分かっているが、強い相手とバトルしたい一心でダークライに立ち向かっている。

アイリス「ドリュウズ、ドリルライナー！」

ドリュウズはダメージを受けながらも、巧みに動きながらダークライにダメージを与えていき、ドリルライナーでダークライにトドメを刺した。

審判「ダークライ、戦闘不能。ドリュウズの勝ち！」

ドリユウズがダークライを倒したことに観客席から歓声が沸き起こった。この瞬間、サトシに続き、アイリスがタクトのダークライを倒した2人目のトレーナーとなった。

タクト「ドリユウズの戦いぶりは、賞賛に値する！」

ドリユウズは次のラティオスに対しても健闘したが、ダークライ戦で体力をかなり消耗していたのもあり、同時撃ちで倒すのが精いっぱいだった。アイリスは惜しくも2回戦で姿を消すこととなった。

アイリス「ごめんね、ドリユウズ。アタシ、まだまだね……。」

ドリユウズ「リュウズ……。」

謝るアイリスにドリユウズは弱弱しくも笑顔で励ます。

タクト「君たちの粘りは、実にすばらしいものだった。賞賛に値する。」

アイリス「こちらこそ、良いバトルをありがとうございます。」

アイリスとタクトは両者の健闘を称えあい、バトル後の握手を交わした。アイリスにとっては、特にドラゴンタイプのラティオスとバトル出来たこと、タクトにとってはシンオウリーグでサトシとバトルして以来の白熱したバトルを繰り広げられたことで、両者ともに収穫のあった2回戦第1試合だった。このアイリスとタクトのバトルが終わった後は、いよいよサトシと1回戦でキュレムを出して観客を驚かせたトレーナー・アルフレッドの2回戦第2試合だ。

サトシ「ふう、いよいよ俺達の出番だな。ピカチュウ。」

ピカチュウ「ピカ。」

現在、サトシとピカチュウは、バトル会場の通路にいる。

？「やあ、君がサトシかい？」

サトシ「誰？」

ピカチュウ「ピカ？」

誰かがサトシを呼んだので、サトシとピカチュウは声のする方へ振り向いた。するとそこには、年齢はサトシと同じくらいの少年が立っていた。

？「びつくりさせちゃって、ごめん。僕はアルフレッド。今からやる2回戦第2試合の君の相手だよ。」

サトシに声を掛けてきたのは、サトシがこれから対戦するアルフレッド本人だった。

サトシ「いやあ、いって。さっき呼んだから分かると思うけど、俺はサトシ。こっちは相棒のピカチュウ。」

ピカチュウ「ピッカ！」

アルフレッド「やあ、ピカチュウ。あつ、僕のことアルって呼んでいいよ。家族や友人からも、その呼び方で呼ばれてるから。」

サトシ「そうか？　じゃあ、よろしくな。アル。」

サトシの対戦相手であるアルフレッドは、非常にフレンドリーな性格であった。そんなアルフレッドにサトシは思わず意気投合した。

サトシ「それよりも凄いな、アル。1回戦をストレートで勝ち進むなんて。」

アルフレッド「いやあ、僕なんてまだまだだよ。あれはキュレムが頑張ってくれたからこそだよ。」

サトシが誉めたことに謙遜するアルフレッド。この会話からも分かるように、アルフレッドはどういった経緯で捕まえたのかは定かではないが、キュレムを手持ちに入れている。サトシにとっては、かなりの強敵になりそうだ。

アルフレッド「それにしても、サトシとピカチュウはかなり強い絆で結ばれてるんだね。初対面の僕でも分かるくらいだよ。」

サトシ「まあな、ピカチュウは最初のポケモンであると同時に、俺がトレーナーになりたての頃から、いつも一緒だもんな。」

ピカチュウ「ピッカチュウ！」

アルフレッドはサトシとピカチュウの絆の強さに感心していた。

アルフレッド「早速君とバトルするのが楽しみになって来たよ。お互い頑張ろう。」

サトシ「ああ、良いバトルをしようぜ。」

サトシとアルフレッドは、がっちりと握手を交わし、それぞれの入場ゲートへと向かった。そして、2回戦第2試合の開始時刻を迎える。

審判「ただいまより、決勝トーナメント2回戦第2試合、サトシ選手対アルフレッド選手によるバトルを行います。それでは、試合開始！」

審判のコールにより、サトシ対アルフレッドのベスト4進出を賭けたバトルの火蓋が切られた。

サトシ「マグマラシ、君に決めた！」

アルフレッド「Let's start! アギルダー！」

サトシはマグマラシ、アルフレッドはアギルダーを最初の一体に選んだ。

マグマラシ「マアグ……。」

アギルダー「アギィ……。」

まずはマグマラシ、アギルダーともに相手を牽制し合う。

アルフレッド「アギルダー、こうそくいどう!」

アギルダー「アギール!」

先制を仕掛けたのはアルフレッドのアギルダー。こうそくいどうでマグマラシに近づいていく。

アルフレッド「続けて、エナジーボール！」

アギルダー「アアアアアギイイイイ！」

アギルダーは最初の一撃にエナジーボールを放った。アギルダーのすばやさを活かした見事な攻撃である。ほのおタイプのマグマラシに効果はいまひとつだが、様子見も兼ねての一撃といったところか。

サトシ「かわせ！」

マグマラシ「マグ！」

すばやさではマグマラシも負けてはいない。エナジーボールを難なくかわす。

サトシ「マグマラシ、アギルダーにつばめがえし！」

マグマラシ「マグウ！ マアアアアグウウウウ！」

今度は逆にマグマラシがつばめがえしでアギルダーに攻撃を仕掛ける。

アギルダー「アギヤア！」

つばめがえしはアギルダーにクリーンヒットした。

アルフレッド「負けるな、アギルダー！ アシッドボム！」

アギルダー「アアアアギイイイイ！」

アギルダー、反撃のアシッドボム。

マグマラシ「マグウウウウ！」

マグマラシはそのまま攻撃を受けてしまう。だが、アシッドボム自体そんなに威力の高い攻撃技ではないので、軽いダメージで済んだ。

サトシ「怯むな！ かえんほうしゃ！」

マグマラシ「マアアアグウウウウ！」

マグマラシはすぐさまかえんほうしゃを放つ。

アルフレッド「かわすんだ！」

アギルダー「アギイ！」

だが、これはあっさりとアギルダーにかわされてしまう。

サトシ「だったら、これはどうだ！ マグマラシ、フィールド一面にぶんか！」

マグマラシ「マアアアグマアアア！」

マグマラシはあたり一面にぶんか攻撃を仕掛けた。

アギルダー「アギイ、アギイ……、アギイ!？」

アギルダーは回避を試みるが、フィールド上に仕掛けられた攻撃を完璧にかわせるはずもなく、徐々に体力を削られる。

サトシ「マグマラシ、トドメのかえんほうしゃ！」

マグマラシ「マアアアグウウウウ！」

マグマラシの先程より少し強力なかんほうしゃ。

アギルダー「アギイイイ！」

この攻撃はアギルダーにクリーンヒットした。こっかにはつぐんだ。

アギルダー「アギイ……。。」

アギルダーはそのまま目を回して倒れた。

審判「アギルダー、戦闘不能。マグマラシの勝ち。」

まずはサトシが一步リードした。サトシのマグマラシは受けたダメージも少ないので、断然サトシが有利である。

アルフレッド「よくやったよ。アギルダー。」

アギルダーのすばやさを活かしきれず1体目を倒されたアルフレッドであったが、その表情は至って冷静に見える。

アルフレッド（噂通り、数々のポケモンリーグで好成績を収めたほ

どの實力はあるみたいだね。サトシ、君ならこのポケモンを使っても申し分ないよ。」

アルフレッドは2体目にとっておきのポケモンをバトルに出すよ
うだ。

アルフレッド「僕の2体目はこれだよ。」

アルフレッドはモンスターボールを思いっきり高く投げ、2体目のポケモンを出した。ポケモンがフィールドに放たれた瞬間、会場じゅうが驚きに包まれた。

サトシ「あ、あれが……。」

サトシもそのポケモンの姿に、思わず見惚れてしまった。

マサト「僕、本物を見るのは初めてだよ。」

タケシ「俺だって、初めてだ。」

コトネ「わたしもよ。」

ベル「イツシユ地方では知られていたけれど、この予選選考会で見ることができると……。」

次にデントから、そのポケモンの名前が呼ばれる。

デント「キュレム……。」

アルフレッドの2体目はこの予選選考会の目玉の一つであったキュレムだった。キュレムは凄まじいプレッシャーをマグマラシに向けて放っている。

サトシ（すごいプレッシャーだ。さすがは伝説のポケモン。だけど相手が伝説のポケモンであろうと、全力でぶつかっていくだけだ！）

マグマラシ「マグウ！」

サトシの思いが伝わったのか、マグマラシは気合を入れ直し、臨戦態勢をとった。

サトシ「マグマラシ、かえんほうしゃ！」

マグマラシ「マアアアグウウウウ！」

キュレムに対し、マグマラシはかえんほうしゃで攻撃する。

アルフレッド「吹き飛ばせ！」

キュレム「……！ キュウラアアア！」

キュレムは大きな雄叫びを上げながら、あっさりとかえんほうしゃを吹き飛ばした。

アルフレッド「りゅうのはどう!」

キュレム「ヒュウウウウウラアアアアアアア!」

キュレムのりゅうのはどう。

マグマラシ「マグウ!」

これはマグマラシにクリーンヒット。マグマラシは数メートル先まで飛ばされてしまう。

マグマラシ「マグウ……。」

サトシ「マグマラシ!?!」

審判「マグマラシ、戦闘不能。キュレムの勝ち!」

前のアギルダー戦でのダメージが少なかつたはずのマグマラシは一撃で倒されてしまった。

マサト「残りの体力を考えれば、いくらキュレムの攻撃でも一撃じや倒せないはずなのに……。」

観客席の面々も一様に驚きの表情だった。どうしてマグマラシが一撃で倒されたのかは、先程アギルダーがマグマラシに喰らわしたアシッドボムが原因である。アシッドボムの追加効果は、相手の特殊防御力を大幅に減らすことである。この追加効果により、マグマラシの特殊防御力が大幅に減らされ、特殊攻撃のりゅうのはどうを大ダメージで喰らうことになったのだ。アシッドボムの追加効果はたまにしか表れないが、ポケモンバトルは実際にやるまで何が起こ

るか分からない。

サトシ「マグマラシ、よくやった。」

サトシはマグマラシをボールの中に戻した。サトシは次にブイゼルを2体目に出したが、このブイゼルもキュレムの前に粘りを見せたものの、倒されてしまった。最初の1体目を倒したサトシであったが、一転して残り1体と窮地に立たされた。

サトシ「ピカチュウ、お前の出番だ！」

ピカチュウ「ピカ！」

サトシの3体目のポケモンはピカチュウだ。ピカチュウは気合を入れながらバトルフィールド上に出て、キュレムと対峙する。

サトシ「こっちはスピードで勝負だ！ ピカチュウ、でんこうせっか！」

ピカチュウ「ピッカ！」

サトシはピカチュウのすばやさを活かしたスピード勝負に打って出た。

アルフレッド「聞こえるせかいで、ピカチュウのスピードを封じるんだ！」

キュレム「ヒュラアアアアアア！」

キュレムは聞こえるせかいをフィールド一面に繰り出した。

ピカチュウ「ピカ．．．。」

ピカチュウはここえるせかいで素早い動きを封じられた。

マサト「これじゃあ、ピカチュウのすばやさが活かせないよ。」

デント「サトシは残り1体、そして今のここえるせかいでピカチュウのスピードが封じられた．．．。」

タケシ「サトシ、圧倒的に不利だぞ。」

観客席もこの状況を固唾を飲んで見守る。

アイリス「さすがは伝説のポケモンのキュレムね。だけど、アタシにとっては複雑な気持ち．．．。」

コトネ「確か、キュレムはドラゴンタイプとこおり．．．あっ！」

アイリス「それにこのここえるせかい。寒いのが苦手なアタシにとつてはキツイわ．．．。」

キバゴ「キバア．．．。」

コトネ「．．．．．。」

アイリスとキバゴの寒がり様にコトネは掛ける言葉が見当たらなかった。キュレムはドラゴンタイプとこおりタイプ両方持っているため、ドラゴンマスターを目指していて寒いのが苦手なアイリスにとつては、複雑な心境である。観客席のやりとりはさておき、バト

ルの方に戻ろう。ここえるせかいでピカチュウのスピードを封じた
キュレムは素早くピカチュウに接近し、

アルフレッド「キュレム、ドラゴンクロー！」

キュレム「ヒュラアアアアアアアアア！」

ピカチュウに対してドラゴンクローで攻撃。

ピカチュウ「ピツカア！」

そのままピカチュウはドラゴンクローをモロに喰らい、吹き飛ば
されてしまう。

サトシ「負けるな、エレキボール乱れ撃ち！」

ピカチュウ「ピカ！？　ピイカピカアアアア！」

ピカチュウは吹き飛ばされながらもエレキボールを何発かキュレ
ムに対して放って反撃する。

キュレム「ヒュウ・・・！」

エレキボールは何発かキュレムに当たった。その後も一進一退の
攻防が続き、圧倒的不利とされていたピカチュウがキュレム相手に
効果的にダメージを与えていく。だが、ピカチュウの体力も残り少
ない状況となった。

サトシ「ピカチュウ、ここで決めるぞ！」

ピカチュウ「ピツカア！」

サトシの声掛けにピカチュウはしっかりと返事をした。

アルフレッド「こつちも行くよ、キュレム！」

キュレム「ヒユウラア。」

アルフレッドもキュレムに声掛けをし、キュレムはそれに応える。

サトシ「ピカチュウ、最大パワーでボルテッカー！」

アルフレッド「キュレム、最大パワーでドラゴンクロー！」

ピカチュウ「ピカ、ピカピカピカピカピカアアアアアア！」

キュレム「ヒユウウウウラアアアアアアアア！」

ピカチュウ、キュレム、それぞれ相手に向かって突進していく。

ボルテッカーとドラゴンクローでは威力の差が違うが、両者ともに渾身の一撃でそんなことは一切関係なかった。

ピカチュウ「ピカアアアア！」

キュレム「ヒユラアアア！」

バトルフィールドの丁度中央でお互いの攻撃がぶつかり合い、爆発音とともに辺り一面土煙が立ち込める。しばらく会場は静寂に包まれた。

サトシ「……………」

アルフレッド「……………」

サトシ、アルフレッドともに固唾を飲む。そして、土煙が晴れる。ピカチュウ、キュレムともに辛うじて立っていた。

キュレム「……………!?!?」

先に倒れたのはキュレムだった。

ピカチュウ「……………ピカア。」

だが、その直後にピカチュウも倒れた。

審判「ピカチュウ、キュレム、両者戦闘不能。この瞬間、サトシ選手の手持ちポケモンが全て戦闘不能となったため、2回戦第2試合の勝者、アルフレッド選手！」

審判のコールから少し沈黙が続いたが、その後歓声が沸きあがった。

サトシ「ピカチュウ！」

アルフレッド「キュレム！」

激闘を戦ったサトシとアルフレッドはそれぞれのポケモンのもとへ駆け寄った。

サトシ「よく頑張ったな、ピカチュウ。」

ピカチュウ「ピカ……」

アルフレッド「キュレムもお疲れ様。」

キュレム「ヒュ……。」

サトシ、アルフレッドともに死闘を繰り広げたピカチュウ、キュレムを労う。そして、アルフレッドはすぐにキュレムをボールの中へと戻した。

アルフレッド「サトシのピカチュウは凄いな。キュレム相手に同時撃ちまで追い込んだもの。」

サトシ「いやあ、それ程でもないよ。やっぱり、伝説のポケモンは凄いな。」

サトシは改めてキュレムの凄さを感じる。

サトシ「ところでそのキュレムはどこでゲットしたんだ？」

アルフレッド「それはね、僕の住んでいる地方に大きな雪山があるんだけど、そこに修行に行った際に遭遇して何度かバトルしたんだ。最初はゲットするつもりはなかったけど、キュレムが僕を主人として認めてくれたのがゲットのきっかけかな。」

サトシ「へえ、伝説のポケモンに認められるなんてスゲエな。アルは。」

アルフレッド「君とピカチュウの絆の強さに比べたらまだまだだよ。」

「

サトシ「とりあえず、ベスト4進出おめでとう。次も頑張れよ、アル。」

アルフレッド「ありがとう、サトシ。」

こうして、2回戦第2試合はアルフレッドの勝利で幕を閉じた。これで本日の午前の部が終了し、昼休憩を挟んで午後の部へと熱いバトルは続く……

続く……

キュレムのトレーナー、アルフレッド（後書き）

惜しくも敗れたアイリスとサトシ・・・

だが、『ワールド・チャンピオン・リーグ』本戦への道は完全に閉ざされたわけではない・・・

ファンキーなトレーナー！？（前書き）

片言のオリキャラ出したけど、ムズイ（汗）

アルファベット、カタカナと表記がごっちゃになってますが、気にせず読むことを推奨します。

ファンキーなトレーナー!?

2回戦を終えたサトシは、観客席の面々、コンテスト部門にて同じく2回戦を終えたヒカリとミノリ、さらにはミズキと合流し、仲良く談笑していた。ちなみにカズミ、ハルカ、タケシ、デント、リユウカ、カズナリ、マリナ、ニヤースとは別行動である。

マサト「惜しかったね、サトシ、アイリス、ヒカリ。」

サトシ「ああ、でもあのキュレム相手に3体全てのポケモンの全力を出し切ったんだ。悔いはないぜ。」

アイリス「アタシも。特にドラゴンタイプのラティオスとバトル出来たのはいい経験になったわ。ドラゴンポケモンマスターを目指すアタシにとっては感無量よ。」

ヒカリ「あたしも。今の自分の実力がある程度分かったし、今回負けたことは次に生かせばいいんだから。それに全力でぶつかり合ってくれたミノリには感謝してるわ。ありがとう、ミノリ。」

ミノリ「あつ、いや、こちらこそ。」

ミノリは褒められたことに少々照れながらも、ヒカリに伝える。

サトシ「おつ、ヒカリとミノリはもう友達同士になったのか?」

ヒカリ「ええ、あたしがミノリに友達になろうって言ったの。ミノリは快く受けてくれたわ。」

ミノリ「うん。ヒカリはこんな私でも優しく接してくれたし、私自身もこの引っ込み思案体質から抜け出さないと思ってね。」

ミズキ「へえ、これで一步前進したね。妹の成長が見られて、私は嬉しいよ。」

ミノリ「もう、お姉ちゃんオーバーなんだから・・・。」

自分の妹の成長ぶりを見て嬉し泣きをするミズキに対して、ミノリは呆れながら言った。

アイリス「ねえ、ミノリ。アタシとも友達になってくれないかな？」

ミノリ「えっ!？」

コトネ「あっ、それなら私もってことね。」

ベル「アイリスちゃんもコトネちゃんもずるい。私もミノリちゃんと友達になるわ。」

アイリス、コトネ、ベルの順にミノリと友達同士になろうと持ちかけた。ミノリは突然の事にキョトンとする。

コトネ「びっくりさせちゃってごめんね。でも、私達の気持ちは本物ってことね。」

アイリス、コトネ、ベルは本気である。ヒカリに感化されたのだろっ。

ミズキ「私からもお願いするよ。ミノリ、まだシャイな性格はなく

なっていないけど、それをなくそうと努力してるの知ってるし。」

ミスキもミノリの友達が増えることは大歓迎のようだ。

ミノリ「そ、それじゃあ、みんなよろしく。」

アイリス「ホント!? やったあー!」

コトネ「これからよろしくってことね。」

ベル「私達、これから友達同士よ。」

ミノリはこの予選選考会でベスト4と『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』本戦への切符を手にしただけでなく、多くの友人を作った。ミノリにとっては、この予選選考会がいろんな意味で収穫のあったのは間違いなかった。そして、2回戦は午後の部を迎える。

ケンタ「いよいよ、俺の本戦出場がかかった大事な一戦だけ。バクフーン、今回もよろしくな。」

バクフーン「バクバアク。」

ケンタは2回戦に向けて気合を入れていた。どうやら、2回戦でもバクフーンを使用するようだ。

?「Ohh~! 君がケンタ君だね?」

ケンタ「そ、そうだけど。」

バクフーン「バアク？」

突然誰かに名前を呼ばれたので振り返って返事をすると、そこには背はケンタと同じくらいで色白の顔にエメラルドグリーンの瞳、上には黒で文字が書かれた白いタンクトップ、下は深緑のシヨートパンツを履いた少年がたっていた。

？「驚かせちゃってゴメンネ。僕はダニエル。君の2回戦の対戦相手だよ。」

その少年は2回戦でケンタが対戦する相手、ダニエル本人だった。ダニエルは今予選選考会に出場した海外トレーナーの1人で、1回戦でジユンに勝利している。

ダニエル「1回戦の君のバトル見てたヨ！ 最後にバクフーンのもうかが発動した時はハラハラしたネ！」

ケンタ「はあ、あつ、ありがとう。」

ダニエルはケンタの1回戦を観戦していたようで、肩を組んだりケンタに対して積極的なスキンシップをとりながら、ケンタを褒め称える。ケンタはダニエルの行動についていくので精一杯だった。

ダニエル「2回戦でも白熱したバトル楽しみにしてるヨ！」

ケンタ「ああ、こちらこそ。」

ダニエルはケンタに手を振りながらその場から立ち去った。

ケンタ「・・・な、なんだっただ？」

バクフーン「バァク……。」

風のように現れて風のように去っていったダニエルを見て、呆然としていたケンタとバクフーンであった。ただ同時に特別悪い人ではない印象をダニエルに対して持った。なにはともあれ、2回戦第3試合の開始時刻は直前に迫っていた。

審判「ただいまより、2回戦第2試合ケンタ選手とダニエル選手の試合を開始します。それでは試合開始！」

ケンタ「行け、スピアー！」

スピアー「スピーィ！」

ケンタはスピアーを、

ダニエル「HEY！ ウルガモス！」

ダニエルはウルガモスを最初の一体目を選んだ。

ダニエル「ウルガモス、ちょうのまい！」

ウルガモスはちょうのまいで能力アップ。そしてスピアー攻撃の為に移動をはじめた。

ケンタ「は、早い……。。」

ウルガモスは目にも止まらないスピードで辺りを移動する。りゅうのまいで能力アップしたのもあるが、それ以前に元々のスピード

もかなりのものである。

ケンタ「負けるな、スピアー！　こうそくいどう！」

スピアー「スピー！　スピーイイイ！」

スピアーもウルガモスに負けじと必死で追いかける。

ダニエル「Oh！　あのスピアーなかなかのスピードだね！　でも、これはどうかな？」

ダニエルはスピアーのスピードに少々驚いていたが、バトルはまだ始まったばかり。取り乱すほどの事ではなかった。

ダニエル「ファースト・アタック！　ウルガモス、ぎんいろのかぜ！」

ウルガモスのぎんいろのかぜ。しかも技を出すスピードも速く全く斑がない。

スピアー「スピー！？　スピーイイイ！」

スピアーはあまりの速さに躊躇してしまふ。相性こそいまひとつではあるが、攻撃をモロにぎんいろのかぜを喰らってしまった。

ダニエル「ウルガモスのスピーディな攻撃はまだまだネ。ウルガモス、にほんばれ！」

ウルガモスにはほんばれを発動。日差しが強い天候となる。

ダニエル「ネクスト・アタック！ ねっぷう！」

ウルガモスのねっぷうがスピアーに襲い掛かる。にほんばれの効果でさらに威力が増している。

スピアー「スピィ……………」

スピアーはこうかばつぐんの技を喰らっても尚、耐えきっていた。

ダニエル（Oh！ あのスピアー、なかなかのスピリットダヨ！
これは一筋縄ではいかないネ。）

ダニエルはスピアーの根性に驚かされた。しばらくしてウルガモスもさすがに疲れがきたのか、ねっぷうを中断した。

ケンタ「スピアー、とんぼがえり！」

スピアー「スピ！ スピィ！」

ねっぷうが途切れた頃合いを見計らって、スピアーはとんぼがえりでウルガモスにダメージを与え、自らはボールの中へと戻った。

リーファイア「リーフ！」

代わりにフィールドに現れたのはリーファイアだ。ただ、これもウルガモスとの相性は悪い。

ダニエル（くさタイプのリーファイアが出てきたのは、バッド・タイミングネ。だけど、ケンタ君は相性関係なく向かってくるトレーナー。油断は出来ないネ。）

状況的にダニエルが有利だが、ダニエルは決して油断することはなかった。

ダニエル「ウルガモス、ちょうのまい！」

ウルガモスは再びちょうのまいで能力アップを図る。

ダニエル「続けて、ねっぷう！」

そして、ねっぷうを再び繰り返す。

リーファイア「リーファイ……。」

リーファイアもスピアー同様、ねっぷうに耐えていた。

ケンタ「負けるな、リーファイア！ リーフストームで吹き飛ばせ！」

リーファイア「リーフ!? リイイイイイイイ！」

リーファイアはリーフストームでねっぷうを吹き飛ばし、さらにウルガモスへの攻撃に使った。攻撃を喰らったウルガモスはねっぷうごと吹き飛ばされた。

ダニエル「ワァーオ！ リーフストームで吹き飛ばしたねっぷうを攻撃に使うとは、ナイスアイデアネ。けれど、それも時間の問題ネ。」

リーファイアは効果抜群の攻撃により、かなりのダメージを負っている。ねっぷうを対処できるとはいえ、何度も攻撃されたらたまった。

たものではない。

ダニエル「ウルガモス、トドメのねっぷうネ！」

ウルガモスはさらにリーファイアにねっぷうを仕掛ける。リーファイアは直撃を喰らい、さらに爆発とともに辺り一面が土煙に覆われた。しばらく沈黙が続き、土煙が晴れた。この時、誰もがリーファイアの戦闘不能を確信した。だが、

リーファイア「リイイイファイア！」

なんと、リーファイアは傷一つない状態で立っていた。

ダニエル「アンビリーバブル！ 一体何が！？」

これにはさすがのダニエルも驚きを隠せない。

ケンタ「ふう、相手のにほんばれを利用してこうこうせいを使ったのは正解だったぜ。」

リーファイアは土煙に紛れてこうこうせいで体力を回復していたのだ。

ダニエル（こうこうせいは日差しが強い状態で使用するれば、回復する体力が多くなる。ウルガモスのにほんばれをうまく活かすとは、まんまとやられたヨ。）

ケンタ「リーファイア、マジカルリーフ！」

リーファイア「リイイイファイイイ！」

ここから、リーファイア怒涛の反撃が始まる。まずは、必中の攻撃技・マジカルリーフ。

ケンタ「続けて、リーフストーム！」

リーファイア「リーイイイイフ！」

ウルガモスが攻撃を受けたところをさらにリーフストームで攻撃。

ケンタ「そして最大パワーのソーラービームだ！」

リーファイア「リーイイイイフイイイイイイイイ！」

トドメのソーラービーム。日差しが強いのでダメなしでソーラービームは発射された。ウルガモスは三連発の攻撃を受け、地面に叩きつけられた。そしてウルガモスは目を回して倒れた。

審判「ウルガモス、戦闘不能。リーファイアの勝ち！」

まずはケンタがダニエルの1体目を倒した。だが、スピアーは先程のバトルで残り体力が少なく、決して有利な状況とは言えない。ここから、ケンタは勝利へのカギを握ることが出来るのか！？

続く

ファンキーなトレーナー！？（後書き）

ウルガモスを倒し、数的優位に立ったケンタだが、この後、ダニエルの思わぬ反撃を喰らうことなど知る由もなかった・・・

ダニエルの秘策、そして・・・(前書き)

例のごとく、アルファベットとカタカナがごっちゃで変な具合に汗)

ケンタVSダニエルの続編です。

ダニエルの秘策、そして・・・

ダニエルの1体目・ウルガモスを倒し、数的優位に立ったケンタ。だが、状況としては決して郵政とは言えない。

ダニエル「Go, next! サーナイト!」

サーナイト「サーナア!」

ダニエルの2体目はサーナイトだ。サーナイトは元気よく出てきたが、

サーナイト「サナア!？」

サーナイトは突然体勢を崩した。

ダニエル「Why? どうした、サーナイト?」

突然のことに驚きを隠せないサーナイト。

ケンタ「よし! どくびしが決まったぜ!」

実はケンタ、最初のスピアーが攻撃を受けている際にどくびしをフィールド上に撒き散らしていたのだ。さらにいえば、2回撒き散らしている。どくびしは、1回だけなら相手がポケモンを交代する毎にどく状態にするが、2回撒き散らしていれば交代して出てきたポケモンをもうどく状態にできる。

ダニエル「スピアーはただダメージを受けていたわけじゃなかった

んだ。これは油断したネ。」

スピアーに一杯喰わされた形になったダニエル。

ダニエル「それでも、僕は負けないネ。行くよ、サーナイト！」

サーナイト「サナ！？ サアアアアアアアア！」

ダニエルの呼びかけにサーナイトは体勢を立て直す。

ダニエル「ファースト・アタック！ サーナイト、サイコネシス！」

サーナイト「サアアアアアアアアア！」

サーナイト、サイコネシスを発動。

リーファイア「リファイ！？」

サーナイトもウルガモス同様技を繰り出すスピードがかなり速かったので、リーファイアはサイコネシスの餌食となる。

リーファイア「リイフ、リイイフ。」

リーファイアはもがくが、思うように身動きが取れない。

ダニエル「Let's approach！ サーナイト、サイコシヨック！」

サーナイト「サナア！ サアアアアアアアア！」

サーナイトはサイコネシスをリーファイアにかけながら素早く接近し、リーファイアにサイコショックをお見舞いする。

リーファイア「リファイイイイ！」

これにより、リーファイアは大ダメージを喰らってしまう。だが、

ケンタ「リーファイア、こうごうせいで回復だ！」

リーファイア「リフ、リイイイイイ！」

リーファイアはすぐに体勢を立て直し、こうごうせいで体力を回復した。ちなみにまだ日差しが強い状態である。

サーナイト「サナア．．．。」

さらに、サーナイトはもうどくのダメージを受ける。

ダニエル（やつぱり、あのリーファイアのこうごうせいは少々厄介ネ。おまけにサーナイトがもうどく状態。これは僕の方が大ピンチダヨ．．．。）

ダニエルもさすがに引く手あまたの状態だった。

ダニエル（こうなったら、ギャンブル作戦ネ。）

ダニエルは何か閃いて、一か八かの賭けに出たようだ。果たして、ダニエルが閃いた秘策とは！？

ケンタ「リーファイア、マジカルリーフ！」

リーファイア「リイイフ！」

リーファイアの体力を回復させ、さらに攻勢を強めるケンタ。必中のマジカルリーフは、見事サーナイトに直撃する。

ダニエル（そうそう、そのまま攻撃し続けてネ。）

だが、ダニエルは至って冷静だった。

ケンタ「リーファイア、最大パワーでソーラービーム！」

リーファイア「リファイ！ リイイファイアアアア！」

強烈なリーファイアのソーラービームが炸裂。

サーナイト「サナア！」

ダニエル（今ネ！）

サーナイトは急所に当たるダメージを負った。だが、ダニエルはこのタイミングを見計らって何かを指示した。

サーナイト「サナア．．．。」

サーナイトは目を回して倒れた。

審判「サーナイト、戦闘不能。リーファイアの勝ち！」

ケンタ「よっしゃあ！ あと一体だぜ！」

ケンタはこれでベスト4進出ならびに『ワールド・チャンピオンリーグ』本戦出場まで王手をかけた。だが、その喜びもつかの間だった。

リーフィア「リィフ！？ リィフ．．．。」

リーフィアは突如倒れこみ、その場で目を回した。

審判「リーフィア、戦闘不能。」

ケンタ「リーフィア！？」

ケンタは突然のことに戸惑いを隠せなかった。

ダニエル「リーフィアのこうごうせいは厄介だったから、みちづれを使わせてもらったヨ。」

なんとダニエルはサーナイトがソーラービームを喰らう直前にみちづれを指示したのだ。これにより、サーナイトが戦闘不能となったと同時にリーフィアも戦闘不能となったのである。

ケンタ「みちづれを使われるとは、やられたぜ．．．。」

ケンタはダニエルにしてやられたのだ。

ケンタ「（俺が追い詰めているとはいえ、油断は出来ないな．．．。）
（スピアー、もう一度頼む！」

スピアー「スピー！」

ケンタは再びスピアーをフィールド上に出した。

ダニエル「それじゃあ、僕の切り札ポケモン行くネ！」

そう言うとダニエルは、最後のポケモンをフィールド上に出した。出てきたのは、あく・ドラゴンタイプのサザンドラだった。ちなみにサザンドラの特徴はふゆうなので、どくびしの効果を受けない。

ケンタ（くっ、これじゃあもうどく状態のベノムシヨックが使えない……。）

ケンタは険しい表情になる。ケンタのスピアーはベノムシヨックを覚えている。ベノムシヨックは毒状態の相手に対して使うと威力が2倍になる技である。ケンタはどくびしを利用して、このベノムシヨックのコンボ攻撃を使おうと思ったのだが、失敗したのである。

ケンタ「それなら、スピード勝負だ！ スピアー、こうそくいどう！」

スピアー「スピー！」

スピアーはこうそくいどうでサザンドラにスピード攻撃を仕掛ける。

ダニエル「サザンドラ、あくのはどう！」

サザンドラはそれに動揺することなく、広範囲にわたってあくのはどうを繰り返す。

スピアー「スピイイイイ！」

ケンタ「スピアー！」

あくのほうは、スピアーに直撃。スピアーはそのまま押し戻された。

スピアー「スピイ．．．。」

審判「スピアー、戦闘不能。サザンドラの勝ち。」

スピアーはサザンドラに一撃も加えることなく、倒されてしまった。これでケンタもダニエルも残り一体。ますます分らない試合展開となった。

ケンタ「これで決まるのか。バクフーン、俺はお前に賭ける！」

バクフーン「バアク、バクフウウウン！」

ケンタはこのバトルの全てをバクフーンに賭け、バトルフィールド上に送り出した。バクフーンもそんなケンタの期待を背に受け、気合を入れる。

ケンタ「バクフーン、かえんほうしゃ！」

バクフーン「バアアアアアクウウウウ！」

ダニエル「かわすんだ！ サザンドラ！」

バクフーンはサザンドラに対して真っ向からかえんほうしゃをお見舞いするが、あっさりとかわされてしまった。

ダニエル「HEY！ サザンドラ、りゅうのはどう！」

バクフーン「バアク……。」

さらに、バクフーンはサザンドラのりゅうのはどうの餌食となる。だが、バクフーンは持ち前の根性でなんとか耐え切っている。

ケンタ「そのままかえんぐるまで突っ込め！」

バクフーン「バアアアクウウウウ！」

バクフーンはりゅうのどうを受けながらも、かえんぐるまでサザンドラに突撃。サザンドラは急所に当たるダメージを負う。

ケンタ「続けてかえんほうしゃ！」

バクフーン「バアアアアクフウウウウ！」

さらにバクフーンはかえんほうしゃで連続攻撃を仕掛ける。これもサザンドラにクリーンヒットし、サザンドラは大ダメージを負った。

ダニエル「ステイル・ファイティング！ サザンドラ、りゅうのはどうとあくのはどうのミックスアタックネ！」

サザンドラはりゅうのはどう、あくのはどうの順に繰り出して、合体技で攻撃する。しかも、技の出すスピードが今までとは格段に

違い、かわせる程の余裕がない。

バクフーン「バクウウウウウウ！」

ケンタ「バクフーン!?」

バクフーンはそのまま大ダメージを喰らってしまった。その後もサザンドラとバクフーンは両者互角の攻防を繰り広げ、残り体力も少なくなってきた。

バクフーン「バク、バク、バク……。」

バクフーン、サザンドラともに息を切らしている状態である。

ダニエル（どうやら、次の一撃で勝負が決まるみたいダネ……。）
ケンタ（次で決める!）

ケンタ、ダニエルともに次の一撃にこの勝負の全てを賭ける決意をしたその時だった。

バクフーン「バク……、バクフウウウウウウ！」

バクフーン、今予選選考会2回目のもうかを発動させた。

ダニエル「Oh! ここでもうかを発動させるとは……。だった
ら、こっちも! サザンドラ、ふるいたてる!」

ダニエルもサザンドラにふるいたてるを指示し、次の一撃に備えた。

ケンタ「バクフーン、頼んだぜ！ 最大パワーでオーバーヒート！」

バクフーン「バアアアクウウウウウ！」

ダニエル「サザンドラ、マックス・パワーでりゅうせいぐんネ！」

バクフーンはオーバーヒート、サザンドラはりゅうせいぐんを放つ。両者の攻撃は、バトルフィールド中央でぶつかり合う。そして、爆発とともにバクフーン、サザンドラともに吹き飛ばされた。吹き飛ばされた両者は何とか体勢を立て直す。

ケンタ「……………」

ダニエル「……………」

しばしの沈黙……

バクフーン「・・・バアク。」

バクフーンが力尽きて先に倒れた。

審判「バクフーン、戦闘不能。サザンドラの勝ち。よって勝者、ダニエル選手。」

ダニエルの勝利の宣告とともに、会場じゅうが歓声に包まれた。ケンタは健闘を見せるも、サトシ、アイリス同様に2回戦で姿を消すことになった。

ケンタ「バクフーン！」

ダニエル「サザンドラ！」

ケンタ、ダニエルは死闘を繰り広げたそれぞれのポケモンのもとへと、駆け寄る。

ケンタ「よくやったな。負けたのは悔しいけど、お前のガッツ見せてもらったぜ。」

バクフーン「バアク・・・。」

ケンタはバクフーンを労い、バクフーンは弱弱しくもケンタに返事を返す。

ダニエル「ナイス・ファイトをありがとう、ケンタ君。」

すると、そこへ激闘を繰り広げた相手ダニエルがケンタのもとにやって来た。

ケンタ「こちらこそ、燃えるバトルだったぜ。」

ケンタとダニエルはお互いに称えあった。

ケンタ「しかし、ダニエルのポケモンはすげえな。すばやさそのものだけじゃなく、技を出すスピードも早くて。」

ダニエル「僕のバトルスタイルはスピードイさが売りだからネ。ポケモンのスピードの他に、技のスピードも常日頃からトレーニングしてるからネ！」

ダニエルは自分のバトルスタイルを自信気に答える。何はともあれ、2回戦第3試合はダニエルの勝利に終わった。これでサトシ達は全滅となったが、本戦への出場が完全に閉ざされたわけではない。以降、彼らがどんな成長を見せてくれるのだろうか。それはまた次回以降……

続く

ダニエルの秘策、そして・・・（後書き）

バトル部門のサトシ、ケンタ、コトネ、アイリス、ベル。コンテス
ト部門のカスミ、ハルカ、ヒカリ、マリナ・・・

彼らは今回の予選選考会で本戦出場は叶わなかったが、まだ完全に
閉ざされたわけではない！ 次回以降の彼らの戦いぶりに、乞うご
期待！

選考会終了後の異変！？（前書き）

今さら思ったこと、なぜこんな話を書いたのやら（汗）

この言葉の意味は俺がサトヒカだということを考えればわかります。

選考会終了後の異変!?

さて、『ワールド・チャンピオン・リーグ』、『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の予選選考会の後はどうなったかというところ、まずはリーグの方。ベスト4は、タクト、アルフレッド、ダニエルを含め、かなりの実力のトレーナーが出そろった。まず、タクトとアルフレッドが対戦した第1試合。お互いに3体全てを出し尽くし、残り一体となったところで、タクトはダークライ、アルフレッドはキュレムとお互いに伝説のポケモンをバトルフィールドに出したのだ。伝説のポケモン同士のバトルは観客全てをうならせるほど圧巻だった。両者の死闘の末、勝利を掴んだのはアルフレッドだった。続いて、第2試合、ダニエルは自分の得意先方であるスピード攻撃で挑んだのだが、この試合ではそれが鳴りを潜めて、本領発揮することなく敗れてしまった。そして…

『ワールド・チャンピオン・リーグ第1予選選考会の優勝者は、アルフレッド選手です。』

アルフレッドは決勝にて、ダニエルを打ち負かした相手を最後の1体を残して勝利し、決勝トーナメントの頂点に立ったのだ。ちなみに、決勝でアルフレッドはキュレムを手持ちに入れず、休養させていた。伝説のポケモンも出て、白熱したものが繰り広げられたバトル部門が続いて、コンテスト部門も負けず劣らずの展開を見せた。2回戦に進出したノゾミは、『コルドーのコンテストレイン』^{リリ}アと激しい攻防を繰り広げた。格上の相手に僅差に詰め寄ったが、惜しくも敗れた。ただ、トップ・コーディネーター^{ニューカマー}の新参者としての実力は見せつけた。同じく2回戦に進出したカスミは海外から来たコーディネーターとの対戦になる。ちなみに、この海外のコーディネーターは1回戦でシユウに勝利した相手で、かなりの強者だった。

た。カスミはお得意のみずタイプのを駆使し、相手のポイントを巧みに削った。だが、相手も効果的にカスミのポイントを削っている、カスミは惜しくもポイント差で敗れてしまった。その後、セミアイナル、ファイナルともに観客を魅了するパフォーマンスとアグレッシブなファイトが展開され・・・

『ワールド・チャンピオン・フェスティバル第1選考会の優勝者は、リリア選手です。』

前評判通りのパフォーマンスを魅せたリリアが、タンバシテイでのポケモンコンテストに続いて見事頂点に立ったのだ。これにより、優勝したリリアの他、ベスト4に進出したミノリをはじめとするコ―ディネーターが無条件で本戦への出場を手にした。こうして、バトルもコンテストも熱気の余韻が残りながら、第1回の予選選考会は幕を閉じた。次回はハウエン地方サイユウシティで開催される。

ケンタ「今回で本戦への出場はゲットできなかったは残念だったな。」

マリナ「ええ、私も今回の予選選考会はいつもの調子が出せなかったから悔いが残るわ。」

ちなみにマリナはファイナルステージ1回戦で、海外トレーナーに粘りを見せるも敗れている。

ヒカリ「あたしも。だけど次回の予選選考会に向けてさらに上を目指さなくちゃ。」

アイリス「今回の予選選考会で、反省すべき点も見つけることが出来たしね。そこを直すためにも、またみんなでがんばりましょう。」

アイリスの一言に皆一様にうんと頷く。

サトシ「よおし、次で本戦出場できるようにまた頑張るぞ！」

サトシ以外「オー！」

ピカチュウ「ピッ、ピカチュウ！」

ポッチャマ「ポッチャマ！」

キバゴ「キイバ、キバ！」

バクフーン「バアクウ！」

ムウマ「ムウウウウウ！」

サトシ達は、次の予選選考会でのリベンジを誓い、ポケモン達とともに掛け声を合わせた。ちなみに、サトシのそばにいるのは、ヒカリ、アイリス、ケンタ、マリナの4人である。

ヒカリ「それにしても、大会が終わってもまだにぎやかなね。」

マリナ「それ程、今回の予選選考会が盛り上がったということよ。シロガネタウンはまだいろんな見どころがあるから、街めぐりしましょう。」

サトシ「そうだな。」

ケンタ「帰るまでまだ時間あるし、暇つぶしにいいんじゃないか。」

この5人で街を時間いっぱいまで、このシロガネタウンの街並みを散策することにした。大会終了後とはいえ、シロガネタウンはまだ大会の余韻が残っている。サトシ達が仲良く散策しているところだった。

ウララ「あら、ヒカリさん？」

ヒカリ「あつ、ウララ。」

ラングレー「あ、アイリスじゃないか。」

アイリス「ラングレー。」

偶然にも、ウララとラングレーに出くわす。

ヒカリ「ウララも、シロガネタウンを？」

ウララ「ええ、まだ時間はありますし、それまで街中を散策してみようと思ひましてよ。」

アイリス「ラングレーも。」

ラングレー「ああ、そうよ。」

ウララもラングレーも、サトシ達と目的は同じだったようだ。その後、サトシ達はウララとラングレーを加えて、離しながら散策を再開した。

サトシ「ところで、ウララとラングレーはこの後どうするんだ？」

サトシがウララとラングレーにこの予選選考会が終わってからのことを聞いてみた。

ウララ「わたくしはとりあえず、シンオウに戻りますわ。次の予選選考会に向けて特訓ですわよ。」

ラングレー「あたしはまだジョウトに残って、新しくポケモンをゲットするつもりよ。もちろん、特訓も兼ねてだけど。」

ウララは自分の出身地シンオウに戻り、ラングレーはジョウト地方面にとどまって、次の予選選考会に備えるようだ。

サトシ「そうか・・・。」

サトシはそれを聞いて、腕を組んで少し考える仕草をした。

ウララ「あら、サトシさん？」

ラングレー「一体、どうしたんだ？」

思わず、キョトン顔になるウララとラングレー。すると、サトシは思いがけない提案を2人に対してしてきた。

サトシ「なあ、ウララにラングレー。一回、マサラタウンに来ないか？」

ウララ・ラングレー「えっ？」

なんと、サトシは自分の故郷・マサラタウンに来ないかとウララ

とラングレーに言ってきたのだ。

ウララ「マサラタウンって確か、サトシさんの故郷でしたわね？」

サトシ「ああ、そうだぜ。ウララとラングレー、特にイツシユから来たラングレーはカントーに来る機会なんてめったにないだろ？コトネやマリナみたいにカントーじゅうを案内することは出来ないけど、マサラタウンなら案内できると思って。街自体は小さいけれど、結構いいところだぜ。なっ、ピカチュウ。」

ピカチュウ「ピッ、ピカチュウ！」

サトシはマサラタウンについて胸を張って語る。

ラングレー「確かに、オーキド研究所には一度行ってみたいとは思ったけど……。」

ウララ「サトシさんがそこまで言うのでしたら……。」

サトシ「じゃあ、決まりだな。あっ、もちろん、ヒカリアにアイリス、それにケンタとマリナ、他の奴らも一緒にな。」

サトシはニツコリした表情で答える。

マリナ「でも、そんなに大勢で逆に迷惑じゃない？」

サトシ「心配するなって。むしろ、大歓迎だぜ。それに俺もお前たちのこともっと知りたいし。」

ケンタ「そっか。それじゃあ、お言葉に甘えさせて……。」

サトシ達は一度、ウララとラングレーを加えてマサラタウンに集合することになった。

ウララ（サトシさんから誘ってくださるなんて、わたくしにもまだ脈はありますわ。）

ラングレー（な、なんだろう。このドキドキは・・・。）

ウララはサトシからの誘いが来たことで心の中で喜んでいた。ラングレーは未だサトシに対する自分の気持ちに気づいていないようだ。

サトシ「おっしゃあ、それじゃあ早速ママとオーキド博士に言うてくるよ！」

サトシはそのままもの凄いスピードで去っていった。その後、ウララとラングレーも嬉しそうにその場を立ち去った。

ヒカリ・アイリス（な、なんで、よりによってウララ（ラングレー）なのよ！ サトシのバカああああ！）

ヒカリとアイリスは旅先で自分に何かと突っかかってくる人物を招待したサトシを少々恨んだ。それにしても、バカは言い過ぎだと思う（汗） by・天の河

マリナ「あらら、これは大変なことになりそうね（汗）」

ケンタ「サトシ・・・。」

ケンタとマリナはこの光景にただ苦笑を浮かべるしかなかった。こんな変な具合になったが、ヒカリ、アイリス、ケンタ、マリナも帰り支度をするために一旦宿舎に戻ることにした。その宿舎ではある異変が起きていた。

コトネ「あ、あれ？」

カズナリ「どうしたんだい、コトネ？」

宿舎のロビーにて、コトネが自分のポケギアと格闘していた。

コトネ「あっ、なんかね、さっきからラジオがつかないんだけど．．．。」

マリナ「私もさっきから試してるんだけど、ラジオが聞けないのよ。」

ケンタ「一体どうしたのかな？」

ポケギアを持っている面々は、自分のポケギアでラジオのチューニングを試みているが、聞こえるのはキィィィィといった雑音のみである。

タケシ「どうやら、ケンタ達だけじゃないみたいだぞ。」

周りを見回すと同じような現象が起きているようで、少々ざわついていた。

コトネ「あっ、あともう少しで入りそう．．．。」

ラジオのチューニング作業に格闘していたコトネが言う。しばらくすると、ラジオからわずかながら人の声が聞こえるくらいまでに戻った。だが、その聞こえてきた内容で、皆言葉を失った。

『あー、ここコガネラジオ局より宣告する。我々、ロケット団はコガネシティー帯の占拠に成功した。』

続く

選考会終了後の異変！？（後書き）

コガネシティに暗躍していたロケット団、ついに始動！

そして、次回最近出番が激減したがアニメポケでおなじみのあのコンビが登場！？

ロケット団、コガネシティを・・・(前書き)

予選選考会終了後、事態は急展開を迎える！

ロケット団、コガネシティを・・・

ラジオの放送にて、全国を震撼させるニュースが報告される。コガネシティがロケット団による襲撃を受け、都市全体が占拠されたことが判明した。さらに、コガネラジオ局が今回の事件の拠点となっているため、ジョウト地方のラジオチャンネルが全てロケット団により、ジャックされている除隊となっている。尚、ジョウト以外の地方の放送局は無事であるが、全局報道特別番組に切り替え、この事件の情報収集に努めている。

ケンタ「そ、そんな・・・。」

マリナ「コガネシティがロケット団に占拠されるなんて・・・。」

事件の一報を聞いたケンタとマリナは、今も信じられない表情だが、そんな2人よりもさらに深刻な表情をする人物が一人。

コトネ「おばあちゃん・・・。」

コトネはコガネシティの近くで育て屋を構えている自分の祖母のことが気がかりで仕方なかった。

アカネ「ウチが留守にしてる間にえらいことになってもった・・・。」

さらに言えば、ジムリーダーとしてコガネシティの治安維持に役割買っているアカネの表情もさらに深刻だった。

サトシ「おーいー!」

ケンタ・マリナ・コトネ「「み、みんな!」」

そんなジヨウト組のもとへ、サトシ達が合流した。

ヒカリ「事件の事は今知ったわ。」

カスミ「なんだか、大変なことになってるわね。」

マサト「なんとかして、コガネシティに行かないと．．．。」

彼らは一刻も早くシロガネタウンをあとにして、コガネシティに行くことを考えていた。

タケシ「．．．どうやら、そう簡単にはここを出られないみたいだぞ。」

タケシが指さす方を見ると、数名のロケット団員が侵入してきており、ジュンサー達とポケモンバトルになっていた。

ハルカ「嘘!?! ここにまで来るの!?!」

ハルカはシロガネタウンにまで、ロケット団の手が回っていることに驚いた。確かに、コガネシティはジヨウトの経済の中心地であり、占拠する意義は十分にある。だが、シロガネタウンは大会終了後であり、悪の組織が狙うような目ぼしいものもあるわけではない。さらに言えば、四天王・シロナが来賓として、多くのポケモンレンジャーが任務としてこの付近に来ている中で、ロケット団のこの行為はかなり無謀ではなかるうか．．．

パライイイイイイイン！

ガラスが割れる大きな音とともに、宿舎に残っている者達がパニックを起こす。それとともに、また多くのロケット団員が侵入してきた。

デント「どうやら、僕達も応戦するしかないみたいだね。」

アイリス「このまま人質になるなんて嫌よ！」

現在、ロケット団員の数が多すぎて、応戦しているジュンサー達が押されている状況である。このままいけば、ロケット団がここを占拠してサトシ達は人質になるわけだが、サトシ達はそんなのになる気は毛頭なかった。サトシ達は話し合いで、デント、アイリス、ベル、リュウカ、タケシの5人が宿舎に残ってロケット団と応戦、アカネとコトネをはじめとする残りのメンバーはコガネシティを目指すこととなった。さらにこの予選選考会でサトシ達と死闘を繰り広げたアルフレッドとダニエルが応戦組の援護に加わった。サトシ達は応戦組の助けを借りながら、宿舎の裏口に回って宿舎から脱出早急にコガネシティへと向かった。

アカネ（ジムのみんな、ウチの勝手な行動で・・・ごめんな。）

コトネ（おばあちゃん、無事でいて・・・。）

アカネとコトネはサトシ達以上に心中穏やかではなかった。

ドカアアアアアン！

サトシ「な、なんだ！？」

突然の爆発音とともにサトシ達を取り囲むように土煙が立ち込めた。しばらくして土煙が晴れると、ロケット団といえばおなじみのあのコンビが登場した。

今回の口上はノーカットで。

ムサシ「何だかんだと聞かれたら」

コジロウ「答えてあげよう明日のため」

ムサシ「フューチャー、白い未来は悪の色」

コジロウ「ユニバース、黒い未来に正義の鉄槌」

ムサシ・コジロウ「我らこの地にその名を記す」「」

ムサシ「情熱の破壊者、ムサシ」

コジロウ「暗黒の純情、コジロウ」

そして、ロケット団をクビにされサトシ達の仲間になったはずのあのポケモンも当然、

ニヤース「無限の知性、ニヤース」

サトシ達「ニ、ニヤース!？」

ニヤースがなぜかムサシとコジロウ側にいることに驚くサトシ達。だが、口上は最後まで続く。

ムサシ・コジロウ・ニヤース「さあ、集え！ ロケット団の名の下に！」

口上が終わり、サトシは当然の疑問をニヤースにぶつける。

サトシ「これは一体どういうことだ、ニヤース……。」

ヒカリ「あなたはロケット団をクビになったんじゃないの？」

サトシとヒカリの問いかけにニヤースは、

ニヤース「おみゃーらのことを探るために、クビになったと嘘をついてわざとおみゃーらの仲間になったんだニヤ。」

コジロウ「サカキ様もつずまき島の一件で、ジャリボーイのピカチ

ユウ、バクフーンに大変興味を示しておられる。」

ムサシ「あたし達は元々狙ってたから、ピカチュウの事は知ってるけど、こんなに強いバクフーンがいるなんて、ロケット団の良い戦力になるわ。」

どうやらロケット団は、サトシのピカチュウに加え、ケンタのバクフーンにも目をつけ、この2匹の情報を探るためにニヤースを遣わせたのだ。

カスミ「あたし達をだましたのね。」

ハルカ「まんまとやられたかも。」

ニヤースに上手く騙されたことに怒りを露わにする一同。さらに、

ピカチュウ「ピイカアアアア！」

バクフーン「バアアアクウウウウ！」

ピカチュウとバクフーンの怒りはそれを上回っていた。

サトシ「落ち着け、ピカチュウ！」

ケンタ「狙いはどうやら、お前達なんだ。挑発に乗ったら、相手の思いつボだぞ！」

ピカチュウ「ピイカ、ピイカ！」

バクフーン「バアク、バアク、バクウ！」

サトシとケンタは必死で宥める。

サトシ「ロケット団！ 残念だがお前たちにピカチュウをやるわけにはいかないぜ！」

ケンタ「もちろん、バクフーンもだ！」

当然のことながら、サトシはピカチュウを、ケンタはバクフーンをロケット団の手に渡らせるつもりなど毛頭なかった。

ムサシ「思ったとおり、一筋縄ではいかないわね。」

コジロウ「全く、お前たちの絆の強さには感心するな。」

そう言いながら、ムサシとコジロウはそれぞれのポケモンを出して戦闘モードに入った。

カスミ「サトシ達はコガネシティに向かって。」

サトシ「えっ、でも……。」

ハルカ「考えてる時間はないわ。ここはわたしとカスミで食い止めるから。」

ヒカリ「あたしも手伝うわ。」

ハルカ「ヒカリはサトシ達と一緒に行って。」

カスミ「ヒカリは今ひこうタイプのトゲキッスを手持ちに入れてる

わ。万が一の為に役に立つと思うの。」

ハルカとカスミはヒカリがトゲキッスを持っていることに注目して、サトシ達と一緒にいかせようとした。確かに、ひこうタイプのポケモンは、運搬や偵察要員としても重宝する。

ヒカリ「分かったわ、あたしサトシ達と一緒に行く。」

サトシ「・・・でも気を付けろよ。」

カスミ・ハルカ「サトシ達もね。」

カスミとハルカを残して、サトシ、ヒカリ、ケンタ、マリナ、アカネ、コトネ、カズナリの7人はコガネシティへと再び足を進めていった。カスミとハルカは手持ちのポケモンをフル動員させて、ムサシ、コジロウ、ニヤースにしばらく応戦した。

コジロウ「くっ、ジャリガールのポケモン、しばらく見ないうちに強くなってるみたいだな。」

ムサシ「このままここで時間を喰ってるわけにもいかないわね。第一、あたし達の目的はジャリボーイを足止めすること、肝心のジャリボーイがいなかったら意味がないわ。」

ニヤース「ここは一旦退却だニヤ。」

ムサシ、コジロウ、ニヤースはこの場を去ろうとした。

カスミ・ハルカ「あっ、待ちなさい！」

カスミとハルカが呼び止めようとする。

ニヤース「おみゃーらは甘いニヤ。こつもニヤーの演技に騙されるとは、お人よしもいいところだニヤ。」

ニヤースは皮肉たつぷりに言う。

カスミ「あら、あたし達は短い間だったけどアンタと過ごさせて楽しかったわよ。」

ハルカ「人の言葉が使えるポケモンなんてそういないものね。」

ニヤース「!? だから、おみゃーらは甘いんだニヤ。」

ニヤースの捨て台詞を最後にムサシ、コジロウ、ニヤースは空高く飛び上がってその場から去っていった。

カスミ「あたし達も、コガネシティに向かしましょう。」

ハルカ「ええ。」

カスミとハルカがコガネシティに向かおうとしたところだった。

?「それは無理よ。」

カスミ・ハルカ「だ、誰!?!」

カスミとハルカが声のする方へ向くと、そこにはナツミとメグミが立っていた。

カスミ「ナツミさん！」

ハルカ「メグミさんも！」

カスミとハルカはナツミとメグミの方へと駆け寄る。

カスミ「それよりもナツミさん。それは一体、どういうことなんですか？」

ハルカ「コガネシティに行くのが無理って？」

ナツミ「どうやら、コガネシティへ向かう途中でロケット団員が待機して通行料をせ^せ占めているみたいなのよ。当然、今コガネシティに向かっているサトシ君達もその妨害を受けると思うわ。無事にコガネシティに着くことが出来るかも保障は出来ない状況なのよ。」

メグミ「それと実は、私達はあなた達2人をお願いをしに来たのよ。一緒に、シロガネタウンのロケット団の一掃を手伝ってくれないかってね。それにもうじきここにも奴らの追手がやって来るわ。それを考慮すれば、今はシロガネタウンに引き返したことが無難だわ。」

カスミ「分かりました。それとお手伝いの事に関しては是非引き受けさせていただけます。ハルカもいいわよね。」

ハルカ「ええ、もちろんよ。サトシ達のことは心配だけど、状況が状況だもの。」

カスミとハルカはナツミとメグミの要望を快諾した。

ナツミ「カスミちゃん、ハルカちゃん、2人ともありがとう。ごめ

んね、こんなにも危険で勝手なお願いして。」

カスミ「謝らないでください。あたし達なら大丈夫ですから。」

ハルカ「それにこういうことは慣れてますしね。」

ナツミとメグミに対して、自身気に言うカスミとハルカ。サトシ達との旅を通して、随分と遅しくなったのが伺える。

メグミ「それじゃあ、早速シロガネタウンに戻りましょう。」

カスミ・ハルカ「はい!」「」

カスミとハルカはナツミとメグミとともに、シロガネタウンに蔓^は延^びっているロケット団の一掃の為に、元来た道を引き返した。予選選考会が終わり、思わぬ事態に遭遇したサトシ達の運命やいかに!?

続く

ロケット団、コガネシティを・・・(後書き)

果たして、コガネシティの運命やいかに!?

コガネシティの危機！ (1) (前書き)

コガネシティに向かうサトシ達に、ロケット団から新たな刺客が

新たにサファイアさんリクエストのキャラ2名登場します。

コガネシティの危機！ (1)

ロケット団が街中を占拠された一報を聞き、コガネシティに向かうサトシ達。だが、その途中で数名のロケット団下っ端の足止めを喰らっていた。

サトシ「……………」

ピカチュウ「ピカ、ピカ……………」

バクフーン「バアク、バアク……………」

サトシ達は手持ち全てを使って、下っ端たちと応戦していたが、あまり良い状況ではない。

アカネ「なんや。あいつら、下っ端にしては強ないか？」

下っ端A「おやおや、さすがのジムリーダーさんもお手上げですか。」

下っ端B「そりゃあ当然だ。俺達は下っ端の中でもトップランクの下っ端だからな。」

下っ端たちの話からすると、今サトシ達の目の前にいるのは特に洗練されたかなりの強力な下っ端だという。ここで今作品におけるロケット団下っ端の設定について簡単にお教えしよう。

ロケット団下っ端

1. 『S・A A A・A A・A・A・B・C・D』にランク分けされる。

2・Sランクは幹部候補生と呼ばれ、様々な面において優遇措置が取られている。

3・Dランクは新人で、実際の任務には就かず、研修を受ける。

4・新人の中でも特に優秀と判定された者は「スーパー超人」と呼ばれ、ランクもDではなく、実際の任務の即戦力としてCランクに位置づけられる。

5・ランクの昇格・降格は、年度初めの年1回の定例会にて総合的な査定に基づき行われる。

ちなみに、ムサシ・コジロウ・ニヤースはAAAランク、ヤマト・コサン・・・コサブロウはAAランク、○山線トリオはAランクに所属している。今サトシ達の目の前にいる下っ端たちは全員AAAランクの下っ端である。

下っ端B「さて、さっさとそのピカチュウとバクフーンを渡してもらおうか。」

下っ端C「素直に渡してくれれば、痛い目に遭わなくて済むんだけどな。」

どうやら、この下っ端連中の目的もサトシのピカチュウとケンタのバクフーンのようにだ。

サトシ「誰がお前達なんかに!!」

ケンタ「渡すものか！」

当然、サトシとケンタは渡すつもりなど毛頭ない。

下っ端A「そういうことは今自分たちが置かれている状況を考えて
いってほしいものだな。」

下っ端B「どうやら、本気で痛い目に遭ってもらわないと済まない
ようだね。」

下っ端たちは出ているポケモン達で一斉攻撃を仕掛けようとする。
サトシ達万事休すの状況となったその時だった。

？「そこまでよ！」

？「お前たちの悪事もここまでだ！」

？「お前たちの好き勝手にはさせねえぜ！」

下っ端C「だ、誰だ！？」

何者かの声がしたので、下っ端連中、サトシ達ともに振り返ると、

サトシ達「シロナさん！」

1人は女性、2人は男性が乗ったワゴン車があった。女性はシン
オウチャンピオンマスターのシロナだ。

シロナ「助けに来たわ。」

ヒカリ「シロナさん、助かります。」

自分達を助けに来たシロナに対して、代表してヒカリが礼を言う。
？「礼を言うのは後だ。俺はマモル。ナツミ、メグミ、シロナから、サトシ君らのことは聞いている。」

？「僕はリオン。マモル兄さんと同じく、シロナ姉さんたちからサトシ君達のことには聞いているよ。」

サトシ達は初対面の男2人はそれぞれ、マモル、リオンと名乗る。ちなみに、マモルは国際警察官兼ポケモンGメン、リオンはポケモンレンジャーである。

マモル「自己紹介はこれくらいにして、シロナはサトシ君達とコガネシティに向かってくれ。」

リオン「こいつ等は僕とマモル兄さんで片づけるから。」

シロナ「分かったわ。サトシ君、早速だけどこのワゴン車に乗って。」

サトシ「はい！ みんなもいいよな。」

ケンタ「俺は大丈夫だ。」

ヒカリ「あたしも、OKよ。」

マリナ「私も大丈夫。」

カズナリ「僕も乗ります。」

アカネ「ウチも乗るで。コガネジムジムリーダーとして、コガネシティの危機は見過ごせへん。」

一寸の猶予も許されない状況なので、全員自分たちのポケモンを戻してワゴン車に乗り込む。ケンタのバクフーン、マリナのムウマも少しでもワゴン車の車内の余裕を持たせるためにボールの中へと入った。

コトネ「シロナさん、コガネシティに入る前に育て屋のほうにいつてくれませんか？ あそこは私のおじいちゃんとおばあちゃんがやつてる育て屋なんです。」

シロナ「育て屋って、ウバメの森のちかくにあるわよね？ 分かったわ、丁度このワゴン車を停める場所も欲しかったし。それにご家族が近くに住んでいるんだったら心配なものね。」

コトネ「ありがとうございます。」

こうして、サトシ達を乗せたワゴン車はコトネの祖父母が経営している育て屋に向け、発車した。

リオン「シロナ姉さん達は行ったか。」

マモル「さてと、リオン。俺達はいいつ等の殲滅といきますか。」

リオン「ええ、マモル兄さん。」

そう言うと、リオンとマモルはボール全てに手を掛け、手持ちの

ポケモン全てを総動員させる。

下っ端A「くそう！ 次から次へと邪魔者が・・・。」

下っ端達は全員、マモルとリオンを相手に応戦する。しばらくして、

マモル「さあ、次はどいつが相手してくれるのかな？」

リオン「僕たちはいつでも相手になってやるよ。」

下っ端A「くっ！？ ここはいつたん退却だ！」

マモル「あつ、待て！ お前ら全員逮捕する！」

マモルの制止も空しく、下っ端達は煙玉を使ってその場から姿を消した。

マモル「チクショー！ 逃げられたか！」

リオン「マモル兄さん、まだそんなに遠くへ行っていないはず。すぐに応援を呼んで搜索しましょう。」

マモル「分かった、リオン！」

マモルとリオンも下っ端達の身柄確保の応援を呼ぶため、その場から立ち去った。

一方、サトシ達はシロナの運転するワゴン車でコガネシティに向かっていた。そして、コトネの祖父母が経営している育て屋に到着した。サトシ達は車から降りて、早速育て屋の中に入った。

サトシ「うわあ、これは酷いなあ．．．。」

育て屋の屋内は見るも無残に荒らされていた。割られた窓ガラス、無造作に散乱した藁、多くの人間とポケモンの足跡、さらには壁の一部が壊されるなど、ここでの悲惨な光景を物語っていた。

コトネ「おじいちゃんとおばあちゃんは何処！？ 2人とも返事して！」

コトネは少しパニック状態に陥っていた。

コトネ「まさか、2人とも．．．。」

ヒカリ「落ち着いて、コトネ！」

マリナ「お2人ならきつと無事よ！」

カズナリ「そうだよ、だから気をしっかり持って！」

パニック状態のコトネをヒカリ、マリナ、カズナリが必死に宥める。しばらくして、コトネは落ち着きを取り戻した。

シロナ「大丈夫？ コトネちゃん？」

シロナはそう言うと、コトネにミネラルウォーターの入ったペットボトルを手渡す。コトネはそれを少し飲み、心を落ち着かせる。

コトネ「ありがとうございます、シロナさん。今はだいぶ落ち着きました。それと、ヒカリン、マリリン、カズナリもありがとうね。」

ヒカリ「良かったわ、コトネが落ち着いてくれて。」

コトネも冷静さを取り戻したところで、サトシ、ケンタ、カズナリがコトネの祖父母を捜索した。祖父母は、育て屋の庭にある物置に手足を縛られて監禁されていた。2人とも意識ははっきりしていて無事だった。その後、2人から、いきなり数名の黒ずくめの連中がやってきて育て屋を襲撃されたこと、他のトレーナーやコーディネーターから預かっていたポケモン達を盗まれたことが知らされた。

コトネ祖父「あのポケモン達は沢山のトレーナーやコーディネーターから預かった大切なポケモンなんじゃ。」

コトネ祖母「もしこのまま帰ってこなかったら預けていた子たちにどんな顔していればいいのやら……。」

コトネ「大丈夫、おじいちゃん、おばあちゃん。ポケモン達は必ず取り返して見せるから！」

サトシ「だから、心配しないでください！」

アカネ「コガネシティの近くでも、みんなコガネシティの仲間や。ウチかて、見過ごせへん！」

コトネ祖母「みんな……。ありがとう。」

コトネ達がポケモン達を取り返すと言ってくれたので、嬉しそうに礼を言うコトネ祖母。

シロナ「サトシ君。私はロケット団が何か落としていったかもしれないから、この育て屋の片付けをしておくわ。だから、コガネシテイのことはサトシ君達に任せたいんだけど、もちろん、全責任は私が取るわ。いいかしら?」

サトシ「もちろん、いいですよ。」

ヒカリ「あたしもサトシと行きます。」

ケンタ「俺も。」

マリナ「私も。」

コトネ「私も行きます。おじいちゃんとおばあちゃんをこんな目に遭わせたロケット団を絶対に許せません!」

アカネ「ウチかて、コガネシテイを守るためにやりますで!」

シロナ「それじゃあ、みんな頼んだわよ。頼んでおきながら言うのもなんだけど、無事に帰ってきてね。」

サトシ達「はい!」

こうして、サトシ達は育て屋にシロナとシロナが手伝ってほしい

と頼んだカズナリを残して、シロナの要望でロケット団が占拠したコガネシティ市内へと入って行くのだった。

続く

コガネシティの危機！ (1) (後書き)

次回、サトシ達がコガネシティに潜入！

コガネシティの危機！ (2) (前書き)

サトシ達、ロケット団に街ごと占拠されたコガネシティへ！

多少、ゲーム版を参考にしたネタが入っています。

「コガネシティの危機！」（2）

サトシ、ヒカリ、ケンタ、マリナ、コトネ、アカネの6人は、コガネシティ市内へと続くゲートで蔓延っていた見張りを掻い潜り、ロケット団に占拠された市内へと入った。今は誰にも見つからないようにビル陰に隠れている。

サトシ「ここからは二手に分かれよう。俺とヒカリとコトネはコガネラジオ塔へ、ケンタとマリナとアカネさんはコガネジムへ行くのはどうだ？」

ヒカリ「あたしは問題ないわ。」

コトネ「私もよ。ケンタ達は？」

ケンタ「俺も問題ないぜ。」

マリナ「私も。」

アカネ「ウチも、問題ないで。それにジムのみんなが心配やから、むしろ好都合や。ありがとうな、サトシはん。」

サトシ「いえいえ。」

こうして、サトシ達はコガネラジオ塔に向かうメンバー、コガネジムに向かうメンバーに分かれ、それぞれ行動することにした。

アカネ「みんな、無事やとええんやけど……。」

アカネはジムの留守を任せていたジムトレーナー達のことを気がかりで仕方なかった。

ケンタ「大丈夫ですよ、アカネさん！」

マリナ「そうです。だから、気をしっかり持って！」

下向きな思考になりつつあるアカネをケンタとマリナが必死で励ます。

アカネ「ケンタはん．．．、マリナはん．．．。せやな、ウチがみんなのこと信じへんかったらどないせえ言うねん！ もっとしっかりせな！」

ケンタ「その意気ですよ。でも、急ぎましよう！」

マリナ「コガネシティじゅうを占拠したんだから、ロケット団はきっとジムの方にも手を伸ばしてるはずですよ！」

ケンタ、マリナ、アカネがジムまで目前まで迫っていた時だった。

？「ちよつと、そこを退きなさいよ！」

かなり大きな怒声が聞こえてきた。

アカネ「あの声は、ミカはん！？」

声の主は、コガネジムのジムトレーナーの一人、ミカだった。

ケンタ「行ってみよう！」

マリナ「ええ。」

ケンタ、マリナ、アカネは声のする方へと向かった。するとコガネジムの入り口の前でミカがロケット団下っ端3人と押し問答をしていた。

下っ端A「お前達ジムの連中に動きまわってもらうとこっちは困るんでね。」

下っ端B「しばらくおとなしくしてもらうぜ。」

下っ端C「どうしてもはむかうってんなら、痛い目に遭ってもらうけどな。」

ミカ「くっ。。。。」

下っ端達は任務遂行の妨げになるであろうジムトレーナー達を足止めしていた。

アカネ「ちょい待ち！　よくもウチの可愛いジムトレーナー達を苛めてくれたな！」

アカネが下っ端達に仁王立ちで言い放つ。

下っ端B「ゲッ！？　ジムリーダー・アカネ、もう帰って来たのか。。。。」

ミカ「あ、アカネさん！」

下っ端達は少々バツが悪そうに、ミカは希望の光が差し込んだかのような表情になる。

ケンタ「アカネさんだけじゃないぜ！」

マリナ「私たちもアンタ達の相手になつてやるわよ！」

下っ端A「チツ、うずまき列島で邪魔をした連中まで……。」

下っ端C「ええい、構わん！ ジムリーダーだろうが、トレーナーだろうが、コーディネーターだろうが、我らロケット団にはむかう者は全員敵だ！」

下っ端達はケンタ、マリナ、アカネに対して、ポケモン勝負を挑んだ。結果はいつまでもなく、

下っ端のポケモン達「……。」　すべて、ひんし状態。

下っ端A「つ、強ええ……。」

下っ端B「こ、こいつらバケモノだ。」

下っ端C「このことを上層部に報告を！」

下っ端達のポケモンはケンタ、マリナ、アカネのポケモンを前に、全て一瞬で倒された。下っ端達がその場から立ち去ろうとした瞬間、

ミカ「待ちなさい！ さつきはよくもやってくれたわね。覚悟なさい！」

ロケット団下つ端達は、ミカを始めとするジムトレーナー達の反撃に遭う。

下つ端A・B・C「ひええええええ（泣）」

下つ端達は成す術なく、ポケモンのねむり技で眠らされ、さらには体を紐でぐるぐる巻きにされて御用となった。

アカネ「みんな、ごめんな。ウチが勝手に留守にしてたせいで、こない危険な目に遭わせて。」

アカネは、ジムトレーナー達に自分の身勝手な感情で留守にしたことを後悔しているようである。その証拠にいつもの元気な雰囲気とは正反対に俯いている。

ミカ「アカネさん！ そんなに謝らないでください！」

ナオコ「そうよ。私達みんな無事だったんだから、平気よ。」

マリナ「悪いのはアカネさんじゃない、コガネシティを占拠したロケット団ですよ。」

ケンタ「そんな後ろ向きな表情、アカネさんには似合いませんよ。」

その場にいる全員で俯き加減のアカネを励ます。

アカネ「みんな・・・、ありがとな。せやな、こんなのウチらしくないやん！」

その甲斐あって、アカネは持ち前の明るさが戻り、立ち直ったよ

うだ。

ケンタ「俺達のほうは大丈夫だったけど、サトシ達は大丈夫だろうか．．．。」

マリナ「うん。アイツ等の今回の拠点はラジオ塔だものね。みんな無事だといんだけど．．．。」

アカネ「ウチ等も向こうへ行きたいんやけど、ジムのことが心配や．．．。」

ケンタ達はラジオ塔に向かったサトシ、ヒカリ、コトネのことを心配する。行ってあげたいのは山々だが、ジムがいつまた襲撃を受けるのか分からないという不安との^{事実}確に立たされている。

ミカ「ジムのことは任せてください!」

ナオコ「ここはわたし達でなんとかするわ。アカネちゃんはケンタ君とマリナちゃんまでコガネラジオ塔に行つて、サトシ君達を助けてあげて!」

ミカとナオコはジムのことはジムの事は心配ないといつて、ケンタ達をコガネラジオ塔にいかせようとする。

アカネ「ミカはん、ナオコはん、ホンマにええんか?」

ミカ「ええ、任せてください!」

ナオコ「これでも私達だつてアカネちゃんに負けなくらい特訓してるのよ。それに私達ジムトレーナーもリーダーの留守が守れなく

「ちゃ面目立たないものね。」

ミカとナオコは自信気に答えた。

ケンタ「ミカさん、ナオコさん、ありがとうございます。」

マリナ「みなさん、無事でいてくださいね。」

ナオコ「ふふふ、あなた達もね。」

その場にいる全員が無事を祈り合いながら、ケンタ、マリナ、アカネはサトシ、ヒカリ、コトネが向かっているコガネラジオ塔へと足を進めた。

ミカ「さて、さっき捕まえたコイツ等の片づけから始めましょうか。ナオコさん。」

ナオコ「ええ、そうね。いつまた逃げ出すかどうか分からないものね。」

ミカとナオコはそう言いながら、先程捕えたロケット団下っ端たちをポケモン達と協力して、安全な場所へと拘束した。一方、サトシ、ヒカリ、コトネはコガネラジオ塔が目前まで迫っているところまで来ていた。

ヒカリ「な、なんて、嚴重的な警備なの……。」

コトネ「これじゃあ、これより先には進めないってことね。」

サトシ「ここに来る途中にも見つかりそうになったしな。コガネシ

「ティは本当にロケット団に占拠されたんだな。」

「ピカチュウ、「ピカ……。」

「ポッチャマ、「ポチャア……。」

「マリル、「リイル、リイル……。」

「サトシ達は改めてロケット団の恐ろしさを痛感させられる。その時だった。」

「ケンタ、「サトシ。」

「サトシ、「ケンタ。」

「ケンタが小声でサトシに声を掛けてきた。ケンタの後ろにはマリナとアカネもいる。」

「ヒカリ、「そっちはどうだった?」

「マリナ、「とりあえず、ジムは無事だったわ。」

「コトネ、「それは良かったってことね。」

「サトシ、ヒカリ、コトネはジムが無事だったことを聞き、ホッと一安心した。」

「マリナ、「それよりも、何あれ? ディグダー一匹の入るスペースすらないじゃない。」

マリナも例えを交えながら、ラジオ塔前のロケット団の見張りに驚愕する。

コトネ「だから、私達この先が進めなくて困ってるのよ。」

ケンタ「でも、このまま引き返すわけにもいかないしな．．．。」

ケンタの言うとおり、このまま引き返してコガネシティがそのままロケット団の手に渡ってしまえばここまで来た意味がない。さらに言えば、サトシ達が今いる場所にとどまったところで見つからないという保障はない。そんなほぼ打つ手なしの状況の中、

アカネ「そないなら、ウチにええ考えがある。」

アカネ以外「えっ!?!」

アカネが突然、この状況を打開するアイデアがあると言い出し、サトシ達はそれにキョトンとした顔で驚く。

アカネ「一旦ここから離れるけど、まあ、付いて来てな。」

ケンタ「あつ、はい．．．。」

サトシ達はアカネに連れられて、現在地から離れた。アカネが思いついたアイデアとは一体．．．

続く

コガネシティの危機！ (2) (後書き)

アカネ考案の秘策とは・・・

コガネシティの危機！ (3) (前書き)

アカネはサトシ達をとある場所に連れて行く。

そこで彼らを待ち受けていたものとは！？

コガネシティの危機！ (3)

サトシ達はアカネに連れられて、途中ロケット団の見張りを掻い潜りながら、とある場所に来ていた。

サトシ「ここって、地下通路ですか？」

アカネ「せや。ウチのええ考えちゅうのも、秘密はこの中にあるんや。」

アカネ以外「？」

アカネ「まあ、今は考えてる暇はないで。ほな、行こか。」

アカネを先頭にサトシ達は地下通路へと入っていった。幸い、地下通路の中にはロケット団の手は回っていなかった。否、普段は商売を行っているスペースのみといった方が適切である。コガネシティの地下通路はカギが掛けられた奥の部屋があり、現時点では様子を伺うことが出来ない。

コトネ「ここ、普段はにぎやかなのに誰もいないね。」

マリナ「なんだか、不気味だわ．．。」

コトネとマリナの会話からわかるように、普段は商業スペースとして利用されている地下通路にはサトシ達以外誰一人通行している人はいない。

？「アカネちゃん、こっちだよ。」

アカネ「あつ、ケンゾーのおっちゃん。無事やったんやな。」

アカネは声を掛けてきたケンゾーと呼ばれる男と話し始める。

アカネ「あつ、この人はケンゾー言うて、ウチがよく行く洋服屋の店長さんや。」

サトシ達「はじめまして。」

アカネが紹介したケンゾーに向けて、サトシ達も初対面の挨拶をする。

ケンゾー「挨拶なんて後。とりあえず、みんなこつちに来て。」

ケンゾーはサトシ達を急いでとある部屋に誘導した。その部屋はいろんな衣服が納められている倉庫のようなところだった。その衣服はフォーマルなものからカジュアルなものまで、多種多様にそろえてあった。

マリナ「うわ！？　いろんな服がいっぱい……。」

マリナは多種多様な衣服を見て、驚愕する。

コトネ「それにマニアクなものまであるのね。」

コトネが手に取ったのは、某人気アニメのコスプレ衣装だった。

ケンゾー「最近のお客にはポケモンバトルにコスプレを取り入れるものもあるからね。まあ、うちは取り寄せるのには苦労しなかったけ

どね。」

サトシ「ところでアカネさん。どうして俺達をこんなところへ？」

サトシはアカネに地下通路に自分達を連れてきた理由を聞いてみる。

アカネ「ラジオ塔の目の前は、見張りがたくさんあったやろ？ ウチ等がそのまま行ったら捕まるさかい。それでウチ等がロケット団に変装してラジオ塔に忍び込んだろかなと思っただんや。」

アカネが閃いたのは、ロケット団に変装してラジオ塔内に潜入する作戦のようだ。

マリナ「見つかったら、向こうに何をされるかわからないものね。」

ケンタ「逆に俺達が敵の目を欺こうってわけか。」

コトネ「その方が、こそこそと侵入するより良いつてことね。」

サトシ「よし、それじゃあみんなに変装してラジオ塔に乗り込もうぜ。」

ヒカリ「ええ。」

全員アカネの案に乗り気のようだ。

アカネ「ほな、早速着替えな。」

ケンゾー「向こうに試着ルームがあるから、使って。」

ヒカリ「ホントに何から何までありがとうございます。」

全員ケンゾーの方に向き直り、代表してヒカリが礼を言う。

ケンゾー「いいって、いいって。こつちもコガネシティが奴らに占拠されてしまつては商売あがったりだからね。俺は直接行けないけど、君達には是非コガネシティを救ってもらいたいんだ。」

サトシ「はい、コガネシティは絶対にロケット団から取り返して見せます！」

ケンゾー「頼んだよ。」

サトシ達は試着ルームへと入っていき、ロケット団下っ端のコスチュームに着替えた。

マリナ「ふふふ、実は私こつちの一回着てみたかったのよね。」

ヒカリ「ギンガ団とは違った雰囲気を感じるわ。」

コトネ「マリリンもヒカリもなかなか似合つてことね。」

ヒカリ「ありがとう。」

ケンタ「そつちコトネも似合つてるぜ。」

コトネ「ふふふ、ケンタとサトシもカッコいいわよ。」

サトシ「アカネさんも何かいつもと違った雰囲気を感じます。」

アカネ「それは褒め言葉として取っておくで。実はこの作戦考えたのも、ウチがこういうの来てみたかったちゅうのもあるんやけどな。」

アカネのお茶目な一面も垣間見えて、これからラジオ塔へ乗り込む緊張感が時ほぐれたサトシ達。

アカネ「さあ、もたもたしてられへんで。コガネシティ奪還や！」

アカネ以外「「「「オー！」「」「」」

アカネを先頭にサトシ達は地下通路へ抜けて、再びラジオ塔の前に到着した。サトシ達はコガネシティに蔓延るロケッツ団を一掃し、コガネシティに平和を取り戻すことが出来るのか！？

続く

コガネシティの危機！ (3) (後書き)

洋服店の店長の設定がテキトーすぎるのは気のせいだろうか・・・
知るか！

潜入！ コガネラジオ塔（前書き）

ロケット団の目を掻い潜り、ラジオ塔へ潜入するサトシ、ヒカリ、コトネ、ケンタ、マリナ、アカネ・・・

彼らの運命やいかに！？

アニメケキヤラの英語表記（掲載の意味は、この話を読めば分かります）

ケンタ：Y o s h i

マリナ：D a n i

アカネ：W h i t n e y

潜入！ コガネラジオ塔

ロケット団下っ端の変装で再び、コガネラジオ塔の前に着いたサトシ達。先程と変わらず、入り口は下っ端（本物）数名の見張りが巡回している。

サトシ「いよいよ、乗り込むんだな。」

ヒカリ「ええ、でもここで焦って失敗したら今までの苦労は水の泡よ。」

マリナ「ここは慎重に行きましょう。」

地下通路内で解きほぐした緊張感が再びこみあげてくる中、サトシ達は入り口に向けて歩みを進めた。

サトシ達「……………」

サトシ達は怪しまれないように下っ端（本物）の見張りの中を歩いていく。幸い、誰にも声を掛けられずにラジオ塔内へと入ることが出来た。ラジオ塔内も下っ端達でいっぱいだった。サトシ達はひとまず、人気のない場所へと移動し、そこで一息入れることにした。

サトシ「ふう〜、捕まると思って冷や冷やしたぜ。」

ピカチュウ「ピカ……………」

サトシはひとつため息を吐き、先程から一言も喋らなかつた緊張感を和らげる。ピカチュウもホッと一息つく。ちなみにサトシ達の

ポケモンは、ポッチャマ、バクフーン、ムウマはそれぞれボールの中に戻っている。だが、サトシのモンスターボールの中が嫌なピカチュウは、持ち前の演技力を活かして、身体じゅうにリボンの装飾を施し、ポケモンの置物としてサトシとともにラジオ塔内に潜入した。

マリナ「こんな緊張感、ある意味コンテストより凄い……。」

ヒカリ「ハハハ、確かに……。」

コーディネーターがこんなことを言うのはあまり望ましくないとと思うが、コンテストと潜入捜査の緊張感はいろんな意味で明らかに違う。普通は滅多に行うことがないのに加えて国際警察官やポケモンGメンが担当する潜入捜査なら、尚更だ。

アカネ「それにしても、サトシはんのピカチュウは凄いな。そないな演技力があるなんて……。」

アカネは改めてピカチュウの演技力に感心する。

ヒカリ「ポケモンなりきり大会でもスポミーに上手くなり切ったものね。」

マリナ「サトシ、コンテストでもいけるんじゃない?」

ヒカリとマリナもピカチュウの演技力を見て、こう評する。

サトシ「そうかな? コンテストなら俺も出たことはあるけど……。」

ピカチュウ「ピイカ．．．。」

サトシとピカチュウは照れ臭そうな仕草をする。

アカネ（ウチ、あのピカチュウ欲しい思ったけど、サトシはんは絶対に譲ってくれへんやろうな．．．。）

アカネはサトシのピカチュウと自分のポケモンとを交換したいとまで思ったが、サトシとピカチュウの絆の強さは以前ジム戦をしたときに十二分に感じていたので、諦めた。その後、サトシ達はその後どうするか話し合う。

マリナ「ここはまた二手に分かれたほうがいいんじゃない？ その方が効率がいいと思うの。」

マリナは二手に分かれて潜入捜査を続ける提案をした。

アカネ「せやな。ウチ、この局長さんとは知り合いやから余計に心配や。」

コトネ「二手に分かれた方が手かかりも見つけやすいしね。」

ケンタ「それじゃあ、また二手に分かれようぜ。」

こうして、サトシ達は二手に分かれてラジオ塔内の潜入捜査に取り掛かった。サトシ、ヒカリ、コトネは囚われの身であろう局長のもとへ向かい、ケンタ、マリナ、アカネは育て屋のポケモン達の手がかりを探しに行った。

ケンタ「なあ、アカネさん。」

アカネ「なんや、ケンタはん？」

ケンタ「確か、コガネラジオ塔は全ての階で一般の人の見学が出来るはずなのに、どうして今は2階までの見学になっているんでしょうね。」

マリナ「あつ、それ私も思ってた。」

ケンタはラジオ塔の見学についてふと疑問に思ったことをアカネにぶつけた。コガネラジオ塔はスタッフや番組出演者の仕事ぶりを見てもらうために全面的に開放されている（最低限のマナーと警備が前提だが・・・）。だが、最近は1階と2階のみの見学制限が掛けられている。無論、スタジオの見学も禁止されている。

アカネ「この局長さん、普段はそないな人やないねん。もっとフレンドリーで優しいおっちゃんや。せやのに、今の局長さん、何かおかしいわ。」

アカネは普段から親交のあるコガネラジオ塔の局長の人柄はよく知っているため、今のラジオ塔の現状に違和感を感じる。ケンタ達がそんな会話をしているその時だった。

ウー！ ウー！ ウー！

マリナ「な、何!？」

突然鳴り響いた警告音に、ケンタ達は驚く。その直後、ケンタ達は大勢のロケット団下っ端に囲まれてしまった。

シモオタイ「お前たちは何者だ！」

○山線トリオの一人・シモオタイがケンタ達の前に現れる。

マリナ「『お前達は何者だ！』の声がする・・・」

ケンタ・アカネ「「!？」」

マリナの突然の行動にケンタとアカネはキョトンとしたが、マリナがアイコンタクトで伝えると何をすればいいのかが分かったのか、ケンタとアカネも乗り気になる。

ケンタ「熱き闘志を持つ戦士たち・・・」

マリナ「水よ！」

ケンタ「炎よ！」

アカネ「大空よ！」

アカネ「海風そよぶアサギの朝・・・」

ケンタ「風に舞うエンジュの紅葉・・・」

マリナ「歌って踊れるアイドルコーディネーター、ダニー！」

ケンタ「直球一本槍なファイター、ヨシ！」

アカネ「コガネにおり立ったダイナマイト・プリティ・ギャル、ホ
イットニー！」

ケンタ・マリナ・アカネ「「我らジョウトの平和を守る正義の味
方、ジョウト・レンジャー！」」

ケンタ、マリナ、アカネによるパク．．見事な口上が決まった。

シモオタイ「ちょっと待て！」

ナカオタイ「なんなんだ、今は！」

カミオタイ「俺達の真似をするんじゃない！」

口上を真似されたことに怒りを露わにする○山線トリオ。

○山線トリオ「「だから、○山線トリオ言うなああああ！」」

さらに、作者に対するツッコミを入れる○山線トリオ。

マリナ「いいじゃない、別に。」

ケンタ「そうそう、実は俺達だって一度言ってみたかったんだ。」

アカネ「そないに文句言うんやったら、自分らだってやってみたら
ええやん。」

アカネのちょっとした挑発に、

ナカオタイ「おっしゃあ、言ってやるうじゃないのよ。」

シモオタイ「お前たちのような下手な真似事とはわけが違うぜ。」

カミオタイ「これが本物の口上というものだ！」

○山線トリオは、いつものごとく登場時の口上を言い始めた。

カミオタイ「なんだかんだと聞かれたら・・・」

ナカオタイ「名乗ってあげるのが当たり前・・・」

面倒なので、ここはカット。

○山線トリオ「カットするなああああ（怒）」

作者に口上のシーンをカットされたことに怒りだす○山線トリオ。

シモオタイ「それはさておき、お前ら残念だったな。我々ロケット団の団員服はICチップが埋め込まれた認証機能付の特殊な服なのさ。このラジオ塔の各地に取り付けられたセンサーですぐに本物が偽物かを判断できるのだ。」

カミオタイ「お前達みたいな偽物のコスプレ衣装とは大違いなのさ。」

先程警告音が鳴ったのは、ケンタ達が着用しているロケット団の衣服がセンサーに引っかかり、偽物だと見破られたからである。

アカネ「そないなハイテクな機能を付けていたとは．．．。」

マリナ「少々、ロケット団を甘く見過ぎていたみたいね。」

ラジオ塔の潜入に成功した直後、絶体絶命のピンチに立たされたケンタ、マリナ、アカネ。果たして、この状況を打開できるのだろうか．．．

続く

潜入！ コガネラジオ塔（後書き）

ケンタ、マリナ、アカネ、絶体絶命！？

英語版アニメキャラの読みとオリジナルの口上が、なんか微妙（汗）

ケンタ達の死闘（前書き）

変装がバレて、危機的状况に立たされたケンタ達・・・

終盤には新たな収獲も！？

ケンタ達の死闘

ロケット団の下っ端集団、山線トリオによって周りを取り囲まれたケンタ、マリナ、アカネ。その間にいるんなゴタゴタはあったものの、結局応戦することになった。

ケンタ「行け！ バクフーン、リーファイア、マッスグマ！」

マリナ「頼んだわよ！ ワニワニ、ムウちゃん、トドちゃん！」

アカネ「ウチも行くで！ ベロベルト、エネコロロ、ミルタンク！」

ケンタ、マリナ、アカネはそれぞれのポケモンを出す。

シモオタイ「ええい、全員でかかれい！」

3対多によるポケモンバトルが始まった。だが、世界大会予選選考会を戦った2人、ジムリーダー1人と実力の差は歴然だった。ケンタ、マリナ、アカネは次々とロケット団のポケモンを倒していく。だが、あまりの数の多さに苦戦している模様だった。

ケンタ「くっ、これじゃあキリがないぜ！」

アカネ「ホンマ、しっこい連中や！」

ケンタ達のポケモンにも時間の経過とともに疲れが見え始める。

ナカオタイ「ハハハ、目的のためには手段を選ばず……。しっこくて結構、俺達にとっては最高の褒め言葉だ！」

アカネ「別に褒めてへん！ しつこい男は嫌われるで！」

さらに状況は悪化し、次第にロケット団サイドの応援も駆けつけ、形勢が変わりつつある。ここでマリナが苦肉の策に打って出る。

マリナ（こうなったら・・・。）

マリナが思いついた策とは一体・・・

マリナ「ケンタ、アカネさん。一回、ポケモン達を戻して！」

マリナはケンタとアカネに今出ているポケモンを戻すように言った。

ケンタ「お、おい、それじゃあ俺達がやらねばなしだぞ。」

アカネ「せや、マリナはん。今の状況見て何を言うてんねん。」

ケンタとアカネはマリナの言葉の意図が全く分からなかった。仮にここでポケモン達をボールに戻すという行為は、ロケット団サイドのポケモンの数を考慮すれば降参に等しい。

マリナ「いいから、戻して！」

だが、マリナの目は真剣そのものである。

ケンタ「．．．分かった。マリナ、お前の言うとおりにする。」

アカネ「ウチらは、マリナはんを信じるで。」

ケンタとアカネはそのマリナの真剣さを汲み取ったのか、ポケモン達をボールに戻した。言いだしっぺのマリナも自分のポケモンをボールに戻す。ただ、ムウマのムウちゃんを除いて．．．

ケンタ「マリナ、お前まさか．．．。」

ケンタはムウマだけが残っているのを見て、ある出来事を思い出す。それはライコウの一件で、ロケット団幹部のバシヨウとブソンと対峙した時の出来事だ。

マリナ「ムウちゃん、くろいまなぎし！」

ムウちゃん「ムウウウウウウ！」

そんなケンタの言葉を気にしないがごとく、マリナはムウマにくろいまなぎしを指示した。これにより、ロケット団サイドのポケモン達は全て逃げられなくなった。

シモオタイ「し、しまった！」

カミオタイ「く、くろいまなぎしとは!？」

ロケット団達はケンタサイドのポケモン達がボールに戻されたことに油断して、マリナとムウマの術中にハマってしまった。

マリナ「(ごめんね、ムウちゃん!)ムウちゃん、ほろびのうた！」

ムウちゃん「ムウウウウウウウ...。」

ムウマはほろびのうたを歌い始める。

カミオタイ「ほろびのうたは、敵味方関係なく技を使ってしばらくすると戦闘不能になる恐ろしい技。これを使うために、アイツ等は自分たちのポケモンを戻したのか！」

ナカオタイ「俺達のポケモンはくろいまなぎしでボールに戻せないくっ、してやられたぜ。」

ほろびのうたは、技を使ってしばらくすると(ゲームでは、3ターン後)敵味方関係なく技を使った時に戦闘に出ていたポケモンを戦闘不能にさせる。この技は、『ぼうおん』の特性を持っていたり、ポケモンを交代さえすれば効果は消える。さらに、同時にくろいまなぎしを使われても、直ぐにほえるやふきとばしなどを使えば、くろいまなぎしから解放され、ポケモンを交代させれば効果は消える。ロケット団は後悔するが、後の祭りである。

ムウマ「ムウウウウウ...。」

ムウマは苦しそうにしながらも、ほろびのうたを歌い続ける。そして……

ロケット団のポケモン達「……………」

ロケット団のポケモン達は全て戦闘不能になる。

ムウちゃん「ムウ……。」

マリナ「ムウちゃん！」

ムウちゃんも目を回しながら、落ちてくる。マリナはそれをしっかり抱き留める。

マリナ「ご苦労様。それとごめんね、ムウちゃん。」

ムウちゃん「ムウ、ムウ。」

マリナはムウちゃんに無理を承知でほろびのうたを使わせたことを謝る。だが、そこはマリナとムウちゃんの信頼関係、それ程ムウちゃんは気にしていなかった。

カミオタイ「くっ、早くここは撤退だ！」

打つ手がなくなったロケット団は、すぐにここから撤退を開始する。だがそれをケンタ達が見逃すはずもなく、

アカネ「ちょい待ち！　ウチの命の次に大切なコガネジム、コガネシティをこないな目に遭わせたお返しはきっちりさせてもらうで！」

ケンタ「マリナが作ってくれた折角のチャンス。無駄にはしないぜ！」

ケンタはバクフーン、アカネはミルタンクを再びその場に出す。

アカネ「ミルタンク！」

ケンタ「バクフーン！」

アカネ・ケンタ「トドメの、Wころがる！」

ミルタンク「ミル！　ミィィルウウウウ！」

バクフーン「バアアアクウウウウ！」

2つのころがるが弾丸の速さでロケット団に向かってくる。

下っ端A「おい、はやくどけ！」

下っ端B「押すな！」

下っ端C「バカ！ どこ触ってんだよ！」

ナカオタイ「ええい、お前達何をしている！」

下っ端集団は逃げようにも、混雑し過ぎておもつように動けない。一歩間違えれば、将棋倒しに成りかねない。応援部隊で増強したところが仇あだとなった格好だ。

ミルタンク「ミルウ！」

バクフーン「バクウ！」

ミルタンク、バクフーンはそのままころがるで下っ端集団に直撃した。

下っ端集団「ギヤアアアアアアア！」

○山線トリオ「「「やな気分〜！」「」

下っ端集団、○山線トリオはそのまま突き飛ばされ、壁を突き破り、空の彼方へ消えていった。

ケンタ「あちゃ〜、壁壊しちゃったな（汗）」

アカネ「別にええんちゃう？ 飛んでった連中のせいによれば……」

マリナ「それもそうですね。」

壁を壊したことは、ロケット団の仕業にすることにした。壁を壊

したのはケンタとアカネだが、状況からして仕方ないことである。

マリナ「ん？ あいつらが落とした物かしら？」

マリナは落し物を見つける。

ケンタ「これって、カードキー？」

マリナが見つけたのは、カードキーだ。

アカネ「一応、持つといたほうがええんちゃう？ 後で役に立つかもしれないし。」

マリナ「それじゃあ、これも持っていきましようか？」

ケンタ達はカードキーを手に入れた。そして、アカネが持っていた回復のアイテムでポケモン達の体力を回復させた後、育て屋のポケモン探しの手がかりを見つける作業を再開した。たった今拾ったこのカードキーが後に大きく役に立つことになるとは、ケンタ達は知る由もなかった。

続く

ケンタ達の死闘（後書き）

ケンタ達は何とか乗り切った・・・

一方、サトシ達の状況やいかに！？

謎のシャッター、そしてアイツ等再び・・・（前書き）

サトシ、ヒカリ、コトネの目の前に、今作品でメインのギャクキヤラ（？）のアイツ等が登場！

ヒカリのトゲキツスは、戦闘を避ける方が一の為、手持ちから外している設定にします。なぜ、このようなことを書いたのかは今後を読めば分かります。

キャラの英語表記

サトシ ash

ヒカリ Dawn 効果音じゃありません（笑）

コトネ Iyia

謎のシャッター、そしてアイツ等再び・・・

コガネラジオ塔の局長の安否を確認し救出するため、ロケット団
下っ端の目を掻い潜りながら先を進んでいた。一応、変装はしてい
るが、確実にバレないという保障はない。先を進んでいたサトシ達
だったが・・・

サトシ「くっ、行き止まりか・・・。」

ヒカリ「なんなの、このシャッター。」

コトネ「どうやって開けるのかしら？」

サトシ達の進む先は大きなシャッターで嚴重に閉ざされていた。

ヒカリ「ここは一旦、引き返すしかなさそうね。」

コトネ「そうね。」

ピカチュウ「ピイカ・・・。」

サトシ達はシャッターのことは後回しにして、辺りの部屋から調
べることにした。ここでシャッターについての余談だが、実はカー
ドキーで開け閉めできるもので、そのカードキーというのは何を隠
そう、前回ケンタ達が拾ったカードキーである。当然だが、サトシ
達はこの事実を知らない。

サトシ「しっかし、物凄い数の部屋だな。」

サトシはラジオ塔内の部屋数に驚愕する。

コトネ「私も隅から隅までは見たことないけど、物置部屋を除いてもかなりの数だったわ。」

ヒカリ「これじゃあ、あのシャッターの手がかりを見つげるのに苦労しそうね。」

サトシ「まあ、根気よく探してみようぜ。」

ヒカリ・コトネ「「ええ。」」

ピカチュウ「ピイカ、ピイカ！」

そう言い、サトシ達はある部屋に入った。そこは少し大きな物置部屋のような所で、軽くポケモンバトルができそうなスペースである。辺りにはキズぐすりやげんきのかけらなどの回復の道具用、タウリンやインドメタシンなど能力アップの薬品用、さらにはコンテスタの道具用などと書かれたダンボールが並べて置かれていた。

ヒカリ「このダンボールに何か手がかりがありそうね。」

コトネ「とりあえず、中身を調べてみましょう。」

ダンボールのなかには何も書かれていないものもあったので、サトシ達はダンボールの中身を確認することにした。すると、その時だった。

？「お待ち！」

？「お前達、そこで何をしている！」

サトシ達が振り返ると、そこにはヤマトとコサンジ、そして数名のロケット団下っ端が立っていた。

コサンジ「だから、コサブロウだって言ってるだろう！ いい加減 覚えやがれ！」

ウルサイ、黙れ（怒） by・天の河

ヤマト「それはさておき、アンタ達見かけない顔だね。」

コサブロウ「お前達は一体何者だ？」

コサブロウの一言に、サトシ達は・・・

サトシ「『お前たちは何者だ？』の音がする・・・」

コトネ「遠路はるばるやって来た・・・」

ヒカリ「知恵よ！」

コトネ「愛よ！」

サトシ「勇気よ！」

ヤマト・コサブロウ「・・・。。。」

サトシ達の口上に呆然とするヤマトとコサンジ・・・コサブロウ。そんな2人を尻目にサトシ達の口上は続く。

ヒカリ「ヒカリある明日のために・・・」 親指を立てて、自分を指す。

サトシ「栄光ある未来の為に・・・」

コトネ「届け！ たぐいまれな私達の努力・・・」

サトシ「どんなライバルにも立ち向かう、アッシュ。」

ヒカリ「いつもいつでもダイジョーブ、ドーン。」

コトネ「常に積極恋愛指南、ライラ。」

ヒカリ「生まれ故郷は違えど・・・」

コトネ「このコガネラジオ塔におり立ち・・・」

サトシ「コガネシティの平穏をゲットだぜ！」

ピカチュウ「ピッ、ピカチュウ！」

ポツチャマ「ポツチャマ！」

マリル「リイル！」

サトシ、ヒカリ、コトネによる口上が終わり、ピカチュウさらにはボールから出てきたポツチャマとマリルも一緒にポーズを取る。

ヤマト「・・・って、アンタ達あたし達の真似しないでよ！」

コサンジ「ほとんどパクリじゃねえか！　って、俺はコサブロウだ！」

ヤマト、コサブロウが口上を真似されたことに激怒する。コサブロウに関してはコサンジと書かれたことにさらに頭に血がのぼる。

ヒカリ「失礼ね、これでもオリジナルよ。」

コトネ「でも我ながらバツチりってことね。」

サトシ「やっぱりあいつらの口上、やってみるもんだな。」

ピカチュウ「ピカ、ピカ！」

ポッチャマ「ポチャ、ポチャ！」

マリル「リイル、リル！」

サトシ達は自分たちの口上について、ちゃっかり自己評価していた。正直、テキストではあったが、書いていて楽しかったという作者の裏事情があったのは別の話（笑）

ヤマト「あの程度で満足するなんて、まだまだね。」

コサブロウ「俺達が本物の口上というものを見せてやる。」

ヤマトとコサブロウはいつものように口上を始める。だが、これも書くつもりは全くないのでカット。

ヤマト・コサブロウ「オイッ、作者（怒）」

ヤマトとコサン・・・コサブロウの訴えも空しく、この2人の口上はカットされた（笑）

ヤマト「アンタ達、あたしたちの邪魔をしようというのなら、少々痛い目に遭ってもらわよ。」

コサン「覚悟するんだな・・・って、いい加減にしろおお！」

コサン・・・コサブロウのうるさい悲鳴が響き渡る。

サトシ「ピカチュウ、ポカブ、ツタージャ、君に決めた！」

ピカチュウ「ピカ！」

ポカブ「ポカア！」

ツタージャ「タージャ！」

ヒカリ「ポツチャマ、ミミロル、オタチ、チャーム・アップ！」

ポツチャマ「ポツチャマ！」

ミミロル「ミンミン！」

オタチ「タツチィ！」

コトネ「マリル、キリンリキ、カポエラー、あなた達もお願い！」

マリル「リイイル！」

キリンリキ「リイイイン！」

カポエラー「カポカアアア！」

結局、ケンタ達と同様にサトシ達もロケット団したっば達とバトルすることになった。

サトシ「ヒカリ、オタチをゲットしてたんだ。」

ヒカリ「ええ、今回の選考会の休養日にアイリスと散歩してて、2匹のオタチに出会ったの。もちろん、アイリスと一緒にゲットしたわ。」

ヒカリは今回の予選選考会の休養日を利用して、アイリスと少し遠出をしていた。その時、偶然にも2匹のオタチに出会い、アイリスと協力して1匹はヒカリ、もう1匹はアイリスがゲットした。今回の予選選考会には使えなかったが、今後の2人の重要な戦力になることは間違いないであろう。

コトネ「そうなんだ、よろしくってことね。オタチ。」

オタチ「オタツチイ！」

オタチは初対面のサトシとコトネに顔を向ける。その様子からして、人懐っこい性格のようだ。オタチの事はこれくらいにして、サトシ達は次々とロケット団サイドのポケモン達を倒していく。ケンタ達の時と違うのは、ロケット団サイドの応援がなかなか来なかったことである。ケンタ達が先程○山線トリオとしたっば集団を一掃

したので、ロケット団サイドの人員が不足している模様だ。

サトシ「よし、あともう少しだ！」

ロケット団サイドのポケモンは数えるくらいの数になった。

ヤマト「お待ち！ これ以上好き勝手するとこれ押しちゃうわよ。」

ヤマトはそう言うと、右手に持っている怪しげなボタンのスイッチをサトシ達に見せつける。

ヒカリ「な、なんなのよ、そのスイッチ。」

ヒカリは恐る恐る聞いてみる。

コサブロウ「ハハハ、実はコガネシティのどこかに育て屋のポケモン達を監禁してある部屋がある。このスイッチはその部屋を爆破するためのスイッチなのだ！」

ヒカリ「な、なんですって!?!」

コトネ「やめて！ あのポケモン達は沢山のトレーナーやコーディネーター達から預かっている大切なポケモンなの！」

ヤマト「知らないね、そんな事。アンタ達がこれ以上手を出さなければ、済むことなんだけどねえ。」

コサブロウ「まっ、どうせポケモン達は売りさばくつもりなんだけどな。」

サトシ「な、なんてことを．．．。」

サトシ達は悪の限りをやり尽くすロケット団に対し、さらに怒りを覚えるが、育て屋のポケモン達を人質に取られて成す術なしの状況だった。

ヒカリ（一体、どうすれば．．．。）

何か打開策がないか考え込むヒカリ。

オタチ「タチィ．．．。」

ヒカリ（オタチ．．．、そうだ。オタチにはあの技が．．．。）

ふとオタチを見て、ヒカリは何か閃いたようだ。

ヒカリ「サトシ、コトネ。ここはあたしにまかせて。」

サトシ「えっ、ヒカリ？」

コトネ「ヒカリン、それってどういう．．．。」

ヒカリ「いいから、お願い。」

そういうと、ヒカリはサトシとコトネにウィンクをする。サトシとコトネは少し考え込んだが、

サトシ「分かった。ヒカリがそこまで言うんなら．．．。」

コトネ「サトシと私は、ヒカリンを信じるわ。」

ヒカリ「ありがとう、サトシ、コトネ。」

サトシとコトネはヒカリを信じることにした。

ヤマト「おやおや、作戦会議は終わったかい？」

コサブロウ「まっ、お前たちがどうあがこうが無駄だがな。」

ヤマトとコサブロウは余裕気にサトシ達を嘲笑う。

ヒカリ「オタチ、それじゃあ頼むわよ！」

オタチ「タッチ！」

ヒカリに促され、オタチはヤマトとコサブロウ、数名のロケット団したっぱのもとへと向かった。

オタチ「タッチ！」

ヤマト「な、なんなのよ……。」

オタチはヤマトをじーっと見つめる。ここでしばしの沈黙が流れる。

オタチ「オタ．．、オタツチイ！」

ヤマト「ギヤアアアア！」

コサブロウ「な、なんだコイツ!?」

オタチは狙いを定めて、ヤマトとコサブロウにひっかく攻撃を仕掛ける。そして残りのしたっぱ達にも次々とひっかくで攻撃する。

オタチ「タツチイ！」

ヤマト「よくもやったわね! もう怒ったわ! ポケモン達なんてどこかに吹っ飛んじやいなさい!」

ヤマトは顔を引つ搔かれた痛みと怒りのあまり、機械のスイッチを押した。

ヤマト「．．アレ?」

ヤマトはスイッチを何度も押すが、爆発音らしきものは聞こえない。

コサブロウ「ヤマト、お前の持つてるのスイッチじゃないぞ．．。」

ヤマト「どづいう．．。!?」

ヤマトは今自分の手にあるものを見て、目を疑った。なんとヤマトが持っていたのは爆弾のスイッチではなく、ただのキズぐすりであった。

コサブロウ「ギヤアアアアア、染みる〜！」

さらに、ヤマトによって噴射されたキズぐすりはコサブロウにかかっていった。キズぐすりをかけられたコサブロウは、目を感じる痛みにも暴れ出す。

ヤマト「ちょっと、コサンジ！ なにやってんのよ！」 そうさせたの、アンタだろ！

コサブロウ「コサブロウだああああ！」

キズぐすりは、用法・用量を守って正しく使用しましょう。

なにはともあれ、こうなれば形勢は一気にサトシの方に傾き、

オタチ「オタッチイ！」

ヒカリ「よくやったわ、オタチ。」

ヒカリはスイッチを奪うことに成功したオタチを誉める。ちなみに、読者の皆さんはお分かりだと思うが、オタチはひっかくの後に『どろぼう』を使って、ヤマトの手にあるスイッチをキズぐすりにすり替えたのである。

サトシ「それなら、こっちは遠慮なくいかせてもらうぜ。行け、ポカブ、ツタージャ！」

ポカブ「ポカブウ！」

ツタージャ「タージャア！」

コトネ「今までのをきっちりお返しさせてもらっわ。マリル、キリンリキ、カポエラー！」

サトシのピカチュウを除くポケモン達、コトネのポケモン達がロケット団に総攻撃を仕掛ける。

したつぱ達「アアアアアアア！」

したつぱ達は次々と空の彼方へ飛ばされ、星になった。残るはヤマトとコサン・・・コサブロウ、そして彼らのポケモン2体のみとなったが、

ヤマト「……………」

コサブロウ「……………」

ヤマトとコサブロウは静かにその場から立ち去ろうとした。だが、時すでに遅し……

ヒカリ「待ちなさい！」

コトネ「このまま逃げられると思ったら、大間違いってことね！」

いつの間にかヤマトとコサン・・・コサブロウの進行方向に回り込んだヒカリとコトネが仁王立ちで構える。

ヒカリ「あなた達だけは絶対に許さない！ ポツチャマ、うずしお！」

ポツチャマ「ポチャ！　ポオオオオチャアアアア！」

ヤマト・コサブロウ「ギャアアアアア！？」

哀れなロケット団2人組、彼らのポケモン2体もるともつずしおの餌食となる。

サトシ「今だ、ピカチュウ！　上手くつずしおに乗るんだ！」

コトネ「カポエラー、高速スピンドで上手くつずしおに乗るのよ！」

ピカチュウ「ピカピ！　ピカアアアア！」

カポエラー「カポ！　カアポカポオ！」

ピカチュウは何故かこの部屋にあった小型のサーフボードを使って、カポエラーはこうそくスピンドの回転を利用して上手につずしおに乗る。

サトシ「ピカチュウ、アイアンテール！」

コトネ「カポエラー、インファイト！」

ピカチュウ「ピカ！　ピイイイカアアアア！」

カポエラー「カポカポ、カッポオ！」

ピカチュウのアイアンテール、カポエラーのインファイトがヤマトとコサン……コサブロウのポケモン2体に炸裂する。つずしお

チ、どろぼうを覚えてたんだな。」

ヒカリ「ええ、途中でオタチがどろぼうを覚えていることを思い出してさっきの賭けに打って出たのよ。育て屋のポケモン達に申し訳ないけれど、あの状況を乗り切るにはこれしかないと思ったわ。」

コトネ「ホント、失敗したらおじいちゃんとおばあちゃんにどんな顔したらいいのか冷や冷やしたわ。まあ、成功したから結果オーライってことね。」

ヒカリのオタチのどろぼうを使った作戦には、サトシとコトネも心配したが、改めてヒカリを信じてよかったとサトシとコトネは思うのだった。

サトシ「さあ、シャッターのカギ探しを再開しようぜ！」

ヒカリ「ええ、そうね。あたし達の変装がバレた今、いつロケット団が襲ってくるか分からないしね。」

コトネ「あまりもたもたしてられないってことね。」

サトシ、ヒカリ、コトネは、再びシャッターのカギの手がかりを探しにいった。再度言うが、シャッターのカギであるカードキーはケンタ達が持っている。サトシ達はケンタ達と合流し、先へ進むことが出来るのだろうか・・・

続く

謎のシャッター、そしてアイツ等再び・・・(後書き)

徐々にロケット団を一掃していくサトシ達・・・

次回はどのような展開になるのやら・・・

地下通路の秘密（前書き）

なんか、段々アニメとゲームの混合作品になってるわ、ハハハ（汗）

今回、あの人が再登場します。

地下通路の秘密

サトシ達はヤマトとコサン．．．コサブロウ、その他したっぱ数名を倒し、行く手を阻んでいるシャッターのカギ探しを再開していた。その時だった。

ケンタ「サトシ！」

サトシ「ケンタ！」

偶然にも、サトシ達はケンタ達と合流した。

マリナ「こっちは大変だったわよ。変装はバレるわ、ロケット団とバトルになるわでホントに。」

アカネ「せやけど、ウチらのポケモンでソイツ等はやっつけたんやけどな。」

マリナとアカネは先程の○山線トリオ等に応戦したことを話す。

サトシ「ケンタ達もか!？」

ヒカリ「あたし達も、変装がバレてヤマトとコサンジ等とバトルになったのよ。」 コサブロウだ! by コサブロウ

コトネ「私達も、ポケモン総動員でなんとかやっつけたんだけどね。」

サトシ達も、先程のヤマトとコサン．．．コサブロウ等と応戦し

たことを話す。そして話題は、サトシ達の行く手を阻んでいるシャッターの事になる。

サトシ「俺達、今はシャッターのカギを探しているんだ。」

ケンタ「シャッター？」

ヒカリ「大きなシャッターがあの上に下ろされているのよ。開けるにはカードキーが必要みたいで。」

ヒカリがシャッターのカギがカードキーであることに触れると、

マリナ「カードキー？」

コトネ「そうよ。ケンタ、マリリン、アカネさん、何か知らない？」

コトネがケンタ達にカードキーについて何か知らないか聞いてみる。すると、

マリナ「知ってるも何も、今私達が持つてるんだけど……。」

マリナはそう言いながら、カードキーを取り出してサトシ達に差し出した。

コトネ「嘘！？ マリリン、それどこで見つけたの？」

マリナ「私達と応戦したロケット団が落としていったのよ。何か役に立つかもしれないと思って拾ったんだけど……。」

マリナはカードキーを手に入れた時のことを淡々と話す。

ヒカリ「でも、これでシャッターを開けて先に進むことが出来るわ。」

これで、シャッターの事に関しては解決した。次に育て屋のポケモン達の事に話題は移る。

ケンタ「俺達のほうはまだまだなんだよな。」

アカネ「ウチ等、こないに一生懸命に探してるちゅうのになかなか見つかれへん。」

マリナ「早く見つけ出さないと。。。。」

ケンタ達を見ると、明らかに焦りの表情が見えていた。

サトシ「そのことなら、俺達も収穫があるぜ。」

コトネ「ええ、ご丁寧にヤマトとコサンジがポケモン達の監禁場所を示した地図を落としていってくれたってことね。」だから、コサ（ry） by・コサブロウ

実はサトシ達も監禁された育て屋のポケモン達についての手がかりを手に入れていた。ヤマトとコサブロウはその監禁場所がどこかは言わなかったが、間抜けなことに監禁場所の見取り図を落としていった。

ケンタ「でも、この見取り図の場所がどこなのか分かんないとな。。。。」

サトシ達は見取り図を見ながら悩みに悩む。

アカネ「……どこかで見たことある思うたら、これちかつうるの見取り図やないけ。」

アカネ以外「えっ?」

アカネはその見取り図に描かれている構造に、見覚えがあった。アカネ以外はそれに驚きの表情を見せる。ここでアカネについての補足情報を一つ。アカネはかなりの方向音痴で、サトシがジム戦を挑んだ時は、コガネシティを案内すると言っておきながら、未知の冒険（爆）をさせた過去がある。そんなアカネが何故か、ちかつうるの構造だけは把握していた。

アカネ「ウチ、ちかつうるはよく行くんや。いわば、庭みたいなところちゆうことやな。」

アカネはちかつうるのことを熟知していた。

サトシ「……じゃあ、なんで道によく迷うんですか?」

アカネ「……それはウチの愛嬌ちゆうもんや。それくらい許してーな、サ・ト・シはん。」

サトシ「……。」

アカネは『てへっ』と言わんばかりにウィンクしながら可愛い仕草を取る。その行動に一同は苦笑を浮かべるしかなかった。その後、マリナが持っていたカードキーをサトシ達に手渡し、コトネが所持していた見取り図をケンタ達に手渡した。そして、サトシ達は

そのままシャッターへと向かい、ケンタ達はラジオ塔を出て、再びちかつつろを目指すこととなった。

マリナ「ふう、ちかつつろにたどり着いたのはいいけれど・・・。」

ケンタ「さつきより、ロケット団の数が多くなってるな・・・。」

アカネ「まあ、ウチ等があれだけラジオ塔で火と暴れしてもうたらしゃあないやる。」

ケンタ達はちかつつろに見つからずに到着したのは良いが、その道中、ロケット団員の人員増強がなされていたので、その目を掻い潜るのに一苦労だった。彼らがラジオ塔でヤマトとコサブロウ、○山線トリオを含むロケット団員を一掃したので当然といえば当然の状況なのだが・・・

アカネ「とりあえず、ケンゾーのおっちゃんところに戻るか。」

マリナ「そうですね。」

ケンタ「ついでにこのちかつつろで怪しいところがないか聞けますし。」

アカネ「ウチもよくここに来るとは言え、全部知ってるわけやなしな。」

ケンタ達はケンゾーが待機している洋服屋の倉庫まで行った。

ケンゾー「おや？ アカネちゃん、それにケンタ君にマリナちゃん、おかえり。」

ケンゾーは驚いた表情で、ケンタ達を出迎える。

アカネ「おっちゃん、急で悪いんやけどこのちかつつろで怪しいところとかないかいな？」

ケンゾー「い、いったいどうしたんだい？」

アカネはケンゾーにこれまでの経緯、そしてこのちかつつろに育て屋のポケモン達の監禁場所の手がかりがあることも話した。

ケンゾー「そういうことか……。」

ケンゾーは納得した様子だ。

マリナ「なにか知りませんか？」

ケンゾー「うーん、そういえばこのちかつつろの奥に今はめったに使われない部屋があったな。」

ケンタ「部屋……ですか？」

ケンゾー「俺がここの在庫処理をしていた時に見かけたんだけど、数週間前から怪しい連中がうるついていたこともあったな。」

ケンゾーの話によると、ちかつつろの奥の部屋の前を怪しい連中が行き来していたという。どうやら、数週間前から今回の事件の予兆はあった模様だ。

アカネ「そこまで案内してくれへん？」

ケンゾー「一応できるにはできるけど、あの部屋はカギがないと開けられないんだ。しかもそのカギはラジオ塔の局長が持っているんだ。ラジオ塔の局長は、このちかつうるの管理責任者も兼ねてるからね。」

ちかつうるの奥の部屋に入るには、カギが必要なようだ。しかもそのカギの所有者は先程までケンタ達がいたラジオ塔の局長のとこと。

マリナ「ええ、それじゃあまたラジオ塔に戻らなくちゃいけない訳!？」

ケンタ「マジかよ!？」

アカネ「でも、コガネシティじゅうはもうロケット団だらけやで。今から戻る言うのも無理や・・・。」

先程も言ったが、コガネシティはその後の人員増強でロケット団の監視が強化されている。ちかつうるまで戻るのに奇跡的に見つかりはしなかったが、またラジオ塔に引き返す際に必ず見つからないという保障はない。

マリナ「ねえ、ラジオ塔にはまだサトシ達がいたわよね?」

ケンタ「ああ、でもサトシ達はここのカギのこと知らないと思うぞ。何か連絡が取れる方法が・・・あつ、ポケギア!」

ケンタはジョウトのトレーナーの連絡手段のアイテムであるポケギアの存在を思い出し、自分のポケギアを取り出す。

アカネ「そっか、それでコトネはんのポケギアにつなげれば・・・。」

ケンタ「今、やってみます。」

ケンタはポケギアでコトネのポケギアへのアクセスを試みる。だが、やはりロケット団が妨害電波を流しているらしく、なかなかつながらない。

ケンタ「・・・くっ、つながらない。」

マリナ「何度も試してみましよう。私もやってみるわ。」

アカネ「うちも丁度持つてるさかい、協力するで。」

ケンタ達はこのちかつうろから一步も動けない状態なので、カギのことを知らせるために、コトネのポケギアへのアクセスを何度も試すことにした。はたして、ケンタ達はサトシ達と連絡を取ることが出来るのか・・・

続く

地下通路の秘密（後書き）

コガネラジオ塔の運命はサトシ、ヒカリ、コトネに託された・・・

ロケット団、最強の刺客！？（前書き）

ゲームから、あのロケット団幹部が登場！

局長室へと向かうサトシ達に牙を向く！

ロケット団、最強の刺客！？

時を少々遡さかのぼって、サトシ達はケンタ達から貰ったカードキーを手にして、自分たちの行く手を阻んでいたシャッターの前にたどり着く。

コトネ「さて、このカードキーをどうやって使うのかしら？」

ヒカリ「あのカードリーダーに差し込むんじゃない？」

カードキーのカードリーダーは簡単に見つけた。カードキーを手に入れているコトネはカードキーをカードリーダーに差し込みスキャンする。すると、

ピンポーン！

効果音とともにシャッターのロックが解除され、閉ざされたシャッターがゆっくりと上げられた。

サトシ「よし、これで先に進めるぞ。」

ヒカリ「局長を助けるためにも急ぎましょー！」

サトシ達が先を進もうとした丁度その時だった。

？「そこまでよ！」

コトネ「だ、誰!？」

サトシ達が声のする方へ振り返るとそこにはロケット団したっぱ2人と幹部らしき女性1人が立っていた。

？「あたくしはアテナ。ロケット団最高幹部4人衆の一人よ。」

サトシ「ロケット団最高幹部だと……。」

幹部らしき女性の正体はアテナだった。

アテナ「うふふふ、これ以上あなたたちみたいなきどもをいつまでものさばらせておいたら、あたくしたちロケット団、しいてはボスであるサカキ様のプライドはキズついて、キズついて、キズだらけになってしまうのよ！」

アテナは不敵な笑みを浮かべながら話す。

アテナ「というわけで、あなたたちにはあたくしとここにいるスラムクのしたっぱ2人の前にひれ伏してもらおうわ。覚悟なさい！」

そういうと、アテナはアーボック、したっぱの片方はマルノーム、もう片方はドテッコツを出した。

サトシ「どうやら、バトルしなきゃいけないようだな。」

ヒカリ「ええ、ポケモン達の疲れがピークに達しているだろうけれど、仕方ないわ。」

コトネ「ごめんね、みんな。でもこのバトルは負けられないの!」

サトシ達もモンスターボールに手を掛け、それぞれのポケモンを戦闘に出す。

サトシ「ポカブ、君に決めた!」

ヒカリ「ミミロル、チャーム・アップ!」

コトネ「頼んだわよ、マリル!」

ポカブ「ポカアアアア!」

ミミロル「ミンミロー!」

マリル「リルリイル!」

ポカブ、ミミロル、マリルがそれぞれ出てきた。ここで少し、補足情報。実はアテナとロケット団したつばはそれぞれ一体ずつしか持っていない。対するサトシ達は3体ずつ持っていて、数的に有利である。だが、サトシサイドのポケモン達は、ヤマトとコサン．．．コサブロウ達との戦闘で疲労がピークに達している。一応、アカネから回復の道具を分けてもらってはいるが、あくまで応急処置である。

サトシ「ポカブ、たいあたり!」

コトネ「マリル、あなたもたいあたり！」

ポカブ「ポカ．．．、ポカアアアア！」

マリル「リイイイイル！」

まず、先手を取ったのはサトシ達だ。ポカブとマリルのWたいあたりでロケット団サイドのポケモン達に攻撃を仕掛ける。

アテナ「かわしなさい、アーボック！」

したっぱA「かわせ、マルノーム！」

したっぱB「かわすのです、ドテッコツ！」

アーボック「シャアアアポ！」

マルノーム「マルノオオオ！」

ドテッコツ「ドテッ！」

これはあっさりかわされる。

ミミロル「ミンミー！」

だが、その際にミミロルがとびはねるでドテッコツの真上にまわっていた。

ヒカリ「ミミロル、れいとうビーム！」

「ミミロル」「ミンミイイイイ！」

ミミロルのれいとうビーム。

ドテツコツ「ドテエエエエ！」

攻撃はそのままドテツコツにクリーンヒットした。

したっばA「マルノーム、のしかかり！」

マルノーム「マアアアルノオオオオ！」

ポカブ、ミミロル、マリルが一点に集まったところをマルノームののしかかりが襲い掛かる。

サトシ・ヒカリ・コトネ「……かわせ（かわして）！」「」「」

ポカブ「ポカ！」

ミミロル「ミンミイ！」

マリル「リイル！」

ポカブ、ミミロル、マリルはそれをあっさりかわした。

アテナ「あなたたち、なかなかやるじゃない。」

アテナはサトシ達のポケモンのコンビネーションの良さに驚愕の表情をする。

アテナ「だったら、そのあなた達の素晴らしいコンビネーション崩してあげる。」

すぐにその表情を不敵な笑みに変えた。

したつぱA「マルノーム、ヘドロばくだん！」

マルノーム「マルノオオオオオ！」

マルノームはヘドロ爆弾を次々に発射する。ポカブ、ミミロル、マリルはそれに動じず、巧みなステップでかわす。ところが、

アーボック「シャアアアボ！」

ポカブ「ポカツ!？」

ポカブは自分に近づいてくるアーボックの存在に気づかず、

ポカブ「ポカア……。」

サトシ「ポカブ!？」

アーボックのまきつくの餌食になってしまう。

アテナ「へびにらみ!！」

アーボック「シャアアアア！」

ポカブ「ポカ……。」

アーボックのへにらみにより、ポカブはまひ状態となった。

「ミミロル「ミンミィ！」

「マリル「リイル！」

それを見たミミロルとマリルが援護にまわるが、

「マルノーム「マルノオオオム！」

「ミミロル「ミミィ!？」

「マリル「リルル!？」

マルノームがミミロルとマリルの行く手を阻む。さらに、

「したっばA「どくどく攻撃！」

「マルノーム「マルウウウウ！」

相手をもつどくにするどくどく攻撃がミミロルとマリルに襲い掛かる。

「ミミロル「ミミィ！」

「マリル「リィィイル！」

「ヒカリ「ミミロル!？」

「コトネ「マリル!？」

かわす間もなく、ミニロルとマリルはどくどくを喰らい、もつどく状態となった。

アテナ「アーボック、ベノムショックよ！」

アーボック「シャアアアボック！」

そのままでも追加ダメージが倍増するもつどく状態であるが、ベノムショックでトドメを刺すアーボック。どうやらじわりじわりとダメージを与える気はロケット団サイドになく、完膚なきまでにサトシ達のポケモンを倒しにいつているようだ。

ミニロル「ミンミン。。。」

マリル「リイル。。。」

ミニロルとマリルは一撃でKOされた。

ヒカリ「戻って、ミニロル。」

コトネ「戻って、マリル。」

ヒカリはミニロル、コトネはマリル、戦闘不能になったポケモンに申し訳ない気持ちを抱きながらボールに戻した。その後、サトシのポカブもドテッコツの攻撃にKOされ、サトシサイドの最初の3体全てが倒される圧倒的不利な状況となった。

サトシ「頼む、ツタージャ！」

ヒカリ「次はあなたよ、オタチ！」

コトネ「頑張つて、キリンリキ！」

ツタージャ「タアアアジャ！」

オタチ「タツチィ！」

キリンリキ「リィィィィン！」

サトシはツタージャ、ヒカリはオタチ、コトネはキリンリキをボールから出した。圧倒的不利な状況のサトシ達はここから巻き返すを図ることが出来るのか！？

続く

ロケット団、最強の刺客！？（後書き）

サトシ、ヒカリ、コトネ、ピーンチ！

この状況を乗り越えることができるのか・・・

アテナ達の脅威〜前編〜（前書き）

突如、現れたアテナ達に翻弄され、最初の1体を倒されたサトシ達
・

ここから、巻き返しを図ることが出来るのか!?

アテナ達の脅威く前編く

いきなり最初のポケモンを倒され、不利な状況に陥ったサトシ達。次のポケモンには、サトシはツタージャ、ヒカリはオタチ、コトネはキリンリキを出している。

ヒカリ「オタチ、でんこうせっか!」

コトネ「キリンリキ、こうそくいどう!」

オタチ「オタツチイ!」

キリンリキ「リイイイン!」

またもや先手を取ったのはサトシ達である。オタチとキリンリキがスピードで相手を攪乱させる。

ドテッコツ「ドテ、ドテツ!?!」

したつぱBのドテッコツはそのスピードに躊躇する。

サトシ「ツタージャ、ドテッコツにつるのむち!」

ツタージャ「タアアアジャ!」

ドテッコツが躊躇しているところへ、ツタージャがつるのムチで動きを封じ込めに入る。ドテッコツはかわす間もなく、つるのムチによって動きを封じられた。

コトネ「キリンリキ、しねんのずつき！」

ヒカリ「オタチ、ひっかく攻撃！」

キリンリキ「リイイイインリイ！」

オタチ「オタアアアチイイイイ！」

動きを封じられたドテツコツに対して、キリンリキのしねんのずつきとオタチの思いつきりのひっかくによるダブル攻撃が炸裂する。

ドテツコツ「ドテエ！」

ドテツコツは大ダメージを喰らう。最初のポケモン達を倒されたサトシ達にも勝機が見えたかに思われた。

アテナ「アーボック、どくばり！」

したつぱA「マルノーム、ヘドロばくだん！」

アーボック「シャアアアアボック！」

マルノーム「マルノオオオオ！」

ツタージャ「タジャ！？ タジャアアアア！」

オタチ「チイイイイ！」

キリンリキ「リイイイイ！」

サトシ「ツタージャ！」

ヒカリ「オタチ！」

コトネ「キリンリキ！」

ツタージャ、オタチ、キリンリキはアーボックとマルノームの反撃を喰らってしまう。だが、3体とも辛うじて持ちこたえる。

したっぱA「マルノーム、のしかかり！」

マルノーム「マルノオオオオオ！」

さらに、ツタージャに向けてのしかかりで攻撃を仕掛けるマルノーム。

サトシ「かわせ！」

ツタージャ「タジャ！」

これはすばやくかわしたが、

したっぱA「れいとうビーム。」

サトシ「何!?!」

なんと、マルノームはれいとうビームを覚えていた。

マルノーム「マアアアルウウウウー！」

マルノームは躊躇なくれいとうビームをのしかかりをかわしたばかりのツタージャ目がけて発射した。

ツタージャ「タジャア！」

ツタージャはそのまま効果抜群のダメージを喰らってしまう。

ツタージャ「タジャア．．．。」

サトシ「クツ．．．。」

その上、ツタージャは片足を凍らされてしまった。これではスピード攻撃を仕掛けることはもちろん、思うように動くことすら出来ない状態となった。

したっばA「マルノーム、のしかかりだ！」

マルノーム「マアアアアルノオオオオオ！」

さらに情け容赦なく、ツタージャに攻撃をしかけるマルノーム。

ツタージャ「タジャ、タジャ！」

ツタージャは逃げようともがくが、片足が凍ってて思うように動けない。

キリンリキ「リイイイイン！」

マルノーム「マルウ!?!」

そこへ、キリンリキがしねんのずつきでマルノームの妨害に入
た。

サトシ「サンキュー、コトネ！」

コトネ「いってことね。」

その後もロケット団サイドによるツタージャへの無情な集中攻撃
が続けられたが、その度にキリンリキとオタチがツタージャを庇う
形で援護する。さらにオタチはてだすけを覚えていたため、その後
の反撃にもつながり徐々にではあるが、ロケット団サイドのポケモ
ン達の体力を削っていった。

アテナ「アーボック、かみくだく！」

アーボック「シャアアアアボック！」

したっぱA「マルノーム、のしかかり！」

マルノーム「マアアアアルウウウウ！」

したっぱB「ドテッコツ、トドメをさすのです！」

ドテッコツ「ドテッコオツ！」

だがそれでも、ツタージャへの集中攻撃は止まない。

ツタージャ「タジャア……。」「

サトシ「くっ、こうなったら（ツタージャ、メモメロ！」

ツタージャ「タジャ！ タアアジャア〜。」

万事休すのツタージャにサトシはメロメロを指示。ツタージャは指示通りにメロメロを発動させる。すると、

マルノーム「マル！？ マルウ〜。」

ドテッコツ「ドテツ！？ ドテエ〜。」

メロメロを喰らったマルノームとドテッコツは、たちまちメロメロ状態となる。どうでもいいことだが、このことでマルノームとドテッコツはオスであることが判明した。

アーボック「シャアアアアボック！」

アテナ「残念だったわね。あたしのアーボックには効かなかったみたいね。」

アテナのアーボックにはメロメロは効かなかった。アテナのアーボックはメスである。

アーボック「シャアアアアボ！」

ツタージャ「タージャ……。。」

今度こそ万事休すのツタージャ。

オタチ「タツチィ！」

キリンリキ「リイイイイン！」

ツター ज्याに襲い掛かるアーボックをオタチとキリンリキで何とか食い止める。

アテナ「ベノムシヨック！」

アーボック「シャアアアアボ！」

オタチ「タチイ！」

キリンリキ「リイイイイ！」

だが食い止めに入った2体とも、アーボックの反撃を間近に喰らってしまった。

オタチ「タチイ．．．。」

キリンリキ「リイン．．．。」

ヒカリ「オタチ！」

コトネ「キリンリキ！」

オタチ、キリンリキともにそのままダウンした。

サトシ「ツター ज्या、オタチとキリンリキの敵討ちだ！ 最大パワーでリーフストーム！」

ツター ज्या「タジャ！ タアアアアジャアアアア！」

凍りついた足を抱えながらのツタージャ最大パワーのリーフストームが炸裂する。

アーボック「シャアアアアア！」

マルノーム「マアルノ〜！」

ドテツコツ「ドテエ〜！」

ロケット団サイドの3体はかわす間もなく、大ダメージを受ける。

ツタージャ「タジャ……。タジャ!？」

ところが、ツタージャは力尽きてそのままダウンした。

サトシ（良くやった。そしてすまない、ツタージャ。）

サトシは身動きの自由を奪われながらも健闘したツタージャを労いつつ、申し訳なさを感じながら、ツタージャをボールに戻した。

サトシ「ピカチュウ、全てをお前に賭ける!」

ヒカリ「ポッチャマ、もうあなたしかいないの。お願い!」

コトネ「カポエラー、あなたもお願い!」

ピカチュウ「ピイカ!」

ポッチャマ「ポチャ!」

ピカチュウとポツチャマはサトシ達のもちには自分達しかいないと悟り、覚悟を決めた。コトネはモンスターボールに手を掛け、3体目のカポエラーを出した。数的有利な状況から一転、思わぬ形
成となったサトシ達に勝機は見えるのか・・・

続く

アテナ達の脅威〜前編〜（後書き）

さらなる窮地に立たされたサトシ達・・・

ヤマトとコサンジとは桁違いの強さを誇るアテナ達にサトシ達の勝機はあるのか!?

アテナ達の脅威〜後編〜（前書き）

HG・SSのロケット団幹部のザコさ加減には心底うんざりさせられるWWW

ちなみに今作品ではロケット団は少し強くしてあります。なのでこの事件の後に解散なんてことはありませんので、ご了承ください・・・

アテナ達の脅威〜後編〜

ロケット団最高幹部アテナ、ロケット団Sランクしたつぱ2人のポケモンを前にして健闘は見せたものの、自分のポケモンそれぞれ2体ずつ倒されたサトシ、ヒカリ、コトネ。このバトルの全てを、ピカチュウ、ポッチャマ、カポエラーの粘り強さに賭ける。

アテナ（あれがサカキ様が目に付けているピカチュウね。なかなか強そうじゃないの。）

アテナはサトシのピカチュウを見て、思った。どうやら、ロケット団最高幹部達の中でも、サトシとパートナーのピカチュウに関してかなり噂になっている様子だ。

したつぱB「ドテッコツ、ストーンエッジ。」

ドテッコツ「ドオオオオオテエコオオオオツ！」

バトルの方は、まずロケット団サイドが先手を取った。ドテッコツのストーンエッジがピカチュウ、ポッチャマ、カポエラーに襲い掛かる。

サトシ「ピカチュウ、アイアンテール！」

コトネ「カポエラー、こうそくスピリン！」

ピカチュウ「ピカ！ ピカアアアア！」

カポエラー「カポオ！ カポカポカポオ！」

負けじとピカチュウとカポエラーが弾き返す。

ポツチャマ「ポチャア！」

さらに、素早くポツチャマが飛び出して、

ヒカリ「ポツチャマ、バブルこうせん！」

ポツチャマ「ポオオオチャアアアア！」

バブルこうせんをドテッコツにお見舞いする。

ドテッコツ「ドテエ！」

ドテッコツはダメージを受ける。ピカチュウ、ポツチャマ、カポエラーの見事な連携を利用したカウンター攻撃だ。

アテナ「アーボック、ポツチャマにかみくだく！」

アーボック「シャアアアアボック！」

そこへ、アーボックによる反撃がポツチャマを襲う。

ポツチャマ「ポチャア！」

ヒカリ「ポツチャマ！」

ポツチャマはかわしきれずに、そのままダメージを受ける。サトシサイドもロケット団サイドもまさに引けを取らない攻防である。

サトシ「行けえ！ ピカチュウ！」

そのような状況下でも、サトシ達は手を緩めない。

ピカチュウ「ピカア！」

ピカチュウはカポエラーの巧みな足の動きを踏み台にして、アーボックに突進していく。

サトシ「そこから、エレキボールを放て！」

ピカチュウ「ピカア、ピカア、ピイイカアアアア！」

ピカチュウは素早くエレキボールを放つ。それも一発ではなく、何発も……

アーボック「シャボ、シャボ、シャアアアアボ！」

何発ものエレキボールはそのままアーボックにクリーンヒット。カポエラーの足の動きを踏み台にした反動で、ピカチュウもエレキボールもアーボックに向かってくるスピードが上がっている。アーボックはかわしきれなかった。

したっぱA「マルノーム、ピカチュウにのしかかり！」

したっぱB「ドテツコツ、なしくずし！」

マルノーム「マアアアルウウウウ！」

ドテッコツ、「ドテコオツ！」

向かってくるピカチュウに狙いを定めて攻撃を仕掛けようとするが、

ヒカリ「ポツチャマ、バブルこうせん！」

コトネ「カポエラー、こうそくスピン！」

ポツチャマ「ポチャアアアア！」

カポエラー「カポカポカポオ！」

マルノーム「マルウ！」

ドテッコツ「ドテッコツ！」

ポツチャマとカポエラーがそれを食い止めに入り、ピカチュウは難を逃れた。その後も両者譲らぬ激しい攻防を繰り返すが、徐々に形勢はサトシサイドの方に傾いていく。

コトネ（思ったより長引いているわ。局長のこと、監禁されているポケモン達の安全を考えたら、ほとんど時間がないってことね。）

コトネは何かいい策はないか考える。

コトネ（そうだね。この手でいこうってことね。）

コトネは何か閃いたようだ。

コトネ「ねえ、サトシにヒカリン。ここはまずカポエラーに攻撃させて。」

サトシ・ヒカリ「えっ!?!」

突然、声を掛けられたサトシとヒカリはキョトンとする。

コトネ「私にいい考えがあるってことね。」

コトネは2人に自信気に言う。

サトシ「分かった、コトネがそこまで言うんなら・・・。」

ヒカリ「コトネを信じてるわ。」

コトネ「ありがとう、サトシ、ヒカリン。」

コトネは自分を信じると言ってくれたサトシとヒカリに対して礼を言う。そして、カポエラーに技の指示を与える。

コトネ「カポエラー、こうそくスピーン!」

カポエラー「カポカポオ!」

カポエラーはこうそくスピーンでロケット団サイドのポケモン3体に近づく。

したっぱA「マルノーム、ヘドロばくだんだ!」

したっぱB「ドテッコツ、ストーンエッジで妨害しなさい。」

マルノーム「マアアアルノオオオオ！」

ドテツコツ「ドテツ、ドテエコオツ！」

当然、ロケット団サイドから少しでも近づかせぬよう妨害が来た。

カポエラー「カポツ、カポツ、カポオ！」

カポエラーはその妨害を舞を舞うかのごとく、巧みにかわす。そして、カポエラーとロケット団サイドのポケモン3体との距離は徐々に縮まっていく。

コトネ「カポエラー、3体に向かってトリプルキック！」

アテナ「ト、トリプルキック!?」

これにはアテナも驚きの表情を見せる。コトネはロケット団サイドのポケモン3体が集まったところをカポエラーのトリプルキックで一網打尽にしようという手に打って出たのだ。今回はカポエラーのみの行動なので、失敗した時のリスクは大きい。相手の反撃をかわしながら攻撃に向かうのは巧みな動きを得意とするカポエラーにとっては朝飯前である。

カポエラー「カポカポオ！ カポオ！」

マルノーム「マルウ！」

カポエラー「カポオ！」

アーボック「シャアアアア！」

カポエラー「カポオ！」

ドテツコツ「ドテツコオツ！」

ちなみにトリプルキックは命中するたびに威力が上がる技なので、最後のドテツコツは大ダメージを受けた。

コトネ「私の作戦はトリプルキックだけじゃないってことね。」

サトシ「えっ？」

ヒカリ「コトネ、どういう。。。。」

サトシとヒカリは驚きの表情を見せる。

マルノーム「マルマルウ！」

アーボック「シャボシャアボック！」

ドテツコツ「ドテエコオツ！」

3体はカポエラーに対して身構えのポーズを見せる。

カポエラー「カポオ、カアポオ。」

カポエラーは3体を挑発しているようだ。

マルノーム「マルウウウウ（怒）」

アーボック「シャアアアボ（怒）」

ドテツコツ「ドテコオオツ（怒）」

カポエラーの挑発に乗り、ロケット団サイドの3体は怒りだした。もうお分かりであろう。カポエラーはいばるを使ったのだ。3体は一斉にカポエラーを攻撃する。その結果、

カポエラー「カポオ．．．。」

カポエラーは戦闘不能になった。

マルノーム「マル、マルウウウウ！」

アーボック「シャボシャボ、シャアアアア！」

ドテツコツ「ドテ、ドテエエエエコオツ！」

したつばA「おい、お前達。落ち着くんだ！」

ところが、ロケット団サイドの3体はいばるの効果でこんらん状態となり、完全に我を忘れている。おまけにかなり隙だらけの体勢だ。

コトネ「今よ！ サトシ、ヒカリン！」

そう、もう一つのコトネの作戦とは、カポエラーのいばるを使って相手をこんらん状態にさせ、ピカチュウとポッチャマに攻撃の隙を与えることだった。

ヒカリ「分かったわ。ポツチャマ、うずしお！」

ポツチャマ「ポオオオオチャアアアア！」

サトシ「コトネの作戦、無駄にはしないぜ。ピカチュウ、うずしおに向かってエレキボール！」

ピカチュウ「ピカア！　　ピイイイイカアアアア！」

ポツチャマはうずしおを発生させ、ピカチュウはそのうずしおに向かって、大きなエレキボールを発射した。これにより、巨大な電気を帯びたうずしおが出来上がった。このうずしおはロケット団サイド3体に向かっていく。名づけるとしたら、『エレキうずまき』といったところか。

アーボック「シャアアアア！」

マルノーム「マルウウウウ！」

ドテッコツ「ドテエエエエ！」

3体は大ダメージを受けた。

アテナ「くっ、ここは撤退よ！」

したっぱA・B「はっ！」

この状況を覆すことが困難だと感じたアテナは、したっぱAとしたりっぱBとともに姿を消した。

コトネ「カポエラー！」

死闘を終えたサトシ達。まず、コトネがカポエラーのもとに駆け寄る。

コトネ「ごめんね、カポエラー。でも、あなたなら成功してくれるって信じてたわ。ありがとうってことね。」

カポエラー「カポカポオ！」

自分に対する謝罪と感謝の気持ちを述べるコトネに、弱弱しくも気にするなど言わんばかりのポーズを取るカポエラー。その後、サトシ達は辺りに散らばっていた回復の道具をポケモン達に使って、ピカチュウとポッチャマ、マリル以外のポケモンをボールの中へと戻した。

サトシ「しかし、すげえな。コトネもとっさにあんな作戦思いつくなんて。」

コトネ「いやあ、すごいのは私じゃなくてカポエラーってことね。カポエラーには無理させちゃって申し訳ない気持ちでいっぱいだけど……。」

ヒカリ「それにしても成功するなんてすごいわ。コトネとカポエラーのコンビネーションがあってこそその結果だと思うの。」

サトシとヒカリはコトネとカポエラーを褒め称える。

コトネ「なんだか、さっきのヒカリンのオタチのといい、私のカポ

エラーのといい、サトシに無茶するなって言っておきながら、人のこと言えないわね。」

ヒカリ「ふふ、そうね。ポケモンに無理を強いるようならトレーナーとしてもコーディネーターとしてもまだまだだね。」

ヒカリとコトネは向かい合いながら、少しばかりの笑みをこぼす。

サトシ「俺は2人とポケモン達が大丈夫なら気にしないぜ。さあ、急ごうぜ！」

コトネ「そうね。」

ヒカリ「ええ。」

こうしてサトシ、ヒカリ、コトネはアテナ達の奇襲を退け、再び局長室へと足を進めた。

続く

アテナ達の脅威（後編）（後書き）

アテナ達を退けたサトシ達だが、さらなる刺客が・・・

局長救出、と思いきや・・・（前書き）

サトシ達、ついに局長室へ！

かなり、継ぎ足し継ぎ足しを繰り返したのでおかしな表現になっていると思います。

局長救出、と思いきや・・・

突如襲撃してきたアテナ達を退け、ようやくコガネラジオ塔の局長室へとたどり着いたサトシ、ヒカリ、コトネ。

ヒカリ「いたわ！」

サトシ「大丈夫ですか？」

サトシ達は局長室に入ってすぐ、ラジオ塔局長を見つけることが出来た。

局長「ああ、君達私を助けに来てくれたのか。礼を言っぞ。」

局長は自分を助けに来たサトシ達に感謝の意を述べる。

コトネ「さあ、一刻も早くここから抜けましょう。」

サトシ達は局長を局長室から連れ出そうとする。だが、

コトネ「ん？ これは何かしら？」

局長「あつ、それは・・・。」

コトネが床に落ちていた紙切れを手に取った。局長はそれを見て、なんだか都合が悪そうな表情だ。

コトネ「こ、これは。サトシ、ヒカリン、これを見て！」

サトシ「な、なんだ、急に。」

ヒカリ「一体どうしたの、コトネ？」

コトネはサトシとヒカリに見えるように持っていた紙切れを差し出した。その紙切れはwordで書かれた文書で、『ロケット団勢力増強計画（仮）のご案内』と冒頭に書かれてあった。

コトネ「局長、これはいったいどういうことですか？」

ヒカリ「説明してください。」

コトネとヒカリの問いかけに対し、局長は、

局長「フッフ、見られてしまったては仕方ない。実は我輩は、ラジオ塔の局長ではない。」

サトシ「ど、どっいう意味だ？」

サトシは敬語を使うのを止めて、局長に言葉で詰め寄る。

局長（？）「こっいう意味だ！」

局長（？）は自らの正体を明かした。局長に成りすましていたのはなんと、ロケット団最高幹部の一人であるラムダだった。

ラムダ「くそー、せっかくコガネシティを街ごと乗っ取って俺がラジオ塔局長に成りすまし、全国にロケット団のためのラジオ放送を配信しようと思ったのに、とんだ邪魔が入ったものだ。」

ラムダは両手を腰に当てながら、少々バツが悪そうに喋る。

ヒカリ「な、なんですって!?!」

サトシ「そんなことはさせないぜ!」

コトネ「今すぐ、コガネシティを解放しなさい!」

ラムダの話によれば、今回のロケット団はかねてから狙っていたコガネシティを街ごと占拠、ラジオ塔からロケット団のための放送を配信することで他の組織を牽制、ロケット団の勢力を全国さらには世界に知らしめるのが目的だったようだ。

ラムダ「どうやら簡単にはいかないようだな。俺のポケモン達でお前達のポケモンを再起不能にしてやる!」

コガネラジオ塔の命運をかけ、ラムダとのポケモンバトルが開始された。

ドガース「ドガース。」

マタドガス「マアタドガス。」

サトシ「・・・くっ。」

回復の道具を使っているとはいえ、先程のアテナ達とのバトルが尾を引いているようだ。ラムダのドガース、マタドガス軍団を前に苦戦している。

ラムダ「こっちもあまり時間を掛けてられないんでね。さっさと終

わらせてもらっぞ。行け、ドガース、マタドガス達よ。一斉攻撃だ
！」

ドガース「ドガース。」

マタドガス「マアタドガス。」

ドガース、マタドガスによるへドロこうげき、へドロばくだんの
連続攻撃がサトシ達のポケモンに襲い掛かる。

？「ルカリオ、まもる！」

ルカリオ「カフツ！」

ラムダ「何だ！？」

一匹のルカリオが現れて、ドガース、マタドガスの一斉攻撃を全
て防いだのだ。ルカリオの傍には一人の女性が立っていた。

サトシ・ヒカリ・コトネ「「「シロナさん！」」」

現れた女性はシロナだった。シロナの傍には、ルカリオの他にガ
ブリアスもいる。

シロナ「遅くなってごめんね、サトシ君、ヒカリちゃん、コトネち
ゃん。」

シロナはサトシ達の方に向くとニッコリと笑みをこぼす。だが、
すぐにラムダの方向きを変え、目つきも鋭い目つきに変わる。

シロナ「さて、連戦で疲れ切った相手に一斉攻撃を仕掛けるなんて、随分と卑怯な作戦ね。」

ラムダ「卑怯だろうがなんだろうが、任務は遂行するそれが俺たちロケット団なのだ。シンオウのチャンピオンが相手だろうが、容赦はしないぜ。行け、ドガース、マタドガス達よ！」

ラムダは果敢にシロナのルカリオとガブリアスに挑むが、相手が悪すぎた。ルカリオとガブリアスはあっさり全てのドガースとマタドガスを倒したのだ。

ラムダ「くそう、ここは撤退だ！」

ラムダは撤退を図ろうとする。

サトシ「待て！」

サトシがラムダを止めようと試みるが、

ラムダ「おっと、お前達にはここでおとなしくしてもらおうか。」

ラムダはポケットから小型のスイッチのようなものを取り出し、ボタンを押した。すると、

ガシャン！ ガタン！

ヒカリ「きゃあ、何よこれ！」

コトネ「う、動けない．．．。」

鋼鉄製の手錠のようなものが出てきて、サトシ達、彼らのポケモン達の手足を拘束したのだ。

ラムダ「今回はここで引き揚げさせてもらうぞ。売りさばくためのポケモン達は惜しいが、まあ仕方ない。」

と言い残すと、ラムダはその場から姿を消した。

サトシ「くっ、なんて頑丈なんだ．．．。」

シロナ「これじゃあ、歩くことはおろか立つことすら出来ないわね．．．。」

ピカチュウ「ピカア．．．。」

ポッチャマ「ポチャア．．．。」

サトシ達は手錠の破壊を試みるが、思ったほどに頑丈でなかなか出来ない。そんな中でも、サトシ、コトネ、シロナ3人で協力して何とかヒカリ1人が立てる状態にすることが出来た。さらに外の様子が見渡せるよう、

サトシ「どうだ、ヒカリ？」

ヒカリ「うん、少しきこちないけど何とか立てるわ。」

シロナ「ヒカリちゃん、少し外の様子を見てくれるかしら？」

シロナの要望を聞き、ヒカリは幸い鍵が閉まっていなかった窓を開けて外の様子を見渡す。

ヒカリ「ラジオ塔の入り口にいたロケット団がいなくなってます。」

ヒカリが見たもの、それは先程まで人員増強により増えていたラジオ塔入り口付近のロケット団がいなくなっていたのだ。

ヒカリ「あとは・・・ん？ なんだろう、あれは。」

コトネ「どうしたの、ヒカリン？」

ヒカリ「何かがこっちに向かって来てるみたいなの。」

ヒカリが辺りをさらに見回してみると、遠くの空から何か近づいてきている。

ヒカリ「・・・トゲキッス、それにピジヨット？」

ヒカリ以外「えっ!？」

ヒカリの一言にサトシ、コトネ、シロナはキョトンとした表情になる。

ヒカリ「ケンタ、マリナ！」

さらにピジヨットにはケンタ、トゲキッスにはマリナが乗っていた。

ケンタ「みんな無事かー！」

マリナ「助けに来たわよー！」

ケンタとマリナはヒカリが顔を出している窓の近くまで来ると、ヒカリに声を掛ける。

マリナ「ちょっとみんなその手錠はどうしたの!？」

ヒカリ「ロケット団の幹部と応戦してつけられたの。」

ケンタ「すぐに俺達が局長室に向かうから、到着するまで待ってくれ。」

ヒカリ「ええ、分かったわ。」

ケンタとマリナは一度地上に降りてラジオ塔内に入り、局長室へと向かった。そして到着後、すぐにポケモンを使ってサトシ達の手足に付けられた手錠を破壊した。

サトシ「助かったぜ、ケンタ、マリナ！」

ヒカリ「ホントにありがとう。」

サトシ達は手錠を破壊してくれたケンタとマリナに礼を言う。

ケンタ「礼なんかいいって。」

マリナ「そうよ、私達は仲間なんだから。これくらいは当然よ。」

ケンタとマリナは謙遜しながら答える。

シロナ「私からも礼を言うわ。ところでどうして来たのかしら？」

マリナ「はい、それは……。」

マリナは今までの経緯とちかつうるの奥の部屋の鍵の事を事細かに説明した。どうやら結局、ポケギアの方はつながらなかったようだ。

ケンタ「ポケギアがつかないときは焦ったけど……。」

マリナ「コガネシティじゅうのロケット団がいなくなったのは好都合だったわ。」

ケンタとマリナはポケギアがつからなかったことで、再びラジオ塔に潜入するというギャンブル的な作戦に打って出たのだ。コガネシティからロケット団が突如いなくなったことに不気味さを感じつつも、サトシ達の助太刀に行くために奔走したケンタとマリナだった。

マリナ「あと、手伝ってくれたヒカリのトゲキッスとこのピジョットには感謝しないとね。」

ケンタ「そうだな、この2体がいなかったらここまで来れなかったものな。サンキューな、トゲキッスにピジョット。」

トゲキッス「トウース！」

ピジョット「ピジョットオオオ！」

ヒカリ「トゲキッス、お手柄だったわ。あたしからもありがとう。」

ヒカリはトゲキッスに笑顔を向けながら、礼を言う。

コトネ「ところで、そのピジョットはどっちのポケモン？」

コトネがトゲキッスとともにケンタとマリナを手伝ったピジョットがケンタとマリナどちらのポケモンか聞いてみる。

マリナ「ああ、いや、このピジョット、実は私達のポケモンじゃないのよね。」

コトネ「えっ？」

ピジョットはどちらのポケモンではなかった。

ケンタ「俺とマリナがラジオ塔に向かおうとしてた時に急にやってきたんだ。俺達に好意的に接してきてくれたし、手伝いたい素振りを見せてたからそれで一緒に来てもらったんだけど……。」

シロナ「それじゃあ、このピジョットは野生のポケモンね。何はともあれ、このピジョットにも感謝しなくちゃね。」

コトネ「ありがとうってことね、ピジョット。」

ピジョット「ピジョットオ！」

皆から礼を言われたピジョットは、「当然のことをしたまで」と

いわんばかりに鳴き声を出す。

サトシ「あの、ピジョット……。」

ピカチュウ「ピイカ……。」

サトシはピジョットにどうも見覚えがあった。ピカチュウも同様に覚えがある様子である。サトシとピカチュウはピジョットに近づいていく。

ヒカリ「ん？ どうしたの、サトシ？」

ヒカリが声を掛けると、

サトシ「ああ、もしかしたらこのピジョット、俺のポケモンだった奴かもしれないと思って。」

マリナ「えっ？ サトシ、ピジョット持ってたの？」

サトシ「ああ、俺がトレーナーになりたての頃ゲットしたピジョンで、ピジョットに進化した時に故郷のトキワの森に返したんだ。」

ヒカリ「あつ、そういえばそんな話してたわね。」

ヒカリ以外は初めて聞いた話だったので少々驚きの表情だったが、ヒカリはサトシ本人から聞いていたので思い出す程度だった。

サトシ「なあ、ピジョット。お前、あの時のピジョットなのか？」

ピカチュウ「ピイカ、ピイカ。」

サトシとピカチュウは、自分たちのことを覚えているかピジョットに聞いてみる。

ピジョット「ピジョ、ピジョオ！」

すると、ピジョットは大きく羽根を広げ、サトシとピカチュウに覆いかぶさる。

サトシ「やっぱり、俺のピジョットか。久しぶりだな。」

ピカチュウ「ピッカア！」

ピジョット「ピジョ、ピジョットオ！」

サトシとピカチュウとピジョットは再会の嬉しさから、じゃれ合っている。

シロナ「ふふふ。あのピジョット、随分サトシ君に懐いてるみたいね。」

ヒカリ「そうですね。」

マリナ「なんだが、今までロケット団と戦っていたことが嘘のように思えてきます。」

その光景を眺めている面々は、今までの緊迫感から解放された気分を味わい、思わず心が和む。

ピジョット「ピジョ、ピジョット！」

サトシ「ん？ どうしたんだ、ピジヨット？」

ピジヨットは何やら仕草でサトシに伝えようとしている。その仕草は自らの羽根でサトシのボールホルダーを指さしているようにも見える。

コトネ「もしかしたら、またサトシと旅がしたいんじゃない？」

サトシ「えっ？ そうなのか、ピジヨット？」

ピジヨット「ピジヨットオオオ！」

ピジヨットの答えはYES。ピジヨットの思いを汲み取ったサトシは、空のモンスターボールを取り出し、ピジヨットに当てる。ピジヨットはボールの中へと入り、サトシのポケモンとなった。

サトシ「ピジヨット、ゲットだぜ！」

ピカチュウ「ピッ、ピカチュウ！」

こうして、ピジヨットはまたサトシのポケモンになった。その後、サトシ達はラジオ塔を出て、久々の外の空気を味わった。現在はシロナを含めた7人で談笑をしている。

シロナ「今回は手伝ってくれてありがとう。サトシ君たちなら成功してくれると信じてたわ。」

シロナはロケット団一掃に協力してくれたサトシ達に礼を言う。

サトシ「いやあ、俺は何も。特に頑張ったのはヒカリとコトネ、そしてポケモン達ですよ。」

サトシは謙遜しながら言うが、

ヒカリ「そんなあ、サトシだって頑張ったわ。」

コトネ「そうよ、サトシがいなかったら私とヒカリンだってロケット団をやっつけられなかったんだから。」

サトシも頑張ったと言わんばかりに喋るヒカリとコトネ。

サトシ「俺の方こそ、ロケット団とのバトルの時、ヒカリとコトネの閃きがなかったらどうなっていたことが。」

サトシはヤマトとコサンジとのバトル、アテナ達とのバトルを思い出しながら言う。

シロナ「ふふふ、今回は誰かのおかげということじゃなくて3人の協力があったからできたことだと思っわ。もちろん、マリナちゃんやケンタ君、それにジムリーダーさんも手助けもね。」

シロナは譲り合う3人を見て、1人の力じゃなく3人の力で今回の事件を解決に導いたのだとフォローする。

マリナ「そうですね。1人の力じゃ何もできないけど、仲間で協力すれば成功に導く。」

アカネ「何か、今回の一件にピッタリやわな。」

ヒカリ「なんだか、譲り合っているあたし達が馬鹿みたいね。」

コトネ「そうね。」

サトシ達は顔を合わせながら、笑いあった。この光景はコガネシティに再び平穏な日々が戻ってきたことを意味した。その後、局長室から持ってきたカギでちかつろの奥の部屋に入り、育て屋から盗まれたポケモン達の無傷での救出にも成功した。さらに、シロガネタウンの襲撃も鎮圧したとの連絡があり、サトシ達はアカネ、シロナと別れ、シロガネタウンへと戻っていった。

続く

局長救出、と思いきや・・・(後書き)

次回は番外編をお送りします。

＜番外編＞ ロケット団と謎の男2人と新たな組織（前書き）

予告通り、番外編をお送りします。

ロケット団のコガネ事件後のアジトでの会話、今後物語に大きくかわる2人の男、ロケット団を凌ぐ勢力の新たな組織の存在など見どころ満載です。

<番外編> ロケット団と謎の男2人と新たな組織

ここは日本の某所にあるロケット団アジト。現在、ここでロケット団ボス・サカキとロケット団最高幹部の一人・アポロによる会談が行われていた。

サカキ「アポロ、例のプロジェクトの進捗状況はどうだ？」

アポロ「はい。今のところ、差し障りなく進行しております。ただ、先日のコガネシティの一件では、指揮を執っていたアテナとラムダが任務内容になかった付近の育て屋の襲撃まで行っていたようです。」

サカキ「そのことについては、先程失敗したと連絡が来た。全く、余計なことをしてくれたものだ。」

アポロ「これもプロジェクトの筆頭責任者であるわたくしの責任です。アテナとラムダにはなんらかの処分を検討中です。」

サカキとアポロの会話から類推して、コガネシティ襲撃の一件は今進行中の大がかりなプロジェクトの一端を担っていたようだ。さらに、コトネの祖母の育て屋の襲撃は任務外だったとのことである。恐らく、行きすぎた欲望によるものだろう。

サカキ「アテナとラムダについては出来るだけ穏便に頼む。この理由はアポロ、お前なら分かっているだろう。」

アポロ「例の反サカキ様を唱える連中の事ですね。」

どうやら、現在のロケット団は内紛が起きているようである。

サカキ「連中は目的の為ならポケモンのみならず人までも大量に虐殺することも辞さないからな。かなり厄介だ。」

近頃、サカキの比較的温和なやり方に反抗する強硬的なロケット団員いわゆる『タカ派』と呼ばれる者が現れているそうだ。以外にも、残虐的な行為は好まない性格のサカキはこれに頭を悩ませている。

アポロ「仮にもし、我々よりも連中が目的を達成するなんてことになったら、ロケット団いや世界を揺るがしかねない大惨事になりかねません。」

サカキ「わたしもそのことを恐れている。そのようなことがないよう、アポロ。お前達には的確に任務にあたって欲しい。」

アポロ「はい、分かりました。サカキ様。」

サカキとアポロの会話もひと段落ついたところで、

コンコン！

サカキ「入れ。」

ドアをノックする音が聞こえた。開いたドアの先には、サカキの

秘書・マトリがいた。

マトリ「サカキ様、ムサシ・コジロウ・ニヤースの3名から例の物品を入手し、こちらに帰還したとのことです。」

サカキ「そうか、早速その3人をここに呼んできてくれ。」

マトリ「かしこまりました。」

サカキはマトリにムサシ、コジロウ、ニヤースを呼んでくるように指示した。マトリは3人を呼ぶために、部屋から出る。しばらくして、マトリにつれられるように、ムサシ、コジロウ、ニヤースがサカキの前に現れる。

ムサシ「サカキ様、これが例の代物です。」

ムサシはサカキに自分たちが手に入れた物品を差し出す。その物品とは数個の石のようなものである。

サカキ「ご苦労であった。」

コジロウ「サカキ様、それは何の為に？」

コジロウはサカキに石のような物品の使用目的を聞いてみる。

サカキ「これは大昔から貴重なエネルギー源として重宝されている代物だ。これを使えば資源が乏しくエネルギー問題を抱えるこの国にとって、大部分を賄うことができる。」

サカキの話によれば、手に入れた石のような物品は、鉱産資源の

ようなもので、非常に凡用性のあるものとのこと。

サカキ「これを使えば、全国のエネルギー関連業界をほぼ独占することができ。これが成功すれば私が経営するロケットカンパニーに多大な利益をもたらすことであろう。」

実はロケット団は表向きの顔として、ロケットカンパニーという財閥を経営している。事業内容は多種多様で一国の経済の中心を担う存在である。

アポロ「今日の不安定な国内経済、日増しに高まる海外からの圧力、これらを乗り切るためにもこの代物は是非手に入れたかったものだ。」

サカキ「ムサシ、コジロウ、ニヤース、よく手に入れてくれた。これからもこの調子で任務にあたってくれ。」

ムサシ・コジロウ・ニヤース「っはっ！」「っはっ！」

サカキとの会話を終えると、ムサシ、コジロウ、ニヤースはその場を後にした。

ムサシ「サカキ様、だいぶピリピリしてたわね。」

コジロウ「無理もない。今、ロケット団は内紛が起きているからな。比較的温かなやり方のサカキ様に発行する勢力も少くはないらしい。」

ムサシ達も、ロケット団の内紛問題は気にかけていたようだ。

ニヤース「まあ、ニヤーたちはいつでもサカキ様についていくつもりだけどニヤ。」

ムサシ「ええ、そうね。」

コジロウ「立ち話はこれくらいにして、次の任務までしっかり体を休めるぞ。」

ムサシ、コジロウ、ニヤースは次の任務に備えて休憩に入った。

ムサシ・コジロウ・ニヤース「」「」全てはサカキ様の為に！」「」

サカキへの忠誠を誓いながら・・・

謎の男A「コガネシティの一件も無事に解決したみたいだな。」

謎の男B「ええ。でもロケット団は日増しに勢力を増してきていま

すよ、兄さん。」

謎の男A「ロケット団はこれからも無視できないな。」

また、別の場所では、謎の男2人組がサトシ達が解決に導いたコガネシティ占拠事件について話していた。会話の内容から、この2人は兄弟のようである。

謎の男A「そうだ。例の組織についての情報はつかめたか……。」

謎の男B「ええ、どうやら僕たちが追っている組織は人間とポケモンのバイオテクノロジーを研究してるとか。表向きは医療目的ですが、裏では命に関わるポケモン実験や人体実験も行ってるようであり良い印象はなかったです。」

謎の男A「そうか、ロケット団のみならず無視できない連中だな。」

謎の男2人組の会話から、ロケット団とは別に謎の組織が裏で活動を活発にしているとのこと。この本編ではあまり触れられてはいないが、今後のサトシ達の旅に影響を及ぼすことは間違いないであろう。

謎の男A「そういえば、兄さん。かなり話が変わりますけど、この間の『ワールド・チャンピオン・リーグ』の予選選考会で兄さんの息子さんがベスト8に入っていましたよ。」

謎の男A「それなら俺も知ってる。だいぶ前に風の噂でポケモントレーナーになったということは聞いたが、世界のトレーナー達を相手に大健闘するとはな。俺のトレーナー時代を思い出すな。あっ、そういえば、お前の娘もこの間の『ワールド・チャンピオン・フェ

ステイバル』に出てたんだっけ。」

謎の男B「ええ、トップ・コーディネーターになるために旅に出るといいうのは風の噂で知りましたが、世界じゅうのコーディネーターを相手にするまでに成長するとは。我が娘ながら、鼻が高い思いです。」

謎の男A「俺は元ポケモントレーナー、お前は元トップ・コーディネーター、共に世界を相手に戦ってきた人物として名をはせたな。」

謎の男B「そんなこともありましたね。」

補足説明をすると、Aの方は元ポケモントレーナーで過去の『ワールド・チャンピオン・リーグ』の出場経験有り、Bの方は元トップ・コーディネーターで過去の『ワールド・チャンピオン・フェスティバル』の出場経験有り、さらには2人とも好成績を残している。

謎の男B「娘にはしばらく会っていませんからね。また成長した姿を一度眺めておきたいですよ。」

謎の男A「ああ、妻にもしばらく連絡取っていないから、心配してるだろうな。」

謎の男B「ええ。でも今は会うときじゃない、僕達の仕事がひと段落するまでは……。」

謎の男A「また、家族で笑いあえる日が来るといいな……。」

謎の男2人組は、そう言い残しながらその場を去っていった。果たして、謎の男2人組の正体は一体!?

続
く
・
・
・

＜番外編＞ ロケット団と謎の男2人と新たな組織（後書き）

次回から、ギャグ路線に戻していこうかと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2981p/>

主人公総受け物語～アニポケ編～

2011年12月13日07時49分発行